

埼玉県大里郡

大里村南部遺跡群 I

大里村南部土地区画整理事業に伴う
発掘調査報告書第1冊

阿諏訪野東遺跡・東山遺跡Ⅰ～Ⅲ区
楓山西遺跡・楓山北遺跡

1997

大里村教育委員会
大里村南部遺跡群調査会



遺跡群全景



東山遺跡出土土器

序

大里村は、県中央部を南北に流れる荒川の中流域に位置するのどかな田園風景が広がる農業中心の村であります。大里村では、昭和50年代前半から村の将来について、住民とともに検討を重ねた結果、村の南部にあたる箕輪地区から青山地区にかけての約69.2haを対象に区画整理事業を実施することになりました。この事業により田園都市として調和のとれた住宅地域と工業地域とが形成され、完成しますと村の今後の活性化を図る上で大きな役割を担うものと思量するところであります。

ところで、この台地一帯には、日本で最大級の円墳の一つである県指定史跡の甲山古墳をはじめ、船木遺跡や大境古墳群など貴重な遺跡が数多く知られております。そのため村といたしましても区画整理地内の埋蔵文化財の取り扱いについては、関係各機関と慎重に協議を重ねてまいりました。その結果、現状保存できない遺跡については、発掘調査を行い、記録保存の措置を講ずることといたしました。

今回ここに報告いたします遺跡では、旧石器時代から平安時代に至るまでの数多くの遺構や遺物が発見され、先人の暮らしやその知恵をうかがい知る上で貴重な資料を得ることができました。これらの資料は、大里村のみならず県内外の歴史を解明していく上で欠かすことのできない貴重な基礎資料であります。この報告書が有効に活用されますことを望んでいます。

終わりに本書を刊行するに当たり、発掘調査から報告書刊行にいたるまでの間、深い御理解と御協力をいただきました大里村南部土地区画整理組合関係者、終始御指導、御協力賜りました県文化財保護課、そして、発掘調査や資料整理に携わりました多くの方々に厚く感謝の意を表し発刊のことばといたします。

平成9年3月

大里村南部遺跡群調査会顧問

大里村長 吉 原 文 雄

序 文

明治時代、大里村青山の出身である根岸武香氏は好古家として知られ、日本考古学の先駆者であります坪井正五郎氏やエドワード・モース氏等をこの地に招き、わが国の考古学の発展に大きな貢献をされたと聞いております。その青山の地において、このたび大規模な土地区画整理事業を実施することになりました。この事業に伴い埋蔵文化財の保護対策の必要性から、関係機関と慎重に検討を重ねた結果、盛土による保存地区を選定し、他の部分については発掘調査をして記録保存することといたしました。

発掘調査を実施するにあたり、平成元年5月に「大里村南部遺跡群調査会」が発足し、同年6月8日から発掘調査が開始されました。その規模は遺跡総数11遺跡、調査対象面積約18haであり、事業地の約26%にもおよぶ広さでありました。発掘調査が開始された平成元年から平成2年にかけては、工事施行と農作物の収穫時期との調整を図りながらの困難な発掘調査でありましたが、それを関係者が一つ一つ克服しながら進めてきた調査であります。そして、平成7年4月14日をもって調査対象地区の発掘は全て終了しました。実に5年10カ月におよぶ調査でありました。今回、ここにその成果として平成元年度～平成2年度に調査しました阿諏訪野東遺跡をはじめ4遺跡について第1冊として報告書を刊行することといたしました。また、それ以降の年度につきましては現在資料整理を行っており、今後、報告書として刊行していくのであります。

ここに調査報告書を刊行する運びとなりましたのも、これまで御指導、御理解、御協力いただきました県の関係者、並びに大里村土地区画整理組合の理事長をはじめ関係者の方々、そして、発掘調査、資料整理をされた皆様方の御尽力のたまものであり心から感謝とお礼を申し上げます。また、本報告書が、広く村民各位、研究者、教育機関等に活用され、本村並びに本県の原始・古代社会解明の資料として活用されれば、幸甚であります。

平成9年3月

大里村南部遺跡群調査会長 金 井 岩 夫
大里村教育委員会教育長

刊行にあたって

昭和50年代中頃、箕輪・青山地区にまたがる丘陵地域の開発計画が打ち出され、長い準備期間を経て昭和63年7月に大里村南部土地区画整理組合が設立されました。本地域は水田地帯が大半を占める大里村にあつて、貴重な緑が残る自然林に恵まれ、また埋蔵文化財の宝庫であることから、組合設立以前は開発に多少の戸惑いがありましたが、大里村の発展と地域の活性化を思い、この土地区画整理事業の推進に全力で取り組んでまいりました。特に埋蔵文化財の保護対策については、関係各機関と慎重に協議を重ね、盛土による保存地区を選定し、切土部分についてはやむおえず発掘調査を実施し記録保存を行うこととなりました。

発掘調査は造成工事に先立つ平成元年6月から開始され、約6年の歳月をかけて平成7年4月に終了し、現在は整理作業を実施しております。この間、造成工事の進捗に併せ、迅速にしかも正確に発掘調査の作業に従事していただいた皆様に深く感謝申し上げるとともに、埋蔵文化財の保護に対し深い御理解をいただきました全組合員の皆様に厚くお礼申し上げます。

最後に、発掘調査から整理作業、そして、この報告書の刊行にいたるまで御指導、御協力をいただきました埼玉県教育局文化財保護課、大里村教育委員会、大里村南部遺跡群調査会の方々に厚く感謝申し上げ、ご挨拶といたします。

平成9年3月

大里村南部土地区画整理組合

理事長 根 岸 喜 夫

遺跡群の調査を終えて

1989年から開始された大里村南部遺跡群の発掘調査が、発掘調査と出土した遺物や遺構の整理をすべて終了して漸く報告書の刊行まで漕ぎつけることが出来た。その間、実に10年間、発掘調査にかかわった数多くの方々の御協力をしみじみ回想しながら、この大事業の終了を心から祝福したいと思う。

私がこの発掘調査に調査団長として参加させていただいたのは、それほど重要な理由があったわけではない。当時、大里村史の編纂事業が行なわれていて、たまたまそれに協力させていただいていたことが、この発掘調査と関係する直接の理由だったのである。私もその頃（1989年）県立博物館を退職して自由な時間ができたとし、大里村史以来関係した大里地域の遺跡や遺物を更に詳しく勉強してみたいという気持ちもあって、安易に発掘調査への参加を承諾し、調査団長を引き受けることにしたが、実はこれは、今にして思えば大変軽率な行為だったようである。

発掘調査は、報告書に詳しく記述されているように、約69haという広大な区画整理予定地内をほとんど隈なく事前調査して、遺構の存在を徹底的に把握した。そしてその上に立って、その後の発掘調査の予定発掘方法と発掘規模の一切を検討したのである。事前調査は、いわば、これからの発掘のすべてを決める重要な予備調査であるが、この仕事に献身的にかかわって見事に完了させたのは、教育委員会の担当者を中心とする事前調査に参加したみなさんであった。

事前調査は、予定地内の全面に遺構探査のためのトレンチ（試掘溝）を無数に掘り、地上からは検索しにくい地下の遺構の存在を確認した。この作業は、一見単純なようであるが、実はトレンチ内の限られた範囲を発掘して遺構の有無を確かめ、それによって、遺構の性格や分布状況を推定して本調査のための精密なデータを集積して行かなければならない大変難解な作業なのである。特に担当者は、発掘された少量の土器片や遺構の一部から、遺構の性格や分布の全体を判断する緻密な観察と判断が要求される。

担当者は、この難しい事前調査を見事に遂行された。広大な予定地内に設定された無数のトレンチを確実に掘り上げ、発掘を妨げる数々の障害（ブッシュや雑木の根、また、地主さんとの交渉）を克服しながら、遺構の状況を完全に把握する詳細な遺構分布図をつくりあげたのである。この正確な事前調査が、その後の本調査に大いに貢献したことは言うまでもない。発掘対象地約18万㎡という広大な範囲内に分布していた、旧石器時代から鎌倉時代までのさまざまな遺構を、6年10カ月で発掘調査し、その後の整理作業を含めて8年10カ月で報告書刊行まで漕ぎつけられたのは、この正確な事前調査が実施されていたからこそであったと言っても過言ではないだろう。

区画整理事業予定地内の正式な発掘調査は1989年6月から実施されている。阿諏訪野東遺跡から始まって東山Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区、楓山西遺跡、楓山北遺跡、桜谷東遺跡、大林南遺跡、桜谷遺

跡、船木遺跡、船木下遺跡、大境遺跡、大境古墳群と発掘を展開して1995年4月に終了した。この発掘調査によって確認された各時代の遺構は、竪穴住居跡237棟、方形周溝墓17基、古墳22基（前方後円墳3基）をはじめ、土壙、井戸跡、溝状遺構等まことに膨大な量であった。そして、それぞれの遺構から出土した各種の遺物は実に莫大な数に上っていたのである。

これらの遺構と遺物は現在詳しく検討されて、今後、随時報告されていくことになる。遺構や遺物の性格はその時具体的に紹介されるはずであるが、今回報告された阿諏訪野東遺跡や東山遺跡、楓山遺跡の住居跡群や古墳群を検討しても、この遺構の存在が、古代の大里村の成立とその後の歴史形成の解明に重要な手掛かりをあたえてくれる。今後、第Ⅱ、Ⅲ分冊で報告される船木遺跡や大境遺跡の発掘成果の検討が進行すれば、更に古代大里村の実態が明瞭に把握されて、古代の大里村が、単に荒川右岸の一地域の枠をこえて、北武蔵の歴史形成や更に東日本の歴史展開とも重要なかかわりをもって歩んできたことを具体的に知ることができるだろう。

大里村南部遺跡群の発掘調査は、発掘調査を了承された大里村南部土地区画整理組合をはじめ、発掘調査を推進された大里村南部遺跡群調査会と発掘調査に参加された多くの補助員のみなさん方の御協力によって達成された。6年10カ月の長期の発掘期間中、実にさまざまな困難が生起したが、それをすべて克服して、この大事業を完遂させたのは、ただ発掘調査によって大里村の歴史を明らかにしたいという一つの目的があったからだろう。

最後に、厳寒と猛暑とそして空っ風に悩まされた6年10カ月の発掘調査を回想しながら、発掘にかかわった多くのみなさんの御協力に心から感謝申し上げると共に、この稀有の発掘に参加させていただいたことを深く感謝申し上げる次第である。

1997年3月

大里村南部遺跡群調査会

調査団長 金井塚 良 一

例 言

- 1 本書は、埼玉県大里郡大里村大字箕輪字阿諏訪野492番地他に所在する阿諏訪野東遺跡、東山遺跡Ⅰ区Ⅱ区、Ⅲ区、楓山西遺跡、楓山北遺跡の発掘調査報告書であり、大里村南部遺跡群の発掘調査報告書の第1冊である。
- 2 遺跡は、埼玉県大里郡大里村大字箕輪字阿諏訪野・楓山、大字青山字東山地内に所在する。遺跡名は遺跡の所在する小字名と小字の占める方位名を用いた。

各遺跡の代表地番と、発掘調査に対する文化庁指示通知は以下のとおりである。

阿諏訪野東遺跡	大里村大字箕輪492-1	平成元年8月12日付教保5-454号
東山遺跡Ⅰ区	大里村大字青山369	平成2年5月18日付教保5-16号
東山遺跡Ⅱ区	大里村大字青山359	平成2年2月11日付教保5-1380号
東山遺跡Ⅲ区	大里村大字青山384	平成2年11月19日付教保5-1280号
楓山西遺跡	大里村大字箕輪1,368	平成2年10月15日付教保5-758号
楓山北遺跡	大里村大字箕輪1,376	平成2年11月19日付教保5-1316号

- 3 発掘調査は、大里村南部土地区画整理事業に伴う事前調査であり、同区画整理組合より委託を受け、大里村教育委員会が組織した大里村南部遺跡群調査会が実施した。
- 4 本書にかかる発掘調査は、下記の期間で実施した。

阿諏訪野東遺跡 (NO64-060)	平成元年6月4日～平成元年9月30日
東山遺跡Ⅰ区 (NO64-010)	平成元年9月14日～平成元年12月25日
東山遺跡Ⅱ区 (NO64-010)	平成元年11月30日～平成2年4月30日
東山遺跡Ⅲ区 (NO64-059)	平成2年5月1日～平成2年5月17日
楓山西遺跡 (NO64-058)	平成2年4月1日～平成2年7月10日
楓山北遺跡 (NO64-062)	平成2年7月1日 平成2年9月10日

- 4 報告書作成作業は平成5年度より開始し、現在、第2冊目を継続中である。なお、発掘調査・整理作業の組織は2頁に示したとおりである。
- 5 発掘調査時における遺跡の基準点測量及び写真測量は、株式会社シン技術コンサルに委託し、石材鑑定は埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課本間岳史氏に分析を依頼した。
- 6 本書に使用した発掘調査時の写真撮影は、調査時の各担当者が行なった。出土遺物の写真撮影については、森田康志氏に依頼した。
- 7 本書の執筆並びに編集は、団長の指導の許しで出縄が行った。
- 8 本書にかかる資料は平成2年度以降大里村教育委員会が管理・保管している。
- 9 発掘調査並びに報告書作成にあたり、下記の方々より御教示、御協力を賜った。(敬称略。五十音順)

青木 克尚	新井 端	荒川 弘	市川 修	井上 肇	小川 良裕
金子 直行	金子 正之	栗原 文蔵	黒坂 禎二	小池 晋禄	恋河内昭彦
酒井 清治	澤出 晃越	寺社下 博	鈴木 徳雄	高橋 一夫	谷井 彪
鳥羽 政之	中村 倉司	西井 幸雄	西口 正純	坂野 和信	平田 重之
細田 勝	村田 健二	村松 篤	森下昌一郎	森田 安彦	山本 禎
若松 良一	渡辺 一				

凡 例

- 1 遺跡全体図における X・Y の数値は、国土標準平面直角座標第Ⅱ系に基づく各座標値を示す。また各挿図における方向指示は、すべて座標北をあらわす。
- 2 各調査地点間に距離を有していながらも敢えて大グリットを設けず各遺跡において全面に10m単位のグリットを設定し、北西杭を基準にグリット名称を示した。
- 3 掲載した遺跡に関し、大里村史に紹介されているが、内容・遺構番号などについては本書が優先する。
- 4 本書における遺構の表現は、下記のとおりである。

SS…………古墳	SX……………竪穴状遺構	SI……………集石
SJ……………住居跡	SK……………土壙	SD……………溝
SB……………掘建柱建物跡	SC……………集石土壙	SE……………井戸

- 5 各遺構等の番号は、原則として調査時に付けたものをそのまま使用したが、整理段階で不都合を生じたところは変更し、新番号を付けた。
- 6 本書の図版の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構 先土器時代遺物集中区	1/60	遺物 先土器時代石器	2/3
住居跡・竪穴状遺構	1/60	縄文時代土器拓影図	1/3
土壙・集石	1/30・1/60	実測図	1/4・1/5
古墳平面	1/120・1/160	縄文時代石器	2/3(石鏃類)
古墳断面	1/80		1/3(その他)
溝平面	1/120・1/300	土師器・須恵器・瓦	1/4
溝断面	1/80	鉄製品	1/3

その他、遺跡全体図、周辺地形図など上記以外の図は、個別に記載した。


- 7 遺構図中の記号については、原則として以下のとおりである。

●……土器、土師器 ○……須恵器 □……石器、鉄器 フ……覆土 カ……竈

その他は、遺構図中に記載した。

- 8 遺構図中に示した遺物番号は、各遺構の遺物図番号と一致し、遺物図が2頁以上におよぶ場合は頁一〇と示した。また、ドットを結ぶ線は、遺物が接合関係にあることを表している。

- 9 遺構図内の網部指示は以下のとおりである。

 ……ローム層の地山  ……炉跡・焼土  ……硬質面

- 10 須恵器・土師器観察表の凡例は以下のとおりである。

・法量の()内の数値は推定値であり、単位はcmである。但し器高は破片の場合、残存高を示す。

・胎土の包有物は、以下の記号等で示した。

A：白色針状物質 B：白色粒子 C：黒色粒子 D：赤色粒子 E：灰色粒子 F：砂粒子
G：小礫

・焼成は次のように区分した。

A：良好 B：普通 C：不良

・色調の表現は『標準土色帳』1976による。

・残存率は10%単位であり、10%以下は5%と表現した。

目次

序

序文

刊行にあたって

遺跡群の調査を終えて

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

図版目次

I 発掘調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 調査の経過	3
II 遺跡の立地と環境	5
1 遺跡群の立地	5
2 周辺遺跡の概要	6
III 遺跡群の概要	11
1 各遺跡の概要	11
IV 阿諏訪野東遺跡の調査	15
1 遺跡の概要	16
2 遺構と出土遺物	18
(1)古墳跡	18
(2)住居跡	36
(3)掘建柱建物跡	54
(4)井戸跡	54
(5)溝	56
(6)土壇・集石土壇	58
(7)グリッド出土遺物	61
V 東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区の調査	65
1 遺跡の概要	66
2 先土器時代の遺構と出土遺物	71

(1)遺物分布	71
(2)出土石器	73
3. 縄文時代の遺構と出土遺物	75
(1)住居跡	75
(2)屋外埋甕	117
(3)土壙	119
(4)集石土壙・集石	139
(5)ピット	145
(6)埋没谷包含層	145
(7)グリッド出土遺物	155
4. 古墳時代の遺構と出土遺物	178
(1)古墳跡	178
(2)竪穴状遺構	187
5. 奈良・平安時代の遺構と出土遺物	188
(1)竪穴状遺構	188
(2)火葬墓	191
(3)土壙	193
6. 近世以降の遺構	195
(1)井戸跡	195
(2)溝	195
(3)土壙	196
VI 東山遺跡Ⅲ区の調査	201
1. 遺跡の概要	202
2. 遺構と出土遺物	202
(1)住居跡	202
(2)土壙・集石土壙	206
(3)グリッド出土遺物	206
VII 楓山西遺跡の調査	209
1. 遺跡の概要	210
2. 遺構と出土遺物	210
(1)住居跡	210
(2)竪穴状遺構	235
(3)土壙・集石土壙	237
(4)グリッド出土遺物	239
VIII 楓山北遺跡の調査	241
1. 遺跡の概要	242

2. 遺構と出土遺物	242
(1)住居跡	242
(2)ピット群	268
(3)土壌	268
(4)集石土壌	272
(5)グリット出土遺物	273
IX 結語	274
1. 阿諏訪野東遺跡	274
2. 東山遺跡 I・II 区	277
3. 楓山西遺跡と楓山北遺跡	283

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	5	第35図	第4号住居跡出土遺物	48
第2図	周辺遺跡分布図	6	第36図	第4号住居跡出土遺物	49
第3図	南部遺跡群全域図	12	第37図	第5号住居跡	51
阿諏訪野東遺跡			第38図	第5号住居跡	52
第4図	阿諏訪野東遺跡全体図	17	第39図	第5号住居跡出土遺物	52
第5図	第1号墳	19	第40図	第6号住居跡	53
第6図	第1号墳石室	21	第41図	第6号住居跡出土遺物	54
第7図	第1号墳周溝断面図	22	第42図	第1号掘立柱建物跡	55
第8図	第1号墳出土遺物	22	第43図	第1号井戸跡	56
第9図	第2号墳	23	第44図	第1、2号溝	57
第10図	第2号墳石室	24	第45図	第3～12号溝	58
第11図	第3号墳	25	第46図	第5号溝出土遺物	58
第12図	第3号墳石室	26	第47図	第1～6号土壙	59
第13図	第4号墳	27	第48図	第7、8号土壙・第1号集石土壙	60
第14図	第4号墳周溝断面図	28	第49図	第7号土壙出土遺物	60
第15図	第4号墳出土遺物	29	第50図	グリッド出土遺物(1)	62
第16図	第5号墳	30	第51図	グリッド出土遺物(2)	63
第17図	第5号墳周溝断面図	31	東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区		
第18図	第5号墳出土遺物	31	第52図	東山遺跡Ⅰ区全体図	67
第19図	第5号墳前庭部	32	第53図	東山遺跡Ⅱ区全体図	69
第20図	第6号墳	33	第54図	先土器時代遺構	71
第21図	第6号墳前庭部	34	第55図	遺物分布図	72
第22図	第6号墳出土遺物	35	第56図	礫群	73
第23図	第1号礫塚墓	35	第57図	出土石器	74
第24図	第1号住居跡	36	第58図	第1号住居跡・遺物分布図	76
第25図	第1号住居跡竈	37	第59図	第1号住居跡炉跡・埋甕	77
第26図	第1号住居跡出土遺物	37	第60図	第1号住居跡出土遺物(1)	78
第27図	第2号住居跡	39	第61図	第1号住居跡出土遺物(2)	80
第28図	第2号住居跡竈	40	第62図	第1号住居跡出土遺物(3)	81
第29図	第2号住居跡出土遺物	41	第63図	第1号住居跡出土遺物(4)	82
第30図	第3号住居跡	42	第64図	第1号住居跡出土遺物(5)	83
第31図	第3号住居跡竈	43	第65図	第2号住居跡	85
第32図	第3号住居跡出土遺物	44	第66図	第2号住居跡出土遺物	86
第33図	第4号住居跡	46	第67図	第3号住居跡	87
第34図	第4号住居跡竈	47	第68図	第3号住居跡出土遺物	88

第69図	第4号住居跡	90	第108図	土壙出土遺物(2)	134
第70図	第4号住居跡出土遺物	91	第109図	土壙出土遺物(3)	135
第71図	第5号住居跡	92	第110図	土壙出土遺物(4)	136
第72図	第5号住居跡出土遺物	92	第111図	土壙出土遺物(5)	138
第73図	第6号住居跡	93	第112図	土壙出土遺物(6)	139
第74図	第6号住居跡出土遺物	94	第113図	第1～7号集石土壙	140
第75図	第7号住居跡	95	第114図	第8～13号集石土壙	142
第76図	第7号住居跡出土遺物	96	第115図	第1～4号集石	143
第77図	第8号住居跡	97	第116図	集石出土遺物	144
第78図	第8号住居跡出土遺物	98	第117図	第3号集石出土遺物	144
第79図	第9号住居跡	99	第118図	ピット	145
第80図	第9号住居跡出土遺物	100	第119図	埋没谷地形図	145
第81図	第10号住居跡	101	第120図	埋没谷包含層遺物分布図	146
第82図	第11号住居跡	102	第121図	埋没谷包含層出土遺物(1)	150
第83図	第11号住居跡出土遺物	103	第122図	埋没谷包含層出土遺物(2)	152
第84図	第12号住居跡	104	第123図	埋没谷包含層出土遺物(3)	154
第85図	第13号住居跡	105	第124図	埋没谷包含層出土遺物(4)	155
第86図	第13号住居跡出土遺物	106	第125図	グリッド出土遺物(1)	158
第87図	第14号住居跡	106	第126図	グリッド出土遺物(2)	159
第88図	第14号住居跡	107	第127図	グリッド出土遺物(3)	162
第89図	第14号住居跡出土遺物(1)	108	第128図	グリッド出土遺物(4)	163
第90図	第14号住居跡出土遺物(2)	109	第129図	グリッド出土遺物(5)	165
第91図	第15号住居跡	110	第130図	グリッド出土遺物(6)	168
第92図	第15号住居跡出土遺物(1)	111	第131図	グリッド出土遺物(7)	169
第93図	第15号住居跡出土遺物(2)	112	第132図	グリッド出土遺物(8)	170
第94図	第16号住居跡	113	第133図	グリッド出土遺物(9)	171
第95図	第16号住居跡出土遺物(1)	114	第134図	グリッド出土遺物(10)	172
第96図	第16号住居跡出土遺物(2)	115	第135図	グリッド出土遺物(11)	173
第97図	第17号住居跡	115	第136図	グリッド出土遺物(12)	174
第98図	屋外埋甕第1～4号(1)	117	第137図	グリッド出土遺物(13)	175
第99図	屋外埋甕第1～4号(2)	118	第138図	第1号墳	179
第100図	第1～9号土壙	120	第139図	第1号墳周溝断面図	181
第101図	第10～20号土壙	122	第140図	第1号墳遺物分布図	182
第102図	第21～29号土壙	124	第141図	第1号墳出土遺物	183
第103図	第30～45号土壙	126	第142図	第2号墳	185
第104図	第46～56号土壙	128	第143図	第2号墳石室	186
第105図	第57～66号土壙	130	第144図	第2号墳出土遺物	186
第106図	第67号土壙	131	第145図	第3号竪穴状遺構	187
第107図	土壙出土遺物(1)	132	第146図	第3号竪穴状遺構出土遺物	188

第147図	第1号竪穴状遺構	189
第148図	第2号竪穴状遺構	190
第149図	第2号竪穴状遺構出土遺物	190
第150図	第1～4号火葬墓	192
第151図	第1～4号火葬墓出土遺物	193
第152図	第68～70号・94号土壙	194
第153図	第1号井戸跡	195
第154図	溝	196
第155図	第71～83号土壙	198
第156図	第84～93号土壙	199

東山遺跡Ⅲ区

第157図	東山遺跡Ⅲ区全体図	203
第158図	第1号住居跡	205
第159図	第1号住居跡竈・貯蔵穴	206
第160図	第1号住居跡出土遺物	206
第161図	第1号集石・第1号土壙	207
第162図	グリッド出土遺物	208

楓山西遺跡

第163図	楓山西遺跡全体図	211
第164図	第1号住居跡	212
第165図	第1号住居跡炉跡	213
第166図	第1号住居跡出土遺物	213
第167図	第2号住居跡	214
第168図	第2号住居跡炉跡・貯蔵穴	215
第169図	第2号住居跡出土遺物	215
第170図	第3号住居跡	217
第171図	第3号住居跡出土遺物	218
第172図	第4号住居跡	219
第173図	第4号住居跡遺物分布図	221
第174図	第4号住居跡炉跡・貯蔵穴	222
第175図	第4号住居跡出土遺物(1)	223
第176図	第4号住居跡出土遺物(2)	224
第177図	第5号住居跡	228
第178図	第5号住居跡炉跡	229
第179図	第5号住居跡出土遺物	229
第180図	第6号住居跡	230
第181図	第6号住居跡出土遺物	230

第182図	第7号住居跡	232
第183図	第7号住居跡炉跡・貯蔵穴	233
第184図	第7号住居跡出土遺物	234
第185図	第1号竪穴状遺構	235
第186図	第1号竪穴状遺構出土遺物	235
第187図	第2号竪穴状遺構	236
第188図	第2号竪穴状遺構出土遺物	237
第189図	第1～7号土壙	238
第190図	第1号土壙出土遺物	238
第191図	第1・2号集石土壙	239
第192図	グリッド出土遺物	239

楓山北遺跡

第193図	楓山北遺跡全体図	243
第194図	第1号住居跡	245
第195図	第1号住居跡遺物分布図・竈・貯蔵穴	246
第196図	第1号住居跡出土遺物(1)	247
第197図	第1号住居跡出土遺物(2)	249
第198図	第1号住居跡出土遺物(3)	250
第199図	第2号住居跡	252
第200図	第2号住居跡竈	253
第201図	第2号住居跡出土遺物	254
第202図	第3号住居跡	255
第203図	第3号住居跡竈・貯蔵穴	256
第204図	第3号住居跡出土遺物	256
第205図	第4号住居跡	258
第206図	第4号住居跡出土遺物	258
第207図	第5号住居跡	259
第208図	第5号住居跡出土遺物	260
第209図	第6号住居跡	261
第210図	第7号住居跡	262
第211図	第7号住居跡出土遺物	262
第212図	第8号住居跡	263
第213図	第8号住居跡竈	264
第214図	第8号住居跡出土遺物	265
第215図	第9号住居跡・出土遺物	267
第216図	第1～4ピット群	269
第217図	第1・2号土壙・2号土壙出土遺物	270
第218図	第3～8号土壙	271

第219図	第1～4号集石土壙	272	第222図	古墳の変遷図	276
第220図	グリッド出土遺物	273	第223図	東山遺跡I・II区出土土器変遷図	280
第221図	壙の形態分類	274	第224図	住居跡の推移	281

表 目 次

第1表	発掘調査工程表	4	第6表	石器計測表	176
第2表	石器計測表	63	第7表	石器計測表	207
第3表	石器計測表	75	第8表	石器計測表	239
第4表	石器計測表	116	第9表	石器計測表	273
第5表	石器計測表	137	第10表	古墳一覧表	275

図 版 目 次

阿諏訪野東遺

図版1	遺跡群全景（南上空から）		図版9	第3・4号住居跡	
図版2	第1号墳			第4号住居跡竈	
	第1号墳石室			第5号住居跡	
	第1号墳前庭部			第5号住居跡竈遺物出土状況	
	第1号墳側壁根石		図版10	第6号住居跡	
	第1号墳東側周溝			第1号掘建柱建物跡	
図版3	第2号墳			第1号井戸跡	
	第2号墳石室		図版11	第1号井戸土層	
	第3号墳			第1号土壙	
図版4	第4号墳			第2～4号土壙	
	第4号墳			第3・4号土壙	
	第4・5・6号墳			第5号土壙	
図版5	第4・5・6号墳			第1号集石土壙	
	第6号墳			第2・3号墳調査風景	
	第6号墳前庭部			調査風景	
図版6	第1号礫槨墓		図版12	第4号墳	第15図－1
	第1号住居跡			第4号墳	第15図－2
	第2～6号住居跡			第4号墳	第15図－4
図版7	第2号住居跡			第1号住居跡	第26図－1
	第2号住居跡竈付近遺物出土状況			第1号住居跡	第26図－2
	第2号住居跡貯蔵穴			第2号住居跡	第29図－3
図版8	第3号住居跡			第2号住居跡	第29図－5
	第3号住居跡竈付近遺物出土状況			第2号住居跡	第29図－9
				第3号住居跡	第32図－2

- | | | | |
|------------|-----------------|------|----------------|
| | 第3号住居跡 第32図-4 | | 第15号住居跡 |
| 図版13 | 第4号住居跡 第35図-2 | | 第16号住居跡 |
| | 第4号住居跡 第35図-8 | 図版23 | 第1号屋外埋甕 |
| | 第4号住居跡 第35図-19 | | 第2号屋外埋甕 |
| | 第4号住居跡 第35図-30 | | 第4号屋外埋甕 |
| | 第4号住居跡 第36図-32 | 図版24 | 土壙群 |
| | 第4号住居跡 第36図-36 | | 第8号土壙遺物出土状況 |
| | 第5号住居跡 第39図-2 | | 第14号土壙遺物出土状況 |
| | 第6号住居跡 第41図-1 | 図版25 | 第27号土壙土層 |
| | 第6号住居跡 第41図-5 | | 第55号土壙 |
| | 第5号溝 第46図-1 | | 第55・56号土壙 |
| 図版14 | 第3号住居跡・第6号墳出土鉄器 | 図版26 | 第57号土壙遺物出土状況 |
| | 第7号土壙・グリッド出土土器 | | 第62号土壙 |
| | 縄文時代出土石器 | | 第65号土壙遺物出土状況 |
| | | 図版27 | 第67号土壙 |
| 東山遺跡 I・II区 | | | 第1号集石土壙 |
| 図版15 | 先土器時代調査状況 | | 第2号集石土壙 |
| | 先土器時代礫群出土状況 | 図版28 | 第6号集石土壙 |
| 図版16 | I区南側全景 | | 第8号集石土壙 |
| | I区南西側 | | 第9号集石土壙 |
| | I区南側 | 図版29 | 第13号集石土壙 |
| 図版17 | 第1号住居跡 | | 第1号集石 |
| | 第1号住居跡遺物出土状況 | | 第3号集石 |
| | 同左炉跡付近遺物出土状況 | 図版30 | 埋没谷包含層調査風景 |
| | 第1号住居跡炉跡 | | 埋没谷完掘状況 |
| | 同左埋甕 | 図版31 | 第1号墳 |
| 図版18 | 第2号住居跡 | | 第1号墳空撮 |
| | 第3号住居跡 | | 第1号墳土層 |
| | 第4号住居跡 | | 第1号墳前方部基部土層 |
| 図版19 | 第5号住居跡 | | 第1号墳遺物出土状況 |
| | 第6号住居跡 | 図版32 | 第1号墳遺物出土状況 |
| | 第6号住居跡炉跡 | | 第3号竪穴状遺構調査風景 |
| 図版20 | 第7号住居跡炉跡 | | 第3号竪穴状遺構遺物出土状況 |
| | 第8号住居跡 | 図版33 | 第2号墳 |
| | 第8号住居跡炉跡 | | 第2号墳石室根石 |
| 図版21 | 第9・10号住居跡 | | 第2号竪穴状遺構 |
| | 第11号住居跡 | | 第1号火葬墓 |
| | 第13号住居跡 | | 第2号火葬墓 |
| 図版22 | 第14号住居跡 | 図版34 | 第2号火葬墓 |

大里村遺跡調査会

- 第3号火葬墓
第4号火葬墓
第4号火葬墓
第68・69・94号土壙
第68号土壙
第69号土壙
第69号土壙土層
図版35 第70号土壙
第70号土壙土層
第94号土壙
図版36 第1号井戸跡
第86・88号土壙
Ⅱ区土壙群
図版37 先土器時代出土石器(1)
先土器時代出土石器(2)
図版38 第1号住居跡 第60図-1
第1号住居跡 第60図-2
第1号住居跡 第60図-4
第1号住居跡 第60図-5
第1号住居跡 第60図-7
第1号住居跡 第61図-2
図版39 第2号住居跡 第66図-1
第3号住居跡 第68図-1
第4号住居跡 第70図-1
第5号住居跡 第72図-1
第6号住居跡 第74図-1
第7号住居跡 第76図-5
図版40 第8号住居跡 第78図-1
第9号住居跡 第80図-1
第1号屋外埋甕 第99図-1
第2号屋外埋甕 第99図-2
第4号屋外埋甕 第99図-7
第8号土壙 第107図-1
図版41 第14号土壙 第108図-1
第14号土壙 第108図-2
第14号土壙 第108図-3
第14号土壙 第108図-4
第14号土壙 第109図-1
第56号土壙 第111図-10
図版42 第1号住居跡 第61図
第1号住居跡 第62・63図
図版43 第2・3・7号住居跡 第66・68・76図
第11・13・14号住居跡 第83・86・89図
図版44 第14・15号住居跡 第89・92図
第16号住居跡 第95図
図版45 土壙出土土器
土壙出土土器
図版46 土壙出土土器
埋没谷包含層出土土器
図版47 埋没谷包含層出土土器
埋没谷包含層出土土器
図版48 グリッド出土土器
グリッド出土土器
図版49 グリッド出土土器
グリッド出土土器
図版50 第1・3・7号住居跡出土石器
第14~16号住・土壙・集石出土石器
図版51 グリッド出土石器(1)
グリッド出土石器(2)
図版52 グリッド出土石器(3)
グリッド出土石器(4)
図版53 グリッド出土石器(5)
グリッド出土石器(6)
図版54 第1号墳 第141図-1
第3号竪穴状遺構 第146図-1
第3号竪穴状遺構 第146図-2
第1・2号墳出土鉄器
第1号火葬墓 第151図-2
第2号火葬墓 第151図-3
東山遺跡Ⅲ区
図版55 第1号住居跡
第1号土壙
第1号集石土壙
楓山西遺跡
図版56 遺跡遠景
住居跡群

- | | | | | |
|------|----------------|----------|----------|------------------|
| 図版57 | 第1号住居跡 | | 第4号住居跡 | 第175 図-13 |
| | 第2号住居跡 | | 第4号住居跡 | 第175 図-14 |
| | 第2号住居跡遺物出土状況 | | 図版65 | 第4号住居跡 第175 図-15 |
| 図版58 | 第3号住居跡 | | 第4号住居跡 | 第175 図-16 |
| | 第3号住居跡遺物出土状況 | | 第4号住居跡 | 第175 図-19 |
| | 同左遺物出土状況 | | 第4号住居跡 | 第175 図-20 |
| | 第3号住居跡炉跡 | | 第4号住居跡 | 第175 図-21 |
| | 調査風景 | | 第4号住居跡 | 第175 図-22 |
| 図版59 | 第4号住居跡 | | 図版66 | 第4号住居跡 第175 図-30 |
| | 第4号住居跡貯蔵穴 | | 第4号住居跡 | 第176 図-2 |
| | 同左炉跡 | | 第4号住居跡 | 第176 図-3 |
| | 第4号住居跡遺物出土状況 | | 第4号住居跡 | 第176 図-4 |
| | 同左遺物出土状況 | | 第4号住居跡 | 第176 図-23 |
| 図版60 | 第5号住居跡 | | 第5号住居跡 | 第179 図-1 |
| | 第5号住居跡遺物出土状況 | | 図版67 | 第7号住居跡 第184 図-1 |
| | 第6号住居跡 | | 第7号住居跡 | 第184 図-2 |
| 図版61 | 第7号住居跡 | | 第7号住居跡 | 第184 図-3 |
| | 第7号住居跡貯蔵穴 | | 第7号住居跡 | 第184 図-7 |
| | 同左炉跡 | | 第7号住居跡 | 第184 図-8 |
| | 第7号住居跡遺物出土状況 | | 第7号住居跡 | 第184 図-11 |
| | 同左遺物出土状況 | | 図版68 | 第7号住居跡 第184 図-12 |
| 図版62 | 第1号竪穴状遺構 | | 第7号住居跡 | 第184 図-14 |
| | 第2号竪穴状遺構 | | 第2号竪穴状遺構 | 第188 図-1 |
| | 第2号竪穴状遺構遺物出土状況 | | 第2号竪穴状遺構 | 第188 図-2 |
| | 第1号土壙 | | 住居跡出土石器 | |
| | 第3号土壙 | | | |
| | 第1号集石土壙 | | 楓山北遺跡 | |
| | 第2号集石土壙 | | 図版69 | 遺跡全景 |
| | 住居跡群近景 | | 第1号住居跡 | |
| 図版63 | 第2号住居跡 | 第169 図-1 | 図版70 | 第1号住居跡遺物出土状況 |
| | 第2号住居跡 | 第169 図-2 | | 第1号住居跡遺物出土状況 |
| | 第3号住居跡 | 第171 図-2 | | 第2号住居跡 |
| | 第3号住居跡 | 第171 図-3 | 図版71 | 第3号住居跡 |
| | 第3号住居跡 | 第171 図-4 | | 第3号住居跡竈遺物出土状況 |
| | 第3号住居跡 | 第171 図-9 | | 第4号住居跡 |
| 図版64 | 第4号住居跡 | 第175 図-1 | 図版72 | 第5号住居跡 |
| | 第4号住居跡 | 第175 図-2 | | 第5号住居跡遺物出土状況 |
| | 第4号住居跡 | 第175 図-5 | | 第6号住居跡 |
| | 第4号住居跡 | 第175 図-6 | 図版73 | 第7号住居跡遺物出土状況 |

大里村遺跡調査会

	第 8 号住居跡遺物出土状況		第 8 号住居跡	第214 図- 3	
	第 8 号住居跡竈遺物出土状況		第 1 号住居跡	第196 図- 3	
図版74	第 9 号住居跡		第 1 号住居跡	第196 図- 4	
	第 9 号住居跡遺物出土状況		第 1 号住居跡	第196 図- 5	
	第 1 号土壙		第 1 号住居跡	第196 図- 6	
	第 2 号土壙		第 1 号住居跡	第196 図- 7	
	第 8 号土壙		第 1 号住居跡	第196 図- 8	
	第 1 号集石土壙	図版77	第 1 号住居跡	第196 図- 9	
	第 3 号集石土壙		第 1 号住居跡	第197 図- 1	
	第 4 号集石土壙		第 2 号住居跡	第201 図-10	
図版75	第 1 号住居跡	第196 図- 1	第 2 号住居跡	第201 図-11	
	第 2 号住居跡	第201 図- 1	第 5 号住居跡	第208 図- 9	
	第 2 号住居跡	第201 図- 2	第 8 号住居跡	第214 図- 8	
	第 2 号住居跡	第201 図- 4	図版78	第 2 号住居跡	第201 図-12
	第 2 号住居跡	第201 図- 5	第 3 号住居跡	第204 図- 1	
	第 5 号住居跡	第208 図- 1	第 3 号住居跡	第204 図- 2	
	第 5 号住居跡	第208 図- 2	第 4 号住居跡	第206 図- 1	
	第 5 号住居跡	第208 図- 4	第 4 号住居跡	第206 図- 2	
	第 5 号住居跡	第208 図- 5	第 5 号住居跡	第208 図-11	
	第 5 号住居跡	第208 図- 6	第 8 号住居跡	第214 図- 7	
図版76	第 5 号住居跡	第208 図- 7	第 2 号住居跡	第201 図-17	

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

大里村は、村内全域が市街化調整区域であるとともに、一部を除いて全てが農業振興地域として昭和45年に指定された。その後、昭和51年に第1次大里村振興計画が策定され、生活環境の整備と調和のとれた田園都市を目指した新たな土地利用計画が立てられた。この計画に基づき昭和61年に村の南部にあたる箕輪地区並びに青山地区の一画を対象に土地区画整理を行う調整が進められた。その事業内容は、対象面積約69.2haに対し、組合施行による土地区画整理を実施し、工業用地並びに住宅用地を開発造成するものであり、工業地域では村民の雇用確保を、そして住宅地域においては人口の増加を目的に計画されたものであった。この開発事業に対応するため村教育委員会では、関係部局と事前協議を行い、文化財の保護について協議を進めた。

昭和62年6月、村企画課長から大里村教育委員会教育長あてに「事業予定地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて」の照会があった。これに対して村教育委員会では、周知されている埋蔵文化財包蔵地について昭和63年3月27日付け大教委発第39号をもって次の旨回答した。

1. 照会地域一帯は、東山遺跡を始め9遺跡が存在する。
 2. 照会地域一帯は、山林箇所が多く、その所在と範囲については確認調査が必要である。
- 尚、その取り扱いについては、確認調査を実施した後、改めて通知するとした。

その後、当事業は昭和63年7月22日に大里村南部土地区画整理組合が設立されたことにより担当課であった村企画課から組合事務局へと事務は引き継がれた。

同組合では、事業計画を具体化するとともに埋蔵文化財の取り扱いについても具体的な協議が重ねられた。また、村教育委員会では、確認調査を昭和63年10月から平成元年1月にかけて延べ48日間にわたり遺跡の所在及び範囲確認調査を実施した。その結果、新たに2遺跡が加わり縄文時代から鎌倉時代に至る埋蔵文化財包蔵地11ヶ所を確認した。

村教育委員会では、県文化財保護課を交えて確認調査の結果を検討し、平成元年3月6日付け大教委発第46号をもって村教育委員会から同組合あて次のように通知した。

1. 区画整理事業予定地内には、東山遺跡をはじめ11遺跡が存在する。
2. 上記の埋蔵文化財包蔵地にかかる造成工事の変更が不可能な場合には、文化財保護法第57条の3の規定により、事前に文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

この後、取り扱いについて県文化財保護課、村教育委員会、区画整理組合において協議が重ねられ、計画変更は不可能となったため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。その実施については、遺跡調査会を設立しこれが発掘調査並びに整理事業にあたることとなった。調査にあたる調査担当者は2名を予定していたものの予定枠は埋まることのないまま調査会は発足し、調査を進めざるおえない状況が続いた。そして、担当者が増員されたのは平成2年4月を待たなければならなかった。

その後、具体的な埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和元年5月24日付けで大里村教育委員会、大里村南部遺跡群調査会、大里村南部土地区画整理組合の三者による協定書が締結され、発掘調査に関しては、同組合と同調査会との間に委託契約が締結された。そして、法的手続きを済ませたのち、発掘調査は昭和元年6月8日より阿諏訪野東遺跡から調査が開始された。

大里村南部遺跡群調査会組織

調 査 会

顧 問 会 長 理 事 監 事	吉原 文雄	大里村長	(平成3年1月18日から)
	根岸 喜夫	大里村南部土地区画整理組合理事長	(平成元年5月から)
	堀 茂平	前大里村長	(平成元年5月から平成3年1月17日まで)
	金井 岩夫	大里村教育委員会教育長	(平成3年2月15日から)
	大島 清肆	前大里村教育委員会教育長	(平成元年5月から平成3年1月18日まで)
	金井塚良一	大東文化大学講師	(平成元年5月～)
	田口 和夫	大里村文化財保護審議委員会委員	(平成元年5月～)
	鈴木 繁樹	大里村文化財保護審議委員会委員	(平成3年度～)
	堀 和哉	大里村文化財保護審議委員会委員	(平成3年度～)
	大久保忠孝	大里村文化財保護審議委員会委員	(平成5年度～)
	浅井 昭三	大里村文化財保護審議委員会委員	(平成7年度～)
	大久保栄治	前大里村文化財保護審議委員会委員	(平成元年5月～7年度)
	柿沼角太郎	前大里村文化財保護審議委員会委員	(平成元年5月～7年度)
	大河原好一	前大里村文化財保護審議委員会委員	(平成元年5月～2年度)
	小島 直隆	前大里村文化財保護審議委員会委員	(平成元年5月～2年度)
	梅沢多一郎	前大里村文化財保護審議委員会委員	(平成元年5月～平成4年6月)
	関根 陽子	大里村教育委員会教育次長	(平成7年6月～)
	矢島 講治	大里村南部土地区画整理組合事務局長	(平成5年度～)
	金子 富夫	前大里村教育委員会教育次長	(平成3年度～平成7年5月)
山岸 保治	元大里村教育委員会教育次長	(平成元年5月～2年度)	
斉藤 博	前大里村南部土地区画整理組合事務局長	(平成元年5月～4年度)	

調 査 団

団 長	金井塚良一	大東文化大学講師	
調査担当者	出縄 康行	大里村教育委員会 主事	
	富沢 一明	前大里村教育委員会 主事	(現、長野県佐久市教育委員会)

事 務 局

事務局長	上山 武	大里村教育委員会社会教育主事	(平成6年度～)
	宮沢 達三	前大里村教育委員会派遣社会教育主事	(平成4～6年度)
	金井 勲	元大里村教育委員会社会教育主事	(平成2～3年度)
	斉藤 麻治	元大里村教育委員会社会教育係長	(平成元年度)
事務局員	坂上さよ子	大里村南部遺跡群調査会職員	(平成3年3月～)
	山崎満佐子	前大里村南部遺跡群調査会職員	(平成元年4月～平成3年2月)

2. 調査の経過

(1) 調査の方法

調査区のグリッドは区画整理用地全域を網羅するものであり、国家座標に乗る形で軸線を設定し、国家座標第Ⅸ系の $X=+8,740\text{m}$ 、 $Y=-37,600\text{m}$ を原点としている。発掘調査にあたっては、各地点毎で調査区の北西隅に基点を設定し、南北方向は基点から南に向かって10m毎に1・2・3・・・、東西方向は基点から東に向かって10m毎にA・B・C・・・とグリッドラインを設定した。よって本報告書は10mグリッドで位置を示し、呼称はX軸を先に、Y軸を後に配列した。東山遺跡Ⅰ区の埋没谷包含層においてはグリッドをさらに25分割する2mグリッドで遺物の取り上げを行った。遺構番号は遺跡毎に付し、遺構図は、写真測量と手計りを併行して行った。

(2) 発掘調査

大里村南部土地区画整理事業に伴う発掘調査は、平成元年6月から平成7年4月までの約5年10カ月にわたって実施された。調査対象面積は約180,000 m^2 におよび、11遺跡、17箇所を調査している。初年度は調査担当者1名であったが、平成2年度から平成5年度にかけては2名となり、補助員約50名による体制で2班に分け2地点同時に調査を行い迅速化を図った。遺跡毎の詳細は「調査工程表」に示した。(第1表)

発掘調査にあたっては、各遺跡が所在する台地ごとに大きく6ブロックに分けられそれぞれA～F地点と呼称した。今回報告する遺跡は、このうち平成元年度から平成2年度にかけて実施されたA～B地点であり、調査経過は本書に関する遺跡を年度毎にその概要を記すこととする。

平成元年度 6月、阿諏訪野東遺跡より調査を開始。前年度実施された確認調査の際、古墳跡は確認されていたものの確認作業が進むにつれ調査区南側に古墳群が形成されていたことが明らかとなった。古墳群のうち石室を残す古墳2基も検出された。古墳跡より調査を開始する。調査の終了した遺構から随時写真測量を行う。8月より竪穴住居跡6軒、井戸跡1基、土壇等の調査に取り掛かる。9月までに古墳跡6基、住居跡6軒、井戸跡1基等の調査を完了した。本遺跡をもってA地点の調査は終了した。同じく9月より東山遺跡の調査を開始したが農作物の収穫時期により断続的な調査を余儀なくされ、調査区を便宜的にⅠ区とⅡ区とに分けさらに調査可能な地番より実施した。Ⅰ区では先土器時代の石器分布と縄文時代中期の住居跡と土壇群が検出され、調査を終了した遺構から写真測量を行う。また、調査区南側の埋没谷には遺物が多量に含まれる包含層が形成されていることが明らかとなり、12月より埋没谷の遺物包含層の調査を開始し、1月をもってⅠ区の調査を終了した。並行して1月よりⅡ区の遺構確認作業に着手する。その結果、前方後円墳1基と円墳2基、竪穴状遺構2基、火葬墓4基、縄文時代前期の住居跡4軒等を検出した。この前方後円墳は、築造当初は円墳として周溝を掘削されるが、その後間もなく埋め戻され前方部を構築した古墳であることが明らかとなった。

平成2年度 本年度より2班となり併行して2遺跡を調査することが可能となる。前年度の継続であった東山遺跡Ⅰ区・Ⅱ区は4月をもって全て完了した。5月、東山遺跡Ⅲ区を調査し、住居跡1軒と土壇等を検出した。同月より桜谷東遺跡Ⅰ区の調査を開始する。楓山西遺跡では古墳時代前半の住居跡7軒、竪穴状遺構2基等を検出し、調査を終了した遺構から写真測量を行う。7月をもって本遺跡の調査は完了した。7月より楓山北遺跡の調査を開始する。縄文時代前期の住居跡2軒と古墳時代の住居跡3軒、奈良・平安時代の住居跡3軒、時期不明住居跡1軒を検出している。9月に調査は完了する。本遺跡の調査をもってB地点の調査は終了した。

(3) 整理・報告書作成事業

整理・報告書作成事業は、長期にわたる発掘調査が終了した平成5年度より開始されるが、区画整理地内の家屋の移転に伴い19箇所の断続的な調査が行われ、整理作業も中断する。

平成5年度から平成8年度 平成5年4月よりA地点の阿諏訪野東遺跡より着手する。阿諏訪野東遺跡の遺構実測図の整理と第2原図作成。遺物は、遺物洗い、遺物注記。11月より接合、遺物実測。1月よりB地点の東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区の遺物洗い、注記、接合、復元、遺物実測。平成6年度は、阿諏訪野東遺跡の遺構図のトレースと東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区の遺構実測図の整理と第2原図作成及び遺構図のトレース。並行して遺物の注記、復元、遺物実測。平成7年5月より本格的な整理・報告書刊行作業を開始する。楓山西・楓山北遺跡の遺構実測図の整理と第2原図作成及び遺構図のトレース、並行して同遺跡の遺物の注記、復元、遺物実測。平成8年度 遺物実測、判組を開始する。11月遺物判組、12月写真撮影と判組を行い、また報告書の原稿執筆、割付の作成等を行い報告書を刊行した。

第1表 発掘調査工程表

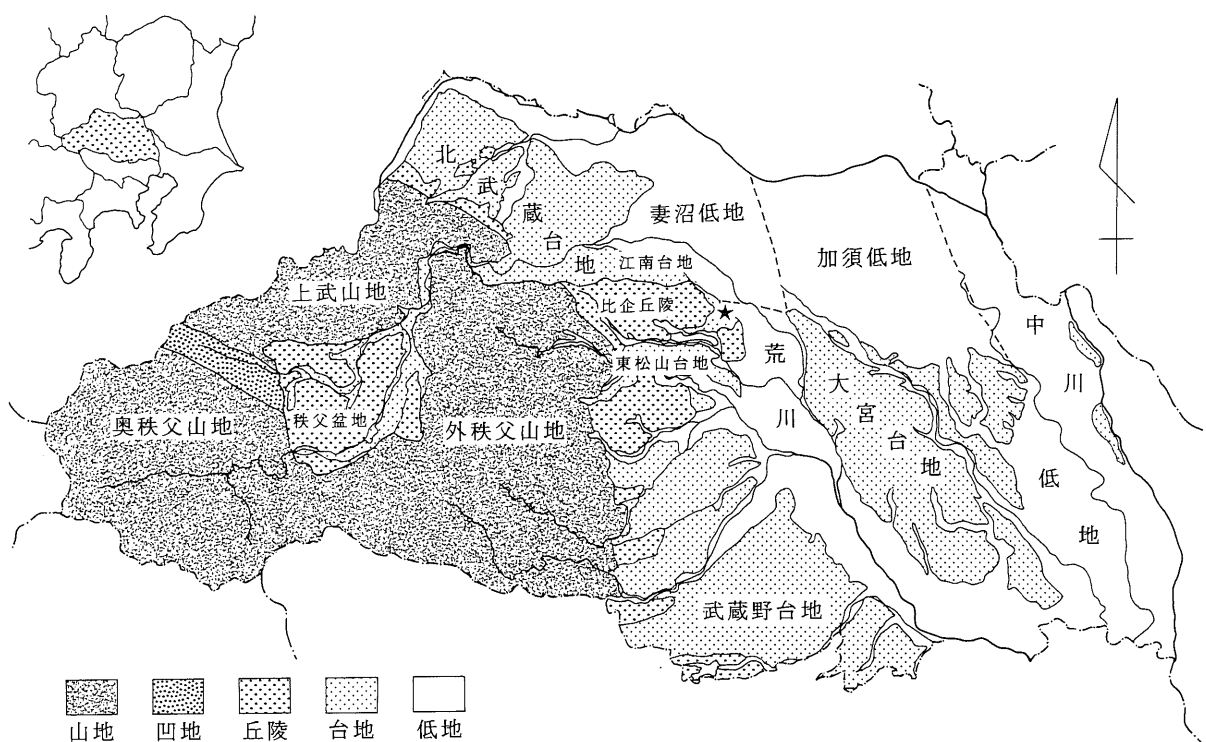
遺跡名	元年		2年				3年				4年				5年				6年				7年				8年					
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
阿諏訪野東遺跡	≡																															
東山遺跡Ⅰ区	≡																															
東山遺跡Ⅱ区	≡																															
東山遺跡Ⅲ区	≡																															
楓山西遺跡	≡																															
楓山北遺跡	≡																															
桜谷東遺跡Ⅰ区	≡																															
桜谷東遺跡Ⅱ区	≡																															
桜谷東遺跡Ⅲ区	≡																															
桜谷東遺跡Ⅳ区	≡ ≡ ≡ ≡ ≡																															
桜谷遺跡	≡																															
大林南遺跡	≡																															
船木遺跡	≡																															
船木下遺跡	≡																															
大境遺跡	≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡																															
大境南遺跡	≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡																															
整理報告作業	≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡																															

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 遺跡群の立地

本遺跡群は、埼玉県大里郡大里村大字箕輪、冑山に所在し、JR高崎線の吹上駅より南西方向へ直線で約4kmの距離に位置する（第2図）。本遺跡群を地形的に見ると西に標高140m～60mの北比企丘陵が広がり、南東を比企丘陵の残丘と考えられている標高80m～50mの吉見丘陵がある。この両丘陵に挟まれた台地（仮に東平台地と称する）に遺跡群は位置し、台地頂部は比較的平坦で標高50m～30mを測る。台地の南限は東流する市野川を境とし、北は和田吉野川を境とする。東平台地の地形は、南側の市野川の支流である月中川や滑川により開析がすすみ、南北方向の浅い谷が多く認められ、その谷頭は台地北側にかたよる。そのため分水嶺は台地北側に偏在し、現在の太里村と東松山市との境界と重なる状況を呈している。村域にあたる台地の地形は、分水嶺を境に台地が北に向け緩やかな傾斜を示し順次標高を減じ沖積地へと達する。また、台地への開析がすすみ樹枝状とも言える幾つもの小支谷がみられ、谷頭には溜池が設けられている。一方、台地北側の沖積地は、荒川やその支流である和田吉野川による度重なる氾濫によってもたらされた多量の堆積土により、現在は平坦に見える地形も古代の遺構確認面までの深さが0.6m～2.5mもあることが発掘調査により確認されており、このような状況下で古代の地形を推定するには困難と言える。

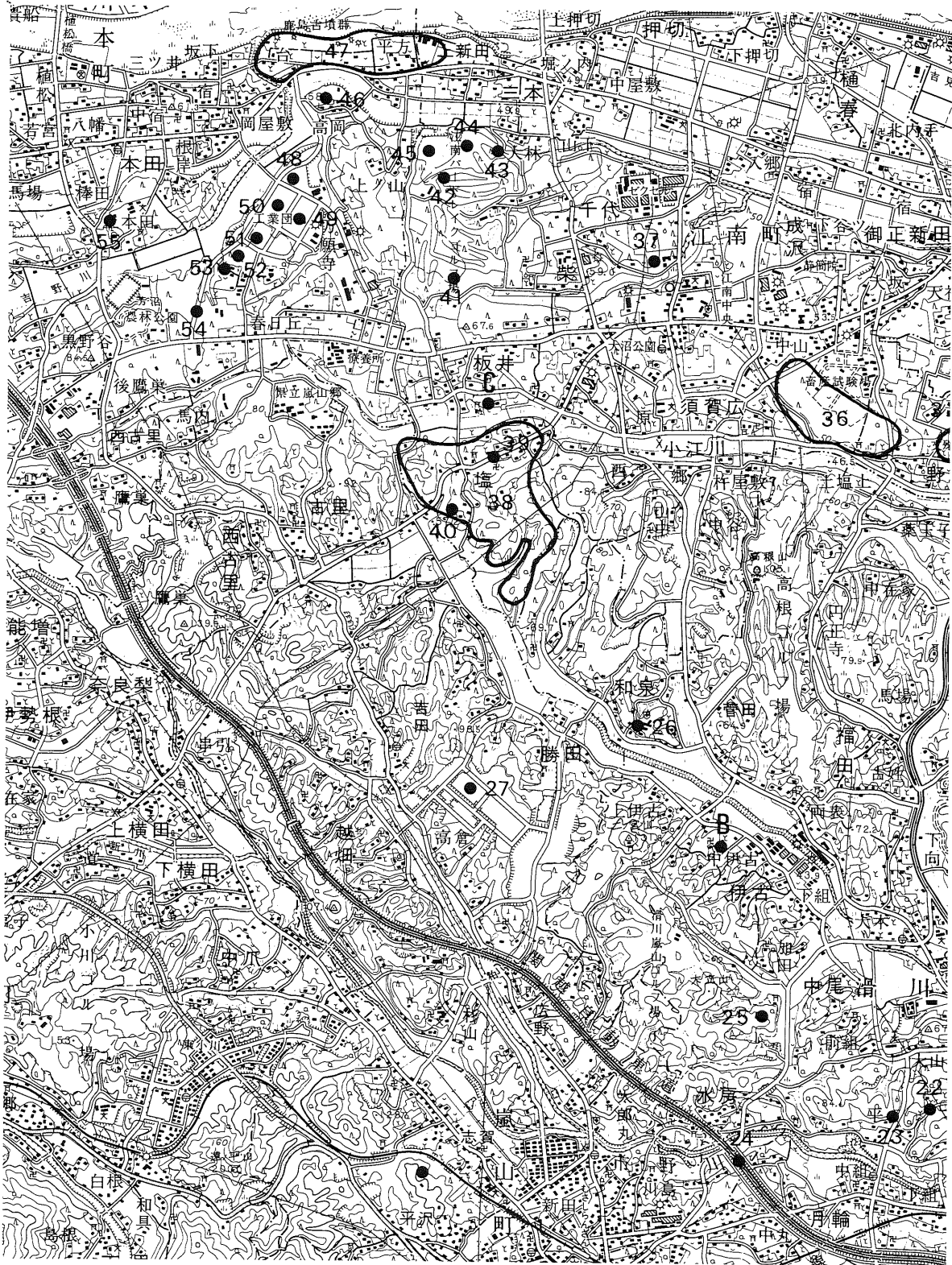
遺跡群の地形は、南北方向を示す3本の小支谷が入り込み、東より「三階沼の谷」^{さんがいぬま}「円山の谷」^{まるやま}「桜谷の谷」^{さくらやつ}と呼称されている。さらにこの小支谷から派生した小さな谷が湾入し台地を複雑な形にしている。今回報告する各遺跡は、通称「桜谷の谷」と呼ばれている谷の東側に位置し、標高約35～45m前後を測り遺跡と谷部との比高差は約10～15mを測る。



第1図 埼玉県の地形

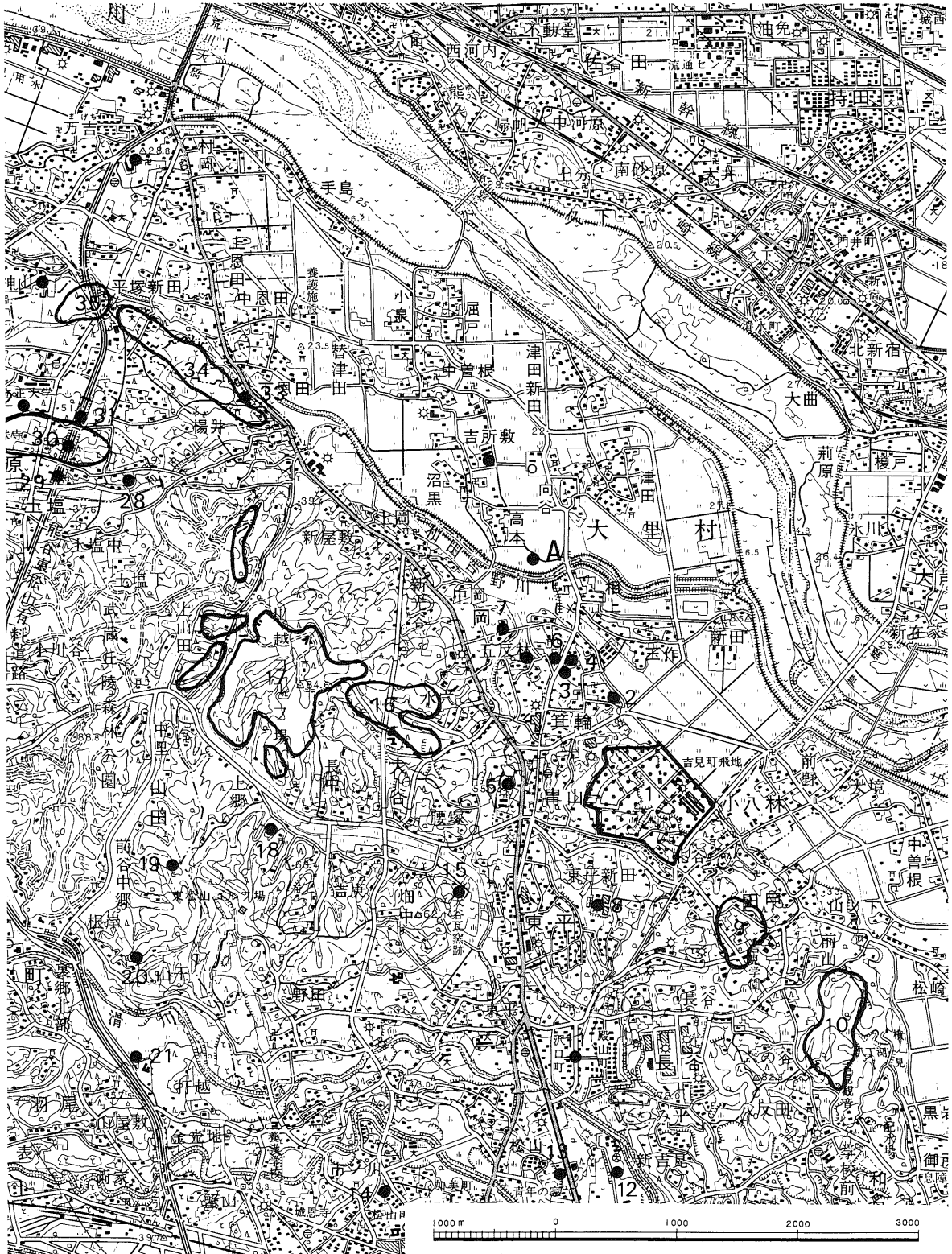
2. 周辺遺跡の概要

南部遺跡群は、荒川を臨む東平台地の北縁部に展開し、遺跡群は3本の小支谷が北より湾入することにより4つの群に纏められる。遺跡群の中で西側に位置する通称「桜谷の谷」の西側には、阿諏訪野東、東山Ⅰ～Ⅲ区、楓山西、楓山北の4遺跡が所在し、その谷を挟んだ東側台地には、桜谷東Ⅰ～Ⅳ区、桜谷、大林南



第2図 周辺遺跡分布図

の3遺跡が所在する。遺跡群の中央に位置する「円山の谷」の開口部には、船木、船木下遺跡があり、船木下遺跡は水田下の沖積地に立地する。遺跡群東側に位置する「三階沼の谷」の最奥部には、大境、大境古墳群の2遺跡が所在し、これら11箇所の遺跡からは、先土器時代をはじめ中世、近世に至るまでの遺構や遺物が発見されている。ここでは、本報告に関連する遺跡を中心に周辺の状況を概観することにする。



第2図 掲載遺跡一覧表

1 南部遺跡群	16 三千塚古墳群	31 下新田遺跡	46 船山遺跡
2 中廓遺跡	17 三千塚古墳群支群	32 鹿島遺跡	47 鹿島古墳群
3 とうかん山古墳	18 吉ヶ谷遺跡	33 目白坂瓦窯跡	48 竹之花遺跡
4 北廓遺跡	19 新井遺跡	34 瀬戸山古墳群	49 四反歩遺跡
5 甲山古墳	20 城原北遺跡	35 万吉下原遺跡	50 白草遺跡
6 玉太岡遺跡	21 打越遺跡	36 野原古墳群	51 円阿弥遺跡
7 鹿島遺跡	22 寺谷遺跡	37 萩山遺跡	52 権現堂北遺跡
8 大谷遺跡	23 寺谷廢寺跡	38 塩古墳群	53 権現堂遺跡
9 田甲原古墳群	24 屋田遺跡	39 塩西遺跡	54 焼谷遺跡
10 黒岩横穴墓群	25 天裏遺跡	40 塩1号墳	55 上本田遺跡
11 沢口遺跡	26 船川遺跡	41 寺内廢寺跡	
12 八幡遺跡	27 蟹沢遺跡	42 西原遺跡	式内社
13 岩鼻古墳群	28 丸山遺跡	43 権現坂遺壇輪窯跡	A 高城神社
14 前山遺跡	29 熊野遺跡	44 富士山遺跡	B 伊古乃速御玉比売神社
15 大谷瓦窯跡	30 荒神脇遺跡	45 姥ヶ沢遺跡	C 出雲乃伊波比神社

先土器時代

先土器時代の遺跡は、これまで調査例が少なかったが、近年の大規模な発掘調査により遺跡が確認され始めた。江南台地東部に位置する立正大学構内の鹿嶋遺跡は、A T火山灰降下以前のローム層からナイフ形石器3点等が出土している。一方、都幾川に面する東松山台地の唐子に所在する塚原遺跡でも同様にA T層火山灰降下以前のローム層中からナイフ形石器33点と石核3点が確認され、周辺遺跡として両遺跡は年代的に最古段階にあたる。ナイフ形石器を出土した遺跡としては、江南台地の塩西遺跡、萩山遺跡、上前原遺跡、向原遺跡等があり、岩鼻台地や比企丘陵でも原宿遺跡、中山遺跡、西ノ谷遺跡などが調査時もしくは表採資料として検出されている。細石刃が検出された遺跡としては、江南台地西部に位置する川本町白草遺跡があり、荒屋型彫刻刀形石器を伴う頁岩製の細石刃石器群の出土で知られ注目されている。また、表採資料であるが比企丘陵北東部の東松山市雷原遺跡においても細石刃が検出されている。

このように検出例は次第に多くなりつつあるものの、本地域は富士箱根系や北関東系の火山灰の堆積が薄く、他地域とのローム層の比較が困難な状況下にある。今後は基本層序の確立と層位による文化層の検出が課題と言える。

縄文時代

草創期～早期：荒川左岸の花園町宮林遺跡では、爪形文・多縄文系土器を伴う住居跡が検出され、同じ台地の川本町沢口遺跡でも爪形文土器の出土をみている。また、四反歩遺跡からは草創期の石槍群が検出されている。早期では荒川右岸の江南台地で、近年発掘調査が多く行われたことによりこの時期の集落が検出されている。川本町四反歩遺跡では夏島式期から稲荷台式期の住居跡8軒と多量のスタンプ形石器が検出され、江南町萩山遺跡では井草式期から夏島式期の住居跡20軒と土壌多数が確認されている。同じ江南町にある立正大学熊谷校地内遺跡においては夏島式から稲荷台式期の住居跡3軒が検出されている。早期後半の遺跡としては、川本町白草遺跡、四反歩遺跡、江南町富士山遺跡から炉穴や土壌が検出され、川本町舟山遺跡からは条痕文系土器の良好な土器群が出土している。

前期：前期になると集落遺跡が顕著となり、江南台地西側の寄居町南大塚遺跡や甘粕原遺跡では黒浜式期の集落が検出されている。諸磯式期では集落規模の大きな遺跡が存在するようになり、荒川左岸の寄居町塚屋遺跡では25軒の住居跡をはじめ多量の遺物が出土している。江南台地では、ゴシン遺跡、上郷西遺跡、四反歩遺跡、円阿弥遺跡などで規模は小さいものの住居跡が検出されている。村内においても本報告遺跡のほか北廓遺跡や中廓遺跡で黒浜式から諸磯式期の土壌が検出されている。また、比企丘陵でも同様に黒浜式期

の集落遺跡の増加傾向がみられ、丘陵部での検出例も増えつつある。このように遺跡数の増加は認められるが、継続的な集落を形成するまでは両地域とも至っていないようである。

中期：中期初頭の五領ケ台式期の遺跡は少なく大里郡内でも2遺跡が確認されているだけである。勝坂式期以降になると遺跡数は増加するとともに遺跡の規模や継続期間において違いがみられる。比較的規模の大きい集落として川本町上本田遺跡や江南町西原遺跡があり、西原遺跡では加曾利E式期の住居跡52軒と土壇群が検出されている。一方大規模な集落の周囲には中～小規模な集落が点在し、花園町台耕地遺跡や川本町沢口遺跡、本遺跡群の東山遺跡などが中規模な集落として捉えられ、更に小規模な集落遺跡が点在する傾向が知られている。

後期～晩期：中期末葉から遺跡は減少傾向を示すとともに規模においても小規模化の傾向が窺え、また、立地においても後期になると沖積地でも遺跡の検出が知られるようになる。近年調査報告された寄居町樋ノ下遺跡では、後期初頭から前葉の時期の柄鏡形敷石住居跡9軒を含む13軒が検出されている。本遺跡群の桜谷遺跡では堀之内式期の住居跡2軒が検出されている。本地域からは離れるが深谷市本郷前東遺跡、明戸東遺跡等の沖積地において遺跡が検出される例も多くなりつつあるが、集落が明らかにされた遺跡は未だ少ない。さらに晩期になると大里郡内では10遺跡が確認されているものの発掘調査で住居跡が検出された遺跡となると花園町台耕地遺跡や大里村中廓遺跡などが上げられるだけである。

弥生時代

荒川右岸に位置する大里郡内の弥生時代の遺跡は13箇所が確認されており、その南に位置する比企丘陵から吉見丘陵の一带では20箇所の遺跡が確認されている。台地での集落形成が確認されるのは中期後半の宮ノ台式期になってからであり、本遺跡群の船木遺跡では宮ノ台式期の住居跡3軒と方形周溝墓2基が検出され、谷を挟んだ西側に所在する円山遺跡でも住居跡1軒と溝1条が検出されている。また、直線で約4.5km南の吉見町大行山遺跡でも住居跡が検出されている。

後期、吉ヶ谷式期の集落としては、和田川沿いに位置する江南町千代遺跡群の姥ヶ沢遺跡で住居跡8軒と土壇43基、開析谷を挟んだ東側の富士山遺跡では住居跡8軒が検出されている。また、川本町白草遺跡の22軒をはじめ、円阿弥遺跡5軒、四反歩遺跡5軒、焼谷遺跡5軒と集落群を形成している。一方比企丘陵では嵐山町蟹沢遺跡で住居跡11軒、滑川町新井遺跡で住居跡13軒と方形周溝墓6基が検出され、大里村北廓遺跡や谷を挟んで対峙する東松山市鹿島遺跡等でも方形周溝墓群が検出されている。近年調査報告された妻沼低地の深谷市明戸東遺跡では住居跡16軒が検出され、今後、沖積地での発見される遺跡数は増加するものと思われる。

古墳時代

江南台地から比企・吉見丘陵における古墳時代前期から中期にかけての集落遺跡は僅かではあるが増加する。本遺跡群の船木遺跡の他、墳墓では、和田川沿いの塩古墳群が代表的でありここでは前方後方形周溝墓を含む18基が確認され、下流の和田吉野川沿いの万吉下原古墳群では方形周溝墓3基が検出されている。集落遺跡では、塩古墳群の周囲に塩西遺跡や塩前遺跡の集落遺跡が確認され、吉野川沿いの白草遺跡で2軒、円阿弥遺跡で7軒が検出されている。中期の集落遺跡では、本遺跡群の楓山西遺跡、大林南遺跡、船木遺跡で住居跡群が検出されており、江南町塩新田遺跡や同町新山6号墳が発掘調査により当該期に属することが明らかとなっている。比企丘陵や吉見丘陵の帯においては、前期の集落遺跡が32箇所確認されており、そのなかでも市野川沿いの東松山台地に位置する五領遺跡においては100軒以上の住居跡とともに東海、近畿、北陸地方の影響を受けた遺物がみられる大規模な集落がある。近年、滑川町打越遺跡でも50軒の住居跡が検出され、また、吉見町三ノ耕地遺跡においては、沖積地の微高地上で前方後方形墳墓2基が検出されている。

今後の当該期の実態をより明らかにする遺跡として注目されている。

後期になると集落遺跡は増加する傾向をみるが、周辺地域では現在のところまとまった住居跡の検出例は江南町本田東台遺跡の74軒や東松山市玉太岡遺跡の18軒だけである。古墳群ではこの時期急激な増加を示し、本遺跡群から西へ約0.6kmの距離に径90mの円墳とされている甲山古墳や北へ約1kmの位置に前方後円墳のとうかん山古墳がある。この両古墳は首長墓の系譜をたどれる可能性を持つ一方、同じ尾根には前方後円墳3基を含む約250基からなる東松山市三千塚古墳があり、この両者の関係が問われている。江南台地には前方後円墳1基を含む約20基からなる熊谷市瀬戸山古墳群や前方後円墳1基を含み約22基以上の江南町野原古墳群がある。埴輪生産遺跡として江南台地にある江南町権現坂遺跡と姥ヶ沢遺跡が上げられ、現在のところ埴輪窯は8基が検出されている。吉見丘陵では4基の埴輪窯跡が検出されている和名埴輪窯跡が所在する。ここで生産された埴輪の供献先についてはいくつかの検討が行われている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代になると周辺地域における遺跡数は、新たな集落も加わり前時期に比較して飛躍的な増加をみる。大里村を「和名抄」の国郡部でみると大里郡（下郡、四郷）に属すると考えられるが、横見郡との境を和田吉野川とする考えもあり、それに従えば本遺跡群は、横見郡に含まれることになるだろうが、何方にせよ両郡の境は、この周辺に求められよう。史料としては、九条家本「延喜式」裏文書のなかに記された「武蔵国大里郡坪付」とよばれる文書がある。この坪付に示された地域が具体的に何処であるかは発掘調査による条里遺構等の検出をまたなければならないが、想定として大里村から熊谷市域が当てられている。また、大里郡の西域にあたる地域を東山道武蔵路が通過すると想定されている。

集落遺跡では、熊谷市北島遺跡で8世紀中葉以降、住居跡、掘建柱建物跡の軒数や規模において目を見張るものがあり、この地域の大規模な集落の一つと言える。行田市池上・小敷田遺跡でも住居跡、掘建柱建物跡とともに墨書土器や出拳木簡が出土しており一般集落とは様相が異なる状況を呈している。男衾郡に属するが江南台地にある江南町荒神脇遺跡では住居跡46軒、掘建柱建物跡2棟が検出され、隣接する熊野遺跡では鍛冶関連遺構が検出されている。また、近年江南町丸山遺跡では竪穴住居跡12軒、掘建柱建物跡13棟が検出され「郷家」を想定できる資料として注目される。寺院関係では、確認調査がされている江南町寺内廃寺から平瓦に「大里郡□」や「□田郷瓦大里□」の文字がヘラ書きされたものが出土しており、大里郡との関連が想定される。本遺跡群では当該期の集落が5遺跡検出されており、特に円山遺跡では「有」の焼印が出土し、古代氏族有道氏もしくは大里郡有田里との関連が指摘できよう。

〔参考文献〕

- 新井 端他 1988「本田・東台・上前原」江南町文化財調査報告書第8集
- 出縄 康行 1988「北廓遺跡」大里村教育委員会
- 出縄 康行他1992「船木遺跡の調査」第25回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 磯崎 一 1992「白草遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第118集
- 大里郡市文化財担当者会 1992「大里地域の遺跡」埼玉考古第29号
- 大里郡市文化財担当者会 1993「大里地域の遺跡Ⅱ」埼玉考古第30号
- 金子 直行 1993「四反歩遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集
- 川口 潤 1993「白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集
- 富沢 一明他1993「大境南遺跡の調査」第26回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 比企地区文化財担当者研究協議会 1994「比企郡市における埋蔵文化財の成果と概要」
- 宮井 英一 1985「大林Ⅰ・Ⅱ・宮林・下南原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集
- 村松 篤 1991「焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡」川本町発掘調査報告書第5集
- 村松 篤 1993「沢口遺跡発掘調査報告書」川本町遺跡調査会
- 森田 安彦他1996「千代遺跡群—縄文時代編」江南町教育委員会

Ⅲ 遺跡群の概要

1. 各遺跡の概要

大里村南部遺跡群の発掘調査により11箇所の遺跡が調査され、その時代は、先土器時代の生活跡を始め、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の各時代の住居跡や前方後円墳を含む古墳群、更に低地では鎌倉時代の館跡に関連する溝などが検出されている。今回報告する遺跡はそのうちの4遺跡6地点であり、これ以外の遺跡については第2、3分冊によって報告する予定であるが、ここでは遺跡群全体の様相として概観しておきたい。

阿諏訪野東遺跡 北東方向へ緩やかに傾斜する台地の縁辺部に位置し、南側に開析谷を挟んで楓山北遺跡が所在する。検出された遺構は、縄文時代前期の黒浜式土器を出土した土壇1基と集石1基、古墳時代後期の古墳跡6基と礫塚墓1基、同時期の住居跡5軒、掘建柱建物跡1棟、奈良時代の住居跡1軒、土壇7基、溝2条、近世以降溝12条などである。

東山遺跡Ⅰ区・Ⅱ区 小支谷の一つである通称「桜谷の谷」の最奥部にあたる。開析により南東方向への舌状台地を形づくる。調査区の面積が広いいためかその時代、時期により検出される遺構の位置に違いを見る。

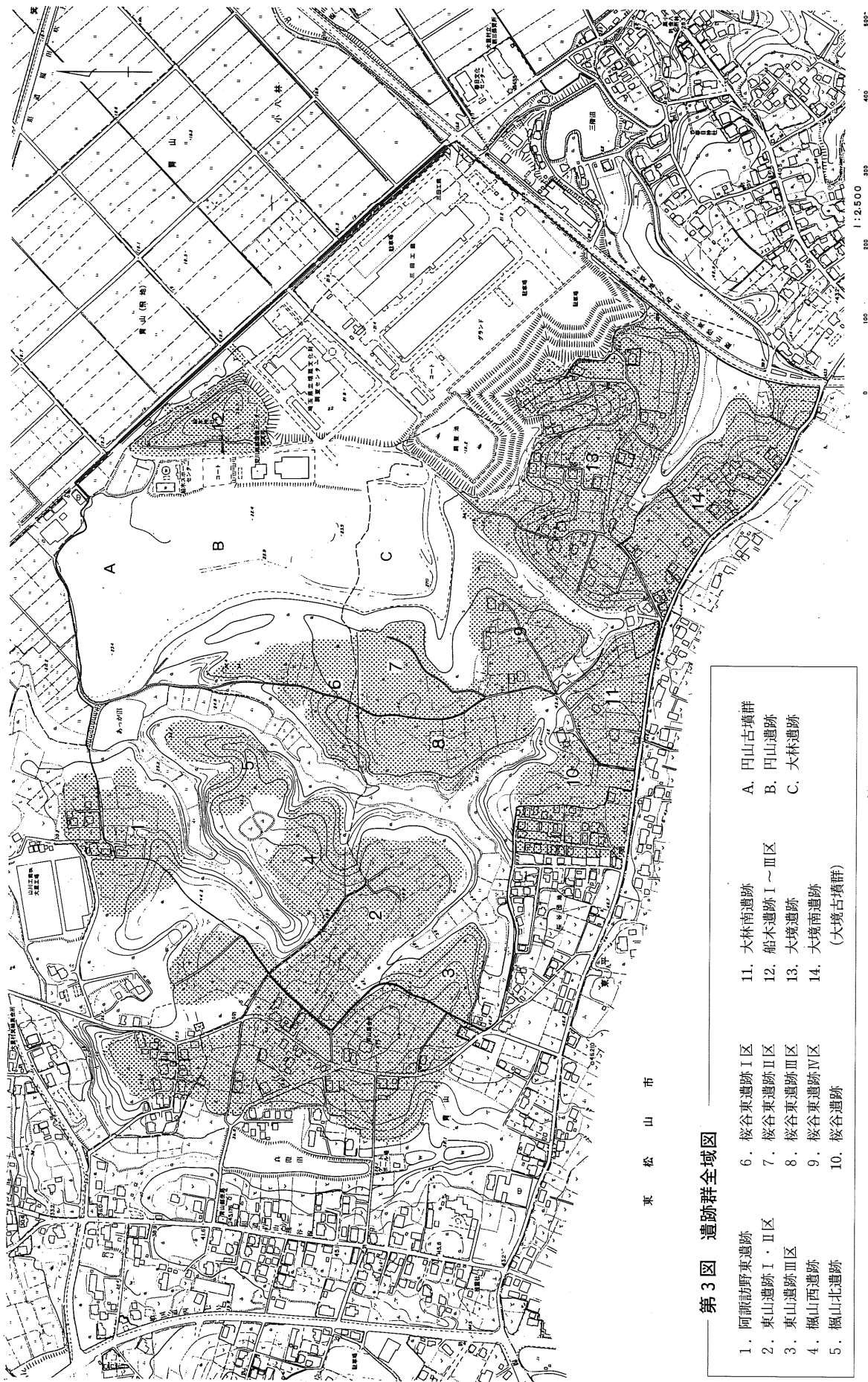
先土器時代は台地中央部に石器集中1箇所が検出され、時期は砂川期に属すると考えらる。遺物分布の層位はソフト・ローム層からハード・ローム層上面にかけて検出された。遺物は黒曜石製のナイフ形石器4点、スクレーパー1点、石核1点、その他剥片類であり、石器類の分布に伴い200g以下の赤化した礫による礫群が検出されている。縄文時代では、グリッド出土ではあるが早期の撚糸文系土器を始め後期加曾利B1式土器までの遺物が出土している。遺構としては前期の黒浜式期の住居跡3軒と土壇、諸磯b式期の住居跡1軒、中期勝坂式期の土壇、加曾利EⅠ～Ⅲ式期の住居跡13軒と土壇等が検出されている。前期の遺構は台地中央部から東向する先端部に位置し、中期の遺構は舌状台地の基部にあたる西側で検出されている。また、台地南側の埋没谷では、縄文時代中期の遺物包含層が形成されている。古墳時代では、台地中央部に長軸45.6m、後円部径43.5mの帆立貝式の前方後円墳1基とこの古墳に伴う竪穴状遺構1基、更に台地先端部に円墳1基が検出されている。前方後円墳は、括れ部に後円部の周溝が全周することから、築造において墳形の変更がなされた古墳であると考えられる。奈良・平安時代では、竪穴状遺構1基、火葬墓4基、土壇4基が検出されている。

東山遺跡Ⅲ区 東山Ⅰ、Ⅱ区の谷を挟んだ南側に位置する。検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡1軒、土壇1基、集石1基である。グリッド出土であるが縄文時代前期から中期の遺物が若干出土している。

楓山西遺跡 「桜谷の谷」に面する台地の緩やかな斜面部に位置する。検出された遺構間の標高差は最大で8.2mを測る。検出された遺構は、古墳時代前期の住居跡3軒、中期の住居跡4軒、竪穴状遺構2基、土壇7基、集石2基である。遺跡の北側は破壊を受けており、集落規模については不明な点もある。

楓山北遺跡 「桜谷の谷」の開口部の馬の背状台地の先端部に位置する。遺跡の眼下には「桜谷の谷」の溜池であるあつが沼があり、ここで開析谷は分岐する。検出された遺構は、縄文時代前期の黒浜式期の住居跡1軒、諸磯c式期の住居跡1軒、土壇8基、集石4基、古墳時代中期の住居跡1軒、後期の住居跡2軒、奈良・平安時代の住居跡3軒、時期不明1軒、ピット群4箇所などである。古墳時代や奈良時代の住居跡覆土中から円筒埴輪の破片が多量に出土している。

桜谷東遺跡Ⅰ区 「桜谷の谷」の東側台地先端部に位置し、西側は浅い開析谷が入り込む。検出された遺



第3図 遺跡群全域図

- | | | |
|-------------|------------|--------------|
| 1. 阿諏訪野東遺跡 | 6. 桜谷東遺跡Ⅰ区 | A. 円山古墳群 |
| 2. 東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区 | 7. 桜谷東遺跡Ⅱ区 | B. 円山遺跡 |
| 3. 東山遺跡Ⅲ区 | 8. 桜谷東遺跡Ⅲ区 | C. 大林遺跡 |
| 4. 楸山西遺跡 | 9. 桜谷東遺跡Ⅳ区 | |
| 5. 楸山北遺跡 | 10. 桜谷遺跡 | |
| | | 11. 大林南遺跡 |
| | | 12. 船木遺跡Ⅰ～Ⅲ区 |
| | | 13. 大境遺跡 |
| | | 14. 大境南遺跡 |
| | | (大境古墳群) |

第3図 南部遺跡群全域図

構は、縄文時代前期の諸磯式期の住居跡1軒、集石10基、土壙5基、奈良・平安時代の住居跡20軒である。奈良・平安時代の住居跡うち2軒からは平瓦が出土し、また、墨書土器や灰釉陶器、須恵器転用硯なども少量検出されている。

桜谷東遺跡Ⅱ区 Ⅰ区と同じ台地の頂部西側に位置する。この台地尾根を農道が縦断することから、農道西側をⅡ区、東側をⅢ区として調査区を設定した。標高45m前後を測る。検出された遺構は、縄文時代中期の住居跡2軒、土壙19基、集石4基、弥生時代後期の吉ヶ谷式期の住居跡3軒、古墳時代中期の住居跡4軒、円墳1基、方形周溝墓1基、溝2条、近世道路状遺構1条等である。弥生時代後期の住居跡では、長軸約9.4m、短軸5.6mの長方形を呈する大形の住居跡が検出されている。古墳跡では、径約19.6mを測る周溝からTK47並行の須恵器甕が出土し、一辺が約13.8mを測る方形周溝墓からは古墳時代中期の坏がブリッジ近くの周溝内より出土している。

桜谷東遺跡Ⅲ区 Ⅰ区、Ⅱ区と同じ台地の東側に位置する。検出された遺構は、縄文時代前期の諸磯b式期の竪穴状遺構1基、土壙8基、集石6基、中期五領ヶ台式期の埋設土器1基、後期堀之内1式期の炉跡2基、奈良・平安時代の住居跡2軒等である。また、グリッド出土であるが縄文時代早期撚糸文系土器や早期後半の条痕文系土器等が若干出土している。

桜谷東遺跡Ⅳ区 通称「円山の谷」の最奥部西側に所在し、台地北側にはⅡ区との境となる開析谷が湾入する。検出された遺構は平坦面から南側斜面にかけて検出され、縄文時代前期の諸磯b式期の土壙2基、後期堀之内1式期の住居跡1軒、古墳時代中期の住居跡7軒、後期の住居跡4軒、奈良・平安時代の住居跡10軒、ピット群、井戸状遺構2基、中世の掘建柱建物跡4棟、溝7条等である。古墳時代中期の住居跡からは多量の石製模造品や剥片類が出土していることから工房址と考えられ、同じ谷に面し、昭和48年に調査された船木遺跡の工房址との関連が想定される。

桜谷遺跡 「桜谷の谷」の最奥部にあたり、谷に面する舌状台地に位置する。谷の北側には東山遺跡が対峙し、東側は埋没谷を挟んで大林南遺跡が所在する。検出された遺構は、縄文時代後期の堀之内1式期の住居跡2軒、土壙27基等があり、東側の谷頭部の遺物包含層からは中期加曾利EⅢ式～後期堀之内1式期の土器が多量に出土している。

大林南遺跡 遺跡群の3本の支谷のうち「桜谷の谷」と「円山の谷」の最奥部にあたり、東平台地の分水嶺となる台地に位置する。検出された遺構は、縄文時代中期の土壙64基、埋甕3基、古墳時代前半の住居跡20軒、奈良・平安時代の溝1条等である。古墳時代中期の住居跡群には、規模において違いを見出すことができ長軸7m以上のもの、4.5m～5.5m位のもの、4m以下のものとのわけることができる。

大境遺跡 「円山の谷」と「三階沼の谷」の最奥部に位置し、台地尾根は東西方向を示し、これに幾つもの開析谷が湾入する。縄文時代前期の黒浜式期の土壙1基と中期加曾利EⅢ式の埋甕1基、弥生時代に属する方形周溝墓5基、後期吉ヶ谷式土器を伴う住居跡10軒、壺棺墓2基、古墳時代前半の住居跡5軒、古墳時代後期の住居跡2軒、奈良・平安時代の住居跡8軒、掘建柱建物跡5棟、土器焼成遺構2基、小鍛冶遺構1基、粘土採掘坑群、奈良・平安時代頃の溝2条と円形土壙多数が検出されている。

大境南遺跡・大境古墳群 「三階沼の谷」最奥部南側に位置し、台地中央を東西に東松山市との行政界が通っているとともに、大林南遺跡と同様に東平台地の分水嶺にあたる。大里村側では三階沼の谷から和田吉野川へと流れ込み、東松山市側では月野川、滑川、そして市野川へと流れ込む。検出された遺構は、先土器時代の黒曜石剥片と礫群のブロック1箇所、古墳時代前半の住居跡1軒、平安時代の住居跡1軒、奈良・平安時代頃の溝1条と円形土壙多数が検出されている。古墳群では、前方後円墳2基と円墳11基が検出されている。2基の前方後円墳のうち第1号墳は全長約40m、後円部径約32mを測り、後円部中央に凝灰岩質砂岩

の切石積みによる横穴式石室が検出され、石室内より耳環、鉄鏃等が出土している。また、後円部から括れ部にかけての周溝内より埴瓶7個体が出土している。第2号墳は、全長約36m、後円部径約24mを測り、後円部と前方部にそれぞれ石室跡1箇所が検出され、前方部石室より短刀1振、耳環、鉄鏃等が出土している。両古墳とも埴輪は出土していない。円墳跡の規模は径約14～27mを測り、古墳により埴輪を伴う古墳と伴わない古墳がある。石室は検出されていない。

船木遺跡 東平台地の先端部にあたり、「円山の谷」の開口部に位置する。遺跡の眼下には沖積地が広がる。調査以前は船木神社が祭られていた。検出された遺構は、縄文時代前期の黒浜式期の住居跡2軒、弥生時代中期の住居跡4軒、同方形周溝墓2基、礫床墓1基、後期吉ヶ谷式土器を出土する住居跡3軒、古墳時代前期から中期の住居跡49軒、同方形周溝墓9基、条濠溝2条、古墳時代後期古墳跡1基、奈良・平安時代の住居跡39軒、掘建柱建物跡2棟、土壌多数である。本遺跡では、弥生時代中期の住居跡から宮ノ台式土器とともに櫛描文系統の土器が出土しており、また、中部地方から群馬県西部にみられる礫床墓1基が検出されている。また、弥生時代から古墳時代前期にかけて台地を分断するように構築された条濠が2条ある。この時期、この条濠により台地北側と西側斜面を方形周溝墓群の墓域とし、南側を住居跡群による居住域とする様相を呈している。奈良・平安時代では、寺に関連すると思われる遺構が検出され、鉄釘や瓦破片等が出土するとともに土壌からは緑釉陶器と須恵器坏各1点が出土している。

船木下遺跡 本遺跡は、船木遺跡をのせる台地縁辺部下の沖積地に位置する。検出された遺構は、奈良・平安時代の溝1条と鎌倉時代の堀1条、土壌3基、時期不明の溝4条等が検出されている。堀とした溝は幅約2.6mを測り、断面形態は逆台形を呈する。この堀からの出土遺物は、青磁、常滑や渥美産の甕、碗形木製品等が出土している。また、本遺跡からは、船木遺跡と同時期の遺物が多量に出土しており、これらの遺物は船木遺跡からの流れ込みによるものと思われる。

Asuwano-higashi

阿諏訪野東遺跡

IV 阿諏訪野東遺跡の調査

1. 遺跡の概要

阿諏訪野東遺跡は東平台地の北部にあたり、和田吉野川の沖積地へ繋がる台地の先端部に位置する。遺跡は台地東側の「桜谷の谷」の開口部から分岐した開析谷が南に湾入し、その最奥部には東山遺跡が所在する。調査区の地形は、南西側から伸びた台地尾根が調査区で比較的平坦となり、遺構はこの面に構築される。調査面積 9,056m²で、基本的な層序はⅠ層表土、Ⅱ層褐色でソフト・ローム、Ⅲ層暗褐色でハード・ローム、Ⅳ層黄褐色の粘土、Ⅴ層灰白色の粘土である。

検出された遺構は、古墳跡 6 基、住居跡 6 軒、掘建柱建物跡 1 棟、井戸跡 1 基、溝 12 条、土壇 8 基、集石土壇 1 基である。6 基の古墳跡は、台地縁辺に沿って 4 基が占地し、更にその内側に 2 基が隣接して構築されている。全ての古墳は周溝をもつ円墳であり、規模は周溝内径で最大約 22m を測る第 1 号墳から最小で約 9 m の第 2 号墳までと規模の違いが認められる。墳丘はすべて開墾によってか削平されており、第 1 号墳では主体部に残っていた墳丘に対して幾度となく開墾による掘削が行われ、結果石室の根石と棺床面の一部が残るという状況であった。周溝の形態は円形とやや不整形を呈するものがあり、その形態は規模とともに差がある。また他の古墳を避けた周溝プランを示す第 1 号墳の存在からも時間差があることは確実である。

石室については、第 1、2 号墳で部分的に検出され、凝灰岩質砂岩の切石積みによる横穴式石室で第 1 号墳は胴張り状の単室構造と思われ、第 2 号墳は長方形若しくは羽子板状のプランと考えられる。第 3～6 号墳では、石室は残存せず幸うじて前庭部の一部が検出されたに過ぎない。また、第 4 号墳では周溝外へと伸びる墓道が検出され、第 1 号墳周溝脇には礫塚 1 基が検出されている。古墳からの出土遺物は、鉄鏃や提瓶が少量出土したに過ぎず、埴輪は認められなかった。

古墳時代後期の住居跡は、調査区東側で 5 軒がまとまって検出され、このうちの 2 軒は古墳により切られている。5 軒の住居跡の長軸方位は北東方向を示し、第 3 号住居跡には拡張の痕跡が認められた。いずれもカマドは確認されているが、第 4 号住居跡だけはカマドが南西壁に構築されている。

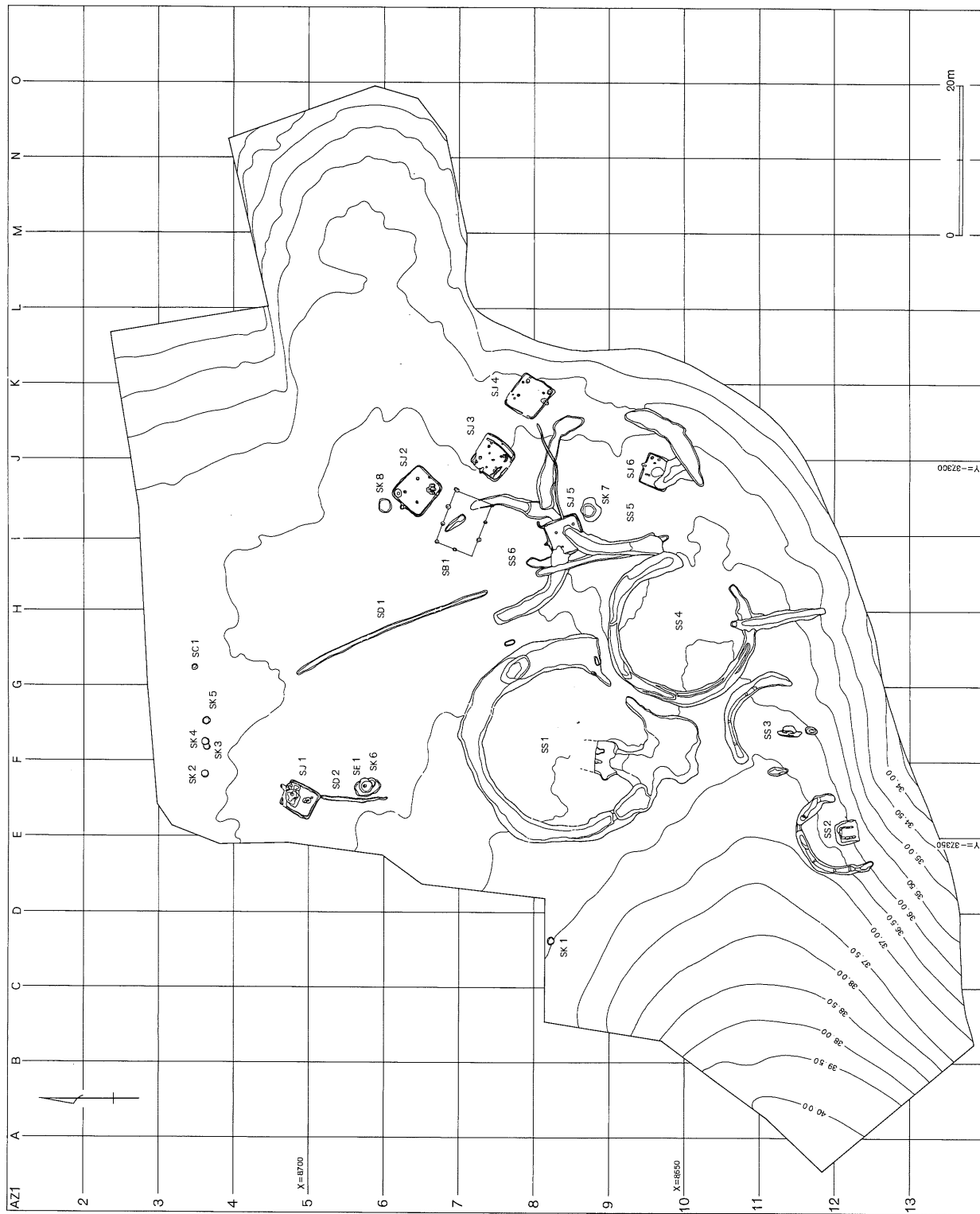
奈良時代の住居跡は、調査区北西側で 1 軒検出された。覆土は黒色系であり、古墳時代後期の住居跡とは覆土においても違いを見た。出土遺物は土師器、須恵器があり、須恵器坏は南比企産を中心としている。須恵器坏は住居跡覆土又は床面からの出土で、土師器甕はカマドからの出土であった。

掘建柱建物跡は調査区の中央に 2 間×3 間の規模で 1 棟検出された。出土遺物がないため詳細な時期は不明であるが第 6 号墳と重複することから第 2～6 号住居跡と同時期と考えられる。井戸跡は、調査区北西部に 1 基検出された。出土遺物は土師器破片を少量出土したものの詳細な時期は不明である。覆土の観察から奈良・平安時代と考えられる。溝は、第 1 号溝が調査区北側に点在する土壇群南より南北に走行し、第 5、6 号墳を切って南下する。本遺構も出土遺物がないため時期は不明であるが、第 1 号住居跡覆土と近似することから古代に属するものと思われる。土壇は 8 基検出され、縄文時代前期の土壇を除く 7 基の土壇は、調査区北端に 4 基、西端に 1 基、第 2 号住居跡北側に 1 基、第 1 号井戸と重複して 1 基が検出された。このうち第 3・4 号土壇間に重複が認められ、第 6 号土壇は井戸と重複する。出土遺物はやはりないため時期については断定できないが覆土の観察から古代に属するものと考えられる。この他、縄文時代の集石土壇 1 基と前期黒浜式期の土壇 1 基が検出された。

古墳群の範囲については、同じ台地で西へ約 200m の距離に円墳 1 基があり、また、南西約 200m 離れた同

じ台地尾根上に楓山古墳が所在する。この2基の古墳を含めた一帯を阿諏訪野古墳群の範囲とみることができよう。

古墳群と古墳時代後期の住居跡群との関係であるが、住居跡出土遺物の時期からして住居跡廃絶後、古墳の築造が開始されたものと考えられる。



第4図 阿諏訪野東遺跡全体図

2. 遺構と出土遺物

(1) 古墳跡

第1号墳 (第5～8図)

D～G-6～10 Grid に位置する。南西方向からのびた台地稜線は調査区南西側から次第に傾斜を緩やかにしながら調査区中央で平坦面となる。この平坦面へ移行する標高36.00～36.75mの緩斜面に占地する。古墳群のうち4基の古墳は台地縁辺部に沿って築造されるのに対し、本古墳と第6号墳はその北側に隣接して築造される。規模は周溝内径22.06m、外径27.94mで古墳群のなかでは最大規模の円墳である。

墳丘は削平されていたため確認されなかったものの石室の一部が検出された。石室は玄室棺床面と玄門、羨道部の根石の一部が残るだけで他の礫は耕作溝などの攪乱により根石まで抜き取られている。石室は残存部の状況から凝灰岩の切石積みによるものと考えられ、その形態は、側壁を失っているため明らかではないが、羨道部の幅と玄室棺床面の幅の比較から玄室部に膨らみをもつ胴張型の横穴式石室と考えられる。石室からの副葬品は見られなかった。主軸方位はS-13°-Wで南南西方向に開口するが、周溝の張出部とは対称にならない。

玄室の棺床面は、掘り方より15cm程の高さに認められ、10～20cm程度の礫が使用されている。幅は1.7mを測る。また、玄室西側の棺床面には間仕切りとして使用された長さ48cm、幅8cm、高さ22cmの緑泥片岩が埋め込まれている。玄門部の西側袖石として、長さ35cm、幅18cm、高さ11cmの凝灰岩が用いられている。掘り方は幅4.2mを測るが、掘り込みは極めて浅く皿状を呈している。裏込めにはロームブロックが観察された。

羨道部は、西側の根石と礫床が一部残っている。羨道部の長さは不明であるが、前庭部からの掘り込みが玄門近くまで施されていることから、比較的短いと考えられる。幅は約1.2m前後であろう。

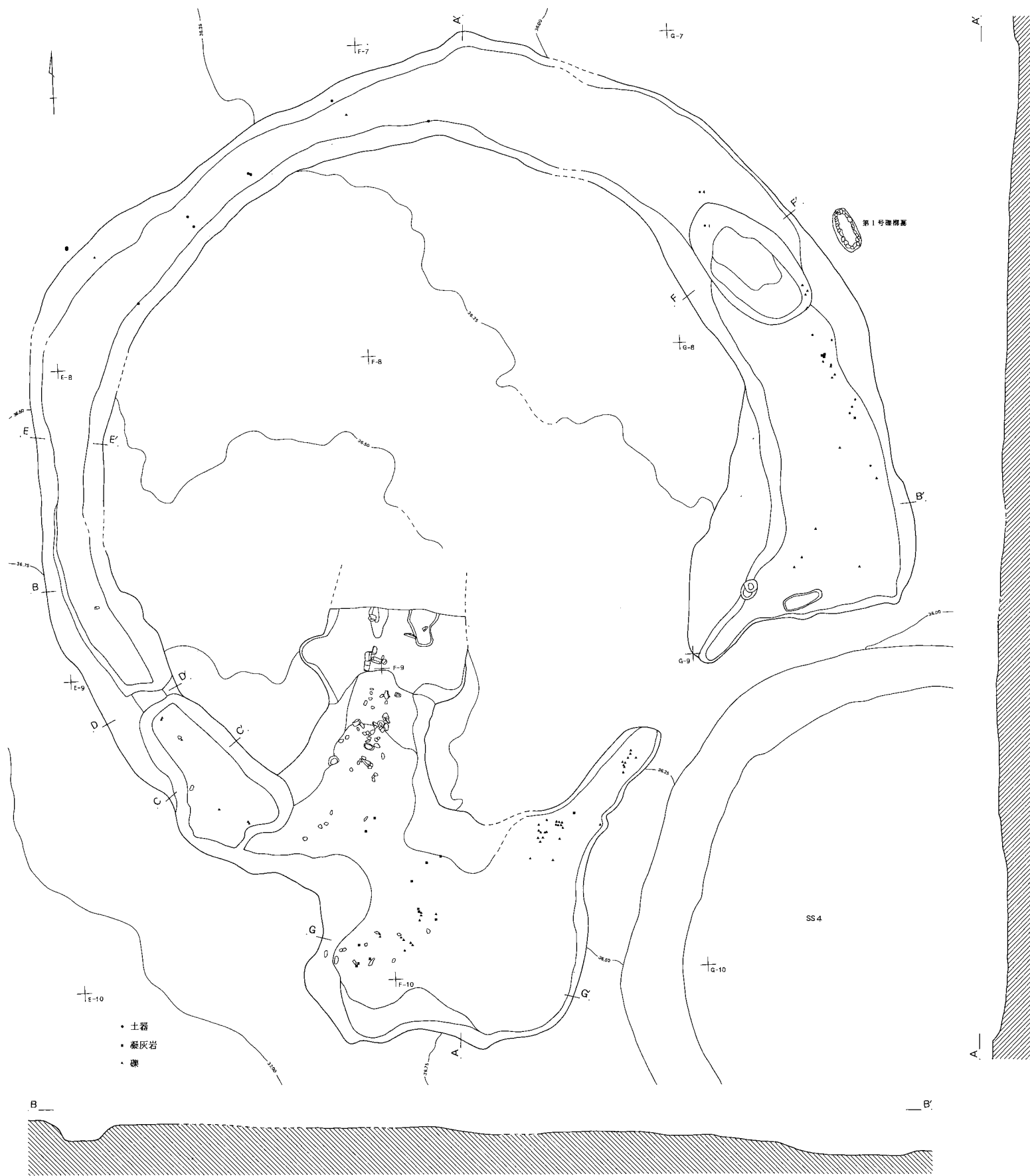
前庭部付近では、覆土中層から下層にかけて22～37cm程の凝灰岩の大形石材や緑泥片岩の板状石数点が散在するように出土している。前庭部は周溝に向け「ハ」の字状に開き、規模は、羨道部側で幅1.8mを測り、羨道部に向け立ち上がる。開口部は幅4.45mで、比較的平坦な面を持つ。

本古墳の墳丘部は円形を呈しているが、周溝南側に張り出し部を持ち、また、南東側に位置する第4号墳との隣接箇所にブリッジをもつ。周溝は幅2.1～6.65mで西側から北西側にかけて狭く東側へ移るにつれ幅広くなる。深さは北側が浅く、南側が深い傾向で最深部で76cmを測る。周溝北東側で所謂溝中土壌が検出され、形態は楕円形を呈し、規模は長径4.7m、短径2.25mで深さは周溝底面より67cmを測り、粘土層まで達している。張り出し部は、墳丘部側から7.2m、幅9.1m、深さ20～73cmを測り、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。覆土からは凝灰岩の破片や拳大の礫が出土している。ブリッジが位置する南東側の周溝外径面は、第4号墳に規制を受け周溝はその幅を狭め、尚且つ第4号墳の周溝に沿って掘削したのち幅2.6mのブリッジへ移行する。東側周溝端部底面より深さ33cmのピット1基と浅い掘り込みが検出されている。

出土遺物は周溝覆土中からのものである。1は須恵器横瓶の胴部とみられ、溝中土壌の覆土中層から出土した。2は須恵器甕の胴部であり、周溝南西から出土した。3は土師器坏で周溝北側より出土した。4は須恵器坏で周溝北東部の溝中土壌付近の覆土上層から出土している。

第1号墳出土遺物 (第8図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	横瓶 須恵器	—	胴部外面はロクロ回転によるカキ目の器面調整を施す。内面は不定方向のナデを重ねる。	BEF・灰褐色 ・A	10%



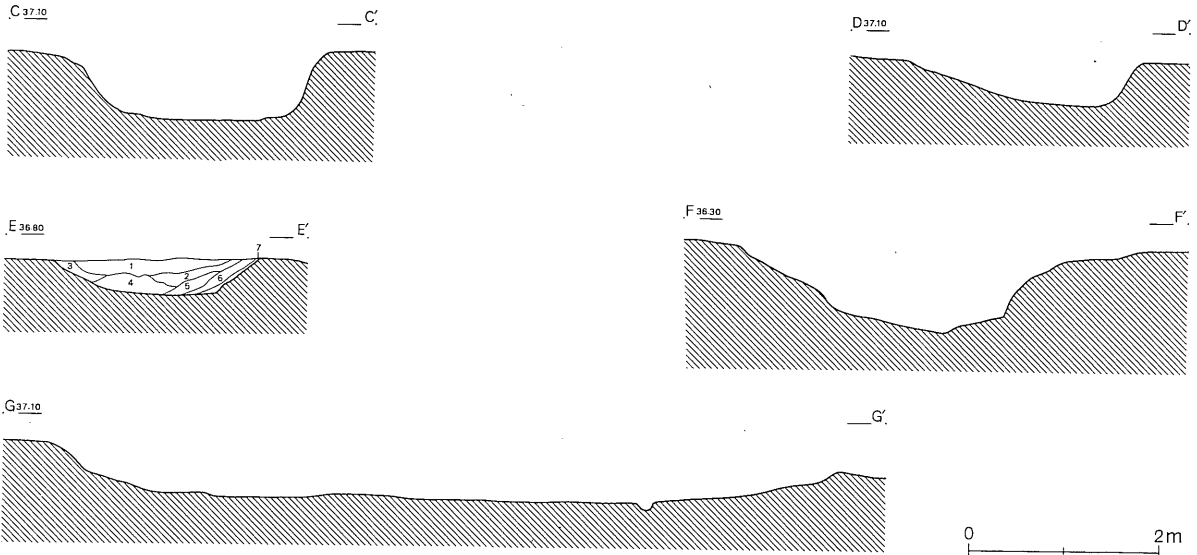
第5図 第1号墳 (L=37.10m)



第6図 第1号墳石室 (L=37.00m)

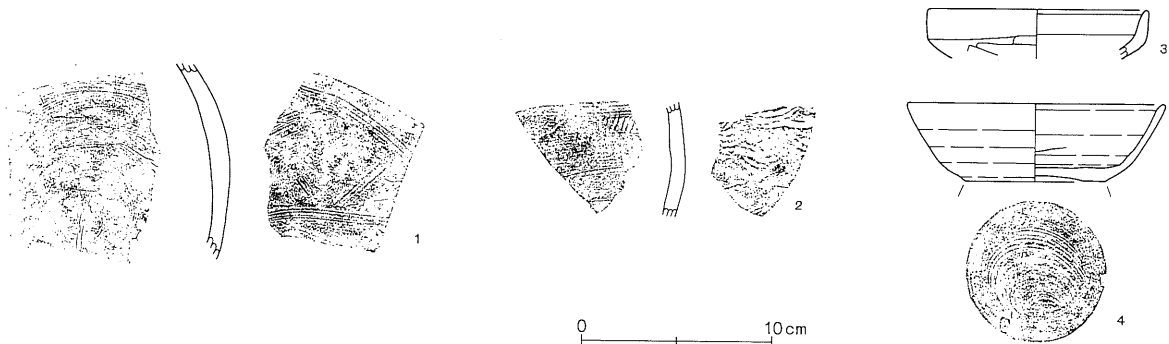
第1号墳石室

- | | | | |
|--------|--------------------------|---------|---------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒少量混入、粘性、しまり弱 | 6 黒色土 | ローム粒少量混入、粘性、しまり強 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒多量混入、凝灰岩質砂岩剥片少量混入 | 7 黒褐色土 | ロームブロック少量混入、しまりやや弱 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒少量混入、凝灰岩質砂岩剥片含む | 8 黒褐色土 | ローム粒多量混入、凝灰岩質砂岩剥片含む |
| 4 黒色土 | 黒色土粒を主とし、粘性、しまりやや強 | 9 褐色土 | ロームブロック多量混入 |
| 5 黒褐色土 | 粗い黒色土粒を主とし、微量の凝灰岩質砂岩剥片含む | 10 暗褐色土 | ロームブロック少量混入 |
| | | 11 褐色土 | ロームブロック多量混入、粘性、しまり強 |



- | | | | |
|--------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 黒色土 | 粗い黒色土を主とし、粘性、しまり弱 | 5 暗褐色土 | ロームブロック少量混入 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒少量混入 | 6 褐色土 | ロームブロック多量混入 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒多量混入、粘性弱 | 7 褐色土 | ロームブロック多量混入、粘性、しまり強 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒少量混入、粘性やや強、しまり弱 | | |

第7図 第1号墳周溝断面図



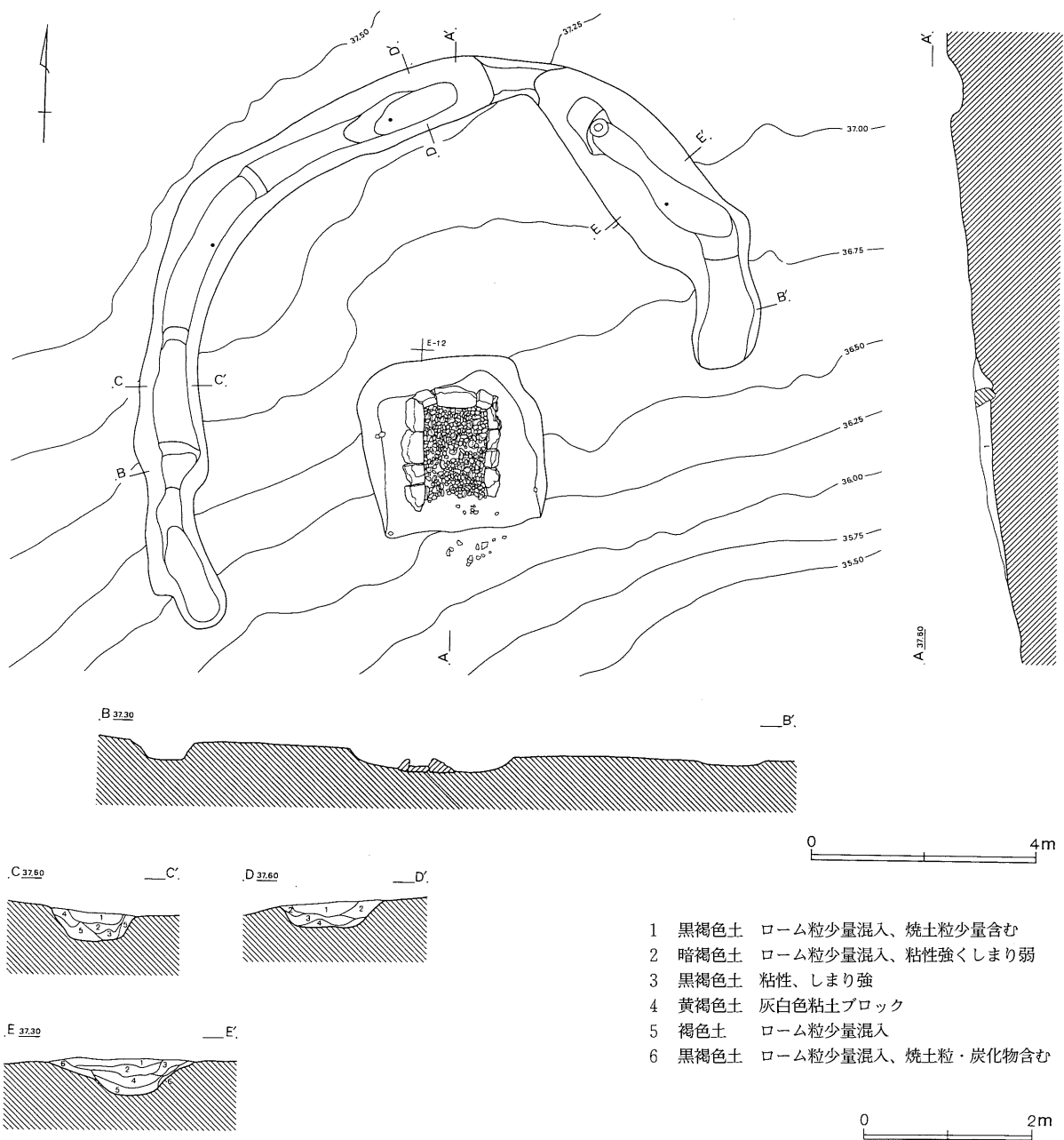
第8図 第1号墳出土遺物

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
2	甕 須恵器	—	成形は外面を平行線状の叩き板、内面を同心円文の当て板で成形。外面の調整は、横方向のカキ目を間隔をおいて施され、内面はカキ目と同じ横方向に篋ナデがみられる。	B E F・灰褐色 ・A	5%
3	坏	口径 11.4 器高 (2.5)	口縁部は短く外反ぎみに上方へ立ち上がる。口唇部は比較的尖る。体部との境の稜は低く鈍い。口縁部の内・外面にはヨコナデ。底部外面篋ケズリ。内面・口縁外面赤彩	B C D F・橙 ・B	10%
4	坏 須恵器	口径 13.5 器高 4.0 底径 7.4	口縁部が直線的に立ち上がる。ロクロ調整。底部外面は回転糸切り後周縁篋ケズリ。	A B E F・灰色 ・A	40%

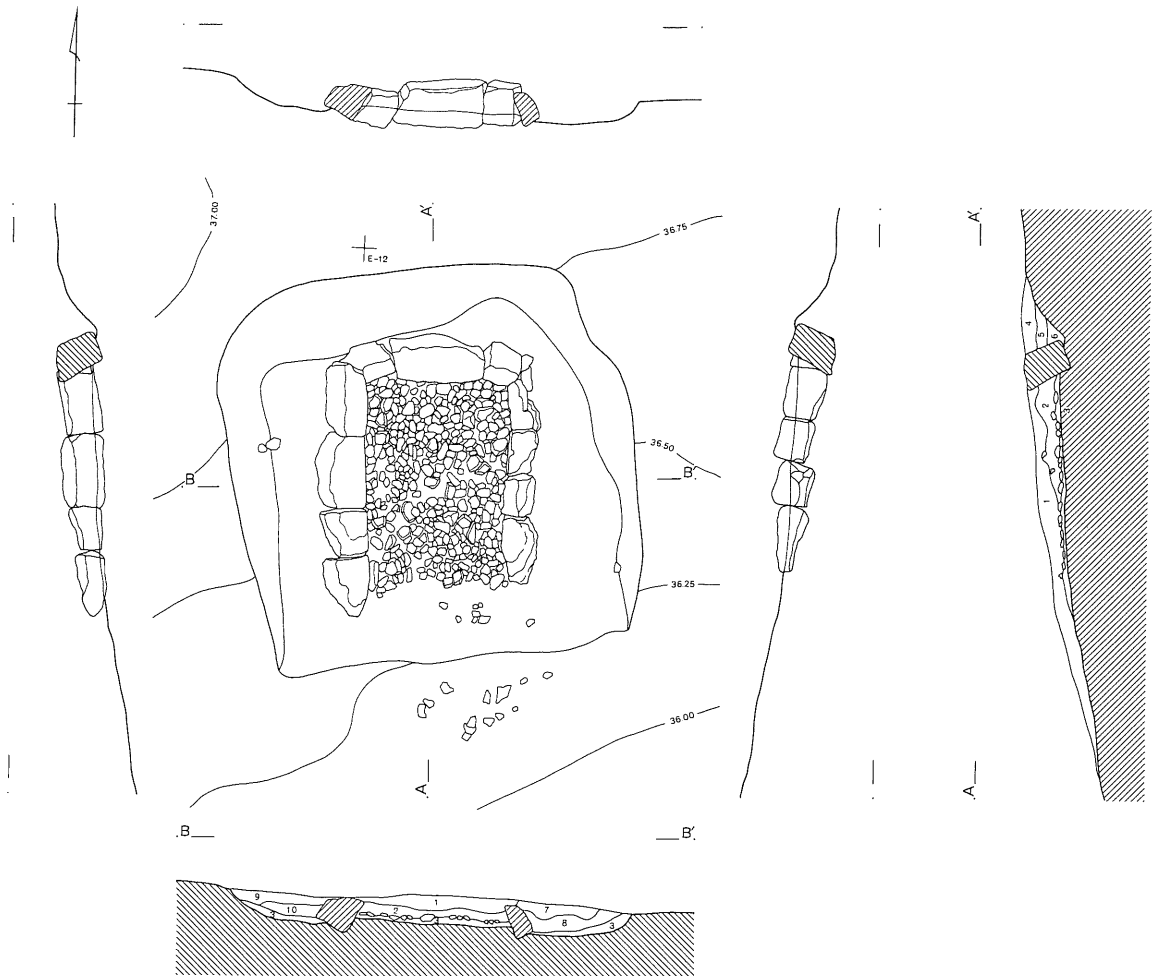
第2号墳 (第9～10図)

D、E-11、12 Grid に位置する。東より入り込む開析谷を臨む標高36～37.50mライン上の斜面部に占地し、古墳群のなかで最西端に位置する。第1号墳から南西に約14m離れ、東側に隣接する第3号墳とは約5mの距離を持つ。規模は周溝内径9.1m、外径11.62mを測り、古墳群中で最小規模の円墳である。墳丘は削平を受け確認されなかったが、主体部は斜面に構築されたことにより石室の一部が検出された。

石室は凝灰岩質の切石積みによる横穴式石室で、玄門部より前は削平などにより欠失しているが、奥壁と側壁の基底部1段が確認されている。玄室の規模は、全長2.23m、奥壁幅1.21m、玄室前幅1.15mで、谷に向け開口する。主軸方位はS-1°-Wで、長方形に近いプランである。奥壁中央に据えられた凝灰岩は、長さ72cm、厚さ33cm、高さ32cmと幅広で台形状をなすものを使用し、内側へ内傾するように据え置かれている。その両側の切石は小形で側壁との間に面を持つように据え置かれている。この奥壁両側の切石により奥



第9図 第2号墳



- | | | | |
|--------|-------------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 褐色土 | ローム粒多量混入、凝灰岩質砂岩剥片多量含む | 6 黒褐色土 | ローム粒少量混入、粘性強、しまりやや弱 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック少量混入、凝灰岩質砂岩剥片少量含む | 7 黒褐色土 | ローム粒多量混入、凝灰岩質砂岩剥片多量含む |
| 3 褐色土 | ロームブロック少量混入、粘性、しまり強 | 8 褐色土 | ロームブロック少量混入、底面に凝灰岩質砂岩剥片少量混入 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒少量混入、粘性、しまりやや強 | 9 黄褐色土 | ロームブロック多量混入、灰白色粘土粒少量混入 |
| 5 褐色土 | ローム粒少量混入、凝灰岩質砂岩剥片少量含む、粘性、しまり強 | 10 黄褐色土 | ロームブロック多量混入、灰白色粘土ブロック多量混入 |

0 2m

第10図 第2号墳石室 (L=37.10m)

壁の平面プランは僅かに膨らみをもつ形状が観察される。側壁も奥壁と同様に内傾して据え置かれている。壁面には手斧状痕が明瞭に残り、外側にあたる面では粗雑な成形である。棺床面は礫の分布状態から僅かに攪乱を受けてはいるが、全体的に10cm程度の拳大からそれ以下の礫が敷きつめられている。使用された礫は偏平な礫を選択したものではない。掘り方は隅丸方形を呈し、規模は長軸3.10m、短軸3.16mを測る。裏ごめには凝灰岩屑や粘土ブロックを含む暗褐色土を基本とし叩きしめられていた。

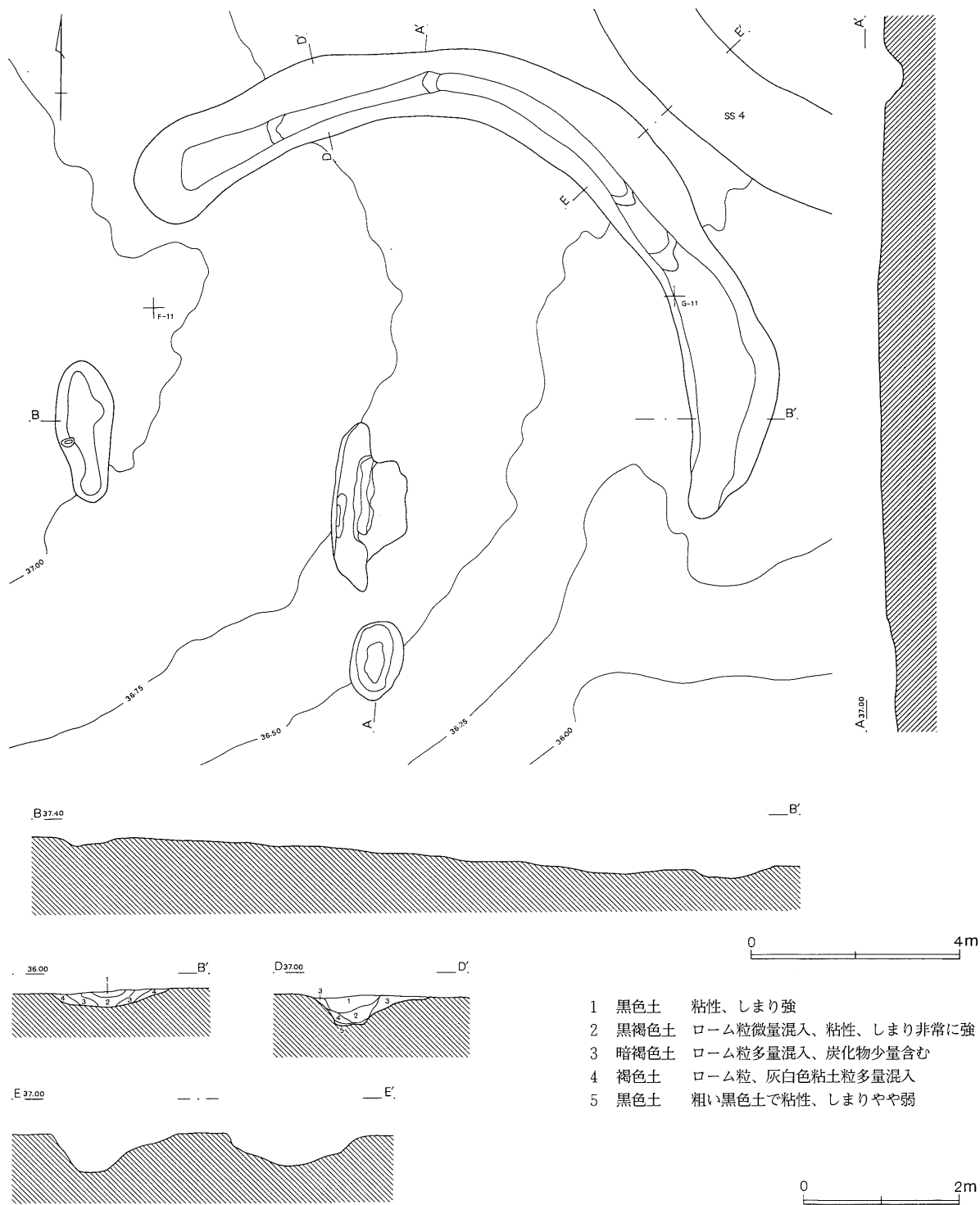
周溝は台地斜面上部で半周し、石室より前は急な斜面に移行するためか検出されなかった。石室の西から北にかけては弧を描き、奥壁の北東方向で周溝は一端浅くなりブリッジ状を呈する。また、この箇所では周溝は弱く屈曲するが、周溝底面のラインは西側と同様に整った弧を描き、円形プランになっている。周溝底面はブリッジ状の両側で深く、南側へ移行するにつれ段を持ちながら次第に浅くなる。東側周溝内より土師器の細破片と焼土粒・炭化物を含む層を検出している。

出土遺物は、平安時代の小形台付甕脚部の細破片だけである。

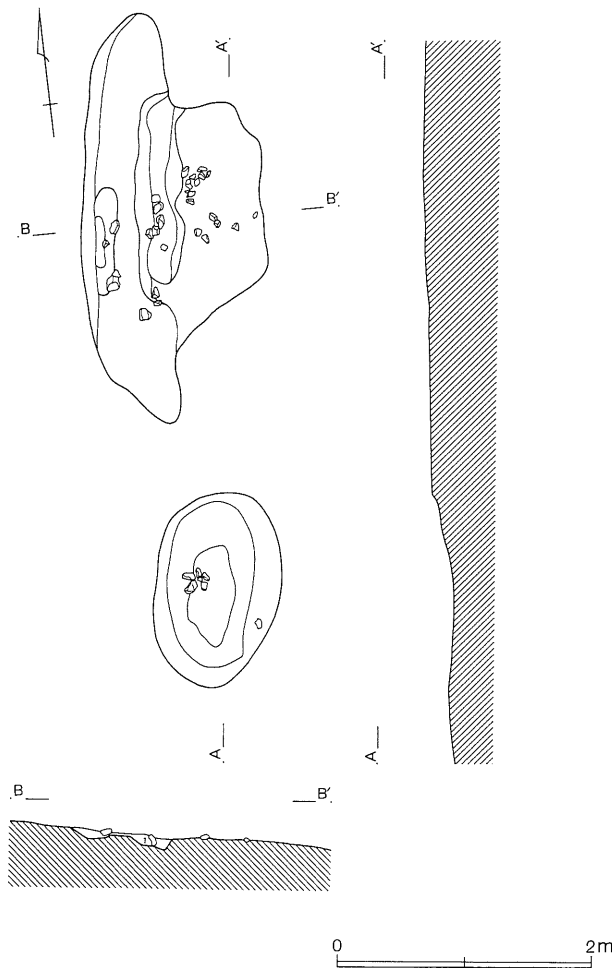
第3号墳 (第11~12図)

E~G-10、11Grid に位置する。台地尾根から平坦面に移行する緩斜面部に占地し、標高37m前後を測る。本古墳の北へ約3.3mの距離に第1号墳があり、東へ約1.6mの距離に第4号墳が隣接する。周溝の規模は周溝内径で11.13m、外径13.97mを測る円墳である。墳丘は削平されていたため検出されなかつたが、墳丘内部では遺構確認面とほぼ同じレベルで石室の一部と考えられる掘り込みと凝灰岩片や礫が検出された。

石室の掘り込みと判断された遺構は、西側に辺を持つ不整な形態を呈し、長軸3.25m、短軸1.47mで中央に南北方向を示す幅38cmの溝状の落ち込み面が検出されている。この溝状の落ち込みは底面が内側に傾斜し



第11図 第3号墳



第12図 第3号墳石室 (L=37.30m)

最大深さ0.57mで溝底面は粘土層に達し、第1号墳から第4号墳に面する周溝底面が特に深く掘られている。西側の溝は幅3.12mの断続部のうち主体部西側に土壌状の短い周溝が掘られる。遺物は周溝から凝灰岩小破片が数点出土しているだけである。

第4号墳 (第13～15図)

F～H-8～11Gridで、台地肩部から緩斜面部にかけて占地し標高35.50～36.50mラインを測る。古墳群のほぼ中央に位置する円墳で、南側周溝より更に南へ9.63m延びる墓道を検出している。北西約1mに近接して第1号墳があり、東側は第5号墳と周溝の一部を接する。墳丘、主体部とも削平され遺存しない。

古墳の規模は周溝内径で16.08m、外径20.74mでほぼ整円形に巡り、南東側で幅9.59mのブリッジをもつ。周溝の幅は1.36～2.78m、深さ11～66cmと差があり、東側から北側にかけては特に深く整った底面になっている。一方西側から南側にかけては、墳丘袖を取り巻くように更に一段深く掘り込まれ、底面は凹凸をなしている。周溝南西側の覆土では、平瓶 (第15図1) とともに焼土・炭化物・粘土ブロック・凝灰岩細片を含む層が確認された。

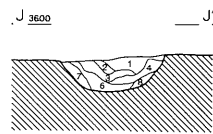
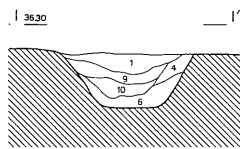
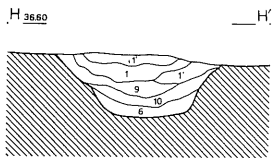
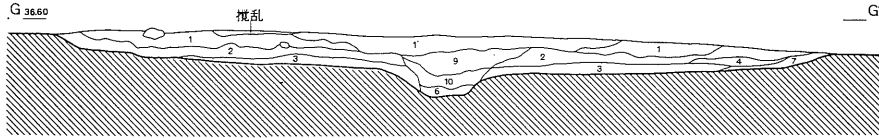
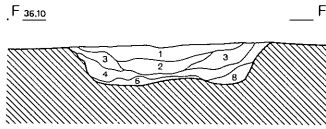
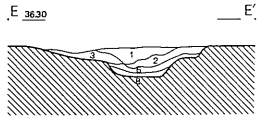
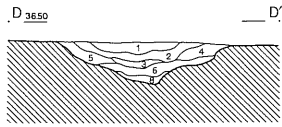
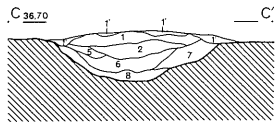
本古墳の周溝には、周溝と直交する溝が検出され、確認当初よりその関連について注意を払った調査を行った。その結果、土層の観察から切り合うかのような土層堆積が見られたが、周溝西側の粘土ブロックや凝灰岩細片を含む層と周溝覆土とが近似する状況が窺えた。また、第15図2の平瓶の接合関係が比較的至近距離にあり、南側周溝覆土と同様に本溝からも多くの土師器細片が出土したことなどから本古墳に伴う墓道として判断した。墓道は周溝内径面から墳丘部側へ1.2m程傾斜しながら掘り込まれ、周溝との交差箇所以最

ていることから石室の根石の置かれた位置とみることができる。出土した凝灰岩と礫はかなり移動しており、凝灰岩も小さく砕かれた状態になってはいるが石室壁の石材として、礫は棺床面の礫床として使用されたものと考えられる。また、本遺構の南約0.6mに楕円形を呈する長径1.62m、短径1.11mの土壌状の掘り込みが検出されている。土層の観察から攪乱によるものではなく、覆土中から凝灰岩片と礫が数点出土することから石室に関連する前庭部施設の一部と考えられる。このように検出された遺構の状況では石室の規模や形態において不明な点も多いが他の古墳と同じ石材を出土していることから横穴式石室であったと思われ、主軸方向も南側の土壌状の掘り込みを前庭部などの遺構と考えると南北正方位よりやや東にふれる主軸であると考えることができる。

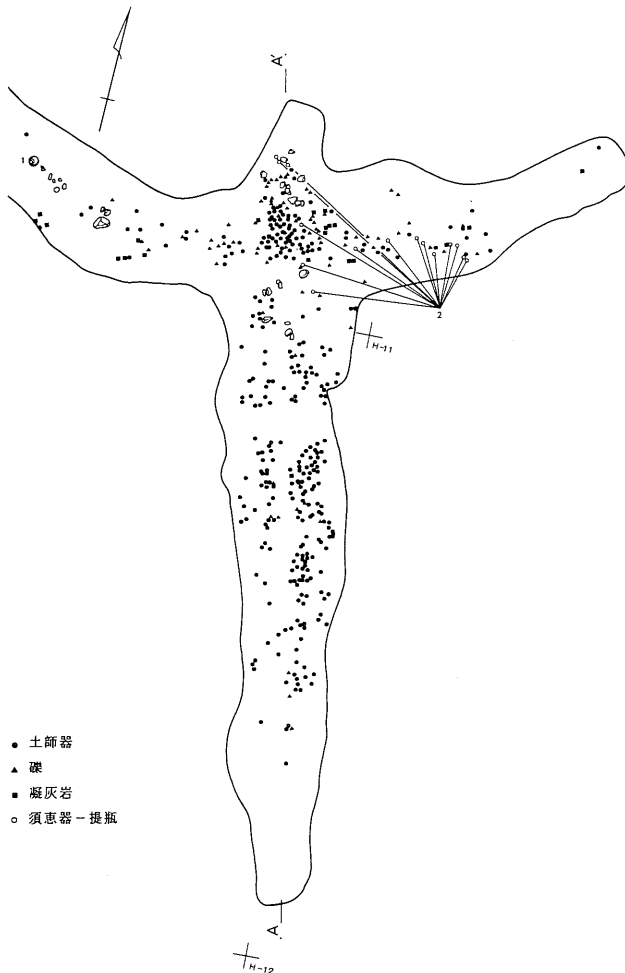
周溝は2箇所で見出され、北東側の周溝は北から東にかけて整った半円形プランであり外径面の立ち上がりは比較的緩やかであるが内径面は立ち上がりが直線的である。幅1.22～1.82m、



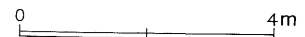
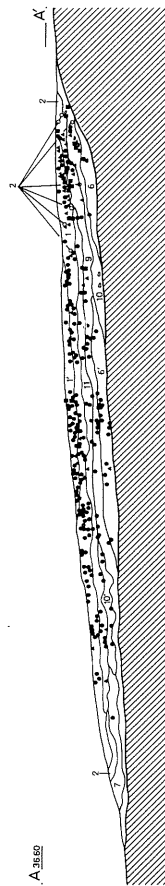
第13図 第4号墳 (L=36.70m)



- 1 黒色土 ローム粒微量混入、粘性強、しまり普通
- 2 黒褐色土 ローム粒少量混入、下面はひ水化。粘性、しまり強
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量混入
- 4 暗褐色土 ローム粒多量混入、ひ水化。
- 5 褐色土 ロームブロック
- 6 暗褐色土 ローム粒多量、灰白色粘土粒多量混入
- 7 褐色土 ロームブロック少量混入
- 8 黄褐色土 灰白色粘土粒少量混入、粘性強
- 9 黄褐色土 灰白色粘土粒多量混入、粘性強
- 10 褐色土 ローム粒、灰白色粘土粒少量混入
- 11 黄褐色土 灰白色粘土粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む



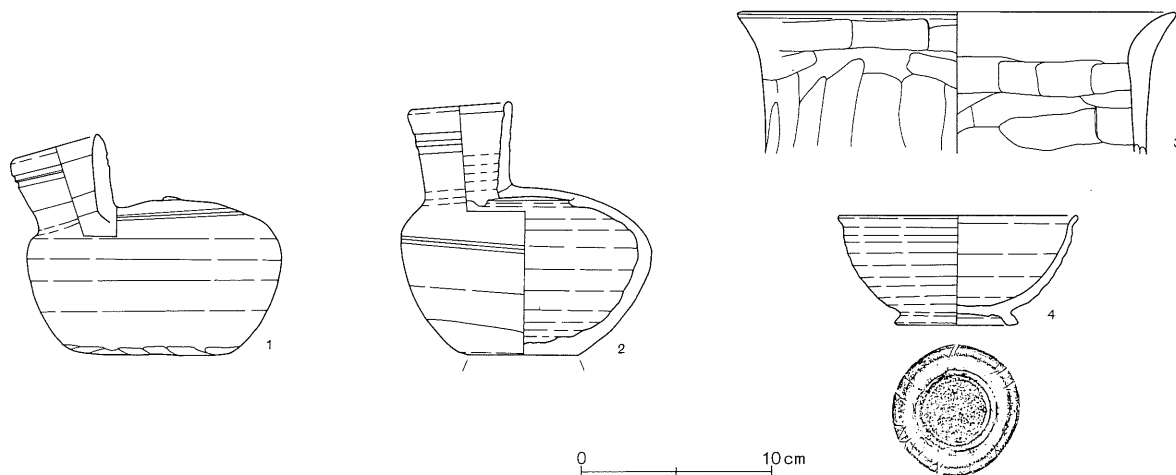
- 土師器
- ▲ 礎
- 凝灰岩
- 須恵器-提瓶



第14図 第4号墳周溝断面図

大深度を持ち、斜面部へ移行するにつれ浅くなる。全長12.78m、幅0.93~1.86m、深さは最大63cmである。断面形は逆台形を呈し、壁面は直線的に立ち上がる。底面は平坦で幅0.6~0.80mである。溝北側底面からは20cm前後の凝灰岩片が十数点出土し、覆土上層から中層にかけて平瓶をはじめ土師器細片が多量に出土した。また、覆土中層から下層にかけて凝灰岩の細破片とともに粘土ブロックを含む層を検出している。

出土遺物では、周溝南西側と墓道から平瓶2点、土師器甕、甑等が出土し、また、北東側周溝の覆土中層から完形の須恵器坏1点が出土している。



第15図 第4号墳出土遺物

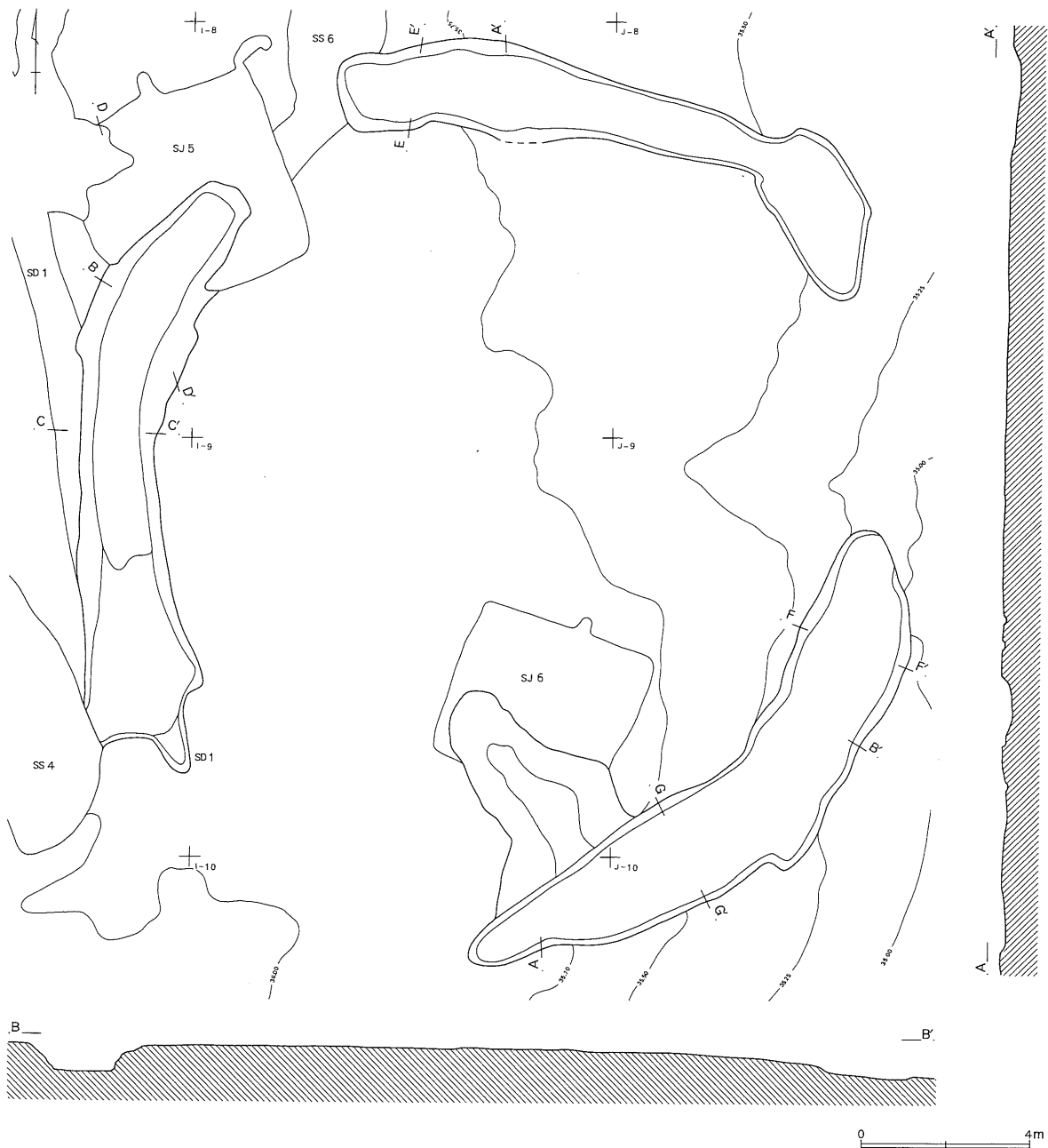
第4号墳出土遺物(第15図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	平瓶 須恵器	口径 4.5 胴径 13.2 器高 11.5 底径 8.2	頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口唇部はやや内側へ丸みをもつ。口縁部内面に巻き上げ状痕が見られ、口縁部下には2条の沈線が巡る。天井部は丸く膨らみ、その中央に偏平な丸いボタン状の貼付している。肩部は明瞭な稜をなす。 成形段階の天井部蓋に対し、接合強化としてヘラ状工具によるキザミ状の押さえつけ痕を残し、その後天井部にロクロ回転によるカキ目の調整を施す。体部はロクロ回転によるヨコナデ。底部は手持ち筥ケズリ。在地産	B E F ・ 灰色 / 灰白色 ・ B	100 %
2	平瓶 須恵器	口径 5.2 胴径 13.0 器高 13.3 底径 5.7	口縁部の下半は直線的に、上半は若干開きぎみに立ち上がり口唇部は丸い。口縁部内面に弱い段をもち、口縁部下には2条の沈線が施される。天井部は丸く膨らみ、肩部は明瞭な稜をなす。肩部下に弱い沈線が施す。 天井部の成形がなされた段階で口縁部嵌挿箇所を開口する。その後別個にロクロ成形され口縁部を装着する。底部は回転筥ケズリと体部下端にも回転筥ケズリ。口縁部から天井部にかけて自然釉がかかる。湖西産。	B C E F ・ 灰紫色 ・ A	70 %
3	甑	口径 22.8	口縁部短く肥厚し大きく開く。胴部は張らずに直線的である。口縁部は筥ナデ、胴部は下へ筥ケズリ、口縁部内面はヨコナデ、胴部内面は丁寧な筥ケズリ。	B C D F ・ 赤褐色 ・ B	20 %
4	高台碗 須恵器	口径 12.4 器高 5.7 底部 6.4	体部は丸みをもちながら外反ぎみに立ち上がり、口唇部は丸く外反する。底部は回転糸切り離した後、「ハ」の字に開く高台を貼付ける。ロクロ整形による凹凸が顕著。末野産。	B C F G ・ 薄青灰色 ・ A	60 %

第5号墳 (第16～19図)

H～J-8～10Grid に位置する。標高35.50m前後の台地の平坦面から台地東側の縁辺部に占地し、古墳群のなかで最東端に位置する。北側の周溝は第6号墳の周溝と一部重複し、第5住居跡を切って構築されている。また、前庭部と第6号住居跡とが重複し、墳丘内に縄文時代前期の土壌を内包した状態で検出された。墳丘は削平により確認されなかったが、墳丘部南東側に前庭部の一部が検出された。古墳の規模は周溝内径で16.63m、外径21.23mを測る円墳である。

前庭部の一部とした掘り込みの規模は、長さ4.18m、幅2.73～4.21m、深さ24cmで、周溝に移行するにつれ次第に幅が広がり、底面は周溝に向け緩やかな傾斜を示している。確認面や覆土中からは凝灰岩片や棺床面に使用されたと思われる礫が散在している。長軸方位は南東方向を示し、周溝内径面とほぼ直交すること

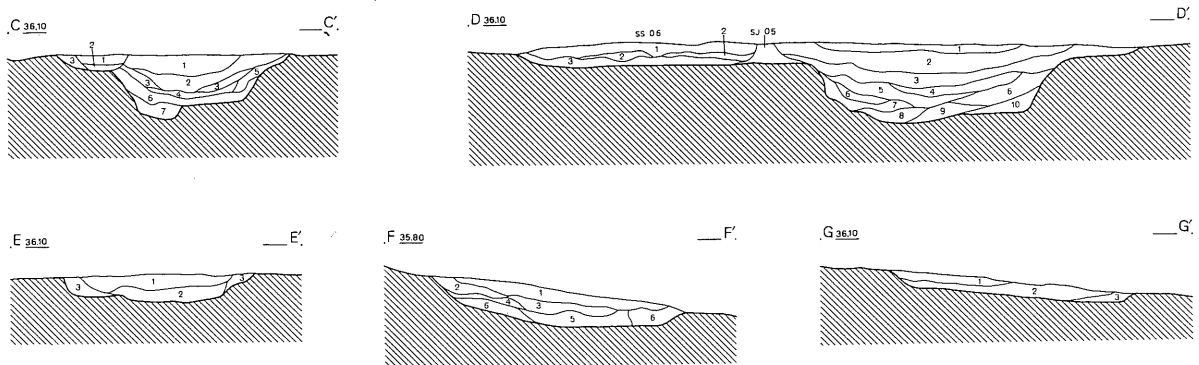


第16図 第5号墳 (L=36.10m)

から主体部の主軸も同様な方位を指すものと考えられる。

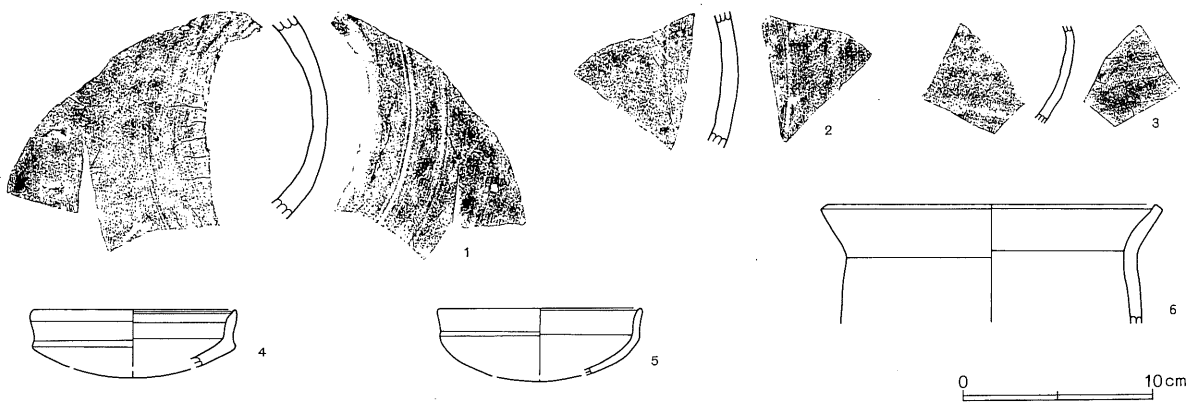
周溝は、断続しながらほぼ円形にめぐり、北側、南西側、東側の3箇所にブリッジを持つ。北側周溝の幅は0.92~2.38m、深さ10~21cmと浅い。南東側の周溝は、幅2.25~2.75m、深さ6~26cmを測り、立ち上がりは外側が傾斜地にあたるため曖昧である。西側周溝は幅2.27m、深さ63cmを測り、断面形は逆台形を呈する。周溝が最も深く掘られ粘土層まで達している。西側周溝には、第4号墳周溝との重なりがみられるが、土層厚が極めて薄いため新旧関係の観察は出来なかった。第1号溝との重複関係は、土層の観察から周溝埋没後に掘られたものであり、溝は周溝南端の先まで及んでいる。

出土遺物は、周溝内より提瓶や平瓶の破片と土師器坏、長甕等の出土がみられた。

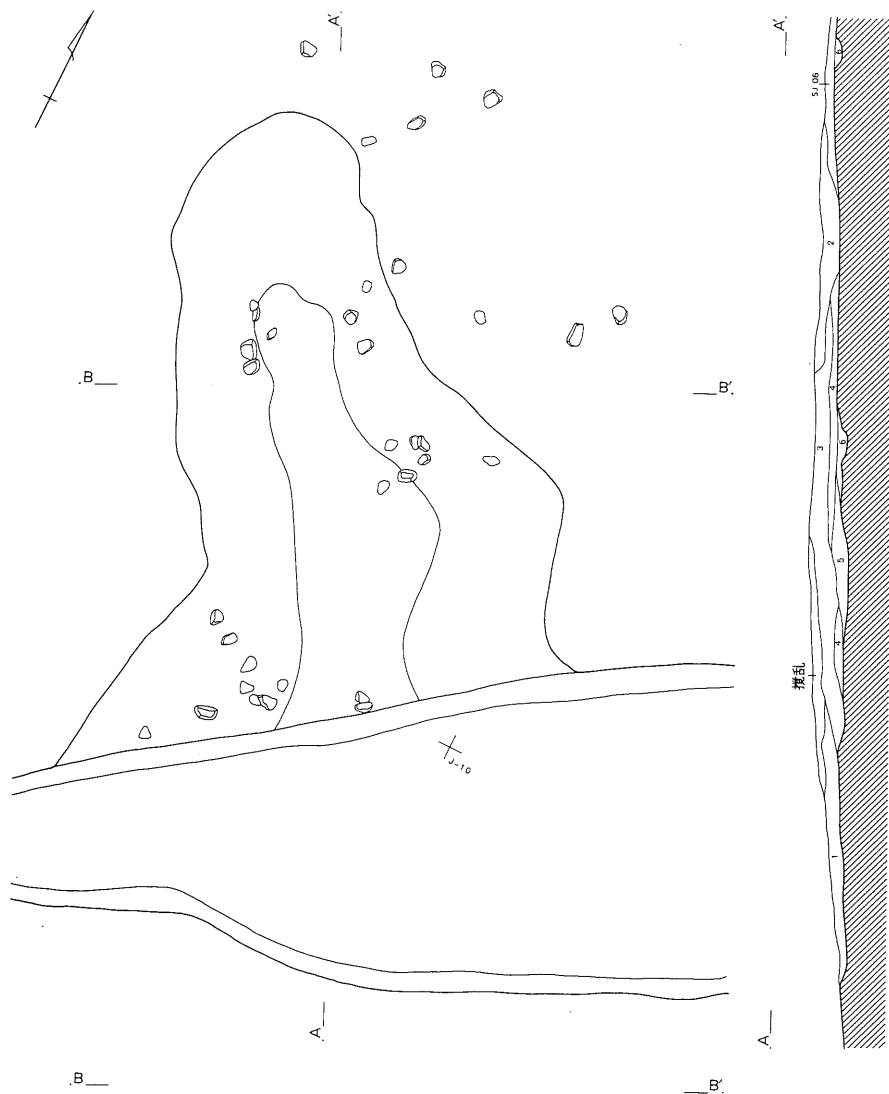


- | | | | |
|--------|----------------------|---------|-----------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒少量混入、黒色土粒細かい | 6 黒褐色土 | 粗いローム粒少量混入、粘性強 |
| 2 黒色土 | 細かい黒色土粒を主とし、ローム粒少量混入 | 7 暗褐色土 | 粗いローム粒多量混入、しまり強 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒多量混入 | 8 暗褐色土 | 粗いローム粒多量混入、ザラつく |
| 4 暗褐色土 | ローム粒少量混入、炭化物少量含む | 9 黒褐色土 | 細かい黒色土粒多量混入、粘性強 |
| 5 褐色土 | 粗いローム粒多量混入 | 10 黒褐色土 | ロームブロック多量混入、粘性強 |

第17図 第5号墳周溝断面図



第18図 第5号墳出土遺物



- 1 褐色土 灰白色粘土ブロック多量、凝灰岩質砂岩片多量混入
- 2 暗褐色土 ロームブロック、凝灰岩質砂岩片多量混入、礫床の礫混入
- 3 黒褐色土 ローム粒少量混入、凝灰岩質砂岩片少量混入、
- 4 褐色土 ロームブロック、灰白色粘土ブロック少量混入
- 5 暗褐色土 凝灰岩質砂岩片少量混入
- 6 暗褐色土 ローム粒多量混入

第19図 第5号墳前庭部 (L=36.20m)

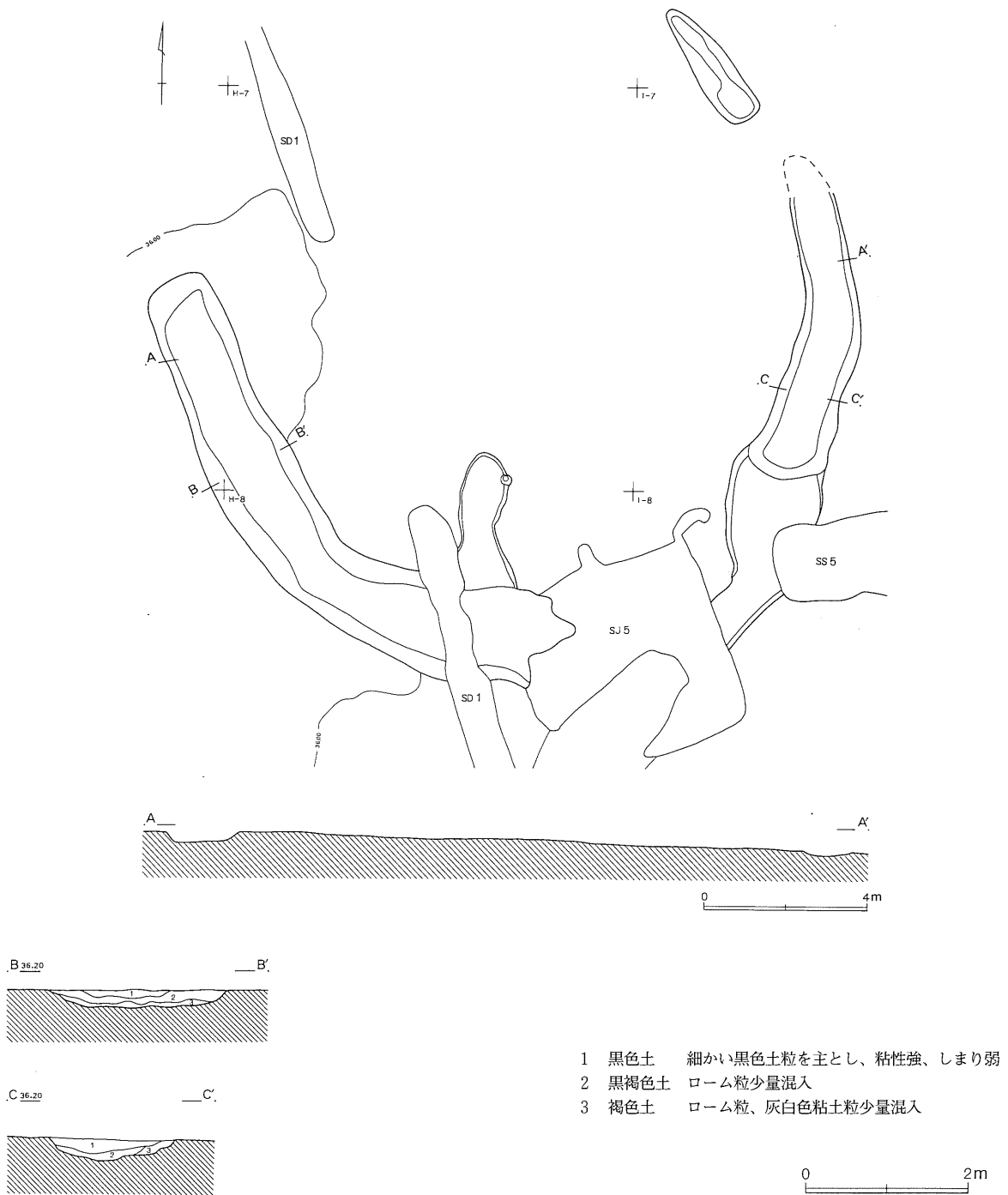
第5号墳出土遺物 (第18図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1・2	提瓶 須恵器	—	体部は円形を呈する。体部中央に把手を貼付た痕跡がみられるが、輪状をなすものではなく、三角形に近いものを貼付たと推測される。 成形段階でのロクロ上に置かれるが粘土円板は極めて薄い。タタキ痕が残り、体部外面下部は筥ナデ。内面はナデ調整。在地産。	B F ・ 青灰色 ・ A	10%
3	平瓶 須恵器	—	肩部で稜が明確である。内外面ともナデ調整で外面肩部に自然釉。湖西産。	B C F ・ 灰色 ・ A	5%
4	坏	口径 10.6	体部と口縁部とを画する稜は明瞭で、口縁部はやや外反ぎみに立ち上がる。口唇部内側に浅い1条の沈線が廻る。口縁部の内・外面はヨコナデ。体部内面ヨコナデ、外面ヨコケズリ。口縁部の外面と内面全体に赤彩。	B D F ・ 橙 ・ B	10%
5	坏	口径 (10.6) 器高 (3.9)	体部は丸みをもち、体部と口縁部との境の稜は低く鈍い。口縁部は短くやや外反しながら立ち上がる。器面の剥落が著しい。	B E F ・ 橙 ・ C	20%

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
6	甕	口径 (17.2)	粘土紐積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反し、口唇部に浅い凹線をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面タテケズリ。	BFG・橙褐色 ・C	10%

第6号墳 (第20~22図)

H~I-6~8 Grid に位置する。標高35.50mを測る台地平坦部に占地する。古墳群のうち、第2~5号墳は台地縁辺に沿って占地するのに対し本古墳と第1号墳は平坦面のやや内側に位置している。西側約3.5



第20図 第6号墳 (L=36.30m)

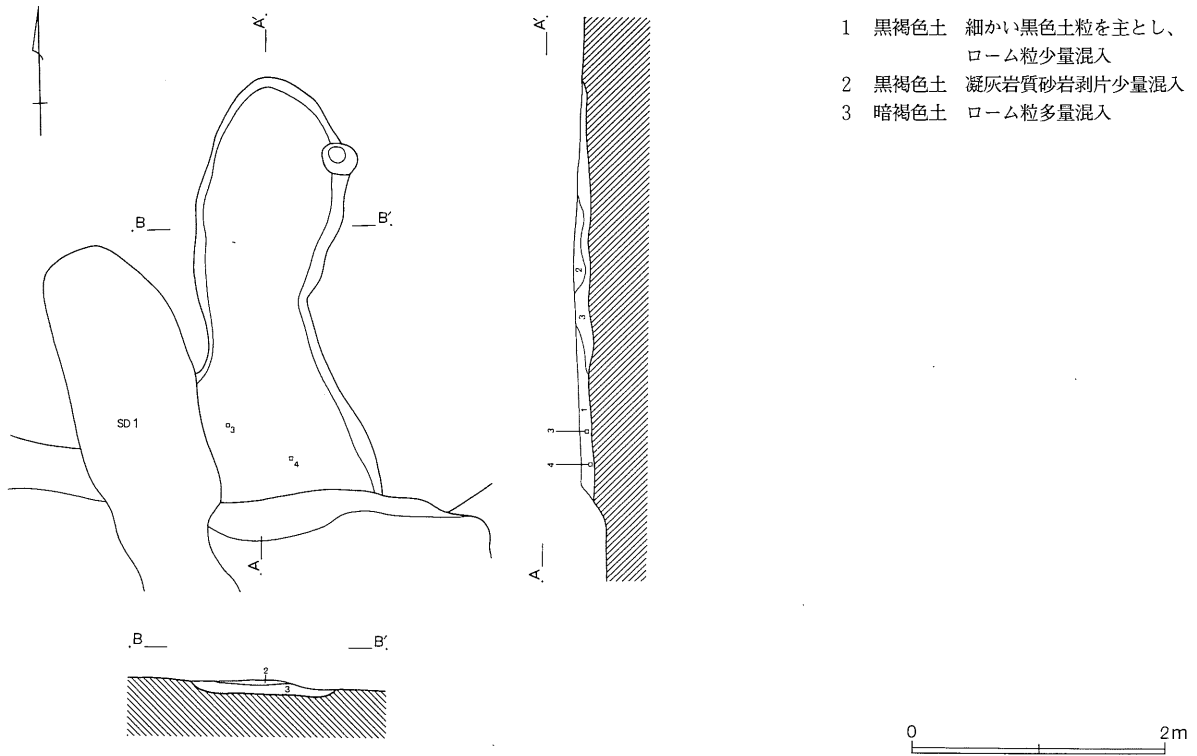
mの距離に第1号墳があり、この間に第1号礫槨墓が検出されている。南側は第5号墳と重複し、第5号住居跡、第1号掘建柱建物跡、第1号溝とも重なる。規模は、周溝内径13.95m、外径16.76mを測る円墳である。墳丘は削平され遺存していないが、前庭部の一部と周溝が検出された。

前庭部は長さ3.34m、幅1.15m、深さ15cmで、一端は幅を狭くするが周溝に向け再び広がる。底面は平坦で緩やかに傾斜している。前庭部からは鉄鏝2点が出土している。周溝は南側で半円形を呈し、北側では周溝が検出されなかった。幅2.33m、深さ28cmで前庭部周辺が最大幅を示し、第5号墳と重複する部分では極端に狭くなりブリッジを有していた可能性も否定できない。土層観察による第5号墳との新旧関係は不明である。

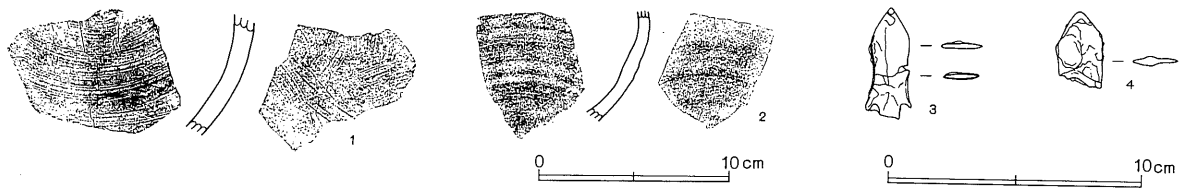
ここで本古墳と第1号溝との重複関係について触れておきたい。本古墳中央からやや西を南北に縦断するように掘られている第1号溝は、本古墳中央部で一端途切れ再び前庭部から南へと溝が検出されている。この状況から溝自体の深さが比較的浅いことを考慮すれば、墳丘内で溝が一端途切れるのは溝の掘削当時、本古墳の墳丘が遺存していたものと見ることができ、その為調査確認面まで及ばなかったのではないかと思われる。更にこの溝の時期にもよろうが遺存していた墳丘の規模をこれから推定するならば、掘り込まれていない長さが6.98m、周溝内壁から内側へ約1.4m～2.8mで溝は途切れ、推定として墳丘は約径10m前後の規模であったと考えられる。

出土遺物は周溝内より横瓶と平瓶の破片が出土し、前庭部からは鉄鏝が出土した。

3は刃部のみである。両刃丸造りの逆刺をもつ腸扶柳葉式である。刃部長4.1cm、刃部幅1.5cmを測る。4は刃部先端部のみの欠損品である。残存する刃部長3.1cm、幅1.9cmを測る。



第21図 第6号墳前庭部 (L=36.20m)



第22図 第6号墳出土遺物

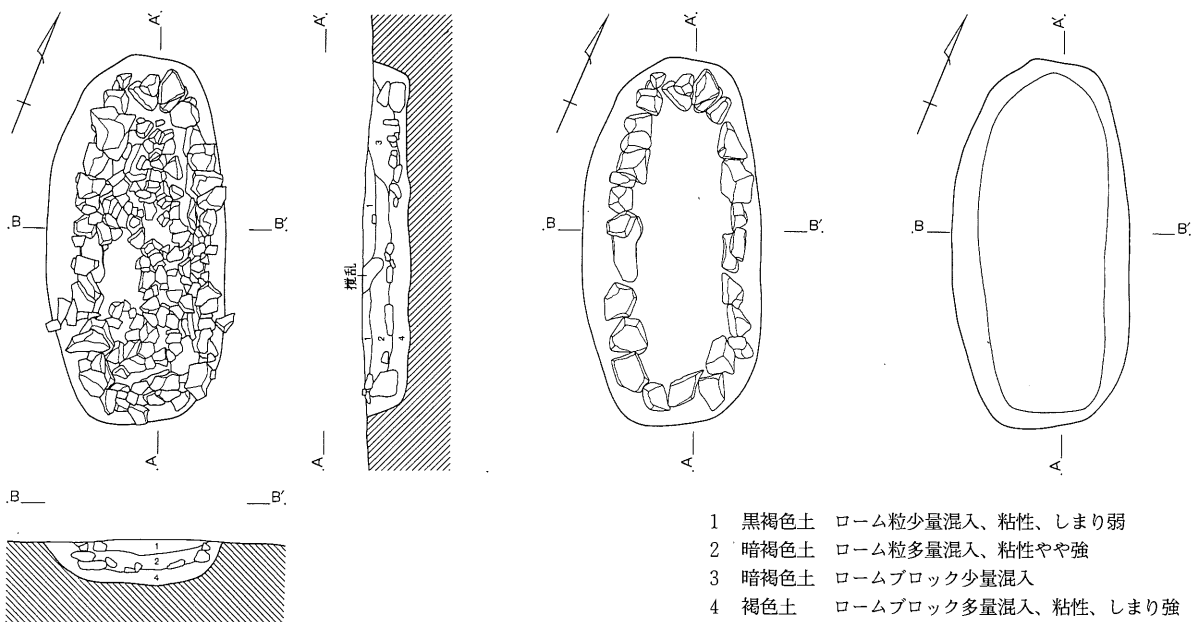
第6号墳出土遺物（第22図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	横瓶 須恵器	——	胴部外面はロクロ回転によるカキ目の器面調整。内面は不定方向のナデを重ねる。第1号墳-1と同一個体。	BEF・灰褐色 ・A	10%
2	平瓶 須恵器	——	体部は内湾ぎみに立ち上がる。肩部は明瞭な稜をなすと思われる。内・外面ともヨコナデ。湖西産。	BF・灰白色 ・B	10%

第1号礫槨墓（第23図）

G-7 Grid に位置する。第1号墳東側の周溝から0.7m離れた位置で検出され、古墳外径面に平行して構築されている。形態は長方形を呈し、規模は礫槨内法で長軸1.05m、幅0.45m、深さ10cm、掘り方規模で全長1.43m、幅0.65m、深さ15cmを測る小形の礫槨墓である。主軸方位はN-22°-Eを示している。石材は15cm前後の凝灰岩を使用し、端壁はやや厚みのあるものを使用している。側壁は扁平なものを2段から3段程積み重ねた状況が観察されたものの石材に加工痕は見られず打掻いものを雑然と積み重ねたようにもみえる。棺床面は5cm前後の扁平なものを敷き詰めている。遺物は検出されていない。

本礫槨墓は第1号墳周溝に沿って構築されていることから第1号墳の副次的埋蔵施設と考えられ、その規模から埋葬者は子供か幼児であったものと推測される。



第23図 第1号礫槨墓（L=36.20m）

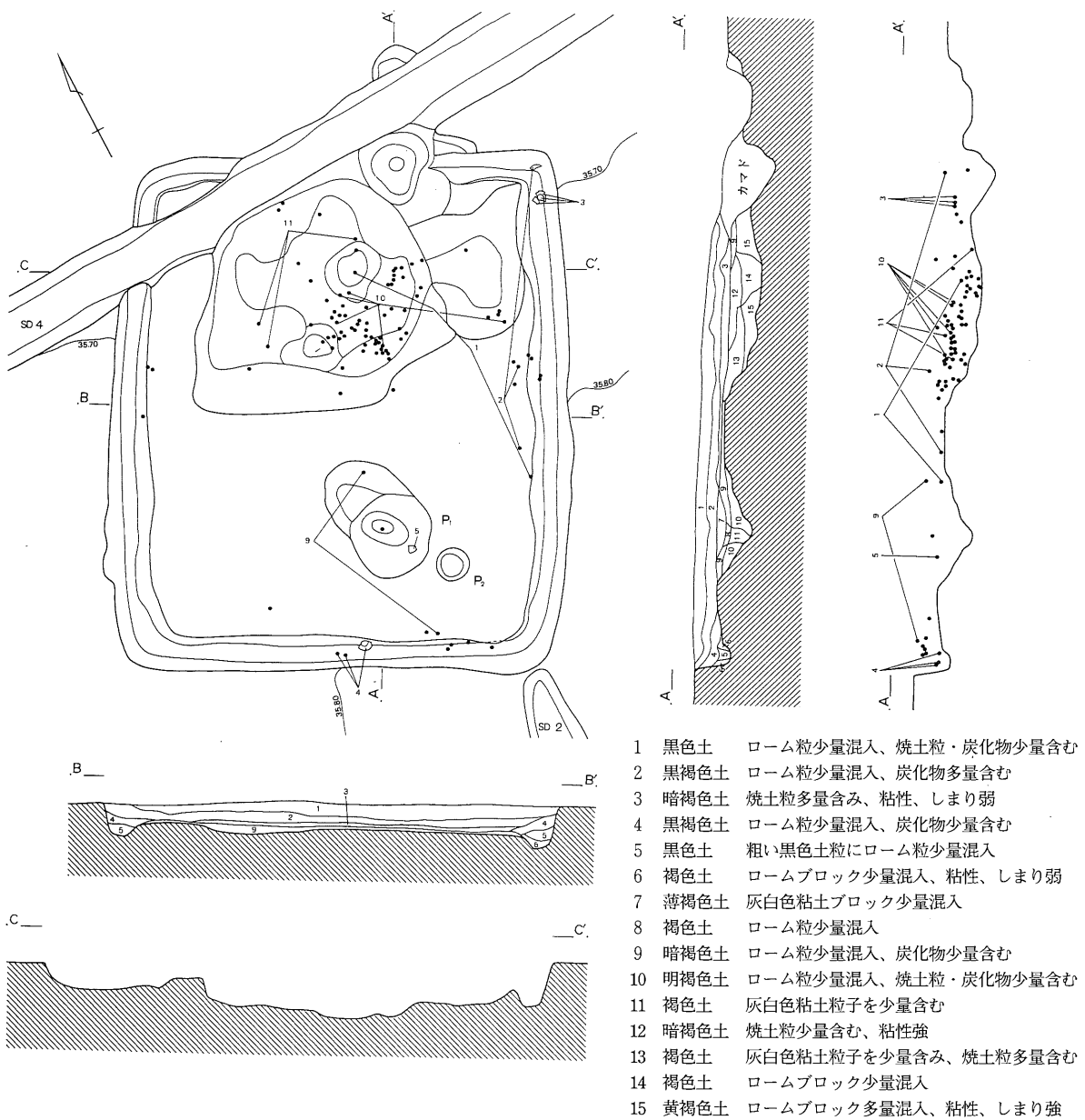
(2) 住居跡

第1号住居跡 (第24~26図)

E-4、5 Grid に位置する。北壁側を東西方向に走行する第4号溝によって切られている。形態は、主軸方向に長い長方形を呈する。規模は長軸4.40m、短軸3.98m、深さは28cmを測り、主軸方位はN-29° - Eを指している。

住居跡の覆土は、黒色土を基調とし自然堆積による埋没である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁に沿って幅28cmの壁溝が全周する。床面は、南側が踏み堅められているが、北側や壁際は概して軟弱な傾向が認められた。概ね平坦である。ピットは南側で2基検出され、P1=26cmを測り、P2は柱穴か否かは不明である。貯蔵穴は存在しない。

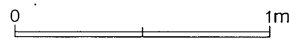
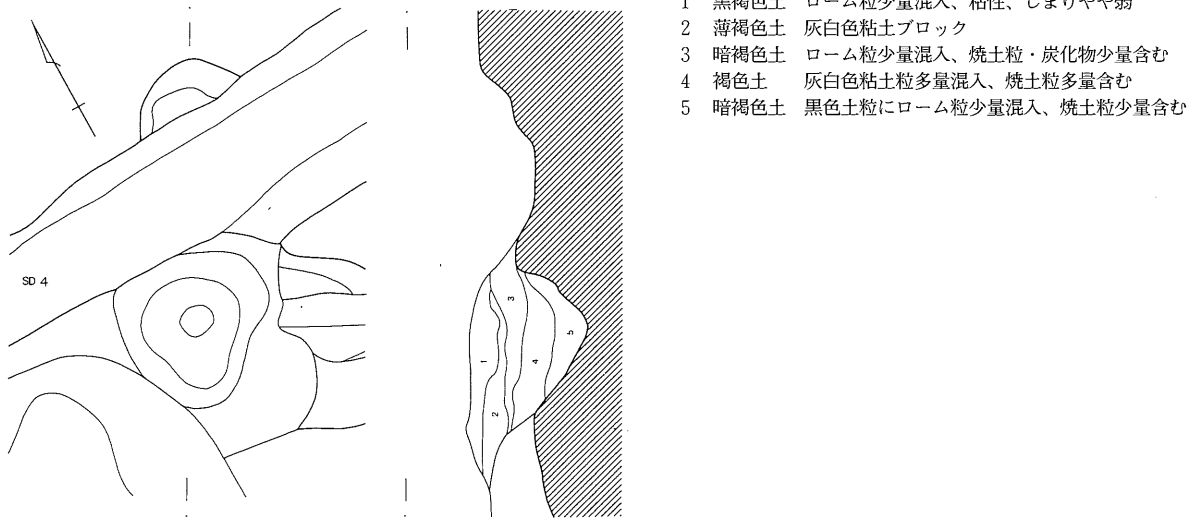
カマドは北壁の中央に位置するものの第4号溝により切られている。燃烧部は深く窪められている。右側



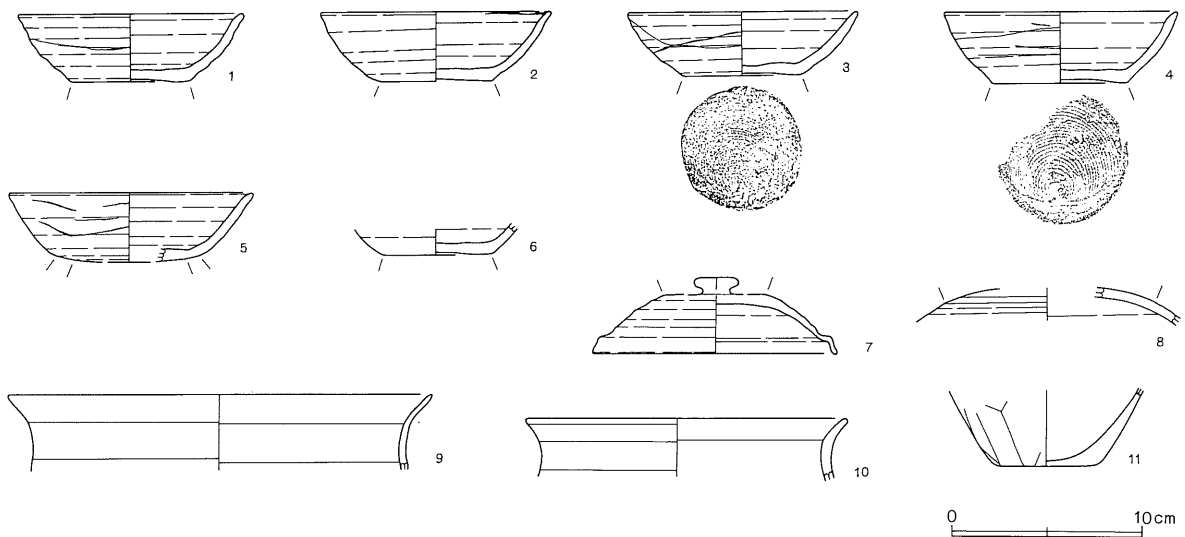
第24図 第1号住居跡 (L=36.00m)

袖部には灰白色粘土が遺存しており、壁面には袖の据え付けのために僅かに窪ませている。煙道部は緩やかに立ち上がる。カマド前面には、深い掘り方を残しその覆土は焼土、粘土ブロックを多く含んでいた。図示はしていないがこの掘り方は幾度か小規模の掘り返しにより作られた状態が観察された。また、覆土中から小破片の遺物が多く検出されている。

出土遺物では、南壁際や東壁際より須恵器環が出土し、カマド前面の掘り方覆土より土師器長甕等の破片が出土している。



第25図 第1号住居跡竈 (L=35.90m)



第26図 第1号住居跡出土遺物

第1号住居跡出土遺物（第26図）

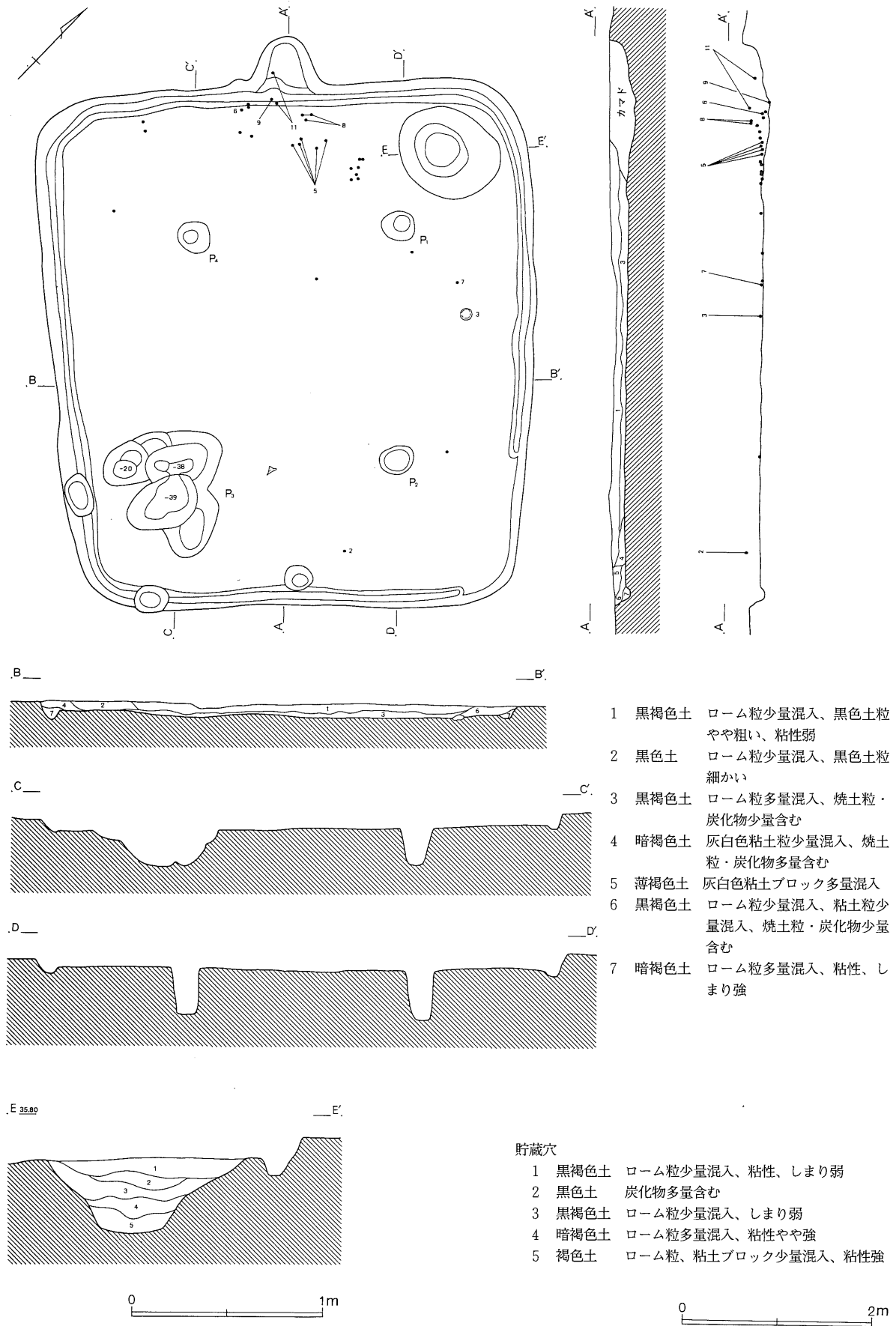
番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	坏 須恵器	口径 11.7 器高 3.6 底径 6.1	体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部で短く外反する。底部は回転糸切り離し未調整。巻き上げ状痕あり。	A B D F ・ 暗青灰色・A	30%
2	坏 須恵器	口径 11.9 器高 3.6 底径 5.8	体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。底部は回転糸切り離し未調整。口縁部内側に重ね焼きによる癒着痕がみられ、外面は降灰により器装は荒れている。	B C F ・ 暗青灰色・B	40%
3	坏 須恵器	口径 11.9 器高 3.3 底径 6.1	体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。底部は回転糸切り離し未調整。巻き上げ状痕あり	A B G ・ 青灰色・A	60%
4	坏 須恵器	口径 12.1 器高 3.3 底径 7.0	体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部は丸くおさめる。底部は回転糸切り離し未調整。巻き上げ状痕あり。口縁部に焼け斑がある。	A B F G ・ 灰色/ 暗青灰色・A	70%
5	坏 須恵器	口径 12.7 器高 3.7 底径 5.6	体部は内湾しながら立ち上がり、口唇部で短く外反する。端部は丸くおさめる。底部と体部下端に回転籠ケズリ。巻き上げ状痕あり。	A E F ・ 灰色・A	30%
6	坏 須恵器	底径 5.7	小片のため全体の器形は不明。底部は回転糸切り離し未調整。	A B D F ・ 茶褐色・A	10%
7	蓋 須恵器	口径 12.5 器高 (4.0)	天井部の張りは強く、天井頂部を回転籠ケズリ。内外面にナデ調整。口唇部は肥厚する。口縁部外面に口縁部に焼け斑がある。	B F G ・ 灰色/暗青灰色・A	10%
8	蓋 須恵器	——	小片のため全体の器形は不明。天井頂部を回転籠ケズリ調整。	A B E F ・ 灰色・A	5%
9	長 甕 土師器	口径 22.1	口縁部は「コ」の字状に近く、口唇部は短く摘まみ上げられている。磨滅が著しい。	C F ・ 橙・C	10%
10	長 甕 土師器	口径 16.7	口縁部は「コ」の字状に近い。口唇部は短く摘まみ上げられている。口縁部～頸部の内外面ヨコナデ。	B C E ・ 鈍い褐色・C	5%
11	長 甕 土師器	底径 5.7	胴部下端の外面は縦方向の籠ケズリ。底部内面は横方向、胴部下端内面は縦方向の籠ケズリ。外面の磨滅著しい。	B C D F ・ 鈍い褐色・C	5%

第2号住居跡（第27～29図）

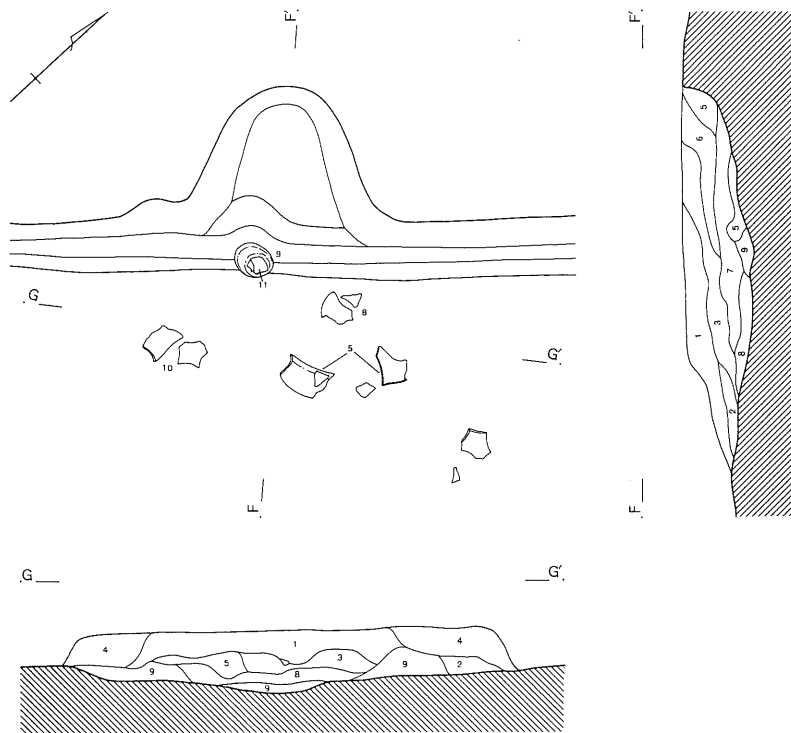
I-6 Grid に位置する。形態は長方形を呈する。規模は長軸5.46m、短軸5.02m、深さ8～24cmを測る。主軸方位はN-45°-Wを指している。

住居跡覆土は、黒褐色土を基調とし自然堆積による埋没である。壁は緩やかに立ち上がり、壁溝は幅24cm、深さ9cmの溝が巡るが南東コーナーには施されない。床面は、平坦であり全体的に踏み堅められている。ピットは10基検出した。P1～P4が支柱穴に相当し、P1=53cm、P2=49cm、P3=36cm、P4=38cmを測る。P3には重複がみられ、建て替えとも考えられるが他の支柱穴と比べ深度が浅くまた他の支柱穴に建て替えの痕跡が見受けられないことから南西コーナーの附帯施設としてのピットも含まれている可能性もある。カマドと反対側の南壁際には、小さなピットがあるが果たして入口に伴うものかどうか不明である。貯蔵穴はカマド右側の北東コーナー内側から検出された。平面形は楕円形を呈し、断面形態は上部が浅鉢状に広がる。貯蔵穴の周囲には低い高まりが観察された。規模は長軸1.04m、短軸0.92m、深さは24cmを測る。

カマドは北壁中央に位置し、壁を52cm切り込んで構築されている。燃烧部は僅かに窪められ、煙道部に向



第27図 第2号住居跡 (L=35.90m)



- 1 褐色土 灰白色粘土に砂、小礫多量混入
- 2 黒褐色土 ローム粒多量混入、粘土粒、焼土粒少量含む
- 3 暗褐色土 灰白色粘土粒多量混入
- 4 暗褐色土 ローム粒少量混入
- 5 黒褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒少量含む
- 6 黒褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒多量含む
- 7 褐色土 焼土ブロック多量含み、粘性、しまりやや弱
- 8 赤褐色土 焼土、焼土加熱面
- 9 黄褐色土 灰白色粘土多量混入

0 1m

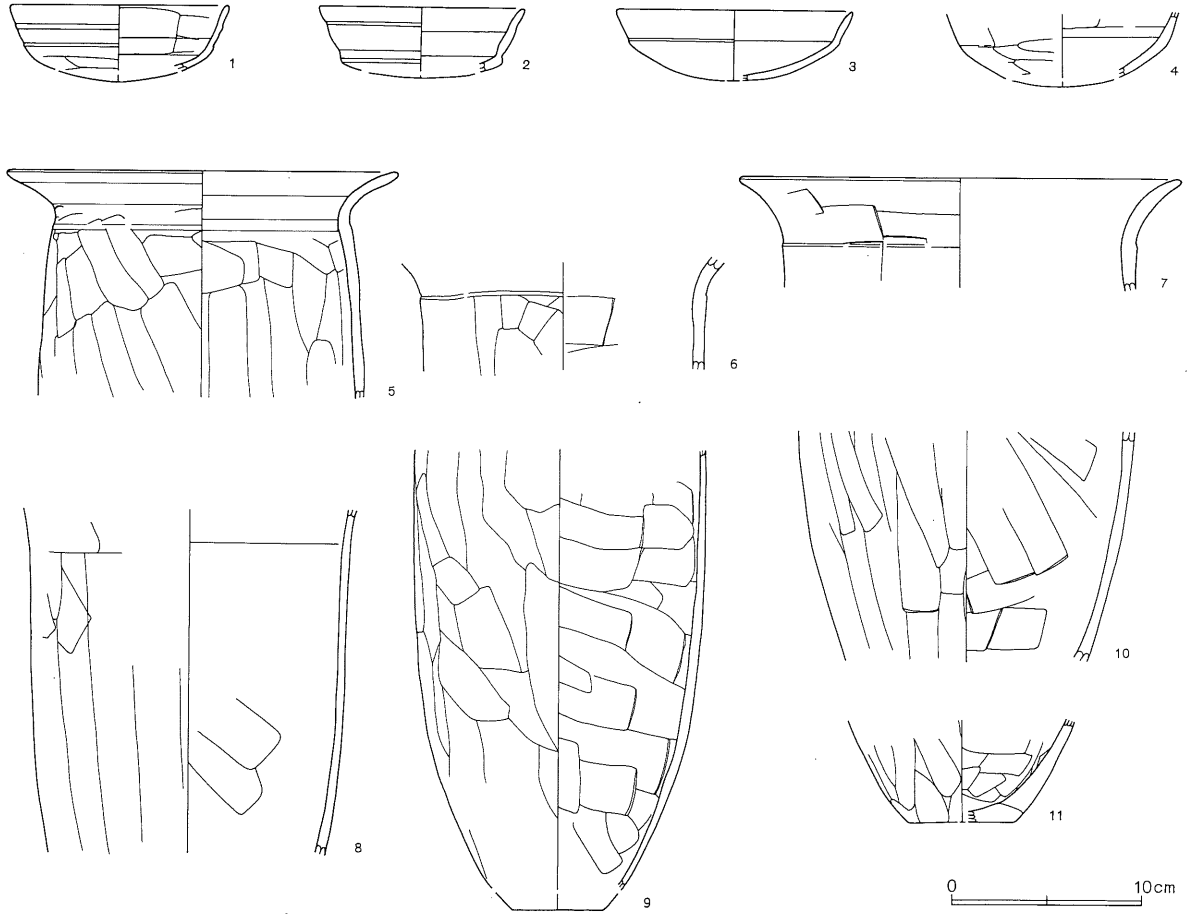
第28図 第2号住居跡竈 (L=35.90m)

かって緩やかな傾斜があり、煙り出し部で直に立ち上がる。袖部はローム土により構築され、その一部が残存する程度であった。焼土部からは長甕胴部が逆位に据えられたような状態で検出された。

出土遺物は土師器坏、長甕などであり、坏類は壁際で長甕類はカマド周辺からの出土である。

第2号住居跡出土遺物 (第29図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	坏 土師器	口径 11.3 器高 (4.0)	口縁部は直線的に外反し、口縁部中位に浅い凹線が1条巡る。口唇部は丸い。体部との境に弱い稜をもつ。内面と口縁部外面はヨコナデ。体部は横方向の筥ケズリ。内面は黒色を呈する。	B F・黒褐色 ・ B	20%
2	坏 土師器	口径 10.6 器高 (3.7)	口縁部は外反しながら立ち上がり、口唇部下に浅い凹線が1条巡る。口縁部内面の中位が窪む。体部との境に強い稜をもつ。器面は激しく風化している。	D F・褐灰色 ・ C	10%
3	坏 土師器	口径 12.3 器高 (3.7)	口縁部は短く直線的に外反する。体部との境に稜をもつ。器面は激しく風化しているため器厚は極めて薄い。	B D F・橙 ・ C	90%
4	坏 土師器	—	小片のため器形は不明である。口縁部は直線的に外反する。内面と口縁部外面はヨコナデ。体部外面は横方向の筥ケズリ。内外面ともやや黒色化を呈す。	B E F・黒褐色 ・ A	5%
5	長甕 土師器	口径 20.2 器高 (11.8)	口縁部は強く外反し、頸部に段をもつ。胴部中位でやや張る。口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面は縦方向の筥ケズリ。内面は縦方向で胴部上位で横方向の筥ケズリ。頸部から口縁部にかけて筥ケズリ。	B C D・淡褐色 ・ C	30%



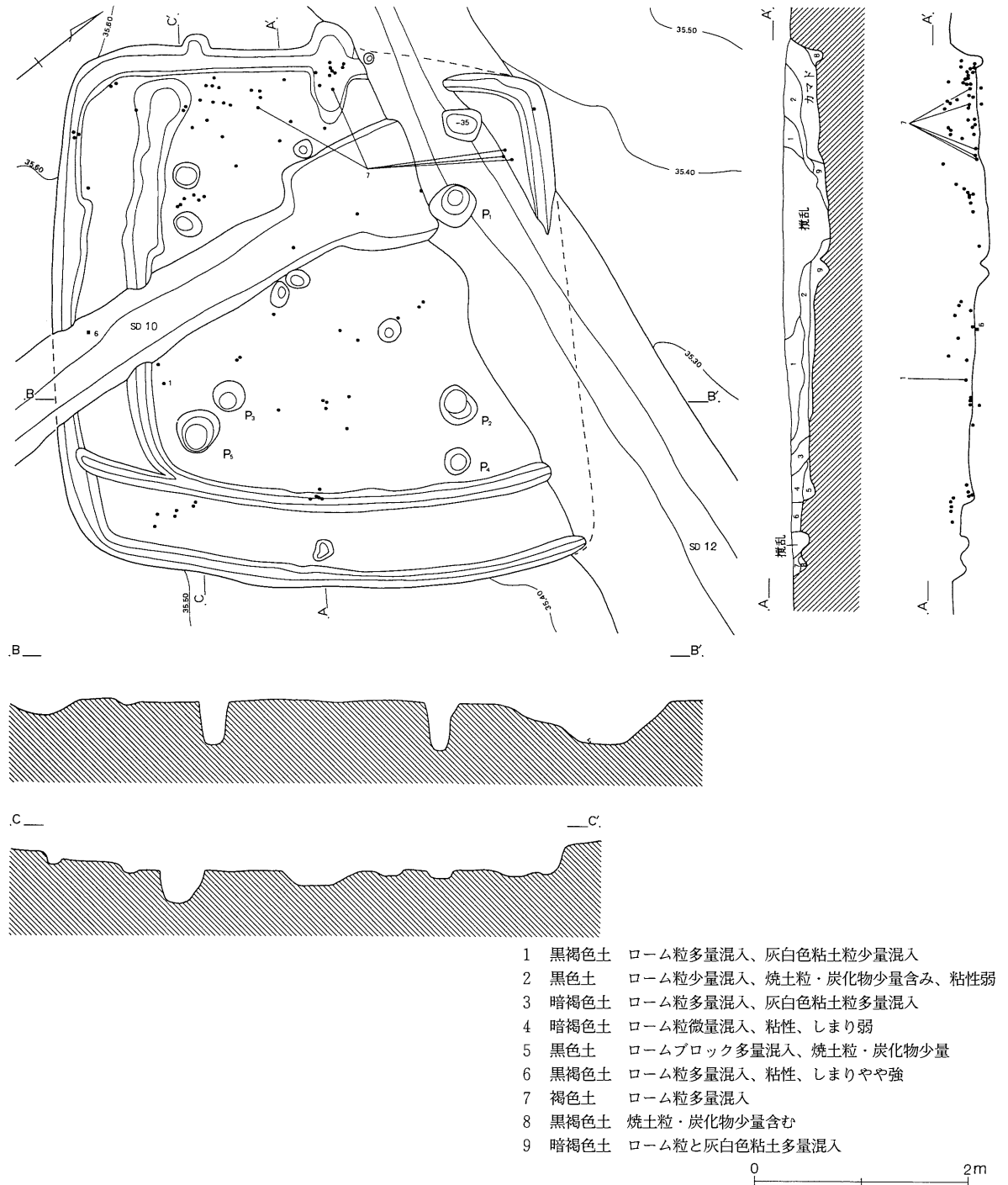
第29図 第2号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
6	長甕 土師器	——	小片のため器形は不明である。口縁部は強く外反し、頸部に浅い凹線が1条巡る。口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面は縦方向の筥ケズリ。内面は横方向の筥ケズリ。	BDF・淡褐色 ・C	5%
7	長甕 土師器	口径 22.8	小片のため器形は不明瞭である。口縁部は強く外反し、内外面はヨコナデ。胴部は外面が縦方向の筥ケズリ。	BDF・暗褐色 ・B	5%
8	長甕 土師器	——	粘土紐積み上げ成形。胴部は直線的であり、外面は縦方向の筥ケズリ内面は斜方向の筥ケズリ。磨滅が著しい。	BDFG・黒褐色 ・C	20%
9	長甕 土師器	——	胴部は直線的である。外面は縦方向の筥ケズリ。内面は斜方向の筥ケズリ。胴部中位に粘土が付着し、底部へ移行するにつれ褐色化し磨滅する。	BDF・橙／黒褐 ・B	60%
10	長甕 土師器	——	粘土紐積み上げ成形。胴部中位でやや張る。外面縦方向の筥ケズリ。内面斜方向の筥ケズリ。	BDF・褐灰色 ・B	10%
11	長甕 土師器	底径 5.5	底部からやや内湾しながら立ち上がる。外面は縦方向の筥ケズリ。内面は交差した筥ケズリ。器面は剥落などしているが磨滅はしていない	BDF・橙／黒褐色 ・C	5%

第3号住居跡 (第30~32図)

I、J-7 Grid に位置し、主軸方向を同じくして北東へ約5mの距離に第2号住居跡が所在し、南東へ約4mに第4号住居跡が近接する。北東壁側と住居跡中央部は第12号溝によって切られている。形態は正方形を呈し、規模は長軸4.86m、短軸4.35m、深さ26cmを測る。主軸方位はN-53°-Wを指している。

覆土は黒褐色土を基調とし自然堆積による埋没である。調査当初は1軒と認識していたが、床面下から壁溝、旧柱穴が検出されたことにより建て替えの行われた住居跡であることがわかった。旧周溝により南壁と西壁は拡張され、この拡張が建て替えと同時に進行していたと考えられる。ピットは11基検出され、このう

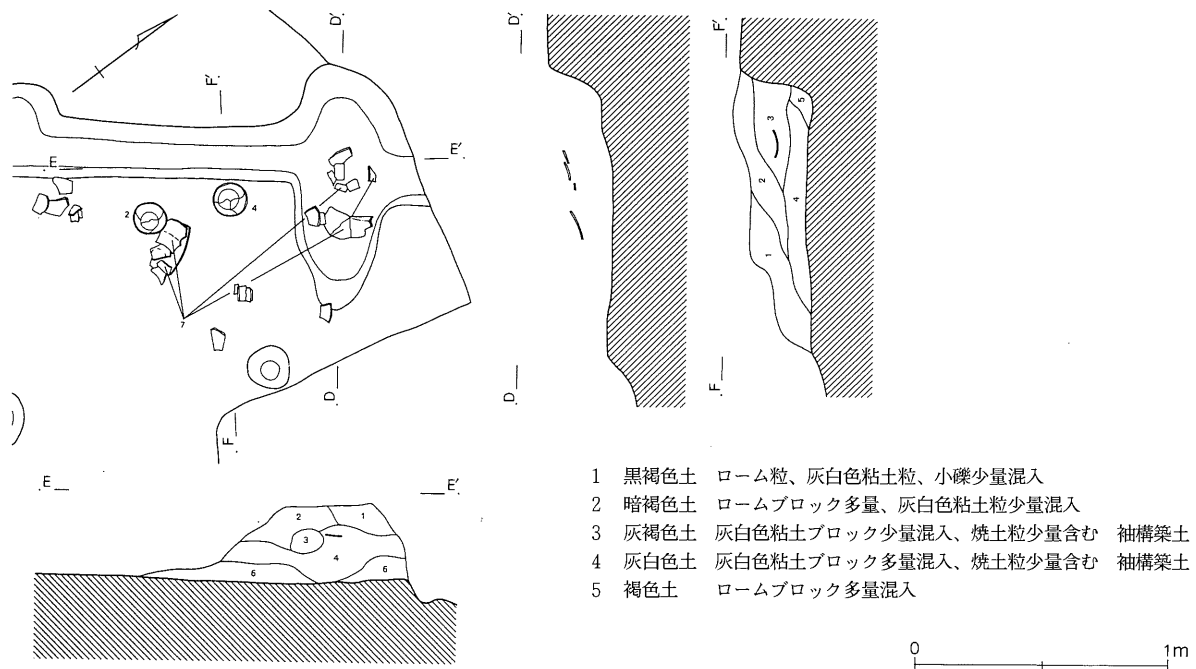


第30図 第3号住居跡 (L=35.70m)

ちP1～P5が支柱穴に相当する。P1＝56cm、P2＝44cm、P3＝40cm、P4＝35cm、P5＝30cmを測る。床面は中央部が堅く踏み固められ、やや窪む状況を呈していた。貯蔵穴は北東コーナー内側に検出されたが、溝により壊されているため一部が検出されたに過ぎない。

カマドは、北壁の中央やや東側にずれるかのような位置に構築されているが、拡張以前と位置をずらすことがなく使用され続けたことによるものと考えられる。燃烧部は浅く窪み、煙道部は壁から26cm程切り込んで急激に立ち上がる。袖の痕跡は留めないものの袖構築材と推定される灰白色粘土ブロックの堆積が観察された。

出土遺物は須恵器のフラスコ形長頸壺、土師器坏、壺、鉄製刀子が検出された。このうち土師器坏2点、第32図2、4はカマド西側の床面から正位の状態で出土し、壺はカマド内とその周辺で出土した。鉄製刀子1点は西壁際の床面から出土している。

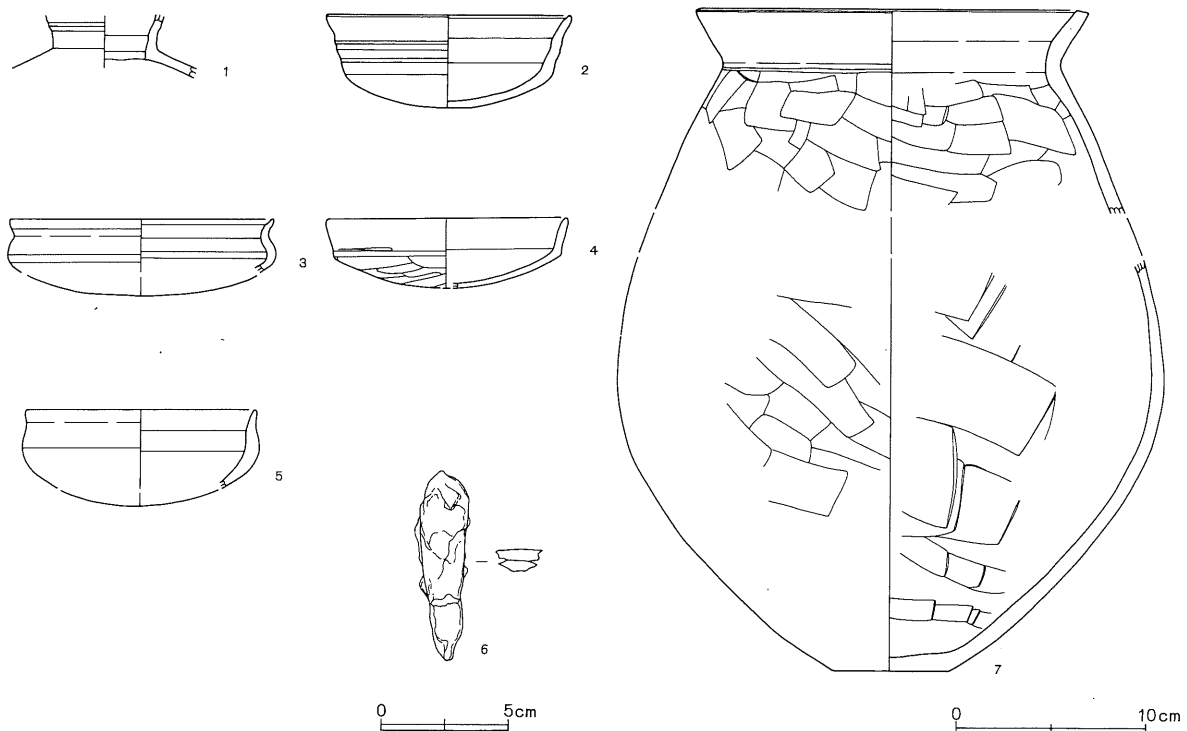


第31図 第3号住居跡竈 (L＝35.60m)

第3号住居跡出土遺物 (第32図)

番号	器種	法	量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	フラスコ形長頸壺 須恵器	頸部	5.4	口縁部はやや外反しながら立ち上がり、口縁部中位に1条の凹線が巡る。体部内面は横方向のロクロ調整が顕著。体部整形の後、口縁部嵌入箇所を開口する。口縁部内面と体部外面に自然釉。湖西産	CE・灰色 ・A	5%
2	坏 土師器	口径 器高	12.7 4.9	口縁部は緩く外反し、口唇部で更に外傾する。体部との境には弱い稜を有する。器面は二次焼成により磨滅が著しく、器面調整は口縁部内面がヨコナデと確認できるだけである。	BEF・赤褐色 ・C	90%
3	坏 土師器	口径	13.7	口縁部は「S」状に括れ、口唇部内側に凹線が巡る。口縁部ヨコナデ、体部外面艶ケズリ。内面並びに口縁部外面赤彩。	BDF・褐色 ・B	5%

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
4	坏土師器	口径 12.5 器高 (3.6)	口縁部は直線的に外反し、口唇部は丸くおさまる。体部との境には強い稜を有する。内面と口縁部外面はヨコナデ、体部外面中央は一定方向の筥ケズリ、外縁は稜に沿って筥ケズリ。	B D F・灰褐色 ・ B	90%
5	坏土師器	口径 12.0	口縁部は直立し、口唇部は外反する。体部と口縁部との境は丸みをもつ。内外面とも著しく磨滅している。	B D F・暗褐色 ・ C	10%
6	甕土師器	口径 19.7 器高 (35.5) 底径 6.0	口縁部はやや短く直線的に外反し、口唇部に凹線が巡る。頸部に低い稜を有し、最大径が胴部中位にある球形を呈す。口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面上位は横方向の筥ケズリで、下位は斜方向の筥ケズリ。内面は横方向の筥ケズリ。	B D F G・暗褐色 ・ A	30%
7	刀子	残長7.5cm。最大幅1.9cm。	出土位置一床直。		50%



第32図 第3号住居跡出土遺物

第4号住居跡 (第33~36図)

J、K-7、8 Grid に位置する。第3号住居跡と長軸方向を同じくする。住居跡覆土や壁の一部は抜根により壊されている。形態は方形を呈し、規模は長軸5.32m、短軸4.82m、深さ36cmを測る。主軸方位はN-39°-Eを指している。

住居跡の覆土は、基本的に黒褐色土を基調とし自然堆積による埋没である。図化はしていないが、住居西側の覆土中層から上層にかけて拳大の凝灰岩が纏まって出土し、焼土もみられた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁に沿って幅16cmの壁溝が全周する。床面は平坦で中央部からカマド周辺にかけて踏み詰められている。ピットは6基検出され、このうち支柱穴はP1=42cm、P2=32cm、P3=28cm、P4=32cmが相当し、P5、P6は支柱穴と考えられる。南西側の支柱穴は検出されなかった。貯蔵穴はカマド東側の南東コーナー内側

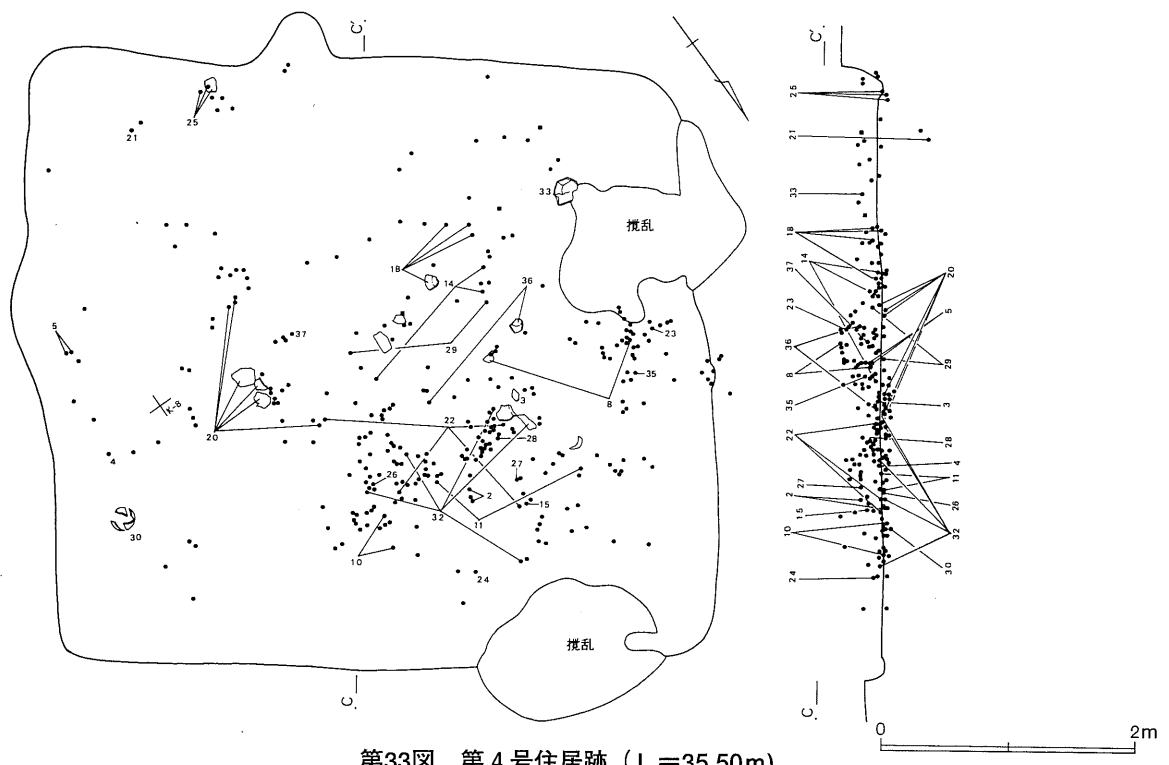
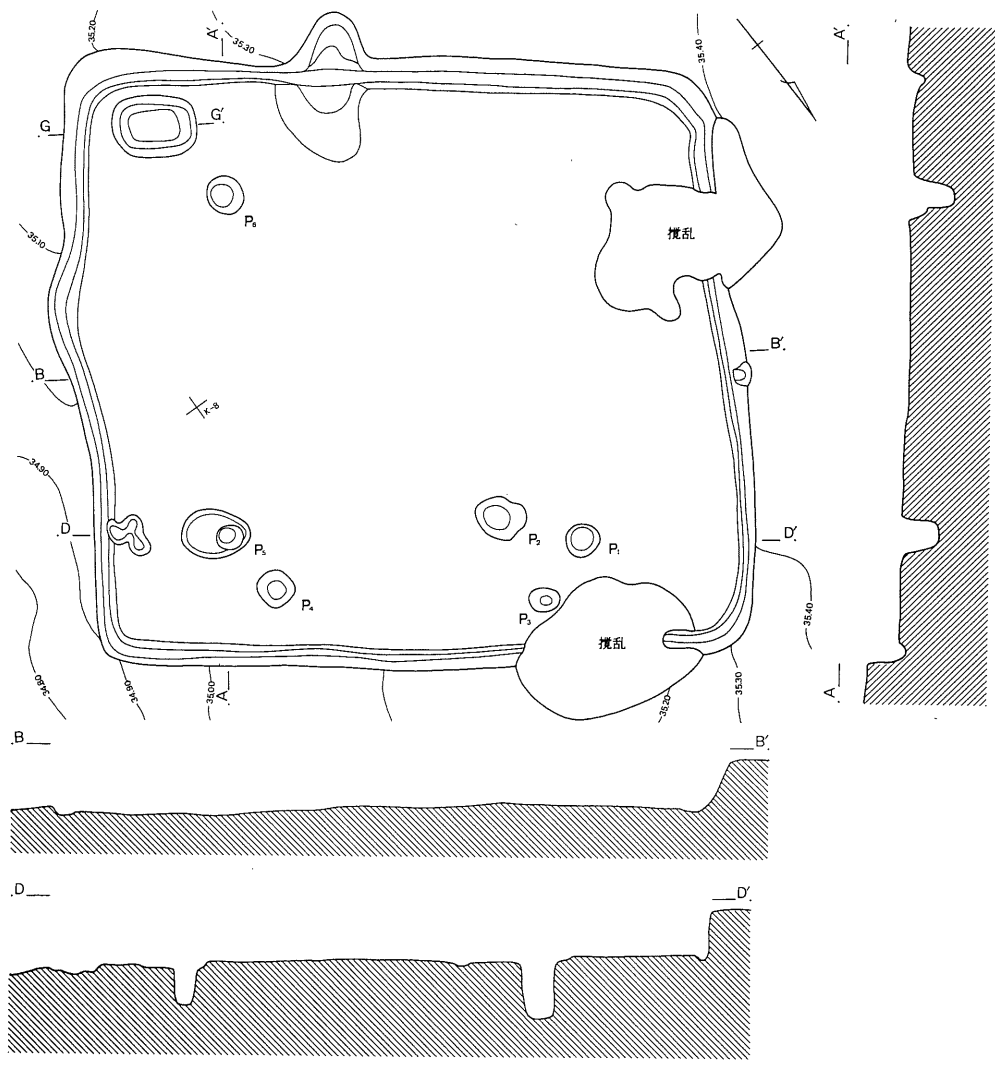
に検出され、長軸66cm、短軸50cmで深さ42cmを測る。

カマドは他の住居跡とは異なり南壁の中央やや東側で検出され、南壁を38cm掘り込んで構築されている。燃焼部は浅く窪み、煙道部に向かい急激に立ち上がる。袖部はローム土を構築材として使用している。カマドからの遺物の出土は見られなかった。

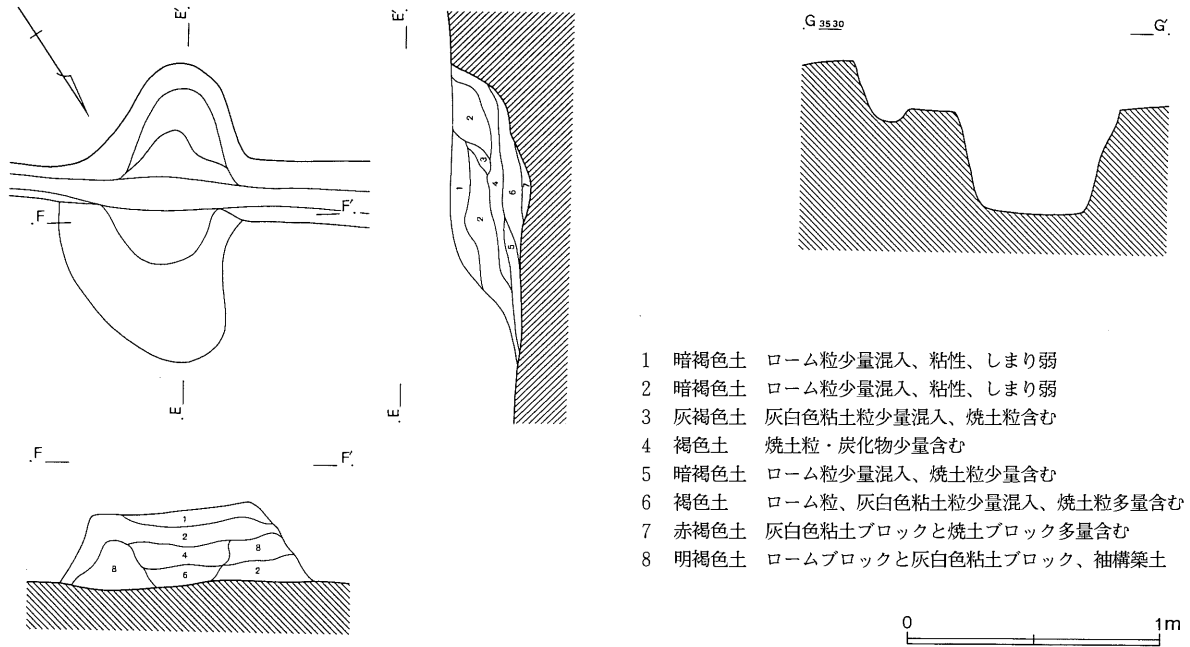
出土遺物には土師器坏、長甕、甌、須恵器短頸壺、長頸壺、提瓶、土錘1点があり、住居跡群の中では土師器坏の個体数が特に多くみられた。また、覆土中からは時期の異なる遺物もみられ、このことは冒頭にも記したように住居跡の埋没過程の際に、本住居跡内において何らかの人為的な行為が行われ、又は利用されたことに起因するものと思われる。

第4号住居跡出土遺物（第35図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	坏 土師器	口径 10.5 器高 3.3	口縁部は短く直線的に立ち上がり、口唇端部はやや尖る。体部との境に稜をもち、体部は比較的偏平である。内面と口縁部外面ヨコナデ。体部外面篋ケズリ。	B F・薄褐色 ・ A	10%
2	坏 土師器	口径 11.1 器高 (3.5)	口縁部は直線的に外反し、口唇部は僅かに外に外傾する。体部との境に明瞭な稜を有す。体部はやや偏平。口縁部内外面はヨコナデ。内面と口縁部外面に赤彩。体部外面は磨滅。	B F・淡褐色 ・ B	80%
3	坏 土師器	口径 11.5 器高 (3.7)	口縁部はやや短く直線的に外反する。口唇部内面に浅い凹線が1条巡る。体部との境に強い稜を有す。内面と口縁部外面はヨコナデ。体部は中心に向け篋ケズリ。内面と口縁部外面に赤彩。	B F・淡褐色 ・ A	20%
4	坏 土師器	口径 11.8 器高 (4.0)	口縁部は直線的に外反する。体部との境の稜は明瞭である。内面と口縁部外面に赤彩。全体的にやや磨滅している。	D F・褐灰色 ・ B	5%
5	坏 土師器	口径 12.2 器高 (4.5)	口縁部は直線的に立ち上がり、口唇端部で外傾する。体部との境に強い稜をもち、体部は丸底を呈する。内外面とも剥落と磨滅が著しい。内面と口縁部外面に赤彩。	B D F・褐色 ・ C	20%
6	坏 土師器	口径 15.9 器高 (4.9)	大型の坏である。口縁部は緩やかに立ち上がり、口縁部中位に段をもつ。口唇端部は尖る。体部との境は丸い。内面と口縁部外面はヨコナデ。体部は横方向の篋ケズリ。内面と口縁部外面は赤彩。	B D F・褐色 ・ B	10%
7	坏 土師器	口径 10.6 器高 (3.6)	口縁部は内傾ぎみに立ち上がり、口唇部内側に凹線が1条巡る。端部は尖る。体部と境は明瞭で厚い。体部は偏平である。内面と口縁部外面はヨコナデ。体部外面は横方向の篋ケズリ。口縁部内外面に赤彩。	B F・暗褐色 ・ A	10%
8	坏 土師器	口径 12.0 器高 2.7	口縁部は短くやや外傾する。口唇部は尖り内側に凹線が1条巡る。体部との境に稜を有し、体部は偏平で厚い。内面と口縁部外面はヨコナデ。体部外面は篋ケズリ。	B D F・褐灰色 ・ A	80%
9	坏 土師器	口径 9.8 器高 (3.8)	口縁部は直線的に外反し、中位に段をもつ。体部との境に弱い稜をもつ。器面は磨滅が著しい。	B D・橙 ・ C	20%
10	坏 土師器	口径 10.7 器高 (3.9)	口縁部に段をもち外反する。体部との境に稜を有す。器面は著しく剥落している。口縁部外面に赤彩が認められる。	B D F・黒褐色 ・ C	30%
11	坏 土師器	口径 11.4 器高 (3.6)	口縁部は外反し、中位に段をもつ。口唇部は丸くおさまる。体部との境に稜を有す。内面と口縁部外面はヨコナデ。体部は横方向の篋ケズリ。体部は比較的厚い。全体的にやや磨滅している。	B D・褐灰色 ・ B	30%
12	坏 土師器	口径 10.5	小片であり、また器面全体が剥落しているため不明な点が多い部は外反し、中位に段をもつ。体部との境に稜を有す。	B F・褐色 ・ C	5%



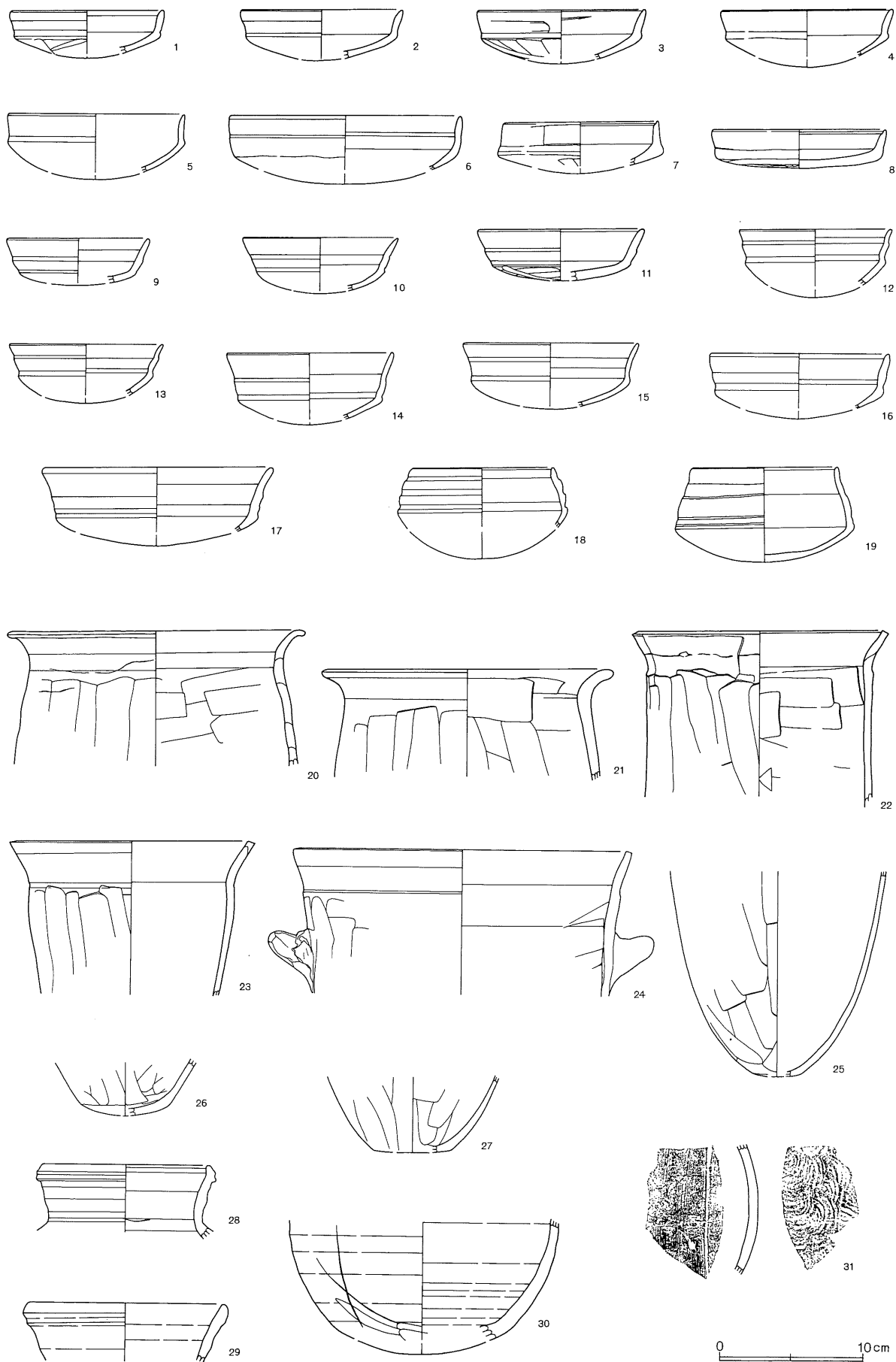
第33图 第4号住居跡 (L=35.50m)



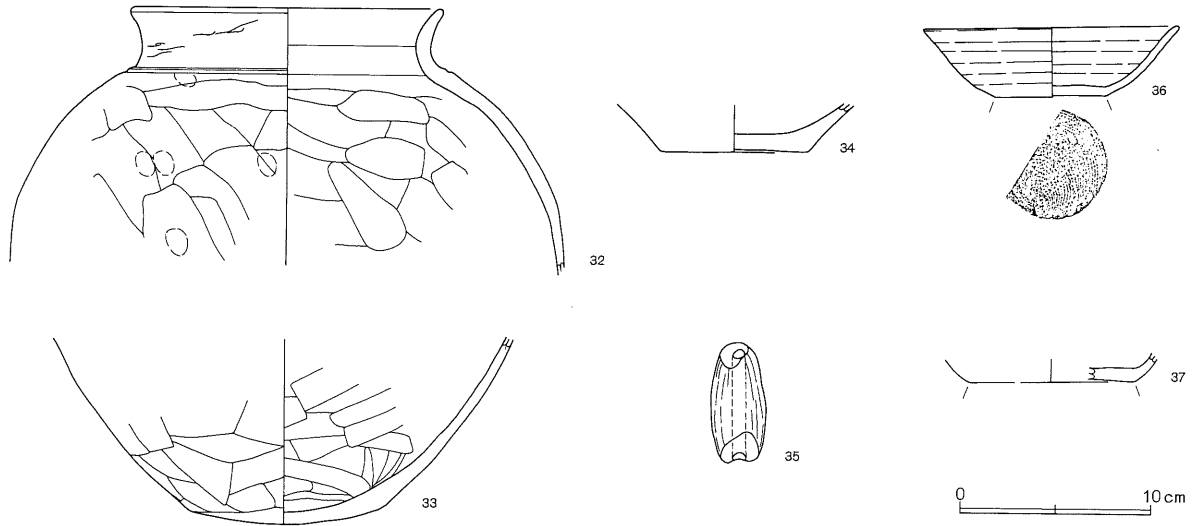
- 1 暗褐色土 ローム粒少量混入、粘性、しまり弱
- 2 暗褐色土 ローム粒少量混入、粘性、しまり弱
- 3 灰褐色土 灰白色粘土粒少量混入、焼土粒含む
- 4 褐色土 焼土粒・炭化物少量含む
- 5 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒少量含む
- 6 褐色土 ローム粒、灰白色粘土粒少量混入、焼土粒多量含む
- 7 赤褐色土 灰白色粘土ブロックと焼土ブロック多量含む
- 8 明褐色土 ロームブロックと灰白色粘土ブロック、袖構築土

第34図 第4号住居跡竈 (L=35.50m)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
13	坏土師器	口径 10.6	小片であり、また器面全体が剥落しているため不明な点が多い。口縁部は外反し、中位に段をもつ。体部との境に稜を有す。	B D F・褐色 ・ C	5%
14	坏土師器	口径 11.4 器高 (5.0)	口縁部は直線的に外傾し、中位に段を有す。口唇部で僅かに外反する体部との境に稜を有し、体部はやや偏平である。器面は磨滅と剥落が著しい。	B D F・褐灰色 ・ C	50%
15	坏土師器	口径 12.0 器高 (4.6)	口縁部は直線的に外反し、中位に段を有する。体部との境は強い稜により明瞭である。体部は丸底を呈する。内外面とも剥落が著しい。	B F・赤褐色 ・ C	30%
16	坏土師器	口径 12.3	口縁部は直線的に外反し、中位に段を有する。口唇部はやや尖る。体部との境には稜をもつ。器面は磨滅している。	B F・橙 ・ C	10%
17	坏土師器	口径 15.7	口縁部は外反しながら立ち上がり、中位に段を有する。口唇部でさらに外傾し、端部は丸くおさまる。体部との境は強い稜をもつ。器面は磨滅しており不明瞭。	B F・赤褐色 ・ C	5%
18	坏土師器	口径 10.0 最大径 12.4	口縁部は内傾し、中・下位に段をもちながら口唇部で立ち上がる。端部は丸くおさまる。体部との境に稜をもつ。体部はやや偏平で丸底である。内外面とも剥落と磨滅が著しい。	B D F・褐色 ・ C	70%
19	坏土師器	口径 9.8	口縁部は内湾しながら立ち上がり、2条の凹線により二つの段をつくる。口唇端部は摘み上げられ尖る。体部との境に稜をもつ。器面は剥落と磨滅が著しい。	B D・橙 ・ C	5%
20	長甕土師器	口径 20.0	口縁部は強く外反し、口唇部で更に引き出され端部は丸い。頸部の稜は不明瞭。胴部中位でやや張る。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向の筥ケズリ。内面横方向の筥ケズリ。磨滅が認められる。	B D F・褐色 ・ B	15%
21	長甕土師器	口径 19.3	口縁部は強く外反し、口唇部で更に引き出され端部は丸い。頸部の稜は不明瞭。胴部中位でやや張る。口縁部内外面ヨコナデ。外面筥ケズリ。胴部内外面縦方向の筥ケズリ。	B D F・橙 ・ B	20%



第35图 第4号住居跡出土遺物



第36図 第4号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
22	長甕 土師器	口径 17.0	口縁部は直線的に外反し、口唇部に凹線が巡る。頸部に稜が明瞭である。胴部は円筒形を呈す。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向の筥ケズリ。内面横方向の筥ケズリ。	B D F・橙 ・ A	20%
23	長甕 土師器	口径 16.1	口縁部は直線的に外反し、口唇部に凹線が巡る。頸部に凹線が巡り、弱い稜をつくりだしている。胴部外面縦方向の筥ケズリ。全面が磨滅	B D・褐灰色 ・ C	30%
24	甌 土師器	口径 22.8	口縁部は直線的に立ち上がり、やや外傾する。口唇部に凹線が巡る。頸部に弱い稜をもつ。貼付の把手を有し、上方を向き、内面に嵌入部が認められる。胴部外面縦方向の筥ケズリ。内面横方向の筥ケズリ。	B F・灰色／褐色 ・ B	30%
25	長甕 土師器	底径 (3.4)	胴部中位に最大径をもつ。底部の器厚は薄い。胴部外面縦方向の筥ケズリ。胴部下位に粘土が付着。磨滅が著しい。	B F・褐灰色 ・ C	20%
26	長甕 土師器	底径 (5.3)	胴部は円筒形を呈すると思われる。胴部外面縦方向の筥ケズリ。内面胴下端から底面にかけて縦方向のナデ。磨滅している。	B E F・灰色 ・ C	15%
27	長甕 土師器	底径 (5.9)	底部内外面縦方向の筥ケズリ。底面磨耗している。	B D F・灰褐色 ・ C	10%
28	横瓶 須恵器	口径 (11.5)	口縁部は直線的に外反し、口唇部は凹線が2条が巡り隆線化する。口唇は内側へ丸く揃え出される。内外面ともヨコナデ。第1号墳1、第6号墳1と同一個体。	B D F・灰褐色 ・ A	5%
29	短頸壺 須恵器	口径 (13.5)	口縁部は直線的に外反し、口唇直下に凹線が1条が巡り隆線化する焼成が不良なため器面は剥落と磨滅が著しい。	B D F・橙 ・ C	
30	長頸壺 須恵器	—	胴下半で球形を呈する。底部へ移行するにつれ器厚は厚くなる。内外面ともにナデ調整「×」のヘラ記号がある。	B E F・灰色 ・ A	30%
31	提瓶 須恵器	—	提瓶の肩部と思われ、やや深い凹線とクシ目調整が施される。内面は同心円叩き文の後、ヨコナデがされている。	B E F・灰褐色 ・ A	10%
第36図 32・ 33	甕 土師器	口径 16.0 底径 9.8	口縁部は外反しながら立ち上がり大きく開き、口唇は外傾し丸い。口縁部の外面に筥状工具のキズをもつ。頸部は稜を有し、胴部は球形を呈する。口縁部内外面はヨコナデ。胴部は斜方向の筥ケズリ。底部外面は筥ケズリ。内面は斜方向の筥ケズリ。	B D F・褐色／灰色 ・ B / C	30%

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
34	甕 土師器	底径 7.6	胴部へと緩やかに立ち上がり、胴部は球形を呈すると思われる。底部は平坦でナデ調整。胴部下端は篋ケズリの後、ナデ調整。内面は同心円状のナデ。	B F ・ 褐灰色 ・ A	10%
35	土 錘	長径 6.1 短径 2.8	最大径を体部中央にもち、両端部の欠損は同じ向きにみられる。穴の径は0.8cm、重さ45gである。	B F ・ 褐白色 ・ B	90%
36	坏 須恵器	口径 13.2 器高 3.6 底径 5.6	体部は直線的に外傾し、口唇部は丸くおさまる。内外面ともナデ調整。内面にロクロ挽痕が顕著。底部は回転糸切り離し。	A B F ・ 灰色 ・ A	30%
37	坏 須恵器	底径 (8.5)	内面と体部はナデ調整。底部は回転篋ケズリ。	A B F ・ 暗褐色/ 黒灰色 ・ A	10%

第5号住居跡（第37～39図）

H、I-8 Grid に位置する。第5号墳と第6号墳の重複により北西側と南西側が壊されている。形態は南北に主軸をもち方形を呈する。規模は長軸4.94m、短軸4.90m、深さ14cmを測る。主軸方位はN-21°-Wを指している。

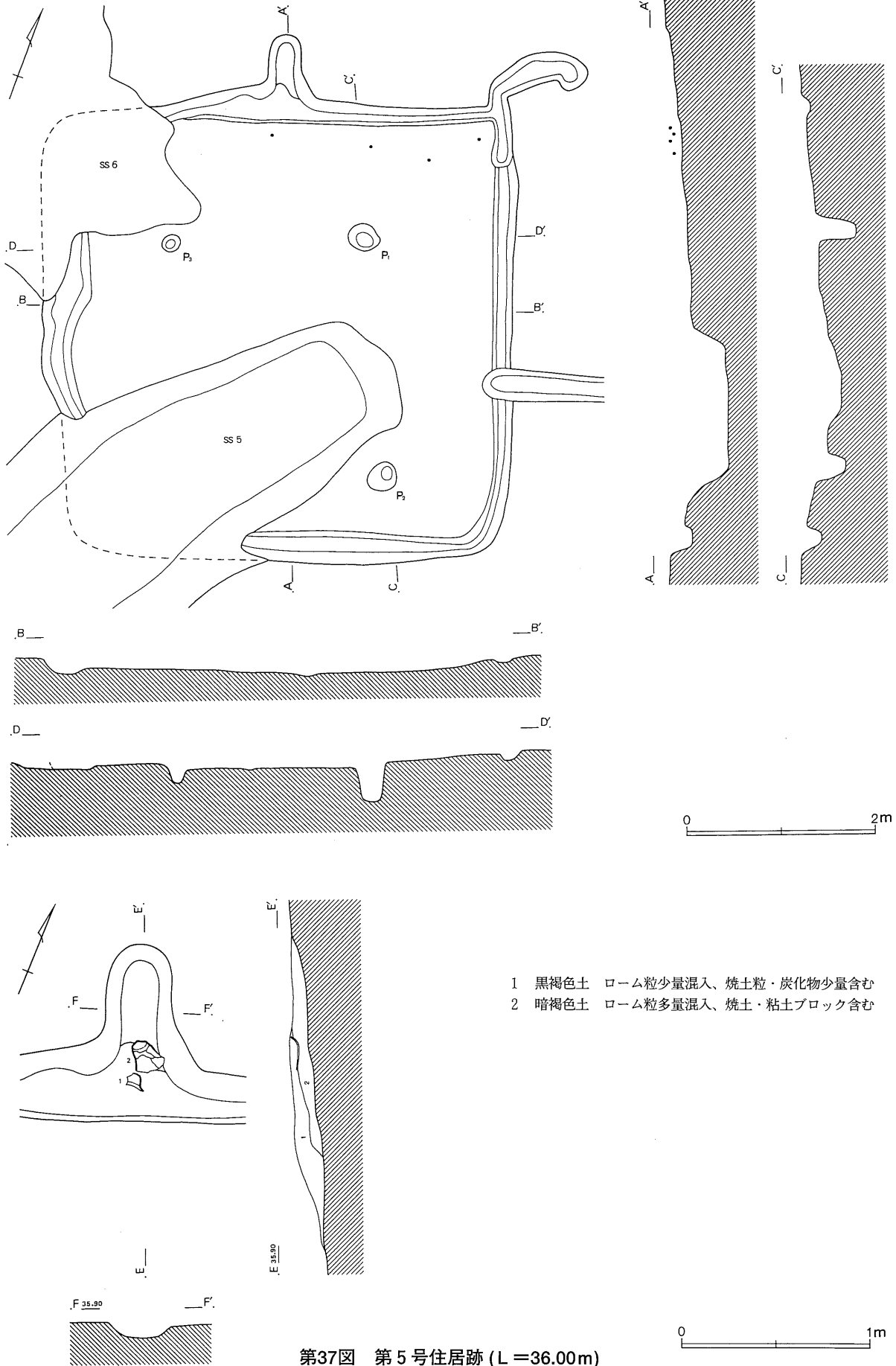
住居跡の覆土は黒色土を基調としているが、古墳周溝の削平も受けていたようであり判然としない。床面は中央がやや窪み、全体に軟らかく硬質部分はみられなかった。壁は緩やかに立ち上がり、壁に沿って幅20cmの壁溝が全周する。東壁中央の壁溝から東方向へ長さ12.8m、幅0.28m、深さ18cmの溝が構築され、また北東コーナーにも壁溝から1m程の曲がった溝が付属している。この2本の溝は台地が傾斜する東側斜面部方向へと伸びることから排水施設として構築されたと考えられる。ピットは3基検出されそれぞれ支柱穴に相当する。P1=37cm、P2=18cm、P3=14cmを測る。貯蔵穴は検出されていない。

カマドは北壁の中央に位置し、壁から66cm掘り込んで構築されている。燃烧部は平坦で煙道部に向けて緩やかに傾斜しながら立ち上がる。袖部は残存していなかった。カマド内から長甕が出土している。

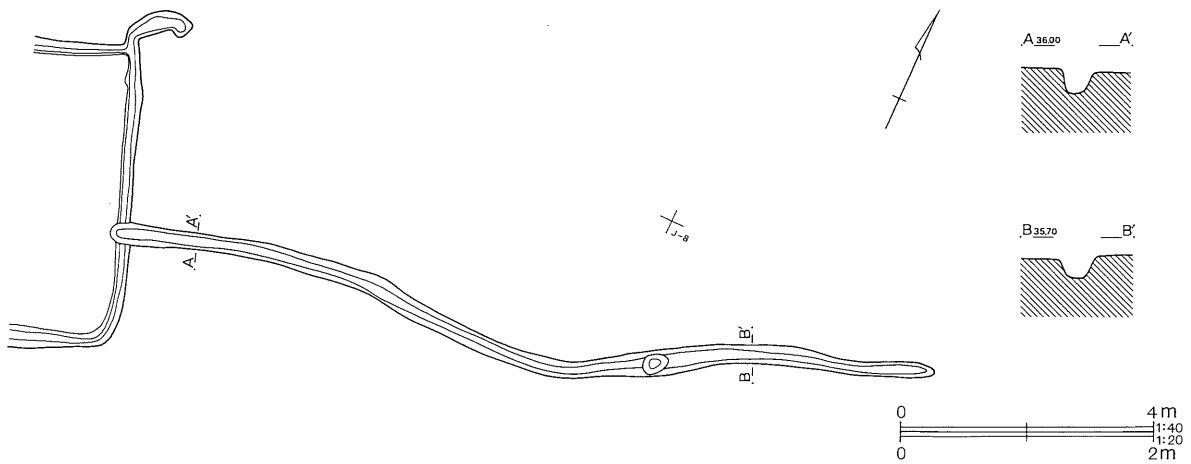
出土遺物は、カマドとその周辺だけであった。

第5号住居跡出土遺物（第39図）

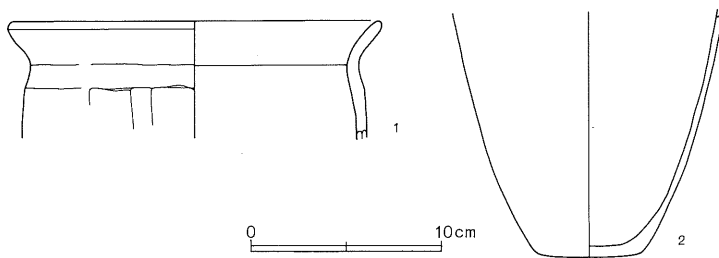
番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	長 甕 土師器	口径 19.1	口縁部は直線的に外反し、口唇端部が丸くおさまる。胴部との境に明瞭な稜を有す。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向の篋ケズリ。	B D F G ・ 暗褐色 ・ B	10%
2	長 甕 土師器	底径 5.4	胴部は緩やかに立ち上がり、胴部中央で最大径を測るものと思われる。器面と磨滅と剥落が著しい。	B D F ・ 暗褐色 ・ C	30%



第37図 第5号住居跡 (L=36.00m)



第38図 第5号住居跡



第39図 第5号住居跡出土遺物

第6号住居跡（第40～41図）

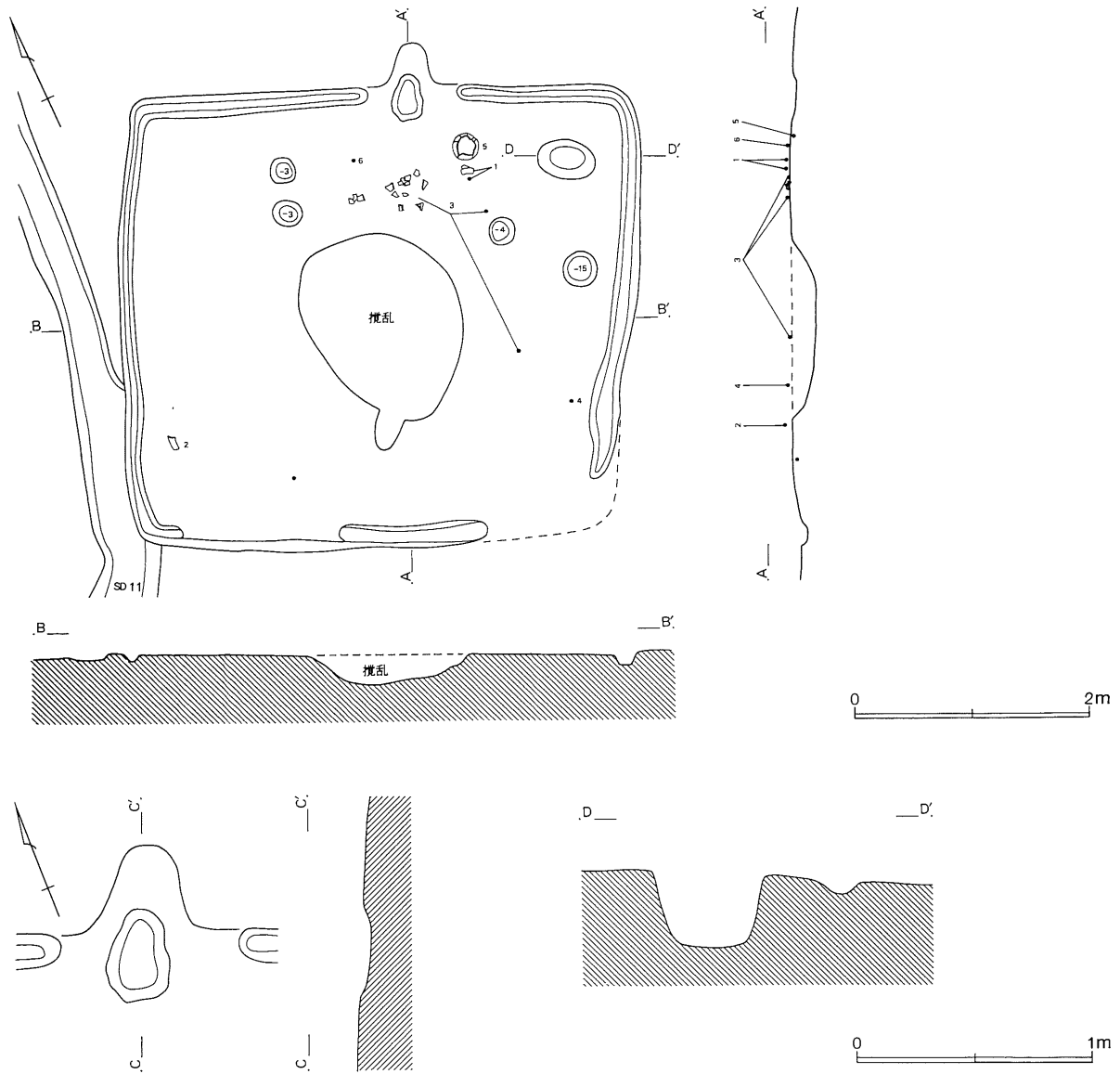
I、J-9 Grid に位置する。第5号墳の前庭部により一部が壊されており、確認時には既に床面が露出していた。形態は正方形を呈し、規模は長軸4.36m、短軸3.90mを測る。主軸方位はN-20°-Eを指している。

壁溝は幅21cm、深さ6cmがカマド及び南壁の一部を除き全周する。貯蔵穴はカマド東側で検出され、形態は楕円形を呈し、規模は長軸50cm、短軸34cm、深さ26cmを測る。床面は、全体的に踏み堅められている。ピットは4基検出されており、全て浅く、底面は突き固めたように堅い。

カマドは燃烧部が浅く掘り窪められ、強い加熱を受けた痕跡を留めていた。出土遺物の多くはカマド周辺に集中しており、第41図5はカマド東側袖付近の床面から逆位の状態で検出された。

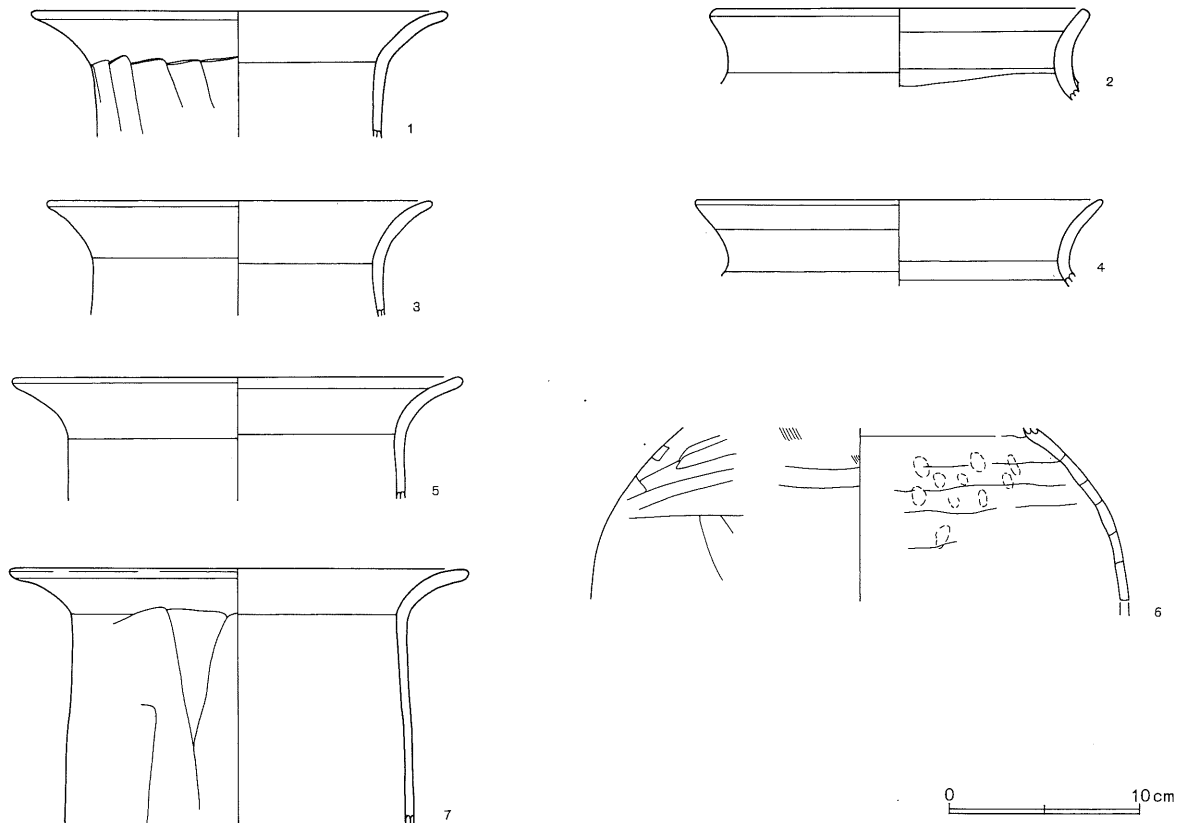
第6号住居跡出土遺物（第41図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	長甕 土師器	口径 21.2	口縁部は強く外傾し、口唇端部は更に摘まみ出される。胴部は張りのない円筒形を呈す。胴部外面の筥ケズリは明瞭で口縁部直下までおよぶ。内面と口縁部は磨滅が著しい。	B F・褐白色 ・ C	0%
2	甕 土師器	口径 19.1	口縁部は直線的に外反する。器面の剥落と磨滅が著しい。	B D F・褐色 ・ B	10%



第40図 第6号住居跡 (L=36.00m)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
3	長甕 土師器	口径 19.8	口縁部は強く外反し、口唇端部は更に摘まみ出される。器面の剥落と磨滅が著しい。	B D F・褐白色 ・ B	5%
4	甕 土師器	口径 21.3	口頸部は直立した後、強く外反し、口唇部で摘まみ出される。頸部に稜をもつ。器面は剥落と磨滅が著しい。	B D F・褐色 ・ C	5%
5	長甕 土師器	口径 23.3	口縁部は強く外反する。器面は剥落と磨滅が著しい	B D F・赤褐色 ・ C	20%
6	甕 土師器	胴径 28.2	粘土紐積み上げ成形。頸部下端にハケ目を残し、胴部は横方向の篋ケズリ。内面は指押さえとヨコナデ。	B D F・褐灰色 ・ B	10%
7	長甕 土師器	口径 23.3	口縁部は強く外反し、口唇端部でやや厚くなる。胴部は円筒形を呈す口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面は縦方向の篋ケズリ。器面は剥落と磨滅が著しい。	B E F・灰褐色 ・ B	20%



第41図 第6号住居跡出土遺物

(3) 掘建柱建物跡

第1号掘建柱建物跡 (第42図)

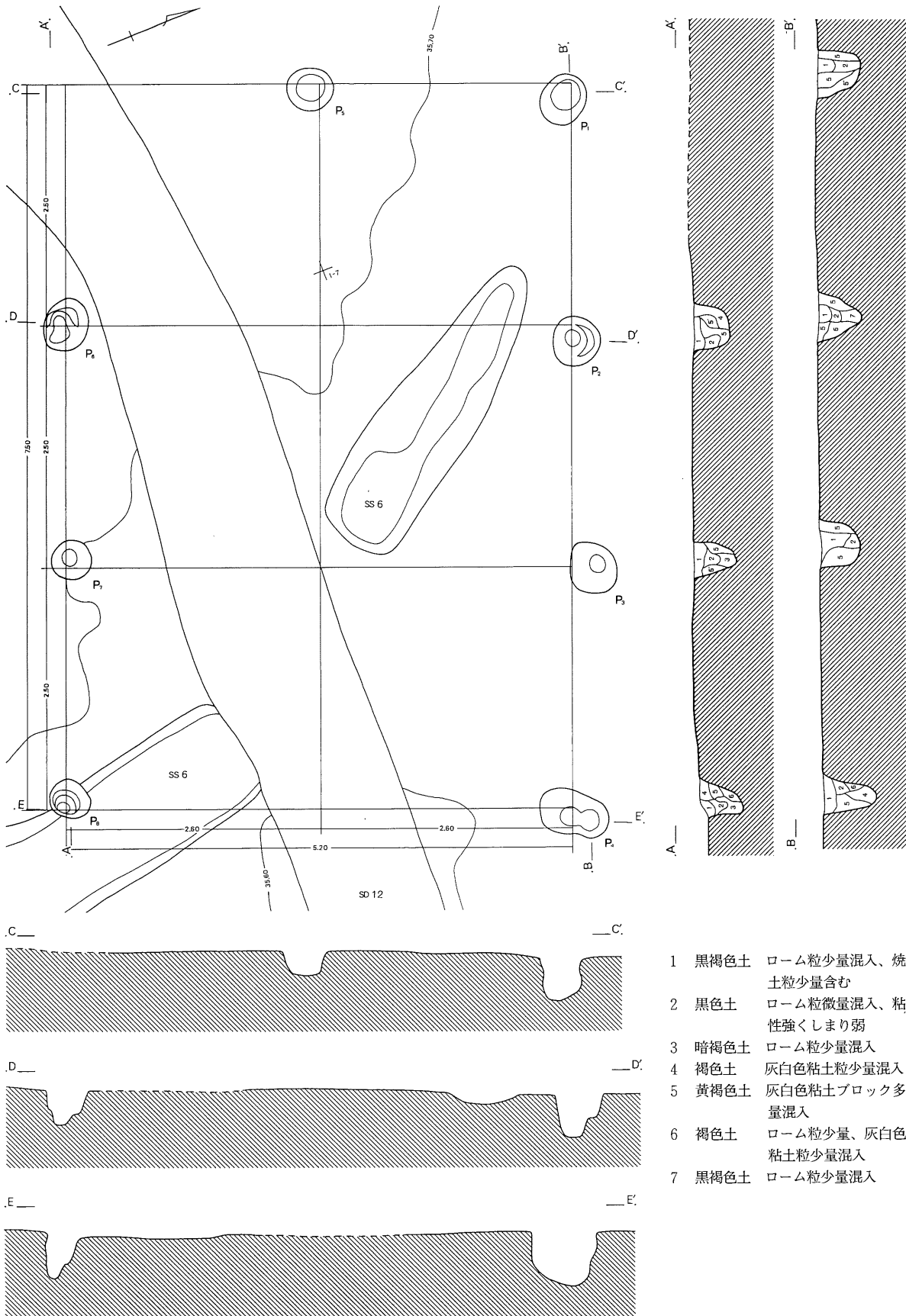
H、I-6、7 Grid に位置し、第6号墳周溝と重複する。北側へ約2mの距離に第2号住居跡、東南約3mに第3号住居跡が隣接する。重複する第6号墳との先後関係は明確にすることは出来なかったが、第6号墳よりも古いと考えておく。建物規模は3間×2間の側柱建物で、規模は桁行7.50m、梁行5.16mの東西棟である。柱間寸法は桁行2.50m、梁行2.58mを測り、梁行の柱間寸法が桁行よりも僅かに長い。南西隅と東側中央の柱穴は第12号溝により壊され、P3は柱穴ラインからやや外れる。主軸方位はN-69°-Wを指している。柱穴は径43~74cmの円形プランで、深さはP1=44、P2=44、P3=40、P4=56、P5=24、P6=36、P7=44、P8=42cmを測る。土層断面の観察ではP1~P3、P7、P8で柱痕が確認され、覆土にはローム粒を含む埋土がみられた。

出土遺物は、土師器長甕の小片が検出されたに過ぎない。

(4) 井戸跡

第1号井戸跡 (第43図)

調査区北西側のE-5 Grid に位置し、第6号土壌が重複する。西側に隣接して第2号溝が南北に縦走する。形態は隅丸長方形を呈し、中央部に楕円形の井戸が掘り込まれている。隅丸方形部の規模は、長軸3.48m、短軸2.38m、深さ26cmで壁は緩やかに立ち上がりテラス状を呈する。中央の井戸本体部の規模は径1.88m、確認面からの深さ1.60mを測り、断面形は北壁で垂直方向に立ち上がるのに対し、南壁は緩やかに傾斜しながら立ち上がる。本体部の底面には径44cmの円形の穴が掘り込まれている。覆土は自然堆積で、中層

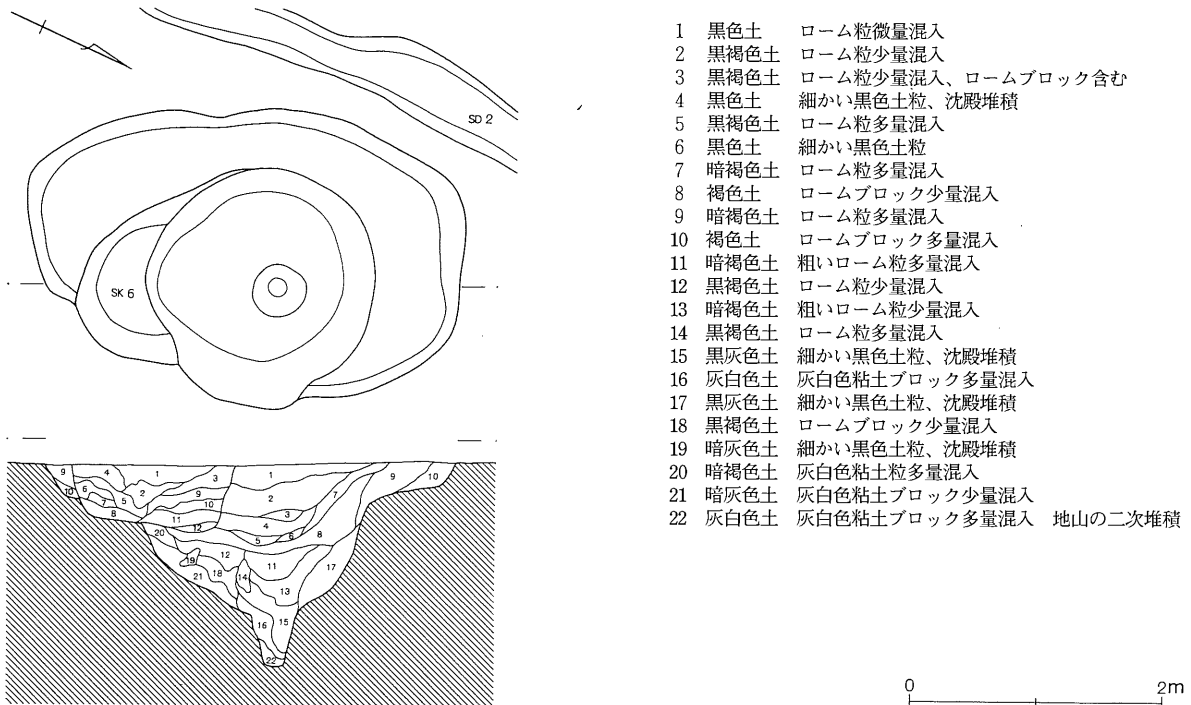


- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒少量含む
- 2 黒色土 ローム粒微量混入、粘性強くしまり弱
- 3 暗褐色土 ローム粒少量混入
- 4 褐色土 灰白色粘土粒少量混入
- 5 黄褐色土 灰白色粘土ブロック多量混入
- 6 褐色土 ローム粒少量、灰白色粘土粒少量混入
- 7 黒褐色土 ローム粒少量混入

第42図 第1号掘立柱建物跡 (L=35.90m)

から下層にかけて沈殿層が観察された。井戸の基底部は、粘土層であり湧水は僅かに粘土層からしみ出る程度である。

出土遺物は、ほとんど出土していないため時期については明確でないが、土層の観察から第1号住居跡とほぼ同じ時期と推定される。



第43図 第1号井戸跡 (L=36.10m)

(5) 溝

第1号溝 (第44図)

G~I-4~9 Grid に位置する。調査区中央を南北方向に走行し、第5、6号墳と重複する。全長約53m、幅0.71m、深さ17cmで断面形は播鉢形を呈する。遺物は出土していない。溝の北側の先には第2~5号土壌があり、土壌覆土に近似することから関連性が考えられる。時期については明確ではないが、覆土が第1号住居跡と同様に黒色土を基調としていることから古代に属するものと考えられる。

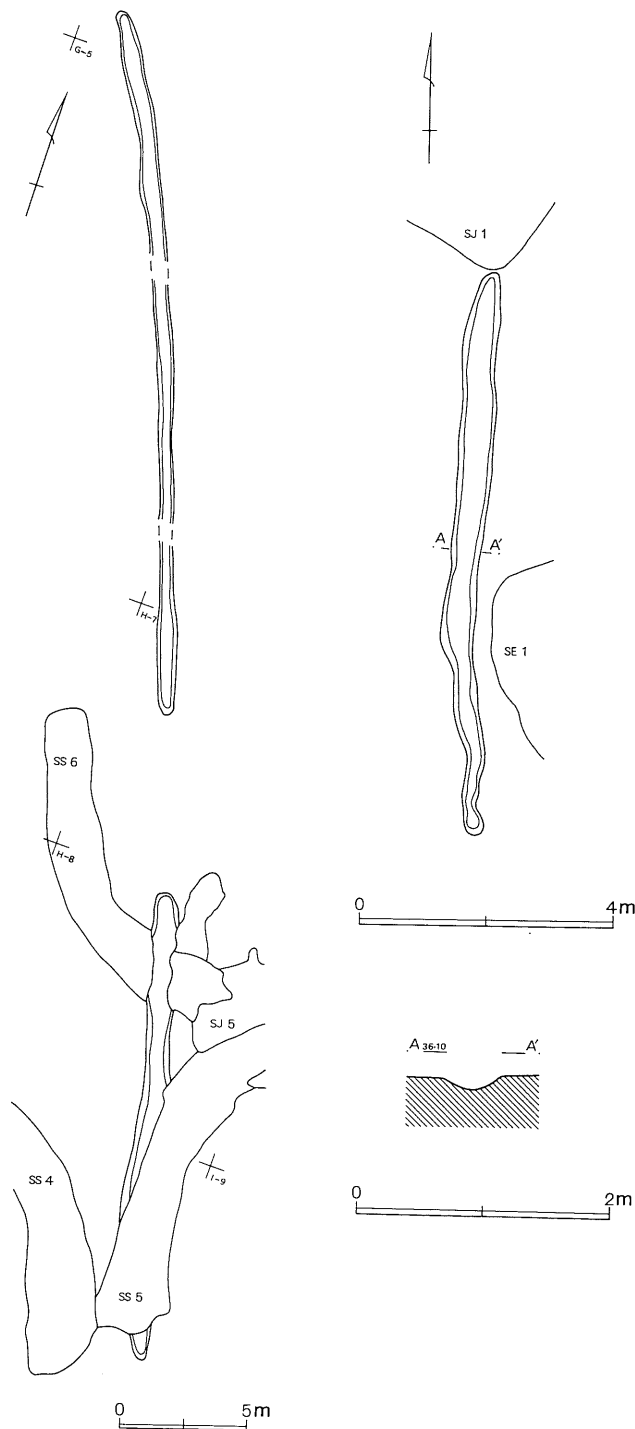
第2号溝 (第44図)

E-5、6 Grid に位置し、南北方向に走行する。北端には第1号住居跡と近接し、南東側には第1号井戸跡が所在する。全長8.98m、幅0.52m、深さ8cmで断面は皿形を呈する。覆土は黒色土を基調とする。遺物はないが、第1号井戸跡と何らかの関連をもつものかもしれない。第1号溝と同様に古代に属すると考えられる。

第3~12号溝 (第45~46図)

第3号溝から第12号溝は、覆土からみて全て近世以降の溝跡と考えられ、調査以前の地積図境界線と多くが重なる。

第3号溝は、調査区北側から第1号墳墳丘部を貫き南方向へ延びる。規模は幅約3.60~2.10m、深さ28cm前後を測り、北側では3回以上の掘り込みが認められた。覆土は表土層と似る。



第44図 第1・2号溝

第5号溝出土遺物 (第46図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	長甕 土師器	口径 20.2	粘土紐積み上げ成形。口縁部は「コ」の字状を呈し、口唇部は短く外傾する。胴部との境に明瞭な稜をもつ。口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面は横方向の筥ケズリ。内面横方向のヘラナデ。	BF・暗褐色 ・A	20%

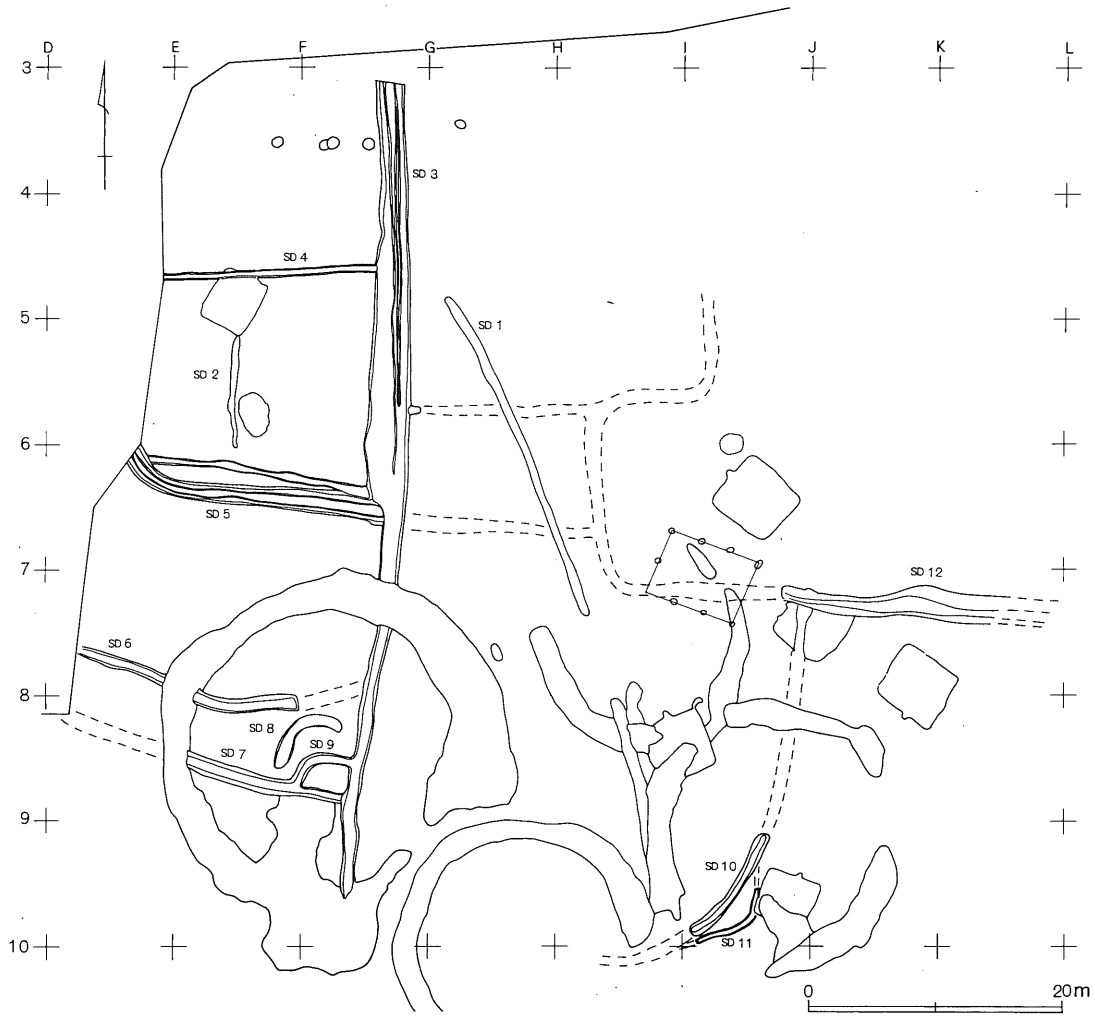
第4号溝は、第3号溝から第1号住居跡北壁を切って調査区西側へと延びる。規模は幅0.48m、深さ20cmで、溝底面は鋤歯状の凹凸が観察された。

第5号溝は、第3号溝から調査区西側へと延び、3回以上の掘り浚いが行われた。規模は幅3m、深さ25cmで、調査区西端で北方向へ曲がる。第4号溝と繋がる可能性がある。出土遺物は溝の西側覆土中より土師器長甕1点が出土した。

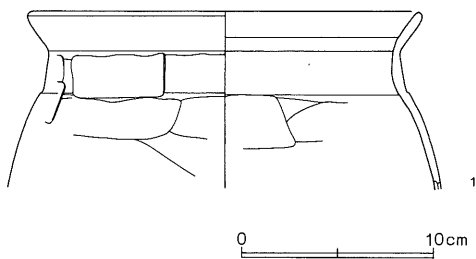
第6～9号溝は、第1号墳墳頂部若しくは主体部を介して相互に関連をもつ溝跡である。第6号溝は、東西方向を示す溝で調査区西側から第3号溝へと繋がる。溝は第1号墳主体部付近で、主体部を避けるように北へ向きを換える。第7号溝は第6号溝と約3.6m隔てた南側を平行して延び、第1号墳石室を貫き第3号溝と繋がる。第8、9号溝は第1号墳主体部を避けるようにして屈曲し、第8号溝が石室外側、第9号溝が石室を壊すように巡る。このように第6～9号溝は、第1号墳墳丘に対する削平に伴う溝と解し、その変遷は墳丘部から墳頂部、そして、石室へと次第に進み、最終的に石室を貫くという方向性を持っている。その前後関係は第6号溝→第8号溝→第9号溝→第7号溝と掘り込まれたと考えるのが妥当であろう。

第10、11号溝は、第4号墳墳丘部から第5号墳墳丘部を貫き、第12号溝へと曲線的に延びる。耕作地境界を墳頂部としたことによるものであろうか。

第12号溝は、調査区中央を東西方向に掘



第45図 第3～12号溝



第46図 第5号溝出土遺物

り込まれ、第6号墳、第3号住居跡、第1号掘建柱建物跡を切って掘り込んでおり、確認プランだけであるが西側や北側へと更に延びる。

(6) 土壇・集石土壇

土壇は、合計で8基検出され、そのうち第2号土壇から第5号土壇は調査区北西側に配列するように分布し、形態や規模においても類似する。覆土の観察から第1号溝との関連性が窺えるものであり、第1号土壇もこれらと同じ性格の土壇とみることができる。

第1号土壇 (第47図)

調査区西端のC-8 Grid に位置する。形態は円形で、規模は長径1 m、短径0.88 m、深さ15 cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかであり底面は平坦である。覆土は黒色土を主とし、遺物は出土していない。

第2号土壌 (第47図)

調査区北西部のE-3 Gridで、4基の土壌が東西方向に並ぶ。形態は円形で、規模は長径0.97m、短径0.88m、深さ5cmと非常に浅い。覆土は黒色土を主とし、遺物は出土していない。

第3号土壌 (第47図)

F-3 Gridに位置し、第4号土壌の一部を壊されている。形態は円形で、規模は推定長径0.86m、短径0.82m、深さ10cmである。覆土は自然堆積であり底面に黒色土粒の堆積が観察された。遺物は出土していない。

第4号土壌 (第47図)

F-3 Gridに位置し、第3号土壌と重複する。形態は円形で、規模は0.98m、短径0.94m、深さ12cmを測る。覆土は自然堆積であり底面に黒色土粒の堆積が観察された。遺物は出土していない。

第5号土壌 (第47図)

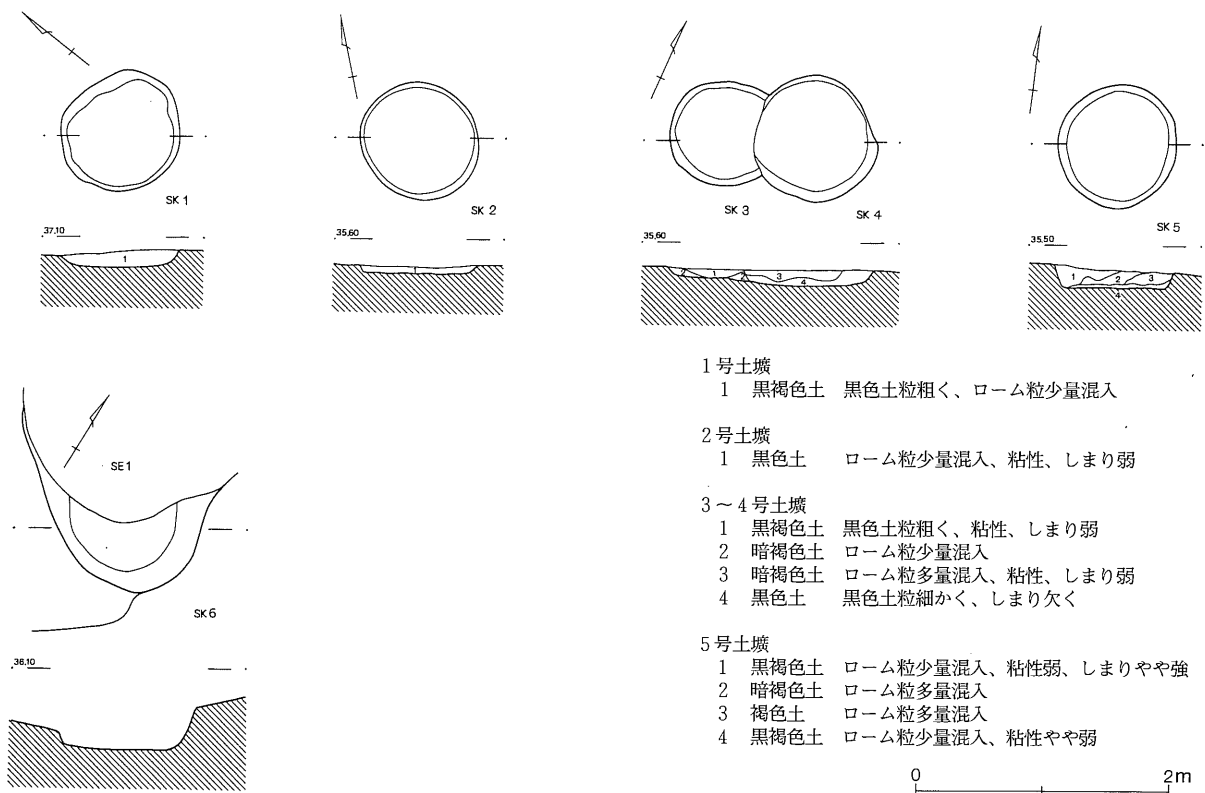
F-3 Gridに位置する。形態は円形で、規模は長径0.99m、短径0.92m、深さ9cmを測る。壁の立ち上がりは直線的で底面は平坦である。遺物は出土していない。

第6号土壌 (第47図)

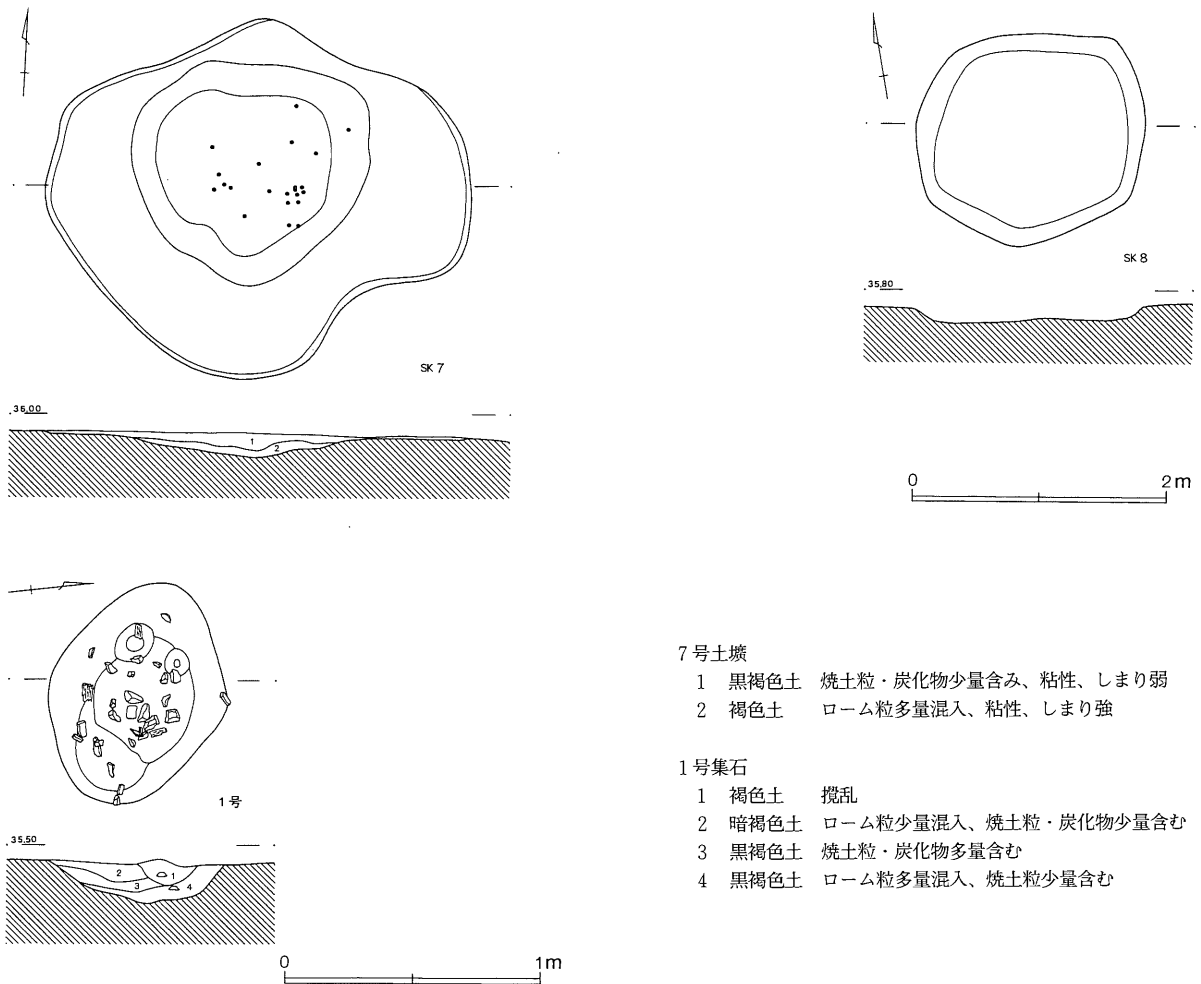
I-8 Gridに位置する。第1号井戸跡と重複し、井戸跡の覆土を掘り込んでいる。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.29m、短径(1.30)m、深さ53cmを測る。壁は傾斜しながら立ち上がり、底面は平坦である。遺物は出土していない。

第7号土壌 (第48図)

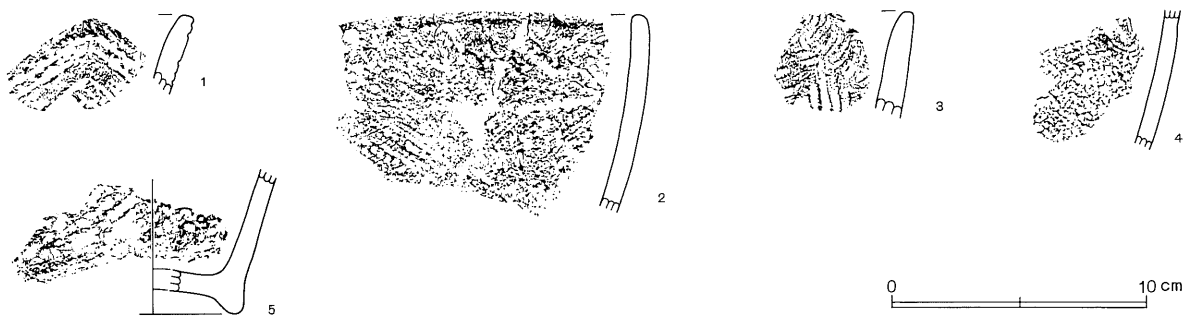
I-6 Gridで、第5号墳墳丘部に位置する。形態は不整形形で中央部で一段掘り込まれ、規模は長径



第47図 第1~6号土壌



第48図 第7・8号土壌・第1号集石土壌



第49図 第7号土壌出土遺物

1.70m、短径1.64m、深さ13cmを測る。覆土からは縄文時代前期黒浜式土器と礫、焼土、炭化物等が少量出土している。

第8号土壌（第48図）

I-5・6 Gridで第2号住居跡の北約1mに位置する。形態は隅丸五角形を呈し、規模は長径1.80m、短径1.67m、深さ13cmを測る。断面形は皿形で底面は平坦である。遺物は出土していないが、覆土や形態において第1～5号土壌とは違いをみる。

第1号集石土壙（第48図）

G-3 Grid に位置する。形態は不整形で規模は長径1.81m、短径1.29m、深さ35cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は北側で一段深くなる。礫は火熱を受け破碎し小さい。

第7号土壙出土遺物（第49図）

1は4単位の波状口縁を呈する。口縁に沿って半截竹管による平行沈線文と爪形文が施文される。胎土に多量の繊維を含む。2は器面の剥落が著しいが、羽状縄文が施文されているのであろう。3は口縁部に沿ってコンパス文を配し、地文は0段多条の羽状縄文が施文される。4はコンパス文と0段多条による羽状縄文を施文される。5は底部で上げ底の形態をとり、単節RLを縦位に施文する。

（7）グリッド出土遺物（第50、51図）**縄文土器（第50図1～4）**

阿諏訪野東遺跡の縄文土器は、早期から中期初頭の破片であり、遺構が検出された時期は、前期黒浜式期のみである。

1は早期後半から前期初頭にかけての、いわゆる条痕文系土器である。表裏に条痕文が施され、表面は斜位、裏面は縦位に施文される。胎土には植物性繊維の混入が認められる。

2は前期後半の諸磯b式期に比定される土器である。浮線文により横位の区画文様が描出され、浮線文には単一方向の刻みが施される。地文は磨滅が著しいため不明である。

3は前期後葉の諸磯c式期に比定される土器である。半截竹管により縦位の区画が施され、その間を矢羽根状の沈線が充填される。器面は剥落が著しい。

4は中期初頭の五領ケ台式期に比定される土器である。頸部に刻みをもつ隆帯が巡り、その隆帯に沿って半截竹管による平行沈線文が施文される。沈線には連続的な刺突が施されている。

石器（第50図5～第51図4）

阿諏訪野東遺跡からは、石鏃、石匙、打製石斧、敲石・磨石・凹石が検出された。

石鏃（第50図5～12）

完形品3点、欠損品5点の計8点が出土している。形態の分類は、茎の有無、基部の形態、側縁の形態等によって分けられた。

1類（第50図5）5は凸基有形の石鏃で、薄身である。先端は作り出している。2類（第50図6、10～12）基部の挟りが比較的明確なもの。3類（第50図8、9）基部の挟りが不明確なもの。4類（第50図7）基部の挟りがないものである。

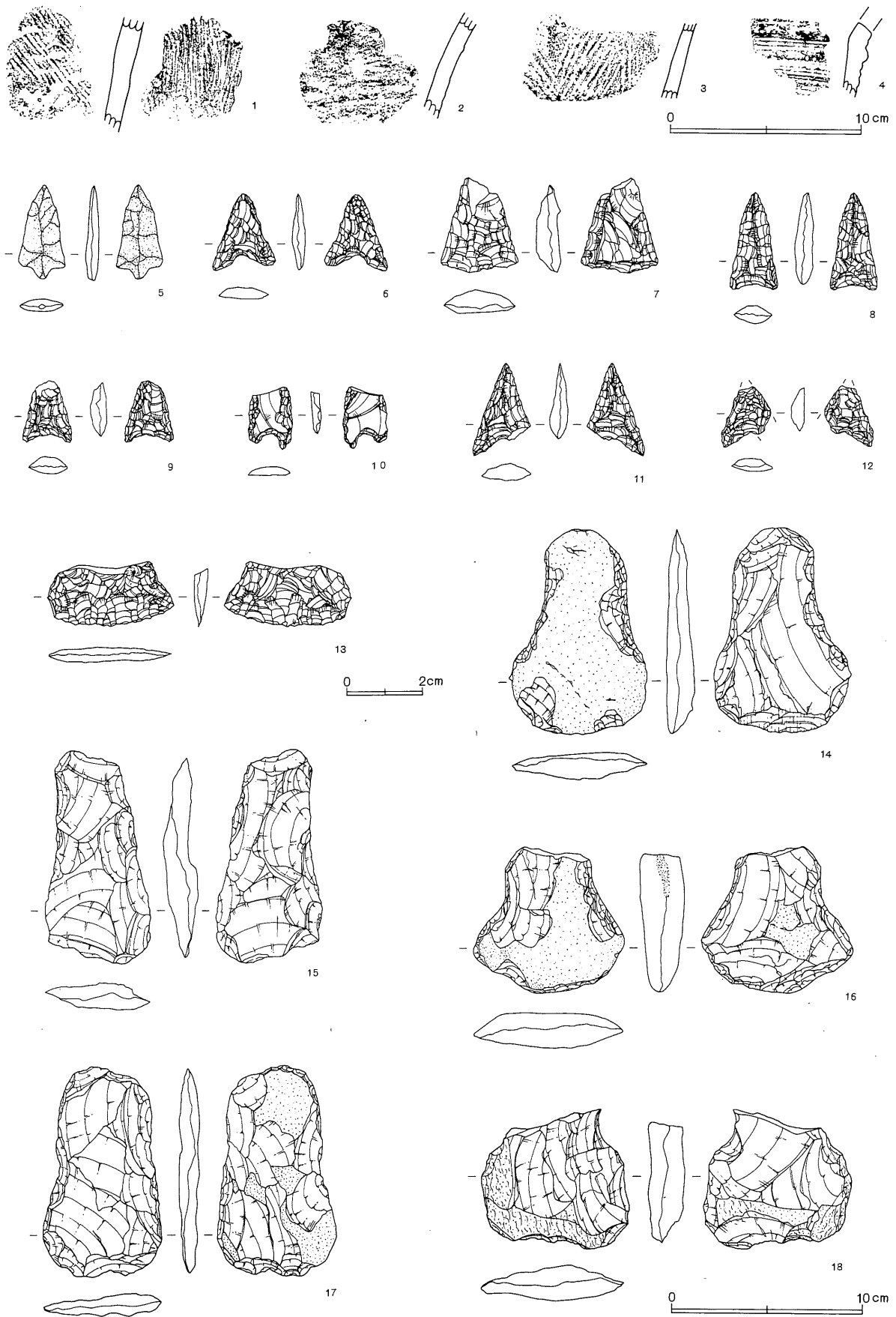
打製石斧（第50図14～18）

形態の分類は、1類（14）所謂撥形を呈するものであり、片面に自然面を残す。刃部は丸歯である。2類（15、17）短冊形を呈するもの。刃部は一部欠損している。3類（16、18）分銅形を呈するもの。欠損しているが、刃部幅に対して挟りが深いことにより本類とした。部分的に自然面を残す。

石匙（第50図13）両面加工で刃部は直線状になる。つまみ部は欠損している。

敲石・磨石・凹石（第51図1～4）

敲石・磨石・凹石は、その用途により石器を使い分ける場合よりも、1点の石器が複合的な用途として用いられることが多い。ここではその使用痕により分類する。1は磨石で片面に磨耗痕を有する欠損品である。2、4は凹穴と敲打痕を有し、2は欠損品である。3は両面に凹穴を有する。



第50図 グリッド出土遺物(1)



第51図 グリッド出土遺物(2)

第2表 石器計測表

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
50-5	1号墳前庭部	石 鏃	2.5	1.2	0.3	1.2	頁 岩	
6	4号墳周溝	石 鏃	1.5	1.3	0.3	0.6	チャート	
7	4号墳周溝	石 鏃	2.4	2.0	0.6	3.2	チャート	
8	6号墳周溝	石 鏃	2.4	1.1	0.4	1.7	チャート	
9	4号墳周溝	石 鏃	1.4	1.2	0.4	0.3	チャート	
10	6号墳周溝	石 鏃	1.1	1.1	0.2	0.4	黒曜石	
11	E-4	石 鏃	2.0	1.3	0.4	0.6	チャート	
12	6号墳周溝	石 鏃	1.1	1.0	0.3	0.2	黒曜石	
13	5号墳周溝北	石 匙	1.5	3.3	0.3	3.4	黒曜石	
14	1号墳周溝	打製石斧	10.7	7.0	1.4	126	頁 岩	
15	6号墳周溝	打製石斧	10.5	5.5	1.6	109	ホルンフェルス	
16	1号墳	打製石斧	7.3	7.7	2.3	150	砂 岩	
17	G-7	打製石斧	11.0	6.2	1.1	102	ホルンフェルス	
18	6号墳周溝	打製石斧	7.2	7.5	1.9	129	ホルンフェルス	

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
51 - 1	G-7	磨石	9.4	5.0	5.3	340	角閃石安山岩	
2	6号土壙	凹石・敲石	11.3	7.0	7.4	793	閃緑岩	
3	6号土壙	凹石	12.7	9.2	5.4	291	閃緑岩	
4	4号墳周溝	凹石・敲石	13.4	9.8	3.4	376	閃緑岩	

Higashiyama— I · II

東山遺跡 I 区 · II 区

V 東山遺跡 I 区・II 区の調査

1. 遺跡の概要

東山遺跡は、東平台地の北部に位置する。この東平台地は、西が比企丘陵、東は吉見丘陵とに挟まれ、台地南限を滑川を境とし、北は和田吉野川による沖積地に至るまでの標高60～30mの台地である。行政界は東松山市東平・岡、大里村青山・箕輪、吉見町田甲である。台地は、和田吉野川や滑川により樹枝状に開析されたさまざまな支谷が数多く存在し複雑に割された台地を形成している。遺跡群は北へ開口する3条の小支谷が存在し、台地はそれぞれが独立状の舌状台地を形成している。本遺跡はその小支谷の一つである「桜谷の谷」の最奥部東側に位置し、調査区は南東方向へのびた舌状台地上に立地する。また、本台地から北へ分岐した台地には楓山西遺跡と楓山北遺跡が存在する。

発掘調査は、工事施行時期と農作物の収穫時期の都合により調査範囲である台地を東西に二分し、西側をI区、東側をII区と区分して調査を行い、報告もその区分名を使用した。調査区は比較的平坦であるが全体的に南に向け緩やかに傾斜する地形を呈しており、標高は47m前後を測る。台地頂部付近にはソフトローム層が残るものの流失によりその堆積は極めて薄い。調査面積29,579m²で、基本的な層序はI層表土、II層褐色でソフト・ローム、III層暗褐色でハード・ローム、IV層黄褐色の粘土、V層灰白色の粘土である。

検出された遺構は、先土器時代の生活跡1箇所、住居跡17軒、竪穴状遺構3基、前方後円墳1基、円墳1基、土壇94基、集石土壇・集石17基、火葬墓4基、井戸跡1基、埋没谷遺物包含層1箇所、溝23条である。

先土器時代は、台地中央部のソフトローム層中より、ナイフ形石器4点と黒曜石の剥片類が出土し、隣接して礫群1箇所が検出された。縄文時代に属する遺構は、住居跡17軒、屋外埋甕4基、土壇67基、集石土壇13基、集石4基である。住居跡の構築時期は、前期黒浜式期3軒、諸磯b式期1軒、中期加曾利EⅡ式(新)4軒、加曾利EⅢ式(古)5軒、加曾利EⅢ式(新)1軒、不明3軒である。

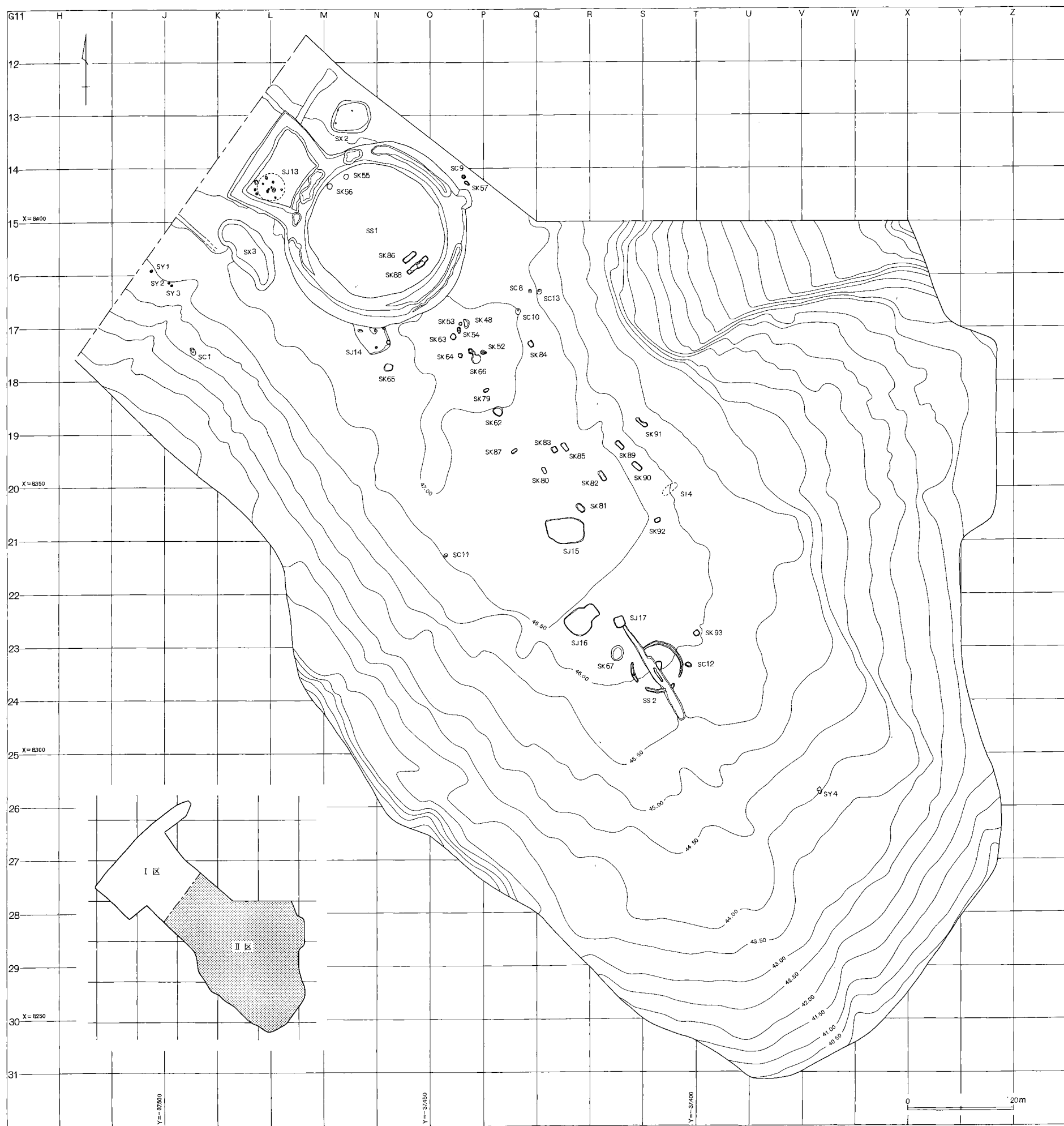
本遺跡における住居跡は時期によってその占地に違いがみられ、前期の住居跡はII区とした台地中央部から東側の地域に分布し、土壇においても同様な傾向が窺える。中期になるとI区とした台地基部にあたる西側地域に住居跡群が形成されるようになる。中期の遺構を更に時期別にみると勝坂式終末期段階に位置付けられる第14号土壇が検出されており、この時期が東山遺跡中期の始期にあたる可能性が強い。この時期以降断続的ではあるが加曾利E式期の集落が営まれる。グリッド出土遺物では、縄文時代早期の撚糸文系土器から後期加曾利B式土器までが検出され、埋没谷遺物包含層では中期勝坂式期から加曾利E式期にかけての遺物が多量に検出されている。

古墳時代では、台地中央部に前方後円墳1基、台地先端部に円墳1基が検出されている。第1号墳とした前方後円墳は、後円部が全周することから、当初円墳として築造されたが、その後短時間のうちに前方部が造りだされた古墳である。墳丘部は既に削平されており主体部は検出されなかった。石室の正面にあたる周溝より石室の石材として使用された凝灰岩や緑泥片岩が多数検出されるとともに須恵器のフラスコ形長頸壺が出土した。また、第1号墳の南に隣接して、古墳に伴う大型の竪穴状遺構1基が検出されている。第2号墳とした小形の円墳も第1号墳と同様に墳丘は削平されていたが石室の根石が検出された。

奈良・平安時代では、火葬墓4基、土壇4基、竪穴状遺構1基が検出されており、火葬墓のうち3基は前方後円墳に近接して検出された。第70号土壇では多量の焼土と炭化物が検出されたことから火葬に伴う墓壇と考えられる。



第52図 東山遺跡 I 区全体図



第53図 東山遺跡Ⅱ区全体図

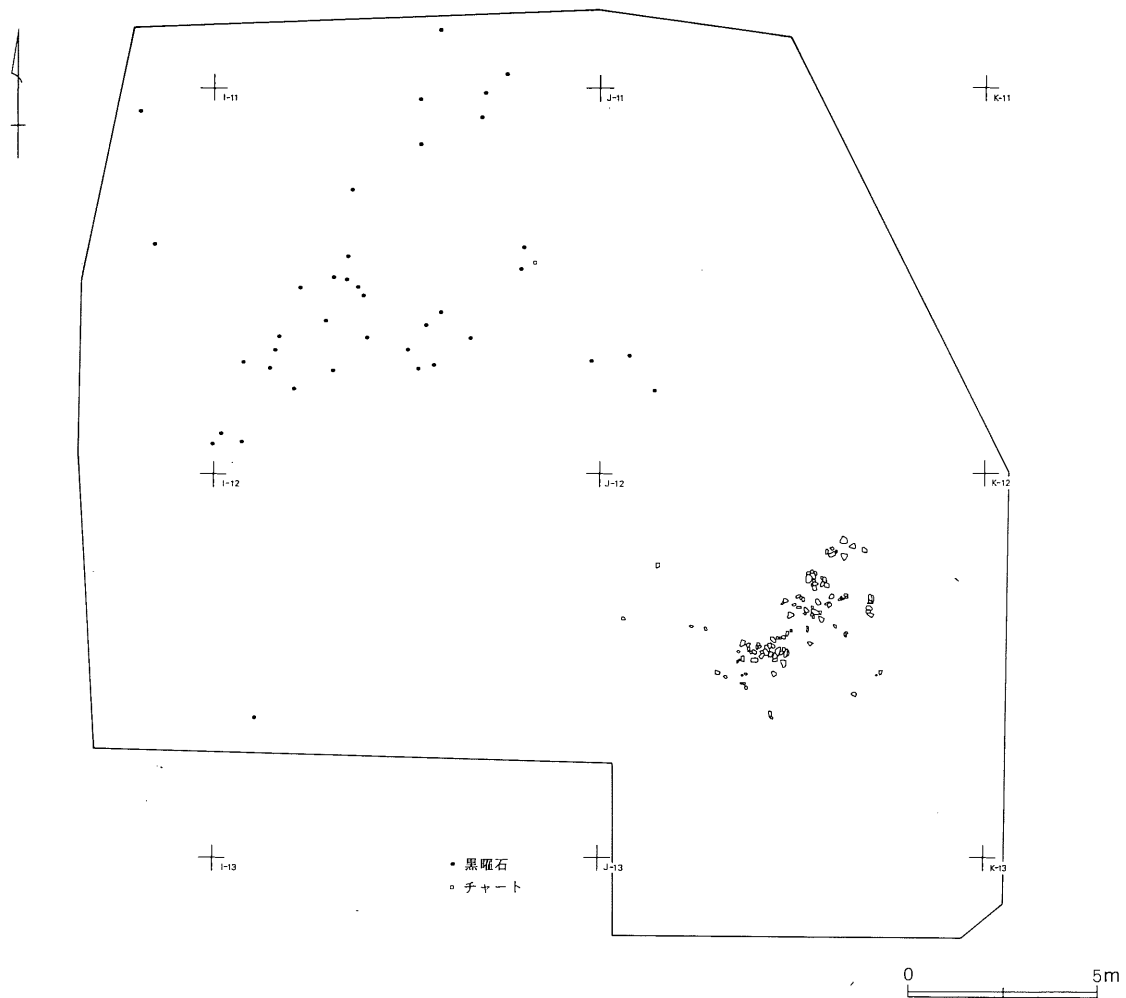
2. 先土器時代の遺構と出土遺物

東山遺跡 I・II 区の地形と基本土層については、前節で述べた通りであるが、第Ⅲ層としたソフトローム層の堆積範囲は、標高47m ライン以上の台地平坦面において確認することはできるが、その層厚も浅く18cmを測る程度しかない。また、第Ⅳ層においても調査区内や遺跡群全域に堆積が見られるものの台地平坦面と斜面部とでは、その堆積の厚さに大きな開きを示している。このことは富士箱根系や北関東系の火山灰降下範囲の縁辺部であったとともに堆積層に対する自然営力による流失の影響が強いために引き起こされた現象とみることができ、その立地環境により先土器時代の遺構や遺物は、少なからず影響を受けているものと考えらる。

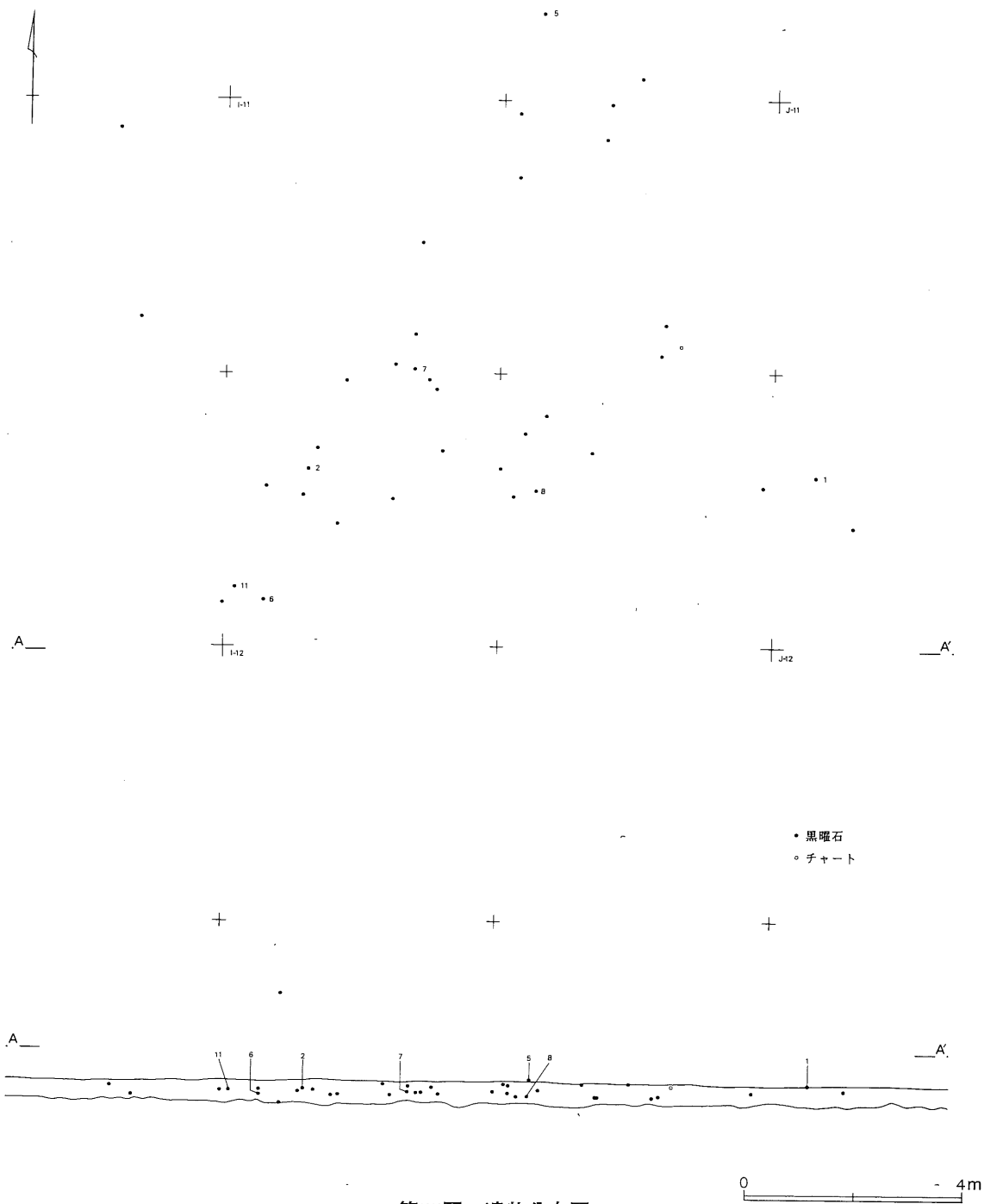
(1) 遺物分布

先土器時代の調査は、第12号住居跡の調査中にナイフ形石器2点を出土したことが契機となり、その際に周辺を精査したところ付近のローム面に炭化粒の分布が認められたため調査を進めることになった。調査の区域は、第12号住居跡周辺に5mグリッドの深掘区を設定し、適時拡張を行った。その結果、第Ⅲ層のソフトローム層からブロック1箇所と礫群1箇所を検出した。(第54、55図)

ブロックとして把握できるような石器群の出土範囲は、I-11Gridを中心に東西約13m、南北約11mの正方形の比較的広い範囲に分布し、密度はまばらな平面分布を示していると言えよう。範囲とした南側には第



第54図 先土器時代遺構



第55図 遺物分布図

12号住居跡が所在しているが、住居跡による第Ⅲ層への掘り込みは炉跡や柱穴だけであることからブロックの範囲はそれほど変わるものではないと考えられる。垂直分布では厚さ18cmのソフトローム層の範囲であり、遺物の中には第Ⅳ層ハードローム直上まで下がるものもあるが、層を越えて出土したものはない。また、炭化物の分布も濃密な分布を示すものではなくブロックと同様に第Ⅲ層中に収まる。

石器の総数は6点で、製品は黒曜石製のナイフ形石器4点、石核1点、削器1点、剥片類17点、碎片13点、チャートの剥片1点である。

礫群は、J-12Gridで検出された(第56図)。ブロックの中心から南東へ約12mの距離に位置し、礫群との重複はみられない。また石器等の出土もなかった。礫群は拳大以下の破碎した礫を含む小礫が計126点に



第56図 礫群 (L=47.40m)

より構成されたものであるが、南西側は溝により切られ詳細は不明である。平面分布は北東 ↔ 南西に軸をもち、密集部分はおよそ長軸2.5m、幅1mの範囲で、その周囲に礫が散在する。垂直分布は第56図で示したとおりレベル差を持たずにほぼ水平である。微視的に見るならば4箇所では礫の重なり合う状況が窺えるが、積み重ねられたような集中ではなかった。礫のほとんどは赤化しており、スス状の付着物も若干認められる。炭化粒は集中することなくまばらに認められた程度である。

(2) 出土石器

ナイフ形石器 (第57図)

1は、先端を欠損する。形態は先端と基部が尖るものと思われ、左右非対称の菱形を呈する。縦長剥片の素材とする二側縁調整加工が施されたものであり、石刃状剥片の形状をあまり変えていない。主要剥離面の打点の方向は先端部にあるが残置していない。正面基部にはBluntingの施された後の加工が加えられ、基部の厚さを減じている。2は、左右対称の菱形を呈する。縦長剥片を素材とする二側縁調整加工が施され、片側縁は基部から先端部にかけて裏面から丁寧に加工されている。主要剥離面の打点の方向は先端部にあるが残置していない。基部では正面から調整が加えられている。断面形態は両側縁と表面の稜線により三角形を呈する。3は、基部を欠損するが形態は菱形を呈すると思われる。薄い縦長剥片を素材とする二側縁調整

加工のもので、主要剥離面の打点の方向は先端部にあるが残置していない。4は、細身な菱形で左右対称の形態であり、石材は唯一のチャートである。縦長剥片を素材とする二側縁調整加工のものであり、調整加工は裏面から施され右側縁先端の調整加工は稜線上におよぶ。刃部方向は左刃であり他の3点とは異なる。断面形は三角形を呈する。

石核 (第54図5)

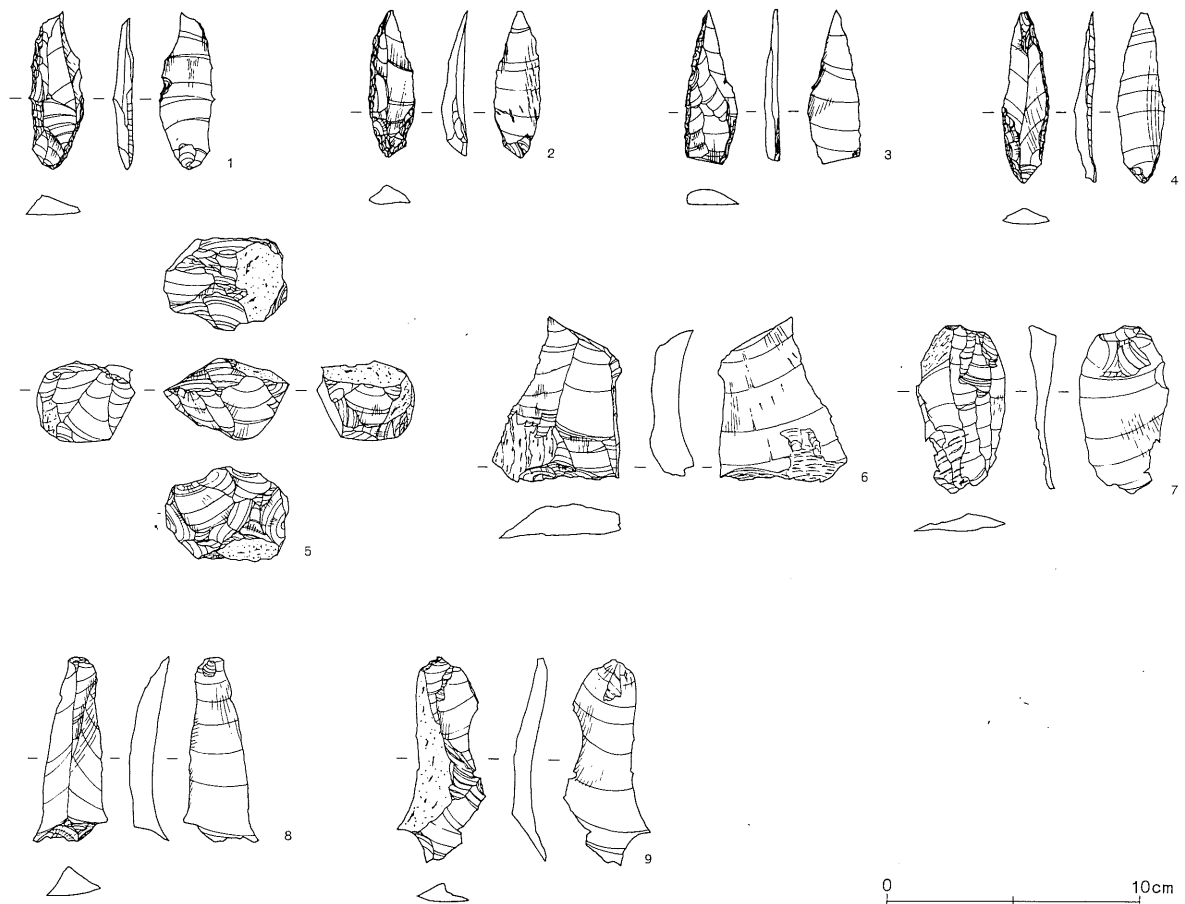
円錐形に近い形状を呈し、縦長剥片を剥がしている多面調整のある石核である。側面に平坦な原石面を残す。石器石材は黒曜石である。

削器 (第54図6)

幅広の縦長剥片を用いられている。主要剥離の打点の方向は先端部にあるが、残置していない。調整加工は下縁と右側縁に微細な剥離が施されているのが観察され、削器と考えられる。石材に気泡を含む。

剥片 (第54図7~9)

剥片は全体で17点出土しているが、縦長剥片のものと小形の幅広のものがある。図示した7、8は、打面調整がみられる。



第57図 出土石器

第3表 石器計測表

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
57-1	J-11	ナイフ形石器	2.9	1.0	0.4	1.5	黒曜石	
2	I-11	ナイフ形石器	2.9	0.9	0.4	1.1	黒曜石	
3	I-11	ナイフ形石器	2.9	1.0	0.3	0.7	黒曜石	
4	I-11	ナイフ形石器	3.4	0.9	0.4	1.3	チャート	
5	I-11	石核	1.9	2.4	2.2	7.8	黒曜石	
6	I-11	削器	3.1	2.5	0.7	6.1	黒曜石	
7	I-11	剥片	3.3	1.8	0.5	3.3	黒曜石	
8	I-11	剥片	3.7	1.1	0.4	2.7	黒曜石	
9	I-11	剥片	4.0	1.4	0.4	2.4	黒曜石	

3. 縄文時代の遺構と出土遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡(第58～64図)

E-8 Grid に位置する。Ⅰ区西側の台地平坦面で検出され、標高47.80mである。平面形態は円形というよりも隅丸方形を呈し、長径5.03m、短径4.45m、深さは最大で17cmを測る。主軸方位は1号炉と埋甕間でN-13°-Wを示している。

住居跡の覆土は、黒褐色土を基調とした自然堆積による埋没である。壁は緩やかに立ち上がり、床面は概ね平坦であるもののやや堅さを欠いていた。付属施設である壁溝は確認されなかった。住居跡の東側と南側に土壌が検出されたが、住居跡との関係は不明である。ピットは19基検出されているが、深さや位置関係から支柱穴となるのはP1～P9の9本が相当しよう。P1=11cm、P2=12cm、P3=11cm、P4=19cm、P5=23cm、P6=15cm、P7=23cm、P8=12cm、P9=19cmを測る。

炉跡は2箇所検出された。1号炉は住居跡中央やや西寄りに構築された石囲土器埋設炉である。掘り込みは東西に長い楕円形を呈しており、規模は長径1.11m、短径1.08m、深さ15cmである。炉縁石は正方形に配される。第60図1の炉体土器は炉東側寄りに埋設され、炉の中央に傾けた状況が観察されている。炉縁石の内側には第61図2などの胴部破片が炉を囲むように据え置かれていた。炉内には多量の焼土がみられたが、埋設された土器には二次焼成を受けた痕跡がみられなかった。2号炉は住居跡中央に構築され、西側に隣接する1号炉と重複する。炉跡の形態は不正円形を呈し、第60図2の埋設土器を伴う。掘り込みの規模は長径62cm、短径50cm、深さ6cmである。1号炉との新旧関係は、炉跡の遺存状況からみて1号炉が新しい。

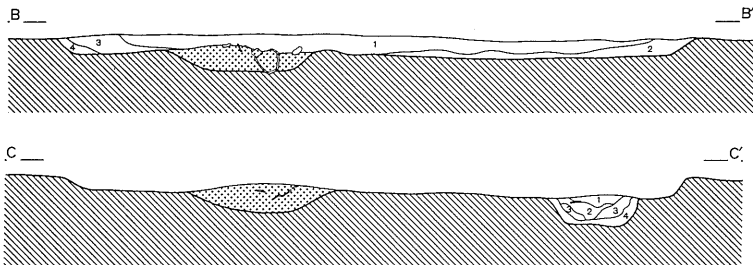
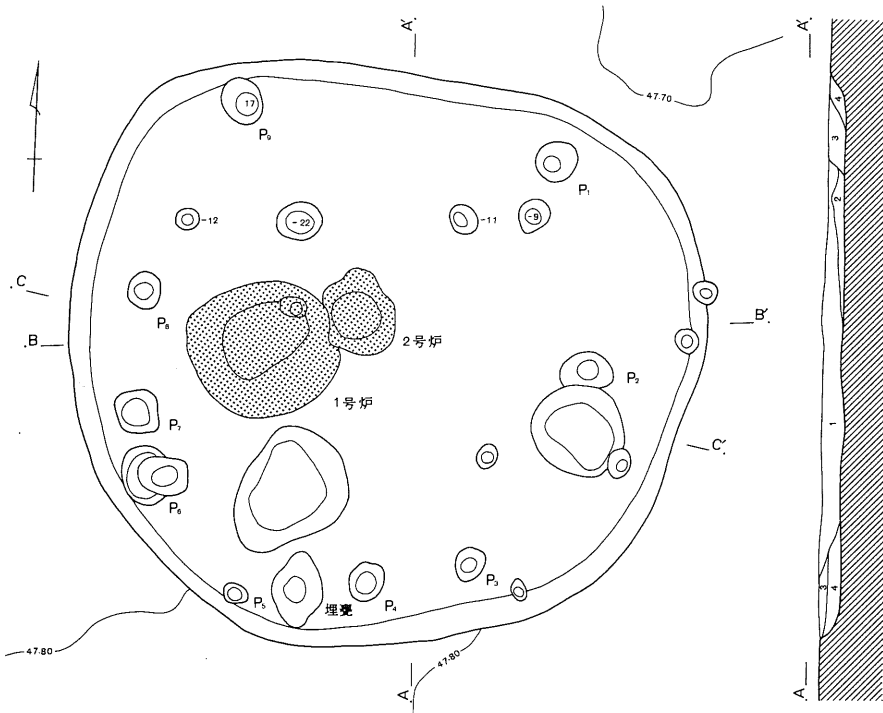
埋甕は住居南西壁際に位置し、掘り込みは長い楕円形で埋甕は北寄りに埋設されていた。土器は深鉢で口縁部の一部を欠き、正位に埋設されている。

本住居跡からの出土遺物は、覆土が確認されたことにより多量の出土をみた。実測がなされた土器は埋設土器、埋甕を含め9個体である。出土状態では、炉の周辺に大形破片の集中がみられるが、壁際周辺は希薄な分布である。時期は加曾利EⅡ式の新段階に比定されよう。

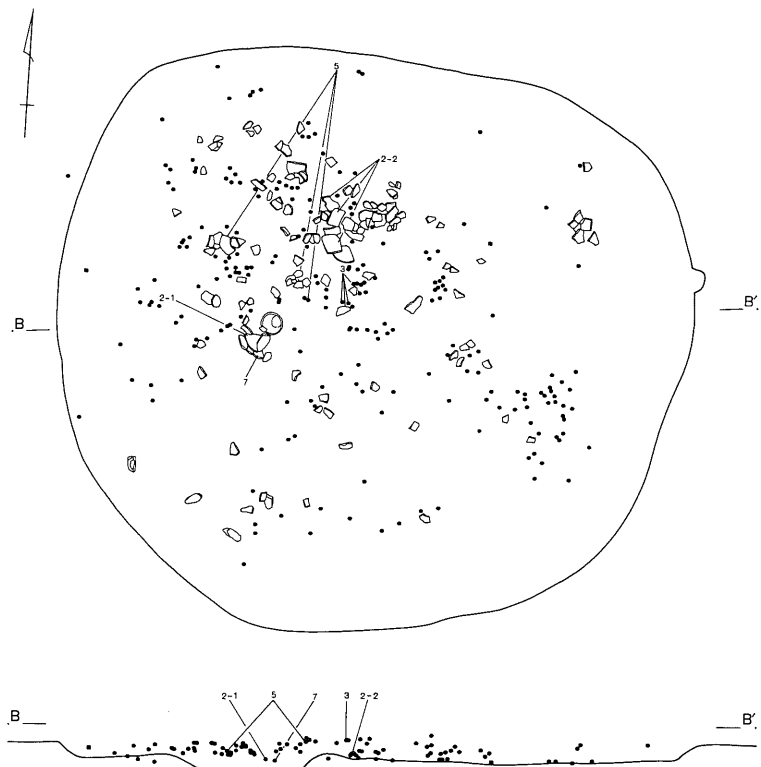
出土遺物(第60～64図)

住居跡のなかで最も多くの遺物を検出した住居跡であるが、このことは本住居跡が唯一壁が全周するだけの掘り込みを有していたことによる。

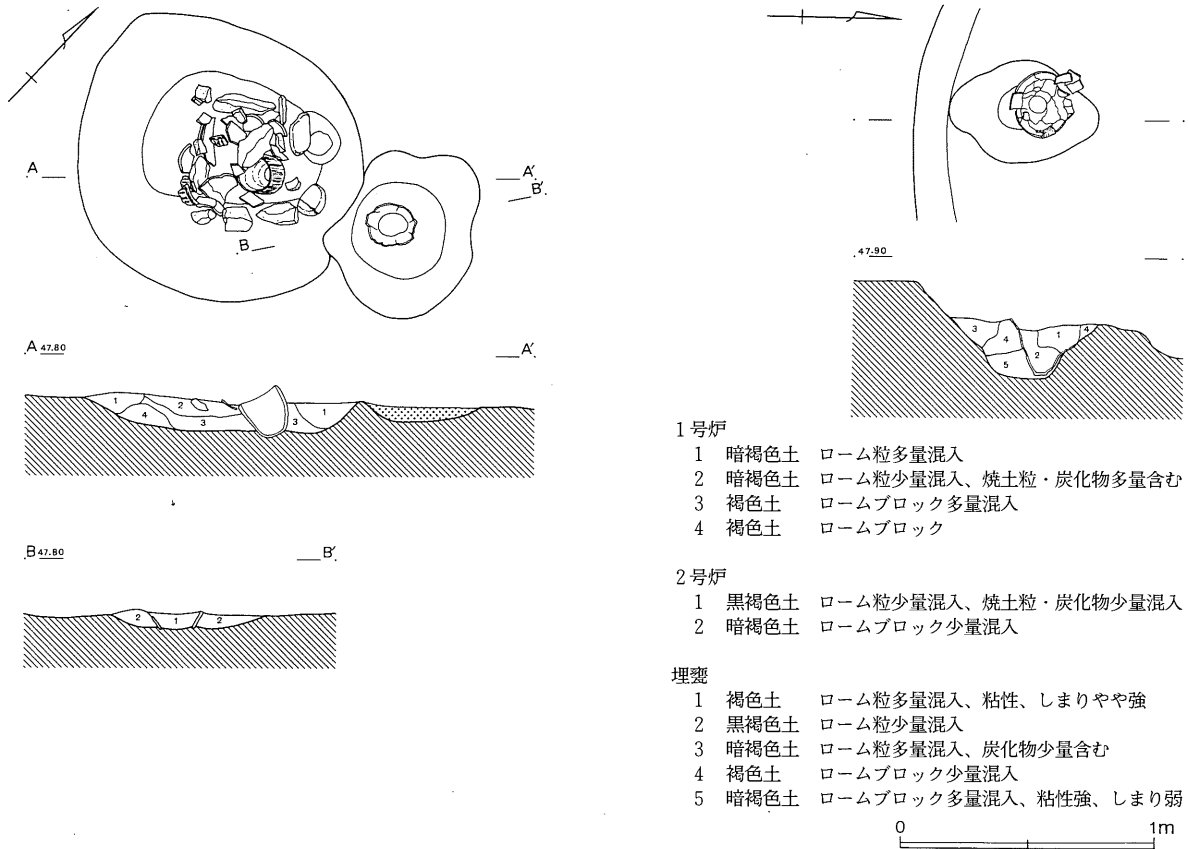
第60図1は1号炉跡に使用された完形の炉体土器である。口縁部がやや内湾ぎみに立ち上がる深鉢形土器



- | | | |
|---|------|------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒多量混入、焼土粒微量含
み、粘性、しまり弱 |
| 2 | 黒褐色土 | ローム粒少量混入、炭化物少量含
む |
| 3 | 暗褐色土 | ロームブロック少量混入 |
| 4 | 褐色土 | ロームブロック多量混入、粘性強、
しまり弱 |



第58図 第1号住居跡・遺物分布図 (L=47.90m)



第59図 第1号住居跡炉跡・埋甕

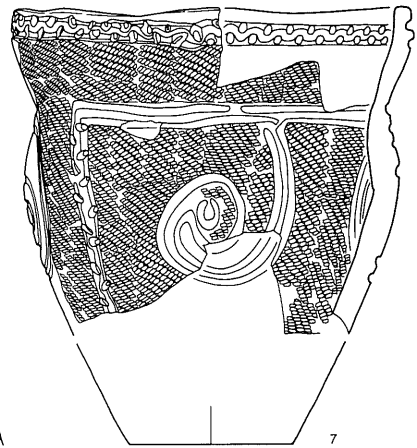
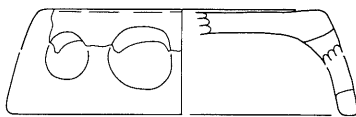
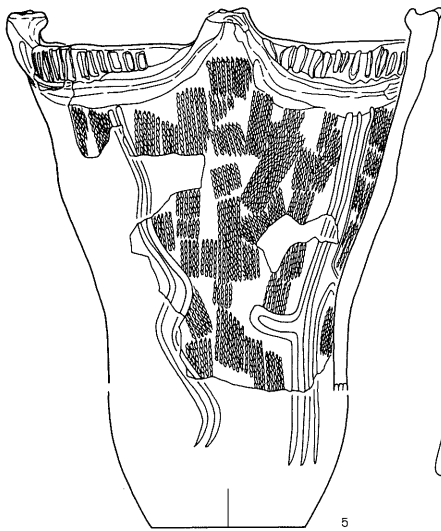
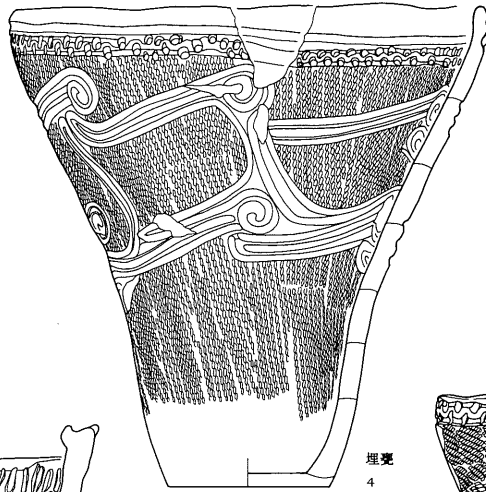
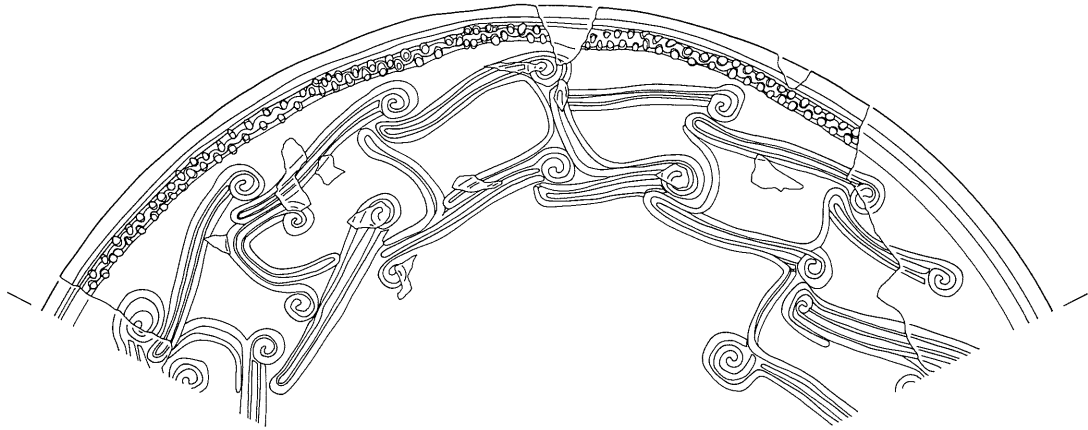
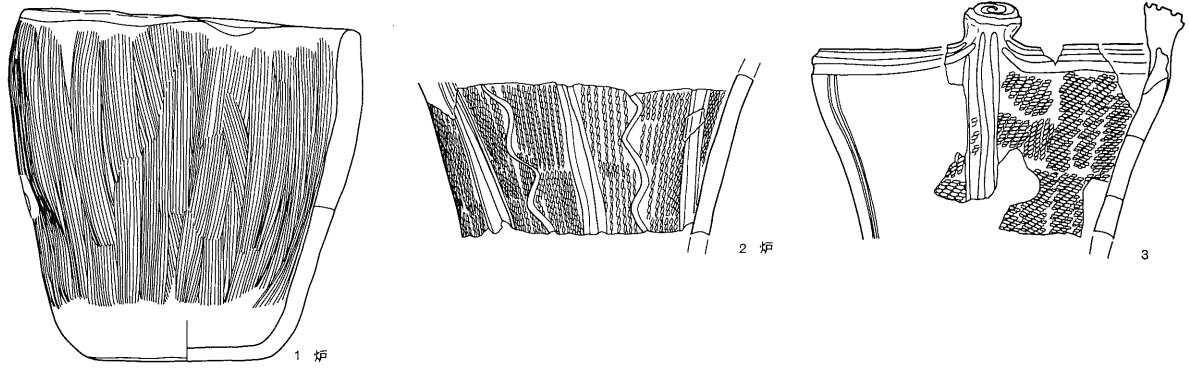
で、器面全体を櫛歯状工具による条線が施文される。施文順序は下位→上位である。

2は2号炉の炉体土器で、口縁部と胴下半を欠失している。器形はキャリパー形を呈する深鉢形土器と思われる。2本1単位の懸垂文と1本の蛇行懸垂文が交互に描かれ、懸垂文間は磨消されていない。地文は撚糸Lの縦位施文である。

3は器形が緩やかに開く深鉢形土器で、口唇部は鋭角をなす。口縁には3単位構成の把手が貼付られ渦巻文が施されている。口縁には把手間を繋ぐ2本の平行沈線文が施文される。胴部は把手下から垂下する3本1単位の懸垂文が6単位施文され、沈線間は地文が一部残る程度のナデが施されている。地文は単節RLを縦位施文する。

4は埋甕で、器形は直線的に外反し、口唇部で直立する平口縁の深鉢形土器である。口縁部の一部が欠損しているがほぼ完形に近い。口縁下には3本沈線が巡り、このうち下位の2本の沈線には上下からの交互刺突文が加えられている。胴部文様帯の構図は下向渦巻文と杵状沈線の組み合わせによる単位文を上下二段に連続して描出され、上段は7単位、下段に5単位配される。また上段の渦巻文側線から下段渦巻文側線へと連結し杵状化を呈す。文様構成は単位文の連続性を表出しているが複雑な連結がみられ単位数にも疑問をもつ。沈線間はナデられているものの意識した磨消はみられない。地文は撚糸Lの縦位施文である。

5は胴部で弱く括れ、口縁部に向け直線的に開く深鉢形土器である。口縁部文様帯は隆帯による幅狭な孤状区画文と4単位の突起が配される。突起には沈線による渦巻文が描かれ、沈線は文様帯下位区画脇へと延びる。孤状区画内には縦走する短沈線が充填される。胴部は3本1単位の懸垂文と2本1単位の蛇行懸垂文が交互に施文され、沈線間はナデられている。懸垂文は胴下半部で蕨手状に描かれる。地文は原体幅が狭く



第60图 第1号住居跡出土遺物(1)

て細い撚糸Rを縦位施文する。

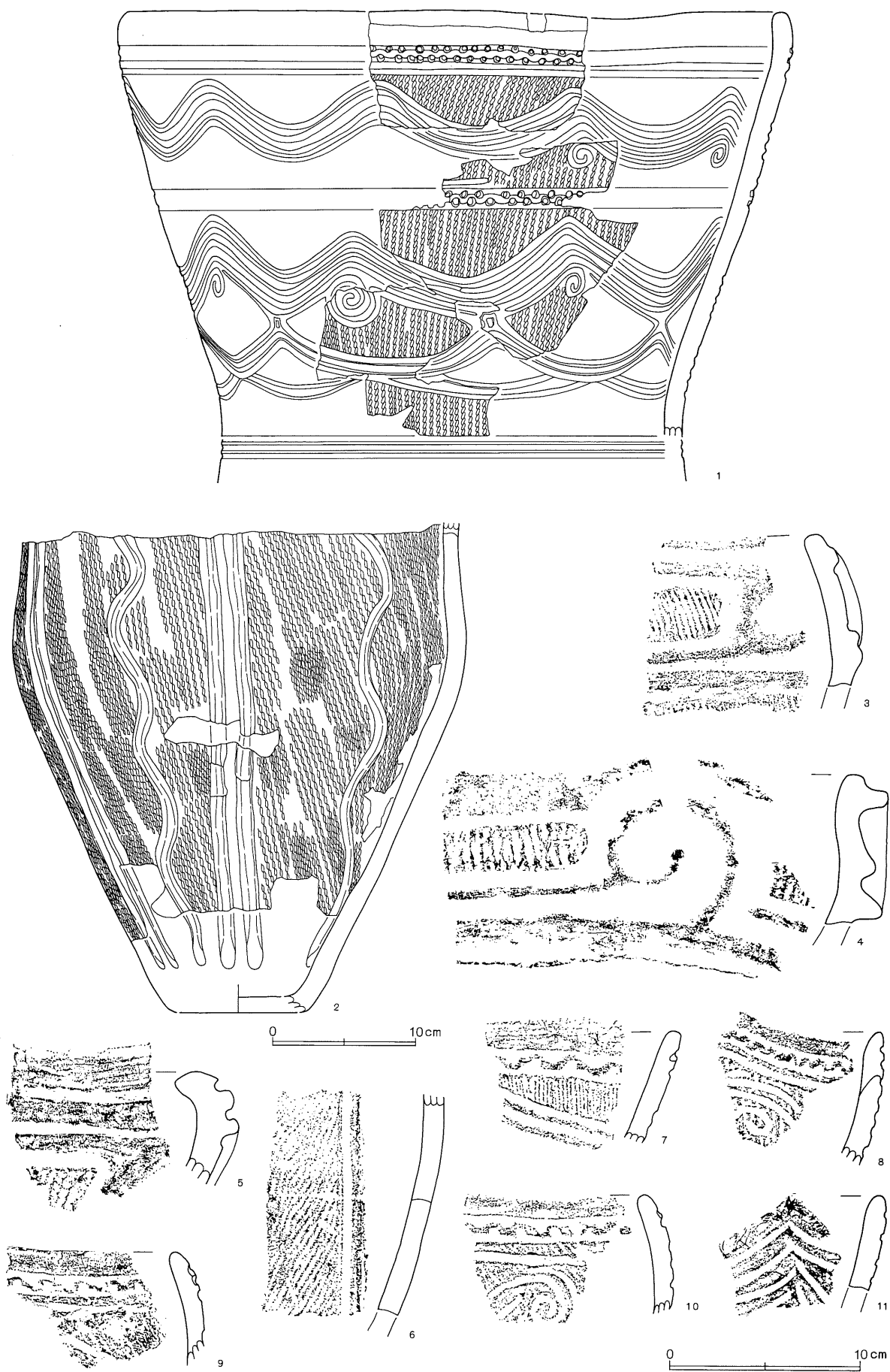
6は器台で側面に円形の透し穴があり、2穴1単位としている。7は口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、頸部で弱く括れ肩が張る深鉢形土器である。口縁下に2本の平行沈線文と交互刺突文が巡り、頸部には全周せず途中で垂下する2本の平行沈線文が施文される。この区画内を上向渦巻文2単位と下向渦巻文1単位が描かれている。沈線間はナデられている程度である。垂下した懸垂文には刺突が加えられている。地文は単節LRの縦位施文である。

第61図1は頸部から緩やかに外反し、口縁部で立ち上がる大型の深鉢形土器で、所謂連弧文土器である。口縁部文様帯は沈線と交互刺突文による上下2段の分帯化がなされている。上段は4本沈線による連弧文が巡り、波頂部下に連弧文に沿って渦巻文と孤線文が加えられる。下段は複段交互配置をとり、波頂部下に渦巻文と孤線文が加えられ、中段孤線文と連結し杵状文が描出されている。頸部には数本の沈線による横位の文様帯区画文が巡る。地文は撚糸Lを縦位施文する。

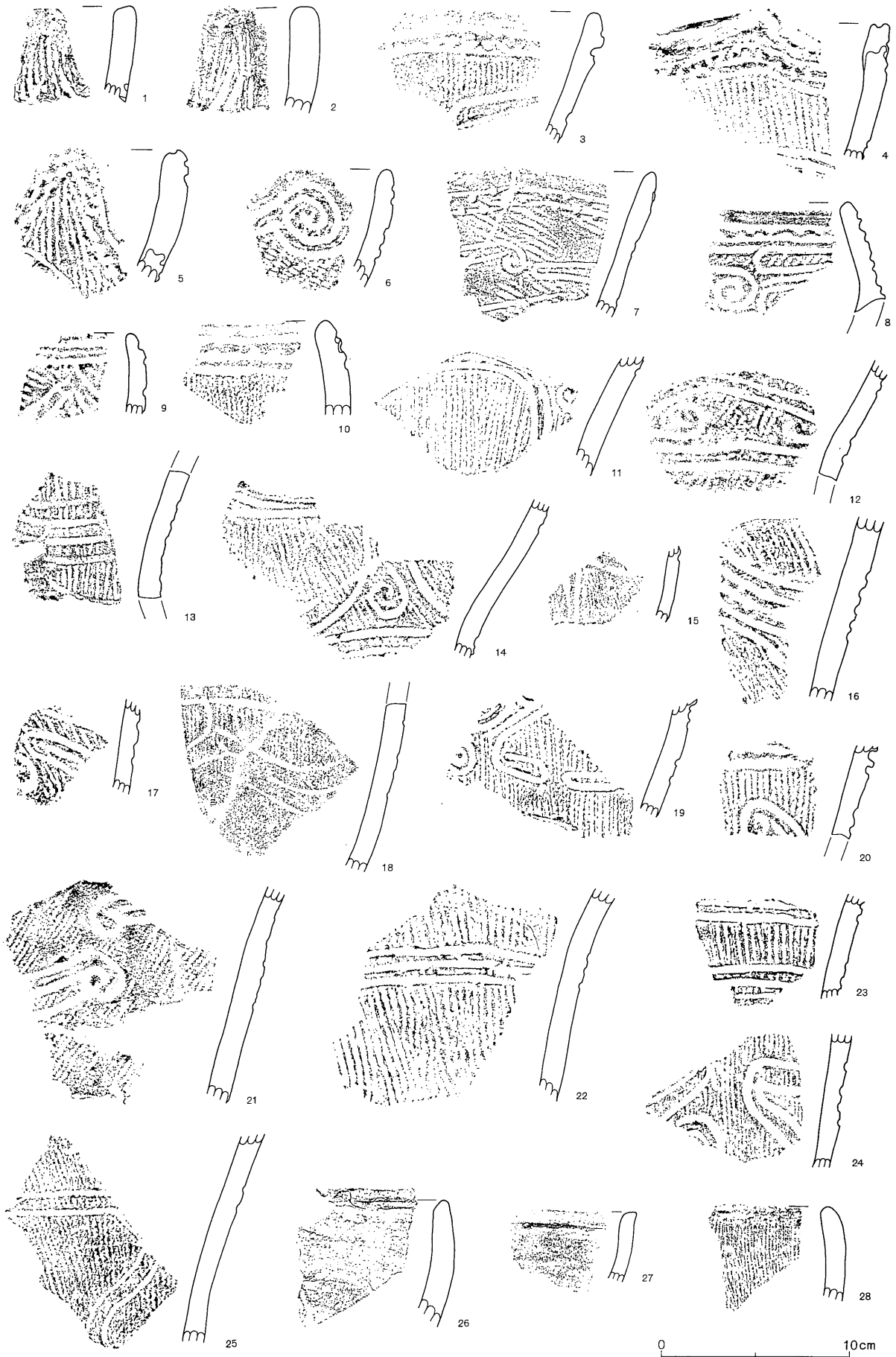
2は口縁部を欠損し、胴部上半がやや張るキャリパー形土器である。2本1単位の隆帯による懸垂文と隆帯1本の蛇行懸垂文を交互に配す。地文は撚糸Lの斜位施文である。

3は口縁部が内湾しながら立ち上がり、やや偏平な隆帯による渦巻文と区画文が交互に配される。区画文内側には隆帯に沿って沈線が巡り、地文は撚糸Lの縦位施文である。4は口縁部文様帯下位を隆帯によって区画するが、上位を区画する隆帯は特にみらず口縁となる。文様帯には突出した隆帯による渦巻文と楕円形区画文が交互に配され、隆帯脇や区画内には深い沈線が施される。地文は撚糸Lの縦位施文。5は口唇部が内側へ屈曲し、口縁部には隆帯による渦巻文と区画文が配される。地文は単節LRの縦位施文。6は2～3本沈線による懸垂文が施される胴部破片で、沈線間はナデられている。地文は単節RLの縦位施文である。7は直線的に開く口縁部破片で、口縁下に2本の平行沈線文と交互刺突文が巡る。口縁部には3本沈線による連弧文を描き、沈線間はナデられている。地文は櫛歯状工具による条線が縦位に施文される。8は口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、波状口縁を呈する。口縁下に3本の平行沈線文が引かれ、上位2段に交互刺突文が加えられる。口縁部は2本1単位の連弧文と波頂部下に渦巻文が描かれる。9、10は同一個体で口縁部は内湾する平口縁である。口縁下に3本沈線と交互刺突文が巡り、口縁部は1～2本沈線による渦巻文と連弧文を描く。地文は撚糸Lの斜位施文である。11は波状口縁を呈し、4本沈線のうち上段2本は口縁部を巡り、下段2本が連弧文を描くと思われる。地文は単節LRである。

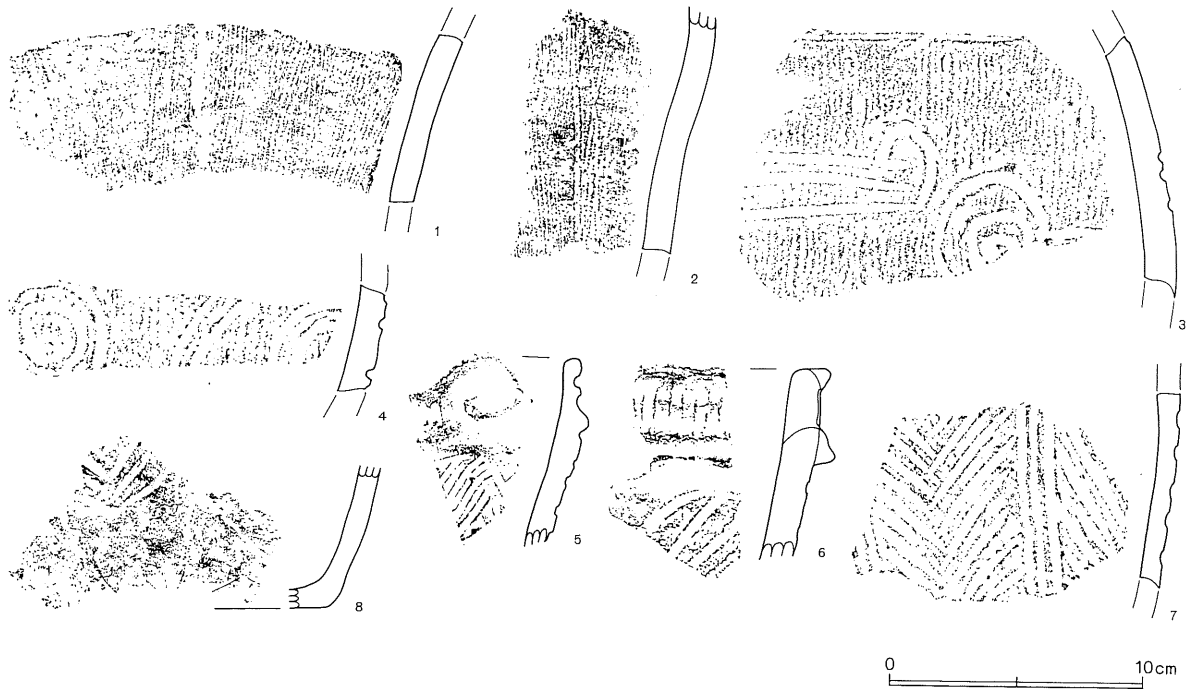
第62図1、2は口縁部の突起か若しくは把手であり、1は沈線と交互刺突文、2は幅広の沈線が見られる。地文は撚糸Lである。胎土や色調から4か5との同一個体の可能性もある。3は口縁下に2本沈線と交互刺突文を配し、口縁部に下向渦巻文と杵状沈線の単位文が描かれていると思われる。地文は撚糸Lの縦位施文。4は波状口縁を呈し、口唇部に1本沈線が巡る。口縁下には3本の平行沈線文と上段2本に交互刺突文が配され、口縁部には3本単位の波状文が表出されている。5は波状口縁で頂部は突起状を呈し、口唇部に1本の沈線が施されている。口縁に沿って2本沈線と刺突文が巡る。口縁下には2本沈線による波状文か渦巻文が描かれている。地文は撚糸Lの縦位施文である。6は波状口縁を呈し、波頂部下に渦巻文が描かれ、地文は単節LRの横位施文。7は口縁部が直線的に開く。口縁下に2本沈線と雑な刺突文が配され、口縁部には下向渦巻文と杵状沈線による単位文が連続的に施文される。上下2段配す。8は肩部文様帯浅鉢で、口縁部が「く」の字状に屈曲する。口縁下に沈線と交互刺突文が巡り、口縁部には渦巻文と沈線文が描かれる。地文は単節LRを横位施文する。9は口縁下に2本の平行沈線文と口縁部に2本沈線の連弧文を配し、沈線間は磨消されている。地文は縞りの弱い単節LRの縦位施文。10は口縁下に3本の平行沈線文と交互刺突文を巡らせる。地文は撚糸Lの縦位施文。11は連弧文と横位区画文との間を垂下する2本沈線による杵状文が描



第61图 第1号住居跡出土遺物(2)



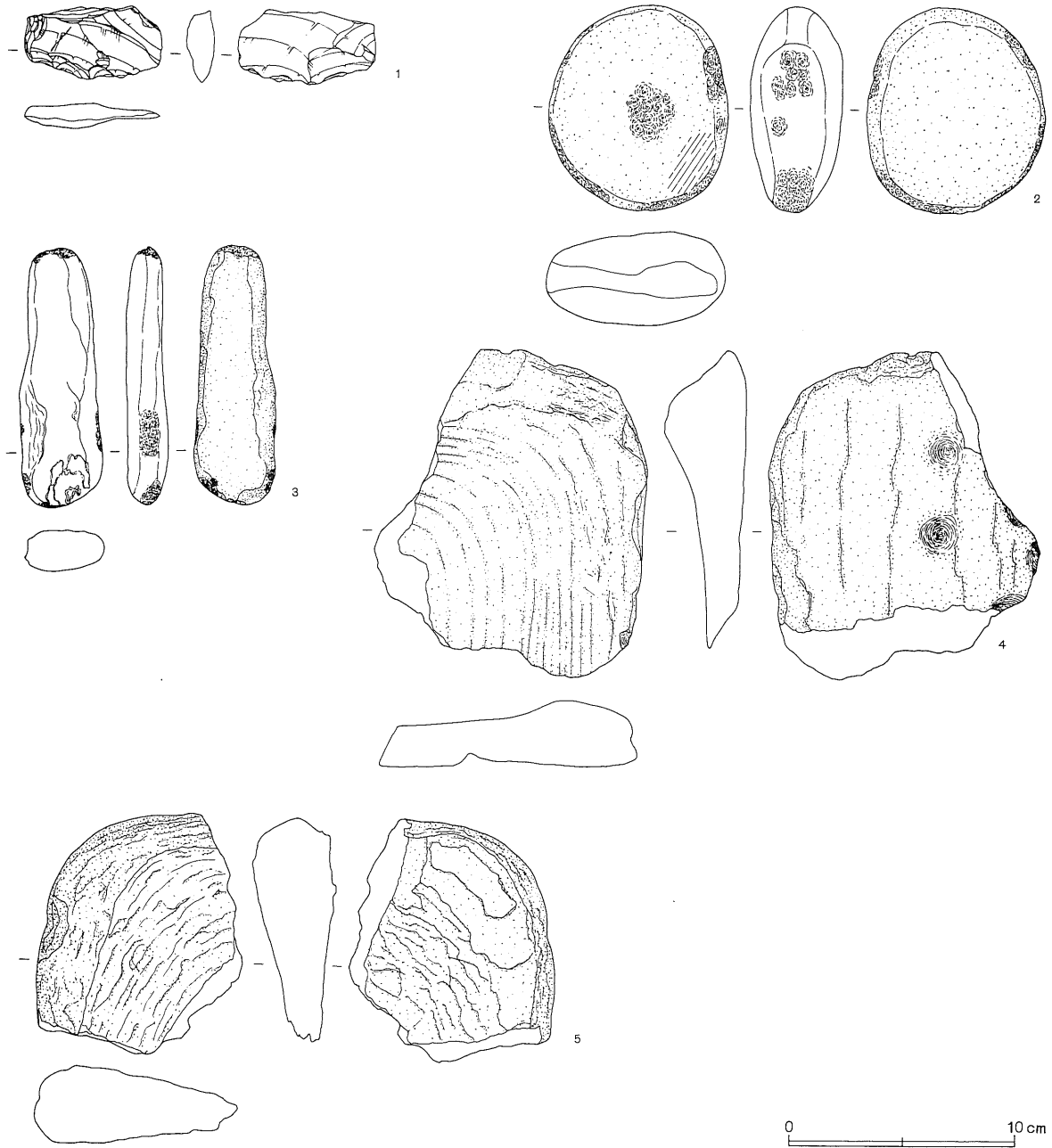
第62図 第1号住居跡出土遺物(3)



第63図 第1号住居跡出土遺物(4)

かれ、結合部に渦巻文を付している。12は連弧文と分帯化する平行沈線文が横走る。連弧文に沿って内側の両端が渦巻となるモチーフが配される。地文は単節RLの縦位施文。13は4本単位の連弧文と括れ部に沈線が巡る。地文は撚糸Lの縦位施文。14は連弧文とこれから垂下する孤線による杵状文を表出し、連結部中央には渦巻文を描く。地文は撚糸Lの縦位施文。15は連弧文と連弧文波頂部下から垂下する懸垂文が施される。沈線間は磨り消され、地文は櫛歯状工具による条線文である。16は4本沈線による連弧文で、地文は撚糸Lを縦位施文する。17は胴部破片で下向渦巻文と杵状沈線とによる単位文を斜位に表出し連続する。18は横位区画文の沈線と3本1単位の連弧文を配す。この連弧文の上線は区画沈線とを繋ぎ、半円形の孤線文を描出し、単位文化の傾向を示している。地文は条線文である。19は連弧文と波頂部や連結部に渦巻文を配すとともに孤状のモチーフが相対して表出されている。本来は3本目の孤線文が垂下する懸垂文であったものが変化したのであろう。20は2本沈線と交互刺突文による横位区画が施され、胴部には下向渦巻文と杵状沈線による単位文を連続的に配される。21も同様に下向渦巻文と杵状沈線による単位文を斜位に施文する。上下二段に連続的に描かれる。地文は単節RLの縦位施文。22、23は胴部破片で、胴部に横位区画文としての3本沈線を配す。地文撚糸Lを縦位施文する。24は2本沈線による曲線文が描かれ、地文は撚糸Rの縦位施文。25は2本沈線による横位区画文とこれから垂下する蛇行懸垂文が施される。地文は撚糸Rの縦位施文。

第62図26、27は口縁部が直立する無文口縁である。第62図28、第63図1、2は同一個体で口縁部は外反しながら立ち上がる。櫛歯状工具による条線文を縦位に施文する。3、4は同一個体の胴部破片で、括れ部に横位区画文の沈線を配し、胴部は3本沈線による蕨手状のモチーフを描く。地文は撚糸Lの縦位施文。5は直線的に立ち上がる深鉢形土器で、口縁部には4単位の小突起が付くものと思われる。突起には低い隆帯による渦巻文が描かれ、両側を短沈線が充填されている。胴部は半截竹管による綾杉状文を施している。6は断面三角形の隆帯による幅狭の口縁部文様帯であり、区画内を短沈線が充填される。胴部は沈線による綾杉状文が描かれよう。7、8は同一個体で胴部に3本単位の懸垂文を4単位配し、その間を逆「ハ」の字状の矢羽根状文を描く。



第64図 第1号住居跡出土遺物(5)

石器は5点出土した。1は石匙で、つまみ部が欠損している。翼状剥片を素材とし、調整加工は刃部両面に施される。2は敲石で、円形の偏平礫を素材とし側面に敲打痕がみられる。下端縁に摩耗痕が認められる。3は敲石で、棒状礫の下端面に敲打痕が認められる。4、5は石皿の欠損品で4の裏面に凹部をもつ。

第2号住居跡 (第65、66図)

D、E-10Grid に位置する。I区西側の南へ緩やかに傾斜する斜面部で検出された。本住居跡から北へ約15mの距離に第1号住居跡が所在する。住居跡は遺構確認段階で既に床面の一部が確認され、その平面形態は円を基調とする住居跡であろうと推測される。規模は推定で径5.3mを測り、主軸方位は炉跡と埋甕間でN-15°-Wを示している。

覆土は住居跡中央部に浅い堆積が確認されたに過ぎない。床面は概ね平坦で全体的に堅く踏み堅められており、その範囲は埋甕へと張り出すような状況が観察された。ピットは10基検出され、このうちP1～P3、P6、P8が支柱穴に相当し、配置は五角形を呈している。P1＝31cm、P2＝26cm、P3＝24cm、P4＝28cm、P5＝27cm、P6＝37cm、P7＝12cm、P8＝34cmを測る。P4、P5は出入口部に関連する施設の柱穴と考えられる。住居跡西側に検出された土壌は住居跡の床面を壊して構築されている。

炉跡は地床炉で住居跡中央に位置し、形態は円形を呈す。掘り込みの規模は長径90cm、短径80cm、深さ9cmと浅く断面は皿形である。埋甕は住居跡南側に位置し、口縁部と胴部下半を欠失する。埋設は正位であるが、住居跡中央に向けやや傾いた状況が窺えた。

本住居跡からの出土遺物は、覆土が極めて浅いことから炉跡の周辺とその北側において検出されただけである。時期は加曾利EⅡ式新段階に比定されよう。

出土遺物（第66図）

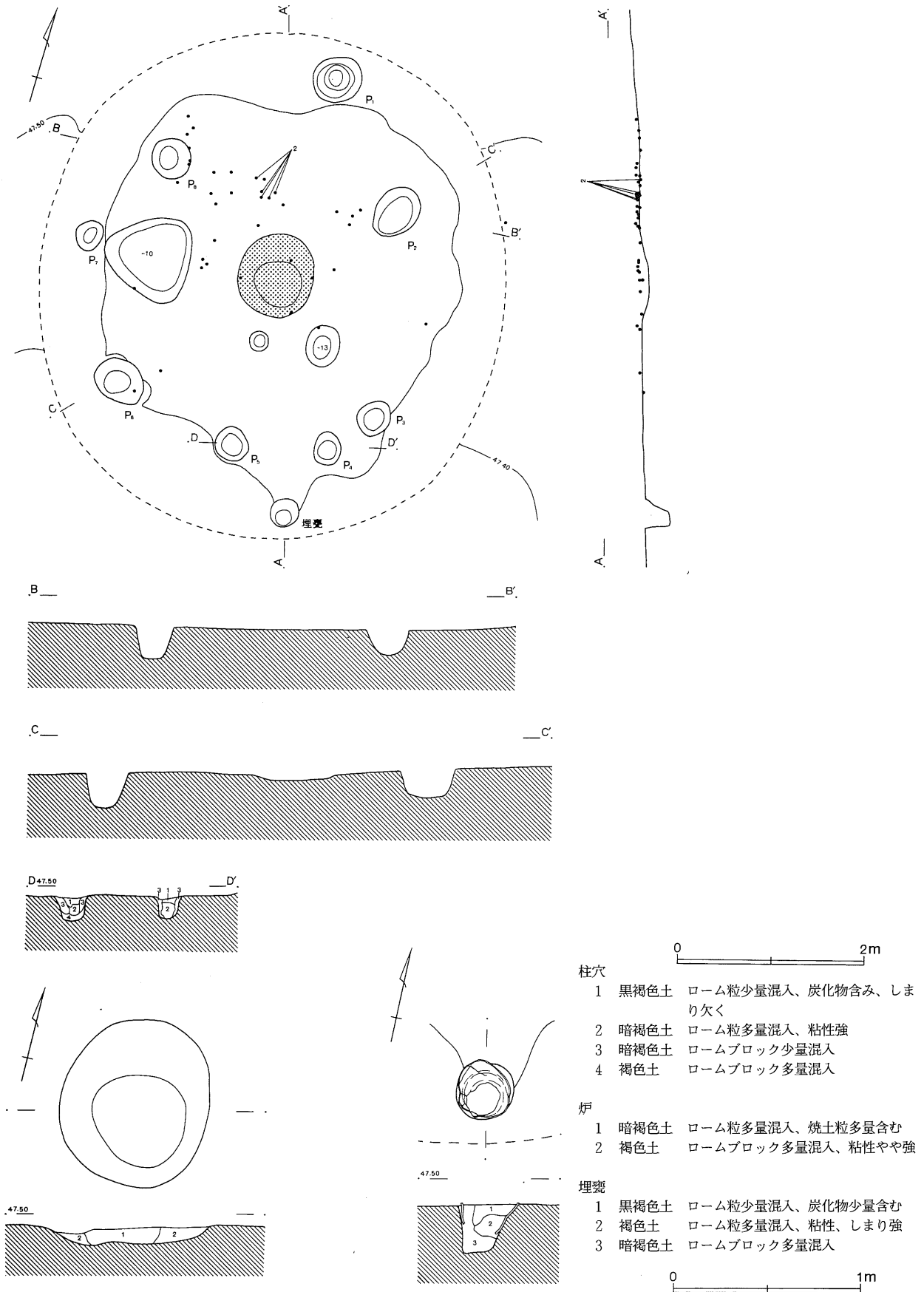
本住居跡は埋甕と少量の遺物が出土したに過ぎず、実測し得たのは埋甕土器と推定復元した1個体の計2個体である。

1は埋甕土器である。口縁部下端から胴部上半までが残存している連弧文土器であり、口縁部は外反しながら立ち上がる。文様構成は横位区画文としての3本単位の沈線を括れ部と胴部に巡らし、器面を口縁部文様帯と胴部文様帯上下段の3帯で構成する。口縁部文様帯は上下2段による複段交互配置を意識した構図をとる。上段は4本沈線の連弧文を10単位巡らし、波頂部下には渦巻文が配される。下段は下向きの孤線文が8単位描かれるものの一部に波状を描くことから単位数の調整を行っているようにも見える。胴部文様帯も口縁部上段と同様に連弧文を巡らすが、横位区画文には接せずに8単位が施文される。波頂部下の1箇所には渦巻文が描かれている。沈線間は磨り消さず、地文は単節RLの縦位施文である。

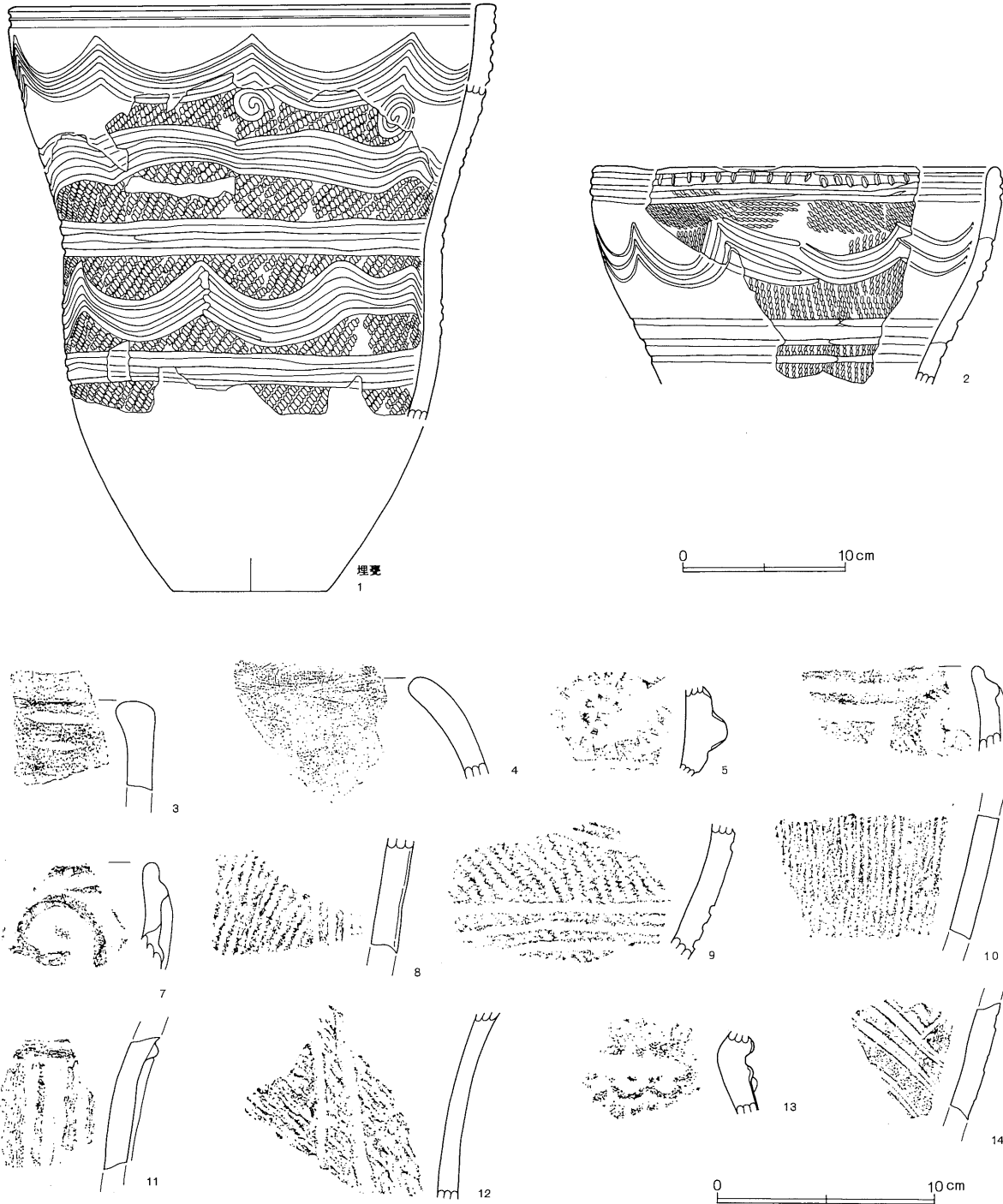
2は連弧文土器の口縁部破片であるが、胴部から直線的に外反し、口縁部で立ち上がる深鉢形土器である。口縁下には3本の平行沈線文と刺突文が巡り、胴部上半には横位区画文としての3本の平行沈線文が巡る。口縁部文様帯は3本沈線を基本とした連弧文が施文される。沈線間は磨り消されていない。地文は撚糸Lで、口縁部上端は横位に施文し、口縁部下から胴部は縦位に施文される。

3～5は勝坂式最終段階の土器であり、3は円筒深鉢形を呈する無文の口縁部破片で、口唇部内側が肥厚する。4は内湾する無文の口縁部破片である。5は隆帯による突起をもつ渦巻文であり、刺突が加えられている。6、7は内湾ぎみに立ち上がるキャリパー形土器の口縁部破片で、隆帯による渦巻文と楕円形区画文が表出される。6の地文は単節LRの縦位施文であるが、偏平な渦巻文上にも見られることから施文順序の最終段階で縄文施文が加わる。8は胴部破片で4本沈線の懸垂文と単節RLを縦位施文する。9は連弧文土器であり、3本沈線の横位区画文と2本沈線以上による連弧文が施文されている。地文は単節RLの横位施文である。10は地文撚糸Lの縦位施文。11はキャリパー形を呈する口縁部下の破片で、隆帯による口縁部文様帯下位区画から2本の隆帯が垂下する。地文は橢圓状工具による縦位の条線文である。12は外反しながら開く胴部破片で、2本沈線の懸垂文と地文に撚りの弱い単節LRを縦位に施文する。13は曾利式系統の斜行線文土器で頸部が「く」の字状に屈曲する。貼付られた隆帯に半截竹管による結節状爪形文が加えられ、胴部は同工具による縦位の条線文と浮線による波状文が貼り付けられる。14は半截竹管による矢羽根状文を施文する。

石器は検出されなかった。



第65図 第2号住居跡 (L=47.80m)

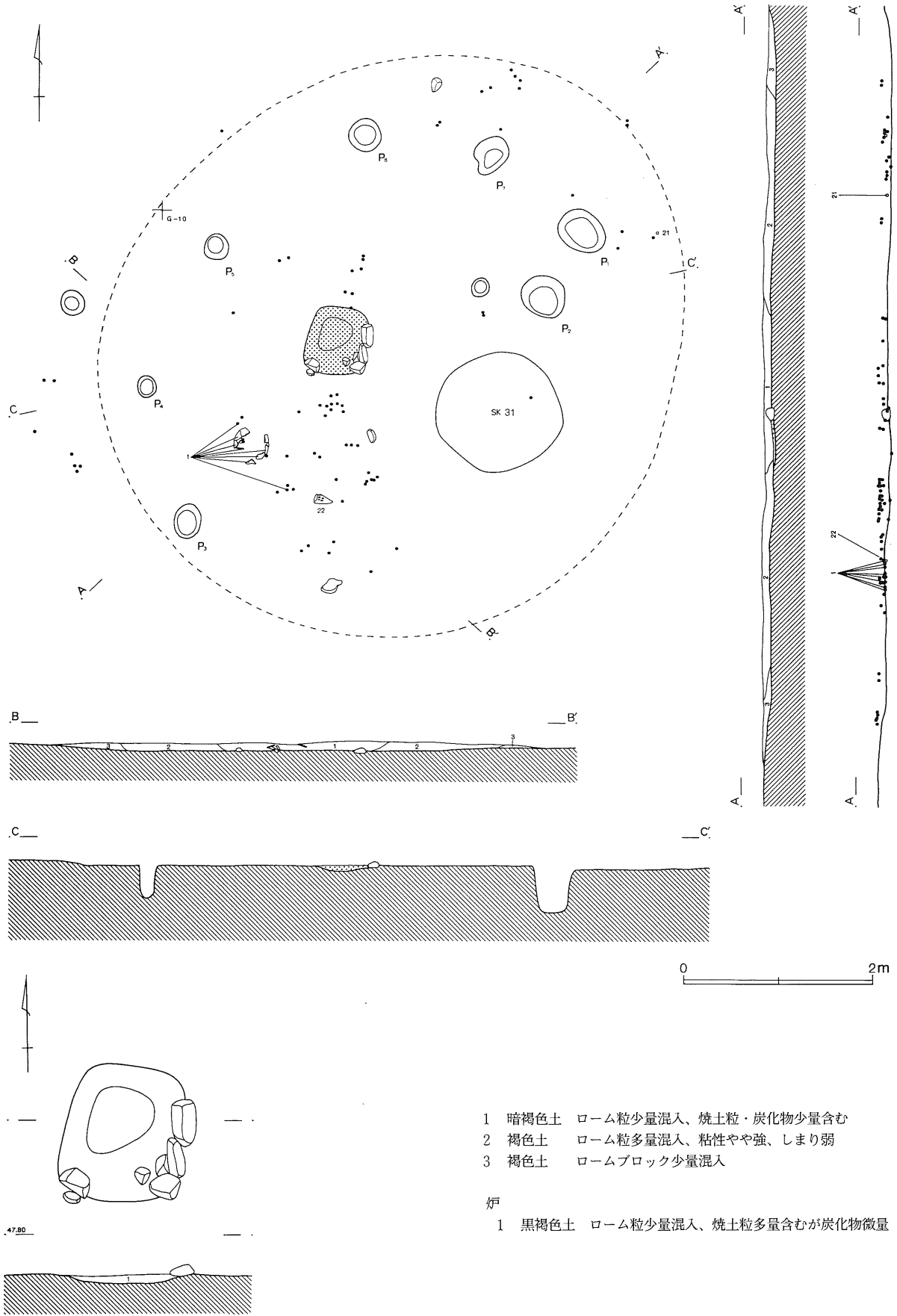


第66図 第2号住居跡出土遺物

第3号住居跡 (第67、68図)

F、G-9、10Grid に位置する。I区中央部の平坦面で検出され、標高47.70mを測る。住居跡東側には第31号土壇と重複し、土壇が床を壊している。北東へ約17mの距離に第1号住居跡があり、北へ約2mの距離に第6号住居跡が所在する。本住居跡は確認段階で既に石囲炉の一部が検出され、その周辺に薄い覆土の堆積が残るだけであった。規模は推定で長径6.5m、短径5.8mを有する楕円形の住居跡であろうと推測される。主軸方位は、北東方向を示すものと思われる。

覆土の堆積は、暗褐色土を基調とする自然堆積による埋没である。壁については明確な立ち上がりを検出



第67図 第3号住居跡 (L=47.90m)



第68图 第3号住居跡出土遺物

することはできなかった。壁溝は存在しない。床面はほぼ平坦で炉の周辺が踏み固められていたものの、全体的にやや締まりを欠いていた。ピットは住居跡北側で9基検出され、その配列は壁に沿って巡るものと考えられる。P1=26cm、P2=47cm、P3=26cm、P4=34cm、P5=30cm、P6=49cm、P7=14cmを測る。

炉跡は石囲炉で住居跡中央やや西側に位置する。掘り込みは方形を呈し、長径72cm、短径62cm、深さ4cmと浅く、炉床はそれほど焼けていない。炉縁石は東辺と南隅に残るものの他は抜き取られていた。形態は炉縁石が掘り込みと重なることから方形と思われる。

本住居跡からの出土遺物は、炉周辺と南側に分布し、第68図1の土器は床面で逆位の状態で検出された。時期は加曾利EⅡ式新段階に比定されよう。

出土遺物（第68図）

図示し得た土器は床面より出土した1個体だけである。

1は頸部で括れ、口縁部が開きながら立ち上がる連弧文土器である。口縁下に2本の平行沈線文が横走り、口縁部文様帯は2本沈線による連弧文が18単位施文される。頸部は横位区画文としての1本沈線の小波状が描かれ、地文は櫛歯状工具による条線文を縦位に施される。

2、3は黒浜式土器で、2は直線的に開く口縁部破片である。単節RLを斜位施文する。3は羽状縄文で0段3条のRL、LRを施文する。4～7、12は勝坂式最終段階の土器である。4は小波状を呈する口縁部で、沈線に刺突が加えられる。地文は撚糸Lの縦位施文。5は隆帯による渦巻文に篋状工具による刻みが加えられ、渦巻文に沿って沈線が施される。6は扁平な隆帯による渦巻文を表出し、その隆帯脇に沈線が施される。隆帯上に単節RLが施文されている。7は細い隆帯を縦位に張り付け、刻みを加えるとともに両脇を沈線が施される。12は胴部破片で沈線による渦巻文が描かれている。8、9はキャリパー形土器の口縁部破片で、渦巻文と楕円形区画文が配される。地文は単節RLの横位施文である。10は隆帯に丸棒状工具による刺突が列点状に加えられその両脇に沈線を施す。地文は単節LRを横位施文する。11は連弧文土器の棒状文で地文は撚糸Lを斜位施文する。13は3本沈線の懸垂文で沈線間はナデられている。14は撚糸Lの縦位施文。15は櫛歯状工具による条線文を施す。16は胴下端部で蛇行懸垂文が施文され、地文は単節LRを縦位施文。17は3本沈線による懸垂文が施文され、地文は単節RLの縦位施文。18は鉢形土器であり、隆帯による区画文が施されている。19は浅鉢形土器の口縁部で口唇部内側が三角形に肥厚する。

石器は3点検出された。20は横歯形石器で基部からの打割面が明瞭に残る。刃部は正面からの剥離がみられ、形状は直刃である。21は打製石斧で、厚めの作りである。正面の一部が欠損する。周縁加工は入念に施され、刃部の調整はあまり施されていない。22は石皿の欠損品で、表面縁や背面に複数の凹部を有する。

第4号住居跡（第69、70図）

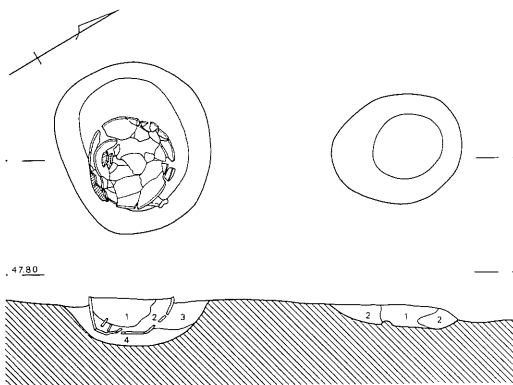
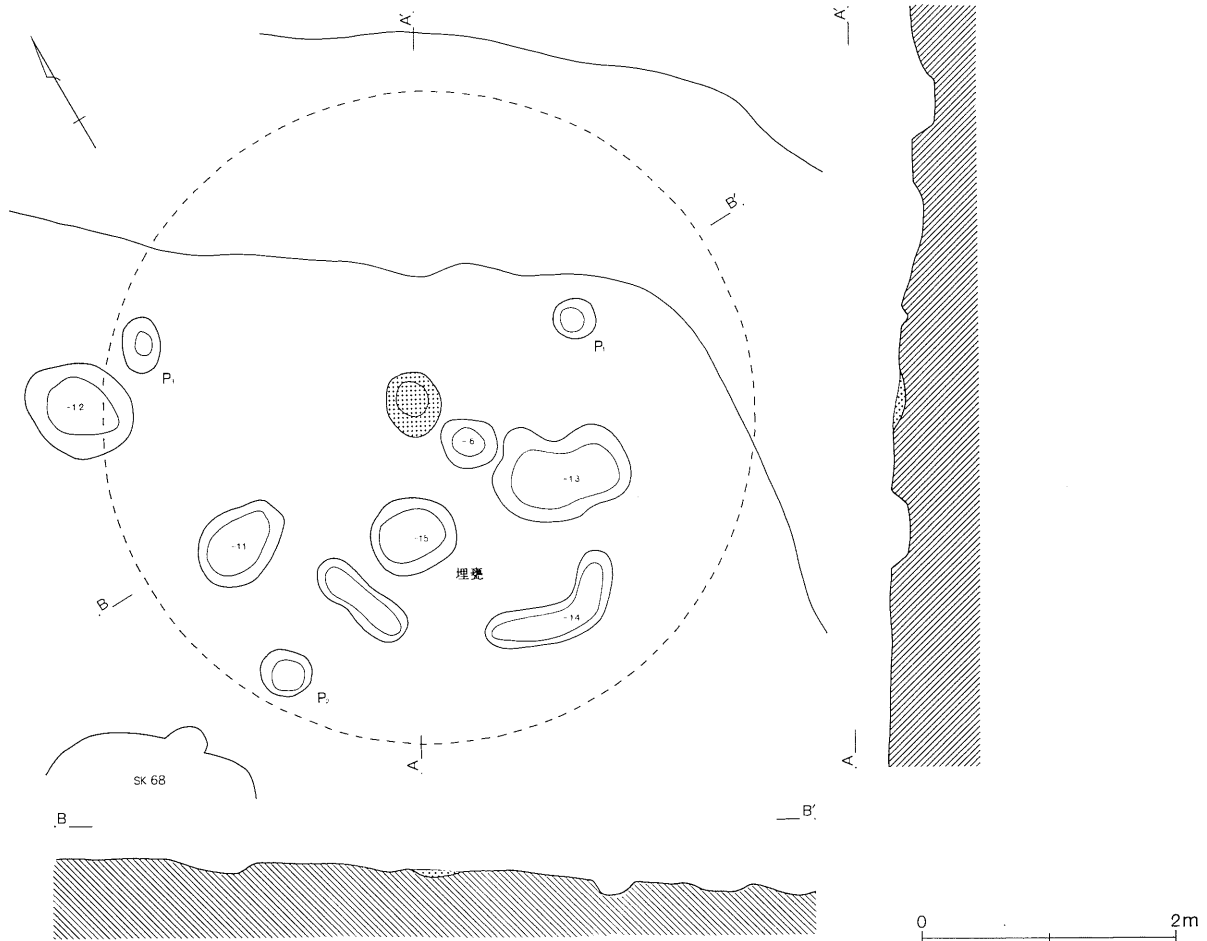
F-8 Gridに位置する。Ⅰ区西側中央の平坦面で検出され、西へ約3mの距離に第1号住居跡が存在する。遺構確認時に炉と埋甕が露出している状態であり、壁、覆土、床面は認められなかった。また、住居跡北側は溝との重複により壊されている。形態は円を基調するものと推測され、規模は推定で径5.1mを測る。

炉跡は住居跡中央に構築され、形態は楕円形で、規模は長径52cm、短径43cm、深さ9cmを測る。炉床は比較的良く焼けている。炉跡の南西側に隣接して埋甕が検出された。ピットは4基検出され、このうちP1=10cm、P2=9cm、P3=13cmが支柱穴にあたると思われるが断定できない。また、住居跡範囲内には浅い窪みの土壌や壁溝とも思える溝も検出されたが、住居跡に伴うものかどうか判断しがたい。時期は加曾利EⅢ式新段階に比定される。

出土遺物 (第70図)

出土遺物は削平などにより極端に少なく、図示し得たのは埋甕土器1点のみである。

1は両耳壺で口縁部が欠失しているが直立すると思われる。肩部に表出されている横位文様帯の2箇所には耳状の把手が対置する。文様帯は細い隆帯により帯区画され、その隆帯脇を指ナデが加えられている。文様帯の中央には隆帯により鈎状のモチーフが描かれ、その中を単節RLが縦位に充填施文されている。また、文様帯内には単節RLを横位に施文するが、一部には縦位に施文されているところもある。胴部は楕歯状工具による条線が縦位に施文される。文様の施文順序は隆帯→縄文→ナデ→条線文となる。

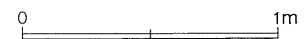


炉

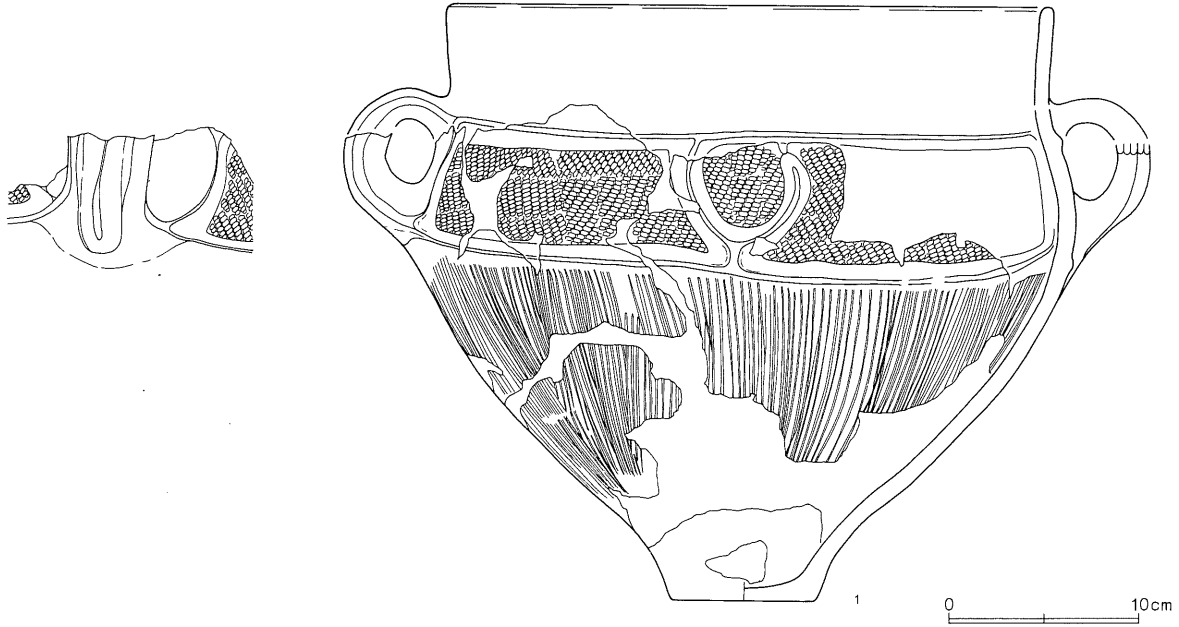
- 1 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒多量含む
- 2 褐色土 ロームブロック少量混入、しまりやや強

埋甕

- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、しまりやや強
- 2 暗褐色土 ローム粒多量混入
- 3 黒褐色土 ローム粒少量混入、粘性、しまり欠く
- 4 褐色土 ロームブロック少量混入、粘性強



第69図 第4号住居跡 (L=48.00m)



第70図 第4号住居跡出土遺物

第5号住居跡 (第71、72図)

G、H-10、11Grid に位置し、I 区中央部の平坦面で検出された。住居跡東側を第6号住居跡と重複する。交差する溝の精査の際に土器埋設炉を検出したことにより住居跡と確認した。規模は推測で6.6mの円形を呈すると思われる。壁、壁溝、床面等は検出できなかった。

炉跡は住居跡中央やや北寄りに位置する。炉の上部は溝により削平されているものの形態はほぼ円形を呈し、炉跡東側には深鉢形土器の胴部破片により炉を囲むように土器が埋設されている。炉床は良く焼けている。ピットは13基検出され、このうち深さ及び位置から支柱穴と考えられるのはP1～P5の5箇所であるが断定できない。深さはP1=40cm、P2=25cm、P3=56cm、P4=35cm、P5=44cmを測る。

本住居跡の時期は加曾利EⅢ式新段階に比定されよう。

出土遺物 (第72図)

図示可能な遺物は、埋設土器として使用された胴部破片の土器1点のみである。幅広の低隆帯2本とその脇線として幅広で明瞭な3本沈線により曲線文を表出している。沈線にはナゾリが加えられている。地文は単節RLを縦位に充填施文される。

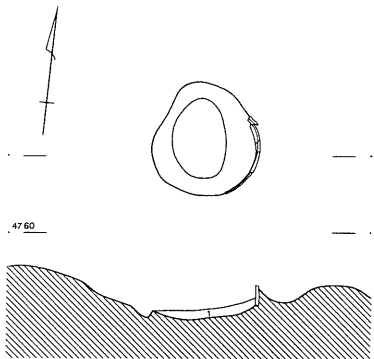
第6号住居跡 (第73、74図)

G、H-10、11Gridに位置する。第5号住居跡と重複し、南東へ約10mの距離に第12号住居跡が所在する。住居跡の壁、壁溝、床面は検出できなかった。規模は、検出された柱穴配置により推測で長径6.8m、短径6.25m前後の円を基調とした住居跡であると推定される。

炉跡は土器埋設炉で住居跡中央やや北側寄りに構築され、掘り方は楕円形を呈する。埋設土器は口縁部と胴下半を欠いた状態で検出され、炉跡の東寄りに埋設されていた。炉床は良く焼けていた。ピットは12基検出され、このうちP1～P8が支柱穴に相当し比較的整った八角形の配置形態をとる。深さはP1=24cm、P2=27cm、P3=35cm、P4=30cm、P5=24cm、P6=13cm、P7=38cm、P8=21cmを測る。



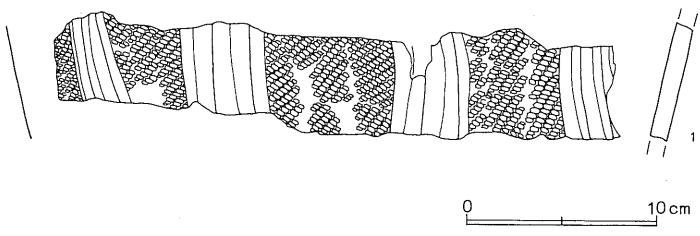
0 2m



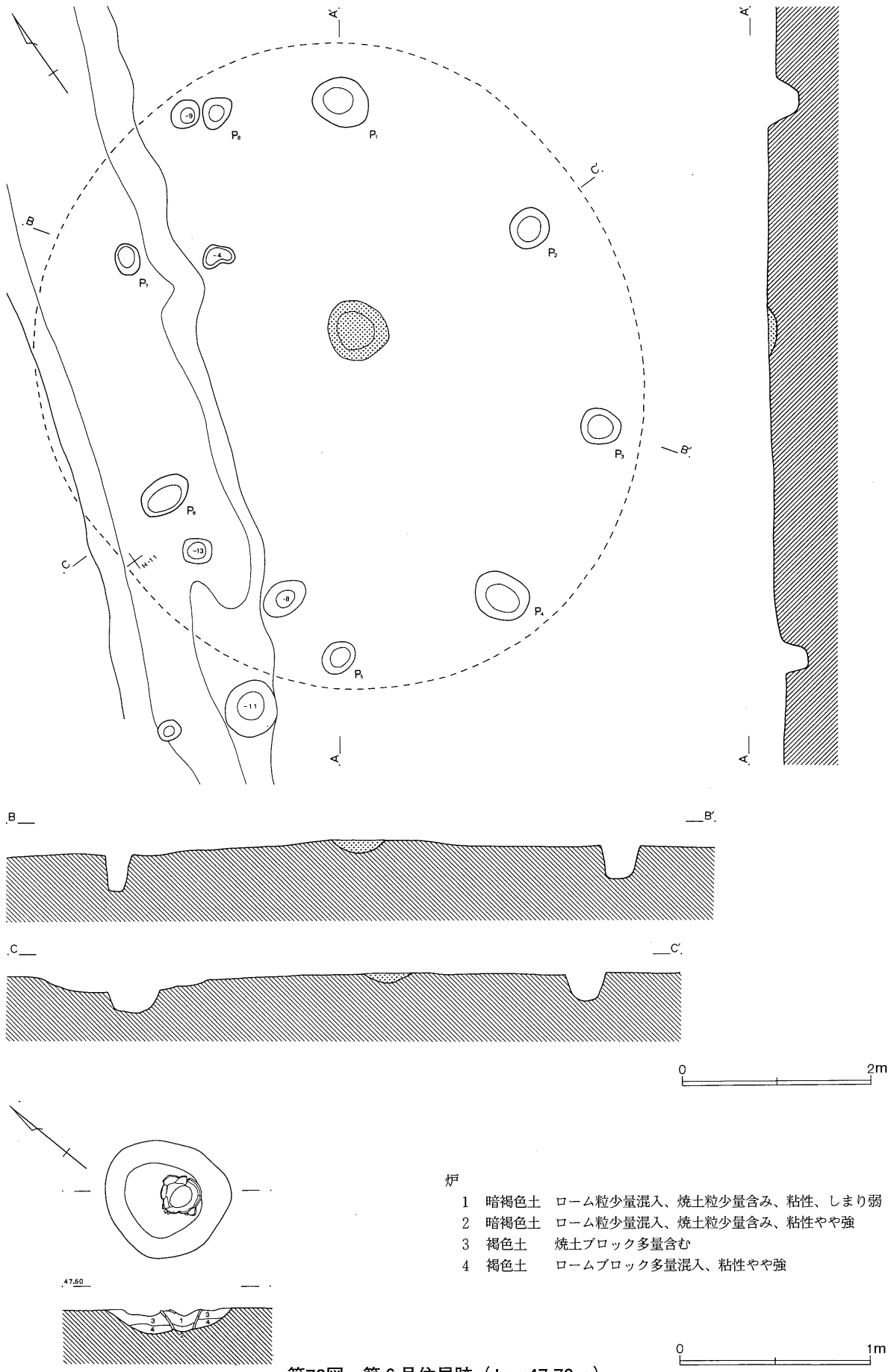
炉
1 赤褐色土 焼土ブロック多量混入

0 1m

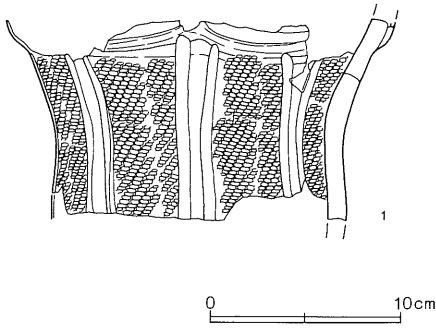
第71図 第5号住居跡 (L=47.70m)



第72図 第5号住居跡出土遺物



本住居跡の時期は加曾利EⅢ式古段階に比定されよう。



第74図 第6号住居跡出土遺物

出土遺物 (第74図)

1は埋設土器であり、口縁部と胴下半を欠失しているキャリパー形土器である。口縁部文様帯の下位区画として偏平な隆帯が弧を描きながら巡り、4単位構成を取ると思われる。胴部は口縁部文様帯下から幅広の2本沈線の懸垂文6単位が垂下し、沈線間は磨消されている。また、胴部には「∩」状の区画が2単位施文されている。地文は単節RLの縦位施文である。

第7号住居跡 (第75、76図)

F、G-5、6 Gridに位置する。I区北西側の北へ緩やかに傾斜する斜面部で検出され、南へ約10mの距離に第9、10号住居跡が所在する。住居跡東側が溝により壊され、南側を第28号土壙と重複する。本住居跡は遺構確認時に土器埋設炉を検出したことにより住居跡と確認された。規模は柱穴の配列から推定で約6mを測り、円を基調とした形態と思われる。

覆土は殆ど無く、出土遺物も極めて少ない。壁溝は検出されなかった。床面は、炉跡周辺で確認されたが、全体的に軟質であった。

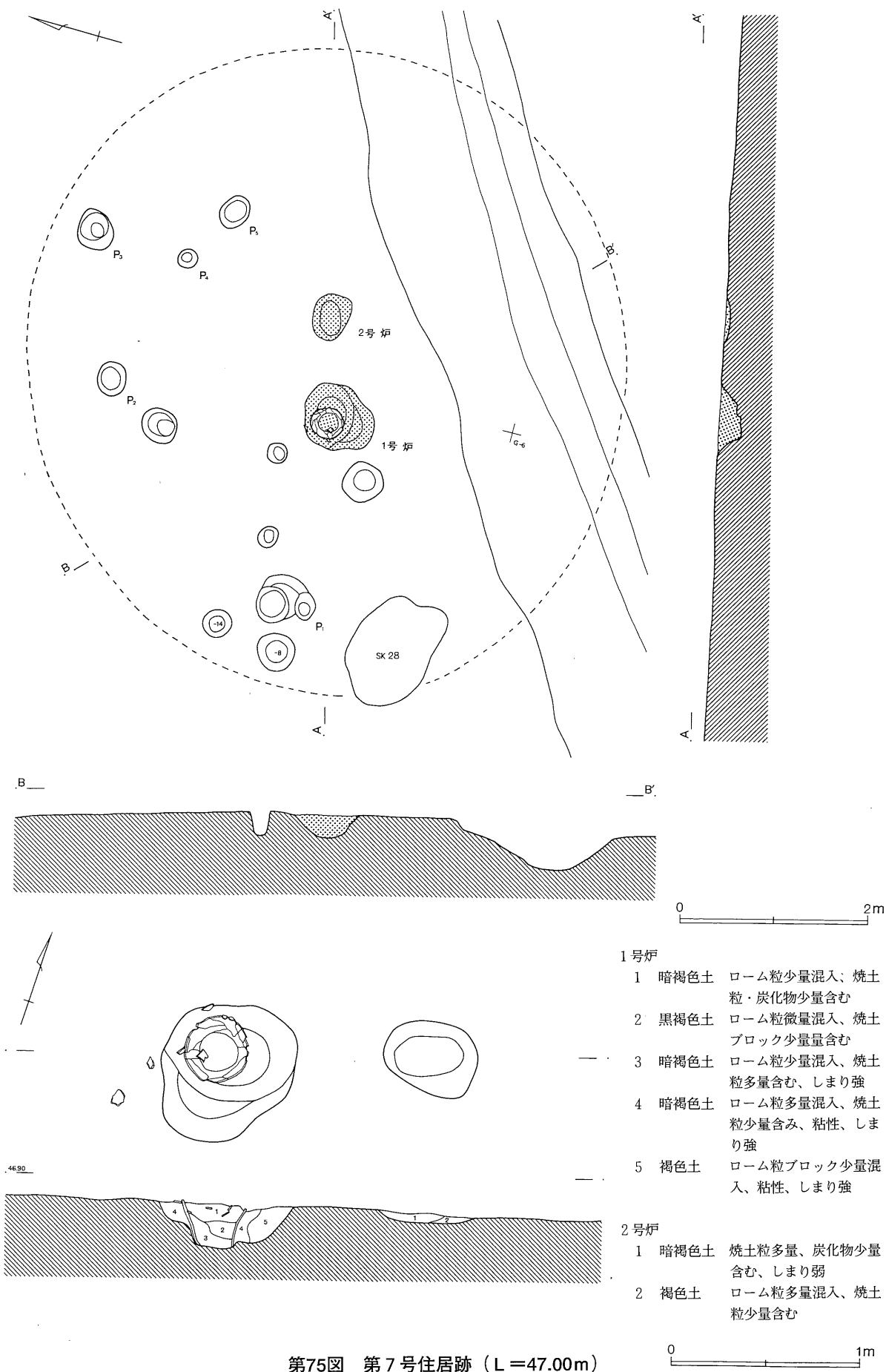
炉跡は2基検出され、1号炉は住居跡中央に位置する土器埋設炉である。形態は不正形を呈し、幾度となく炉を構築し直した状況が観察された。規模は長径46cm、短径35cm、深さ17cmを測る。埋設土器は口縁部と胴下半を欠き、炉跡の西寄りに炉床を一段掘り込んで埋設されていた。覆土は多量の焼土粒を含み、炉床は良く焼けていた。1号炉の北30cmに地床炉の第2号炉が検出された。形態は楕円形を呈し、規模は長径50cm、短径37cm、深さ5cmと浅いものの炉床は良く焼けており堅い。ピットは11基検出され、このうち主柱穴は深さからみてP1～P5が相当すると思われるが、配置においてP3～P5が不規則であるため断定できない。深さはP1=38cm、P2=25cm、P3=37cm、P4=34cm、P5=39cmを測る。

出土遺物は、埋設土器と炉跡周辺に少量の遺物が検出されたに過ぎない。時期は加曾利EⅢ式古段階に比定される。

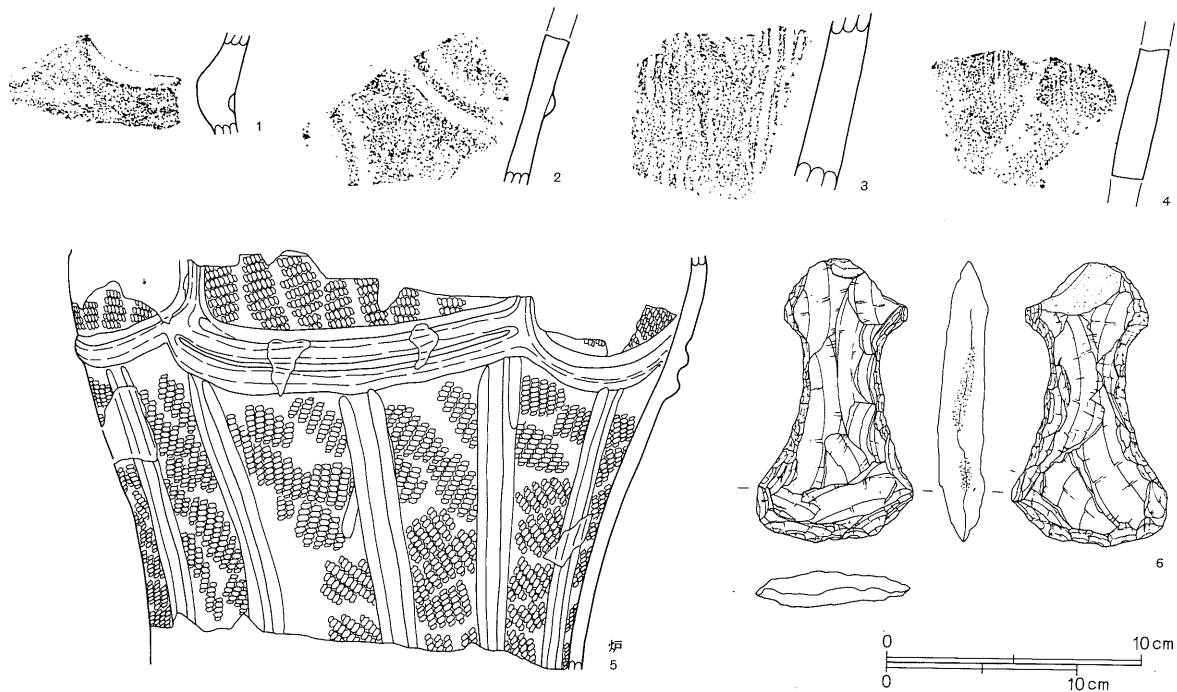
出土遺物 (第76図)

図化し得たものは1点だけである。1は波状を呈する口縁で、低い隆帯と沈線が観察される。2は胴部破片で隆帯による渦巻文を描き、地文は単節RLと思われるが磨滅が著しく確かではない。3は2本沈線の懸垂文と地文撚糸Lが施文される。4は橈菌状工具による縦位の条線文である。

5は埋設土器である。口縁部上半と胴下半を欠失し、胴部から口縁部にかけて緩やかに開くキャリパー形土器である。口縁部文様帯の主構図は楕円形区画文が6単位配されるが、一部は入り組み崩化しているとともに区画文の単位幅に違いが存在する。文様帯下位区画の隆帯は交互に1本と2本とが繰り返されている。胴部の懸垂文は楕円形区画文と対示するように配されているが、実際には区画文幅の違いにより懸垂文間隔のバランスが崩れ11単位の垂下となっている。偶数単位数を表出するためか懸垂文の2本1単位を10単位とし、残り1単位は3本沈線の懸垂文を垂下させることにより他の懸垂文と異なる表現をしている。沈線はやや幅広く施文され、地文は口縁部が単節LRの横位施文、口縁部下が斜位施文。胴部が縦位施文である。



第75図 第7号住居跡 (L=47.00m)



第76図 第7号住居跡出土遺物

石器は1点検出された。6は打製石斧で撥形を呈する。調整加工は両側縁から平均的に施され、刃部は丸歯で調整も両面から施されている。

第8号住居跡（第77、78図）

G、H-9、10Gridに位置する。I区中央部の平坦面で検出され、南へ約2mの距離に第3号住居跡があり、東へ約1mの隣接した位置に第11号住居跡が所在する。住居跡南側は溝により壊されている。遺構確認時の際に既に床面と炉跡が検出され、壁は確認できなかった。形態は円を基調とし、規模は推定で径6m前後を測ると思われる。

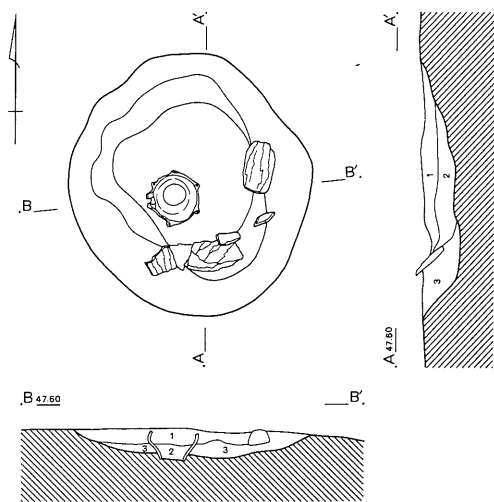
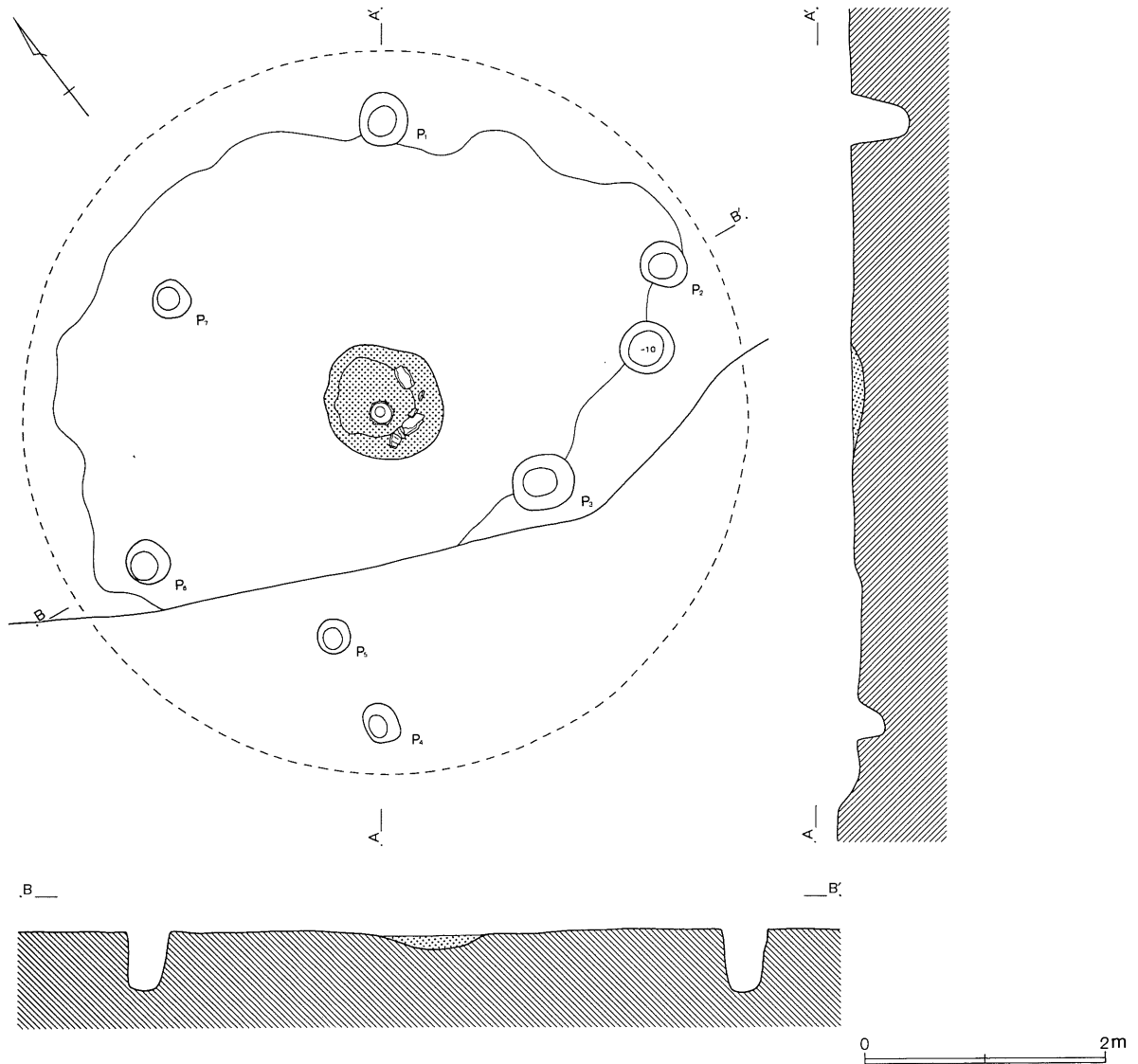
覆土は殆ど無く、出土遺物も極めて少ない。床面は平坦で踏み堅められている。壁溝は検出できなかった。

炉跡は埋設土器を伴う石囲炉であり、炉の掘り方は不正円形を呈し、長径1.44m、短径1.06m、深さ14cmを測る。炉縁石は扁平な片岩や石皿を転用して組まれ、西側と北側は抜き取られているが、形態は方形であったと推定される。埋設土器は炉の中心からやや南寄りに埋設され、胴下半を欠いている。

ピットは8基検出され、このうち支柱穴と考えられるのはP1～P4、P6、P7の6本柱で、五乃至は六角形の配置をとる。P5はやや浅いため支柱穴とは考え難い。深さはP1=48cm、P2=52cm、P3=44cm、P4=23cm、P5=17cm、P6=48cm、P7=44cmを測る。時期は加曾利EⅡ式新段階に比定されよう。

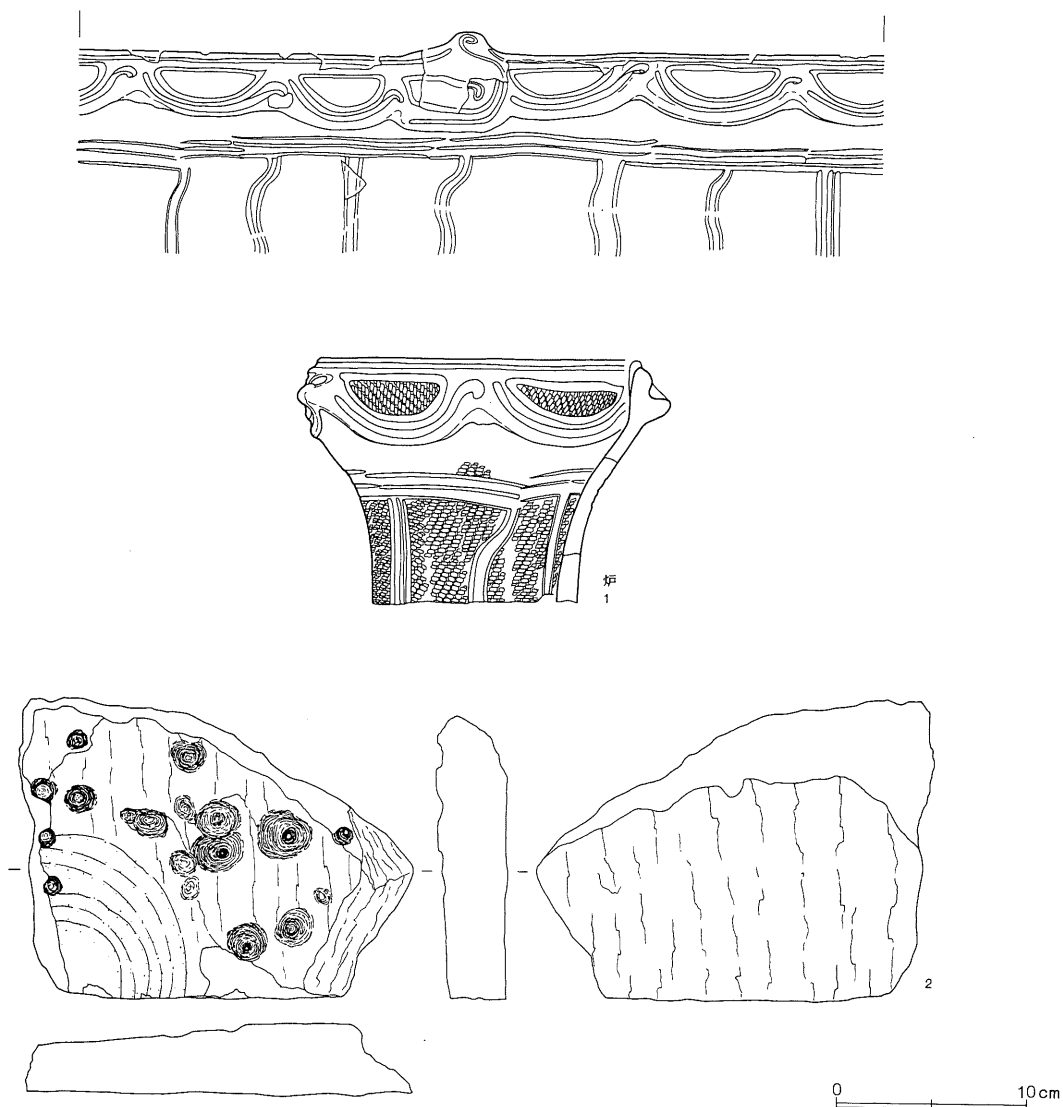
出土遺物（第78図）

出土した土器は、図示した埋設土器1点である。1は胴下半を欠損するキャリパー形土器で、口縁の1箇所に突起を持つと思われる。口縁部文様帯は縮化した渦巻文と半円形区画文により構成される。施文方法は2本隆帯と1本沈線による組み合わせにより表出され、渦巻文は突起化を呈す。文様帯下位区画は連続弧状に区画されているが、頸部無文帯とは明瞭に分帯をなしている。半円形区画文は6単位施文され、うち小突起部には渦巻文が加えられている。頸部無文帯を挟んで胴部文様帯上位区画として3本沈線が巡る。胴部懸



- 炉
- 1 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒少量含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒多量含む
 - 3 褐色土 ロームブロック多量混入、粘性、しまりやや強

第77図 第8号住居跡 (L=47.80m)



第78図 第8号住居跡出土遺物

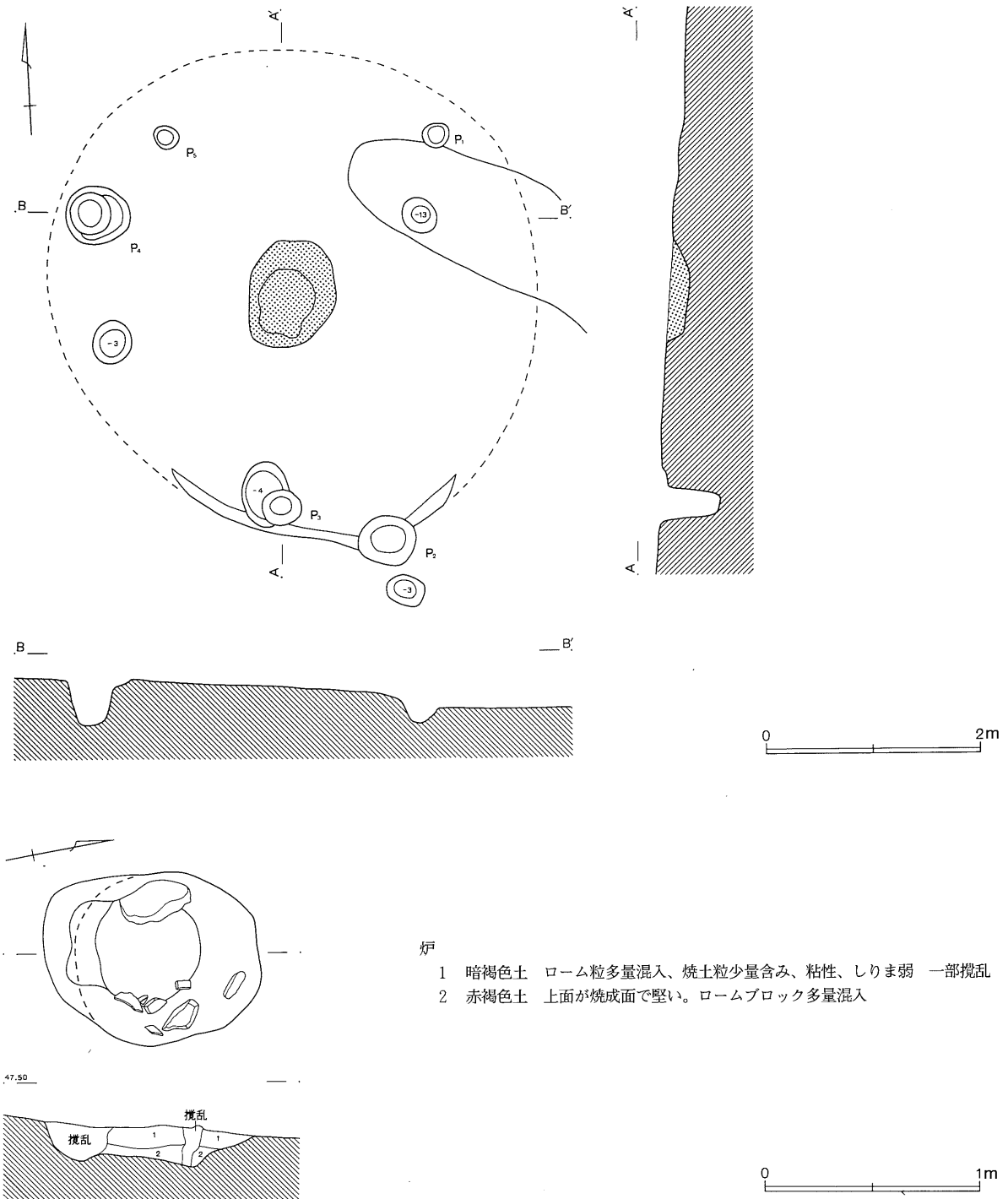
垂文は2本乃至3本沈線の懸垂文が4箇所配され、その間を蛇行懸垂文が垂下する。一部の懸垂文では胴部文様帯上位区画と連結し、融合する傾向が窺える。地文は口縁部が単節R Lの横位施文。胴部は縦位施文される。

石器は、炉跡の炉縁石として使用された1点が検出されたただけである。2は石皿の欠損品で表面縁部には凹部を多数有する。

第9号住居跡（第79、80図）

F、G-7 Grid に位置する。I区北西側の北へ緩やかに傾斜する斜面部で、標高47.40mを測る。住居跡南東側を第10号住居跡と重複する。形態は円を基調とし、規模は推定で長径4.8m、短径4.4mを測る。掘り込みは浅く、確認面から8cmである。

覆土は暗褐色土が薄く堆積した状態が観察され、壁は南壁の一部が検出されたに過ぎない。壁溝は存在しない。床面は南側の一部で堅く踏み固められていたものの炉の周辺や北側では軟質な状況であった。ピットは7基検出され、このうち支柱穴と考えられるのはP1～P5であり、住居跡西側の壁に沿った配置を示し



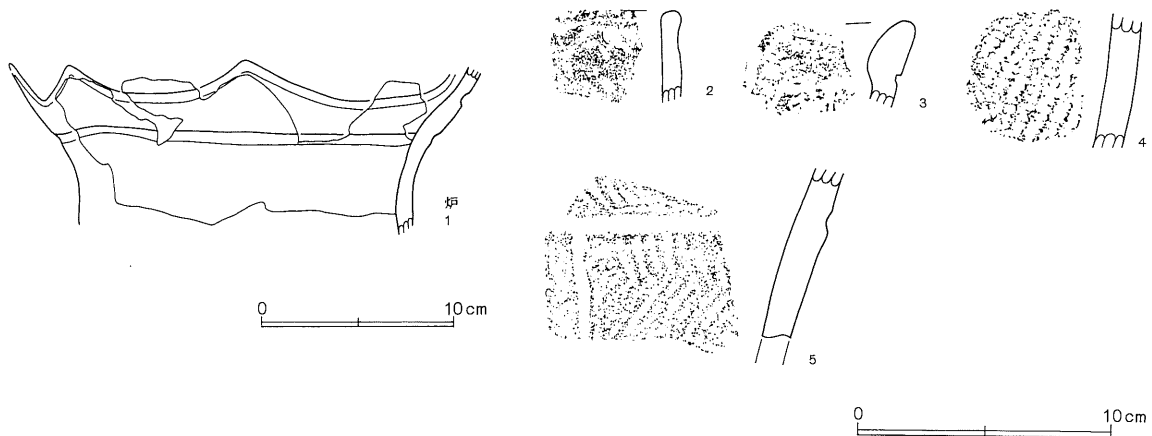
第79図 第9号住居跡 (L=47.60m)

ている。深さはP1=30cm、P2=33cm、P3=47cm、P4=34cm、P5=34cmを測る。

炉跡は石囲炉で住居跡中央に位置する。南側に攪乱を受けているが楕円形を呈していたと推定される。掘り込みの規模は推定で長径84cm、短径78cm、深さ16cmで炉床は良く焼けて平坦である。炉縁石はほとんど抜き取られており、その形態は不明である。炉跡の覆土中より土器破片が検出され、埋設土器である可能性が考えられる。時期は加曾利EⅢ式古段階に比定されよう。

出土遺物（第80図）

覆土の堆積が薄いため、炉跡や柱穴内と極めて限定された中での出土である。1は横位区画文として1本の沈線が巡り、区画内を1本沈線による孤線文が施文される。地文は施文されていない。2は早期燃糸文期に属する無文土器である。口唇部が丸頭状でやや肥厚する。3は小突起をもつ口縁部破片で、隆帯に沿って沈線と刺突文が加えられている。4は胴部破片で地文に単節RLが縦位に施文される。5は口縁部文様帯下位区画の幅広沈線から2本沈線による懸垂文が垂下する。沈線間は磨り消されている。地文は口縁部が単節RLの横位施文で胴部が縦位に施文される。



第80図 第9号住居跡出土遺物

第10号住居跡（第81図）

F、G-7 Grid に位置する。I区北西側で検出され、住居跡北側を第9号住居跡と重複する。本住居跡は第9号住居跡の精査中に炉跡やピットを検出したことから住居跡としたが、壁、壁溝、床は検出されず炉の先後関係も不明である。規模は炉跡とピットの位置から推定で径5.5mを測ると思われる。

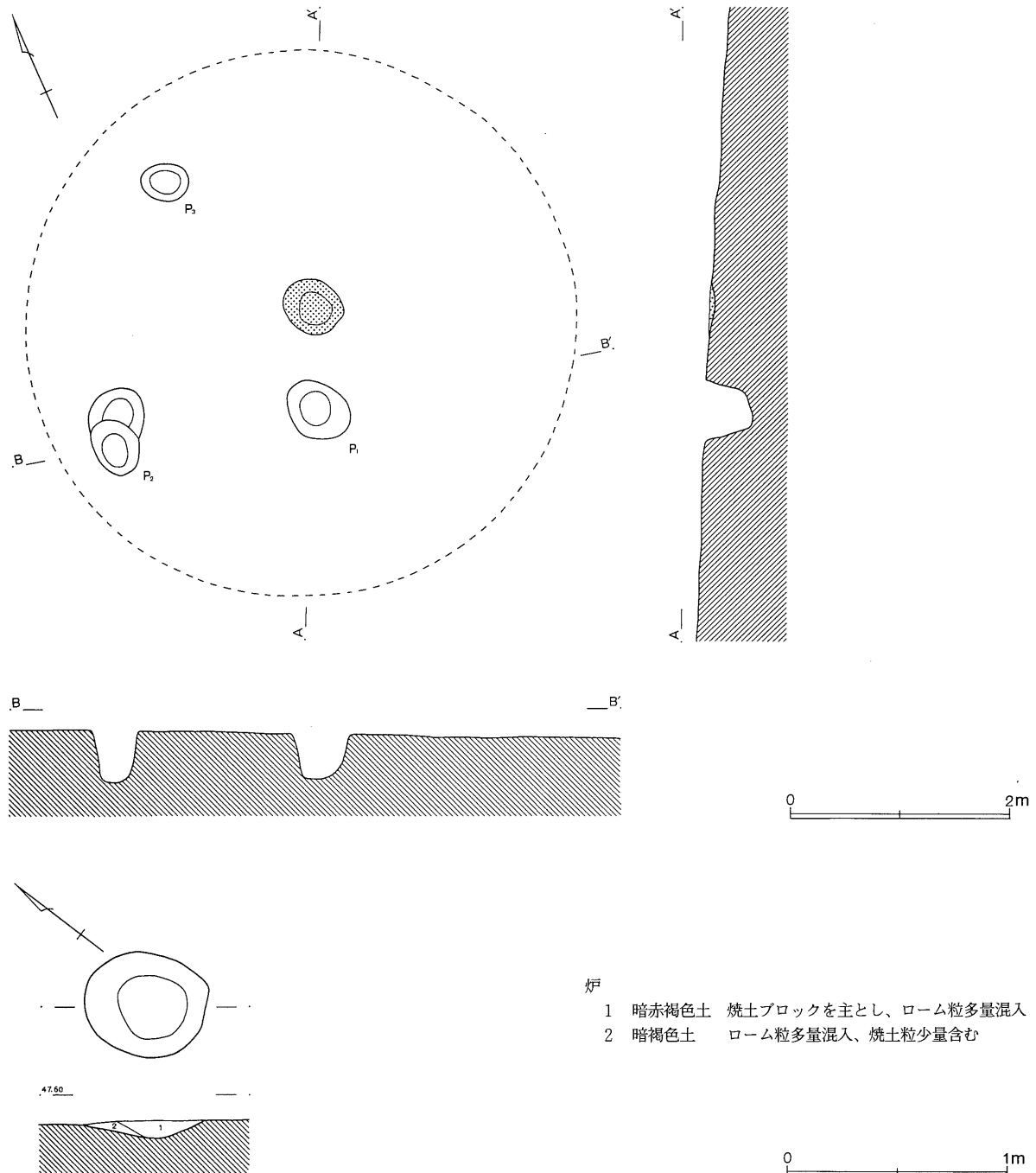
炉跡は地床炉で住居跡中央に位置したと推定され、形態は楕円形を呈し、規模は長径55cm、短径46cm、深さ8cmである。ピットは3基検出され、このうちP2、P3は主柱穴と考えられる。深さはP1=43cm、P2=47cm、P3=59cmを測る。

出土遺物はないが、本住居跡は加曾利E式期に属するものと思われる。

第11号住居跡（第82、83図）

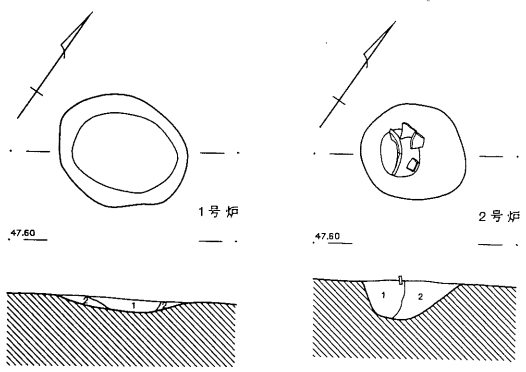
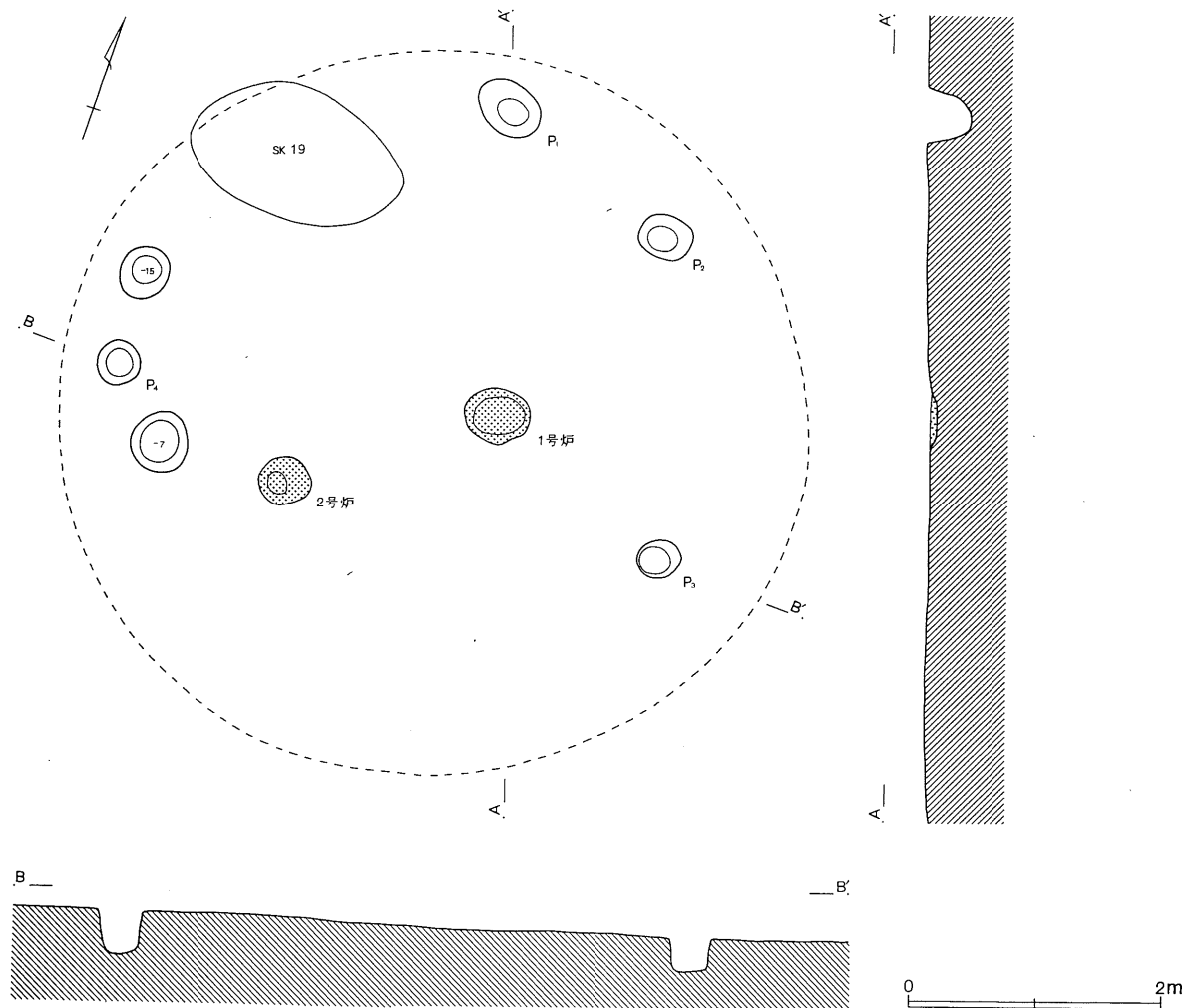
G、H-9 Grid に位置する。I区中央部の平坦面で検出され、西へ約2mの距離に第8号住居跡が所在する。北側を第19号土壇と重複する。遺構確認段階で床面、炉、ピットの検出により住居跡と確認した。形態は円を基調とし、規模は推定で径5.8m前後と思われる。

覆土は極端に薄く、暗褐色土の堆積が確認されたに過ぎない。壁や壁溝は検出されなかった。床面は平坦であり、炉跡の周辺でやや踏み固められた状況が観察された。ピットは6基検出され、住居跡北側の壁際を巡るような配置がとられている。このうちP1～P4が深さや配置から主柱穴と考えられるが、南側に対応するピットが無いため断定できない。深さはP1=32cm、P2=21cm、P3=25cm、P4=32cmを測る。



第81図 第10号住居跡 (L=47.70m)

炉跡は住居跡中央と西壁寄りの2箇所で検出されが先後関係は不明である。1号炉は地床炉で、形態は楕円形を呈し、規模は長径1m、短径0.9m、深さ7cmと浅い。炉床は比較的良く焼けている。2号炉は土器埋設炉で、形態は隅丸方形を呈し、掘り込みは長径40cm、短径37cm、深さ15cmを測り、1号炉と比較すると小形である。埋設土器は深鉢形土器の胴部破片で、埋設土器とするには疑問も残るが、調査時に埋設された状況が窺えたことから埋設土器として扱った。覆土からは同一個体の破片が検出されている。炉床は良く焼けており、焼土も多量に堆積していた。出土遺物は、炉跡からの出土のみである。時期は加曾利EⅢ式古段階に比定される。



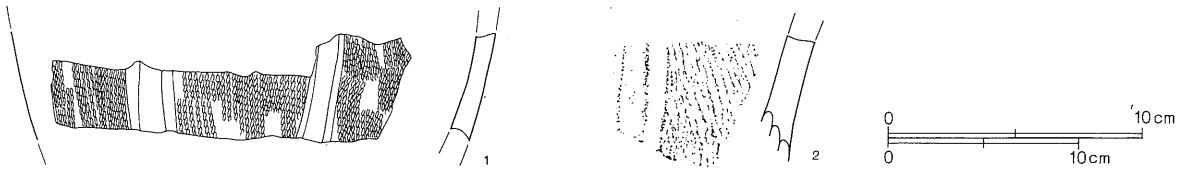
- 1号炉
- 1 暗赤褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒多量含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒少量含む
- 2号炉
- 1 黒褐色土 粗いローム粒少量混入
 - 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒・炭化物多量含む



第82図 第11号住居跡 (L=47.70m)

出土遺物 (第83図)

1、2は同一個体であり、2号炉からの出土である。胴部破片でナゾられた2本の沈線による懸垂文が垂下し、沈線間は磨り消されている。地文は撚糸Lの縦位施文。2は胴部上半部であり、口縁部に向け緩やかに外反する。



第83図 第11号住居跡出土遺物

第12号住居跡 (第84図)

I、J-11、12Grid に位置する。I区東側の平坦面で検出された。西へ約10mの距離に第5、6号住居跡が所在する。この時期での住居跡としてはやや東寄りに位置する。遺構確認時に炉跡とピットが検出されたことにより住居跡と確認した。壁、壁溝はいずれも検出されていない。形態は円を基調とすると思われ、規模は推定で径6m前後と考えられる。床面は概ね平坦であるが、全体的に軟質である。ピットは4基検出され、ほぼ正方形の規則的な配置がなされた支柱穴である。深さはP1=50cm、P2=18cm、P3=45cm、P4=54cmを測る。また、南西側に土壌が検出されているが、本住居跡に伴うものかどうかは不明である。炉跡は地床炉で住居跡中央に位置する。掘り込みは南北方向に長い楕円形を呈し、規模は長径60cm、短径48cm、深さ14cmを測る。覆土には焼土を多量に含み、炉床は焼けていた。

出土遺物はないが、本住居跡の時期は加曾利E式期に属すると思われる。

第13号住居跡 (第85、86図)

K、L-14Grid に位置する。第1号墳の前方部墳丘下より検出され、炉跡とピットが認められたことにより住居跡とした。壁、壁溝は存在しない。規模は推定で径5.2mを測る。ピットは8基検出され、このうちP1~P4の4本が支柱穴で、正方形の規則的な配置がなされている。深さはP1=50cm、P2=46cm、P3=40cm、P4=52cmを測る。更に住居跡推定ライン外にピット2基と土壌1基が検出されているが、住居跡に伴うものか判断できない。

炉跡は地床炉で中央やや東側に位置し一部攪乱を受けている。プランは不整楕円形を呈し、掘り込みの規模は長径65cm、短径60cm、深さ7cmで炉床はよく焼けていた。

出土遺物は、遺構確認段階で少量の遺物が検出された。

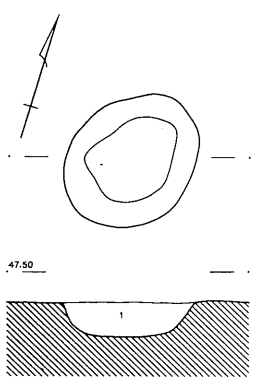
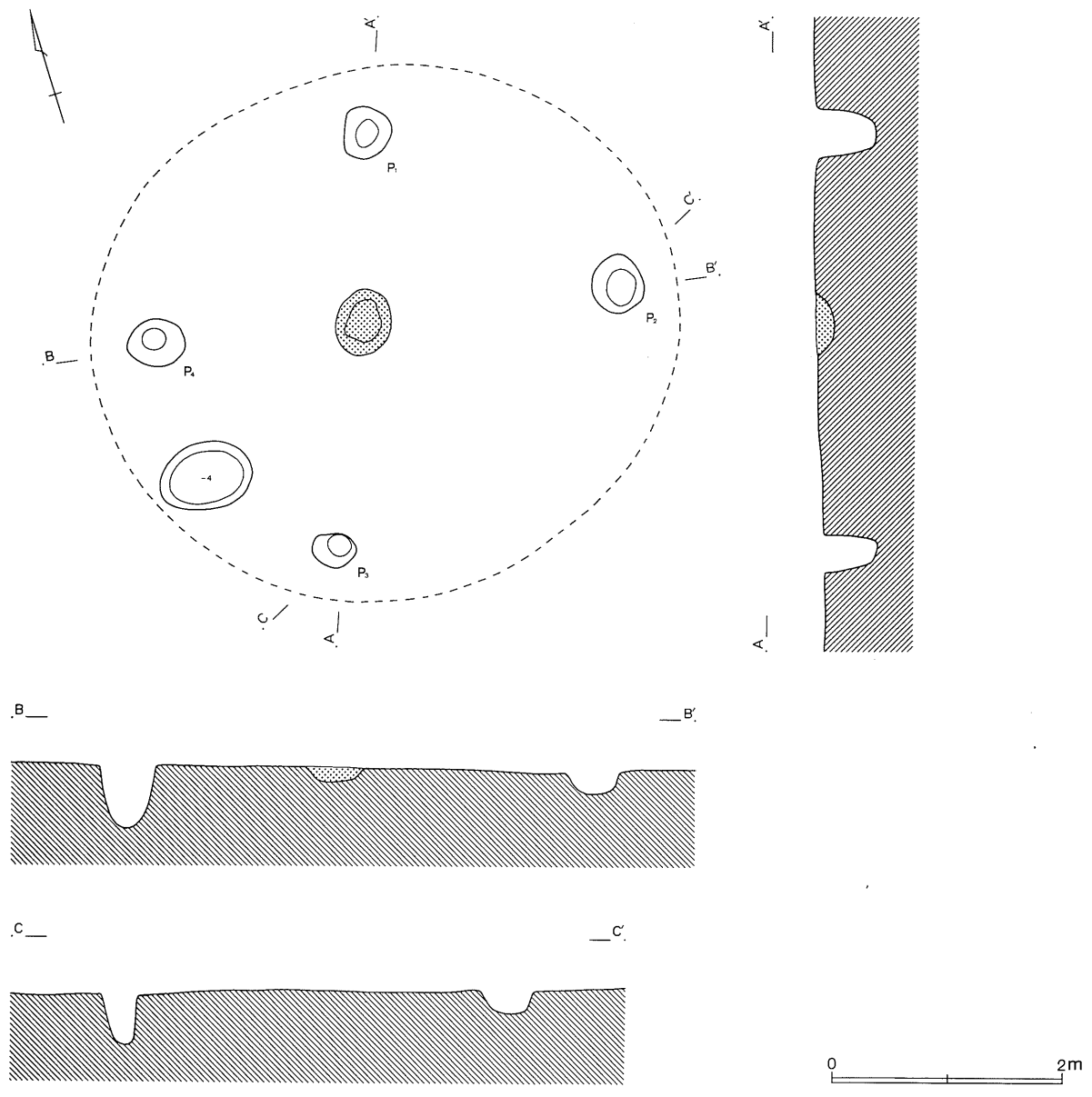
出土遺物 (第86図)

1は口縁部が内湾し、口唇部は丸く収まる。口縁下に1本沈線が横走し、これより2本1単位の孤を描く沈線が垂下する。地文は無文で、施文後に器面を研磨調整している。2は無文の胴部破片。3は浅鉢形土器で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。口縁外面が三角状に肥厚する。

第14号住居跡 (第87~90図)

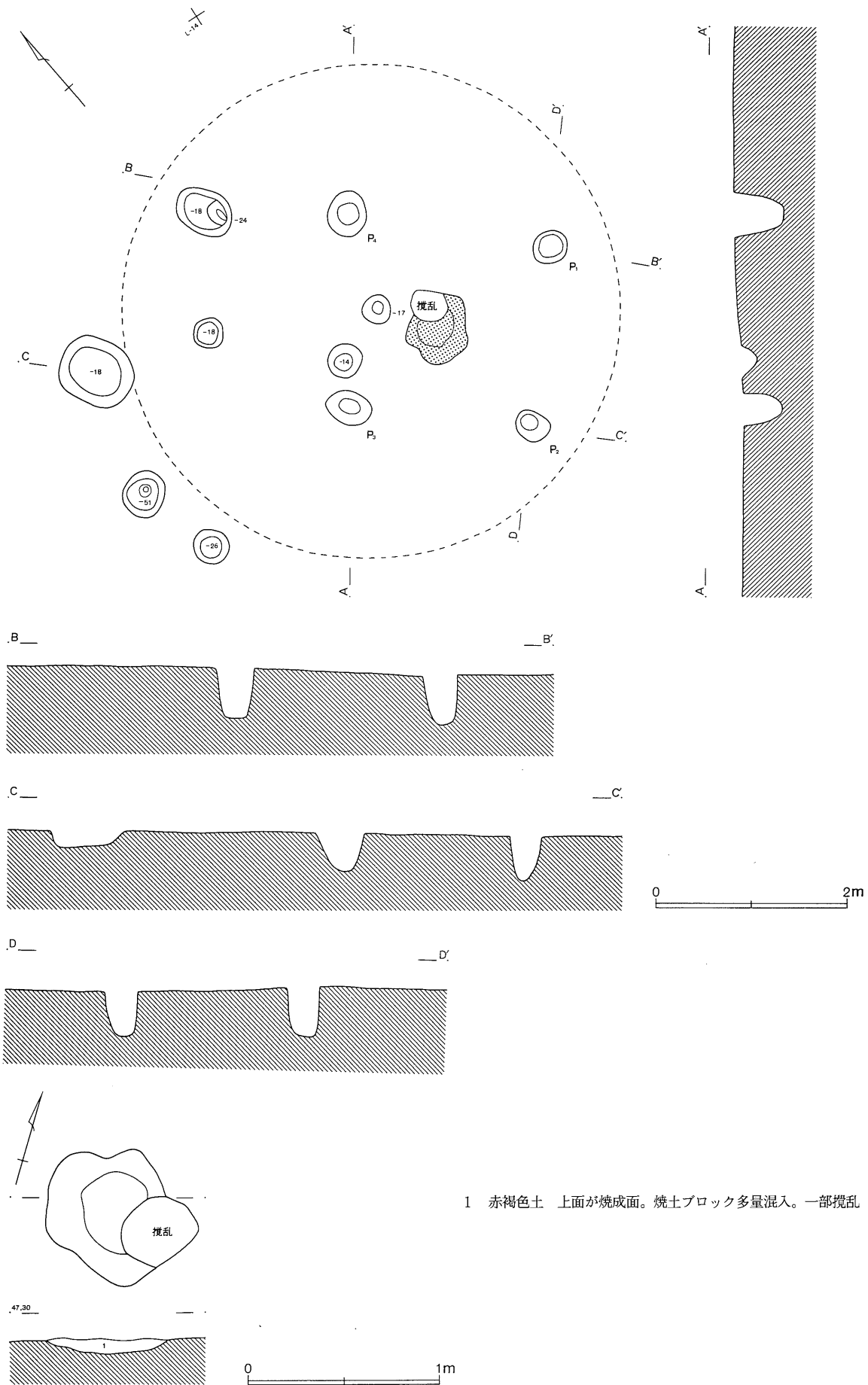
M、N-16、17Grid に位置する。Ⅱ区西側の台地平坦面で検出され、標高46.90mを測る。本住居跡は第1号墳の後円部周溝により住居跡北側を壊されている。形態は長方形を呈し、規模は推定で長軸5.7m、短軸4.9m、深さ12cmを測る。主軸方位はN-24°-Wを指している。

住居跡覆土は、暗褐色土を基調とする自然堆積による埋没で、焼土粒、炭化物とともに遺物の出土量も多い。壁は東壁で緩やかに立ち上がるが、西壁は流失しており検出されていない。床面はやや凹凸な状況であ



1 褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒少量含み、粘性、しまり弱

第84図 第12号住居跡 (L=47.80m)

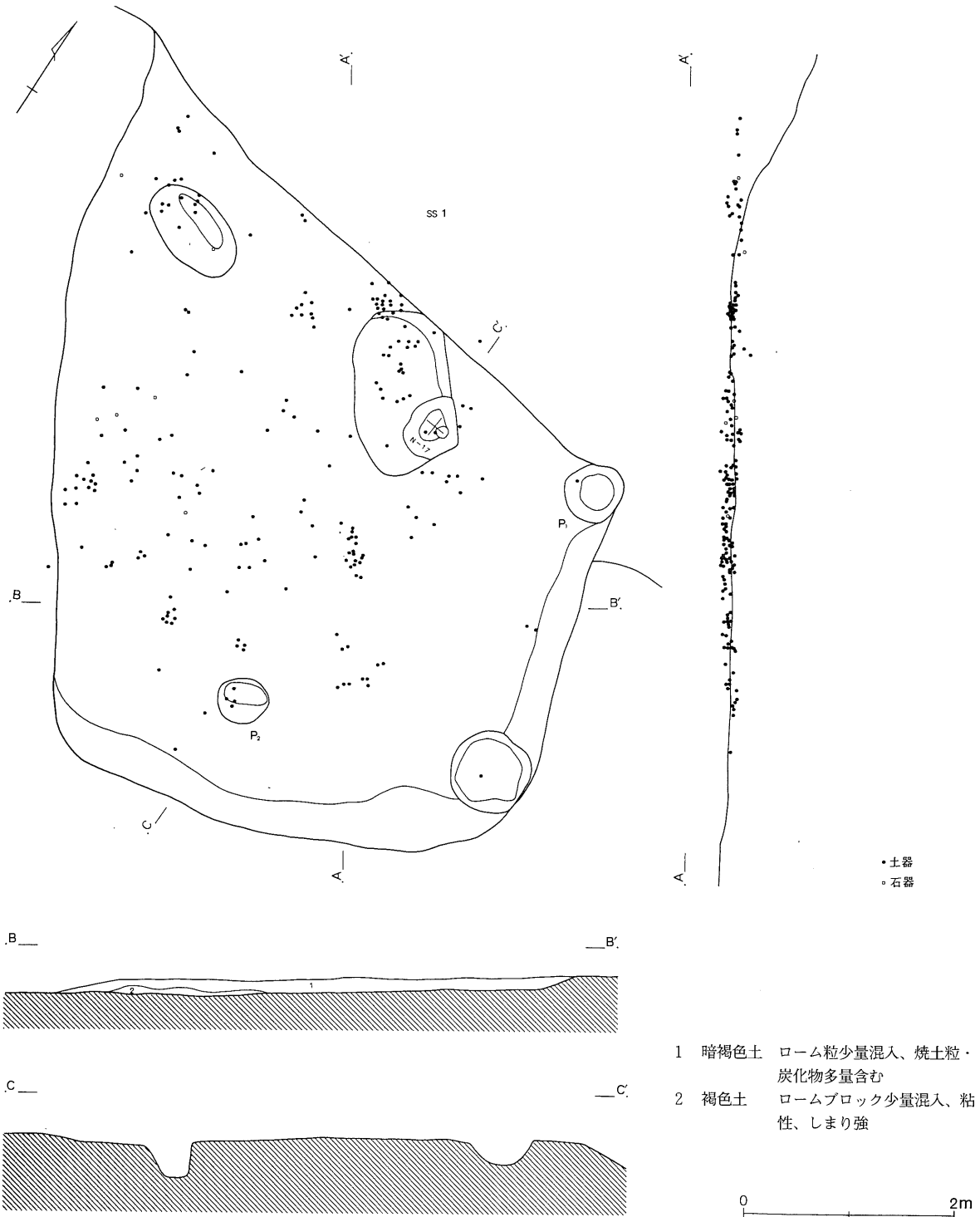


1 赤褐色土 上面が焼成面。焼土ブロック多量混入。一部攪乱

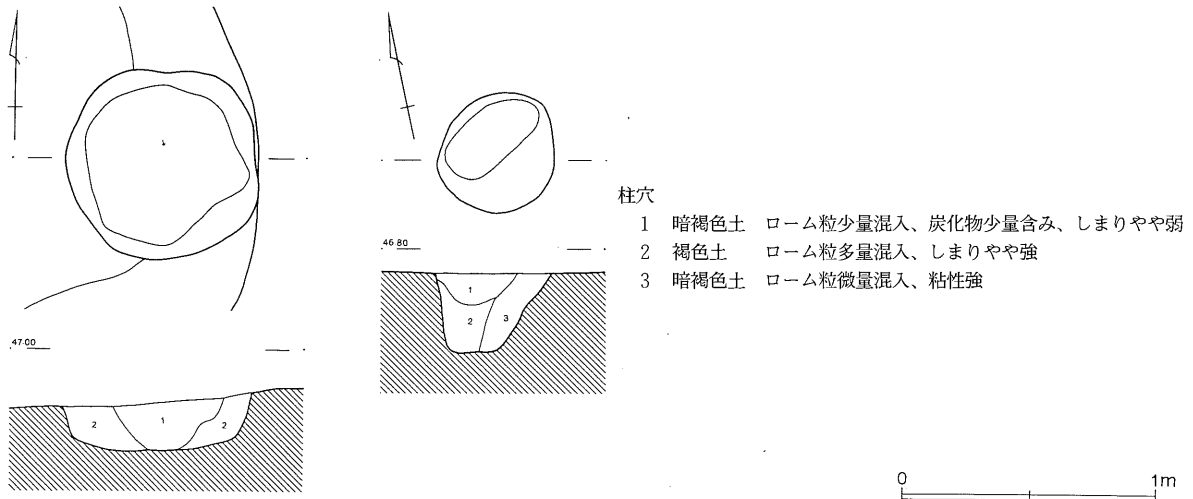
第85図 第13号住居跡 (L=47.50m)



第86図 第13号住居跡出土遺物



第87図 第14号住居跡 (L=47.20m)



第88図 第14号住居跡

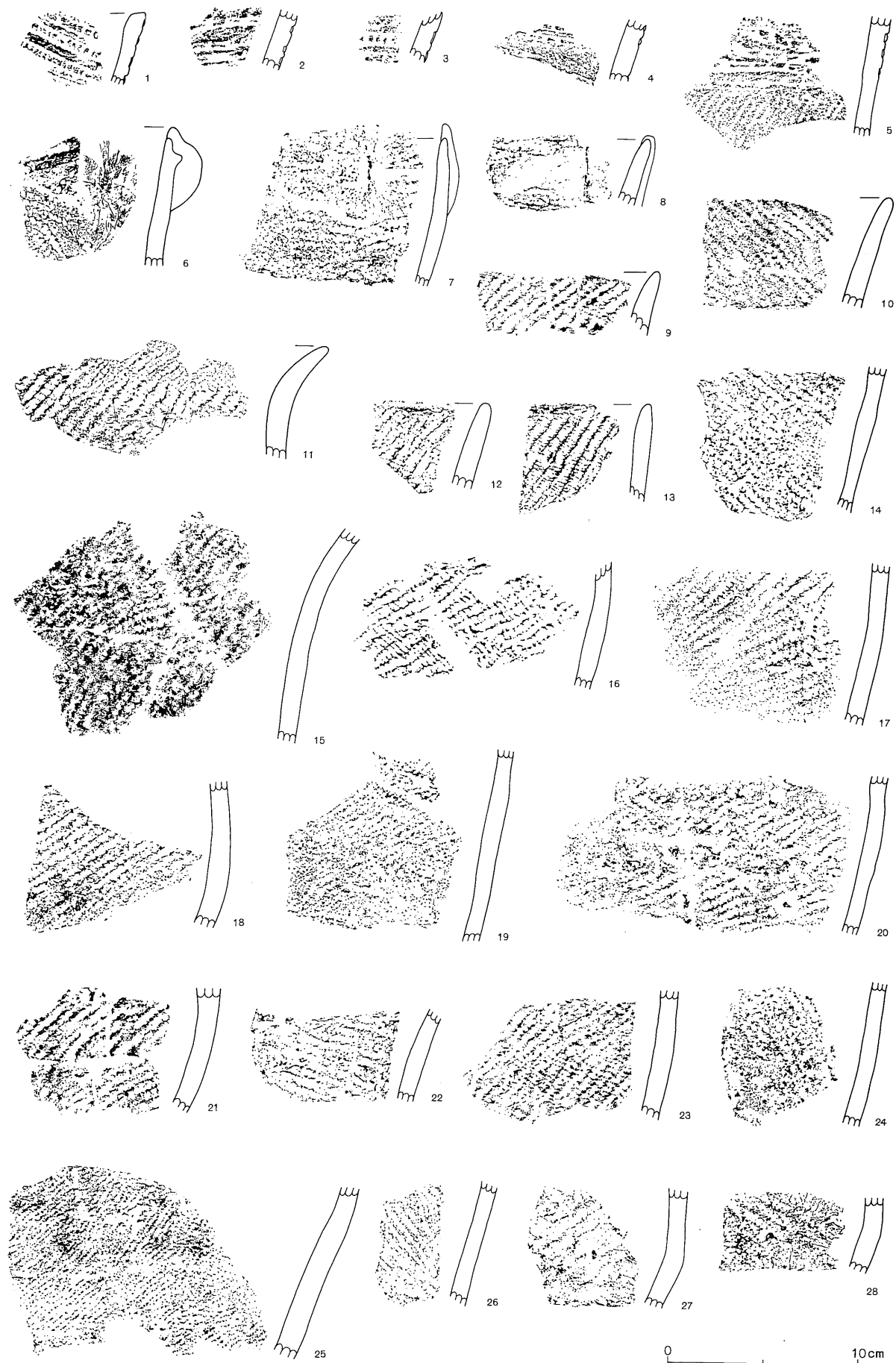
るが踏み固められている。炉跡は検出されなかった。ピットは5基検出され、このうちP2は柱痕が観察された。深さはP1=18cm、P2=36cmを測る。南東コーナーの土壌は、覆土の観察から本住居跡に伴うものであり規模は径74cm、深さ25cmを測る。また、住居跡中央の掘り込みも本住居跡に伴うものである。

出土遺物は、住居跡中央部から西側にかけての床面と床面直上から検出され、時期は前期黒浜式の古段階に比定される。

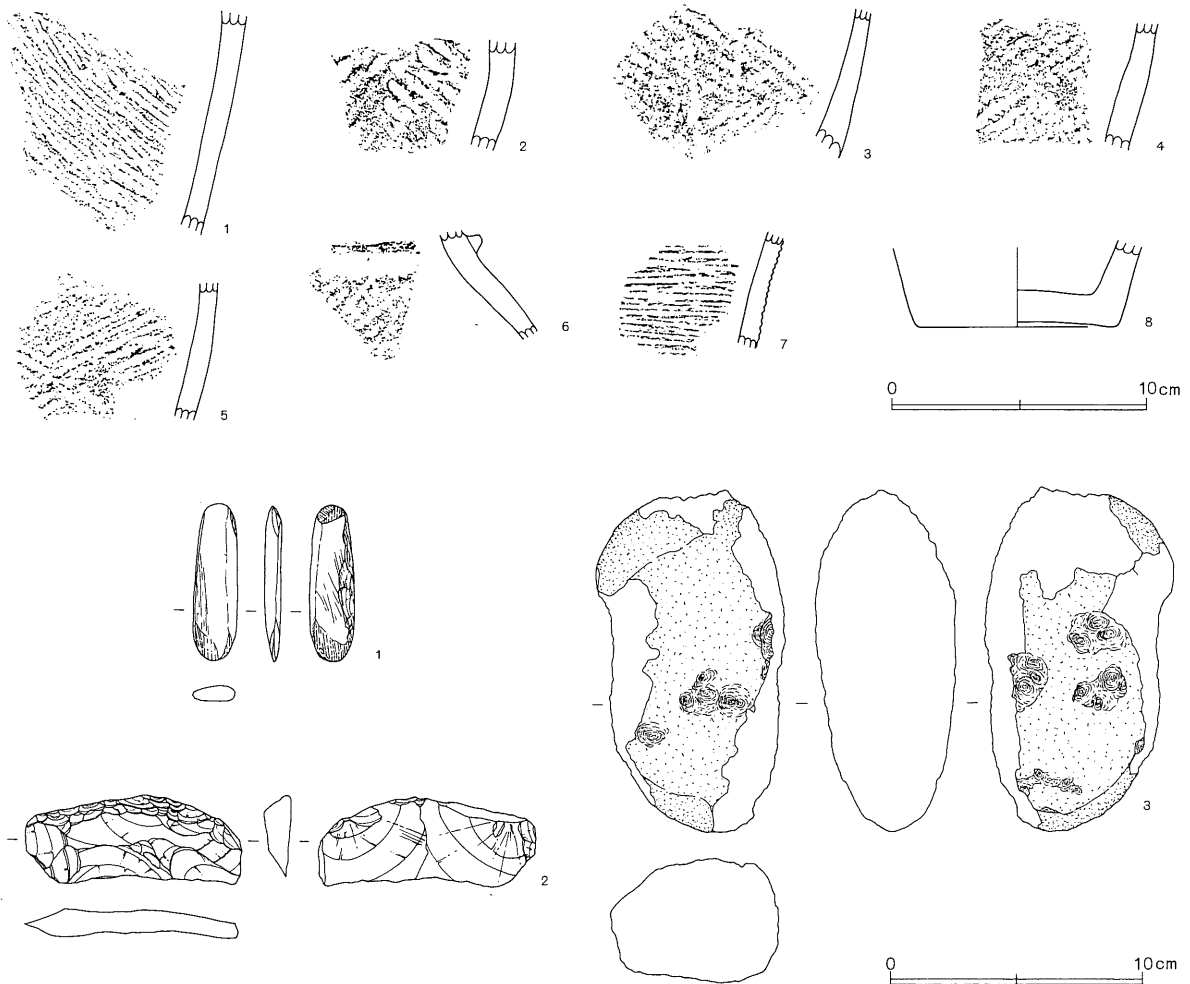
出土遺物 (第89、90図)

住居跡覆土の深度は浅いにもかかわらず、比較的纏まった出土量をみた。しかし、遺物保存状態は悪く、風化により文様が喪失しているものも多い。第90図7以外は胎土中に植物性繊維の痕跡が認められた。

第89図1は4単位の波状口縁を呈し、口縁はやや肥厚する。口縁に沿って幅6mmの半截竹管による平行沈線文と爪形文が充填される。2は幅4mmの半截竹管による平行沈線文に間隔をもつ爪形文が刺突状に施文される。3は幅7mmの半截竹管による平行沈線に爪形文が充填される。4は幅4mmの半截竹管による平行沈線に間隔をもつ爪形文が充填され、無文部を有することから数本単位により菱形か三角形の文様構図を表出すると思われる。5は胴部破片で文様帯区画文として3本単位の平行沈線文が横走する。沈線は幅4mmの半截竹管による平行沈線で、これに間隔をもつ爪形文が充填される。胴部は単節LRの横位施文である。6は口縁部が小波状を呈し、口縁に沿って隆帯が巡る。口縁波頂部には耳状の貼付文が加えられている。地文は単節RLを横位施文する。7は小波状を呈する口縁で、口唇部は摘み上げられて薄い。波頂部には棒状の貼付文が付され、地文は単節RLを縦位や斜位に施文する。8は小波状を呈する口縁部で、波頂部に棒状の貼付文が施されている。口縁部は無文である。9は口縁部がやや開き、内面は入念な磨きが施されている。単節RLの縦位施文。10は単節LRの縦位施文。11は口縁部で強く外反し、口縁部内面は入念な磨きが施されている。単節LRの横位施文である。12は単節LRの横位施文。13は口縁部が垂直に立ち上がり、内面に入念な磨きが施され、外面は0段3条による横位施文である。14~24は胴部破片で、14はRLの横位施文。15は胴部から直線的に立ち上がり、口縁部で強く外反する。単節RLの縦位施文である。16は0段3条にLRの横位施文。17、18、20は単節RLの縦位施文。19、21~23は単節LRの横位、斜位施文。24は単節RLの横位施文である。25は胴上部の破片で、口縁部が外反しながら立ち上がり器面は無節Lが横位に施文される。26、28は単節LRの縦位施文。27は胴下半が張り、器面に縞りの弱い単節LRの横位施文。



第89图 第14号住居跡出土遺物(1)



第90図 第14号住居跡出土遺物(2)

第90図1は無節L rの縦位施文。2は無節L r、R lの縦位と横位に施文し、羽状縄文を表出している。3、5は単節L R、R Lによる羽状縄文を施文する。4は単節L Rの横位施文。6は第89図6と同様に波状を呈する口縁で、口縁下に隆帯が巡る。単節R Lが横位に施文されている。7は幅4 mmの半截竹管による横走する集合沈線が施文されている。8は底部で底面がやや凹む。

石器は3点検出された。1は小形磨製石斧で、両側面に入念な研磨による面取りが施される。刃部は丸刃で両面から研きだされている。2はスクレパーで裏面に主要剥離面が残り、背部に調整剥離が認められる。3は凹石で両面に凹部を有する。

第15号住居跡 (第91、92図)

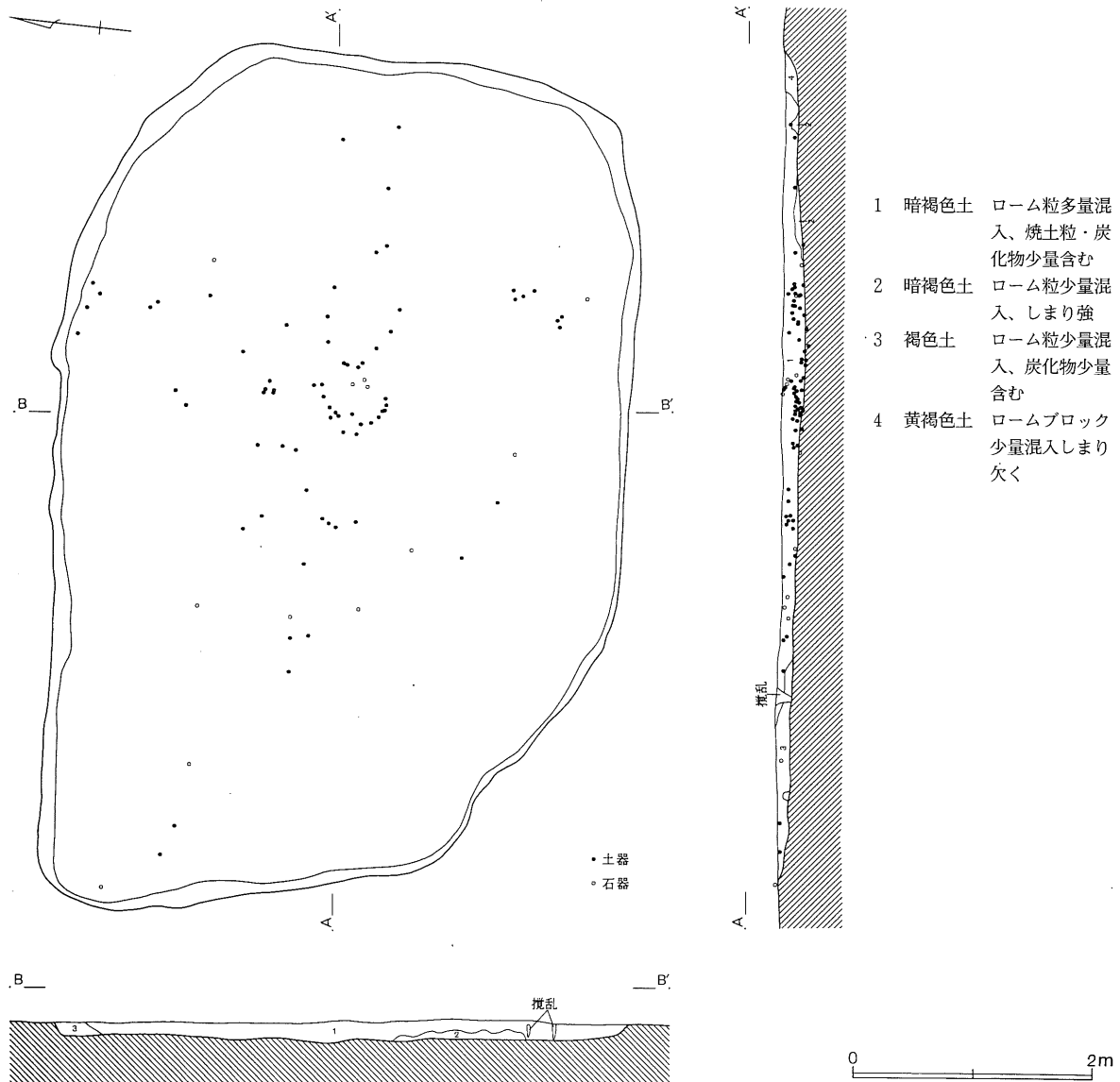
Q-20、21 Grid に位置する。Ⅱ区中央部の平坦面で検出され、標高46.50mを測る。形態は不整な長方形を呈し、東壁両コーナーは丸みをもつもの南西コーナーは不整形を呈する。規模は長軸7.28m、短軸4.7m、深さ12cmを測る。主軸方位はN-86° - Eを指している。

覆土は暗褐色土を基調する自然堆積による埋没であり、壁は緩やかに立ち上がる。床面は凹凸がみられ軟質な状況が窺えた。炉跡、ピット等の施設は検出されていない。

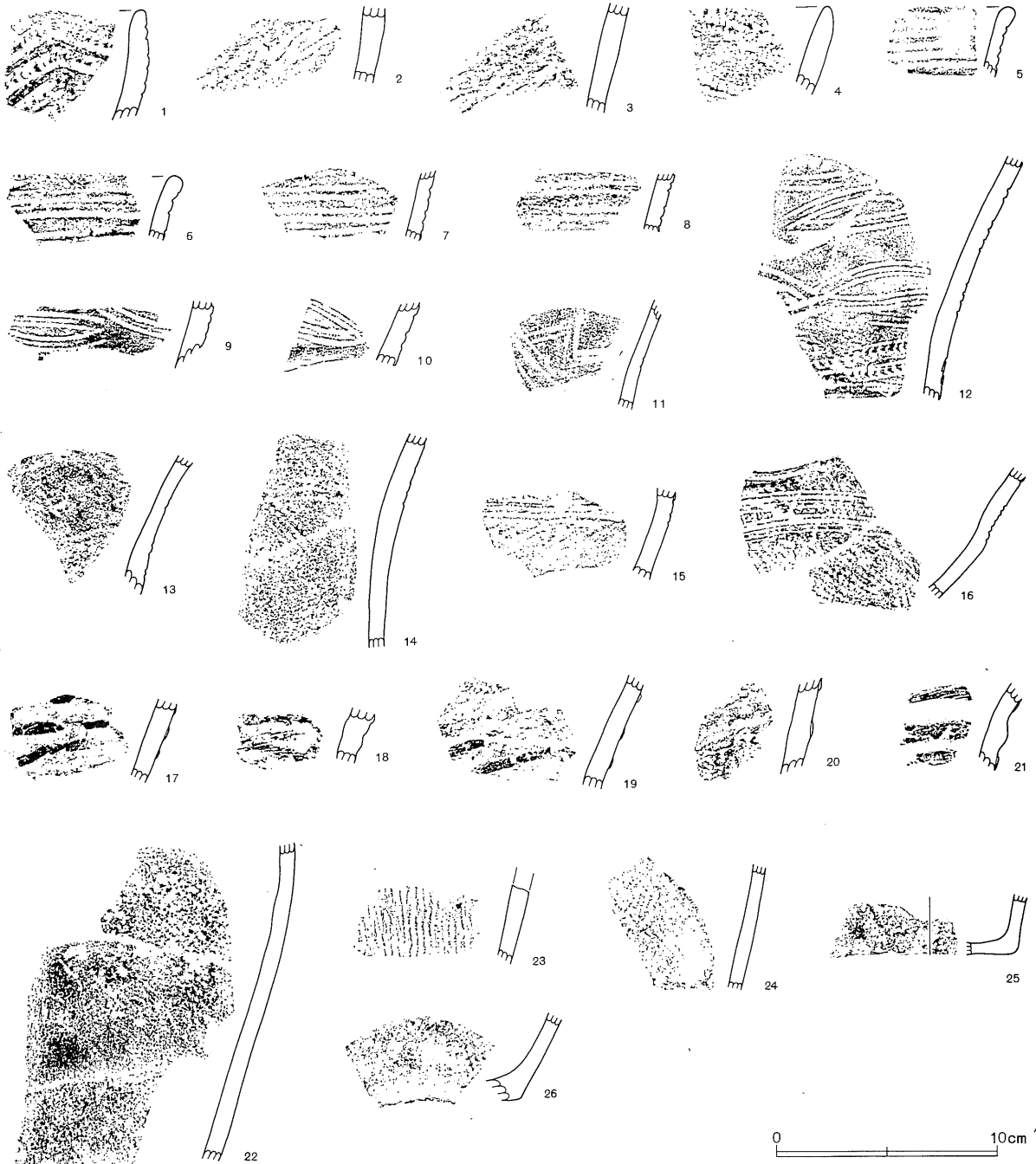
出土遺物は住居跡中央部付近を中心に分布がみられ、多くは第1層中からの出土である。時期は前期諸磯b式期に比定される。

出土遺物 (第92~93図)

土器は全てが小破片として検出されている。1~4は繊維土器である。1は4単位の波状口縁を呈し、口縁に沿って幅7mmの半截竹管による平行沈線文と爪形文が4本施文される。2、3は器面が磨滅した胴部破片で、単節LRを横位又は斜位に施文する。4は直線的に外反する口縁部破片で、口縁に沿って単節RLを

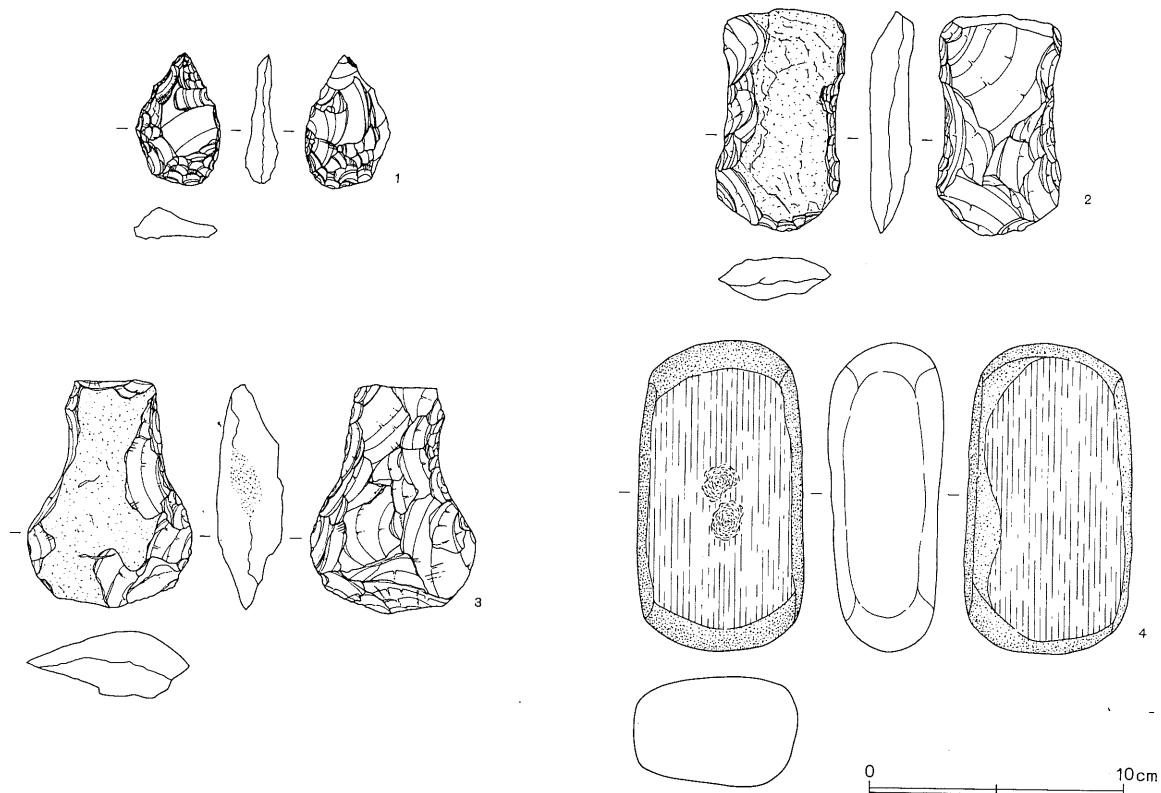


第91図 第15号住居跡 (L=46.90m)



第92図 第15号住居跡出土遺物(1)

横位施文する。内面は入念な研磨調整が施されている。5～8は同一個体で口縁部が外反し、口唇部で肥厚する。口縁に沿って幅6mmの半截竹管による平行沈線文が複数施文される。9、10は胴部破片で幅6mmの半截竹管による木の葉状のモチーフが描出されている。11は半截竹管による平行沈線文で、鋸歯状文若しくは木の葉状入り組文が表出されていると思われる。12は口縁部が強く外反する。幅6mmの半截竹管による平行沈線文で木の葉文を描出し、文様帯区画文として爪形文を充填した2本の平行沈線文が横走する。13は磨滅が著しいが、平行沈線文による木の葉状入り組文が施文される。14は文様帯の区画文としての2本の平行沈線文が施され、胴部に単節RLが横位に施文される。15は縞りの弱い単節LRを横位に施文される。16は口縁部が強く外反し、体部上半でくびれる鉢形土器である。括れ部には数本の平行沈線文による区画文が施さ



第93図 第15号住居跡出土遺物(2)

れ、口縁部には木の葉文が描出されよう。体部は単節RLが横位に施文される。17~21は浮線文土器の胴部破片である。17~19は扁平な浮線を貼り付けた後、鋭利な工具で斜めに刻みを加えている。18には隆帯が施文されている。20は地文に単節RLを横位に施文している。21は幅広の隆帯と両側に刻みを有する浮線が施文される。22、24、26は胴下半部で縦位に単節RLが施文される。23は無節Lの横位施文。25は底部で単節RLを横位と縦位に施文する。

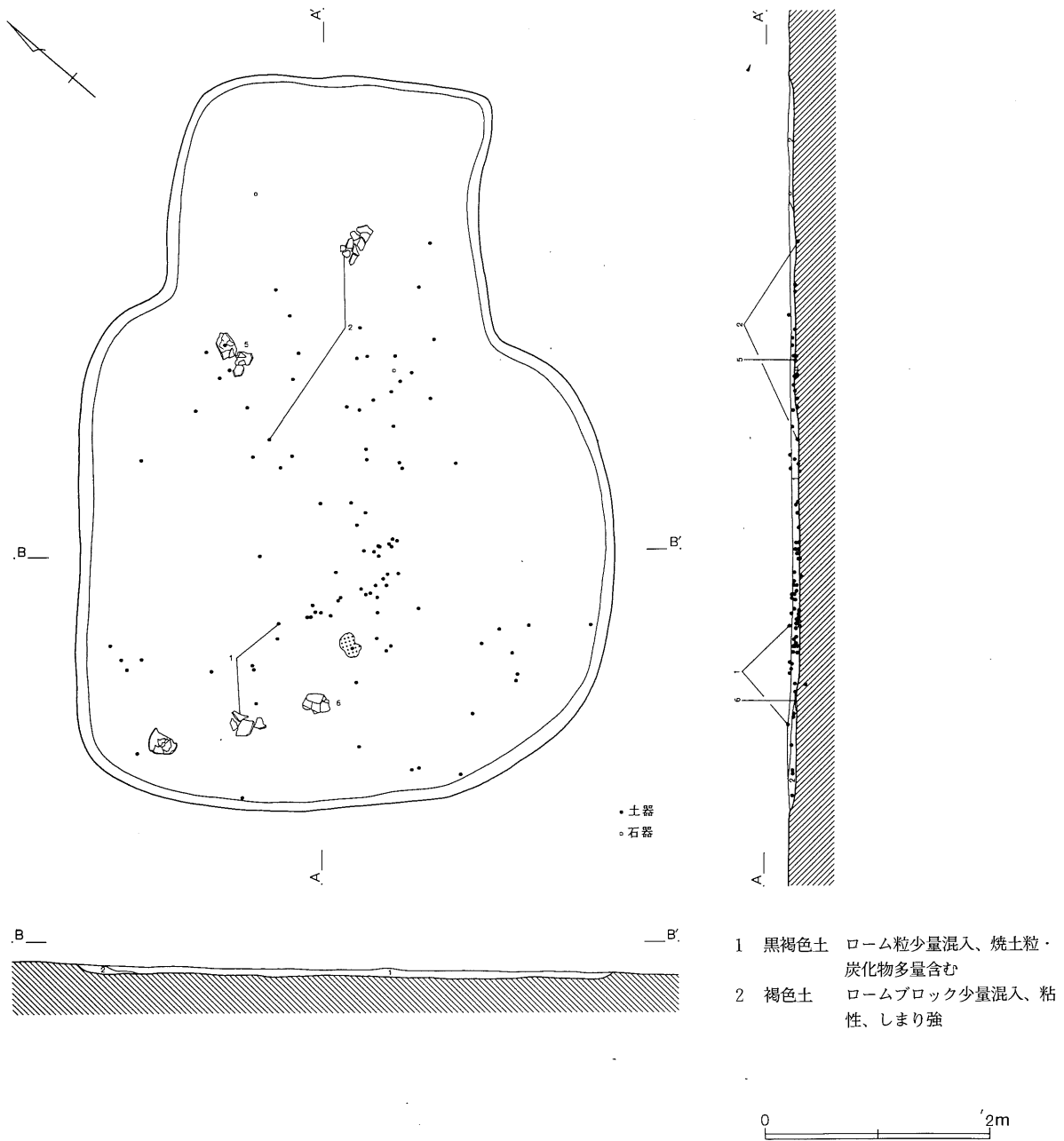
石器は4点検出された。1は石鏃で基部に挟り込みが行われず平基なものである。調整加工は粗いが基部は表裏より加えられている。2は打製石斧で、表面に自然面を残す。側面の調整剥離は両面より加えられている。3は撥形の打製石斧で表面に自然面を残し、側縁は内曲する。4は磨石で両面が良く磨られ、表面中央に敲打痕を有する。

第16号住居跡 (第94~96図)

Q、R-22 Grid に位置する。Ⅱ区東側の台地先端部寄りに検出され、標高46.30mを測る。第14号住居跡とは約60m程離れている。平面形態は北東側に方形の張り出しを有する隅丸方形の住居跡である。規模は、長軸6.47m、短軸4.78m、深さ8cmを測る。主軸方位はN-41°-Eを指している。

住居跡の覆土は、暗褐色土を基調とし、焼土粒、炭化物が多量に含まれている。覆土の状況や遺物の出土状態から焼失住居の可能性も否定できない。床面は平坦であるが全体的に軟質な状況であり、床面では焼土ブロックが数箇所検出された。ピットは検出されなかった。炉跡としては判断しなかったものの焼土ブロックの纏まりが住居跡中央やや西壁寄りに観察された。

出土遺物は、住居跡床面において2個体の深鉢形土器が押し潰された状況で検出された。時期は前期黒浜式期に比定される。

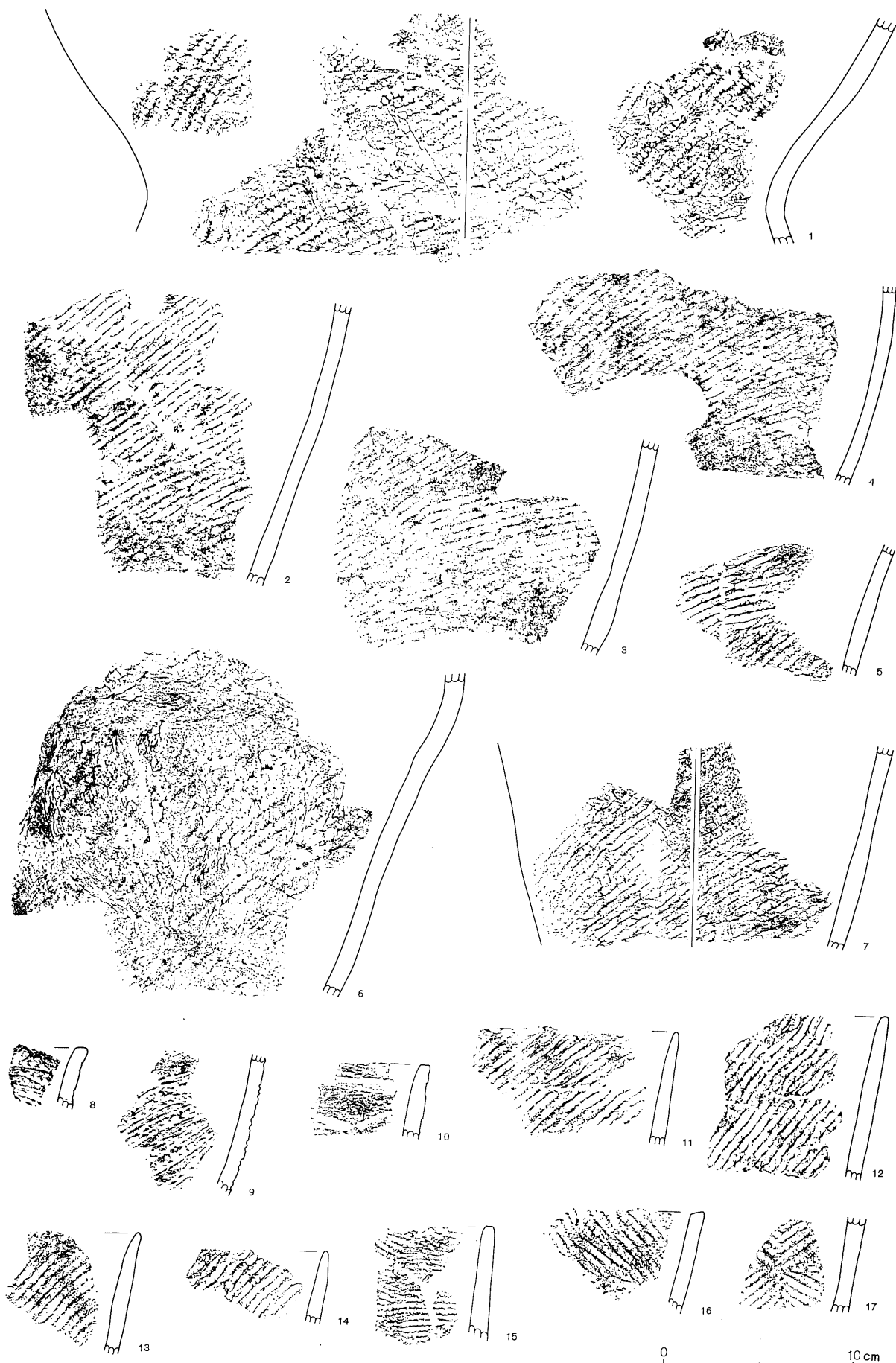


第94図 第16号住居跡 (L=46.50m)

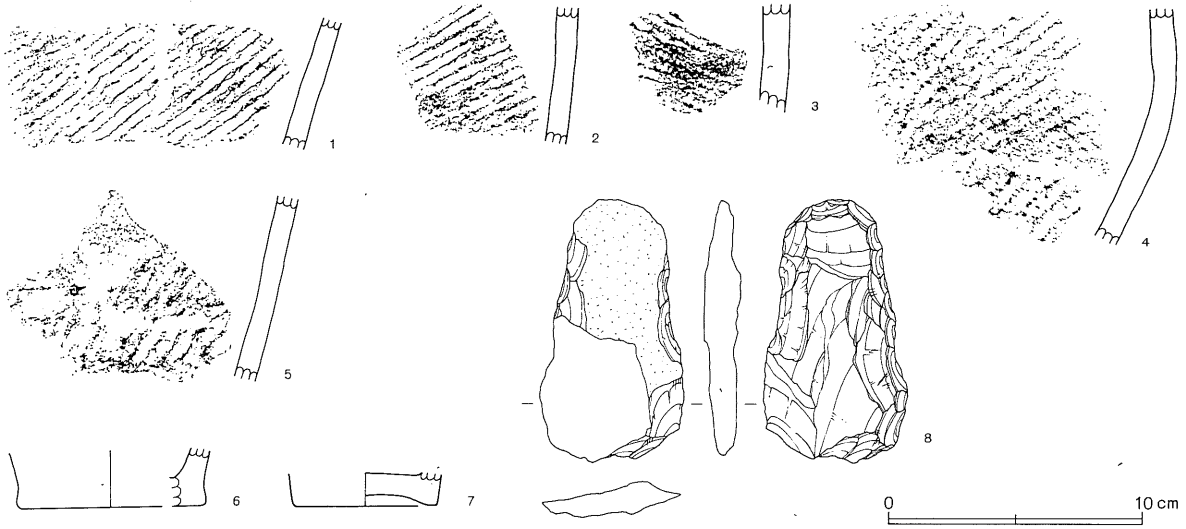
出土遺物 (第95、96図)

覆土の堆積は薄いにも係わらず、比較的多量の土器が出土している。しかし、遺物自体の保存状況は極めて悪く多くは器面が剥落や磨滅を受けている。図化した全ての土器の胎土には植物性繊維が混入されている。

第95図1～7は同一個体で口縁部は外反しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部上半で張り、底部へは直線的に移行する。土器表面は剥落している。単節LRを横位に施文する。8、9は同一個体で口縁部は波状口縁で外反しながら立ち上がる。口縁に沿って波状口縁で幅5mmの半截竹管による平行沈線文に押し引き施文された爪形文が充填され、菱形文を描出する。10は平口縁で、区画文として幅6mmの半截竹管による平行沈線文が施され、この間を鋸歯文が施文される。11～14は直線的に立ち上がる口縁部破片で、口唇部が尖るものと平坦なものがある。単節LRを横位に施文する。15、16は単節RLを横位又は斜位に施文される。17は羽状縄文で単節LR、RLにより施されている。



第95图 第16号住居跡出土遺物(1)



第96図 第16号住居跡出土遺物(2)

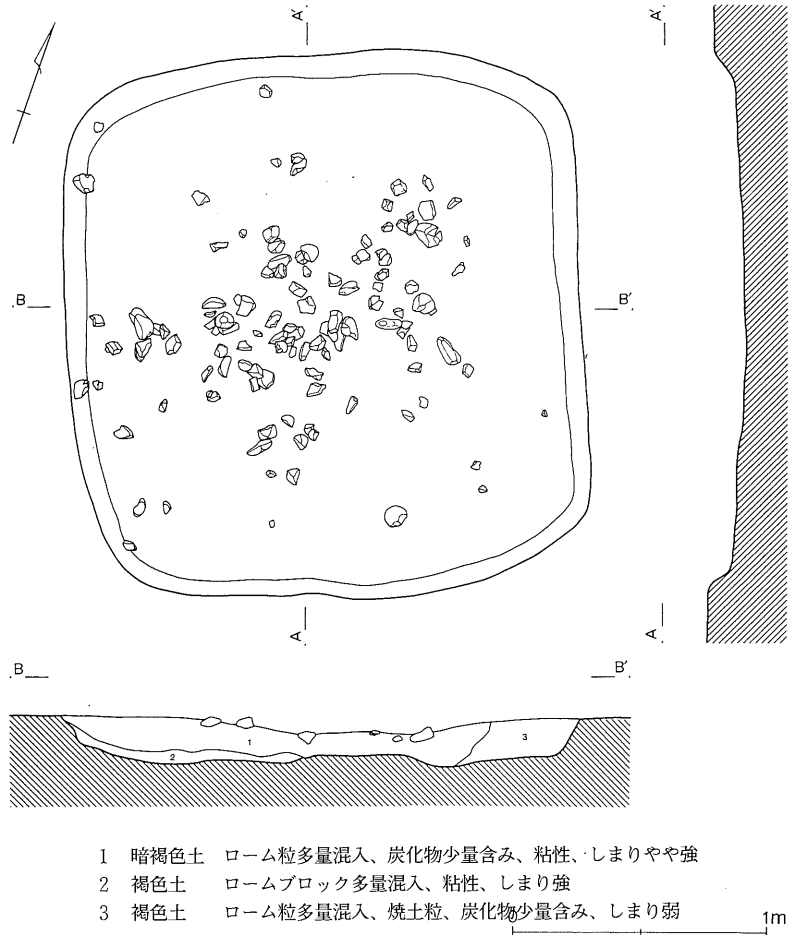
第96図1、2、4、5は単節LRを横位施文し、4は胴部がやや張る。3は単節RLを横位に施文する。6、7は底部で、7の底面は凹む。

石器は8の打製石斧1点が検出された。表面に自然面が残り、一部が破損している。側面の調整剥離は両面より加えられている。

第17号住居跡 (第97図)

R-22 Grid に位置する。II区東側の台地先端部寄りで検出され、西へ約3mの距離に第16号住居跡が所在する。本遺構は、住居跡とするには規模や付属施設において不明瞭であり疑問も残るが、ここでは住居跡として扱う。形態は方形を呈し、規模は長軸2.1m、短軸2.0m、深さ15cmを測る。主軸方位はN-25°-Wを指している。

覆土は、暗褐色土を基調とし、覆土上層より多量の礫が出土している。この礫のなかには赤化したものも含まれている。壁は緩やかに立ち上がり、床面は凹凸な状況が観察されたが、やや踏み固められ



- 1 暗褐色土 ローム粒多量混入、炭化物少量含み、粘性、しまりやや強
- 2 褐色土 ロームブロック多量混入、粘性、しまり強
- 3 褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒、炭化物少量含み、しまり弱

第97図 第17号住居跡 (L=46.40m)

ている。ピット、炉跡等は検出されていない。

出土遺物は数片の土器が検出された。時期は前期黒浜式期に属すると考えられる。

第4表 石器計測表

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
64-1	第1号住居跡	石匙	3.3	6.0	1.2	25	ホルンフェルス	
2		敲石・磨石	9.1	7.8	4.1	414	砂岩	
3		敲石	11.4	3.5	1.8	120	ホルンフェルス	
4		石皿	14.5	12.0	3.6	705	緑雲母片岩	
5		石皿	10.7	9.0	3.7	490	緑雲母片岩	
68-20	第3号住居跡	横歯形石器	6.2	10.2	2.3	126	泥岩	
21		打製石斧	10.8	6.2	2.8	172	砂岩	
22		石皿	18.8	10.1	3.6	790	緑泥片岩	
76-6	第7号住居跡	打製石斧	11.2	6.1	1.9	136	頁岩	
78-2	第8号住居跡	石皿	15.8	20.8	3.7	1,280	石墨片岩	
90-1	第14号住居跡	小形磨製石斧	6.2	1.8	0.6	14	粘板岩	
2		石匙	3.6	8.5	1.1	37	ホルンフェルス	
3		凹石	18.0	9.9	7.4		閃緑岩	
93-1	第15号住居跡	石鏃	2.6	1.7	0.6	2	黒曜石	
2		打製石斧	8.7	4.9	1.7	112	ホルンフェルス	
3		打製石斧	9.0	6.5	2.6	148	ホルンフェルス	
4		磨石	12.3	6.5	4.5	610	閃緑岩	
96-8	第16号住居跡	打製石斧	10.3	5.7	1.4	94	ホルンフェルス	

(2) 屋外埋甕 (第98図)

本遺跡から検出された屋外埋甕は4基である。この4基の埋甕は、住居跡や土壌など遺構に伴うことなく埋設された土器とその為の掘り込みのみによるものであり、住居跡内の埋甕とは検出状況が異なることから屋外埋甕として区別し扱った。

埋設された全ての土器は、胴上半部か胴下半部を正位に埋設し、口縁部など土器上部を欠損した状況が窺えた。この遺存状態は、住居跡の多くが壁を検出することのできないほど浅い掘り込みによる構築であることを前提とするならば、検出された土器の上部は削平など何らかの原因により埋設時の状態を留めていないと考えられる。更に、このことは埋設の際の土器は、当時の生活面よりそれほど深く掘り込まれることなく埋設されたものとみることができる。土器内の覆土はローム粒を含むものの人為的な堆積か自然堆積かは明確ではない。分布状態については、Ⅰ区住居跡群の分布範囲と重なる状況を示している。

以下、個別に検出位置、規模等について若干の説明を加える。

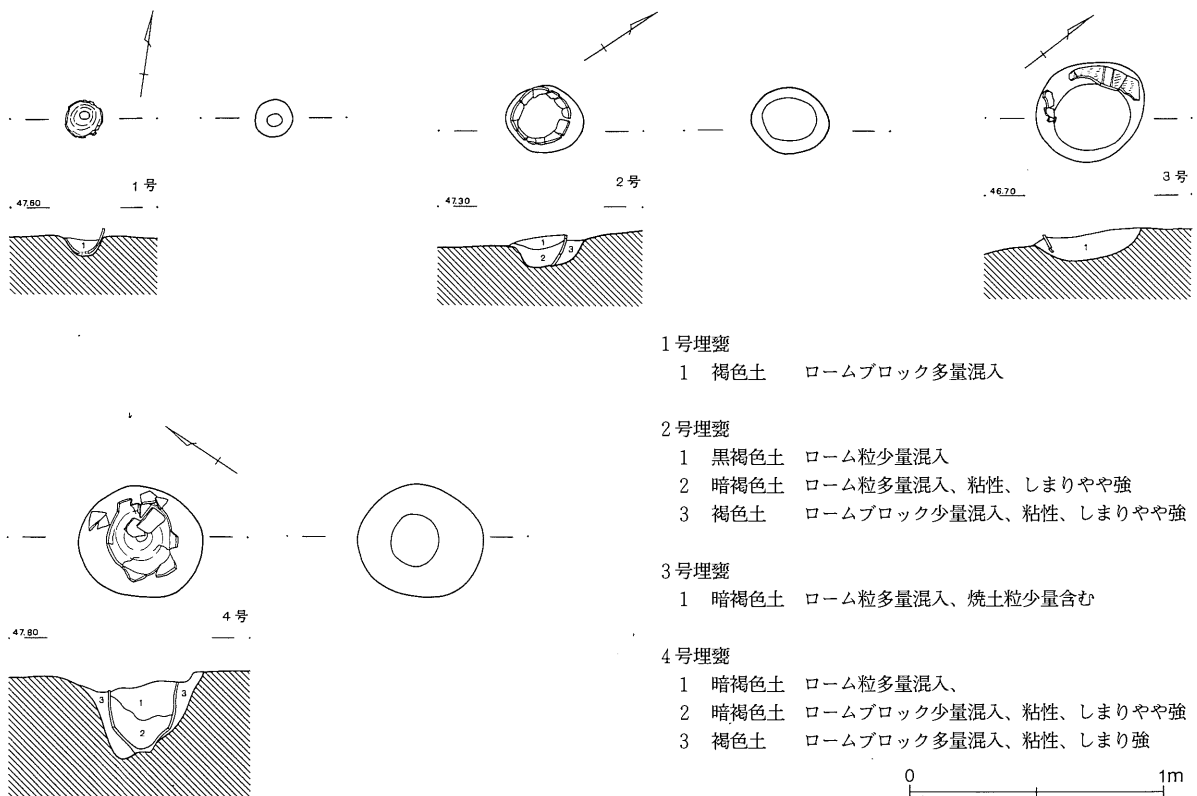
第1号屋外埋甕 (第98、99図)

H-10 Grid に位置する。Ⅰ区中央部の平坦面で、住居跡群の東側分布域で検出された。形態は円形で、規模は径15cm、深さ7cmを測り、埋設土器とほぼ同一の規模である。

第99図1が埋設された土器である。使用された土器は胴下半部で底部は剥奪されている。3本沈線による懸垂文と1本沈線による蛇行懸垂文が交互に配される。沈線間はナデられている。地文は単節RLを縦位に施文する。

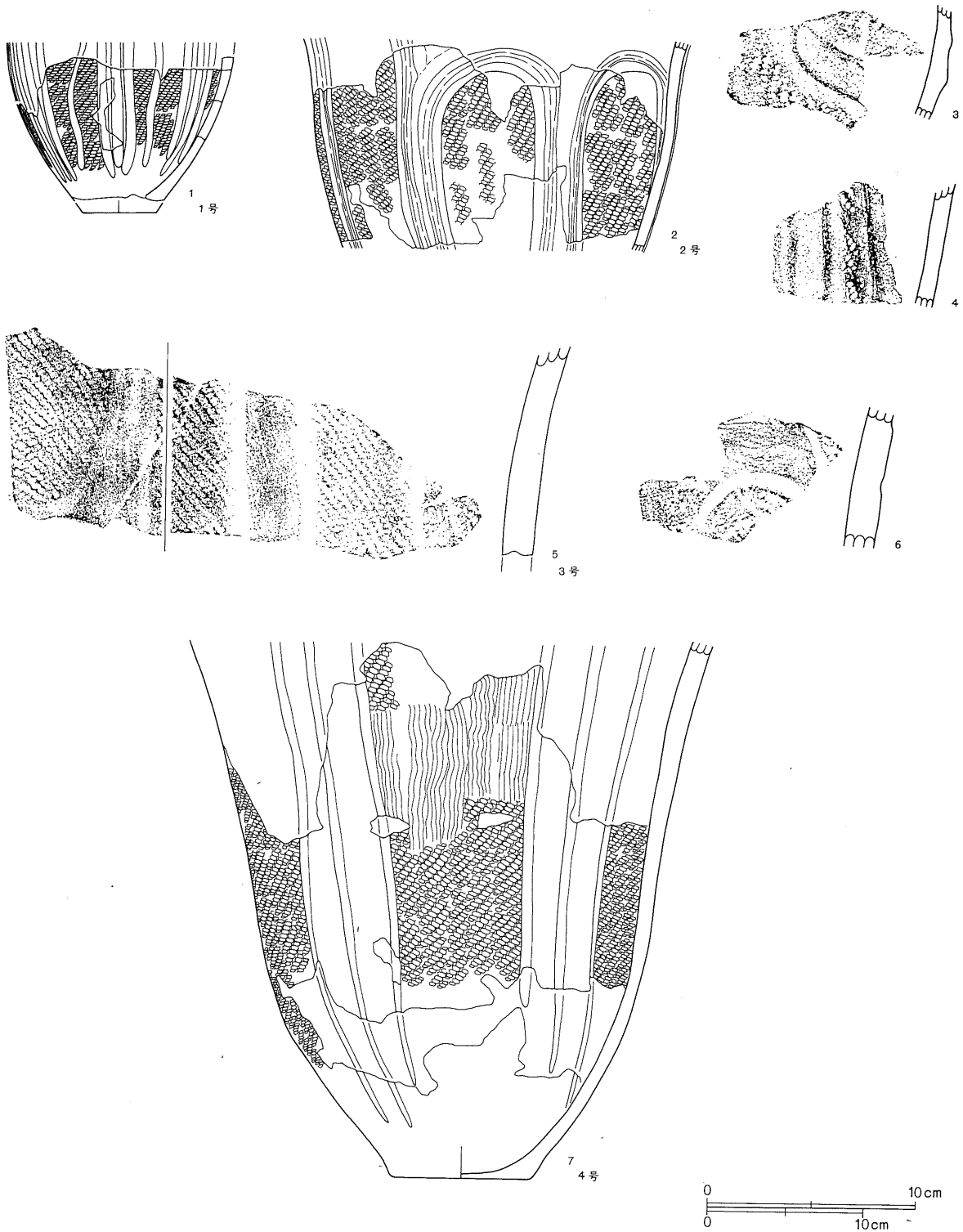
第2号屋外埋甕 (第98、99図)

E-11 Grid に位置する。Ⅰ区中央部の南へ緩やかに傾斜する斜面部で検出され、周囲は土壌群が展開す



- 1号埋甕
 1 褐色土 ロームブロック多量混入
- 2号埋甕
 1 黒褐色土 ローム粒少量混入
 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまりやや強
 3 褐色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまりやや強
- 3号埋甕
 1 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒少量含む
- 4号埋甕
 1 暗褐色土 ローム粒多量混入、
 2 暗褐色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまりやや強
 3 褐色土 ロームブロック多量混入、粘性、しまり強

第98図 屋外埋甕第1～4号(1)



第99図 屋外埋甕第1～4号(2)

る。形態は楕円形を呈し、規模は長径31cm、短径27cm、深さ10cmを測る。

第99図2～4が埋設された土器であり、胴部中位及び胴上部破片である。器形は胴部が弱く括れる。隆起線により上下2段の構成がとられる。上段は3の破片から曲線化した渦巻状文が施文され、下段は「∩」字状文が描出される。隆帯に沿って沈線とナヅリが加えられ、隆帯間には無文帯を作り出している。区画内は単節RLを縦位に充填施文している。

第3号屋外埋甕（第98、99図）

F-12Grid に位置する。Ⅰ区中央部の南へ緩やかに傾斜する斜面部で検出され、周囲は土壌群が展開する。北へ約15mの距離に第2号屋外埋甕が所在する。形態は楕円形を呈し、規模は長径45cm、短径39cm、深さ10cmを測る。

第99図5、6の同一個体が埋設された土器であり、胴部中位の大形破片である。胴部破片であるため文様構成は明確ではないが、1本沈線による「U」字状文と懸垂状に沈線区画された幅の狭い縄文帯が配され、その間を幅の広い無文帯を作出している。区画内には単節LRを充填施文している。

第4号屋外埋甕（第98、99図）

D-9Grid に位置する。Ⅰ区西側の平坦面で検出された。形態は楕円形を呈し、規模は長径50cm、短径44cm、深さ28cmを測り、埋設された土器の形態と同様な掘り込みを呈している。埋甕内の覆土と埋甕外の充填された覆土とはロームブロックの量により違いを見出せた。

第99図7が埋設された土器である。胴部下半が使用され口縁部と胴部下半の一部が欠損している。3本沈線による懸垂文が垂下し、沈線間は磨り消されている。懸垂文間には縦位の単節RLと一部に楕円状工具による小波状条線文が充填施文されている。

（3）土 壙（第100～112図）

本遺跡で検出された土壙は94基を数え、そのうち縄文時代に属すると考えられる土壙は67基である。土壙の所属時期については、出土遺物により判断したが、殆どの土壙が遺物を出土しない若しくは破片のみの場合が多いことから、出土遺物とともに土層の観察に頼った。

土壙の分布状況については、住居跡と同様に時期により占地状況がことなり、前期では当該期の住居跡が検出されたⅡ区に分布域をもち、中期ではⅠ区中央部の住居跡分布域と重なる状況が窺えた。

以下、所在位置や土壙の形状、数値について記載するとともに若干の説明を加えることにする。

第1号土壙（第100図）

Ⅰ区、D-13Grid で、南へ緩やかに傾斜する斜面部に位置する。形態は不整三角形を呈し、規模は長径0.76m、短径0.51m、深さ10cmと浅く皿状である。覆土には焼土粒、炭化物を含むものの遺物は検出されなかった。

第2号土壙（第100図）

Ⅰ区、F-11Grid に位置する。Ⅰ区中央部に土壙群が形成されており、その土壙群に含まれる。第3号土壙と重複し、本土壙が新しい。形態は長方形を呈し、規模は長径1.5m、短径0.87m、深さ44cmで底面は平坦である。遺物は検出されなかった。

第3号土壙（第100図）

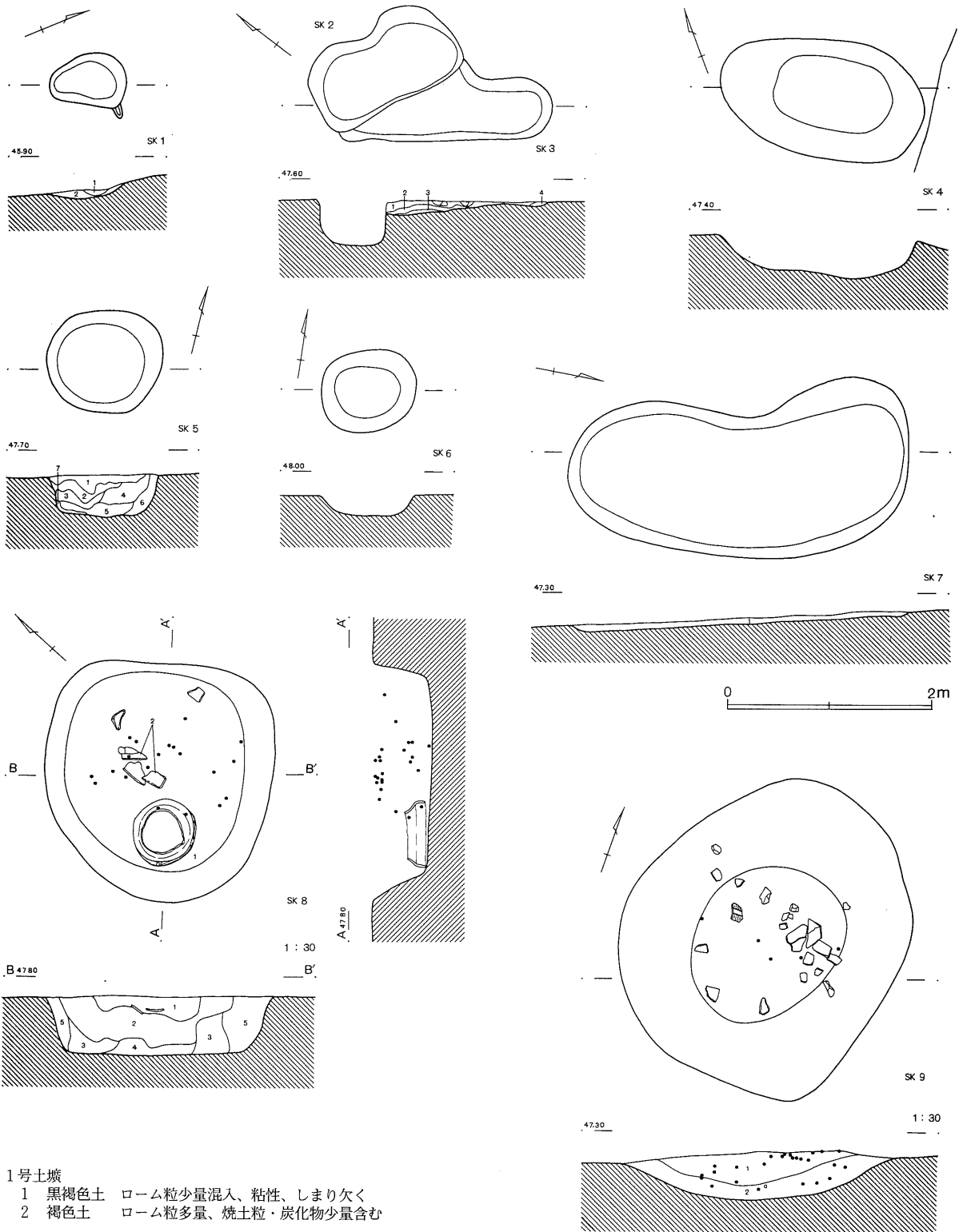
Ⅰ区、F-11Grid に位置する。前述の第2号土壙と重複する。形態は長方形を呈し、規模は長径2.08m、短径0.82m、深さ16cmと浅い。遺物は加曾利E式の破片が出土した。

第4号土壙（第100図）

Ⅰ区、B-10Grid で、調査区Ⅰ区の西端に位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.92m、短径1.18m、深さ40cmを測る。遺物は加曾利E式の破片が出土した。

第5号土壙（第100図）

Ⅰ区、F-11Grid で、前述の第2、3号土壙の東に隣接する。形態は円形を呈し、規模は長径1.10m、短径1.01m、深さ39cmを測る。断面形は円筒形を呈する。遺物は加曾利E式の破片と礫が出土した。



1号土塼

- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、粘性、しまり欠く
- 2 褐色土 ローム粒多量、焼土粒・炭化物少量含む

2・3号土塼

- 1 黒褐色土 ローム粒多量混入
- 2 褐色土 焼土ブロック少量含む
- 3 黒色土 焼土ブロックと炭化物少量含む
- 4 褐色土 ロームブロック

5号土塼

- 1 暗褐色土 ローム粒少量混入、粘性、しまり欠く
- 2 褐色土 ローム粒多量混入
- 3 褐色土 ロームブロック少量混入、粘性やや強
- 4 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 5 褐色土 ローム粒多量混入、粘性やや強、しまりやや強
- 6 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 7 褐色土 ロームブロック多量混入

7号土塼

- 1 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまりやや強

8号土塼

- 1 暗褐色土 ローム粒多量混入
- 2 黒褐色土 ローム粒少量混入、炭化物少量含む
- 3 黒褐色土 ローム粒少量混入、炭化物微量含む、しまりやや強
- 4 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性やや強
- 5 褐色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまり強

9号土塼

- 1 黒褐色土 細かい黒色土粒を主とし、粘性、しまり弱
- 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまりやや強

第100図 第1～9号土塼

第6号土壙 (第100図)

Ⅰ区、D-9、10Gridで、第1号住居跡から西へ約6mの距離に位置する。形態は円形を呈し、規模は長径0.95m、短径0.80m、深さ20cmを測り、断面形は楕円形を呈する。遺物は加曽利E式の破片が出土した。

第7号土壙 (第100図)

Ⅰ区、F-12Gridで、Ⅰ区土壙群内に位置する。形態は長い楕円形を呈し、規模は長径3.32m、短径1.43m、深さ8cmと浅い。遺物は加曽利E式の破片と礫が出土した。

第8号土壙 (第100、107図)

Ⅰ区、F-9、10Gridに位置する。第3号住居跡から西へ約3.5mの距離に検出された。形態は円形を呈し、規模は長径1.17m、短径1.12m、深さ29cmを測る。断面形は円筒形を呈する。土壙の底面西壁寄りから第107図1の土器が逆位の状態で出土し、また、同図8等が覆土上層から出土した。

第9号土壙 (第100、107図)

Ⅰ区、F-11、12Gridに位置する。第7号土壙の北に隣接して検出された。形態は円形を呈し、規模は長径1.58m、短径1.34m、深さ19cmで断面形が皿形を呈する。遺物は打製石斧1点と加曽利E式の破片が出土した。

第10号土壙 (第101図)

Ⅰ区、F-10Gridに位置する。第8号土壙の南約7mの距離に検出され、第11号土壙と重複する。形態は円形を呈し、規模は長径0.74m、短径0.72m、深さ53cmで断面形は円筒形を呈する。壙底は平坦であった。遺物は加曽利E式土器の破片と礫が出土した。

第11号土壙 (第101図)

Ⅰ区、F-10Gridで、前述の第10号土壙により壊されている。形態は楕円形を呈し、規模は長径(0.86)m、短径0.59m、深さ27cmである。遺物は無いが覆土からみて加曽利E式期と判断される。

第12号土壙 (第101図)

Ⅰ区、F-11Gridに位置し、第2、3号土壙の南へ約1.5mの距離に検出された。形態は長方形を呈し、規模は長径1.06m、短径0.61m、深さ17cmである。遺物は勝坂式と加曽利E式の破片が出土した。

第13号土壙 (第101図)

Ⅰ区、D-9、10Gridに位置し、第2号住居跡の北西へ約6.5mの距離に検出された。形態は長方形を呈し、規模は長径1.47m、短径0.72m、深さ20cmである。遺物は加曽利E式の破片が出土した。

第14号土壙 (第101、108、109図)

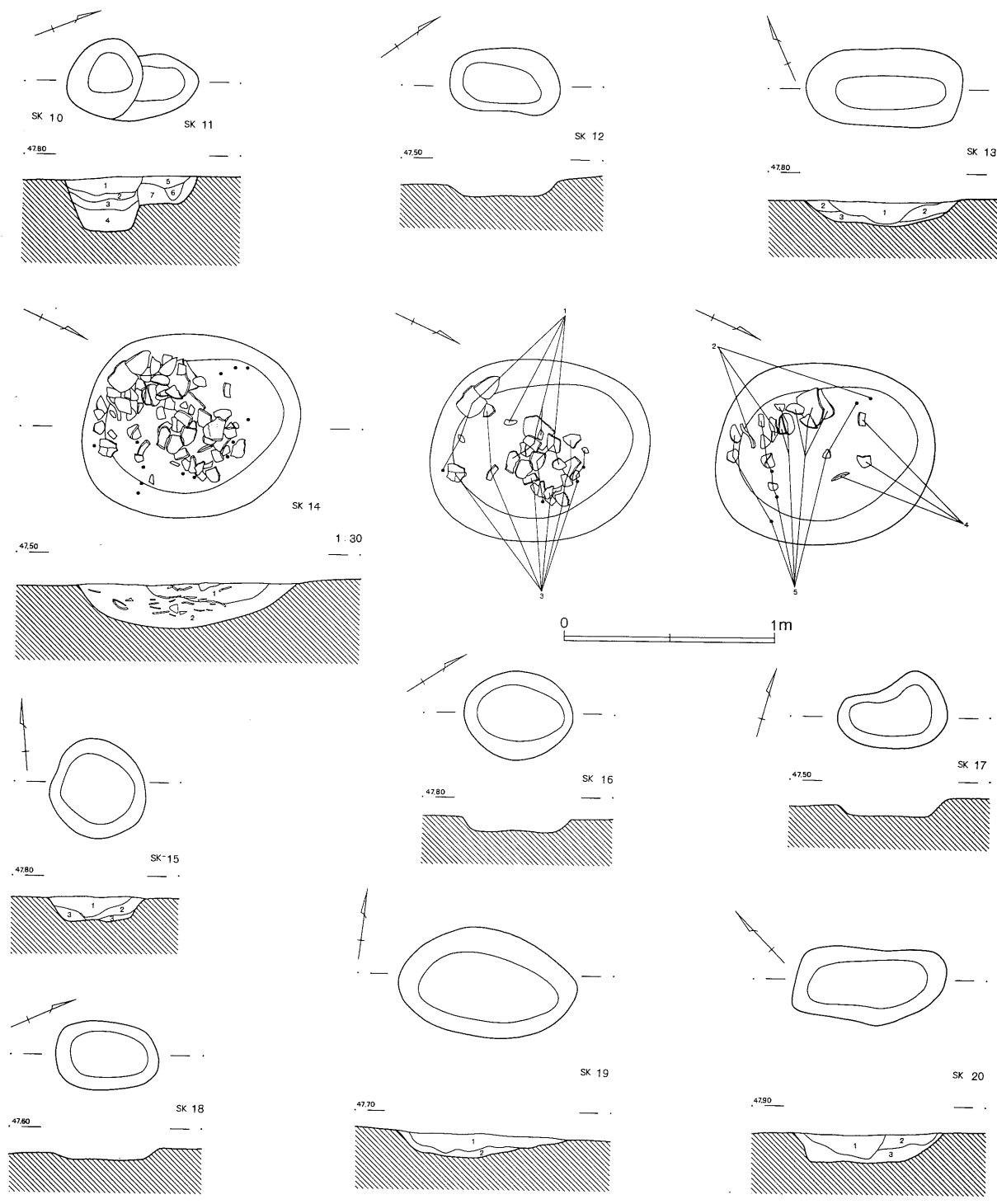
Ⅰ区、F-11Gridに位置し、Ⅰ区土壙群の中央部に位置する。形態は円形で、規模は長径1.04m、短径0.88m、深さ21cmを測り、断面形はやや深い皿形で、壁は緩やかな傾斜を示す。本土壙は確認段階から既に土器が確認され、第108～109図1の5個体が潰れた状態で出土した。

第15号土壙 (第101、109図)

Ⅰ区、D-10Gridに位置する。第13号土壙の東へ約1.5mの距離の位置で検出された。形態は円形を呈し、規模は長径0.96m、短径0.92m、深さ20cmを測り、断面形は逆台形を呈する。遺物は少量の加曽利E式の破片が出土した。

第16号土壙 (第101、109図)

Ⅰ区、G-10Gridに位置し、第3号住居跡の南約1mの距離に検出された。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.04m、短径0.86m、深さ12cmを測る。遺物は加曽利E式の破片と礫が出土した。



10・11号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまり弱
- 2 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒少量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒多量混入
- 4 黒褐色土 ローム粒少量混入、粘性やや強
- 5 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 6 褐色土 ロームブロック
- 7 褐色土 ロームブロック少量混入、粘性強

13号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒少量混入、炭化物微量含む、粘性弱
- 2 褐色土 ローム粒多量混入
- 3 褐色土 ロームブロック少量混入

14号土壌

- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒微量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまり弱

15号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒少量混入、炭化物微量含む、粘性弱
- 2 褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 3 褐色土 ロームブロック少量混入

19号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性やや強
- 2 褐色土 ロームブロック多量混入、粘性強

20号土壌

- 1 黒褐色土 粗い黒色土を主とし、粘性、しまり弱
- 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性やや強
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量混入

第101図 第10～20号土壌

第17号土壙 (第101、109図)

Ⅰ区、E-11Grid に位置し、Ⅰ区土壙群の西側分布域に所在する。形態は不整三角形を呈し、規模は長径1.06m、短径0.62m、深さ14cmを測る。遺物は勝坂式、加曾利E式の破片が出土した。

第18号土壙 (第101、109図)

Ⅰ区、F-11Grid に位置し、Ⅰ区土壙群の中央部に位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径0.98m、短径0.66m、深さ10cmと浅い。遺物は出土していない。

第19号土壙 (第101図)

Ⅰ区、H-9 Grid に位置し、第11号住居跡と重複する。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.66m、短径1.04m、深さ23cmを測る。断面形は片流れの状態である。遺物は出土していない。

第20号土壙 (第101図)

Ⅰ区、D、E-10Grid に位置し、第2号住居跡の北約2mの距離に検出された。形態は長方形を呈し、規模は長径1.42m、短径0.72m、深さ26cmを測り、断面形は挿鉢形を呈する。遺物は少量の加曾利E式の破片が出土した。

第21号土壙 (第102、109図)

Ⅰ区、F-11Grid に位置し、Ⅰ区土壙群の中央部に位置する。形態は不整形を呈し、規模は長径2.13m、短径1.2m、深さ14cmと浅ものの壙底は平坦であった。覆土からは加曾利E式の破片と礫が出土している。

第22号土壙 (第102図)

Ⅰ区、F-12Grid に位置し、第21号土壙の南約4mの距離に検出された。形態は不整形を呈し、調査時では土壙の重複と思われたが、土層観察により単独土壙であると判断した。規模は長径1.54m、短径0.66m、深さ12cmと浅く、底面は段を有する。遺物は出土していない。

第23号土壙 (第102図)

Ⅰ区、G-11Grid に位置し、Ⅰ区土壙群の東側分布域に所在する。形態は円形を呈し、規模は長径0.74m、短径0.74m、深さ14cmを測る。遺物は出土していない。

第24号土壙 (第102図)

Ⅰ区、G-11Grid に位置し、第23号土壙に隣接する。形態は楕円形を呈し、規模は長径0.92m、短径0.76m、深さ18cmを測る。遺物は出土していない。

第25号土壙 (第102図)

Ⅰ区、F-11、12Grid に位置し、Ⅰ区土壙群の南東側分布域に所在する。形態は三角形を呈するが、北側にピット状の張り出しを有する。規模は長径1.96m、短径1.63m、深さ10cmと浅い。覆土から加曾利E式と礫が出土した。

第26号土壙 (第102図)

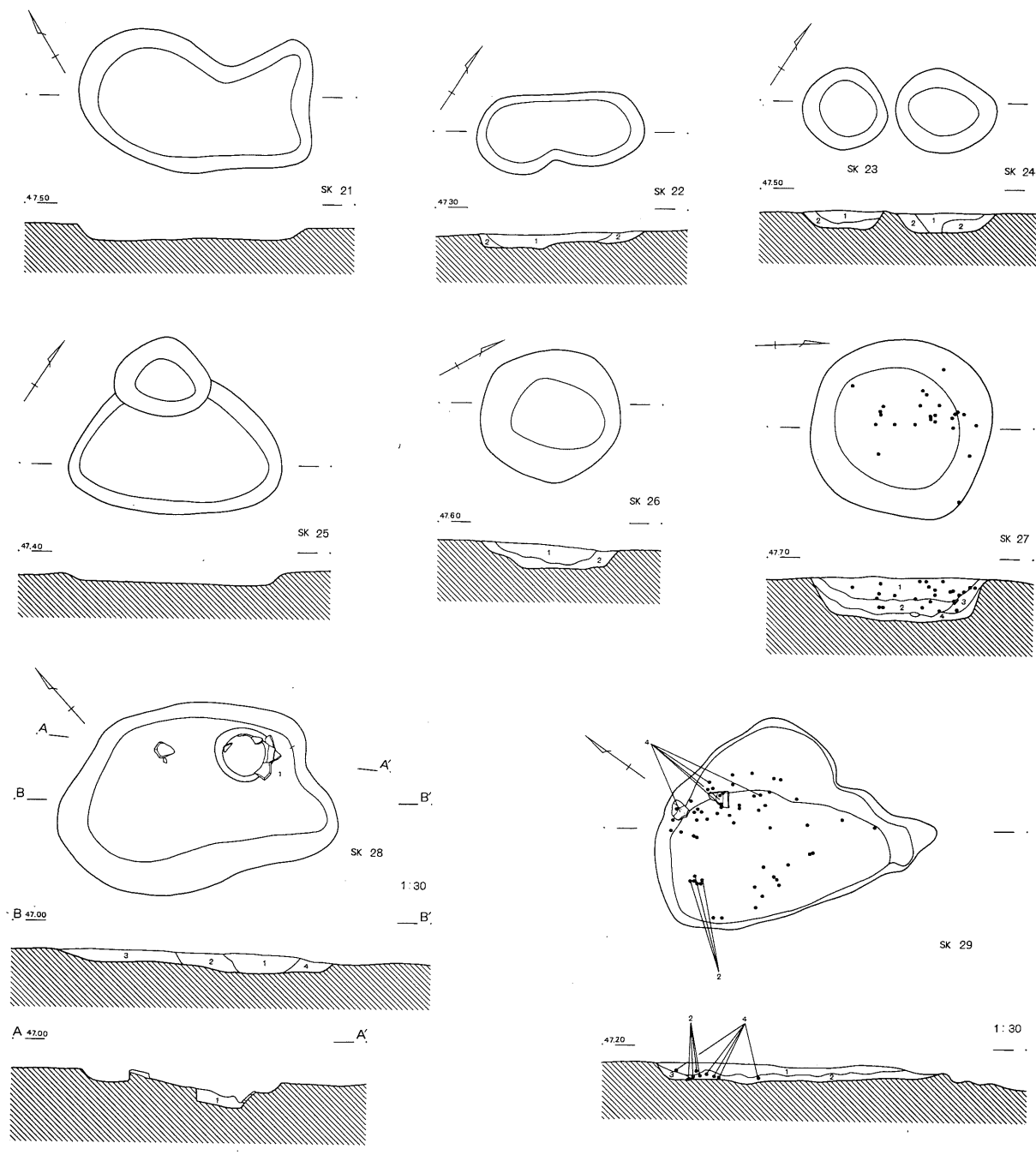
Ⅰ区、H-8 Grid に位置し、第11号住居跡の北約1mの距離に検出された。形態は円形を呈し、規模は長径1.28m、短径1.22m、深さ20cmを測る。遺物は加曾利E式土器の破片を少量出土した。

第27号土壙 (第102、109図)

Ⅰ区、G-8 Grid に位置する。形態は円形を呈し、規模は長径1.66m、短径1.61m、深さ36cmを測る。断面形は円筒形に近い形状を呈し、底面は平坦である。覆土から多量の加曾利E式の土器破片と敲石1点、礫が出土した。

第28号土壙 (第102、110図)

Ⅰ区、F-6 Grid に位置し、第7号住居跡と重複する。住居跡調査時に確認され、当初、第6号住居跡



22号土壌

- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまり弱

23号土壌

- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、
- 2 褐色土 ローム粒少量混入

24号土壌

- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、炭化物少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまり弱

26号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性やや強
- 2 褐色土 ロームブロック多量混入

27号土壌

- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、炭化物少量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒多量混入、粘性やや強
- 3 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 4 褐色土 ロームブロック少量混入

28号土壌

- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒少量混入、炭化物微量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒少量混入、粘性やや弱
- 4 褐色土 ロームブロック少量混入

29号土壌

- 1 黒褐色土 ローム粒多量混入、炭化物少量含む、粘性、しまり弱
- 2 褐色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまりやや強
- 3 褐色土 ロームブロック多量混入

第102図 第21～29号土壌

に伴う遺構と思われたが、出土した土器に時期差があることから土壙とした。形態は長方形を呈し、規模は長径1.25m、短径0.88m、深さ16cmを測る。土壙の北東隅に胴部破片の土器が埋設された状態で出土している。覆土はローム粒とともに焼土粒、炭化物を含む。

第29号土壙 (第102、110図)

I 区、H-8 Grid に位置し、土壙南側を溝により壊されている。形態は方形を呈し、規模は長径1.28m、短径0.92m、深さ15cmを測る。遺物は加曾利 E 式や曾利式の大形破片が多く出土した。

第30号土壙 (第103図)

I 区、G、H-8 Grid に位置し、溝により東側を一部壊されている。形態は長方形を呈し、規模は長径1.94m、短径1.10m、深さ32cmを測る。遺物は少量の加曾利 E 式土器と礫が出土した。

第31号土壙 (第103図)

I 区、G-10 Grid に位置し、第3号住居跡と重複する。形態は円形を呈し、規模は長径1.34m、短径1.30m、深さ34cmを測り、底面は西壁にかけて緩やかに立ち上がる。遺物は含まれていないものの覆土の観察から第3号住居跡の構築時期よりも後出と考えられる。

第32号土壙 (第103図)

I 区、H-11 Grid に位置し、第6号住居跡の南約2mの距離に検出された。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.23m、短径0.84m、深さ29cmを測り、断面形は逆台形を呈する。遺物は加曾利 E 式の破片と礫を少量出土した。

第33号土壙 (第103図)

I 区、D-11 Grid に位置する。形態は不整形を呈し、規模は長径1.20m、短径0.68m、深さ23cmを測る。遺物は礫片のみである。

第34号土壙 (第103図)

I 区、G-6 Grid に位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径0.92m、短径0.66m、深さ24cmを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は加曾利 E 式の破片を出土する。

第35号土壙 (第103図)

I 区、G-11、12 Grid に位置し、I 区土壙群の東側分布域に所在する。規模は長径1.11m、短径0.74m、深さ16cmと浅い。遺物は礫片のみである。

第36号土壙 (第103図)

I 区、H-7 Grid に位置し、第29号土壙の北約2mの距離で検出された。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.56m、短径1.14m、深さ10cmと浅い。遺物は加曾利 E 式の破片と礫を出土した。

第37号土壙 (第103図)

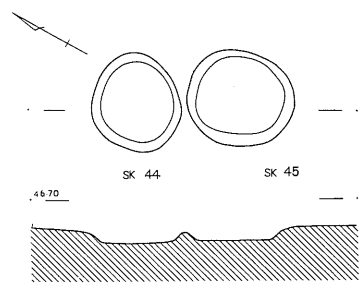
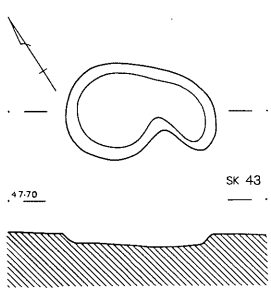
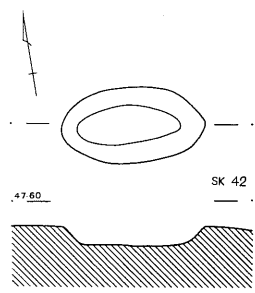
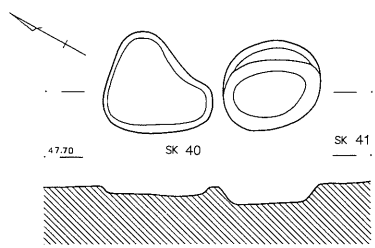
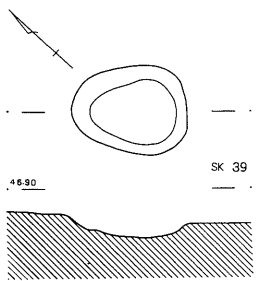
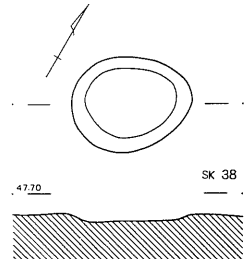
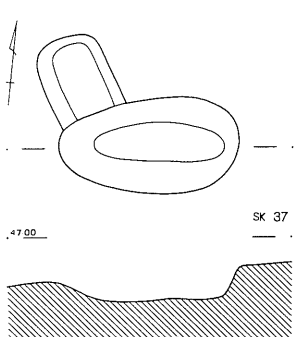
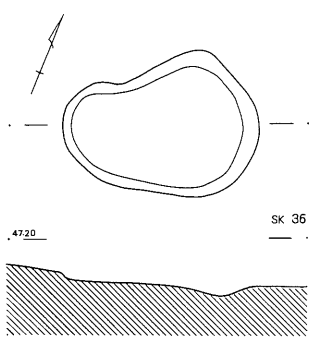
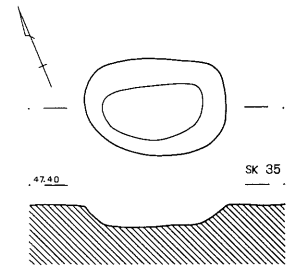
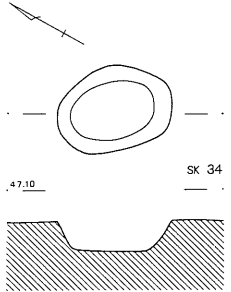
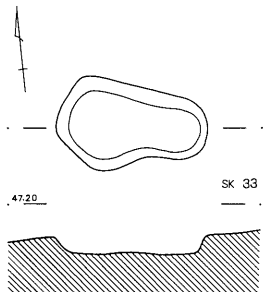
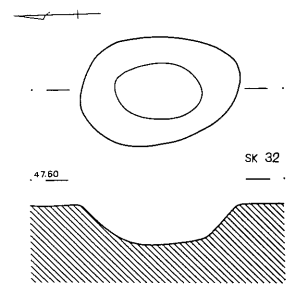
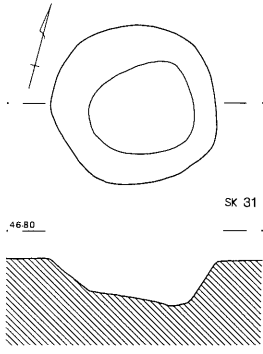
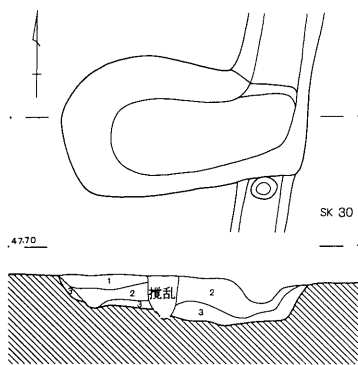
I 区、E-12 Grid に位置し、I 区土壙群の南側分布域に所在する。形態は長い楕円形を呈するものの北側に長方形の張り出しがある。規模は長径1.40m、短径0.75m、深さ20cmを測る。遺物は礫が少量出土した。

第38号土壙 (第103図)

I 区、G-10 Grid に位置し、第5号住居跡の西約1.5mの距離に所在する。形態は円形を呈し、規模は長径0.94m、短径0.75m、深さ6cmと非常に浅く皿形を呈する。出土遺物はないが覆土から縄文時代の土壙と判断した。

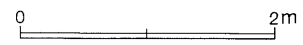
第39号土壙 (第103図)

I 区、H-6 Grid に位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径0.91m、短径0.69m、深さ12cmを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は礫を少量出土した。



30号土壌

- 1 黒褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまり欠く
- 2 暗褐色土 ローム粒少量混入、粘性やや強
- 3 褐色土 ロームブロック多量混入



第103図 第30~45号土壌

第40号土壙 (第103図)

Ⅰ区、H-8 Grid に位置し、第11号住居跡の北西約3 mの距離に所在し、隣接して第41号土壙がある。形態は三角形を呈し、規模は長径0.84 m、短径0.80 m、深さ6 cmと非常に浅い。出土は礫片が数点出土したのみである。

第41号土壙 (第103図)

Ⅰ区、H-8 Grid に位置する。形態は円形を呈するが、底面に段を有する。規模は長径0.74 m、短径0.71 m、深さ14 cmで楕円形を呈する。遺物は加曾利E式の破片を数片出土した。

第42号土壙 (第103図)

Ⅰ区、G-11 Grid に位置し、Ⅰ区土壙群の東側分布域に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長径1.12 m、短径0.60 m、深さ14 cmを測る。遺物は加曾利E式の破片と礫が出土した。

第43号土壙 (第103図)

Ⅰ区、I-10 Grid に位置し、第6号住居跡の東約8 mの距離に位置する。形態は不整形を呈し、規模は長径1.18 m、短径0.74 m、深さ10 cmと浅い。遺物は出土していない。

第44号土壙 (第103図)

Ⅰ区、H-6 Grid で、第39号土壙の東約1 mの距離に所在し、隣接して第45号土壙が構築される。形態は円形を呈し、規模は長径0.78 m、短径0.70 m、深さ6 cmと非常に浅い。断面形は皿形を呈する。遺物は出土していない。

第45号土壙 (第103図)

Ⅰ区、H-6、7 Grid に位置する。形態は円形を呈し、規模は長径0.84 m、短径0.74 m、深さ10 cmで断面形は皿形を呈する。遺物は数点の加曾利E式の破片である。

第46号土壙 (第104図)

Ⅰ区、I-11 Grid に位置し、第6号住居跡の東約5 mの距離に所在する。形態は不整形を呈し、規模は長径1.72 m、短径0.92 m、深さ42 cmを測る。遺物は礫のみである。

第47号土壙 (第104図)

Ⅰ区、B-10 Grid に位置し、形態は不整形で、規模は長径1.92 m、短径1.23 m、深さ14 cmを測る。遺物は数点の加曾利E式の破片が出土した。

第48号土壙 (第104図)

Ⅱ区、O-16 Grid に位置する。形態は不整形で、規模は長軸1.70 m、短径0.93 m、深さ16 cmを測る。遺物は出土していない。

第49号土壙 (第104図)

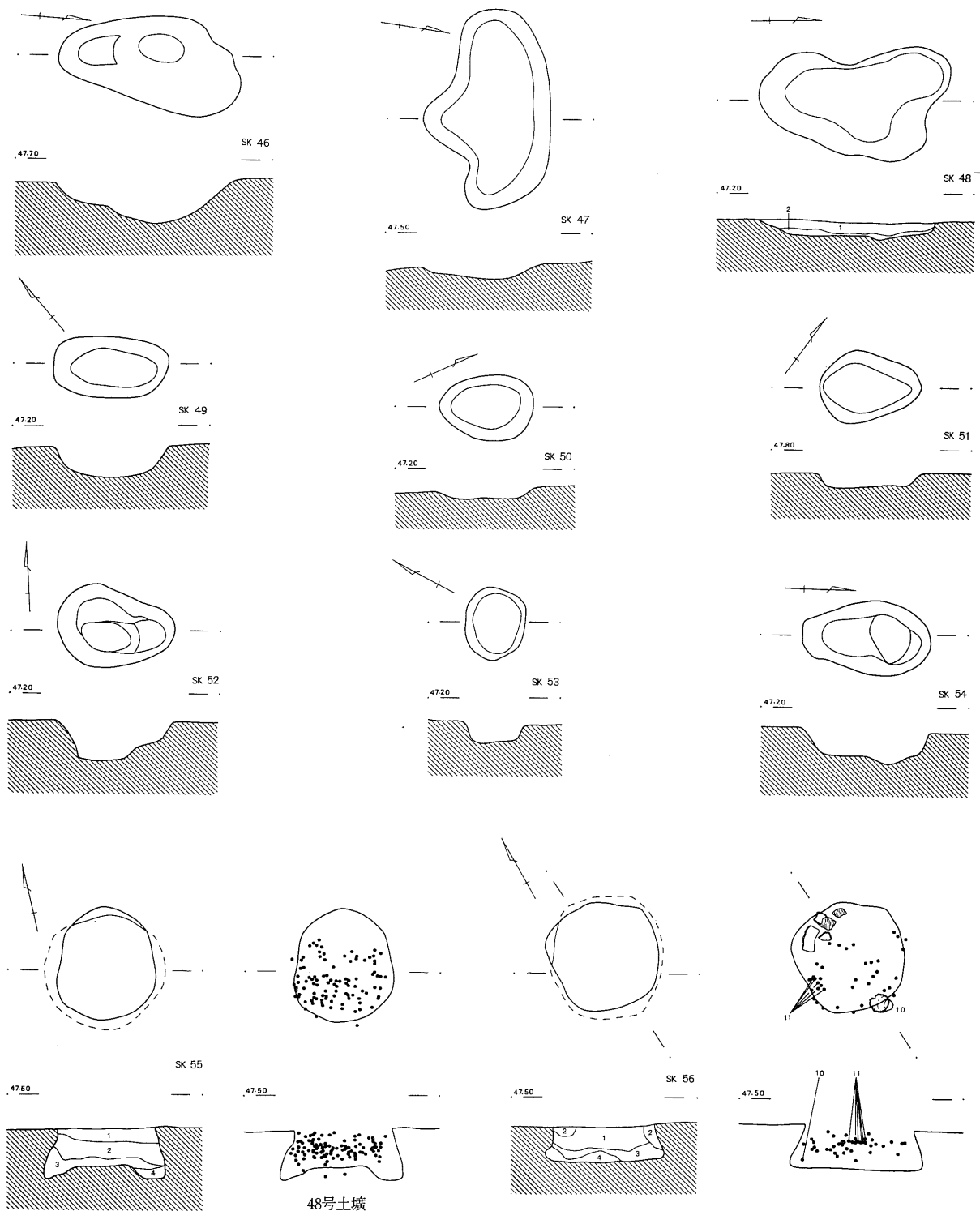
Ⅰ区、C、D-11 Grid に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長径1.12 m、短径0.60 m、深さ30 cmを測る。断面形は逆台形を呈し、遺物は数点の加曾利E式の破片の出土である。

第50号土壙 (第104図)

Ⅰ区、D、E-11 Grid に位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径0.91 m、短径0.64 m、深さ9 cmと浅い。遺物は数点の加曾利E式の破片と礫片の出土である。

第51号土壙 (第104図)

Ⅰ区、G-10 Grid に位置し、第3号住居跡の南約4 mの距離に所在する。形態は三角形に類似し、規模は長径1.00 m、短径0.71 m、深さ14 cmを測る。遺物は数点の加曾利E式の破片が出土した。



48号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒少量混入、炭化物少量含む
- 2 褐色土 ローム粒多量混入、粘性強くしまり弱

55号土壌

- 1 黒褐色土 細かい黒色土粒を主とし、焼土粒・炭化物多量含む
- 2 黒色土 細かい黒色土粒を多量とし、粘性、しまり強
- 3 褐色土 ロームブロック多量混入、粘性、しまり強
- 4 黒褐色土 ローム粒多量混入、粘性強

56号土壌

- 1 黒褐色土 細かい黒色土粒を主とし、焼土粒・炭化物多量含む
- 2 褐色土 ロームブロック多量混入、粘性、しまりやや弱
- 3 黒色土 細かい黒色土粒を主とし、粘性やや強
- 4 褐色土 ロームブロック多量混入

第104図 第46~56号土壌

第52号土壙（第104図）

Ⅱ区、O-P-17Gridに位置する。形態は三角形に類似し、規模は長径1.14m、短径0.80m、深さ38cmを測り、底面は段を有する。遺物は加曾利E式の破片と礫片の出土である。

第53号土壙（第104図）

Ⅱ区、O-16Gridに位置する。形態は円形を呈し、規模は長径0.72m、短径0.58m、深さ16cmを測る。断面形は円筒形を呈し、出土した遺物は少量の黒浜式の破片と礫である。

第54号土壙（第104図）

Ⅱ区、O-16Gridに位置する。形態は不整形を呈し、規模は長径1.26m、短径0.73m、深さ32cmで、壙底は段を有する。遺物は少量の黒浜式、加曾利E式の破片と礫である。

第55号土壙（第104、111図）

Ⅱ区、M-14Gridに位置する。第1号墳後円部墳丘下より検出された。隣接して第56号土壙と並ぶ。形態は円形で、規模は長径1.20m、短径1.18m、深さ50cmを測る。断面形はオーバーハングする。底面については図化はしていないが中央を一段高くするために周囲に浅い溝が巡る。遺物は覆土中層に纏まっており、下層にはあまり遺物の出土を見ない。時期は黒浜式期である。

第56号土壙（第104、111図）

Ⅱ区、M-14Gridに位置する。形態は円形で、規模は長径1.34m、短径1.06m、深さ33cmを測る。遺物は覆土上層～中層にかけて出土しており、第111図10は南壁に接しながらも北西方向に傾く斜位な状態で検出された。

第57号土壙（第105図）

Ⅱ区、O-14Gridに位置し、第1号墳の北側に所在する。形態は長方形を呈し、規模は長径1.06m、短径0.65m、深さ8cmと浅く断面形は皿形を呈する。遺物は多量の諸磯c式と凹石1点を出土したが、土器は脆く図化することができなかった。

第58号土壙（第105、112図）

Ⅰ区、G-11Gridに位置し、土壙群の東側に位置する。形態は円形を呈し、規模は長径0.62m、短径0.58m、深さ18cmを測る。断面形は逆台形を呈する。遺物は礫片を出土した。

第59号土壙（第105、112図）

Ⅰ区、E-8Gridに位置し、第1号住居跡の東へ約1.5mの距離で検出された。形態は不整形を呈し、規模は2.32m、短径0.82m、深さ25cmを測る。土壙内に3箇所ピット状の落ち込みを有する。覆土から縄文時代と判断した。

第60号土壙（第105図）

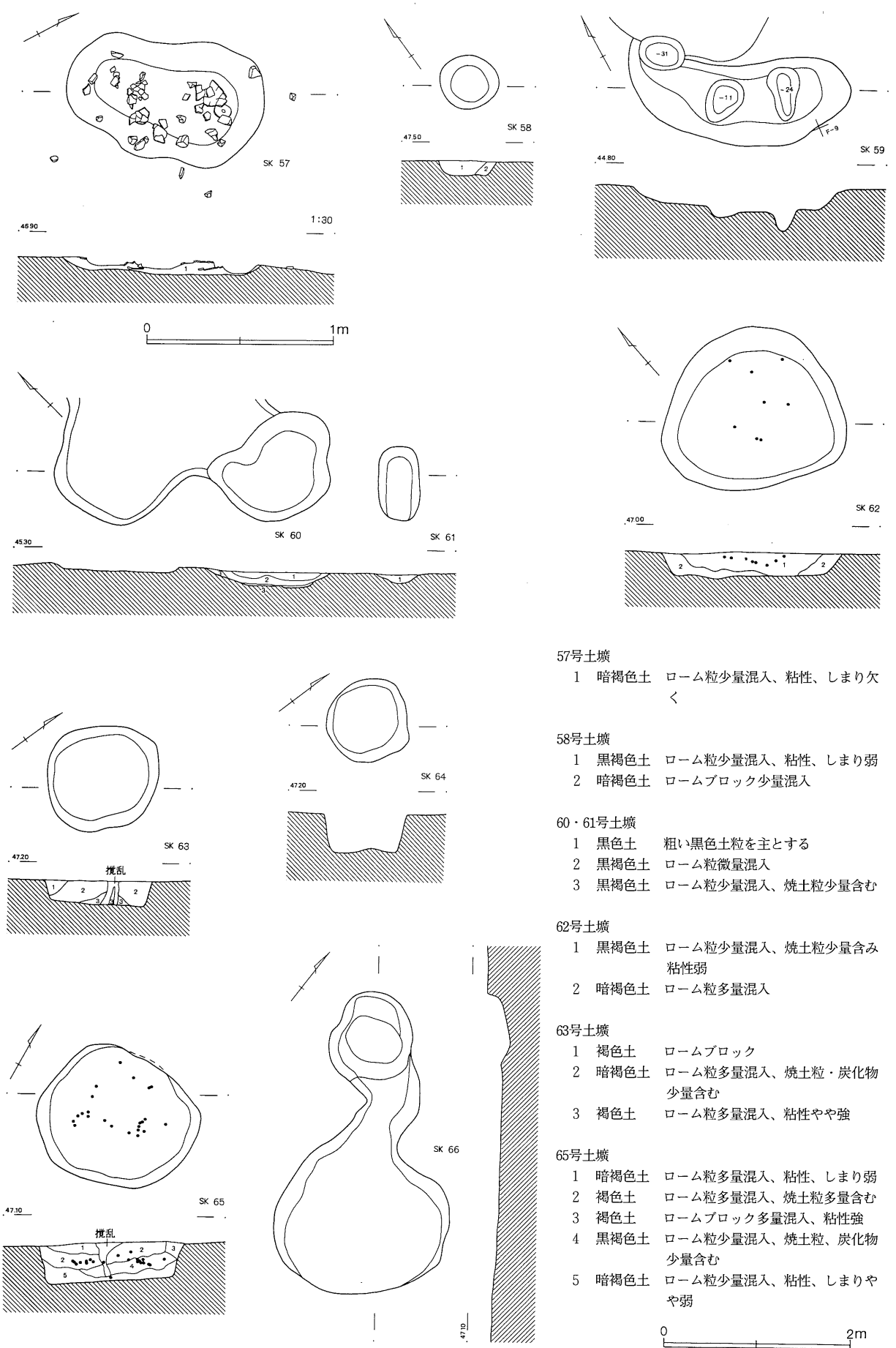
Ⅰ区、E-14Gridに位置し、南へ傾斜する斜面下方で検出され隣接して第61号土壙がある。形態は不整形を呈するが北側を溝により壊されている。規模は長径1.30m、短径1.16m、深さ16cmを測る。

第61号土壙（第105図）

Ⅰ区、E-14Gridに位置する。形態は長方形で規模は長径0.80m、短径0.44m、深さ8cmと浅い。遺物は出土していない。

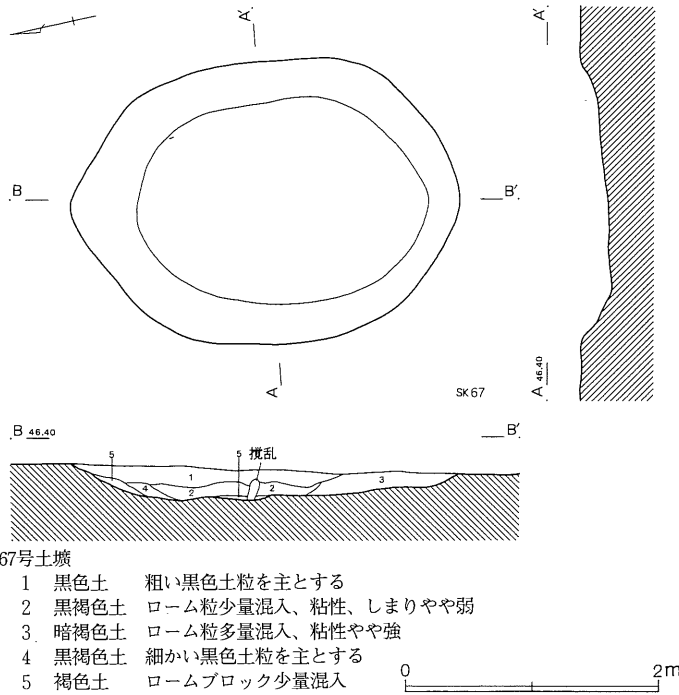
第62号土壙（第105図）

Ⅱ区、P-18Gridに位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.94m、短径1.76m、深さ26cmを測る。遺物は少量の黒浜式と礫片を出土した。



- 57号土壌
 1 暗褐色土 ローム粒少量混入、粘性、しまり欠く
- 58号土壌
 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、粘性、しまり弱
 2 暗褐色土 ロームブロック少量混入
- 60・61号土壌
 1 黒色土 粗い黒色土粒を主とする
 2 黒褐色土 ローム粒微量混入
 3 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒少量含む
- 62号土壌
 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒少量含む
 粘性弱
 2 暗褐色土 ローム粒多量混入
- 63号土壌
 1 褐色土 ロームブロック
 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒・炭化物
 少量含む
 3 褐色土 ローム粒多量混入、粘性やや強
- 65号土壌
 1 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまり弱
 2 褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒多量含む
 3 褐色土 ロームブロック多量混入、粘性強
 4 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒、炭化物
 少量含む
 5 暗褐色土 ローム粒少量混入、粘性、しまりやや弱

第105図 第57～66号土壌



67号土壌

- 1 黒色土 粗い黒色土粒を主とする
- 2 黒褐色土 ローム粒少量混入、粘性、しまりやや弱
- 3 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性やや強
- 4 黒褐色土 細かい黒色土粒を主とする
- 5 褐色土 ロームブロック少量混入

第106図 第67号土壌

第63号土壌 (第105図)

Ⅱ区、O-17Grid に位置する。形態は円形を呈し、規模は長径1.20m、短径1.16m、深さ27cmを測る。底面は平坦であり、断面形は円筒形を呈する。遺物は礫片を出土した。

第64号土壌 (第105、112図)

Ⅱ区、O-17Grid に位置する。形態は円形を呈し、規模は長径0.91m、短径0.88m、深さ41cmを測る。底面はやや段を有し、断面形は円筒形を呈する。遺物は礫が数点出土したに過ぎない。

第65号土壌 (第105、112図)

Ⅱ区、N-17Grid に位置する。第14号住居跡から南へ約2.6mの距離に位置する。形態は円形を呈し、規模は長径1.78m、短径1.49m、深さ41cmを測る。

断面形は円筒形で底面は平坦である。遺物は覆土中層より黒浜式の破片をやや多く出土するが、下層からの出土はない。

第66号土壌 (第105図)

Ⅱ区、O-17Grid に位置する。形態は2基の円形土壌が重複したような形状を呈している。規模は長径3.26m、短径1.88m、深さ29cmを測る。遺物は黒浜式と礫片が少量出土した。

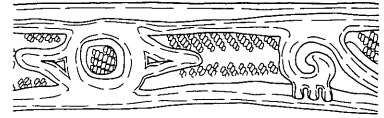
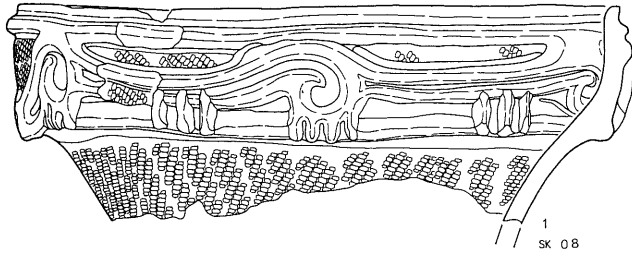
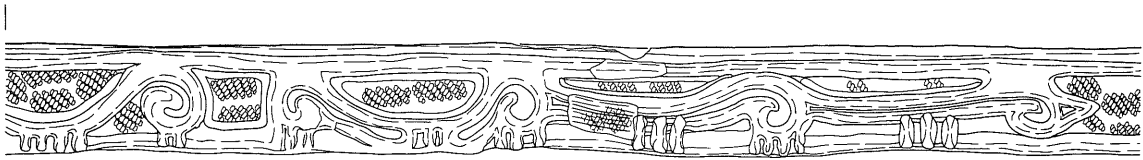
第67号土壌 (第106図)

Ⅱ区、R-23Grid に位置し、第16号住居跡の南東へ約5.5mの距離で検出された。形態は楕円形を呈し、規模は長径3.06m、短径2.20m、深さ24cmを測る。断面形は皿形を呈し、礫片を少量出土した。

土壌出土遺物 (第107図～第112図)

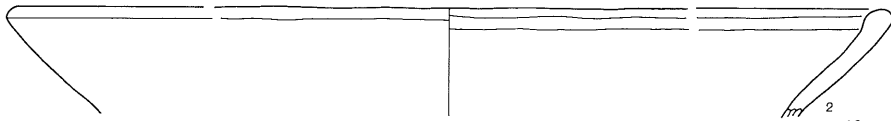
第107図1～8は第8号土壌からの出土である。1は口縁部は内湾ぎみに立ち上がるキャリパー形土器である。口縁部文様帯下位区画としての隆帯は、幅、厚さとも有することにより段差を設け、頸部とは明瞭に画される。口縁部には2本の隆帯による連結渦巻文2単位と片流れ状渦巻文2単位、更に剣先文をもつ楕円形文が配される。また、各単位文は下位区画文と3本の短い隆帯により連結している。地文は単節RLを、口縁部は横位、頸部は縦位に施文される。2は浅鉢形土器の口縁部破片で、口唇部内側が肥厚する。3は勝坂式最終段階の口縁部破片で直線的に外反する。4は黒浜式土器で単節RLを横位に施文されている。5は2本の隆帯による懸垂文と両側に沈線が施され、地文は単節RLを縦位に施文されている。6は前期諸磯式期に属すると思われ、無節Lを斜位に施文される。7、8は胴下端部で燃糸Lを羽状化するように斜位に施文されている。

第107図9～15は第9号土壌からの出土である。9は内湾する口縁部破片で、沈線とナゾリにより「の」字状を描く。地文は口縁に沿って単節RLを横位に施文し、下部は縦位に施文される。10は3本沈線の懸垂文と1本沈線による蛇行懸垂文が垂下する。地文は縦位に単節RLを充填施文される。11、12は同一個体で2

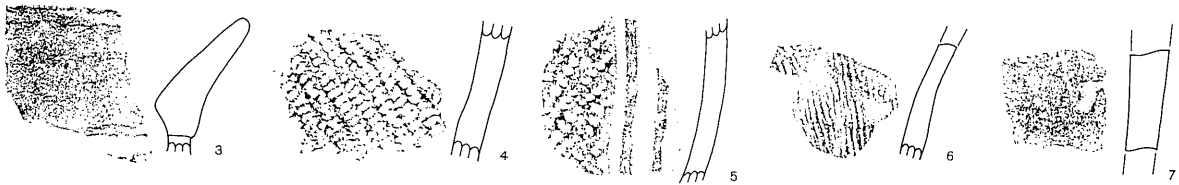


1:5

1
SK 08



2
SK 08



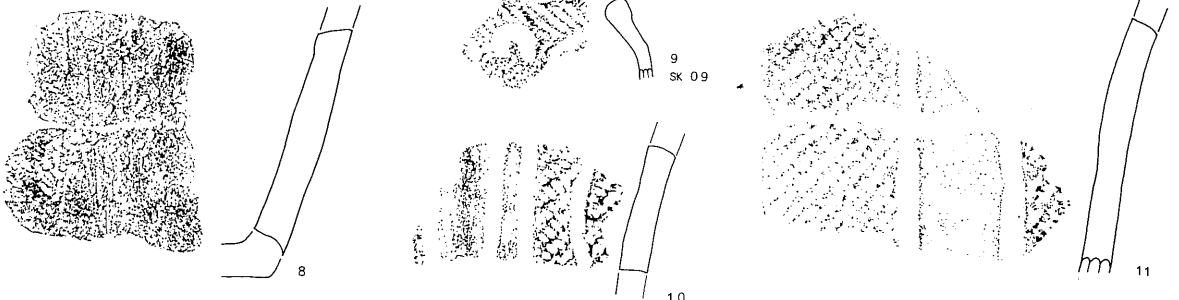
3

4

5

6

7



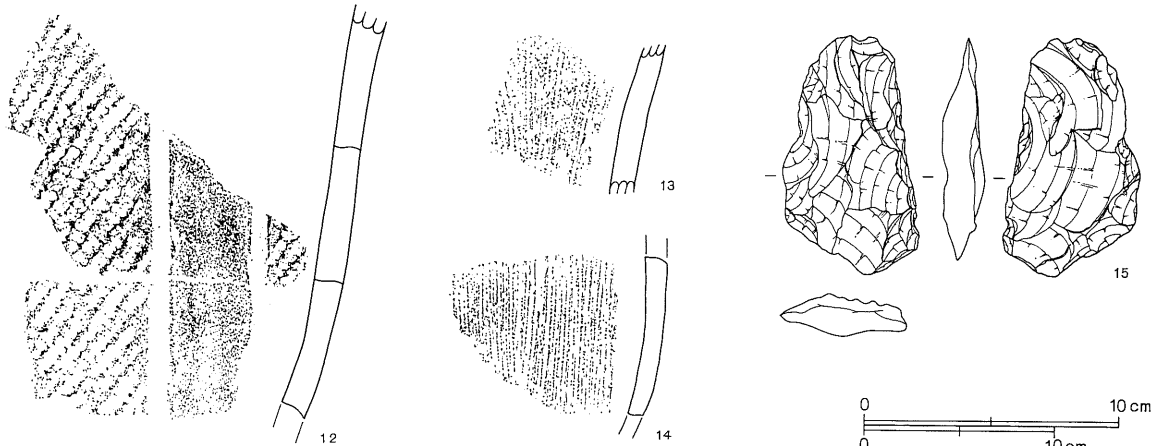
8

9

SK 09

10

11



12

13

14

15



第107图 土壤出土遗物(1)

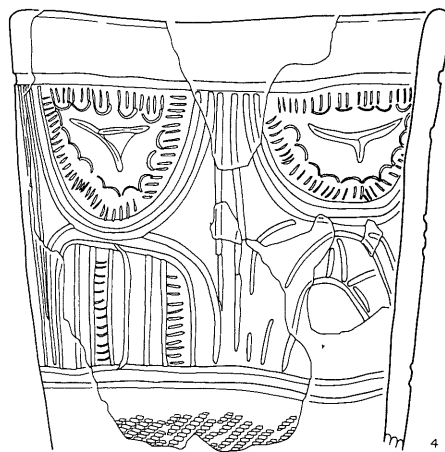
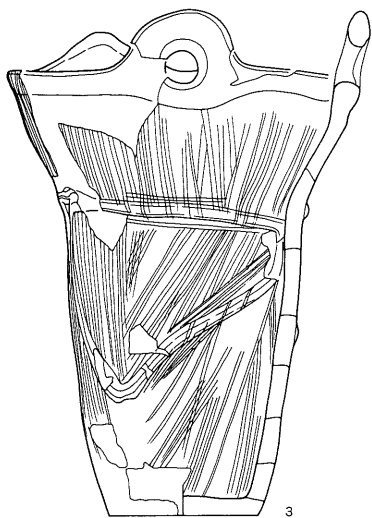
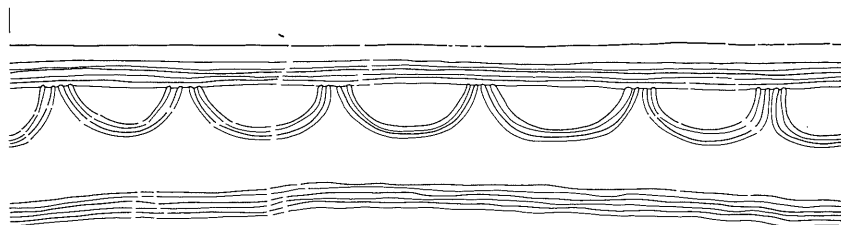
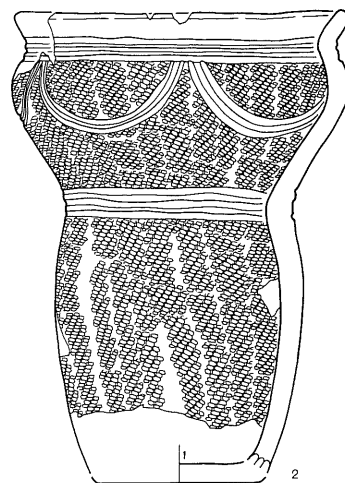
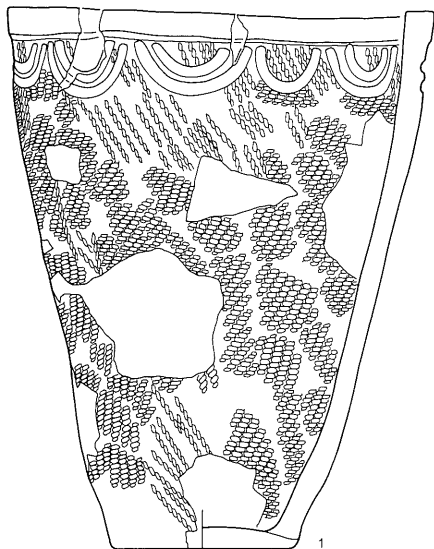
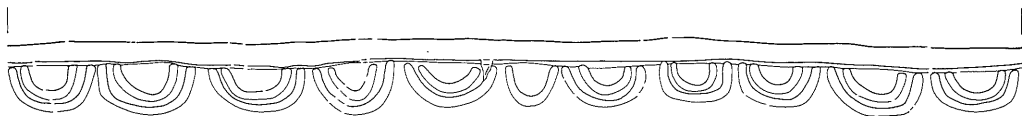
本の沈線による懸垂文が垂下し、地文は単節RLを縦位施文される。13、14は櫛歯状工具による条線文が施文される。15は打製石斧で刃部の一部が欠損している。両側縁から調整加工が加えられている。

第108図1～第109図1は第14号土壌の出土である。1は直線的に外反し、口縁部で肥厚する深鉢形土器である。口縁下に幅狭の無文帯をもち、口縁部文様帯として2本1単位とした孤線文10単位と1本沈線の孤線文を1単位配す。地文は口縁部文様帯では撚糸Lを斜位に施文され、体部は単節RLを縦位に施文されている。2は口縁部が「く」の字状に屈曲するキャリパー形土器である。口縁部文様帯の上位区画として3本の平行沈線文が横走し、この沈線に接して2本1単位の孤線文が6単位施文される。区画文として括れ部に3本の平行沈線文が施文される。地文は単節RLを縦位施文されている。3はキャリパー形を呈し、口縁部は直線的に外反しながら立ち上がる。口縁には環状の把手と三角形の突起が付く。括れ部には1本の隆帯が巡ることにより口縁部と胴部の2帯の文様帯構成がとられる。胴部文様帯は隆帯による3単位の三角区画文が描出されるが、3単位目は描出する幅が狭いためか区画文を描くことができず隆帯を斜めに垂下するだけである。施文順序は隆帯→条線である。4は円筒形を呈し、口縁下には幅狭の無文帯をもつ。文様帯区画として上位は1本、下位は2本の沈線により横位の文様帯構成がとられる。区画内には沈線による半円形の単位文が施文され、この中を爪形文により縁取られ、中心に三叉文が施文される。胴部は単節RLが縦位に施文される。第109図1は円筒形を呈する大形の深鉢形土器である。口縁下には幅狭の無文帯をもち、口縁部内面が肥厚する。胴部文様帯下位区画として隆帯と両脇に沈線が巡る。文様帯内には刻みが施された隆帯による三角区画文が描出され、その中を充填刺突文や沈線による三叉文が施文される。胴部下半は単節RLを縦位に施文される。

第109図2は第15号土壌からの出土で、単節RLを縦位に施文される胴部破片である。3は第16号土壌出土の胴部破片で、懸垂文と条線が垂下する。4、5は第17号土壌の出土である。4は黒浜式土器の胴部破片で、単節RLを横位に施文されている。5は懸垂文と単節LRの充填縄文。6は第18号土壌出土である。偏平な隆帯に沿ってナゾられた沈線と単節RLの充填縄文が施文される。7は第21号土壌からの出土で、口縁部が内側に屈曲する。地文は0段多条のRLが整然と斜位施文される。

第109図8～15は第27号土壌出土である。8は口縁部に沿って隆帯が貼付られ、ここから縦に沈線が垂下する。9は内湾ぎみに立ち上がり、口縁に沿って単節RLが横位施文され、その下部は縦位に施文される。10は口縁部がやや内湾する波状口縁である。沈線区画文による「〇」字状文が施される。11は胴部破片で、2本のやや深い懸垂文と単節RLの充填縄文が施文される。12は沈線区画された無文帯と単節RLを縦位に施文された縄文帯が施される。13は3本沈線による懸垂文と単節RLを縦位に施文される。14は縦位の粗い条線が施される。15は敲石である。両側縁に敲打痕を有する。

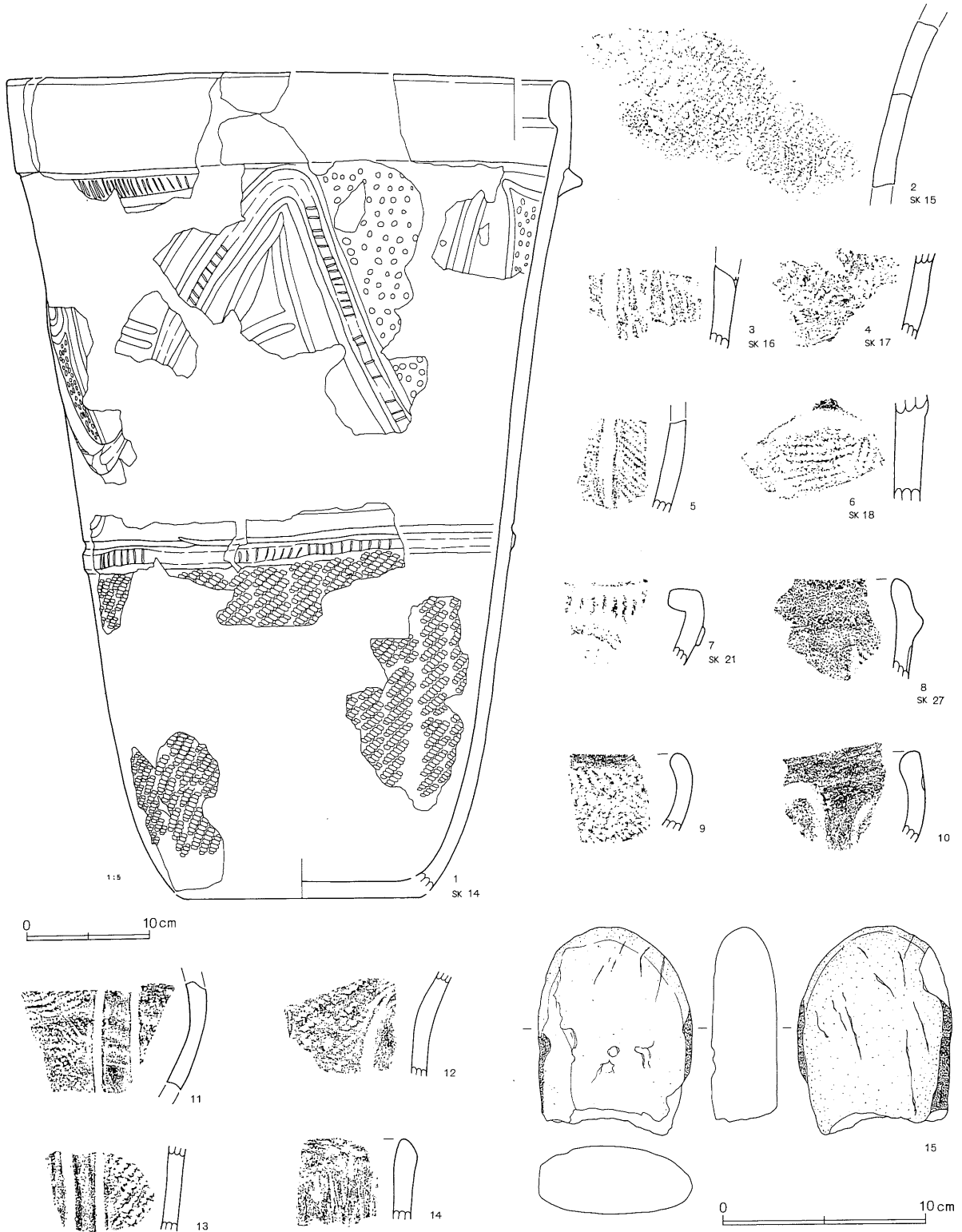
第110図1は第28号土壌出土の胴部破片である。2本沈線による磨消懸垂文と単節LRの縦位施文である。第110図2～4は第29号土壌出土である。2はキャリパー形土器で、口縁部が外反しながら立ち上がる。口縁部文様帯には1本隆帯による渦巻文と不整形の区画文から構成される。隆帯に沿って沈線が施され、沈線にはナゾリが見られる。胴部文様帯は2本沈線による磨消懸垂文とその間を単節RLが縦位に施文される。文様帯区画の隆帯には縄文が見られることから、主文様の施文ののち地文が消えた部分に対し充填縄文が施されたものと思われる。3は大形のキャリパー形土器の口縁部破片で、文様帯区画の隆帯は喪失している。口縁部には隆帯と幅の広い沈線による楕円形区画文が描出される。区画内には単節RLの横位施文による充填縄文が施される。胴部は2本沈線による磨消懸垂文が垂下し、その間を単節RLが縦位に施文される。4は口縁部が外反しながら立ち上がり、頸部で括れ胴部上半でやや張る曾利式系統の深鉢形土器である。口縁部は無文帯で、頸部には1本沈線と指頭押圧された隆帯が巡り、文様帯区画がなされる。胴部は1本隆帯を



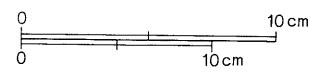
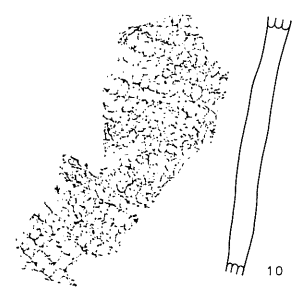
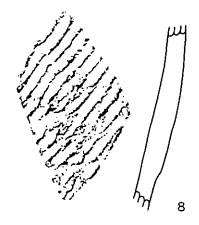
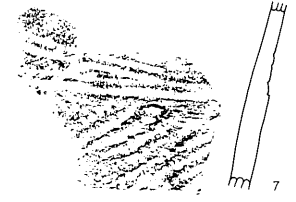
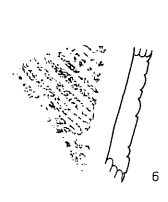
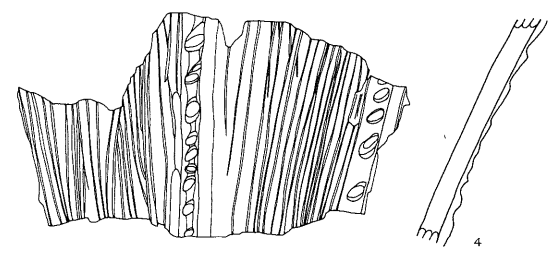
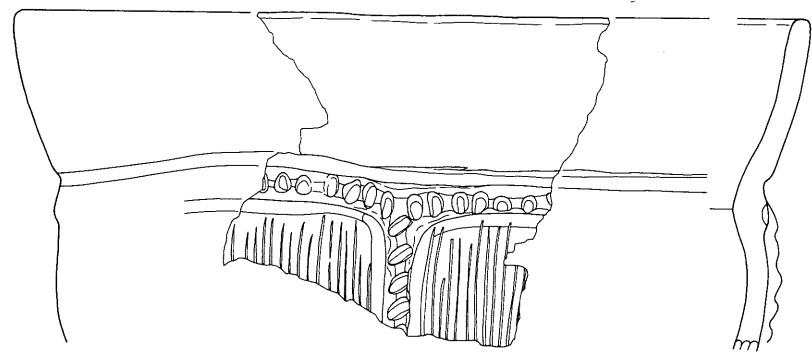
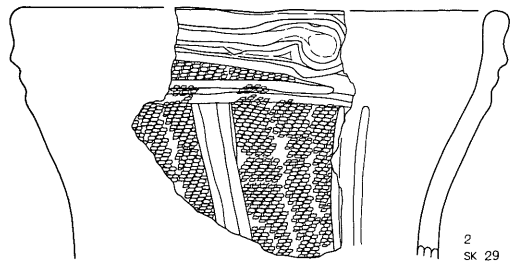
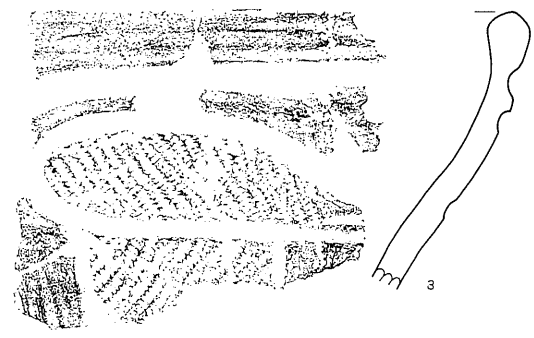
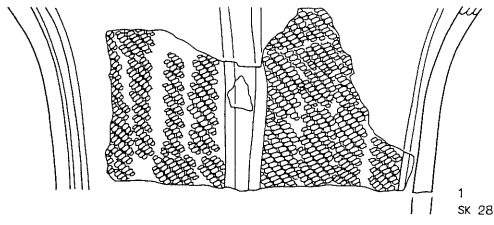
SK 14

0 10cm

第108图 土壙出土遗物(2)



第109 図 土壙出土遺物(3)



第110图 土壤出土遗物(4)

垂下させ、この隆帯の両脇の沈線が杵状を描出している。区画内は半截竹管による条線が充填される。

第110図5～第111図9は第55号土壙出土の土器であり、胎土に多量の繊維が混入されている。5は口縁に小突起をもち、単節LRを縦位施文する。6は半截竹管による平行沈線文に爪形文が充填され、三角形文を描出される。7は半截竹管による平行沈線文が横走し、胴部地文は単節LRの横位施文である。8、9は無節Lが斜位施文。10は単節LRが横位、斜位施文される。11は口縁部が強く外反し、地文は付加条縄文が施文されRL+L2条であろう。第111図1は付加条縄文が施文され、LR+R2条の付加であろう。2、3は単節RLの横位施文。4、5は無節Rの横位施文。6は単節LRの縦位と横位に施文されたものであろう。7は無節のLを横位に施文。8、9は底部で、8は底面中央が窪む。

第111図10～22は第56号土壙出土の土器であり、第55号土壙と同様に胎土中に多量の繊維が混入されている。10は土壙内で斜位に据えられた土器で、直線的に外反し胴下端から底部にかけて欠損している。無節Rが横位に施文されている。11は胴部破片で、単節RLの縦位施文。12は直線的に外反する口縁部破片で、口縁下に両面から穿孔された補修穴がみられる。無節Lの横位施文。13は無節Rの横位施文。14は小突起をもつ口縁部破片で、無節Lを横位に施文される。15は単節LRを縦位に施文。16、18は無節Lの横位施文。17は0段3条による施文であろう。19は付加条縄文である。RL+R2条の付加であろう。20は付加条縄文、LR+R2条の付加であろう。21は0段多条であろうか。22の器形は胴がやや張る。単節RLの縦位施文と付加条縄文がみられる。

第111図23は第57号土壙出土の凹石である。両面に凹部を有する。

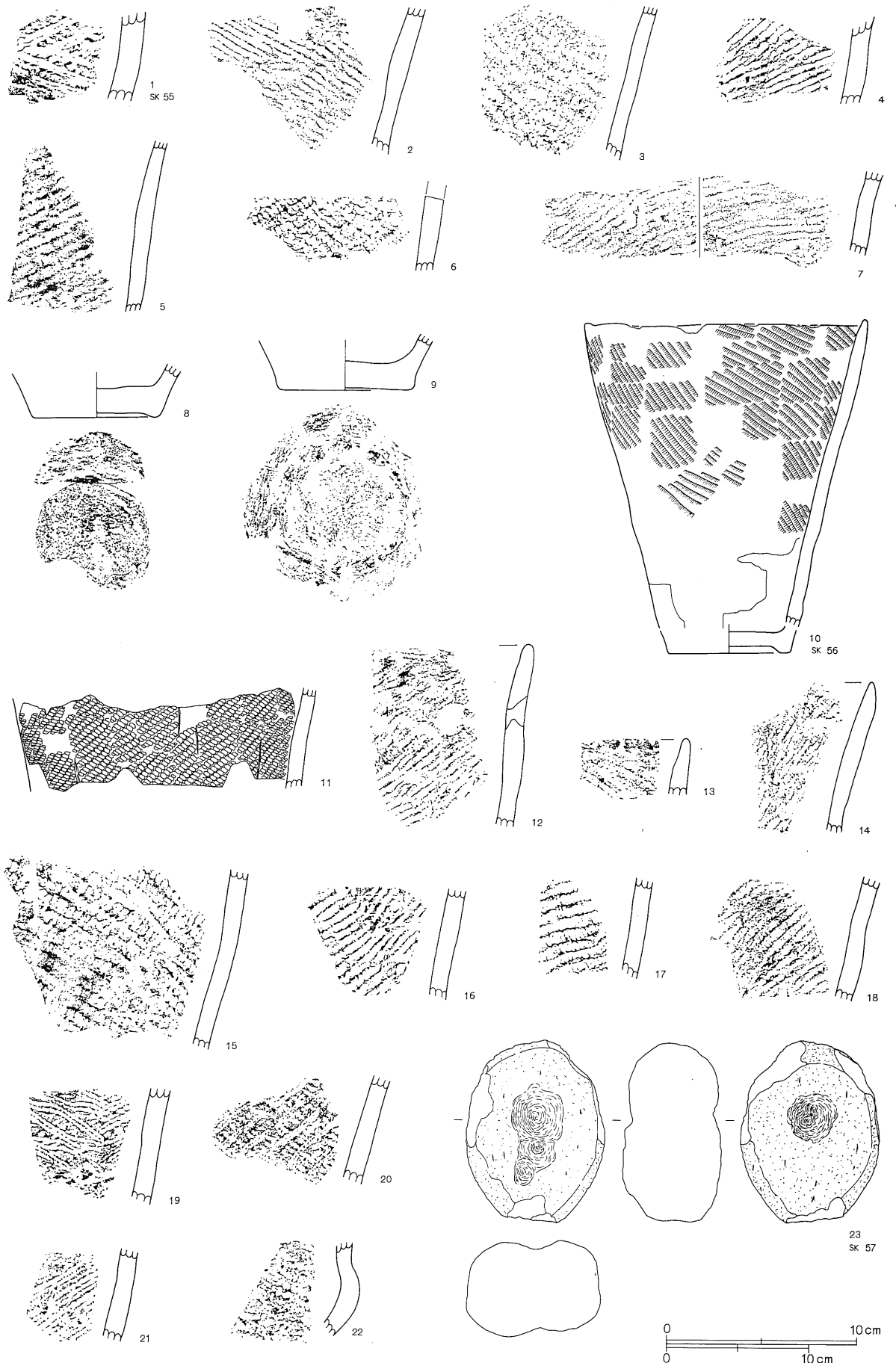
第112図1、2は第58号土壙出土の土器である。1は条線が縦位に施文される。2は幅広の沈線による渦巻文と単節LRの充填縄文が施文される。3は第59号土壙出土で、沈線による懸垂文と単節RLを縦位に施文される。4は第64号土壙出土の繊維土器で、単節LRを横位施文される。

第112図5～10は第65号土壙出土の土器であり、胎土中に量の差こそあれ繊維の混入が認められる。5は波状口縁を呈し、口縁下に2本の隆帯が巡る。6は4単位の波状を呈する口縁部破片である。口縁に沿って半截竹管による平行沈線と充填された爪形文が施文され、口縁部文様帯には4本の平行沈線文と爪形文による菱形文が描出されている。7は単節RLの横位施文。8は半截竹管による平行沈線文に連点状刺突文が加えられている。9、10は単節LRの羽状縄文が施文されている。

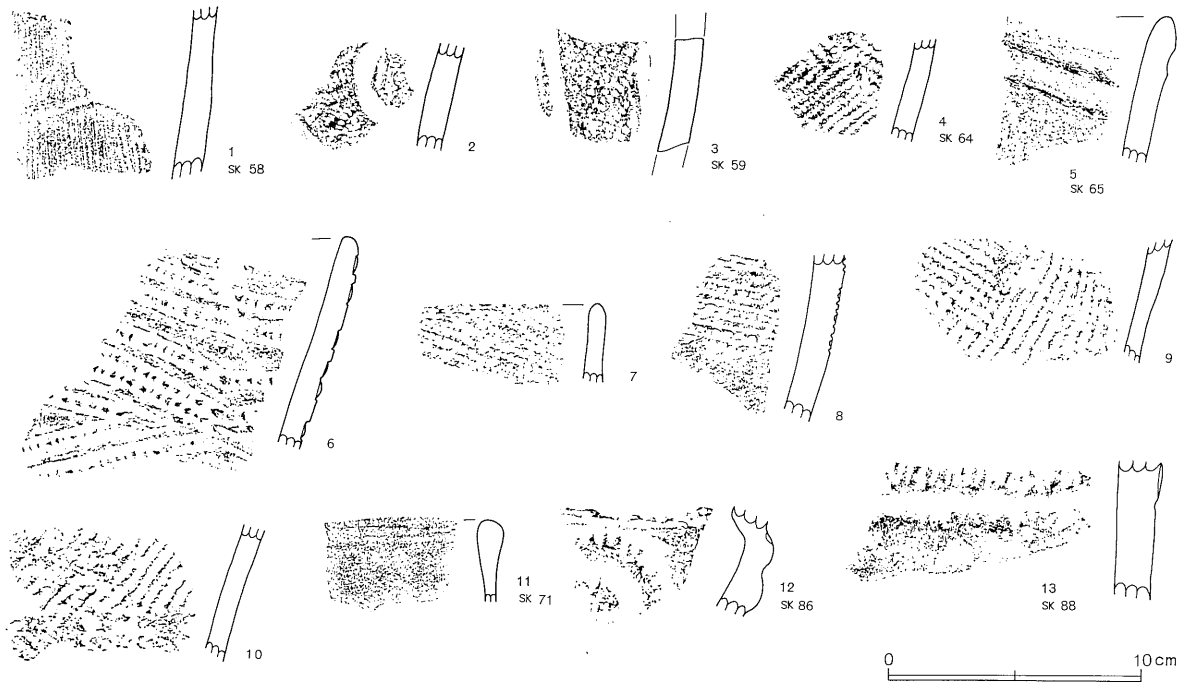
第112図11は第71号土壙出土の無文土器であり、早期捺糸文系土器群に伴うものである。口唇部は肥厚で丸頭状を呈し、口唇外端部に面取り状の調整が施されている。12は第86号土壙出土土器で、口縁部が「く」の字状に屈曲する。区画文として1本沈線が横走し、刻みを持つ隆帯による渦巻文が描出されている。13は第88号土壙出土土器で、胴部文様帯区画文として刻みをもつ隆帯と両側に沈線が施されている。12、13は勝坂式後半段階に比定される。

第5表 石器計測表

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
107-15	第9号土壙	打製石斧	9.4	5.4	1.7	78	ホルンフェルス	
109-15	第27号土壙	敲石	10.2	7.5	3.2	382	砂岩	
111-23	第57号土壙	凹石	9.6	7.3	5.2	515	閃緑岩	
117-1	第3号集石	打製石斧	10.8	6.3	3.0	264	ホルンフェルス	
2		敲石	12.7	5.4	4.1	424	砂岩	



第111 図 土壙出土遺物(5)



第112図 土壙出土遺物(6)

(4) 集石土壙・集石 (第113～117図)

東山遺跡 I・II 区での調査により検出された集石遺構の総数は17基であった。その多くは縄文時代前期から中期の所産であると考えられるが、すべてが本時期に帰属するとは限らない。この17基の集石遺構は、掘り込みの有無により分類することができ、A類—掘り込みを伴うもの (第1～13号集石土壙) とB類—掘り込みを伴わないもの (第1～4号集石) とに大別することができる。更に礫の出土状態やその分布により細別することが可能と考えるが、今回、その資料の分析をするまでには至っていない。

本遺構の集落内における分布状況であるが、台地中央の平坦面に住居跡群が形成されるのに対し、集石遺構は住居跡群を取り巻くよう台地斜面部に占地する傾向が強い。しかし、遺構内からは時期決定できるような遺物が検出されない以上、住居跡との有機的な関連性を見出すことはできないが、集落における空間的位置関係から帰属時期を探ることも可能と思われ、本遺跡では I 区の集石遺構が中期に属し、II 区の集石遺構を前期に属するものと考えたい。

以下、個別に検出位置、形態、規模と若干の説明を加えておきたい。

第1号集石土壙 (第113図)

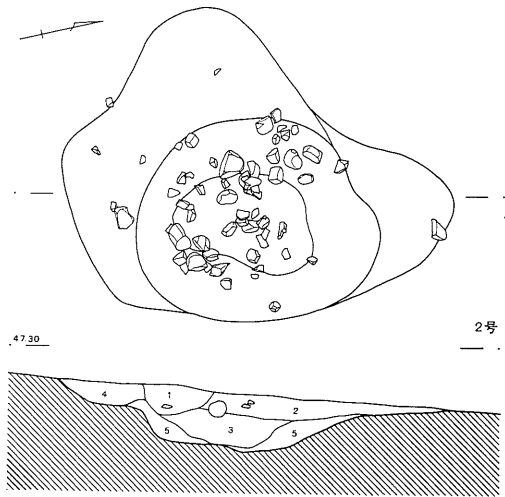
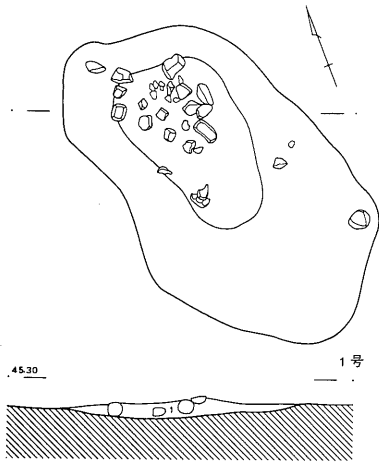
II 区、J-17 Grid で、調査区南側の斜面部に位置する。形態は南北に長い不整形を呈し、規模は長径1.53m、短径0.74m、深さ6cmを測る。断面形は皿形で非常に浅く、土壙北側に礫の分布が顕著である。礫はやや大きめのものが多く、あまり破碎もされていない。

第2号集石土壙 (第113図)

I 区、H-6 Grid で、調査区北端に位置する。形態は不整形であるが、一段さらに掘り込みを有し、その形状は円を基調としている。規模は長径1.52m、短径1.22m、深さ23cmを測る。礫の分布は土壙中央に顕著に認められ、覆土上層に比較的密度の濃い状況を示している。

第3号集石土壙 (第113図)

I 区、J-10 Grid に位置する。掘り込みの形態は不整形を呈し、規模は長径1.09m、短径1.01m、深さ

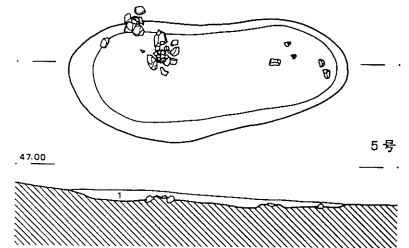
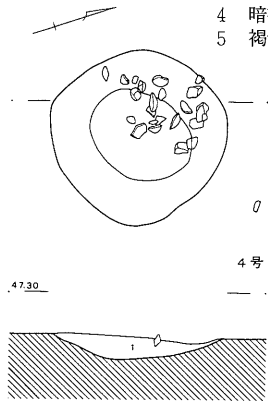
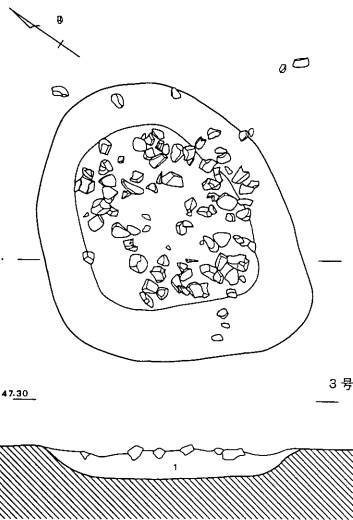


1号集石

1 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒・炭化物少量含む

2号集石

- 1 黒褐色土 攪乱層
- 2 黒褐色土 粗い黒色土粒を主とし、焼土粒・炭化物少量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 4 暗褐色土 ローム粒多量混入
- 5 褐色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまりやや強



3号集石

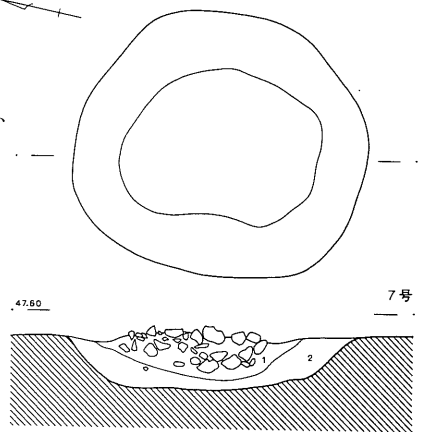
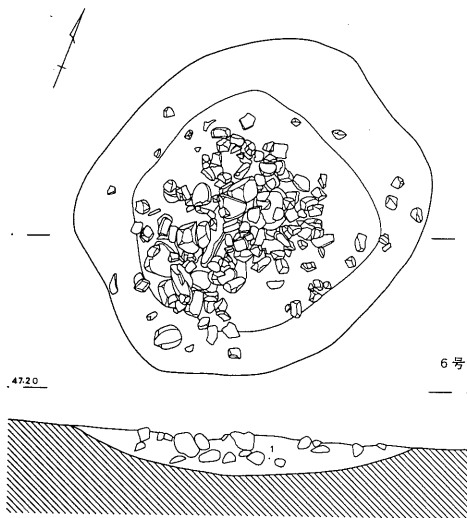
1 黒褐色土 粗い黒色土粒を主とし、焼土粒・炭化物少量含む

4号集石

1 暗褐色土 ローム粒少量混入炭化物少量含む、粘性、しまりやや強

5号集石

1 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック少量混入、焼土粒少量含む



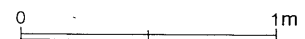
6号集石

1 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物やや多く含む

7号集石

1 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまり弱
2 褐色土 ロームブロック少量混入、底面に炭化物多量含む

第113図 第1～7号集石土壌



12cmを測り、底面は平坦である。礫は破碎しており、覆土上層に主として分布を示している。

第4号集石土壙（第113図）

Ⅰ区、J-10Gridで、第3号集石の南へ約1mの距離に位置する。形態は円形で、規模は長径0.70m、短径0.68m、深さ9cmを測り、断面形は皿形である。礫は疎らであるが土壙北側に顕著であり、覆土上部に分布している。

第5号集石土壙（第113図）

Ⅰ区、H-13Gridに位置する。南へ約2mの距離には第2、3号集石が近接している。形態は長楕円形を呈し、規模は長径1.09m、短径0.48m、深さ4cmを測り、断面形は皿状である。礫の出土は疎らで破碎している。

第6号集石土壙（第113図）

Ⅰ区、J-10Gridで、前述の第4号集石の南東に約7mの距離に位置する。掘り込みの形態は楕円形を呈し、本遺跡の集石のなかでは規模が大きく長径1.37m、短径1.31m、深さ15cmを測る。断面形は皿形を呈し、壙底から緩やかに立ち上がる。礫は覆土上層から底面まで分布している。

第7号集石土壙（第113図）

Ⅰ区、G-8Gridで、第10号住居跡の南東へ約4.5mの距離に位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.14m、短径1.05m、深さ19cmを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。礫はよく焼けており拳大のものを多く含むが、破碎しているものも含まれる。図化はしていないが土壙中央に密集し、覆土上層から中層にかけて分布している。

第8号集石土壙（第114図）

Ⅱ区、P-16Gridで、形態は円形を呈し、規模は長径0.74m、短径0.72m、深さ9cmと浅い。断面形は皿形である。礫は土壙中央に密集し、破碎しているものも多い。

第9号集石土壙（第114図）

Ⅱ区、O-14Gridで、形態は円形を呈し、規模は長径0.75m、短径0.72m、深さ10cmを測り、断面形は皿形である。礫は疎らではあるが土壙中央に分布する。

第10号集石土壙（第114図）

Ⅱ区、P-16Gridで、第8号集石の南約3.5mの距離に位置する。掘り込みの形態は南北方向に長軸を有する不整楕円形を呈し、規模は長径1.15m、短径1.03m、深さ12cmを測る。断面形は土壙北側に一段さらに掘り込みを有する。礫は破碎しており、覆土上層から中層にかけて密集し、分布は土壙中央やや北側に集中している。

第11号集石土壙（第114図）

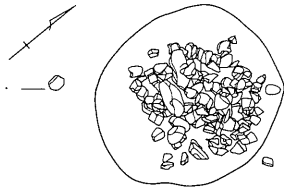
Ⅱ区、O-21Gridに位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径0.69m、短径0.64m、深さ7cmを測り、断面形は皿形を呈する。礫は覆土上層に疎らに分布している。礫は破碎しているがあまり焼けていない。

第12号集石土壙（第114図）

Ⅱ区、S-23Gridに位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.24m、短径0.95m、深さ12cmを測る。破碎した礫が覆土上層に密集し、分布は土壙中央において顕著である。

第13号集石土壙（第114図）

Ⅱ区、Q-16Gridで、第8号集石土壙の東へ約1mの距離に位置する。形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1.01m、短径0.87m、深さ9cmと浅く、断面形は皿形を呈する。礫は破碎しており、分布は土壙中央にやや顕著である。

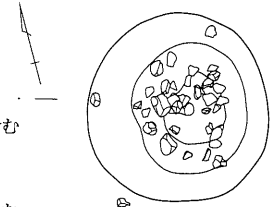
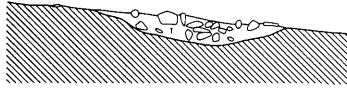


8号集石

1 褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒・炭化物少量含む

46.60

8号

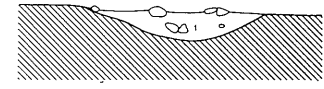


9号集石

1 褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む

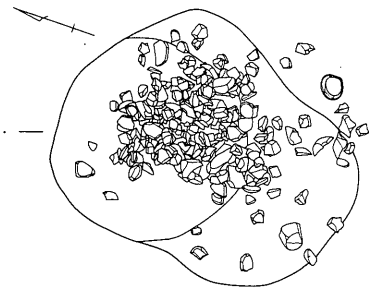
46.90

9号



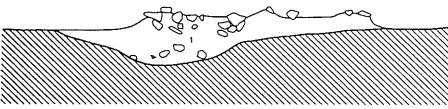
10号集石

1 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒・炭化物多量含む



10号

46.80



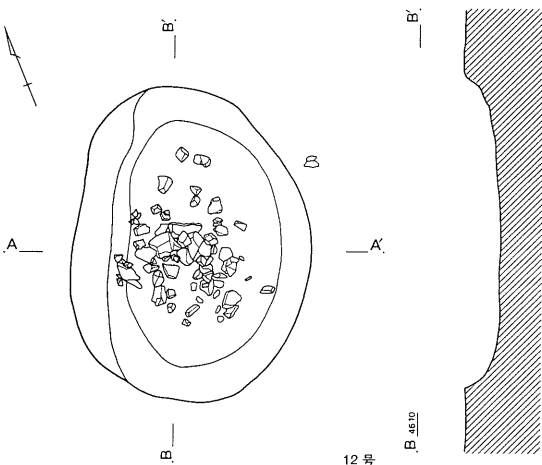
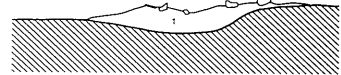
11号集石

1 黒褐色土 粗いローム粒多量混入、焼土粒・炭化物多量含む



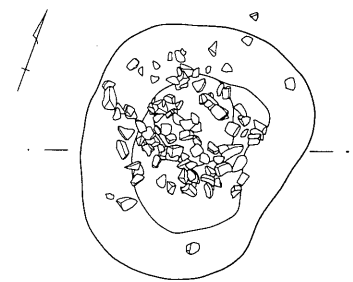
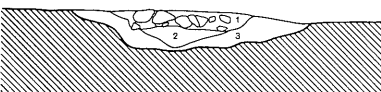
11号

46.40



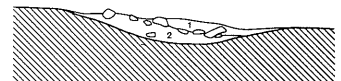
12号

46.10



13号

46.40



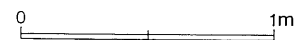
12号集石

- 1 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、炭化物少量含む、粘性、しまり強
- 3 褐色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまり強

13号土壌

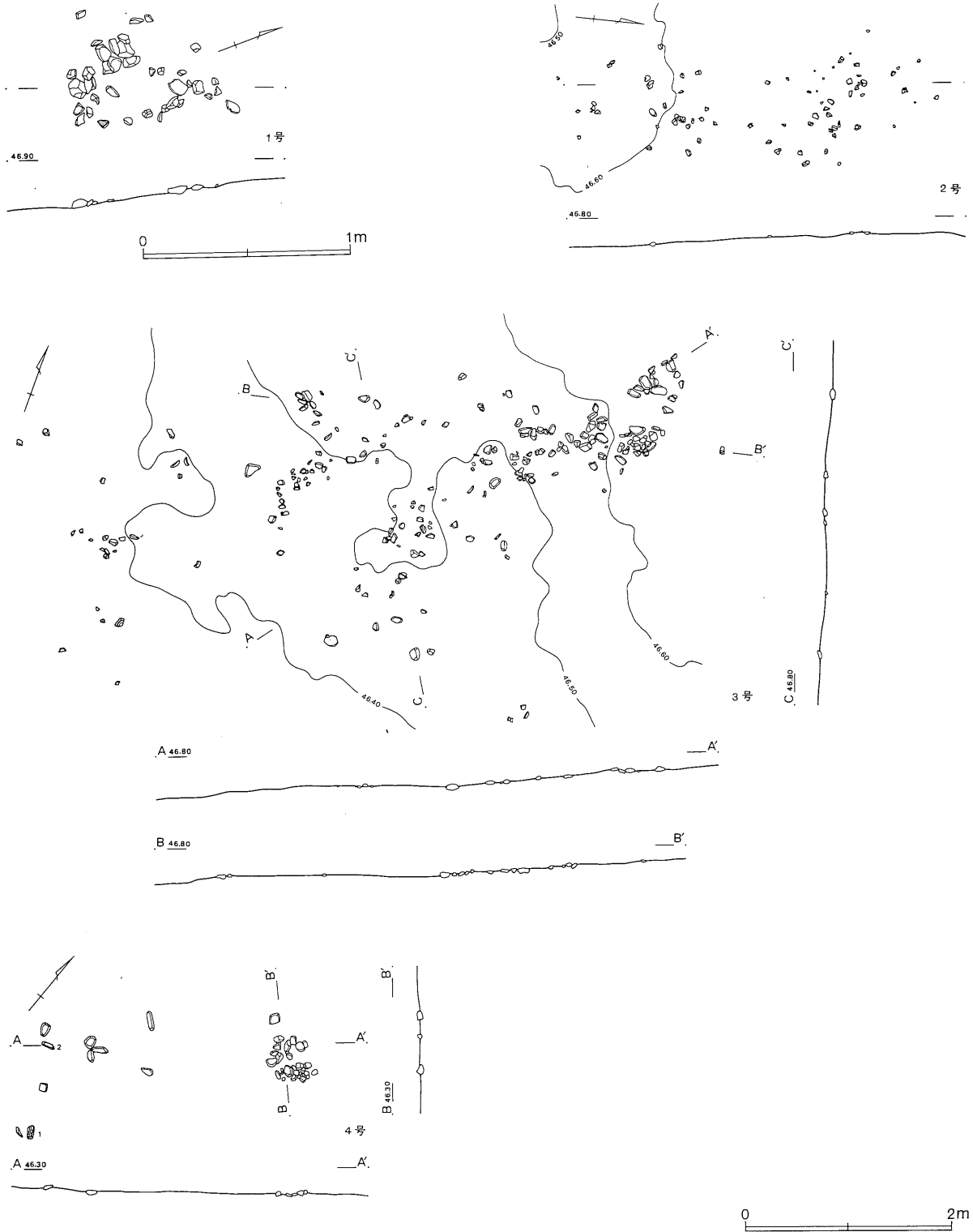
- 1 暗褐色土 粗いローム粒多量混入、粘性、しまり弱
- 2 黒褐色土 粗い黒色土を主とし、粘性、しまりやや強

第114 図 第8～13号集石土壌



第 1 号集石 (第115図)

I 区、E-12 Grid で、縄文中期の土壙群の南側に位置する。分布範囲は長軸0.90m、短軸0.70m程にまとまった状態で検出された。礫は全て加熱を受けており、拳大のものを多く含むものの破碎した礫も含まれる。集石の下には土壙などの掘り込みは認められず、炭化物が少量散在する程度であった。



第115図 第1～4号集石

第2号集石 (第115図)

I区、H-13・14Gridで、第5号集石の南東へ約2mの距離に位置し、第3号集石と隣接する。分布範囲は長軸3.70m、短軸1.00m程に散在する状態で検出された。礫は火熱を受け破碎している。集石の下には土壌などの掘り込みはみられず、焼土粒・炭化物は検出されなかった。

第3号集石 (第115図)

I区、H-13・14Gridに位置する。礫の分布範囲は広く北側に比較的大形の礫の集中がみられ、南へ移るにしたがって散在する傾向にある。範囲は長軸6.40m、短軸3.60m程を測り、全て火熱を受けている。集石の下には土壌などの掘り込みは認められなかった。

第4号集石 (第115図)

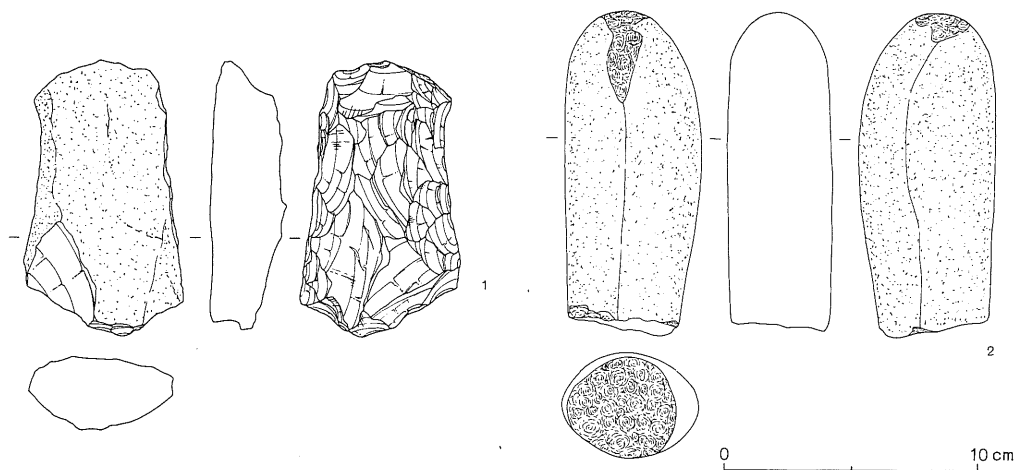
II区、S-19・20Gridに位置する。分布範囲は長軸2.60m、短軸1.00m程で南側に破碎した礫が集中する。北側には、打製石斧1点と敲石1点が出土したが、土器は出土していない。集石の下には土壌などの掘り込みは検出されなかった。

集石土壌・集石出土遺物 (第116~117図)

土器は4点出土している。1は第1号集石土壌からの出土である。口縁部は内湾する。隆帯による文様帯区画が施され、地文は単節LRを横位施文する。2、3は第3号集石土壌からの出土である。口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、幅広沈線により楕円形区画文が描出される。地文は単節RLを横位に施文されている。3は隆帯を曲線的に貼る付け、地文は単節LRを縦位に施文する。4は第4号集石土壌からの出土である。頸部に4本の沈線による区画を施し、沈線間の一部を連結する刻みが施される。



第116図 集石出土遺物

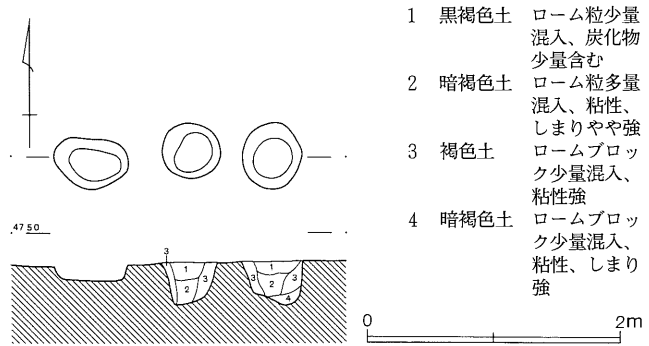


第117図 第3号集石出土遺物

石器は第3号集石から2点出土しており、第117 図-1 は打製石斧で、正面は自然面、裏面に打割面を残す。刃部は欠損しているが両側縁からの調整剥離が施されている。同図2 は敲石で、棒状な礫を利用しており、上下端に敲打痕が認められる。火熱を受けている。

(5) ピット (第118図)

本遺跡の住居跡の多くは掘り込みが極めて浅く、住居跡の柱穴配置や付属施設などにより住居跡と判断した。そして、遺構に伴わないものをピットとして処理し扱った。ピット総数35基である。ピットの検出された位置としては、I 区西側に多くみられ、II 区では検出されていない。図示した第118図のピットはD-10Grid で検出され、柱痕が観察された。このようにピットの中には住居を構成する可能性をもつものもあったと推測されるが確定できなかった。個別の図面掲載は省略した。

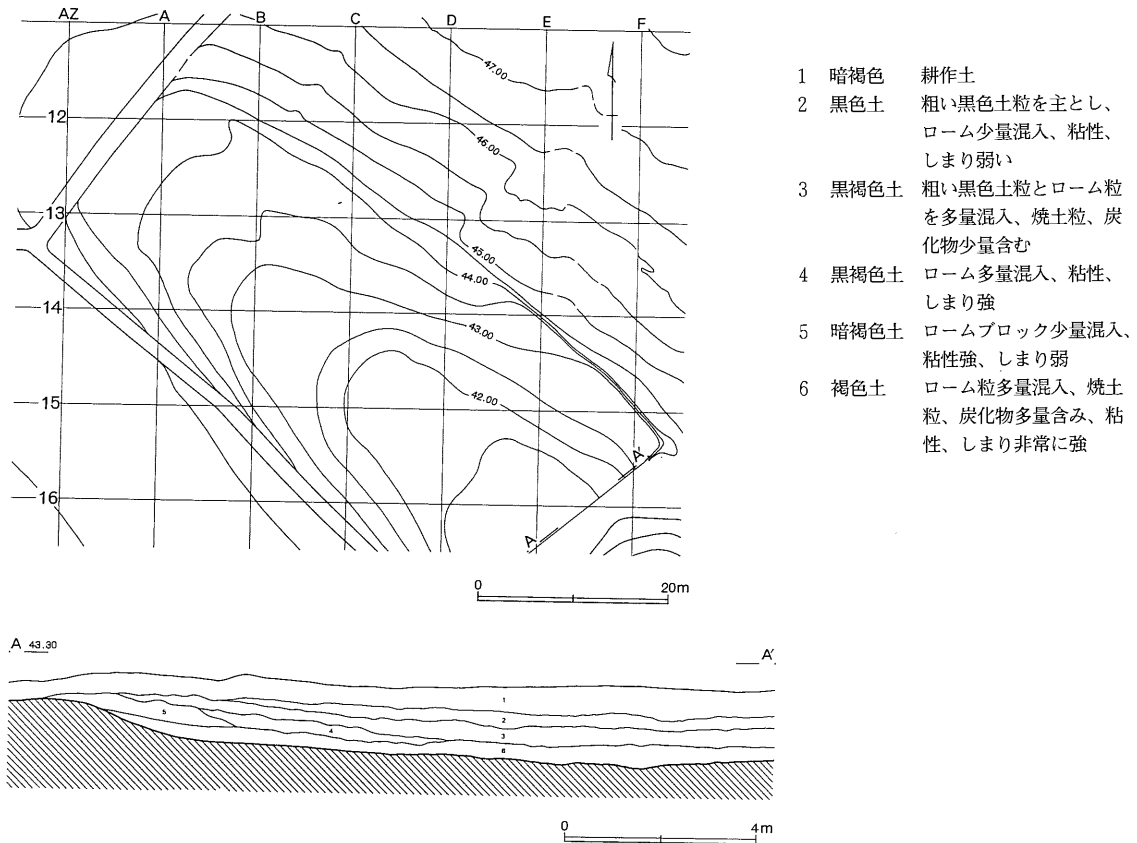


- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、炭化物少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまりやや強
- 3 褐色土 ロームブロック少量混入、粘性強
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまり強

第118図 ピット

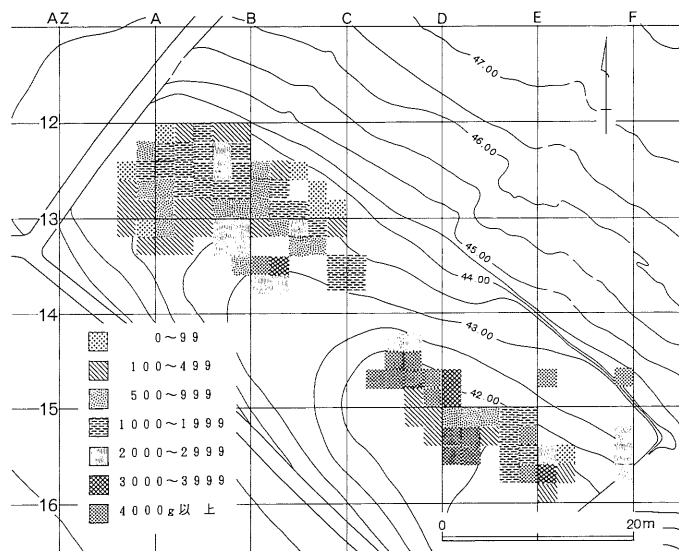
(6) 埋没谷包含層 (第119~120図)

本遺跡のI 区南側には、「桜谷の谷」の最奥部にあたる谷頭部が湾入している。調査以前は標高45m前後

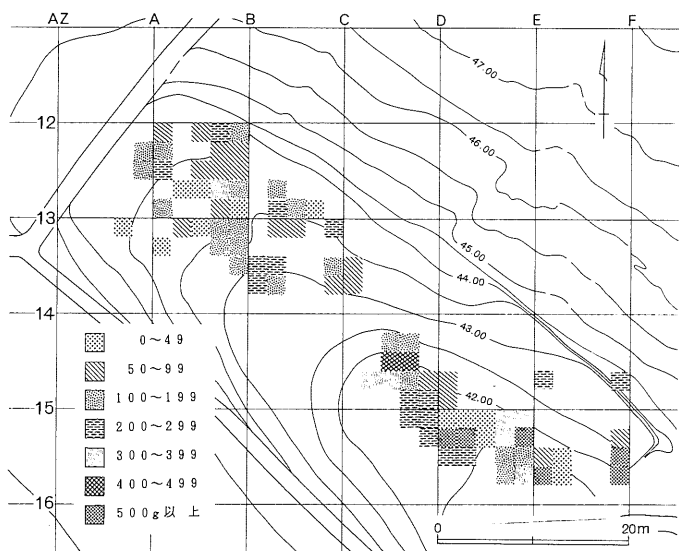


- 1 暗褐色 耕作土
- 2 黒色土 粗い黒色土粒を主とし、ローム少量混入、粘性、しまり弱い
- 3 黒褐色土 粗い黒色土粒とローム粒を多量混入、焼土粒、炭化物少量含む
- 4 黒褐色土 ローム多量混入、粘性、しまり強
- 5 暗褐色土 ロームブロック少量混入、粘性強、しまり弱
- 6 褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒、炭化物多量含む、粘性、しまり非常に強

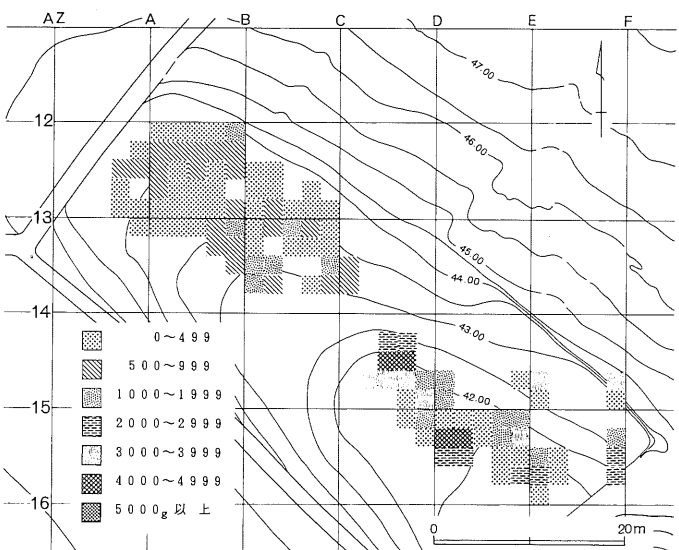
第119図 埋没谷地形図



土器分布図



石器分布図



礫分布図

第120図 埋没谷包含層遺物分布図

の南東方向へ緩やかに傾斜する地形を呈し、台地との比高差は3m程であった。この谷頭部に対して2本の試掘トレンチを設定し、調査を実施したところ地表面下約1.5~2.5mの深さに縄文時代中期の遺物包含層が形成されていることが確認された。

調査にあたってはこの埋没した谷の中央部を横断する幅1.5mのベルトを設定し、調査範囲を東西60m、南北46mとし、このうちの1,540m²に対して調査を行った。本地点を埋没谷包含層と呼称した。土層堆積状況は、第1~3層が耕作土及び黒色系土の堆積で占められ、約40~70cmと厚い堆積が観察されたものの遺物はほとんど含まれず自然堆積によるものであった。第4~5層は暗褐色系を基調とし、上層とは明確な違いを見せている。本層の堆積状況は台地斜面寄りに検出され、厚さ約30~50cmを測る。本層中より少量の縄文時代の遺物が含まれるとともにロームブロックも少量含まれていた。第6層は縄文時代中期の遺物包含層にあたる。褐色土を基調とし、厚さ約30~50cmを測り、自然堆積によるものである。遺物としては、土器、石器、礫であり、焼土粒、炭化物等も観察された。遺物の出土状態は、第5層下位から出土量が増し、第6層では20cm程の厚さをもって遺物が堆積していた。

調査位置はAZ~F-12~16Gridであり、調査では遺物包含層の上層にあたる第1~3層の堆積土は機械力により除去した。遺物包含層の調査に際しては2m×2mの小グリッドを組み、遺構の検出と遺物の出土状態について観察を行うとともに層位ごとに遺物を取り上げた。結果としては遺構と判断できる掘り込みは検出されなかった。遺物総数7,085点を数える。このうち土器5,703点、石器及び剥片類451点、礫931点である。

遺物分布状態（第120図）

出土した遺物の平面分布は、谷頭頂部から谷部までの広域な範囲に遺物の分布が観察されたものの、谷頭部にあたるA-12Grid付近とD-15Grid付近に濃密な遺物の出土がみられた。更に遺物分布は遺構が構築されている谷北側に片寄り、南側では希薄な分布を示していた。但し谷中央部の分断化した空白部は土層観察ベルトの未調査箇所である。出土した遺物時期は中期勝坂式～加曾利E式土器の破片が主要をしめるが層位や標高差により区分することはできず混在化した状況であった。

各遺物ごとにその分布について触れておきたい。第120図の図示はグラム表示による。

検出された土器は、多くが径10cmに満たないものが占めており、保存状態は極めて悪く剥落と磨滅が著しいものである。その為、同一個体の判別はしたものの接合関係の分析は行えなかった。土器の分布は、谷頭部のA-12Grid付近と谷部のD-15Grid付近の2箇所に濃密な分布が認められ、谷頭部付近では遺物量とともに分布範囲が広がる傾向が窺えた。時期はⅠ区の遺構構築時期にあたる中期勝坂式から加曾利E式土器が9割を占め、この他、後期称名寺式、加曾利B式土器が出土している。後期の土器については、調査区の西側隣接地において同時期の遺物が表採されていることから、台地西側からの流入によるものと思われる。一方、谷中央部周辺では集落期に属する加曾利E式の土器に限定されていた。

石器については、D-15Grid付近に濃密な状況を示している。石器としては、打製石斧、敲石、凹石等が出土しているものの多くは欠損品であり、また、黒曜石の剥片や打製石斧と同じ石材の剥片類が出土している。

礫は土器と同様に谷頭部のA-12Grid付近と谷部のD-15Grid付近の2箇所に濃密な分布が認められ、谷部付近では人頭大の礫の出土もみられた。礫は加熱を受け赤化したものも含まれるが、集石や礫の集中箇所を検出するには至らなかった。

以上のように遺物分布状態から埋没谷の遺物包含層は、台地部の遺構構築時期と同じ中期勝坂式期から加曾利E式期に属し、台地部の住居跡群によって形成されたものと考えられる。しかし、包含層の形成は、ただ単に自然営力による流入とするには出土量や礫重量からみても不自然であり考え難い。

集落構成のなかで谷部がどのように機能し、また、利用されていたのかは明らかにすることはできないものの谷部が集落構成のなかである特定の空間としての「場」として選定され、使用されたていたと考えることは可能であろう。

埋没谷包含層出土遺物（第121図～第124図）

埋没谷包含層からの出土遺物は総数7,085点である。このうち土器においてはその殆どが小破片や磨滅が著しいものであり、全形を知りえる資料は皆無であった。時期では、縄文時代前期中葉から後期中葉に至るが、主要な時期は中期中葉の勝坂式から中期後葉の加曾利E式に属し、住居跡等の遺構が構築された時期と相応している。ただ後述の遺構外出土遺物としたグリッド出土遺物とは、時期において埋没谷包含層に欠落する土器群もあり、ここでは、統一を図るためグリッド出土遺物の分類に沿って説明を加える。また、石器についてはグリッド出土遺物とともに後述で纏めて説明を加えることにした。

第Ⅰ群土器

縄文時代早期前半撚糸文系土器群を一括する。

埋没谷包含層からは出土していない。

第Ⅱ群土器（第121図1）

第1類 縄文時代前期中葉の黒浜式に比定される土器で数点検出されている。胎土中に量の差こそあれ繊維の混入が認められる。

1は単節LRを縦位または斜位に施文される。

第2～5類 縄文時代前期後半の諸磯式～十三菩提式に比定される土器群である。

埋没谷包含層からは出土していない。

第Ⅲ群土器（第121図2～11、16）

縄文時代中期前半の土器群を一括する。土器形式により2類に類別する。

第1類 縄文時代中期初頭五領ケ台式土器に比定される土器群である。

埋没谷包含層からは出土していない。

第2類（第121図2～11、16）

縄文時代中期中葉勝坂式に比定される土器群であり、土器型式により更に類別可能な土器群を一括する。

2は隆帯内側に沿って密な連続爪形文と半円文が巡る。胎土、焼成とも良好で堅緻である。3は胴部文様帯を垂下する隆帯により縦区画される。隆帯には押圧状の刻みが施され、区画内は沈線によるパネル状の区画が施される。4は口縁部破片で、口縁部に沈線区画された中を三叉文が描出され、口縁下には刻みをもつ楕円形区画文が配される。5は口縁下に区画文としての沈線と刻みが横走する。6は口縁部が波状を呈し、刻みのある隆帯により三角形文を描く。区画内には斜位に沈線が施文される。7は沈線による三角形文が描かれ、区画内を沈線が縦位に施文される。8は胴部文様帯区画として、深い交互刺突が加えられた隆帯が巡り、胴部下半は撚糸Lが縦位に施文される。9は隆帯による胴部文様帯下位区画が施され、胴部下半は撚糸Rを縦位に施文される。隆帯にはやや密な刻みと一部に交互刺突が施され、隆帯両脇には沈線が沿う。10は口縁部破片で「く」の字状に強く屈曲する。11は口縁部に沈線による渦巻文が描かれ、括れ部には横位の隆帯と沈線が巡る。16は口縁部に渦巻状の隆帯が貼付られ、地文は撚糸Rを斜位に施文される。

第Ⅳ群土器（第121図12～15、17～第123図4、6～8、第124図1）

縄文時代中期加曾利E式に比定される土器群である。加曾利E式系列の土器は、4型式に細分され、各時期はさらに数段階の時間軸が設定されている。

第1類（第121図12～15、17、18、29、31～第122図1）

加曾利EⅡ式に比定される土器群であり、更に2段階に分けられるがここでは一括して報告する。

12は内湾ぎみに立ち上がる口縁部破片で、後出的な文様構成をとるが口縁部文様帯には2本隆帯1本沈線による渦巻文と区画文が描出される。頸部文様帯に単節LRが横位に施文される。13は口縁部破片で、隆帯による区画文が配され隆帯脇に深い沈線が沿う。地文は単節LRの横位施文である。

31は口縁部文様帯の区画文として口縁下に隆帯と沈線が巡り、区画内には渦巻文が描出されている。32は口縁部文様帯の上位区画の沈線は喪失し、下位区画は隆帯と幅広沈線が巡る。区画内は沈線による楕円形区画文と渦巻文が配され、地文は単節LRの横位施文。第122図1は扁平な隆帯による口縁部文様帯が表出されており、口縁下には幅広の沈線が巡る。区画内は沈線による楕円形区画文が配され、地文は単節LRを横位に施文される。

第121図14は肩部文様帯を有する浅鉢形土器で「く」の字状に屈曲する。肩部には隆帯による渦巻文と楕円形区画文が配され、区画内には沈線が縦位に充填されている。15は口縁部が直線的に外反する深鉢形土器

である。口縁部は無文で、胴部文様帯の区画文として3本沈線が横位に巡る。地文は単節RLの横位施文である。

17は2本沈線による蛇行懸垂文が垂下し、地文は単節RLを縦位に施文する。18は幅広の半截竹管による2本の平行沈線文と同工具による蛇行懸垂文が垂下する。地文は撚糸Lを縦位に施文する。29は2本隆帯による懸垂文とその脇に沈線が沿う。地文は複節RLRを縦位施文される。

第2類 (第121図19~28)

所謂連孤文系統の土器群を一括する。

19は口縁に沿って3本沈線の上位区画が巡り、その間に円形刺突文が加えられている。連孤文は3本沈線で描かれ、地文は単節LRを横位に施文する。20は口縁部文様帯の上位区画として口縁下に3本沈線が巡り、上段の沈線間には交互刺突文が配される。文様帯には4本沈線の波状化した連孤文が描出されている。地文は単節LRを横位に施文している。21は口縁部が内湾し、口唇部がやや尖る。口縁部文様帯の上位区画として口縁下に3本沈線が配され、その上段の沈線間には交互刺突文が加えられている。連孤文は3本単位の沈線により描かれ、波頂部は区画文とは連結せずに施文されている。23は括れ部に3本沈線による横位区画文が巡り、区画文に沿って連孤文が施される。地文は撚糸Lの縦位施文。24は連孤文に伴う沈線により渦巻文が描出され、括れ部には区画文としての2本沈線が巡る。25は連孤文の波頂部下に1本沈線による渦巻文と孤線文が描かれる。地文は撚糸Lを縦位施文される。26、28は磨消縄文手法がみられることからEⅢ式に伴う土器であろう。26はやや幅広の3本沈線による連孤文が描出され、沈線間はナデにより地文が磨り消されている。地文は撚糸Lを縦位施文されている。28は沈線と交互刺突文により横位区画がなされる。文様帯内には3本沈線による連孤文が描出され、沈線間と孤線外の地文は磨り消されている。地文は細い撚糸Lを縦位施文されている。

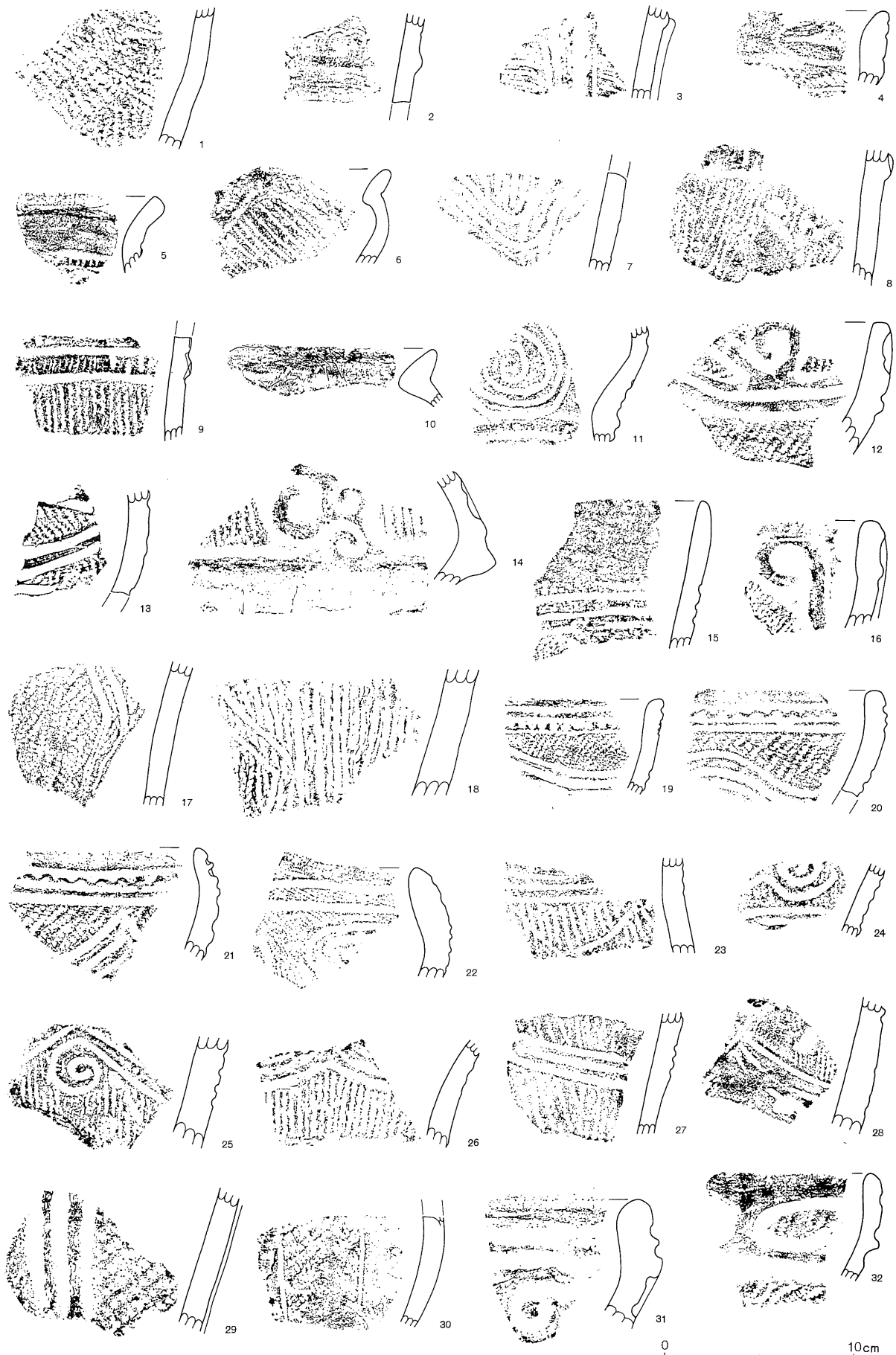
22、27は連孤文土器の影響を受けた土器群である。22は波状口縁を呈し、口縁下に2本の沈線が巡る。口縁部文様には沈線による下向渦巻文だろうか。地文は櫛歯状工具による条線が施文されている。27は下向渦巻文と杵状沈線文との組み合わせ文様が施文され、地文は撚糸Lを縦位施文されている。

第3類 (第121図30、第122図2~第123図4、6~8、第124図1)

加曾利EⅢ式に比定される土器群であり、更に2段階に分けられるがここでは一括して報告する。

第122図2は口縁に小突起をもち、口縁部文様帯の上位区画として隆帯と幅広の沈線が巡る。文様帯内は渦巻文と楕円形区画文が描かれている。3は口縁に外反する小突起をもち、突起下には沈線による楕円形区画文が配されている。地文は沈線施文後、単節RLを充填施文される。4は幅広沈線により楕円形区画文を描くが、崩化したモチーフとなっている。5は幅広の隆帯と沈線により楕円形区画文が描かれ、区画内を単節RLが横位に施文される。6は強く内湾する口縁部破片で、隆帯と幅広の沈線により文様帯区画が施され、区画内を複節LR Lを横位に施文される。7は口縁部破片で、偏平な隆帯により区画文を描出するが、文様帯内の楕円形区画文は崩壊し、また、渦巻文も楕円化を呈し、互いに入り組む。渦巻内部は地文が施され、隆帯脇の幅広沈線が残るだけである。文様帯下位区画も偏平な隆帯であり不明瞭な状況である。8は口縁部文様帯の下位区画の隆帯は喪失し、文様帯内は隆帯による渦巻文と崩化した楕円形区画文が配される。隆帯脇の沈線は幅広でナヅられている。胴部文様として磨消懸垂文が施文される。地文は単節RLを口縁部で横位、胴部は縦位に施文される。9は隆帯による楕円形区画文が施文され、隆帯上には刺突が施されている。地文は単節RLを横位に施文されている。11は隆帯よる楕円形区画文が配され、隆帯脇には幅広沈線が巡る。区画内は単節RLを縦位に施文される。

10は両耳壺で肩部は2単位の橋状把手が貼り付けられている。肩部文様帯には隆帯による楕円形区画文が



第121 图 埋没谷包含層出土遺物(1)

描出されているが器面の剥落が著しく、地文等は不明である。

第121図30、第122図12～19は、キャリパー形土器の胴部破片で、胴部文様帯に磨消懸垂文が施文されるものである。第122図12は口縁部文様帯の下位区画としての隆帯は偏平で隆帯上にも地文縄文がみられる。胴部はやや幅広沈線の懸垂文が垂下する。地文は単節RLの充填施文である。13は口縁部文様帯の下位区画文としての隆帯が施され、胴部は沈線幅の狭い懸垂文が垂下する。地文は沈線施文の後、単節RLを充填施文される。14は2本沈線の懸垂文が垂下し、沈線間は磨り消される。地文は単節RLの縦位施文である。15は2本沈線の懸垂文が垂下し、沈線間は磨り消されている。また、懸垂文間は狭い。地文は単節LRを縦位に施文される。16は2本沈線の懸垂文が垂下し、沈線間は磨り消されているとともに沈線にナデが加えられている。地文は0段3条の多条縄文LRを縦位施文。第121図30、第122図17～19は2本沈線の懸垂文が垂下し、地文縄文は懸垂文施文のち単節RLを縦位に充填施文される。

20は小形のキャリパー形の土器で、沈線による波状沈線文と「∩」字状文が配される。地文は単節LRが縦位に施文されている。

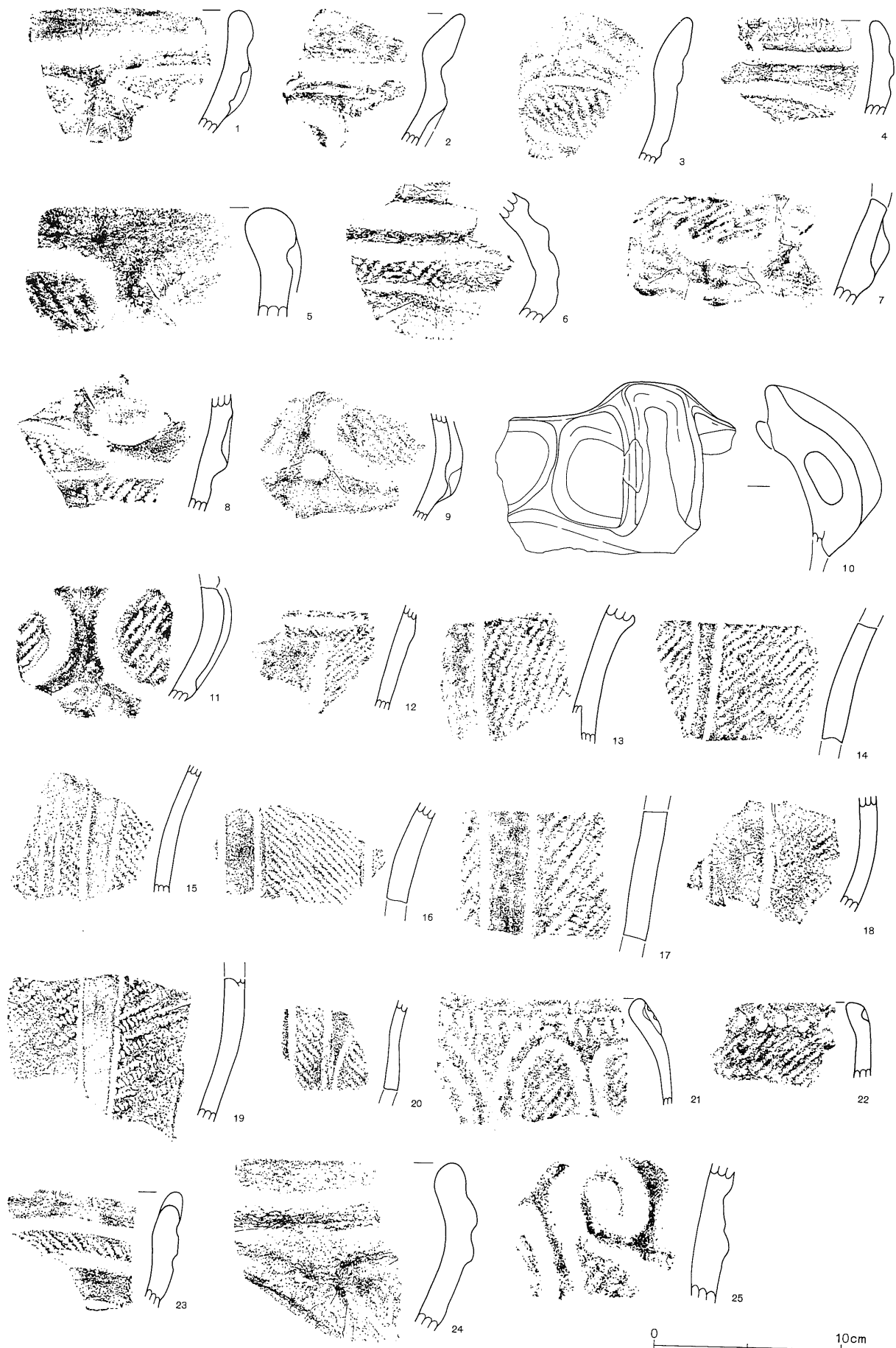
21は口縁部がやや内湾し、口縁下に刺突文が巡る。隆帯により「∩」字状文が描出され、隆帯脇には幅広のナゾられた沈線が施されている。区画内には単節RLを縦位に充填している。22はやや内湾した口縁に沿って刺突文が巡り、地文は単節RLが縦位に施文される。23は波状口縁を呈し、口縁に沿って幅広の2本沈線が巡り、その間に単節RLが横位に施文される。また、無文部を挟んで下位には沈線による渦巻文が描かれる。

24は胴部渦巻文系列の口縁部破片で、口縁部は内湾する。口縁下に沿って1本の隆帯が巡り、隆帯脇に沈線が施される。文様帯は隆帯により渦巻文等が描かれ、区画内はナゾられた沈線が巡る。縄文施文されるが器面が磨滅しているため不明である。25は胴部破片で、隆帯により渦巻文が描出され、隆帯脇にナゾられた沈線が巡る。地文は単節LRが施されている。第123図1は胴部破片で、隆起線により渦巻文が描かれ、その脇にはナゾられた沈線が巡る。区画内には単節RLが縦位に施文される。2は2本の隆起線により渦巻文が描出され、その脇にはナゾられた沈線が巡る。地文は単節RLが充填される。3は2本沈線により波状沈線文が施文され、沈線間は無文化を呈す。地文は単節RLが充填される。4は胴部破片で、隆帯により区画文を描き、区画内を単節LRが充填される。6は口縁部の把手で内側の凹から幅広の短い沈線が垂下する。地文は単節RLが縦位に施文される。7は口縁の突起から派生した隆帯が口縁下を巡るとともに、隆帯脇に沈線が施される。地文は単節RLが横位に施文されている。8は内湾する4単位の波状口縁を呈し、口縁部内側が肥厚する。口縁下に沈線が巡り無文帯をもち、体部は波状沈線文が描かれ、その沈線に沿って刺突文が配される。第124図1は口縁部文様帯の崩化した波状沈線文が施文され、胴部は幅広の沈線による懸垂文が垂下する。無文帯区画は広く、地文は単節RLが縦位に施文される。

第V群土器（第123図10～29）

縄文時代中期曾利式に比定される土器群である。曾利式系列は5型式に細分され、各時期は数段階の時間軸が設定されている。系統性から加曾利E式に属さないものを含む。

10、11は加曾利E式系統の文様構成をとるものである。10は口縁が「く」の字状に屈曲する。口縁部文様帯下位区画として隆帯が巡り、その内側脇には沈線が沿う。区画内には縦の沈線が充填され、地文として縄文施文がみられる。11は口縁部が直線的に外反しながら立ち上がる。隆帯により口縁部文様帯を作出し、文様帯内を1本沈線による長方形区画文が配される。区画文内には縦沈線が充填され、地文は櫛歯状工具による条線文が縦位に施文されている。



第122图 埋没谷包含層出土遺物(2)

12は口縁部が外反し、緩やかに立ち上がる。口縁部文様帯としてやや幅広の斜行沈線文が施文される。13は口縁が平坦で、口縁部文様帯には尖った棒状工具による沈線文が縦位に施文される。14はやや尖った棒状工具による沈線文が縦位施文される。15は口縁部が外反しながら立ち上がる。半截竹管による斜行沈線文が施文される。16は半截竹管による斜行沈線文が緻密に施文され、12～15より前段階に属すると思われる。17は緩く括れる頸部破片で、口縁部文様は斜行沈線文が施され、括れ部には1本隆帯が巡り、隆帯脇に沿って刺突文が施文される。胴部は口縁部施文工具とは異なり半截竹管による平行沈線文が縦位に施文される。18は括れ部に指頭圧痕のある隆帯が巡り、胴部は隆帯による蛇行状隆帯が垂下する。区画隆帯と蛇行隆帯の付け根部分には円形刺突が加えられている。胴部の地文沈線は縦位施文されている。19は胴下半部の破片で隆帯に指頭圧痕のある隆帯が垂下し、地文は沈線が縦位施文される。20は蛇行隆帯が垂下し、隆帯脇に沈線が施される。地文は撚糸Lが縦位施文される。

21は無文帯と文様帯が交互に配される。2本の懸垂文が垂下し、その間に斜位の沈線文が充填される。22は2本沈線の懸垂文と沈線間に1本沈線の蛇行懸垂文が施文される。また、懸垂文間には櫛歯状工具による流水文が施文される。23は口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁下に刺突が加えられた2本沈線が巡る。体部は間隔を開く斜行沈線が施文される。24は胴下半部の破片で沈線区画された懸垂文間に矢羽根状文が充填施文される。

25、26は櫛歯状工具による流水文が施文される。27、28は櫛歯状工具による条線が比較的密に施文される。29は体部を沈線により「∩」字状に区画された中を矢羽根状沈線文が充填される。

第Ⅵ群土器（第123—5、9、第124図2～4、6～16）

縄文時代後期に比定される土器群である。土器形式により3類に類別した。

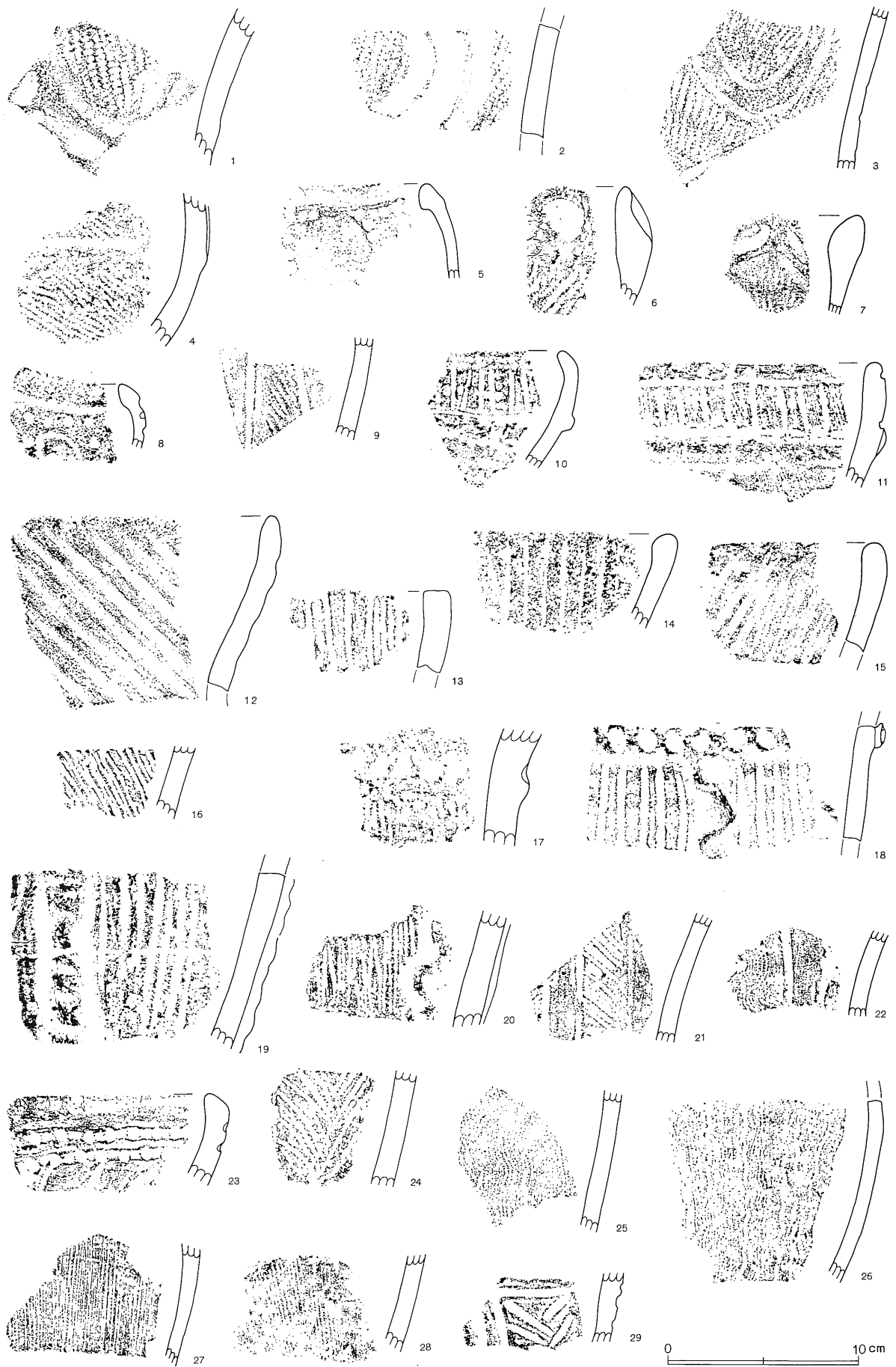
第1類（第123図5、9、第124図2～15） 後期初頭称名寺式段階に比定される土器群を一括する。

第123図5は内湾する口縁部破片で、口縁内側がやや肥厚する。口縁下には隆起線が巡り、幅狭の無文帯をもつ。口縁部文様は隆起線により円形に描かれ、隆起線脇には円形刺突文が巡る。系統的には加曾利E式系統のものであろう。9はやや深い2本の沈線が垂下し、沈線間に単節LRが縦位に施文される。第124図2は文様モチーフは明確ではないが、やや太い沈線による曲線文と細い沈線によるJ字文が描出されている。モチーフ内には単節LRが充填されている。3は小形のキャリパー形を呈する括れ部の破片で、沈線によるJ字文を二段構成に描出されるのか。単節LRが充填されている。4は口縁下に巡る縄文帯からJ字文が描出される。器面は風化しているが、口唇部と文様内に単節LRが充填されている。

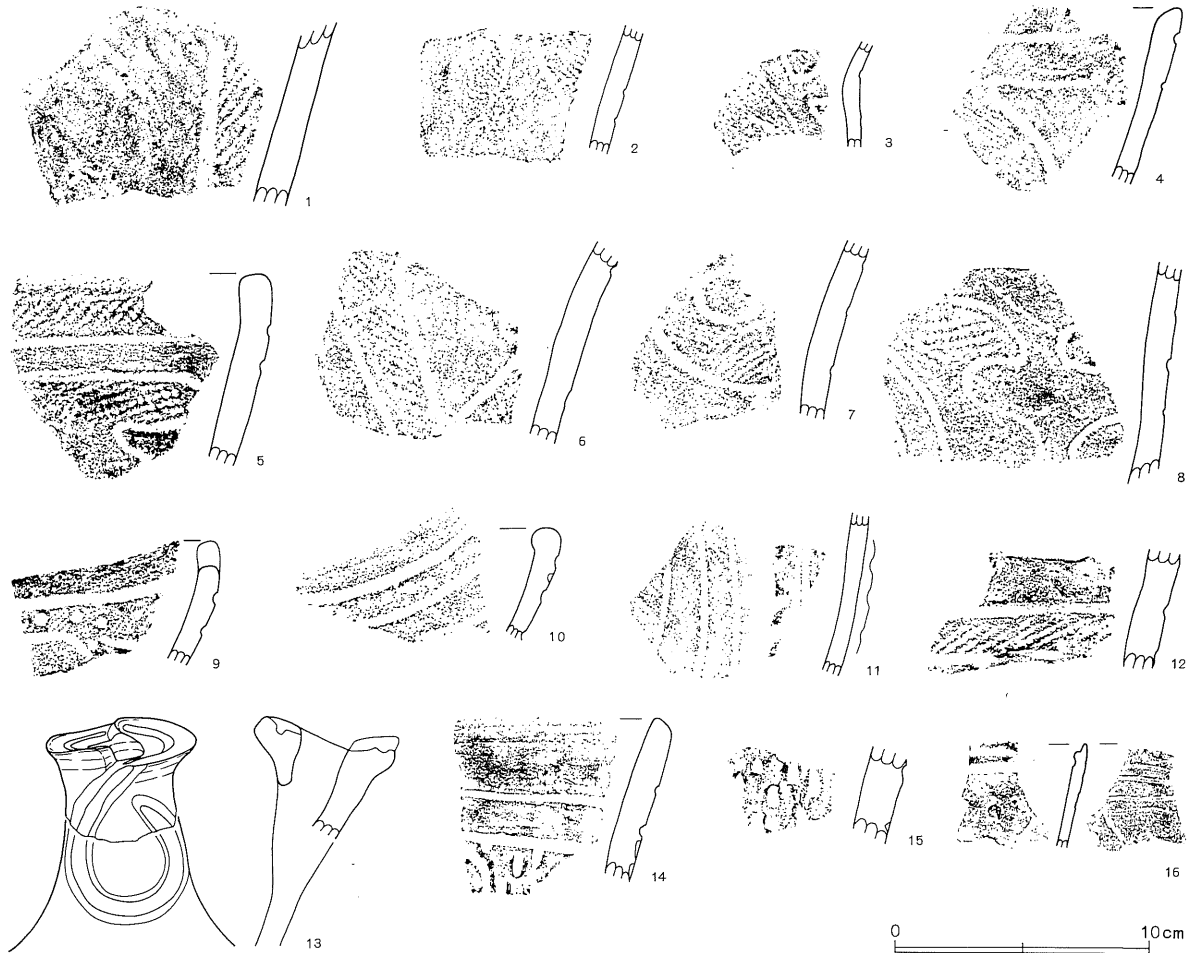
5は口縁下に1本沈線が施され、口縁下に幅狭の縄文帯が巡り、器面には沈線による菱形文が描出される。地文は単節LRが充填される。6は沈線による三角形の単位文が描かれ、区画内を単節LRが充填施文される。7は円形文が描かれ、区画内に単節LRが充填される。8は三角形文と菱形文が崩れたように施文され、区画内を単節LRが充填される。

9、10は同一個体で、波状口縁を呈し、口縁下に深く施文された2本沈線の区画による縄文帯とJ字文が巡る。区画内には単節LRと列点文が施される。11は胴部破片で刻みをもつ隆帯により縦位区画され、区画内を2本沈線により曲線文が描かれている。地文は単節LRが充填されている。12は2本のナズられた深い沈線により、胴部を横位に区画し、区画内を単節LRが充填される。13は耳形把手で隆起線により鉤状に貼付られる。

14、15は区画内に列点が充填され、14は2本沈線による横位区画が施され、区画より沈線が垂下する。



第123图 埋没谷包含層出土遺物(3)



第124図 埋没谷包含層出土遺物(4)

第2類 後期中葉堀之内式に比定される土器群である。

埋没谷からは出土していない。

第3類 (第124図16) 縄文時代後期後葉加曾利B式土器に比定される土器である。

16は小形の深鉢形土器で、口縁部内面に2本沈線が巡り、外面は細い沈線が4本巡る。B I式に比定される。

(7) グリッド出土遺物 (第125図～第129図)

土器

東山遺跡Ⅰ区、Ⅱ区のグリッドからは、遺構構築時期である縄文時代中期の土器群が主要を占め、次に前期の土器群が続く。更に早期撚糸文系土器群や後期の土器群が少量出土をみている。尚、古墳跡など時代のことなる遺構から出土した縄文土器についてもグリッド出土遺物として扱い報告した。

以下、第Ⅰ～Ⅶ群土器に分類し説明する。

第Ⅰ群土器 (第125図4～13)

撚糸文系土器群を一括する。施文原体で3類に分類した。

第1類 (第125図4～7、10)

撚糸文を施文するものを一括する。4は口縁部が垂直に立ち上がり、口唇部は肥厚し、断面が丸頭状を呈する。口唇部下からやや太目の撚糸Lが施文された後、口唇部に調整が施される。5は口縁部がやや外反ぎみに立ち上がり、口唇部は肥厚で、断面が丸頭状を呈する。口唇部下から条の間隔が広い撚糸Rを施文した後、口唇部に調整が施される。6は口縁部が垂直に立ち上がり、口唇部は肥厚し、断面が丸頭状を呈する。口唇部下から撚糸Rを施文した後、口唇部に調整が施される。7は4～6と比較して器厚が薄い。口唇部が肥厚し、断面は丸頭状を呈する。口唇部下から撚糸Rを施文した後、口唇部に調整が施される。10は口縁部がやや外反しながら立ち上がり、口唇部は肥厚し、断面が丸頭状を呈する。口唇部下から撚糸Lを施文するが体部には施文されていない。施文ののち口唇部に調整が施される。

第2類 (第125図9)

縄文を施文するものであり1点出土した。9は口縁部が垂直に立ち上がり、口唇部はやや肥厚し、断面が丸頭状を呈する。口唇部下から単節LRが施文された後、口唇部に調整が施される。

第3類 (第125図8、11～13)

無文土器を一括する。8は口唇部が丸頭状を呈する。11は直線的に立ち上がり、口縁部でやや開く。口唇部は調整により外傾する。口縁部下に1本の沈線が巡り、補修穴がみられる。12は口唇部が肥厚し、断面は丸みもつ。調整として横方向のナデが施される。13は口唇部がやや肥厚するが、口唇部上端は平坦に整形される。

第Ⅱ群土器 (第125図14～28)

縄文時代前期に比定される土器群である。土器型式により5類に分類した。

第1類 縄文時代前期中葉の黒浜式に比定されるものを一括する。量の差こそあるが胎土中に繊維の混入が認められた。

第1種 (14、17～22) 文様帯を持つ土器群である。14は口縁に突起を有し、突起下に斜行沈線文が施文されている。また、口縁に沿って隆帯が巡る。17は半截竹管による平行沈線文と爪形文により横位区画と曲線文が施文される。18は平行沈線文と爪形文により菱形か山形文が描かれるのであろう。19は幅狭の半截竹管による平行沈線文と連点状刺突文による山形文が描出され、地文は単節LRを横位又は斜位に施文される。20は爪形文と連続刺突文による山形文が描出され、括れ部には区画文として2条の連点状刺突文が巡る。21は平行沈線文による山形文が描かれている。22は平行沈線文と連続爪形文による区画文が施され、胴部は羽状縄文が施文される。上下の施文帯で原体を変え、単節LR、RLである。

第2種 (15、16、23～28) 地文のみの土器を一括する。15は少量の繊維を含む口縁部破片で口唇が丸味をもつ。単節LRを縦位に施文される。16も口縁部破片で口唇は角形である。地文は単節LRを横位に施文する。23は胴部が張り、単節LRを横位に施文する。24は羽状縄文であり、上下の施文帯で原体を変え菱形構成とするものである。原体は単節RL、LRである。25は単節RLを縦位施文し、26は単節LRを横位施文する。27は付加状縄文が施文されたものであり、LR+R2条であろう。28は付加状縄文か、単節LR。

第2類 (第126図1、2)

縄文時代前期後半の諸磯a式土器に比定されるものを一括する。

1は幅広の半截竹管による平行沈線文と爪形文により直線的なモチーフが描かれる。2は対角線文系統と称される土器群で、平行沈線文による対角線文が作出される。縦位区画文間を斜行沈線文が施され、斜位施文された2本の平行沈線文間は磨り消されている。円形刺突文は沈線施文ののち施される。地文は単節RL

を横位に施文する。

第3類（第126図3、4）

縄文時代前期後半の諸磯b式土器に比定されるものを一括する。

3、4は平行沈線文による横位区画が施され、区画内を鋸歯状文が描かれるのか。

第4類（第126図5～9）

縄文時代前期後半の諸磯c式土器に比定されるものを一括する。

5は口縁部が外反し、欠落しているが縦に貼付文が施されている。櫛歯状工具により横位に区画され、区画内を縦位の孤線文が施文される。6、7は同一個体で、口縁部は外反しながら立ち上がる。櫛歯状工具により横位区画が施され、この間を斜行や曲線文が描かれる。地文は単節RLを横位に施文している。

8、9は同一個体で半截竹管による集合沈線文が横位施文され、横位区画内を斜位に充填施文される。

第5類（第126図10）

縄文時代前期末の十三菩提式土器に比定されるものを一括する。

10の器面は磨滅が著しく、器厚が極めて薄い。半截竹管による集合沈線文により渦巻文が施文され、中心に三角形陰刻文が表出される。

第Ⅲ群土器（第125図1、第126図11～第127図7、9）

縄文時代中期前半の土器群を一括する。土器型式により2類に分類する。

第1類（第126図11、12）

縄文時代中期初頭五領ケ台式土器に比定されるものを一括した。

11は半截竹管による平行沈線文と縦位の結節縄文が施されている。12は3本沈線による横位区画文と胴部文様帯を縦位に区画する4本沈線の懸垂文が垂下する。区画文の交点には欠落しているが貼付文の痕跡が残る。縦位区画文に沿って刺突が巡る。

第2類（第125図1、第126図13～第127図9）

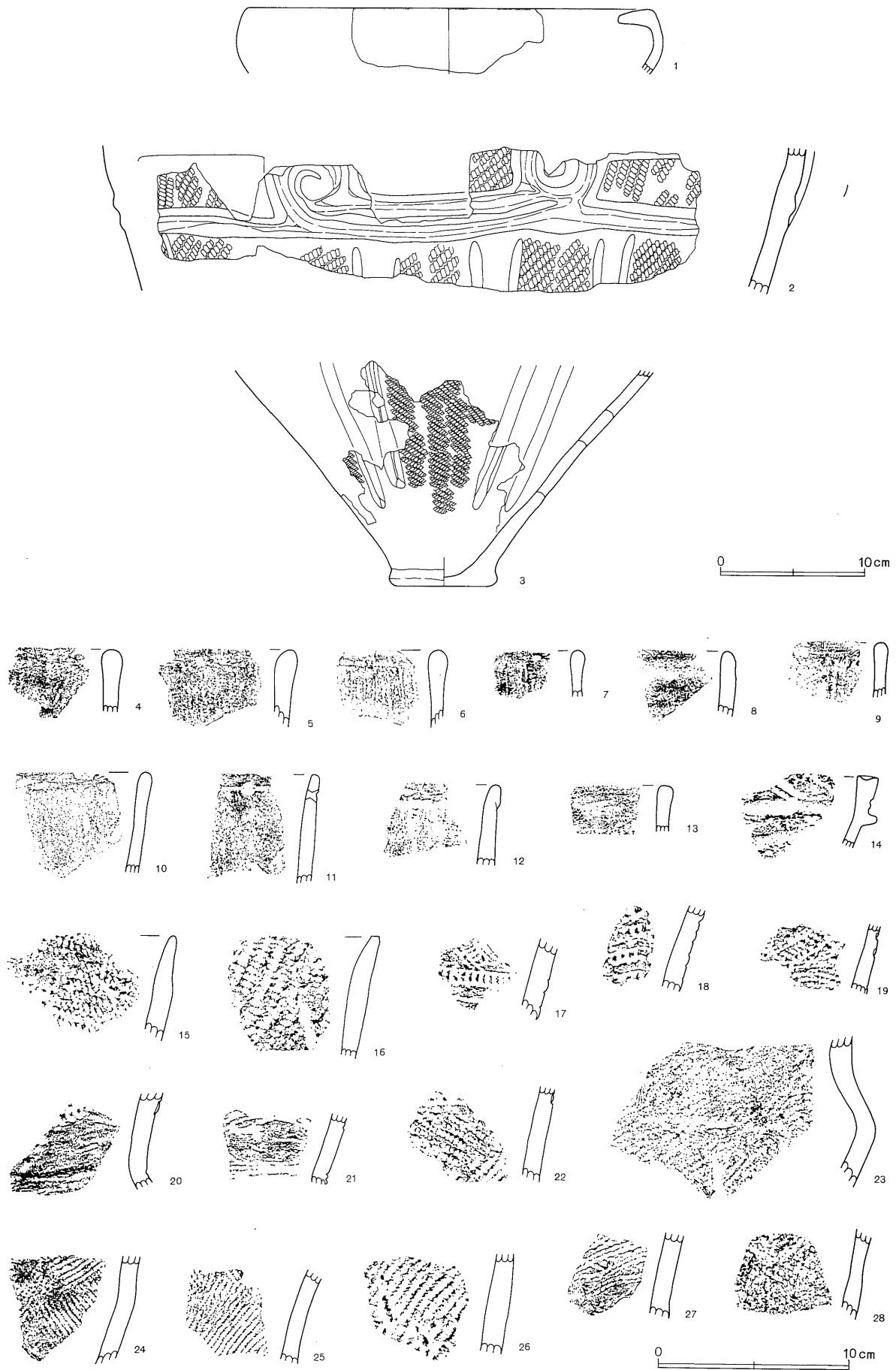
縄文時代中期中葉勝坂式土器に比定される土器群を一括する。

第125図1は口縁部が内側に屈曲する口縁部破片で、内外面とも比較的入念な研磨調整がされている。第126図13は隆帯による横位区画文が巡り、口縁部文様帯には刻みをもつ隆帯を配す。区画内には幅広の爪形文が巡る。14は突出した隆帯の区画文が配され、その隆帯脇には爪形文が巡る。15は三角連続区画文で構成され、区画内を爪形文が巡る。16は隆帯により文様帯区画が施され、隆帯脇に沈線が巡り、区画内には縦位の爪形文が充填される。

17は半截竹管による縦長の方形区画文が描かれ、区画内を斜位に沈線が充填される。18は口縁部に刻みを持つ隆帯により区画され、隆帯脇には沈線が巡る。区画内は沈線と緻密な刻みにより三角文が描かれる。19は幅広の連続爪形文と爪形文で区画され、その中を沈線文が充填される。20は幅広で偏平な隆帯に交互に深い刻みが施される。21は隆帯により楕円形区画文が施される。区画内を縦位の沈線が施文され、この間に緻密な刻みが充填される。22は爪形文を持つ隆帯により曲線文が描出される。隆帯に沿って沈線が施文される。23は沈線により三角形文が描かれ、沈線間を緻密な刻みと刺突が施される。

24、15は同一個体で、底部や文様意匠部が空いている。半截竹管による平行沈線文により渦巻文や三角形文が描出され、区画内を刻みと爪形文で縁取られている。

26は口縁部は無文で内側に「く」の字状に屈曲する。27は口縁部が内湾し、刻みの持つ隆帯により渦巻文が描出され、隆帯脇には沈線が施される。28は口縁に渦巻状の突起を持つ。口縁部は縦位に区画された交互



第125図 グリッド出土遺物(1)



第126図 グリッド出土遺物(2)

刺突のある隆帯が垂下し、区画内を沈線と刺突が施される。29は口縁から垂下する隆帯が貼付られ、隆帯上に沈線が加えられる。口縁部には幅広と幅狭の隆帯により曲線文が描かれ、隆帯上には交互刺突が施されている。30は隆帯により区画文が配され、区画内には沈線により斜線文が施文される。31は口縁に刻みをもつ円形把手を付され、把手中央には1本沈線による円が描かれている。32は口縁部に三角形の耳形把手が付され、縁に沿って刻みと爪形文が巡っている。

33は口縁部文様帯の下位区画としての隆帯が巡り、文様帯内を隆帯により渦巻文や三角形文が描かれる。隆帯脇には刻みと沈線が巡る。頸部文様帯は無文である。34は刻みを持つ隆帯により横位に区画され、区画内を隆帯による楕円形区画文が配される。

第127図1は三角形の耳形把手で、縁には爪形文が巡り、その内側を沈線により印刻状の三叉文が描出されている。2は偏平な隆帯により渦巻文が描かれ、区画内には沈線による渦巻文や三叉文、三角文を描き、刻みが加えられている。3は三角形の隆帯により縦位に区画され、区画内を沈線による渦巻文が描出される。4は指頭圧された隆帯により縦位に区画され、区画内を沈線による縦長の方形単位文が配される。

5は文様帯下位区画として偏平な隆帯が巡り、隆帯脇には沈線が施される。区画内は縦に沈線が充填され、一部に刻みが施される。6は胴部区画文として隆帯が巡り、区画内を沈線が縦に充填される。一部に交互刺突が施される。7は底部が算盤玉の様に張り出す器形を呈し、胴部文様帯は0段多条縄文RLが施文される。8は「く」の字状に屈曲する浅鉢形の口縁部破片で、肩部に偏平な隆帯により区画文が配される。9は口縁が強く内折する。肩部には幅広の突出した楕円状の隆帯と隆帯下に1本沈線が巡る。

第Ⅳ群土器群（第125図2、3、第127図～第129図）

縄文時代中期後半加曾利E式に比定される土器群である。加曾利E式系列の土器は、4型式に細分され、各時期は数段階の時間軸が設定されている。

第1類（第125図3、第127図10、12、22、24、第129図3、4）

加曾利EⅡ式期に比定される土器群であり、後述するようにEⅡ式期は2段階に細分されようがここでは一括して報告する。

第125図3はキャリパー形土器の胴下半部で2本隆帯による懸垂文が垂下するが、隆帯脇には沈線は加えられていない。地文は単節LRが縦位施文される。第127図10は口縁部文様帯に隆帯による楕円形区画文が配され、区画内を縦に沈線が充填される。12はキャリパー形土器の口縁部で突出した隆帯による渦巻文と沈線による楕円形区画文が描出されている。

22、24はキャリパー形土器の胴部破片で、胴部文様帯の懸垂文に磨消手法が施されていないものである。22は半截竹管の平行沈線文により胴部上位区画が施され、これから3本沈線の懸垂文が垂下する。地文は単節RLを縦位に施文している。24は2本沈線による懸垂文が垂下し、地文は単節RLを縦位に施文する。第129図3、4は浅鉢形土器で、3は口縁部が肥厚し、口縁下に段をもつ。4は口縁下で段をもち、肩部が弱く張る。

第2類（第128図12～20図）

所謂連孤文系統の土器群を一括する。

12は口縁部文様帯の上位区画として3本沈線と交互刺突文が巡り、区画内を3本沈線による連孤文が描かれる。地文は単節LRを横位施文される。13は口縁下に文様帯上位区画文として半截竹管による3本の平行沈線文が巡り、一部に円形刺突文が加えられる。文様帯内には3本沈線による連孤文が施され、波頂部下に円文が描かれる。地文は単節LRを横位施文される。14は沈線と刺突文が口縁下に巡り、口縁部文様帯には

沈線による渦巻文が描かれる。文様間を縦に刺突文が施文され、地文は磨滅が著しいが燃糸文であろう。15は交互刺突文による区画文が巡り、区画内を下向渦巻文と杵状沈線が施文される。地文は単節LRが横位施文される。16は3本沈線による連弧文と渦巻文が描かれる。地文は燃糸Lを縦位に施文されている。17は文様帯下位区画として沈線文と円形刺突文が巡り、文様帯には杵状区画文が描出される。地文は単節LRが施文される。18は括れ部に文様帯区画文としての平行沈線文が巡り、胴部文様帯の孤線文上に渦巻文が描かれる。地文は燃糸Lが縦位施文される。19は2本沈線による区画文と波状文が描かれ、沈線間は磨り消されている。EⅢ式前半段階に属するものである。地文は燃糸Lを縦位に施文されている。20は4本沈線による連弧文が施文され、波頂部下には渦巻文と孤線文が描かれる。

第2類（第125図2、第127図11、13～21、23、25～第128図10、第129図5～7、10、11、13）

加曾利EⅢ式期に比定される土器群であり、更に2段階に細分されようがここでは一括して報告する。

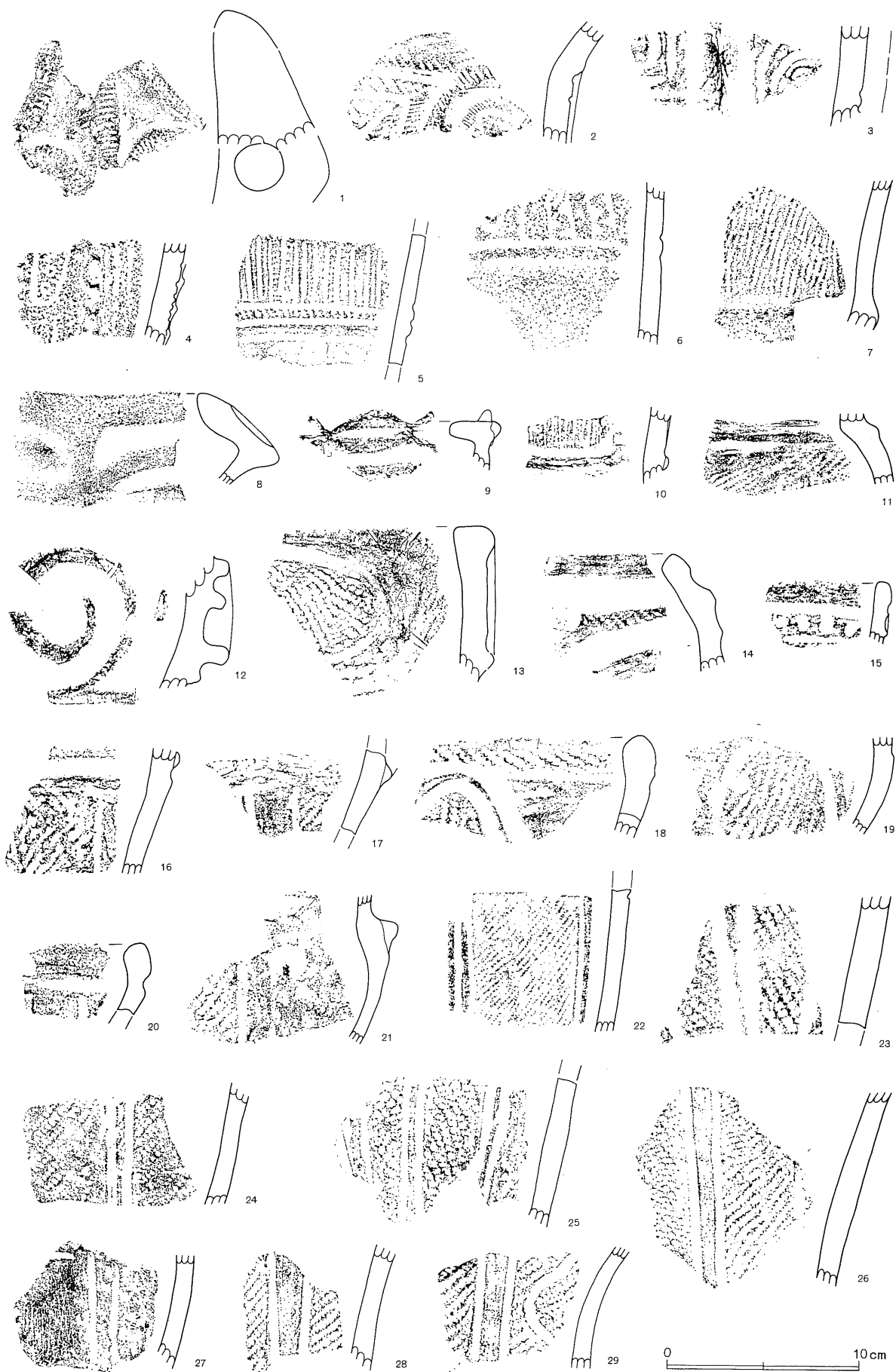
第125図2はキャリパー系土器である。隆帯により口縁部文様帯下位区画が施され、文様帯内を隆帯による渦巻文が表出されるとともに幅広の沈線が加えられている。隆帯脇には沈線が巡り長方形区画文を作出している。胴部は2本沈線による磨消懸垂文が垂下するが、口縁部文様との対称性を失っている。地文は単節RLを縦位に施文する。13は口縁部文様帯に隆帯による楕円形区画文が配され、隆帯脇をナゲられた沈線が巡る。単節RLが充填される。15は口縁下に幅広の2本沈線が巡り、この間を刺突が施されている。16は口縁部文様帯の下位区画としての隆帯と幅広の沈線が巡る。胴部は2本沈線の懸垂文が垂下し、この間は磨り消されている。地文は単節RLを縦位施文する。17は口縁部文様帯下位区画として偏平な隆帯が巡る。胴部文様は磨消懸垂文が垂下する。地文は単節RLの縦位施文である。

23、25は2本沈線の磨消懸垂文が垂下し、地文は単節RLが縦位に施文される。26は2本沈線による磨消懸垂文が垂下し、地文は単節RLと複節LRLが縦位施文される。27は2本沈線の懸垂文と地文に櫛歯状工具による条線文が施文される。曾利式との折衷形であろうか。28は磨消懸垂文が垂下し、地文は単節RLを縦位施文する。29は2本沈線による磨消懸垂文と1本沈線による蛇行懸垂文が垂下する。地文は単節RLを縦位施文する。第128図1は2本沈線による磨消懸垂文と1本沈線による蛇行懸垂文が垂下し、地文は無節Lを縦位に施文している。2は幅の広い懸垂文が垂下し、区画内を単節RLが縦位に充填施文される。地文縄文の施文は器面が乾き始めた状態で施文されている。EⅢ式後半段階のであろう。3は第127図17と同一個体の可能性がある。胴部に2本沈線の磨消懸垂文が垂下する。懸垂文間は単節RLを縦位に施文されている。

口縁部文様帯を喪失し、波状沈線区画文が施文されるものとして、第127図18、19、第128図4、6、7等がある。段階的にはEⅢ式後半段階に相当し、主体的な存在を示す。18は幅広のナゲられた沈線により波状沈線文が描出され、区画内を地文が充填される。口縁下には沈線が巡り、幅狭な文様帯を作出する。地文は単節RLの横位施文である。19は沈線により「∩」字状文を描き、地文は単節RLが充填施文される。第128図4は幅広の沈線による懸垂文と「∩」字状文が描出され、区画内に「S」字状文が描かれる。地文は単節RLが充填施文される。6は胴部でやや括れ、沈線による「∩」字状文が描かれる。区画内は単節LRが縦位施文される。7は隆起線と幅広沈線による波状文が描かれ地文は単節LRを充填施文される。

波状沈線区画文の系統上に属するものとして第129図6、10、11がある。6は波状口縁を呈し、口縁部無文帯の区画文として1本沈線と刺突が巡る。体部には沈線による曲線的な「W」字状文が描かれる。区画外には単節LRが充填施文される。10は沈線による曲線的な「W」字状文が描かれ、区画内を単節RLが充填施文される。11は体部下半に「W」字状文が施文され、区画内に単節LRが充填施文される。

胴部に渦巻文が施文されるものとしては、第127図14、第128図8～10がある。14は口縁部が内湾する。口



第127 図 グリッド出土遺物(3)



第128図 グリッド出土遺物(4)

縁下に幅広のナデられた沈線が巡り、偏平な隆帯と幅広沈線により渦巻文が描出される。隆帯上には単節RLが横位に充填施文される。第128図8は、2本の隆起線による渦巻文が描かれ、隆起線脇はナデられた沈線が巡る。地文は単節RLが充填施文される。9は隆起線による区画文が描かれ、その脇はナデられた沈線が巡る。区画内は単節LRが充填施文される。10は隆起線とナデられた沈線による曲線文が描かれ、区画内を単節RLが充填施文される。

胴部渦巻文の系統上に属するものとしては第128図5、第129図5、7、13がある。第128図5は口縁に小突起が付され、突起から1本沈線が口縁下へと垂下する。体部は沈線による曲線文が描かれる。地文は単節RLが施文される。第129図5は口縁部に4単位の突起をもち、口縁部はやや内湾する。口縁部は幅狭の無文帯区画として隆起帯が巡り、体部は沈線による曲線文が描出される。区画内に単節LRが充填施文される。7は沈線による曲線文が描かれ、区画内を単節RLが充填施文される。13は曲線文が描かれ、区画内を単節LRが充填施文される。

第127図11は両耳壺であろうか。体部文様帯の上位区画として隆帯が巡り、体部には単節RLを縦位施文される。21も11と同様な形態を呈すると思われ、系統的には波状沈線文系統に属する。肩部に小突起を持つ。体部には「∩」字状文と突起下に「の」字状文が描かれる。地文は単節RLが充填施文されている。

第127図20は口縁部文様帯を喪失し、キャリパー系土器の胴部文様を施文する。口縁下に幅狭の無文帯を有し、体部は2本沈線による磨消懸垂文が垂下する。

第V群土器（第128図21～第129図2）

曾利式土器に比定される土器群を一括する。曾利式系列は5型式に細分され、各時期は数段階の時間軸が設定されている。加曾利E式の系統に属さないものを含む。

21は口縁部が直線的に外反し、口縁部が無文帯の土器である。22は所謂重孤文土器であるが、沈線の施文具は半截竹管を使用していない。23は口縁部が「く」の字状に屈折し、口縁に2本沈線が巡る。口縁部には半截竹管による斜行沈線文が施文される。24は口縁部が外反し、頸部がやや括れる。口縁部は幅広の沈線により斜行沈線文が施文され、括れ部に指頭圧痕がされた隆帯により区画される。25は括れ部に指頭圧痕された隆帯が巡り、胴部は隆帯と沈線が垂下する。

26は隆帯により蕨手状文が描出され、地文は条線が施文される。27は口縁部に隆帯によるS字状の把手が貼付られ、隆帯に沈線が施される。28は胴部破片で蛇行隆帯が垂下し、地文は半截竹管による沈線文が縦位施文される。

29は文様構成から本群に分類した。括れ部に爪形文と沈線文が巡り、胴部は沈線による曲線文が描かれる。地文は羽状縄文が施文され、単節LRとRLを交互に施文する。

30は隆帯による区画文が描かれ、区画内を半截竹管による沈線文が垂下する。31は3本沈線により渦巻文が描かれ、沈線間はナデられている。地文は撚糸Lを縦位に施文されている。32は2本沈線による磨消懸垂文が垂下し、懸垂文間は橢圓状工具による条線文が施文される。

33は1本隆帯による曲線文が描かれ、区画内を半截竹管による沈線が充填される。34は隆帯により縦位区画され、区画内を沈線により綾杉文が施文される。

第129図1は口縁部が内湾し、器面に橢圓状工具による褶曲条線文が垂下する。2は波状条線文が施文される。



第129図 グリッド出土遺物(5)

第Ⅵ群土器

縄文時代後期に比定される土器群である。土器型式により3類に分類した。

第1類(第128図11、第129図8、9、12、14)後期初頭称名寺式土器に比定される土器群を一括する。

第128図11は口縁部が内湾し、器厚はやや薄い。口縁下に断面が三角形を呈する隆線により、幅狭の無文帯を作出し、隆線脇には刺突が巡る。体部は隆線により曲線文が描出され、区画内を単節LRが充填される。加曾利E式系列の土器である。第129図8は波状口縁を呈し、口縁下に深い2本沈線が巡る。体部は2本沈線による曲線文が描かれ、口縁部や区画外に単節RLが充填施文される。9は深い沈線による杵状文が描か

れ、区画内を単節RLが充填施文される。12は沈線による曲線文が描かれ、区画内を単節RLが充填施文される。14は橋状把手を持ち、口縁部は「く」の字状に屈曲する。口縁下を沈線によるJ字文が描かれる。

第2類（第129図15～24、26、27）後期前半堀之内式土器に比定される土器群を一括する。

15は4本沈線が斜位に施文され、施文後に調整が加えられている。16は口縁部が「く」の字状を呈し、口縁に沿って沈線が加えられる。17、18は沈線による曲線文が描かれる。19は沈線による曲線文が施文され、沈線の交点に刺突をもつ貼付文が付される。20は深い沈線により文様が描かれ、施文後に調整が施されている。21は口縁部が「く」の字状を呈し、体部は沈線による曲線文が描かれている。22、23は同一個体で頸部に区画文としての深い沈線が巡り、胴部は曲線文が描出される。堀之内1式に比定されよう。

24は朝顔形を呈する深鉢形土器で、三角形区画文に単節LRを充填施文される。堀之内2式に比定される。

26、27は底部で27は胴部下端で垂直ぎみに立ち上がり、器厚が薄い。堀之内式に属すると思われ、27は2式に比定されよう

第3類（第129図25）後期加曾利B式に比定される土器である。

25は口縁部が強く外反する。口縁部文様帯には斜格子沈線文が施文され、口縁部内面に2本の沈線が巡る。加曾利B2式に比定される。

石 器

本遺跡から出土した石器の総点数は295点で、図示したものは石鏃12点、打製石斧43点、磨製石斧5点、石匙2点、石錘5点、スタンプ形5石器、敲石・磨石・凹石11点、石皿2点である。石器以外には剥片類が多数出土し、特に黒曜石とホルンフェルスの剥片が多い。

石鏃（第130図1～12）

石鏃は、15点出土している。石質は黒曜石が6点、チャート5点、安山岩1点である。形態的には大半が無茎凹基石鏃に属し、(a) 基部に浅い抉り込みを持つもの（1～6）(b) 基部が深く抉り込みを持つもの（7～10）とに分類できる。また、有茎凸基石鏃（11、12）も2点検出されている。

揉錐器（第130図13～15）

揉錐器は3点出土している。13の形態は摘み部と錐部とを入念な調整により作出し、左右対称である。14、15は尖頭状の先端に入念な調整加工が行われている。

石匙（第130図16、17）

石匙は2点出土している。形態的には摘み部が作出されている。17は摘み部に入念な調整加工が加えられていることから、揉錐器とみることもできるのか。この他スクレイパー類の欠損品2点が出土している。

石錘（第130図18～22）

石錘は、5点出土しており、いずれも偏平な礫の一部を打ち欠いている。18、19は長軸の上下両端を打ち欠き、20は短軸の両側縁中央部を打ち欠いている。21、22は円形に近い礫を使用し、上下両端と両側縁をそれぞれ打ち欠いている。

打製石斧（第131～134図）

打製石斧は、76点出土しており、そのうち完形品29点である。石質はホルンフェルス27点が最も多く、次いで砂岩14点、頁岩1点、天文石緑泥片岩1点である。形態は6形態に分類される。

第1類 側縁が内曲し丸刃を呈するもの（第131図1～第132図4）。

第2類 両側縁が刃部にむけ開き、頭部幅と刃部幅に差が大きいもの。従来「撥形」と言われているもの（第132図5～第133図6）。

第3類 両側縁が平行を呈するもので「短冊形」と言われているもの（第133図7～第134図4）。

第4類 頭部幅と刃部幅に差がなく、側縁が直線若しくは外曲するもので「柳葉形」を呈するもの（第134図5～6）。

第5類 いわゆる「分銅形」と言われるもので、側縁の内曲が深いもの（第134図7～9）。

第6類 頭部幅と刃部幅に差があり、側縁が外曲するもの（第134図10）。

分類において両者に跨がり、分類が困難なものもある。また、第135図2は打痕を有する礫であるが打製石斧の未製品であろうか。

磨製石斧（第134図11～135図1）

磨製石斧は、5点出土しており、石質は緑色岩2点、泥岩1点、ホルンフェルス1点、頁岩1点である。11、12は局部磨製石斧であり、研磨前の剥離痕を多く残す。形態は、13が乳棒状磨製石斧の基部破片であり、12、14、第135図1は定角式磨製石斧である。1は大形品で側縁部が張り、刃部は丸刃である。

スタンプ形石器（第135図2～第136図1）

スタンプ形石器は、5点出土しており、偏平又は棒状の礫を素材としており、折られた端部には敲打痕が観察される。石質は砂岩4点、緑色岩1点である。

第135図3～6は側縁に調整加工が施されないものであり、平坦な打割面に敲打痕が顕著にみられる。また、4は擦られたとも思える痕跡が観察された。第136図1は側縁に調整加工が行われ、打割面とともに側縁にも敲打痕が観察された。

敲石・磨石・凹石（第136図2～第137図3）

図示したのは11点であるが、欠損品や礫の一部に敲打痕が認められるものを含めると40点を越える。石質は緑色岩6点、砂岩2点、絹雲母安山岩2点、角閃石安山岩1点である。

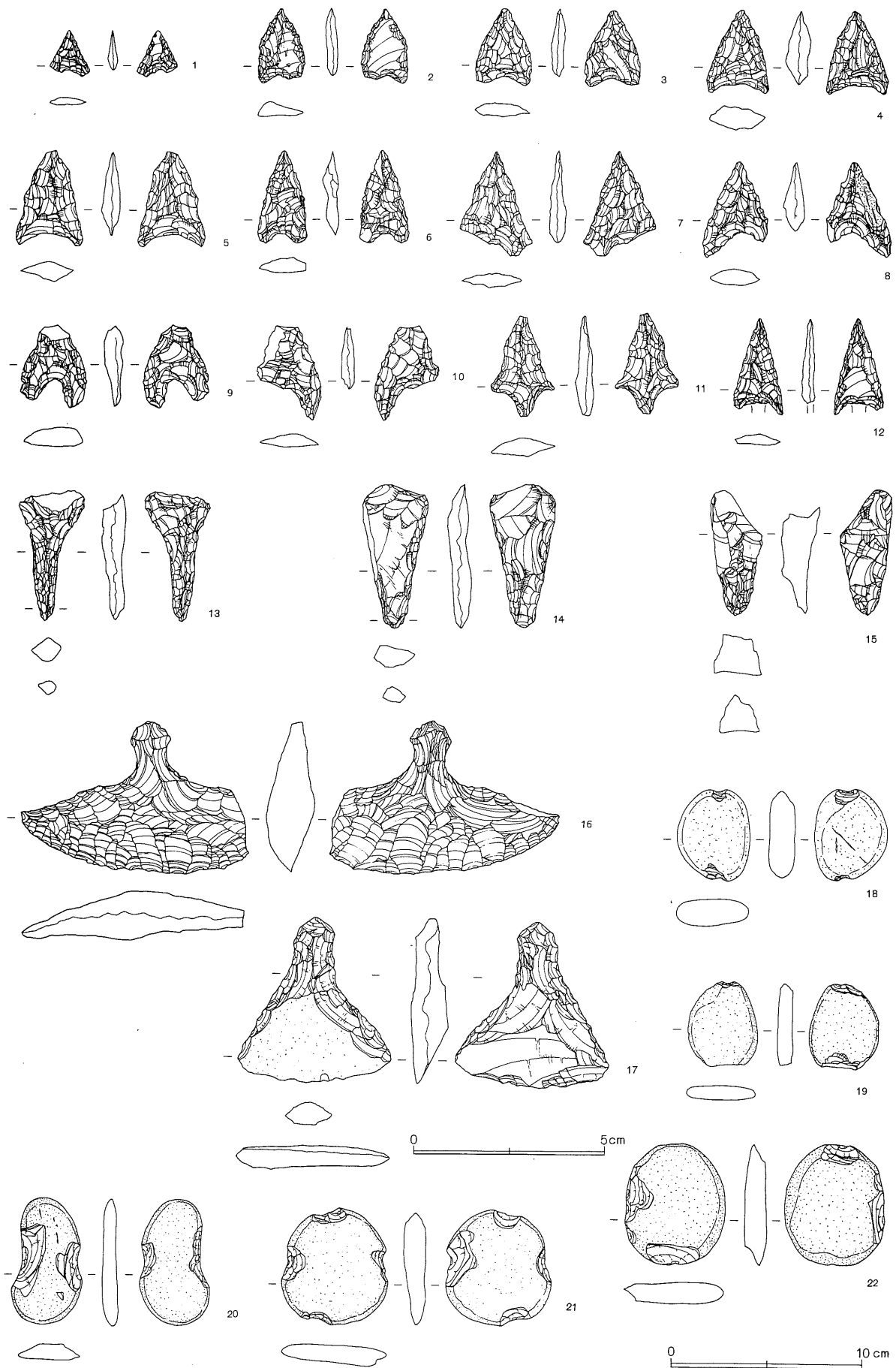
敲石・磨石・凹石は、用途により石器を使い分ける場合よりも、1点の石器で複合的な用途として用いられることが多く、分類に際してもその使用痕により分けた。

磨石（第136図2、第137図6） 2は表裏面と底面の全面に擦痕が認められる。第137図6は軽石で底面に擦れた痕跡が認められる。

敲石・磨石（第136図3～9、第137図1） 3～5は表裏面に擦痕が認められ、縁辺部の一部に敲打痕をもつ。6～9、第137図1には表裏面に擦痕が認められ、表裏面の中央部に敲打痕が観察される。6には明瞭な凹みが認められる。

凹石（第137図2、3） 表裏面に深い凹み有し、3は多くの凹部が観察される。

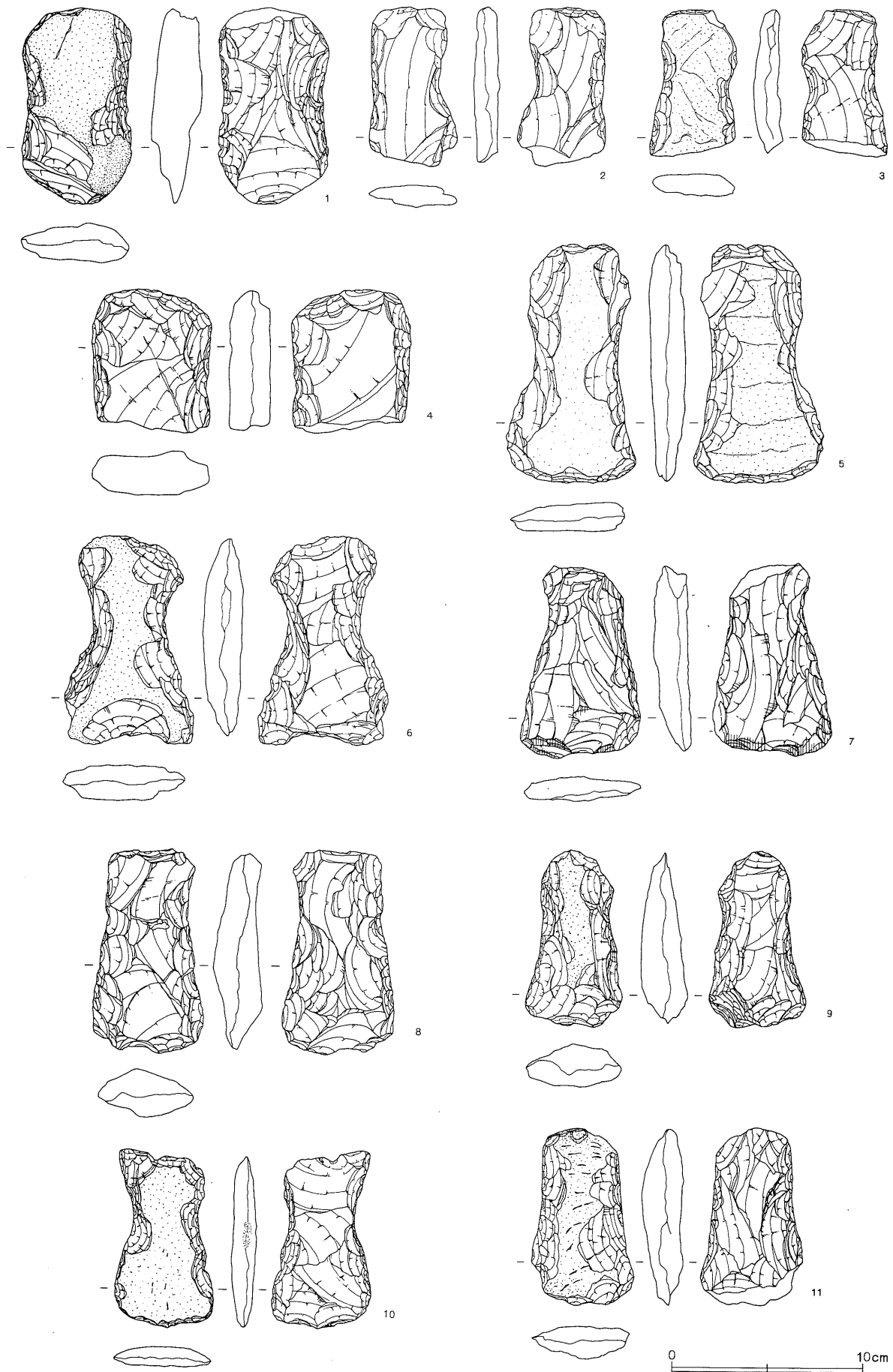
石皿・凹石（第137図4、5） 表面は石皿と使用され、裏面は多くの凹部が認められる。4は石皿縁辺部にも凹部を有する。



第130図 グリッド出土遺物(6)



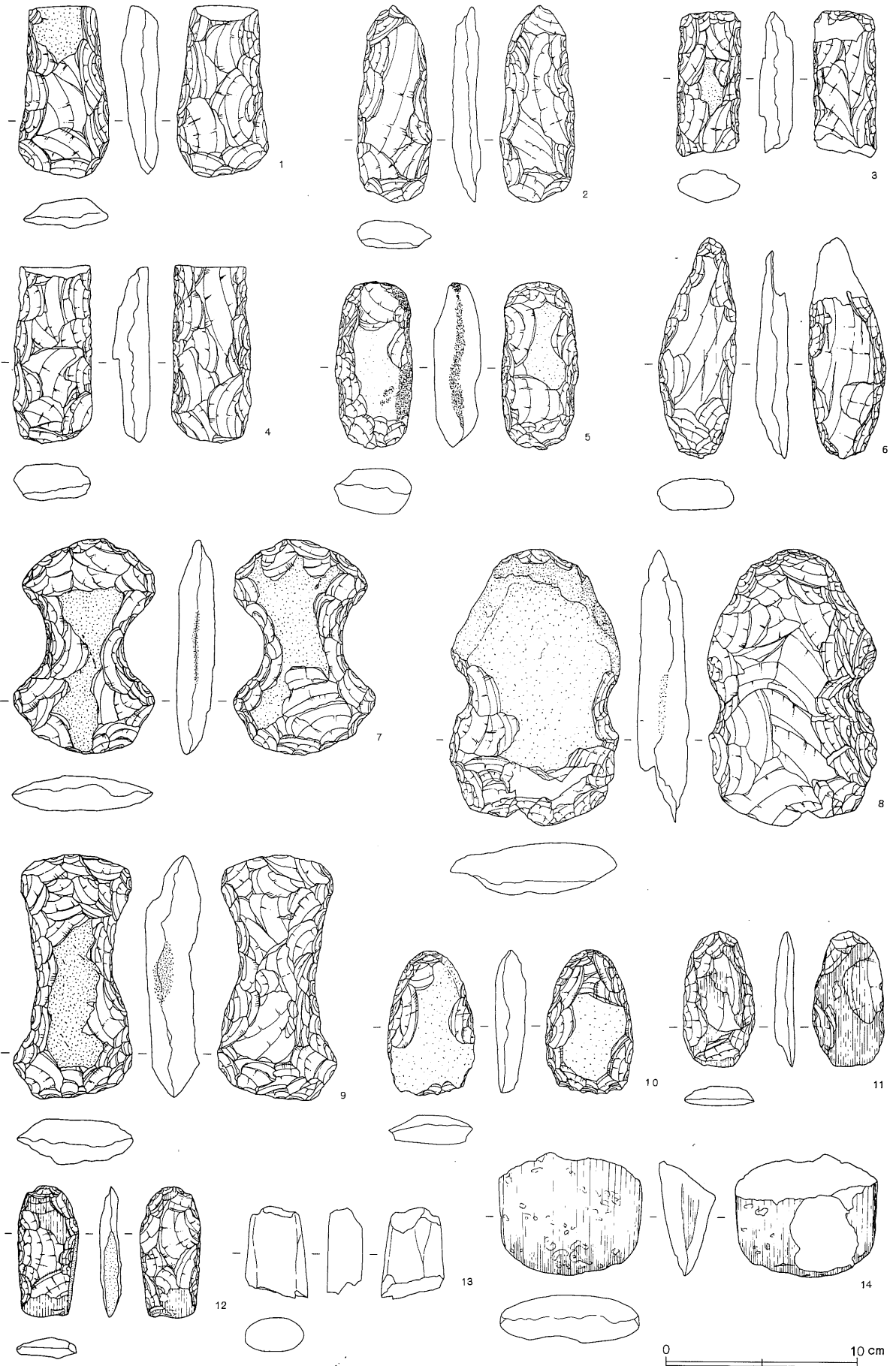
第131 図 グリッド出土遺物(7)



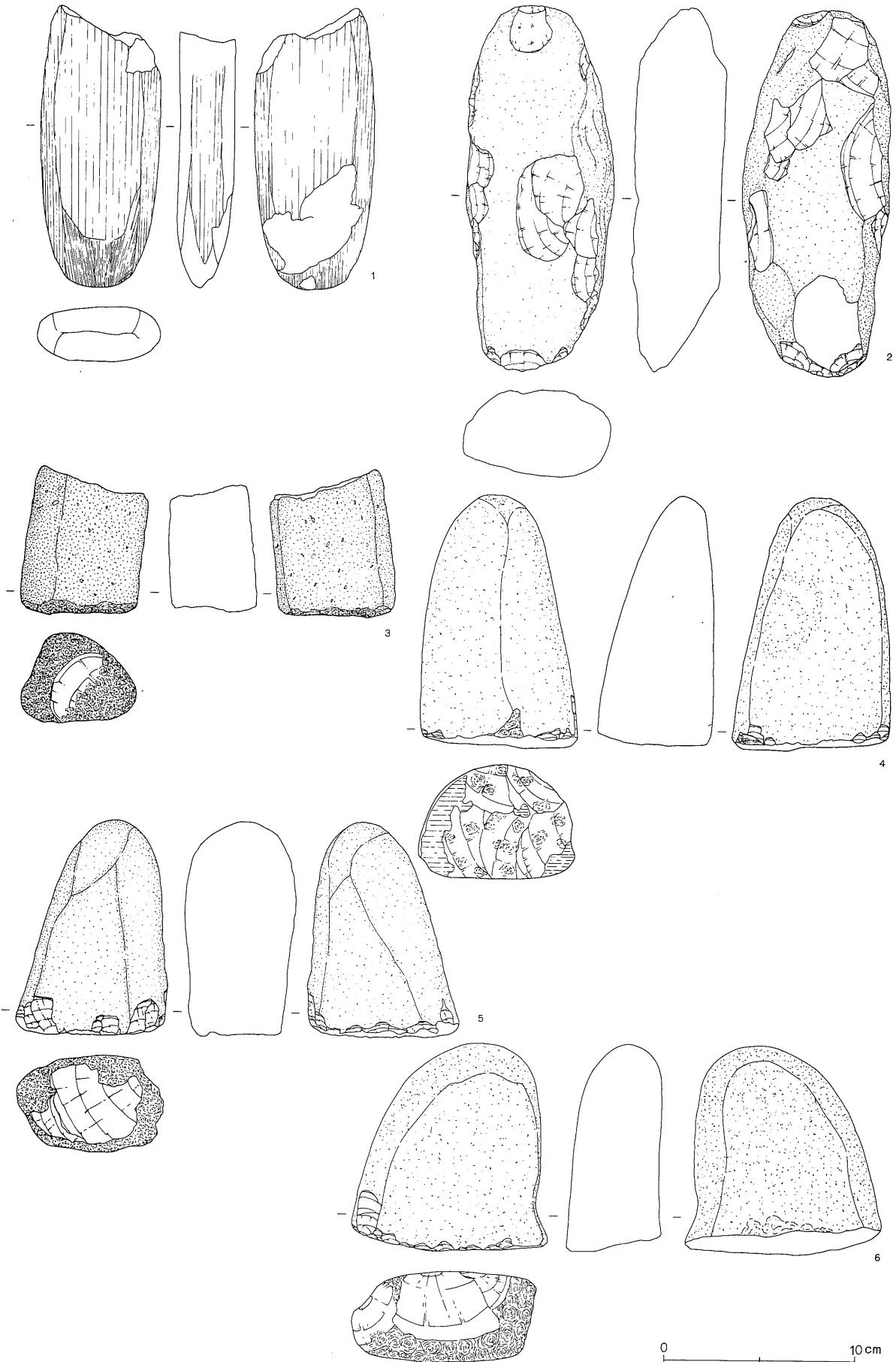
第132図 グリッド出土遺物(8)



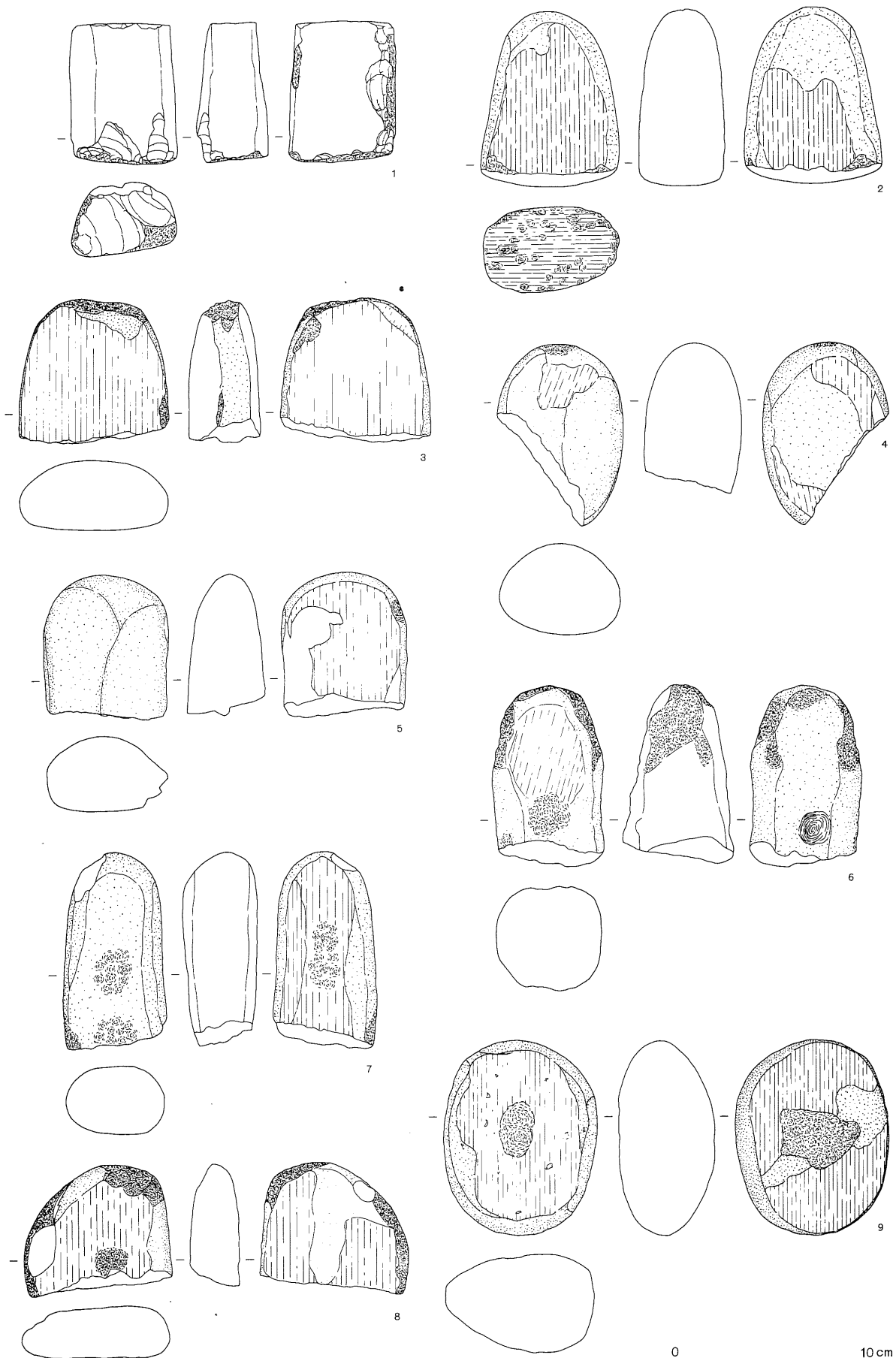
第133図 グリッド出土遺物(9)



第134図 グリッド出土遺物(10)



第135 図 グリッド出土遺物(11)



第136図 グリッド出土遺物(12)



第137 図 グリッド出土遺物(13)

第6表 石器計測表

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
130-1	第1号墳	石 鏃	1.0	1.0	0.3	0.2	チャート	
2	A-14	石 鏃	1.7	1.2	0.3	0.5	黒曜石	
3	埋没谷包含層	石 鏃	1.7	1.4	0.3	0.5	チャート	
4	E-15	石 鏃	2.0	1.4	0.5	1	黒曜石	
5	第1号墳	石 鏃	2.2	1.4	0.4	2	チャート	
6	表 採	石 鏃	2.2	1.1	0.4	1	黒曜石	
7	D-15	石 鏃	2.4	1.6	0.4	2	チャート	
8	表 採	石 鏃	1.8	1.5	0.5	2	チャート	
9	K-11	石 鏃	1.4	1.6	0.4	1	黒曜石	
10	D-12	石 鏃	1.6	1.6	0.5	1	黒曜石	
11	表 採	石 鏃	2.6	1.7	0.4	1	安山岩	
12	埋没谷包含層	石 鏃	2.5	1.3	0.3	1	黒曜石	
13	表 採	石 錐	3.3	1.5	0.5	3	チャート	
14	H-7	石 錐	3.8	1.6	0.5	4	チャート	
15	第1号墳	石 錐	3.2	0.8	0.9	4	黒曜石	
16	表 採	石 匙	3.9	5.8	1.3	22	チャート	
17	表 採	石 匙	4.3	4.1	0.9	11	ホルンフェルス	
18	M-16	石 錘	4.3	3.6	0.8	2	砂 岩	
19	P-19	石 錘	4.5	3.8	1.3	39	砂 岩	
20	埋没谷包含層	石 錘	6.6	3.7	0.8	40	砂 岩	
21	A-13	石 錘	6.0	5.5	1.1	65	砂 岩	
22	埋没谷包含層	石 錘	6.3	5.1	1.1	70	砂 岩	
131-1	第1号墳	打製石斧	14.2	8.0	3.7	561	砂 岩	
-2	第9号溝	打製石斧	7.7	8.2	2.2	168	砂 岩	
-3	第9号溝	打製石斧	7.9	5.5	1.9	123	砂 岩	
-4	第1号井戸跡	打製石斧	10.9	5.8	1.8	144	砂 岩	
-5	A-12	打製石斧	10.1	5.0	1.9	110	砂 岩	
-6	A-12	打製石斧	9.3	5.1	2.1	110	ホルンフェルス	
-7	E-15	打製石斧	10.4	5.2	1.5	102	ホルンフェルス	
-8	第1号井戸跡	打製石斧	9.5	5.5	1.7	100	ホルンフェルス	
-9	第1号墳	打製石斧	8.2	4.9	1.3	60	ホルンフェルス	
-10	J-9	打製石斧	10.4	6.9	2.2	215	ホルンフェルス	
-11	C-14	打製石斧	11.0	5.0	1.4	102	砂 岩	
132-1	A-12	打製石斧	10.3	5.5	2.5	182	ホルンフェルス	
-2	第6号溝	打製石斧	8.0	4.6	1.4	71	ホルンフェルス	
-3	第6号溝	打製石斧	7.5	4.3	1.4	70	ホルンフェルス	
-4	J-9	打製石斧	7.3	6.1	2.0	172	ホルンフェルス	
-5	第2号溝	打製石斧	12.5	6.5	1.8	193	砂 岩	
-6	溝	打製石斧	10.7	6.4	2.0	180	ホルンフェルス	
-7	第3号縦穴	打製石斧	9.6	6.1	1.8	190	頁 岩	
-8	第1号墳	打製石斧	10.3	5.7	2.4	179	ホルンフェルス	
-9	AZ-12	打製石斧	9.1	5.0	2.3	120	ホルンフェルス	
-10	埋没谷包含層	打製石斧	9.0	5.1	1.2	80	砂 岩	
-11	B-13	打製石斧	9.3	5.2	2.1	121	ホルンフェルス	
133-1	B-12	打製石斧	12.2	5.5	2.0	150	ホルンフェルス	
-2	第1号墳	打製石斧	13.1	6.2	3.7	121	砂 岩	
-3	表 採	打製石斧	9.9	7.0	1.9	171	ホルンフェルス	
-4	第1号墳	打製石斧	8.9	5.5	1.9	120	ホルンフェルス	
-5	第3号縦穴	打製石斧	7.3	4.0	1.4	60	ホルンフェルス	
-6	表 採	打製石斧	9.9	5.4	2.0	120	ホルンフェルス	
-7	表 採	打製石斧	14.0	5.3	1.8	185	ホルンフェルス	
-8	埋没谷包含層	打製石斧	11.5	4.2	2.0	120	砂 岩	
-10	N-16	打製石斧	10.6	4.2	1.5	70	砂 岩	
134-1	J-9	打製石斧	8.8	4.5	1.9	105	ホルンフェルス	
-2	A-12	打製石斧	10.3	3.8	1.4	76	ホルンフェルス	
-3	埋没谷包含層	打製石斧	7.4	3.2	1.2	70	ホルンフェルス	
-4	埋没谷包含層	打製石斧	9.1	4.1	1.9	100	ホルンフェルス	
-5	埋没谷包含層	打製石斧	8.8	4.0	2.3	122	砂 岩	
-6	第1号溝	打製石斧	11.6	4.0	1.7	103	緑泥片岩	
-7	第1号墳	打製石斧	11.2	7.4	1.9	201	砂 岩	

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
134-8	E-9	打製石斧	14.3	8.8	2.7	420	ホルンフェルス	
-9	第1号墳	打製石斧	12.7	6.1	2.8	260	礫質砂岩	
-10	表採	打製石斧	7.5	4.5	1.5	82	ホルンフェルス	
-11	G-13	局部磨製石斧	7.0	3.7	1.0	41	ホルンフェルス	
-12	表採	局部磨製石斧	6.9	3.1	1.0	35	頁岩	
-13	O-16	磨製石斧	4.5	3.0	1.8	40	泥岩	
-14	A-12	磨製石斧	6.0	7.2	2.7	190	緑石岩	
135-1	AZ-12	磨製石斧	13.5	6.2	2.9	465	緑石岩	
-2	第1号溝	打製石斧未成品	19.1	7.7	4.6	1140	ホルンフェルス	
-3	第1号墳	スタンプ状石器	7.5	6.2	4.4	348	緑色岩	
-4	N-16	スタンプ状石器	13.0	7.6	5.9	810	砂岩	
-5	E-10	スタンプ状石器	11.2	7.8	5.7	686	砂岩	
-6	第1号墳	スタンプ状石器	10.8	9.7	4.4	711	砂岩	
136-1	表採	スタンプ状石器	7.3	5.5	3.7	301	砂岩	
-2	表採	磨石	9.2	7.2	4.4	478	緑色岩	
-3	C-13	敲石・磨石	7.4	7.8	3.6	353	緑色岩	
-4	第1号井戸跡	敲石・磨石	9.3	6.5	5.0	398	緑色岩	
-5	H-13	敲石・磨石	7.2	6.5	4.0	285	砂岩	
-6	K-11	敲石・磨石	9.3	5.8	5.6	420	緑色岩	
-7	C-14	敲石・磨石	10.2	5.2	3.9	273	砂岩	
-8	第2号溝	敲石・磨石	6.4	7.7	2.6	218	緑色岩	
-9	第1号墳	敲石・磨石	10.2	8.0	5.0	559	緑色岩	
137-1	A-12	敲石・磨石	10.0	8.0	3.8	492	角閃石安山岩	
-2	B-13	凹石	15.6	8.2	3.6	745	絹雲母片岩	
-3	I-12	凹石	21.6	18.4	3.6	2035	絹雲母片岩	
-4	H-10	石皿・凹石	12.1	9.2	1.9	303	緑泥片岩	
-5	D-10	石皿・凹石	13.9	11.0	3.0	683	赤色片岩	
-6	第1号墳	磨石	4.9	2.7	2.2	11	角閃石質軽石	

4. 古墳時代の遺構と出土遺物

(1) 古墳跡

第1号墳 (第138~141図)

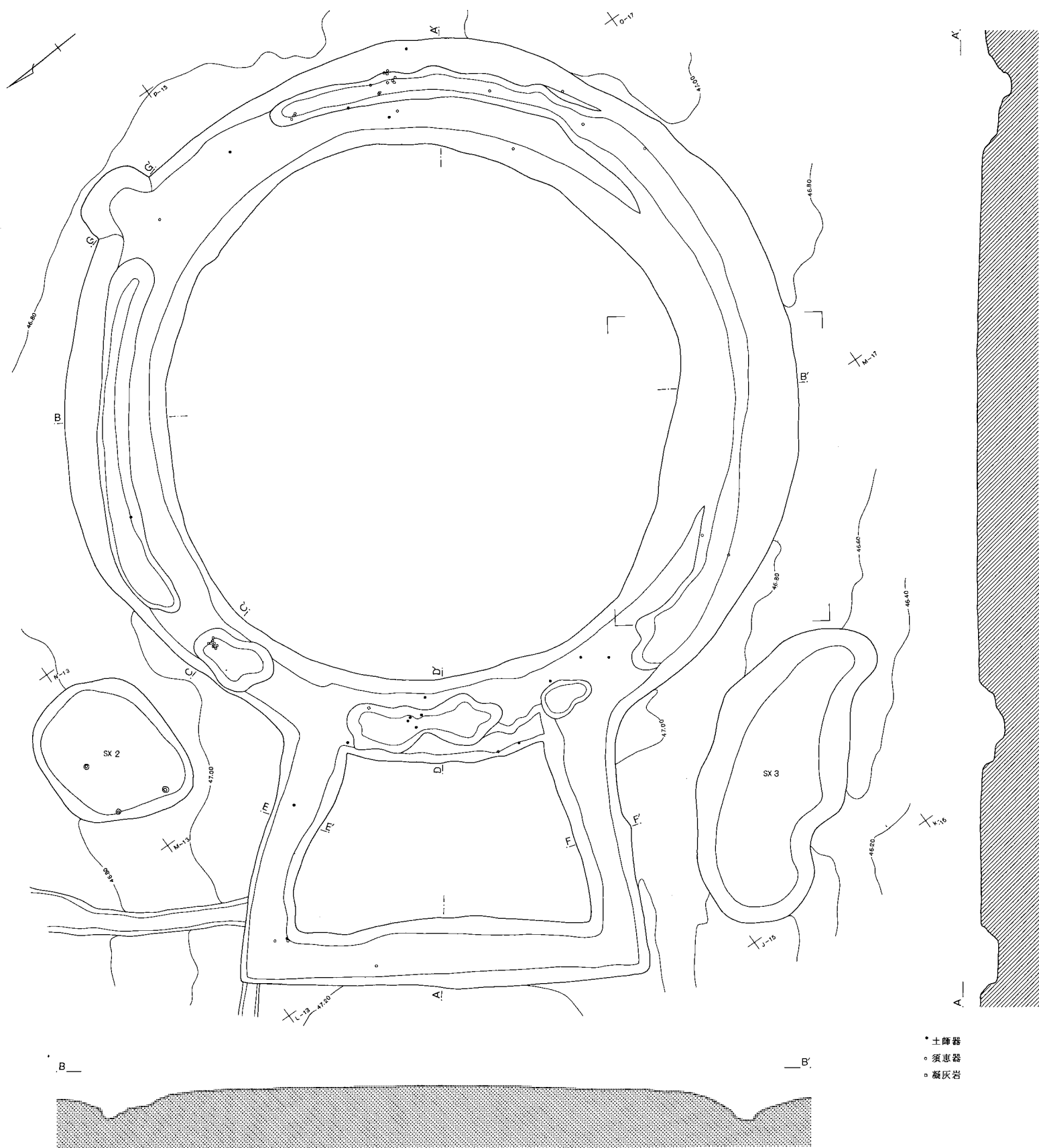
K~0-12~16 Grid に位置する。東山遺跡Ⅰ、Ⅱ区は、南東方向へのびる舌状台地上に所在し、その地形は台地中央部で更に北東と南東の二方向に分かれる。本古墳はその分岐する標高47.00~47.40mの台地平坦面に占地する。古墳の形態は帆立貝式の前方後円墳であるが、墳丘や石室は既に削平されており検出できなかった。ただ地元ではこの場所に古墳が存在していたことは伝承として残っており、畑の名称としても「大塚」と呼ばれていた。

古墳の規模は、全長45.44m、後円部周溝内径25.62m、外径34.88m、前方部前幅19.56m、括れ部からの前方部長さ12.60mである。主軸方位はN-125°-Eを示している。後円部の平面形態は整円形を呈するが、南側内径ラインがやや直線的である。周溝は一定の幅で巡り、周溝幅4.08~6.26m、深さ0.72~1.38mを測る。断面形態は南側でV字形、それ以外は逆台形を呈するが、東側や北側では周溝底面を更に一段深く掘り込まれた箇所もある。周溝北側には幅3.72m、奥行き1.64m程掘り込まれた小規模な張り出し部が検出されている。また、北側括れ部寄りには所謂溝内土壌が検出され、形態は不整形で規模が長軸4.0m、短軸2.64m、深さ64cmを測る。覆土は黒色系の沈殿層の堆積が観察された。覆土中からは土師器甕の小片が出土している。後円部周溝の覆土は黒色土を基調とした自然堆積による埋没である。

括れ部における周溝は幅3.96m、深さ80cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、後円部外径にあたる壁は内径壁に比べ急な角度で立ち上がる。覆土は多量のロームブロックと少量の灰白色粘土ブロックを含む混合土で明らかに人為的な埋め戻しによる堆積状態が観察された。横断面では前方部方向から埋め戻されはじめ、後円部側へと移る。図示はしていないが縦断面では両方の括れ部側より埋め戻されるが、南側括れ部からの土量が多いようである。埋め戻しに際しては版築などにより踏み固められた状況は観察されなかったものの覆土中層において一旦均した様な状況が窺えた。覆土上層は南側括れ部方向より埋め戻されている。括れ部周溝の底面には溝内土壌が検出され、形態は不整形を呈し、規模は長軸7.36m、短軸2.48m、深さ66cmで灰白色粘土層を掘り込んでいる。覆土は下層に黒色系の沈殿層が形成され、また、墳丘部からの自然堆積による三角堆積が観察された。出土遺物は、土師器甕の小片が数点出土したに過ぎない。

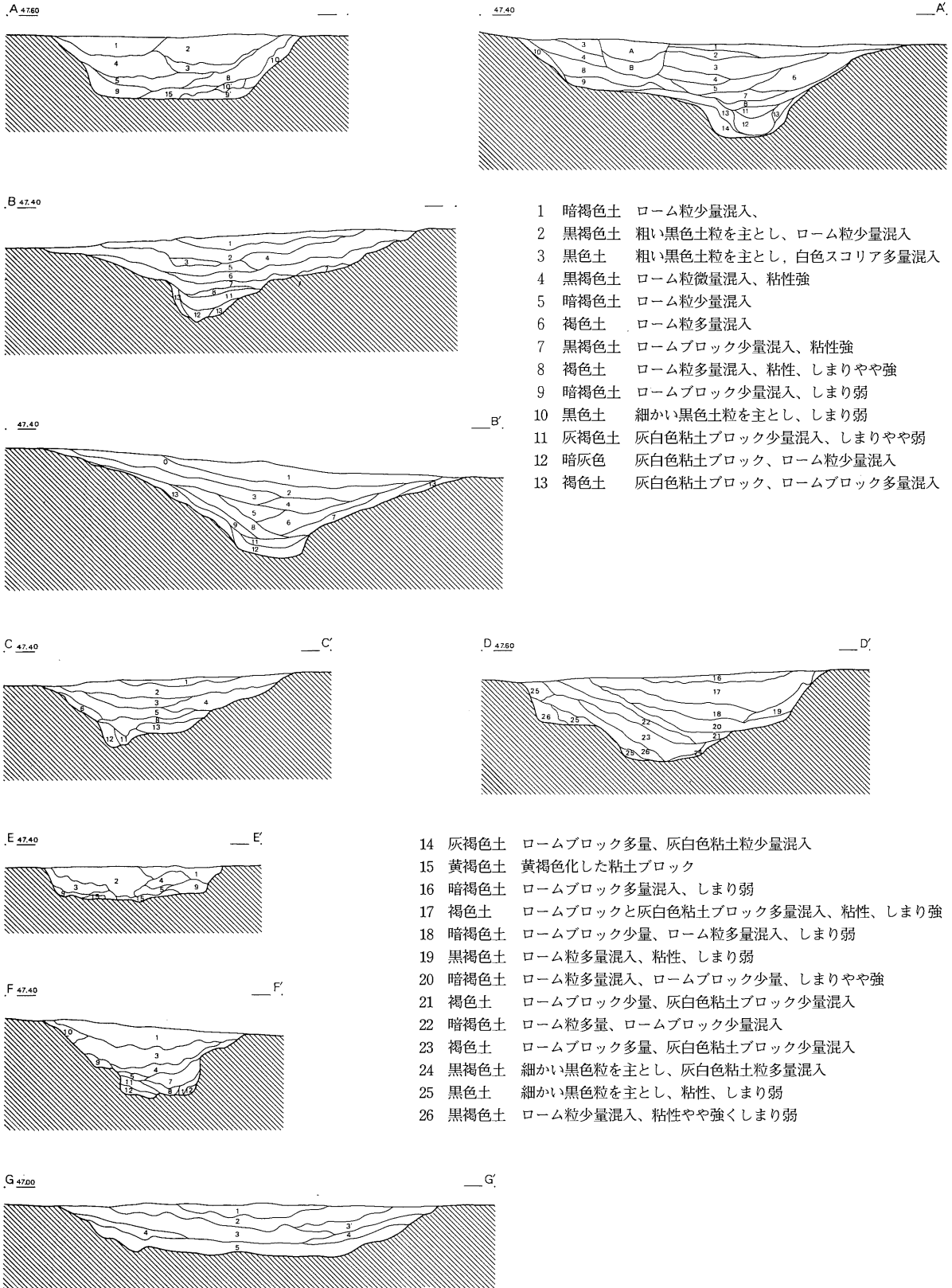
前方部の規模は、前端幅14.04mで後円部に向けすぼまり、周溝連結部で幅9.32mとなる。前方部の長さは7.44mを測る。周溝は幅2.4~3.36m、深さ0.34~1.13mで形態は左右対称であるが、北側周溝がやや浅い。断面形は逆台形を呈し、底面は北側から西側にかけて平坦であり、南側はやや凹凸を呈している。覆土は後円部と同様に黒色土を基調とした自然堆積による埋没である。

古墳からの出土遺物は、フラスコ形長頸壺、甕、鉄製品4点、ガラス小玉2点、9世紀代の須恵器坏類5点が出土し、これらは全て周溝内からの出土である。特にフラスコ形長頸壺や鉄製品(第141図4)、ガラス小玉2点は後円部南側周溝内の石材集中箇所において石材とともに出土している。その石材集中箇所からは多量の凝灰岩や緑泥片岩、扁平礫が覆土下層より検出され、石材からみて石室に使用されたものが、周溝内へ廃棄又は流れ込んだものと思われる。出土量としては加工が施された凝灰岩が何点かみられるが個体数は極めて少なく、多くは残片として出土している。また、緑泥片岩も薄く破碎している。扁平礫は石室棺床面に敷きつめられた礫であろうが量としては多いとは言えない。このように石材集中箇所からは石室に使用された石材とともに副葬されたであろう遺物も出土していることから、この遺物群は石室の破壊行為の際にその一部の石材と副葬品を周溝内へ廃棄されたことによるものと考えられる。

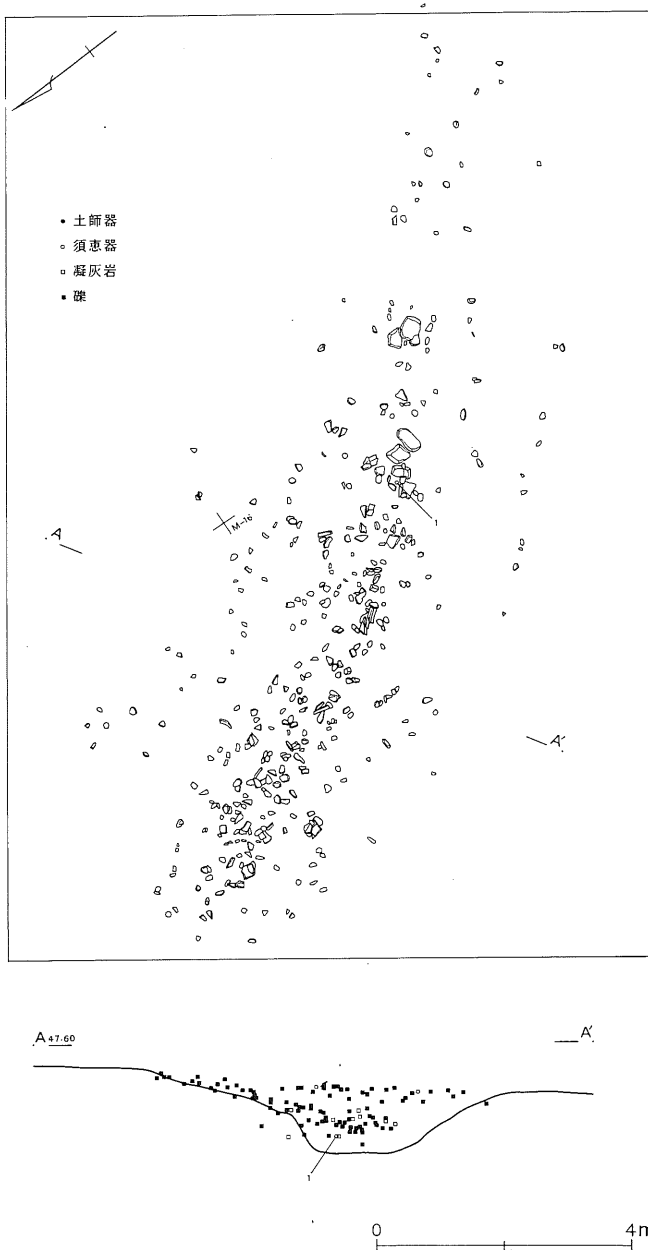


第138图 第1号墳 (L=48.20m)

0 8m



第139図 第1号墳周溝断面図

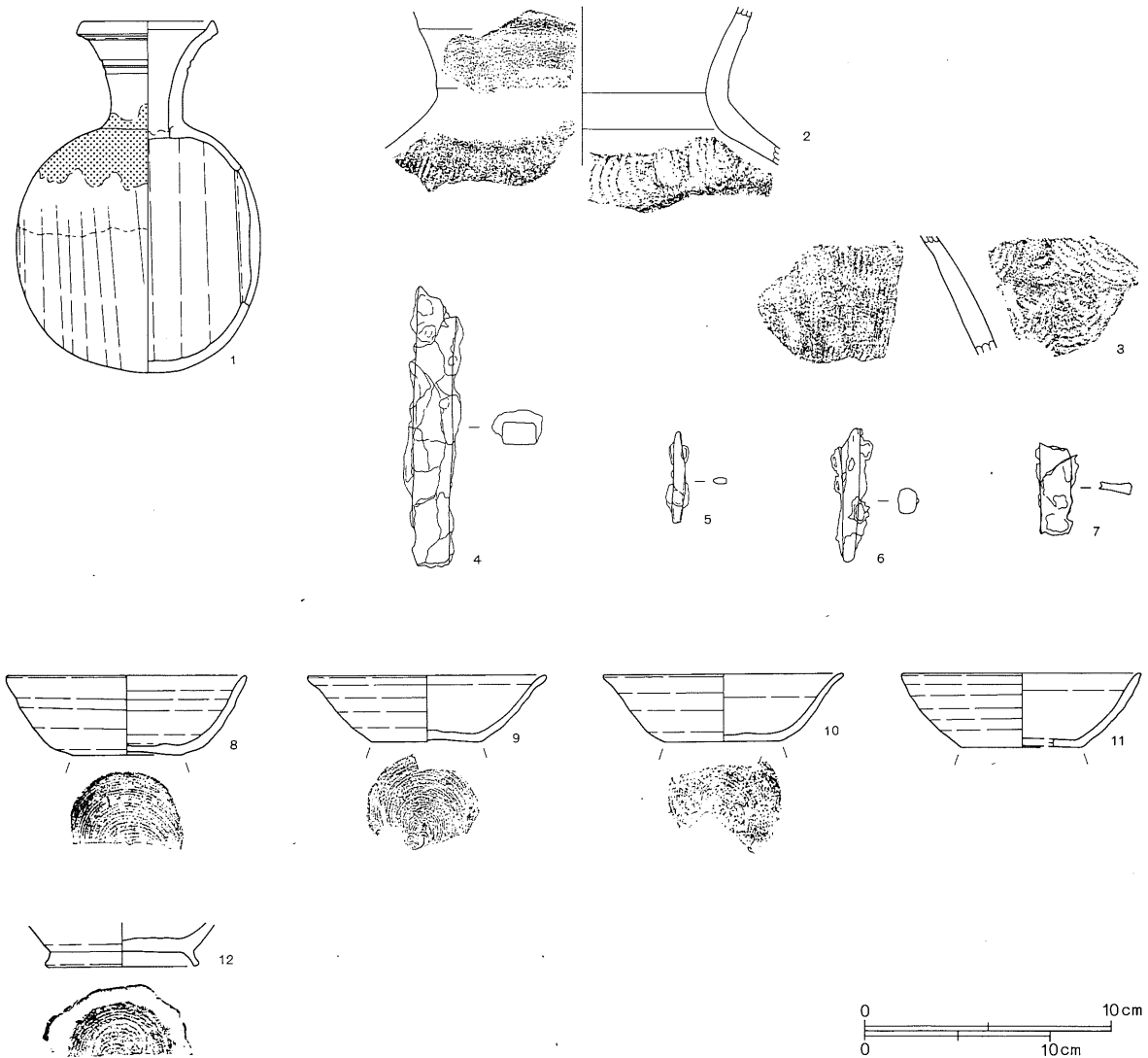


第140図 第1号墳遺物分布図

以上のように本古墳は、帆立貝式の前方後円墳の形態をとるが、築造当初は、後円部周溝が全周することから円墳として築造されるが、その後、間もなく何かの理由により墳形の変更がなされ、前方部を築成することになったのであろうと考えられ、その築造時期はフラスコ形長頸壺から7世紀初頭から前半期と考えられる。また、隣接する第3号竪穴状遺構については、竪穴状遺構の底面より7世紀第2四半期に比定される遺物が出土していることから、本古墳と併存したものであると判断される。但しこの竪穴状遺構との関連については不明な点もあるが、気がついた点を述べておきたい。先ず古墳との位置関係であるが、竪穴状遺構は想定される古墳石室の開開口部にあたる南側に位置している。次に形態は周溝の形状を意識し距離においても一定の間隔を保った状態を示している。そして括れ部周溝の埋め戻し時には竪穴状遺構が位置する南側括れ部より埋め戻しが主に行われており、その土量は竪穴状遺構の掘削土量で賄いきれるだけの規模を有している。このようなことから竪穴状遺構は前方部築造に際して掘削された遺構であるのではないかと推測される。

第1号墳出土遺物 (第141図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	フラスコ形 長頸壺 須恵器	口径 7.0 胴径 13.2 器高 19.0	やや細身の頸部から口縁部下半が直立ぎみで立ち上がり、口縁部上半は外反する。口唇部はつまみ出され直立する。口縁下と口縁部中位の2箇所に2本沈線が巡る。胴部は球形を呈する。 手法は胴下半をロクロ成形するが器厚はやや厚い。上半は薄く仕上げられ絞り込む。天井部の開口部が小さくなった時点で粘土版により蓋するように貼り付ける。胴部中位に穴を開け、別にロクロ成形された口縁部を内部へ嵌入する。胴部下半篋ケズリの後、胴部全面ヨコナデ底部に×のヘラ記号がある。湖西産。	B C E F・暗灰色 ・A	95%



第141 図 第 1 号墳出土遺物

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
2	壺 須恵器	頸部 15.6	口縁部へ直線的に立ち上がり、頸部はやや肥厚する。肩部へは緩やかに移行する。口縁部には浅い沈線と幅 1 cm 程の櫛描波状文が施される。肩部外面は平行叩き目で内面は同心円当具痕が明瞭。同図 3 は同一個体の可能性あり。在地産。	B D F ・黄褐色・ B	10%
8	坏 須恵器	口径 (12.9) 器高 4.3 底径 5.8	体部は直線的に立ち上がり、口唇部で短く外反する。底部は回転糸切り離し未調整。巻き上げ状痕あり。	A B D ・褐色/灰 白色・A	30%
9	坏 須恵器	口径 (12.8) 器高 4.1 底径 5.7	体部は外傾しながら立ち上がり、口唇部で強く外反する。端部はやや丸くおさめる。内外面にナデ調整。底部は回転糸切り離し未調整。	A B F ・灰白色・ A	30%
10	坏 須恵器	口径 12.8 器高 3.6 底径 5.9	体部は外傾しながら立ち上がり、口唇部で強く外反する。端部はやや丸くおさめる。内外面にナデ調整。底部は回転糸切り離し未調整。末野産。	B D E F ・青灰色 ・A	50%

番号	器種	法量	形態・手法の特徴		胎土・色調・焼成	残存率
11	坏 須恵器	口径 12.8 器高 4.0 底径 5.5	体部は内湾しながら立ち上がり。口唇端部は丸くおさめる。底部は回転糸切り離し未調整。		A B F・暗青灰白 ・A	20%
12	坏 須恵器	底径 8.0 高台部 0.6	体部は内湾しながら立ち上がるのか。内外面にナデ調整。底部は回転糸切り離し未調整。		B D E F・灰色 ・B	10%
4	鉄 鍬?	残長 11.5cm。	最大幅 1.6cm。	後円部周溝—石材集中区		
5	鉄 鍬	残長 3.7cm。	最大幅 0.5cm。	後円部周溝覆土		
6	鉄 鍬	残長 5.5cm。	最大幅 0.8cm。	前方部周溝覆土		
7	刀 子	残長 3.8cm。	最大幅 1.2cm。	後円部周溝—石材集中区		

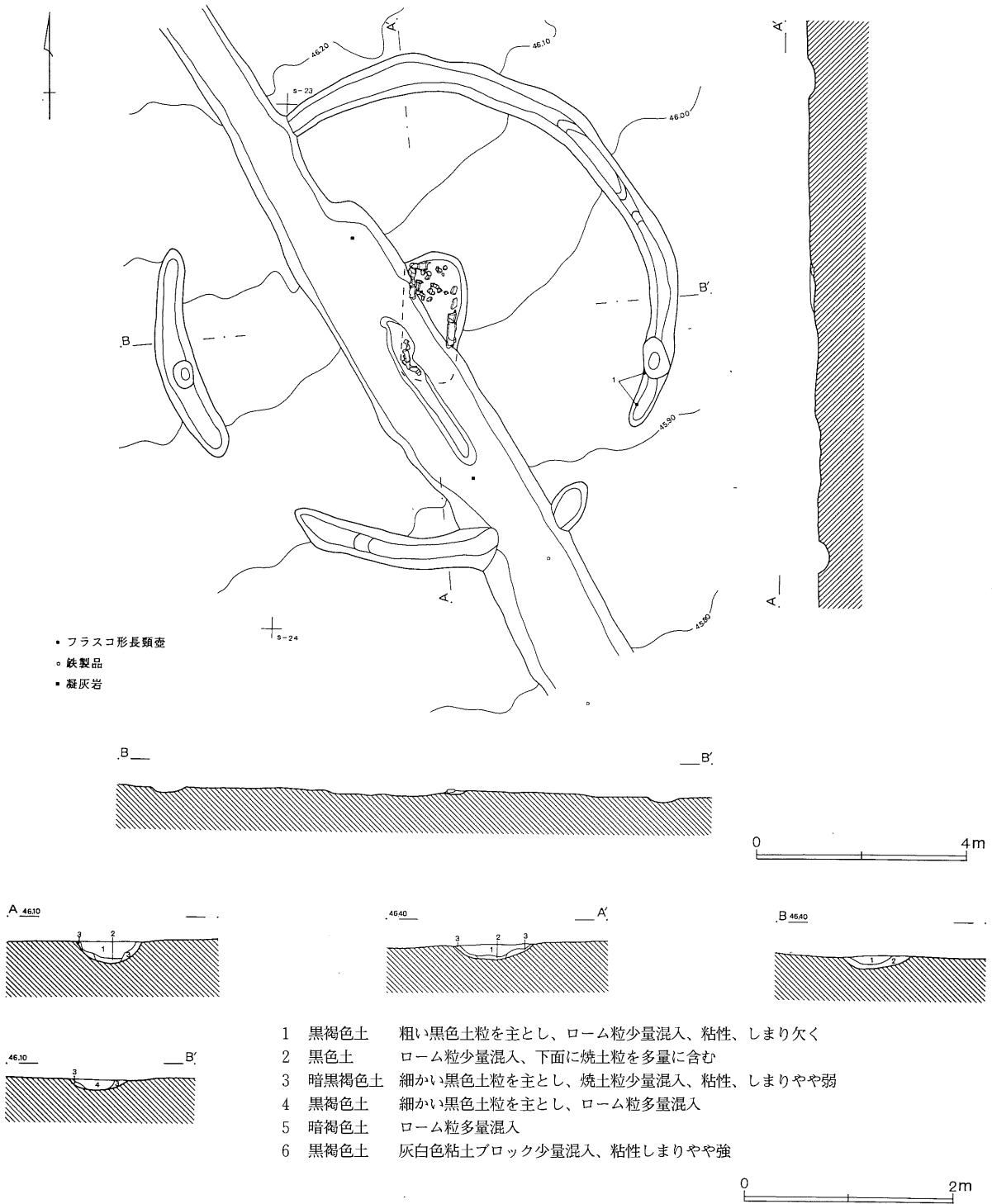
第2号墳（第142～144図）

R、S-22、23 Grid に位置する。南東方向へのびる台地の舌状部中央平坦面に占地し、標高は46.00m前後を測る。同じ台地の中央部に占地する第1号墳からは東へ約77m離れている。規模は周溝内径8.53m、外径9.84mで規模の小さい円墳である。墳丘は耕作等により削平され、更に本古墳を縦断する近世以降の溝によって主体部と周溝の一部が壊されている。

主体部は北西隅と東壁の根石が残るだけであり、他は溝などにより抜き取られていた。残存部の状態から主体部は凝灰岩質の切石により構築され、形態は長方形を呈し、箱式石棺や礫槨墓等にみられる竪穴系の主体部であろうと考えられる。規模は推定で全長2.17m、幅0.97m、深さ8cmを測る。主軸方位はN-2°-Eを指している。この主体部の形態については、北西隅に残存した壁が直角に組み合わされていることから箱型を呈していたものと知ることができる。また、規模については、比較的遺存状態の良い東側側壁の用石が長さ50cm、幅16cm、厚さ7cmを測り、この用石のサイズを基準とすれば主体部の長軸規模は用石4個分と想定でき、短辺にあたる南北壁は2個分の数値を示している。棺床面では拳大の礫が数点検出されているが抜き取られており、果して敷きつめられていたかどうかは疑問が持たれる。主体部内部からの出土遺物はみられなかった。掘り方は主体部形態と同様に長方形を呈し、規模は長軸2.50m、短軸1.30mと推定される。裏ごめは褐色土を充填しているが、特に粘土や敲しめた状況は観察されなかった。

周溝は2箇所ブリッジをもつが全周し、整形円形を呈している。周溝外形面の立ち上がりは内径面に比べ緩やかである。周溝の幅0.55～0.77m、深さは10～26cmで底面はやや丸みをもつ。両周溝内より2基のピットが検出され、東側は周溝底面より深さ8cmと浅く、西側は27cmと深い。この両ピットは覆土の観察から古墳に伴うと思われる。遺物は少なく周溝や近世以降の溝からフラスコ形長頸壺1点、鉄鍬2点が出土している。

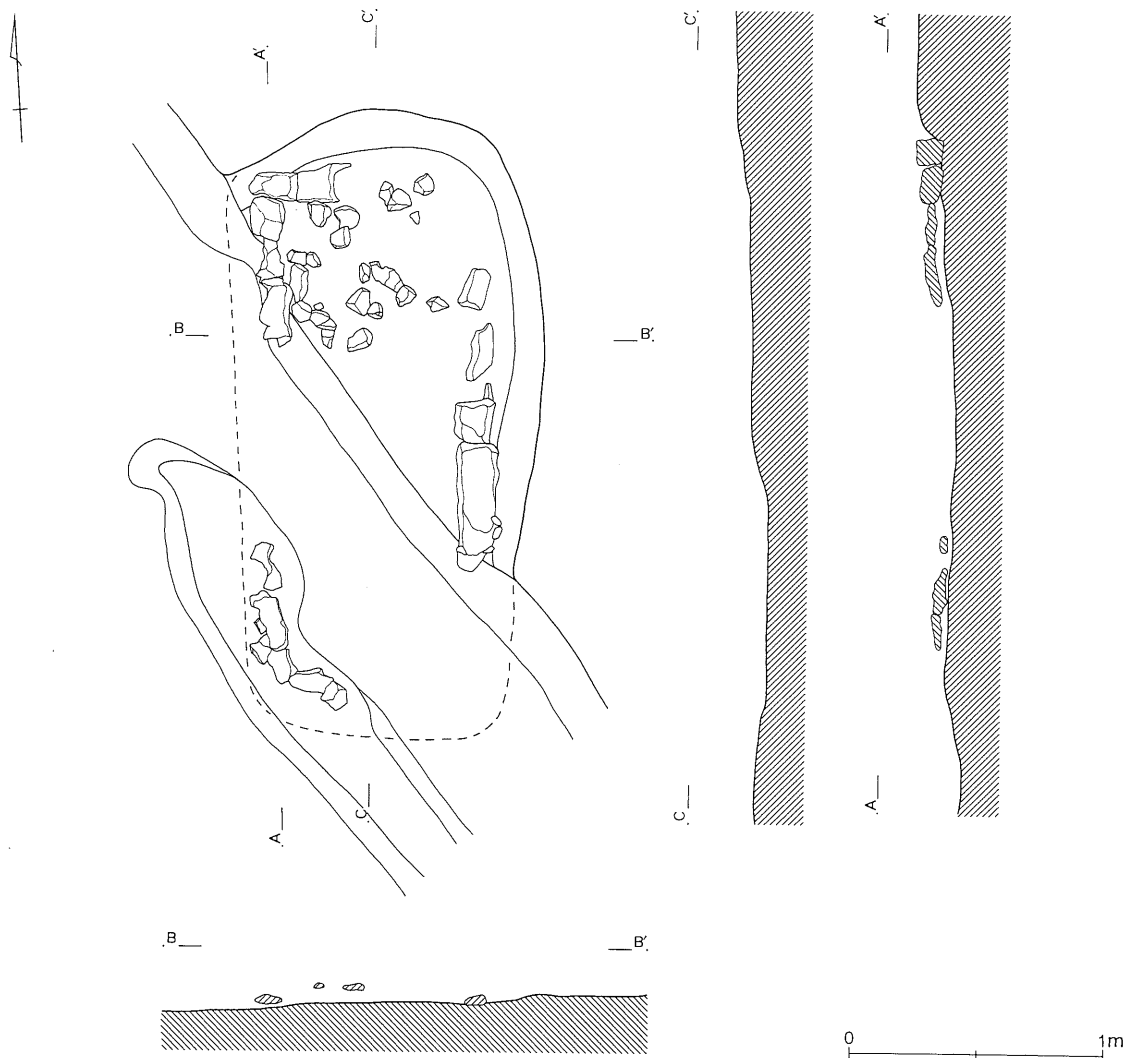
本古墳の築造時期についてはフラスコ形長頸壺から7世紀前半と考えられる。



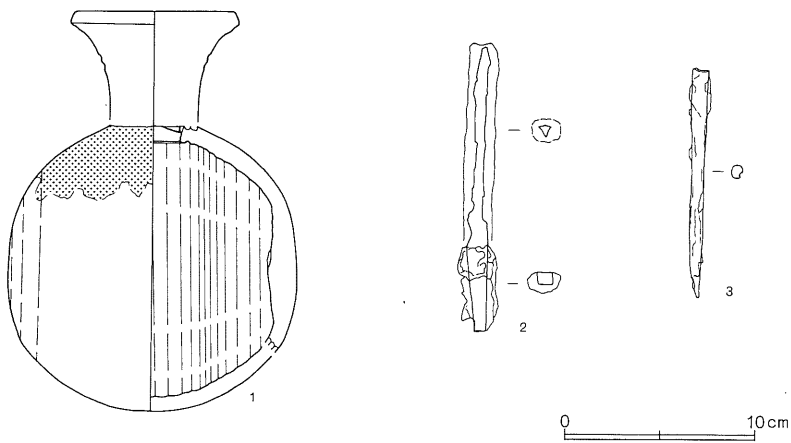
第142図 第2号墳 (L=46.60m)

第2号墳出土遺物 (第144図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	フラスコ形長頸壺須恵器	胴部径 15.1	胴部は球形を呈す。肩部に自然釉が認められる。手法は粘土円盤を置き、胴部下半を成形する。器厚は厚い。胴部上半は薄い。成形後、胴部中位に穴を開け、口縁部を内部へ嵌入する。胴部全面ヨコナデ。湖西産。	BCE・青灰白色・A	20%



第143 図 第2号墳石室 (L=46.20m)



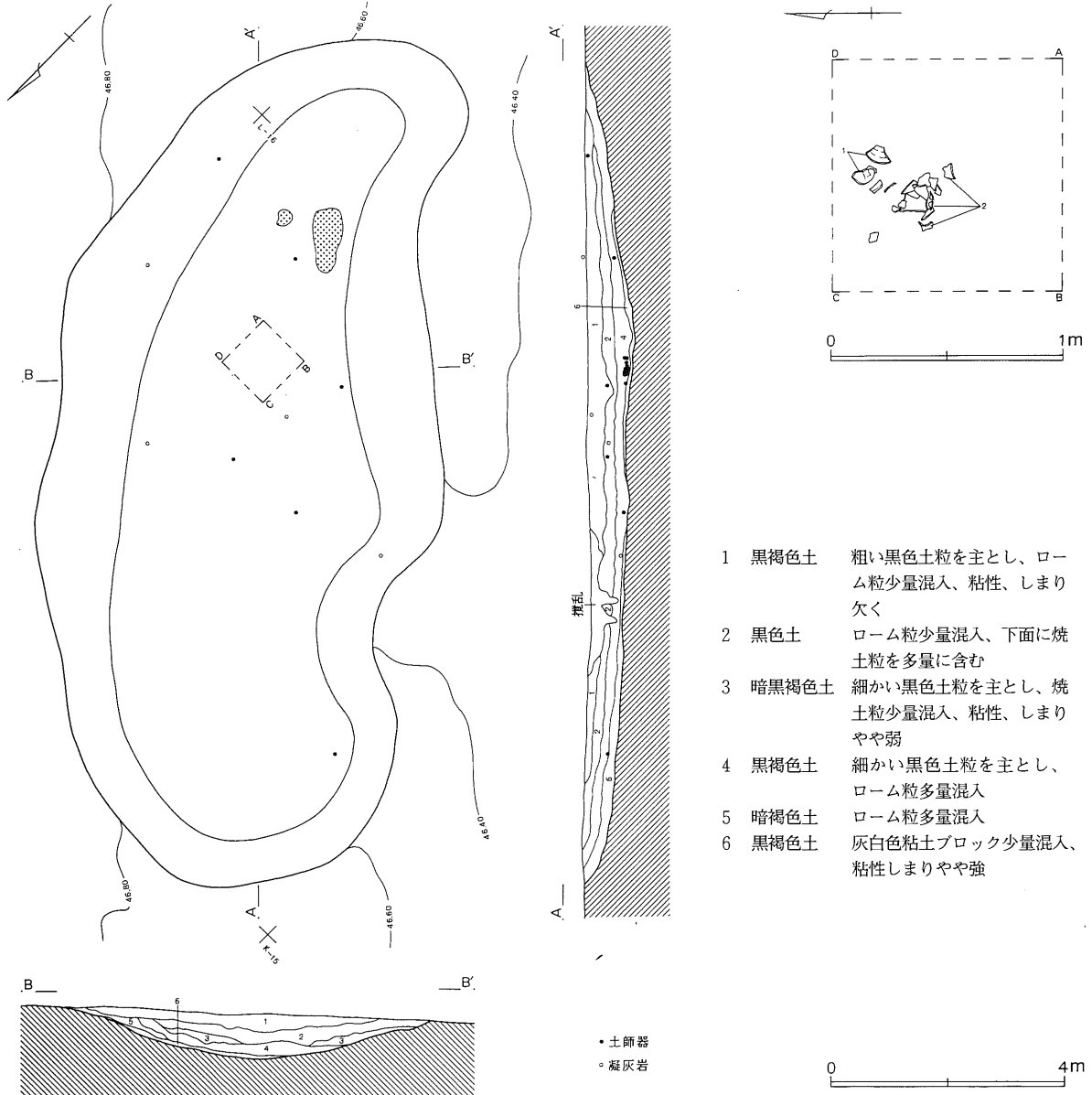
第144 図 第2号墳出土遺物

番号	器種	法量	備考
2	鉄 鋏	残長 11.3 cm。最大幅 0.8cm。	近世以降溝覆土
3	鉄 鋏	残長 9.0cm。最大幅 0.7cm。	近世以降溝覆土

(2) 竪穴状遺構

第3号竪穴状遺構 (第145図)

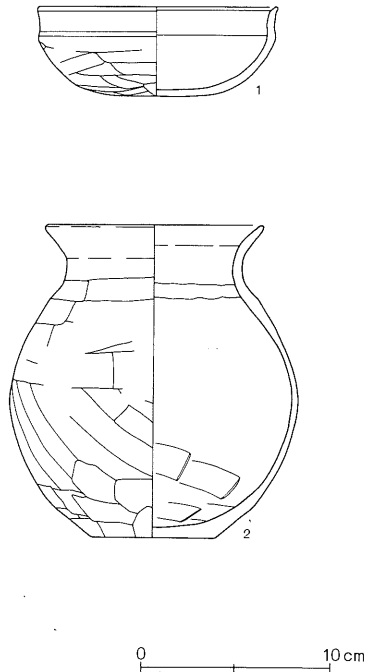
K、L-14~16Grid に位置する。第1号墳前方部の南側に隣接し、標高47.00m 前後を測る。形態は古墳側の壁が弧を描き三日月状を呈している。規模は長軸6.53m、短軸3.18m、深さは最大で87cmである。主軸



第145図 第3号竪穴状遺構 (L=47.10m)

第3号竪穴状遺構出土遺物 (第146図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	坏 土師器	口径 12.5 器高 4.7	やや扁平の丸底で、体部に稜を有し短い口縁部が立ち上がる。口唇部はやや外反し、一条の沈線が巡る。口縁部内外面はヨコナデ。体部外面は籠ケズリ。内面は平滑。内外面に赤彩。	B D F・褐色・B	90%
2	壺 土師器	口縁部 11.3 器高 16.4 底径 6.4	胴部は歪んだ球形を呈するものの、中位で最大径を有する。口縁部は外湾しながら立ち上がる。底部外面は若干湾曲している。口縁部内外面はヨコナデ。体部は籠ケズリ。	B C E F・褐灰色 ・A	70%



第146図 第3号竪穴状遺構出土遺物

方位はN-136°-Eを指している。

覆土は黒色土を基調とした自然堆積による埋没であり、東側の覆土中層では焼土粒の堆積が観察された。壁は緩やかな傾斜で立ち上がり、底面は軟質な状態であった。底面の掘り込み面は粘土層には達しておらず、ピットなど付属施設も特に検出されていない。

出土遺物は、本遺構東側底面において土師器坏1点と同壺1点が潰れた状態で出土している。

本遺構は、出土した遺物時期から第1号墳と平行する時期の遺構と考えられ、また、本遺構の北壁形態は第1号墳の前方部から後円部にかけての形態を意識したように約1.2～1.5mの間隔を保って構築されていることから第1号墳と有機的な関連がもたれた遺構と考えられる。

5. 奈良・平安時代の遺構と出土遺物

(1) 竪穴状遺構 (第147～149図)

第1号竪穴状遺構 (第147図)

H、I-12、13Gridに位置し、東側と南側を第15、16号溝によって切られている。標高45.30mの台地中央部平坦面で検出された。形態は不整な楕円形を呈し、規模は長軸6.18m、短軸4.93mで深さ40cmを測る。主軸方位はN-74°-Wを指している。

覆土は黒色土を基調とする自然堆積による埋没である。壁は緩やかな傾斜を示し、床面はやや凹凸を呈しているものの締まっている。ピットは15基検出されたが本遺構に伴うものかは不明であり、この他の付属施設も特に検出されなかったことから、住居跡とはせずに竪穴状遺構として扱った。

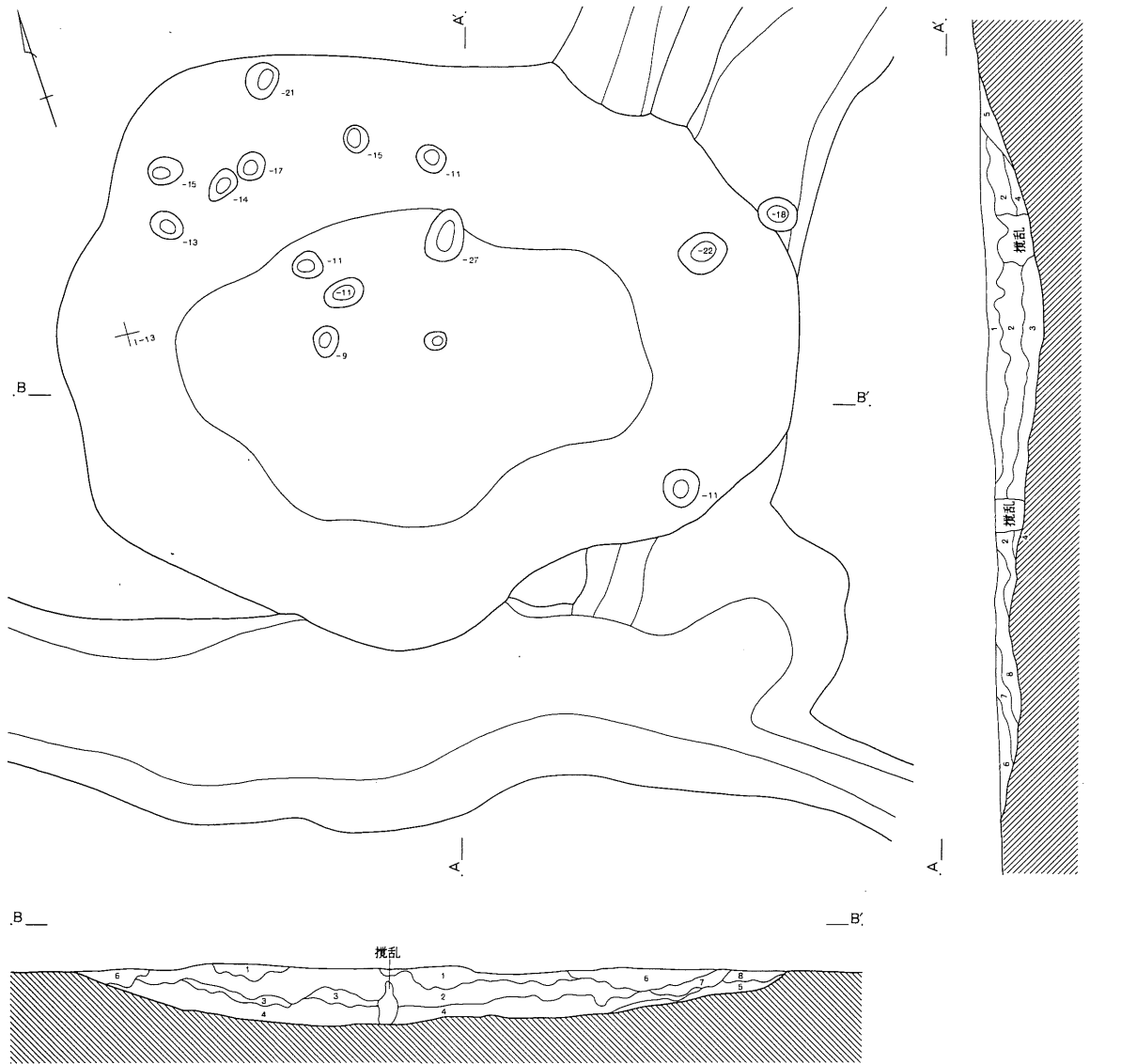
出土遺物は、縄文土器と礫が出土したに過ぎない。時期については正確に特定できないが、覆土の観察から第2号竪穴状遺構と近似した状況であることから古代に属するものとする。

第2号竪穴状遺構 (第148～149図)

M-12、13Gridに位置する。台地中央部に築造された前方後円墳の第1号墳北側で検出された。標高は47.10mを測る。形態は隅丸方形に近く、規模は長軸7.22m、短軸6.12m、深さ18cmを測る。主軸方位はN-89°-Wを指している。

覆土は黒色土を基調とした自然堆積による埋没である。壁は緩やかに立ち上がり、掘り込みは浅いものの床面は黄褐色粘土層から灰白色粘土層に達していた。ピットは3基検出され、P1=51cm、P2=54cm、P3=80cmと深く柱を打ち込まれたような状況が観察された。この周辺より遺物の出土がみられた。カマドや壁溝は検出されていない。

出土遺物は、須恵器坏、碗が出土し、土師器類は出土していない。出土状態では層を越えて接合関係を示すが、周囲に当該期の住居跡等が検出されていないことから本遺構に伴うものとする。



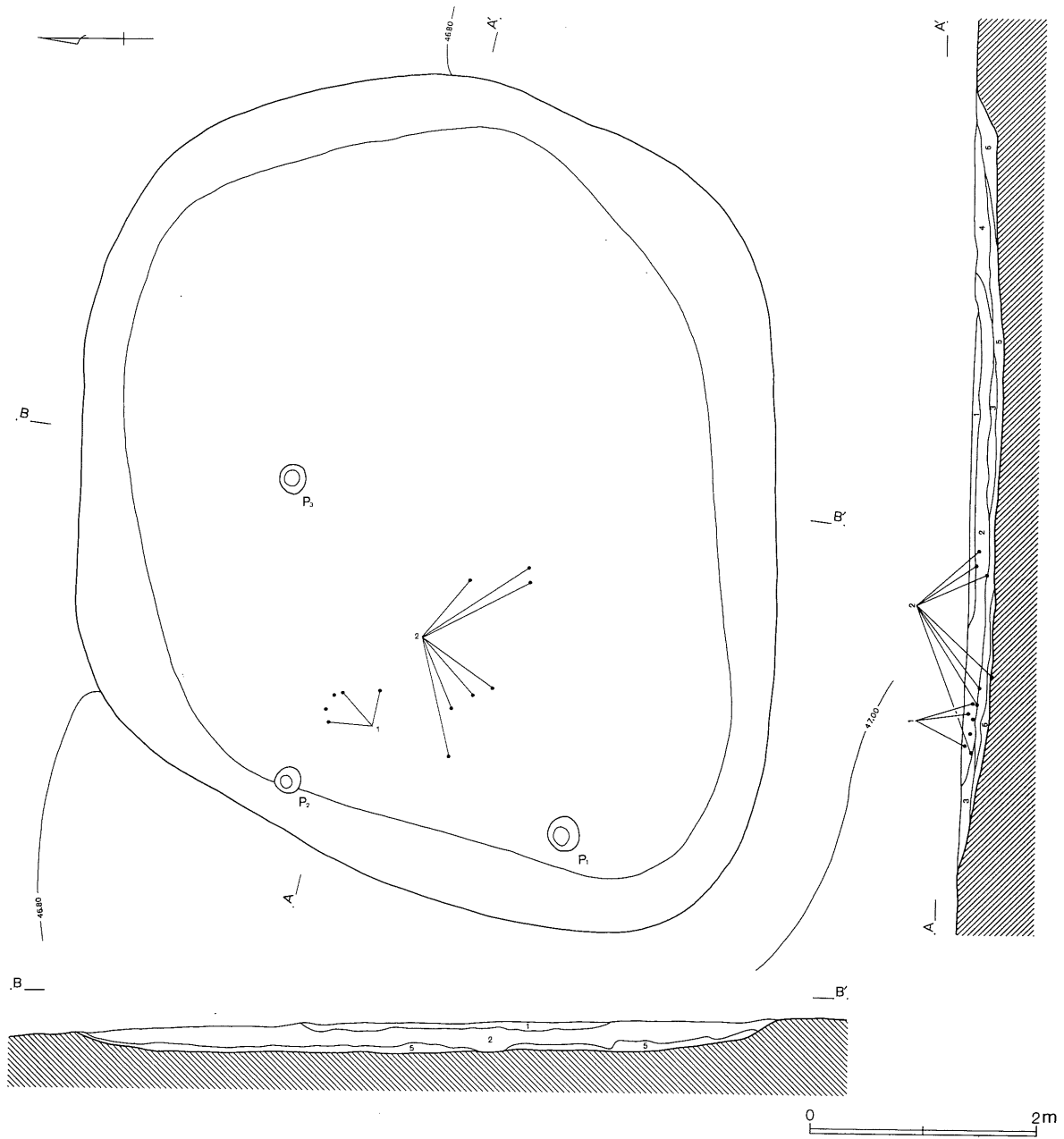
- 1 黒褐色土 ローム粒少量、粘性、しまり欠く
- 2 黒色土 粗い黒色土粒を主とし、ローム粒微量混入
- 3 黒褐色土 粗い黒色土粒を主とし、ローム粒多量混入
- 4 暗褐色土 ローム粒多量混入
- 5 褐色土 ロームブロック多量混入、粘性強、しまり弱
- 6 暗褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまり欠く。溝覆土
- 7 褐色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまり欠く。溝覆土
- 8 黒褐色土 ローム粒多量混入、粘性やや強、しまり弱。溝覆土

0 2m

第147図 第1号竪穴状遺構 (L=47.50m)

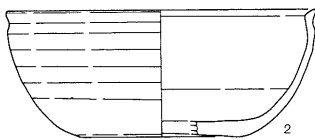
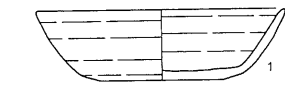
第2号竪穴状遺構出土遺物 (第149図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率	
1	坏 須恵器	口径	12.9	体部は直線的に外反する。口唇部はつまみ上げられている。底部全面を回転鑿ケズリ。巻き上げ状痕あり。口縁部に焼け斑がある。	A B E・灰色・A	50%
		器高	3.7			
		底径	5.8			
2	碗 須恵器	口径	(16.1)	体部は内湾しながら立ち上がり、口唇端部は外へつまみ出されている底部は静止糸切りの後、周辺鑿ケズリ。内外面ともにナデられている A	A B E・青灰色・A	20%
		器高	6.7			
		底径	8.3			



- | | | |
|---|-------|-------------------------|
| 1 | 暗黒褐色土 | 粗い黒色土粒を主とし、ローム粒少量混入、粘性弱 |
| 2 | 黒色土 | 細かい黒色土粒を主とし、ローム粒少量混入 |
| 3 | 黒褐色土 | 粗い黒色土粒を主とし、灰白色粘土粒少量混入 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒少量混入 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒少量混入、灰白色粘土粒少量混入 |
| 6 | 褐色土 | ローム粒多量混入、灰白色粘土粒少量混入 |

第148図 第2号竖穴状遺構 (L=47.10m)



0 10cm

第149図 第2号竖穴状遺構出土遺物

(2) 火葬墓

第 1 号火葬墓 (第150図)

I-15 Grid に位置する。台地中央部の南側へ緩やかに傾斜する斜面部で検出され、北へ約20mの距離には第 1 号墳が所在する。3 基が並ぶ火葬墓のうち本火葬墓は西端にあたり第 2 号火葬墓から西約3.6mの距離に位置する。本遺構は耕作等により既にその上部が削平を受け、そのほとんどが消失しているため明確でないが、検出状況から土壌に蔵骨器を伴う埋葬施設であろうと考えられる。形態は円を基調とした不整形を呈し、規模は長軸53cm、短軸45cm、深さ10cmと浅い。

覆土は焼土粒、炭化物を多量に混入し、蔵骨器として土師器甕 2 个体分の口縁部破片が検出され、うち 1 点は逆位の状態で出土した。覆土からは骨片などは確認できなかった。

第 2 号火葬墓 (第150図)

J-16 Grid で、東西方向に並ぶ 3 基の火葬墓のうちの中央に位置する。隣接する第 3 号火葬墓とは30cm程しか離れない。他の火葬墓と同様に上部は削平され消失している。埋葬施設としては土壌に蔵骨器を伴うものである。形態は円を基調とし、規模は径40cm、深さ21cmを測り、断面形は逆台形を呈する。

覆土は炭化物を主とし、少量のローム粒を含む。蔵骨器は須恵器の短頸壺で、壺の中には骨片と炭化物が詰まっていた。また、蔵骨器確認段階で須恵器蓋 1 点が検出されている。

第 3 号火葬墓 (第150図)

J-16 Grid に位置する。東西方向に並ぶ 3 基の火葬墓のうちの東端にあたる。第 1、2 号と同様に削平を受けているが、埋葬施設は土壌に蔵骨器を伴うものであろうと考えられる。形態は楕円形を呈し、長軸46cm、短軸35cm、深さ15cmを測る。断面形は第 2 号火葬墓と同じ逆台形を呈する。

覆土は少量の骨片と多量の炭化物を含み、下層に褐色土の埋め戻しによる堆積が観察された。蔵骨器は検出されていないが、須恵器蓋が出土していることから蔵骨器の蓋として使用されたものと考えられる。

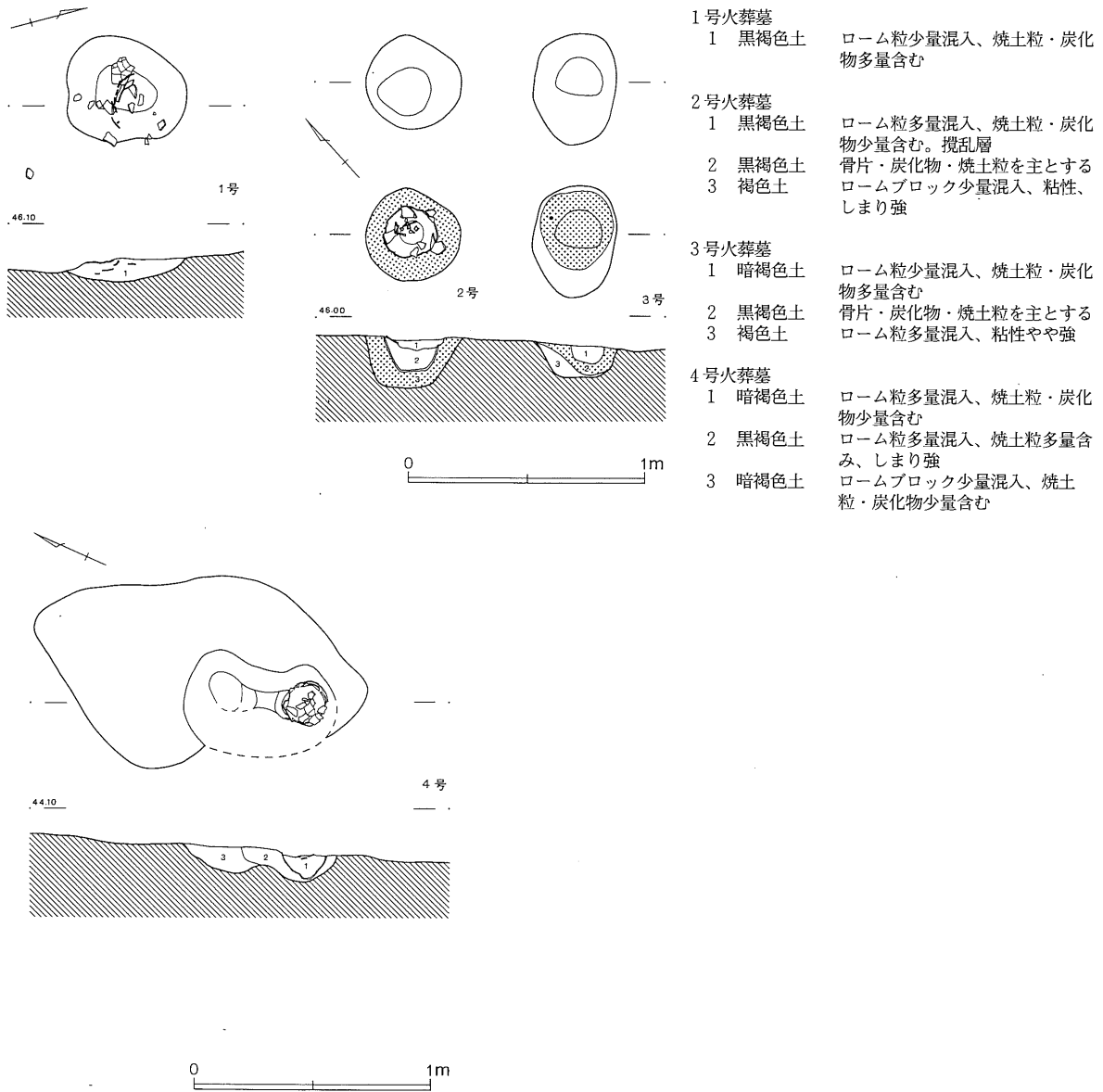
第 4 号火葬墓 (第150図)

V-25 Grid に位置する。台地東側の舌状部中央で検出され、群をなす第 1～3 号火葬墓から東へ約157m離れている。形態は浅い掘り込みによる不整な形態を呈し、規模は長軸1.44m、短軸0.88m、深さ7cmを測る。蔵骨器埋設箇所は更に一段深く掘り込まれ、形態は双子状で、規模は長軸65cm、短軸39cm、深さ13cmを測る。

蔵骨器埋設箇所ではローム粒や焼土粒、炭化物を多量に含むものの骨片はみられなかった。周囲の掘り込み覆土ではローム粒とともに焼土粒、炭化物を少量含む程度であった。蔵骨器は土師器甕の胴部下半が正位に据えられ、上部は潰れた状態で検出された。

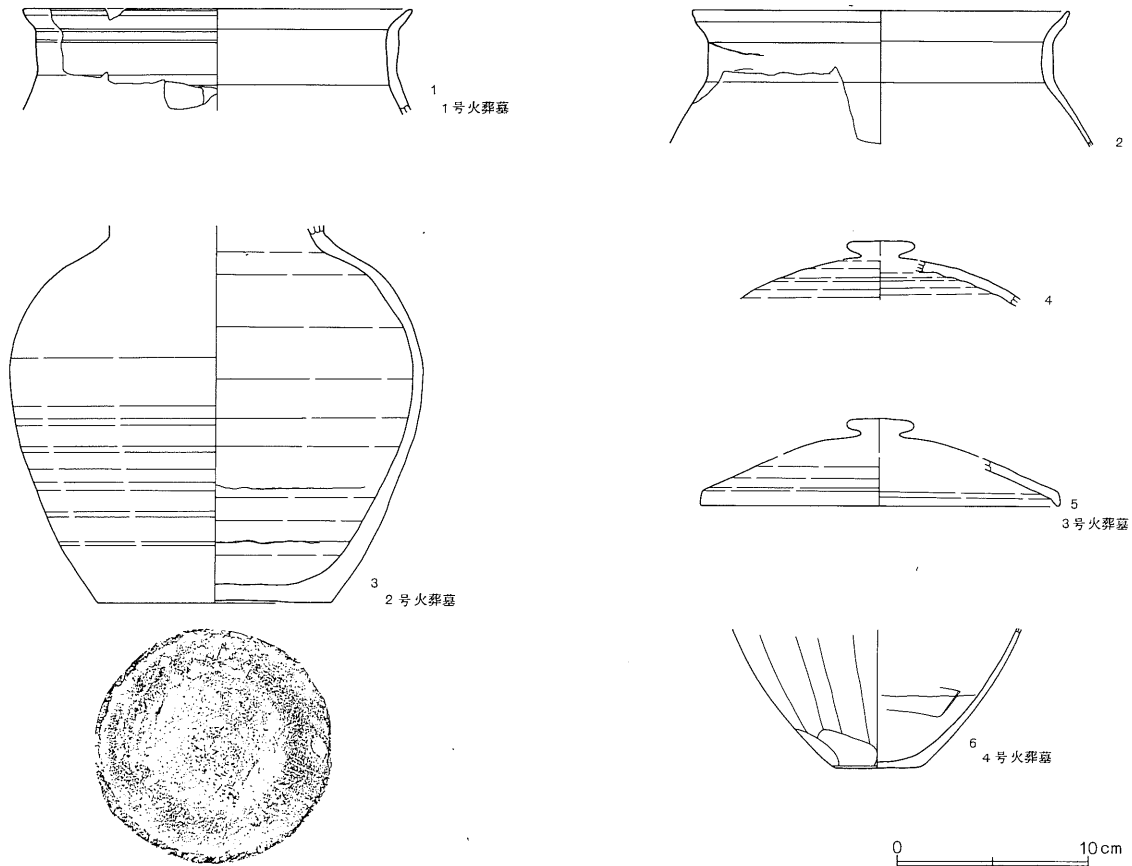
(2)火葬墓構出土遺物 (第151図)

番号	器種	法量	形態・手法的特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	甕 土師器	口径 20.2	口縁部は「コ」の字状を呈する。内外面ともにヨコナデ。胴部上半は横方向の筥ケズリ。	B C F ・ 橙 ・ B	20%
2	甕 土師器	口径 19.7	口縁部は「コ」の字状を呈する。口縁部外面に粘土紐の積み上げ痕を残す。内外面ともにヨコナデ。胴部上半は横方向の筥ケズリ。	B E F ・ 暗褐色 ・ B	20%



第150図 第1～4号火葬墓

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
3	壺 須恵器	頸部径 11.7 胴部径 21.5 底径 12.1	体部上半に最大径を有し、頸部はやや薄手である。底部外面中央部が凹む。ロク口水挽き成形である。	A B C F ・ 暗灰白色・ A	60%
4	蓋 須恵器		小片であり口径等は不明である。天井頂部外面に回転筥ケズリ調整が施されている。	A B F ・ 灰色・ B	10%
5	蓋 須恵器	口径 (18.7)	小片であり口径は推定である。外面に重ね焼きによる焼け斑跡が見られる。口唇端部はつまみ出されている。	A B F ・ 灰色・ A	10%
6	甕 土師器	底径 4.5	底部下端は横方向の筥ケズリ。下半は縦方向の筥ケズリ。内面は横方向のヘラナデ。	B D F ・ 暗褐色・ B	20%



第151図 第1～4号火葬墓出土遺物

(3) 土 壙 (第152図)

平安時代に帰属すると推定される土壙は4基であり、全て調査区Ⅰ区より検出されている。遺構の時期を決定できる遺物は皆無であるが、覆土において黒色土を基調とする堆積であること、前述した火葬墓と有機的な関連が考えられることから当該期とした。

第68号土壙 (第152図)

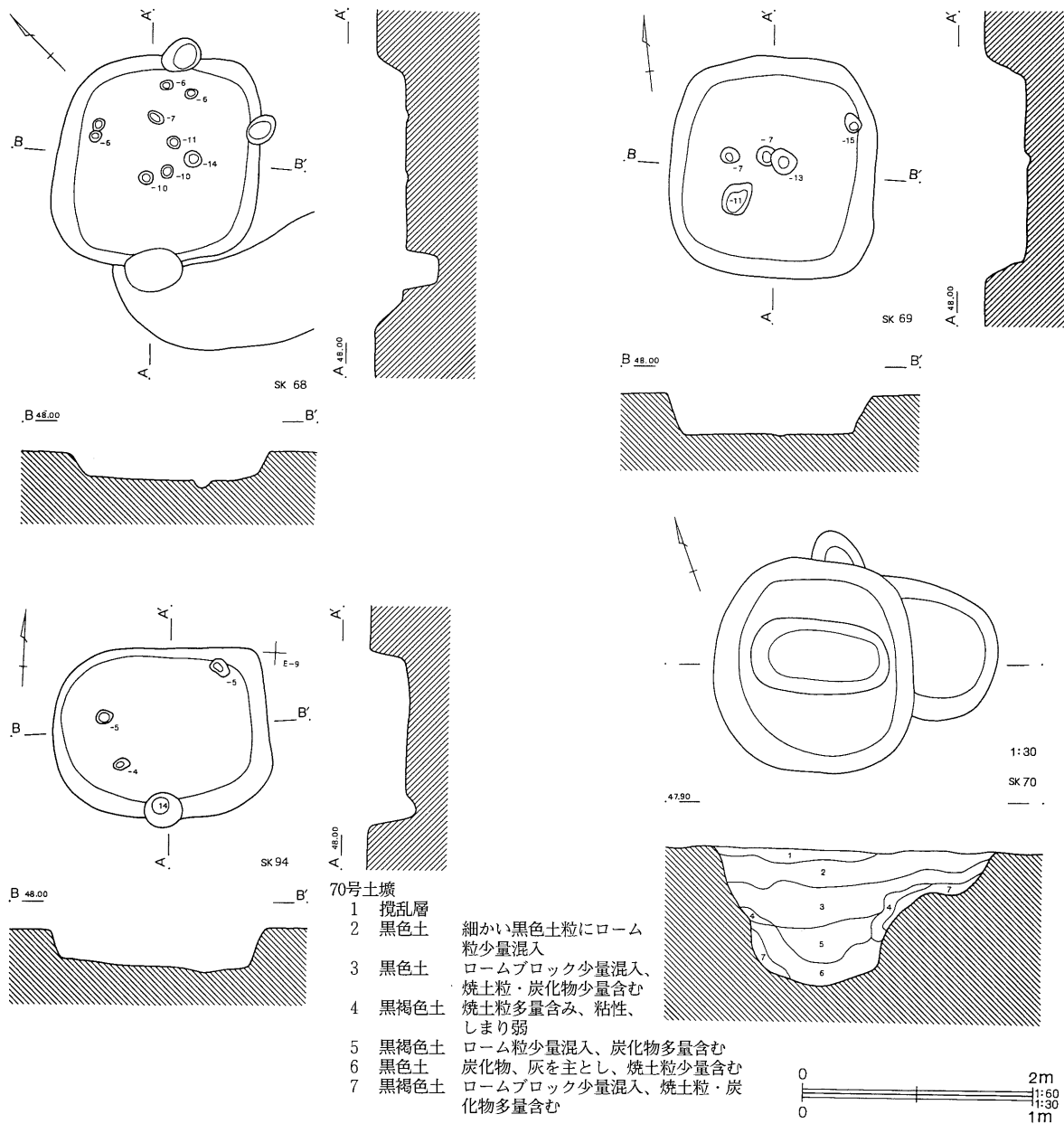
E-8 Grid に位置する。調査区Ⅰ区の台地平坦面で検出され、標高47.70mである。土壙南側を第59号土壙と重複する。形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.82m、短軸1.78m、深さ26cmである。底面の面積は2.08㎡を測る。壁は直線的な傾斜で立ち上がり、底面は平坦であるが踏み固められた状況ではなかった。

覆土はロームブロックを少量含むものの黒色土を基調とした自然堆積による埋没であろう。底面よりピットが9基検出され、深さは4～13cmを有する。このピットは本遺構に伴うものかは不明である。出土遺物はない。

第69号土壙 (第152図)

E-9 Grid に位置する。第68号土壙から南西へ約3.7mの距離で検出された。標高47.70mである。形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.93m、短軸1.78m、深さ38cmを測る。底面の面積は2.2㎡である。壁は直線的な傾斜で立ち上がり、底面は平坦であるが踏み固められた状況ではなかった。

覆土は第68号土壙と同様に黒色土を基調としたレンズ状堆積を示しており、人為的な埋め戻しの根拠となるロームブロックの混入はみられないため自然堆積による埋没の可能性が強い。ピットは底面より4基検出され、深さは7～11cmを測る。出土遺物は検出されていない。



第152図 第68～70号・94号土壌

第94号土壌（第152図）

E、F-8、9 Grid に位置する。第68号土壌から西へ約8.8m、第69号土壌の西へ約5.2mの距離で検出された。形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.88m、短軸1.58m、深さ36cmを測る。底面の面積は1.76m²である。壁はやや傾斜するが直線的に立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが軟質な状況であった。

覆土は第68、69号土壌と同様に黒色土を基調とした自然堆積による埋没であろう。底面よりピットが3基検出され、深さは3～5cmを測る。出土遺物はない。

第70号土壌（第152図）

E-9 Grid に位置する。第69号土壌の南へ約3.6mの距離に検出された。形態は隅丸方形の土壌に東辺が楕円形のテラス状の張り出しをもつものである。中心部の底面には更に一段深く長楕円形の掘り込みを有している。規模は長軸1.04m、短軸1.02m、深さは中央部32cm、最深部が58cm、張り出し部19cmである。壁は緩やかに立ち上がる。

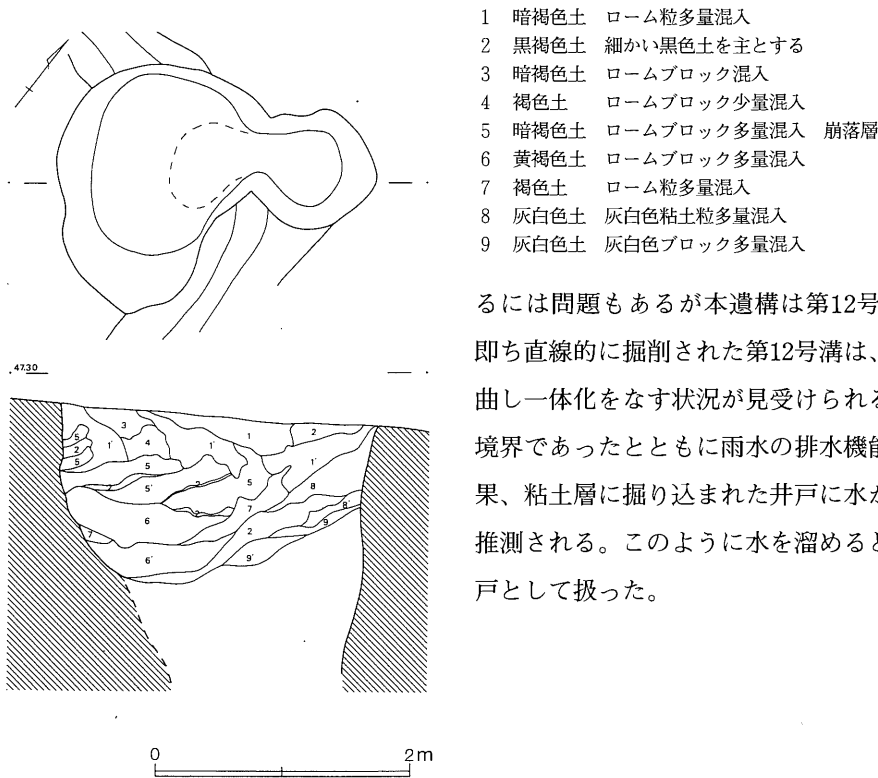
覆土はロームブロックを少量含むものの黒色土を基調としたレンズ状堆積を示すことから自然堆積による埋没とみられる。覆土中には焼土粒や炭化物が混入し、下層では層を形成している。出土遺物は検出されていない。

6. 近世以降の遺構

(1) 井戸跡

第1号井戸跡 (第153図)

H-8 Grid に位置する。台地の等高線に沿って掘削された第12号溝と重複する。形態は瓢箪形を呈し、規模は長軸2.50m、南側短軸1.96m、北側短軸0.91m、深さは約1.90mを測る。調査時に壁が崩落した為、人手による調査を断念したが底面までの深さの確認は重機により掘削して行った。覆土上層はロームブロックの混入がみられ埋め戻しによるものであるが、下層は灰白色粘土ブロックの堆積が観察され、壁の崩落によるものと考えられる。掘り込みの深さは礫層に達しておらず、湧水は認められなかった。そのため井戸とす

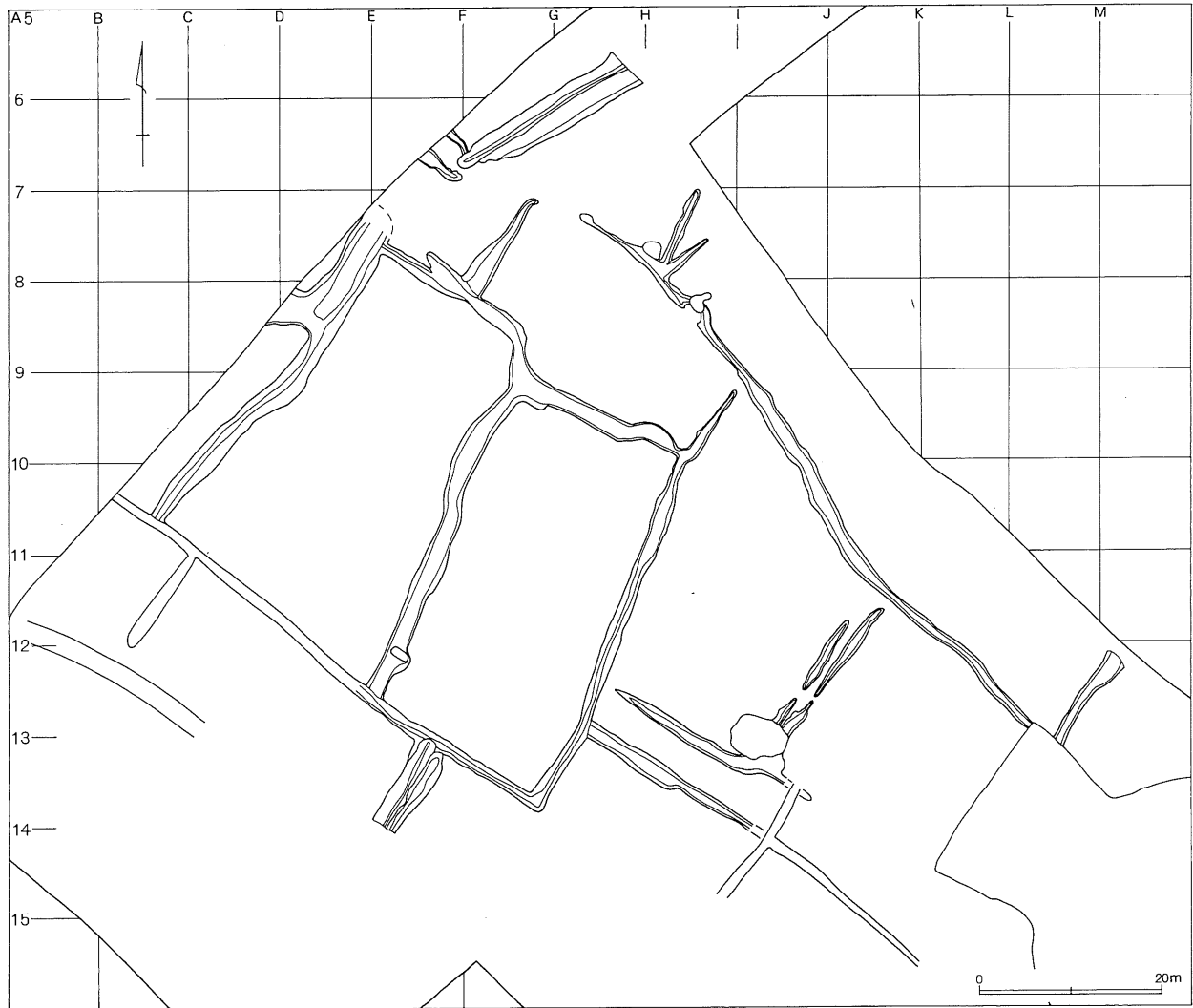


るには問題もあるが本遺構は第12号溝と有機的な関連性がある。即ち直線的に掘削された第12号溝は、井戸跡周辺で井戸に向け屈曲し一体化をなす状況が見受けられる。このことから溝は土地の境界であったとともに雨水の排水機能を果していたと思われ、結果、粘土層に掘り込まれた井戸に水が溜められたのではないかと推測される。このように水を溜めるとゆう機能において広義の井戸として扱った。

第153図 第1号井戸跡

(2) 溝 (第154図)

東山遺跡での溝は19条検出され、台地西側に偏る傾向が窺えた。出土遺物は乏しく年代の解するものはほとんどなく、いずれの溝覆土も表土層や後述する土壌覆土と近似する状況である。また、現在の土地境界線と重なる点が多いことからこれらの溝は、近世、現代のものであろう。尚、これら全てについて詳細に記載することは省略した。



第154図 溝

(3) 土壇 (第155～156図)

第71号土壇 (第155図)

調査区-I区、E、F-12 Grid に位置する。等高線とほぼ平行し、また、溝に対し直角な方位を示す。形態は長方形を呈し、規模は長軸1.22 m、短軸0.93 m、深さ60cmを測る。壁は垂直に立ち上がる。覆土は短期間に埋め戻されたと考えられる。

第72号土壇 (第155図)

調査区-I区、F-10 Grid で、前述の第71号土壇から北へ約18mの距離に位置し、同様な主軸方位を示す。形態は長方形を呈し、規模は長軸1.62 m、短軸0.73 m、深さ31cmを測る。

第73号土壇 (第155図)

調査区-I区、I-8 Grid で、調査区の北端に位置し、調査境の道路と平行する。形態は長方形で、規模は長軸1.22 m、短軸0.78 m、深さ6 cmを測る。深さについては、遺構確認時に土壇上部を削平したためと思われる。

第74号土壇 (第155図)

調査区-I区、G-7 Grid に位置する。溝に対して直角な方位を示す。形態は長方形を呈し、規模は長

軸2.18m、短軸0.80m、深さ10cmと浅い。

第75号土壙 (第155図)

調査区Ⅰ区、F-11Grid で、前述の第71、72号土壙と同様な軸方位を示す。形態は長方形で、規模は長軸1.22m、短軸0.76m、深さ34cmを測る。

第76号土壙 (第155図)

調査区Ⅰ区、E-12Grid で、等高線に直交する溝と重複する。形態は長方形で、規模は長軸1.92m、短軸0.90m、深さ20cmを測る。

第77号土壙 (第155図)

調査区Ⅰ区、E-11、12Grid で、等高線に直交する溝に隣接し、溝に対し直角な軸方位を示す。形態は長方形を呈し、規模は長軸1.64m、短軸0.98m、深さ51cmを測り深い。

第78号土壙 (第155図)

調査区Ⅰ区、E、F-11Grid で、前述の第77号土壙の東側に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸1.45m、短軸0.83m、深さ40cmを測る。

第79号土壙 (第155図)

調査区Ⅱ区、O、P-18Grid に位置する。形態は長方形を呈するが、前述の第71～78号土壙に比べ形態がやや不整な状況である。規模は長軸1.62m、短軸0.64m、深さ16cmを測る。

第80号土壙 (第155図)

調査区Ⅱ区、Q-19Grid に位置する。形態は長方形を呈し、第79号土壙と同様やや不整形な状況である。規模は長軸1.44m、短軸0.66m、深さ6cmと非常に浅い。

第81号土壙 (第155図)

調査区Ⅱ区、Q-20Grid で、前述の第80号土壙と軸方向が同じくし、約9m東に隔てた所に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸1.92m、短軸1.12m、深さ22cmを測る。

第82号土壙 (第155図)

調査区Ⅱ区、R-18Grid に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸2.19m、短軸0.98m、深さ20cmを測る。

第83号土壙 (第155図)

調査区Ⅱ区、Q-18Grid に位置する。形態は正方形を呈し、規模は長軸1.25m、短軸1.08m、深さ31cmを測る。

第84号土壙 (第156図)

調査区Ⅱ区、P-84Grid に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸1.28m、短軸0.94m、深さ10cmを測る。

第85号土壙 (第156図)

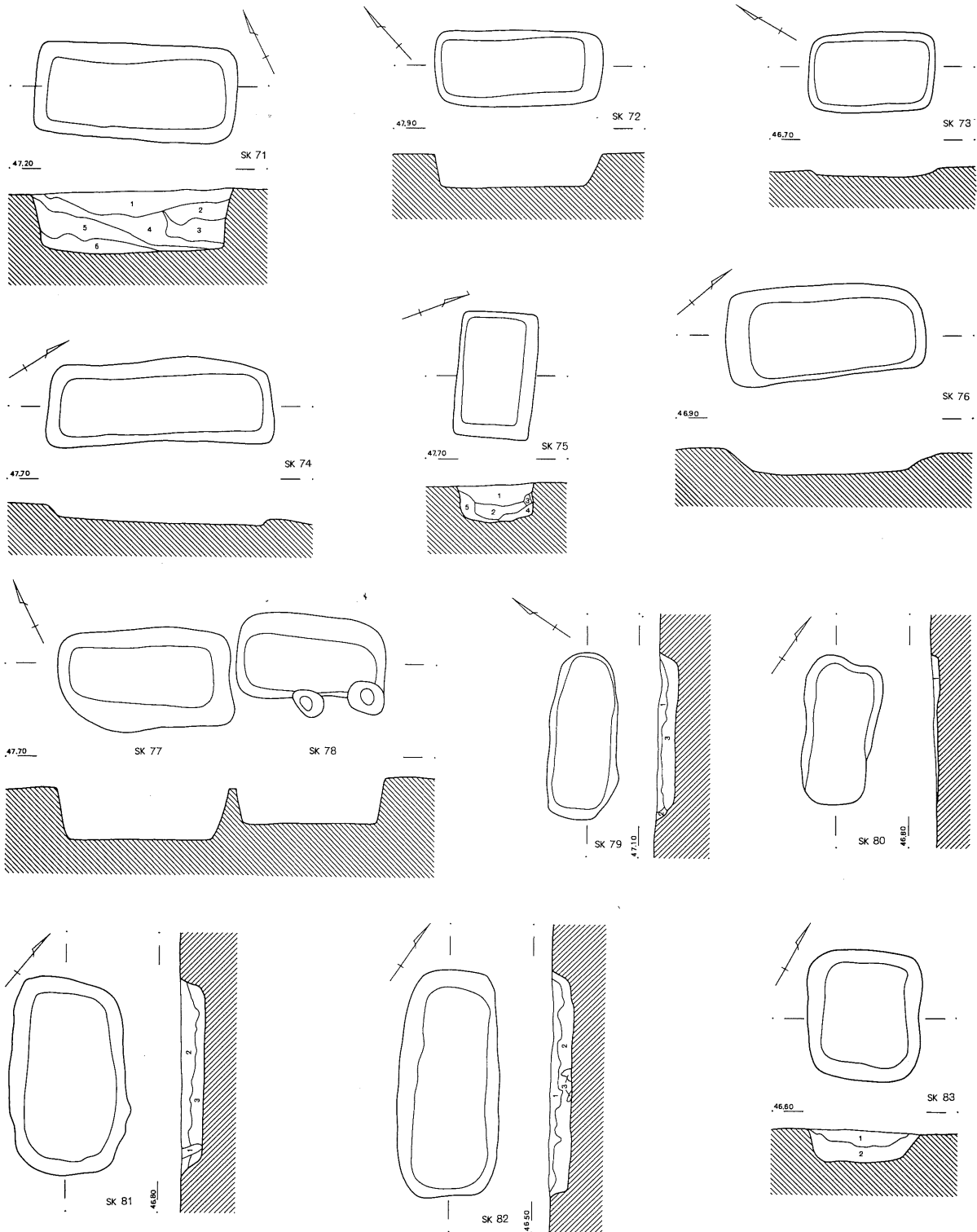
調査区Ⅱ区、Q-19Grid に位置し、前述の第83号土壙の北へ約1mの距離で軸方位を同じくする。形態は長方形を呈し、規模は長軸1.79m、短軸0.95m、深さ89cmを測る。

第86号土壙 (第156図)

調査区Ⅱ区、N-15Grid に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸2.93m、短軸0.98m、深さ33cmを測る。

第87号土壙 (第156図)

調査区Ⅱ区、P-19Grid に位置する。前述の第80～82号土壙の軸方位と直交する方位を示す。形態は



71号土坑

- 1 褐灰色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまり欠く
- 2 褐色土 ロームブロック多量混入
- 3 褐色土 拳大のロームブロック多量混入
- 4 褐灰色土 ローム粒多量混入、粘性、しまり欠く
- 5 暗褐色土 ロームブロック多量混入
- 6 褐灰色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまり欠く

75号土坑

- 1 褐灰色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまり欠く
- 2 褐色土 ローム粒多量混入、粘性、しまり欠く
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量混入
- 4 褐色土 ローム粒多量混入
- 5 褐色土 拳大のロームブロック多量混入

79号土坑

- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物微量含み、しまり弱
- 2 褐色土 ロームブロック多量混入
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量混入、粘性、しまりやや弱

80号土坑

- 1 黒褐色土 ロームブロック少量混入、焼土粒・炭化物少量含む

81号土坑

- 1 暗褐色土 攪乱層
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量混入、炭化物微量含む
- 3 褐色土 ロームブロック多量混入

82号土坑

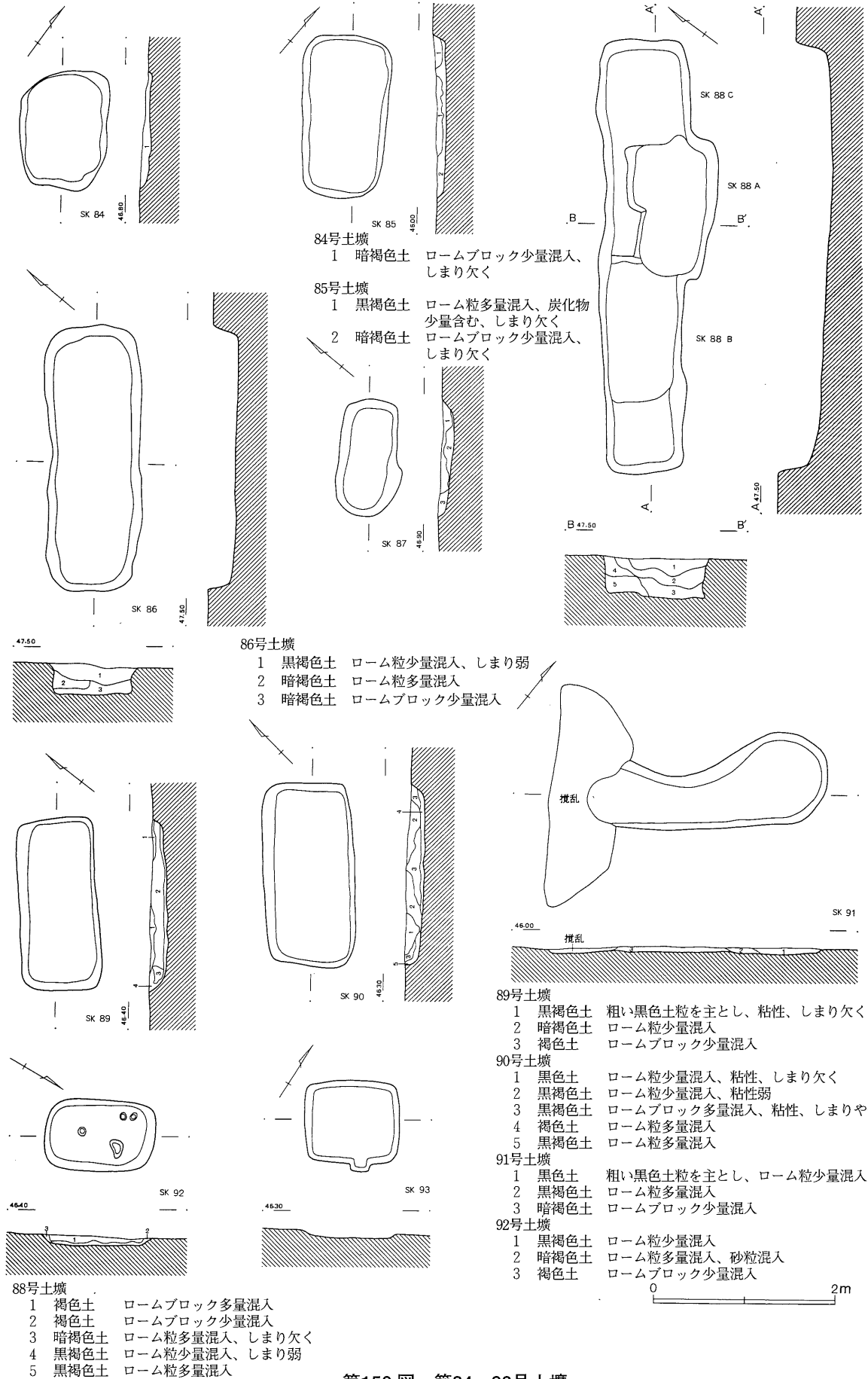
- 1 暗褐色土 ローム粒少量混入、炭化物微量含む
- 2 黒褐色土 ローム粒少量混入、粘性、しまり弱
- 3 黄褐色土 ロームブロック

83号土坑

- 1 黒色土 粗い黒色土粒を主とし、炭化物少量含み、粘性、しまり欠く
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量混入、しまり弱

0 2m

第155図 第71~83号土坑



第156図 第84~93号土城

長方形を呈し、規模は長軸1.29m、短軸0.73m、深さ11cmを測る。

第88号土壙（第156図）

調査区－Ⅱ区、N－15Grid に位置する。本土壙は、壙底の観察により3基若しくは4基の重複の可能性を持つ。形態はすべての土壙が長方形を呈する。規模は長軸4.76m、短軸1.24m、深さ49cmを測る。

第89号土壙（第156図）

調査区－Ⅱ区、R－19Grid に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸1.92m、短軸0.88m、深さ14cmを測る。

第90号土壙（第156図）

調査区－Ⅱ区、R－19Grid に位置する。前述の第89号土壙の東へ約3mの距離で同軸方位を示す。形態は長方形を呈し、規模は長軸2.00m、短軸1.01m、深さ14cmを測る。

第91号土壙（第156図）

調査区－Ⅱ区、R、S－18Grid に位置する。前述の第89号土壙の北へ約6mの距離に位置する。形態は不整な長方形を呈する。規模は長軸（1.50）m、短軸1.02m、深さ6cmと浅い。

第92号土壙（第156図）

調査区－Ⅱ区、R－20Grid に位置する。形態は長方形を呈する。規模は長軸1.20m、短軸0.80m、深さ11cmを測る。壙底にピットを有するが土壙に伴うものか不明である。

第93号土壙（第156図）

調査区－Ⅱ区、S、T－22Grid に位置する。形態は正方形を呈する。規模は長軸1.04m、短軸0.90m、深さ9cmと浅い。

Higashiyama-Ⅲ

東山遺跡Ⅲ区

VI 東山遺跡Ⅲ区の調査

1. 遺跡の概要

東山遺跡Ⅲ区は、東平台地の北部に位置する。台地は荒川の支流である和田吉野川によって開析された小支谷と更に小さい谷が遺跡付近まで入り込んでいる。このため遺跡周辺は、南西↔北東方向に延びた台地が東西に並ぶ地形となっている。

本調査区は小支谷の一つである「桜谷の谷」の最奥部に位置し、谷は調査区の東端で二股に分れ北側には小さな谷を挟んで東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区が存在する。遺跡の範囲としては東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区と同じ台地で近接していることから一つの遺跡の範囲とされていたが、調査区が埋没谷を挟んでいることから便宜的に東山遺跡Ⅲ区と呼び扱うこととした。調査面積8,857㎡である。

遺跡は、標高42～47mの東向き斜面に位置し、検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡1軒、古代の円形土壇1基、縄文時代の集石1基であり、出土遺物では、石器をはじめ縄文時代前期黒浜式、諸磯a式、中期末葉加曾利EⅣ式の土器や円筒埴輪など少量の遺物が検出された。

2. 遺構と出土遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡（第158～160図）

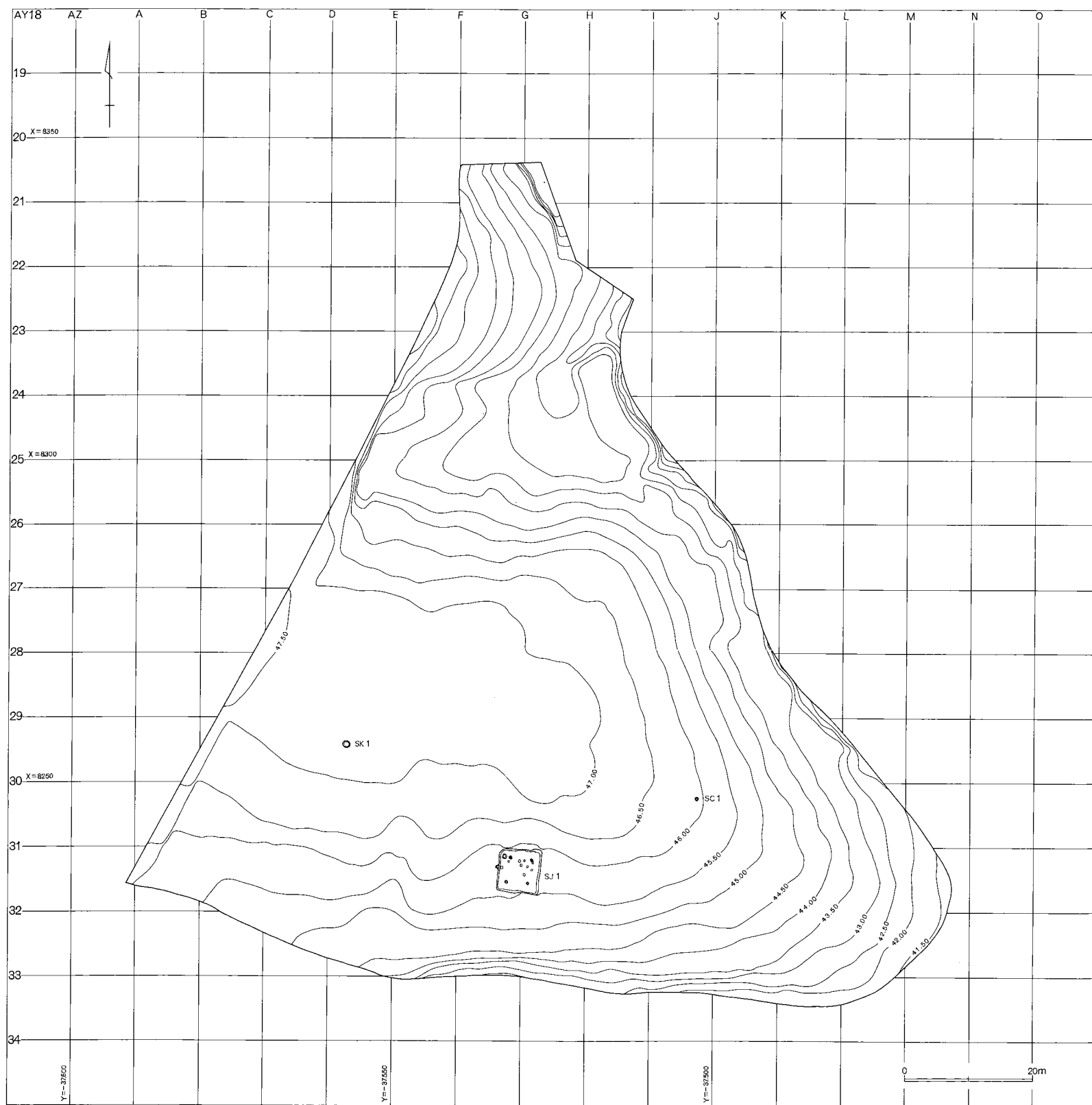
F、G-31Gridで、南側の谷に面する緩斜面に位置する。形態は方形を呈する。規模は長軸6.82m、短軸6.50m、深さ24cmを測り、主軸方位はN-85°-Wを指している。遺構確認段階では、地形的要因であろうが住居跡とその周辺に黒色土の堆積が確認された。覆土は黒色土を基調とした自然堆積による埋没である。壁は垂直に立ち上がり、壁に沿って幅18～38cmの壁溝が北側の一部を除き全周する。床面は概ね平坦であるが、僅かに東へ傾斜しており、ややしまりを欠いていた。ピットは12基検出され、このうちP1～P4が主柱穴に相当する。P1=22cm、P2=19cm、P3=26cm、P4=41cmを測る。その他のピットは柱穴か否かは不明であるが、東壁寄り中央に位置するピットは深さ42cmを測ることから柱穴として考えておきたい。貯蔵穴はカマド右側の北西コーナー内側から検出され、規模は長軸69cm、短軸62cm、深さ27cmの長方形を呈し、断面形態は楕円形である。

カマドは西壁中央やや北寄りに位置し、壁を1.1m切り込んで構築されている。燃焼部から煙道部までの底面は平坦で煙り出し部で垂直に立ち上がる。袖部は一部が残存していた。遺物は燃焼部で礫が4点出土しただけであった。

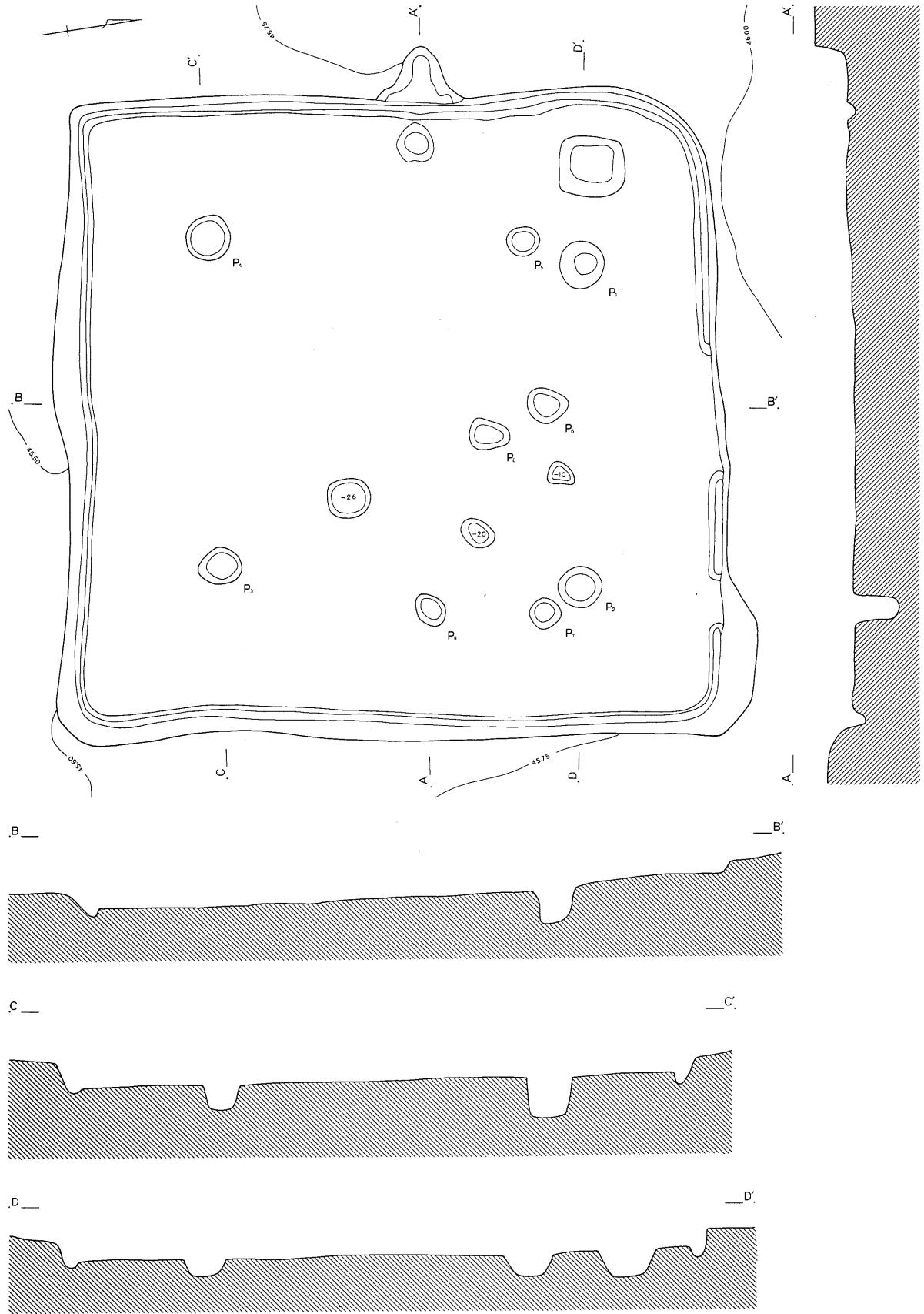
出土遺物は土師器坏が1点出土したに過ぎない。

第1号住居跡出土遺物（第160図）

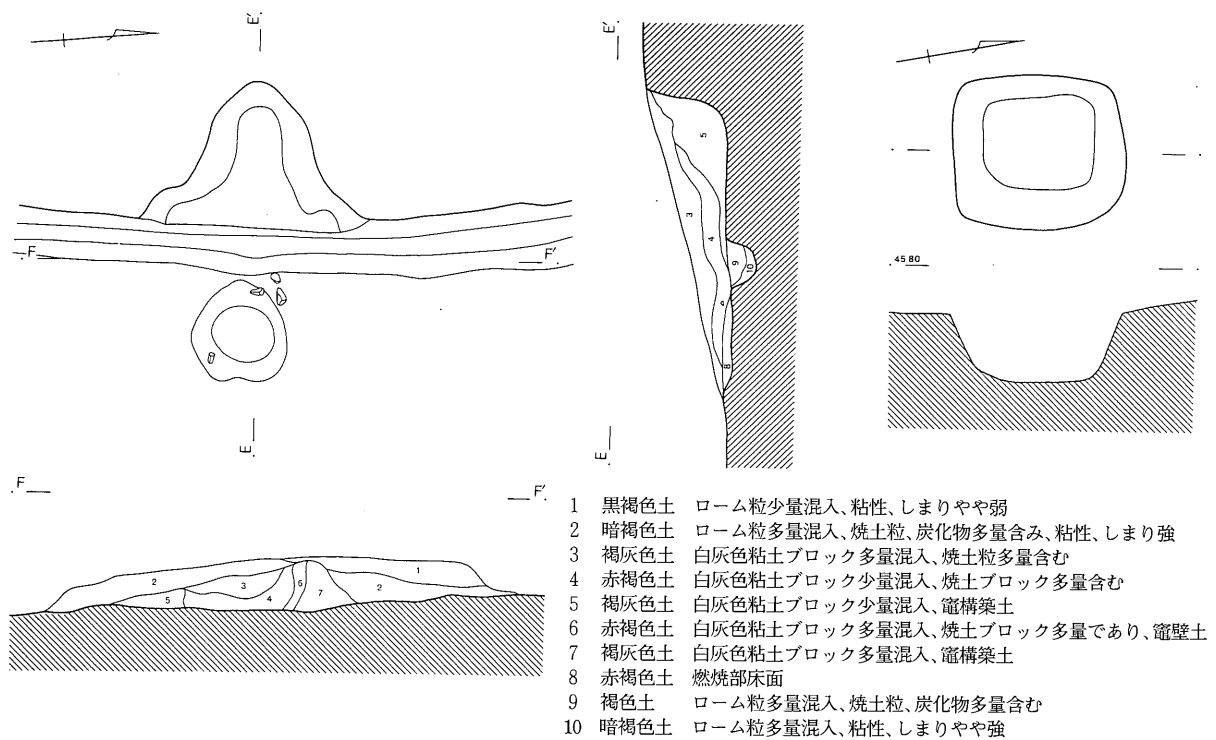
番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	坏 土師器	口径 (13.1)	口縁部は直線的にのび、内傾する。端部は内面が内削ぎされるため尖る。内外面ともにヨコナデ。体部との境は高いが鈍い。体部外面艶ケズリ。	BDF・褐色・A	40%



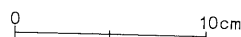
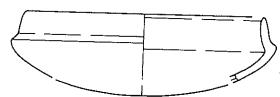
第157図 東山遺跡Ⅲ区全体図



第158图 第1号住居跡 (L=46.10m)



第159図 第1号住居跡竈・貯蔵穴 (L=46.10m)



第160図 第1号住居跡出土遺物

(2) 土壇・集石土壇 (第161図)

第1号土壇 (第161図)

D-29Grid に位置する。形態は円形を呈し、規模は径55cm、深さ6cmを測る。断面形は皿形で、底面は平坦である。覆土は黒色土を基調とし、第1号住居跡覆土とその周辺の堆積土に似る。

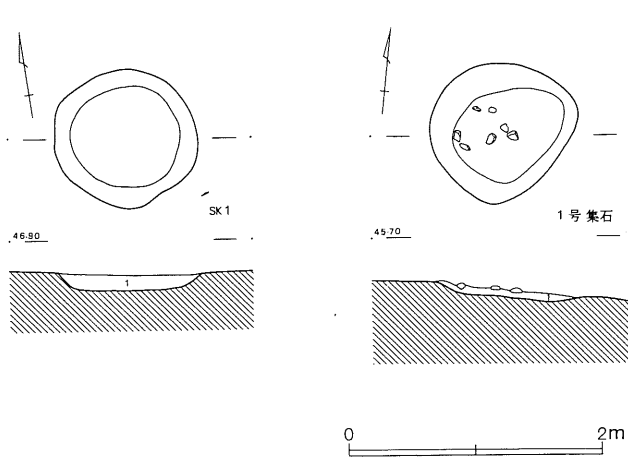
第1号集石土壇 (第161図)

I-30Grid に位置する。形態は楕円形を呈し、長径55cm、短径51cm、深さ5cmと浅く、底面は地形に沿って傾斜する。礫は拳大より小さく火熱を受け破碎している。礫は7点と少ないが集石土壇として扱う。

(3) グリッド出土遺物 (第162図)

土器 (第162図1~9)

1、2は縄文時代前期中葉黒浜式に比定され、胎土に多量の繊維を含む。1は半截竹管による平行沈線文と爪形文が施文され、内面は入念な研ぎが施される。2は羽状縄文が施文されるが、原体を異にするのか、施文方向を変えたものなのかは不明である。



第1号土壌

1 黒色土 粗い黒色土を主とし、粘性やや強いがしまり弱い

第1号集石

1 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒、炭化物少量含む

第161図 第1号集石・第1号土壌

3～5は、前期後半の諸磯a式に比定される。3は半截竹管による格子目文が描かれ、地文は単節RLを斜位施文する。4は単節LRを斜位に施文し、5は単節RLを横位に施文する。

6～8は中期後半加曾利EⅣ式に比定される。6は波状口縁を呈し、口縁下に1本の深い沈線が巡り、単節LRが横位に施文される。7は口縁部に幅狭の無文帯を有し、区画文としての隆線が巡る。単節LRを縦位に施文されている。8も口縁部に無文帯を有し、体部との区画文として隆線が施される。体部には単節LRが縦位施文される。

9は円筒埴輪で外面はハケ目、内面はナデ調整である。

石器 (第162図10～16)

打製石斧 (第162図10)

10は小形の打製石斧で表裏には加工はなく自然面を残す。刃部のみを調整加工し、直刃である。

スタンプ形石器 (第162図11、12)

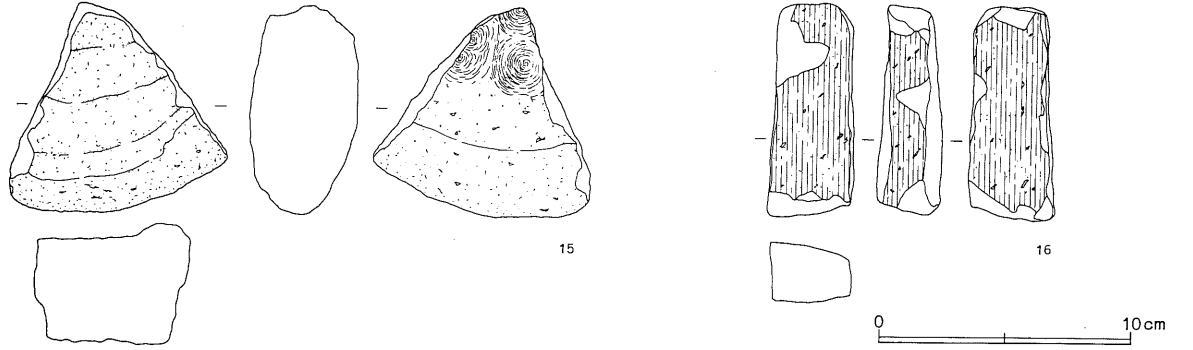
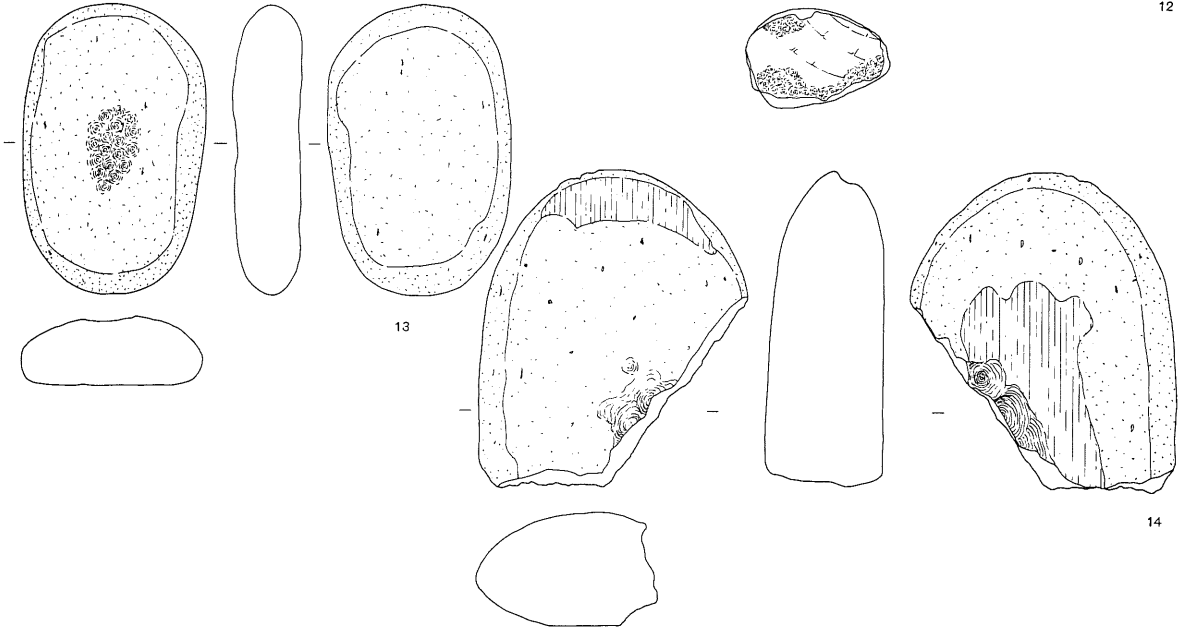
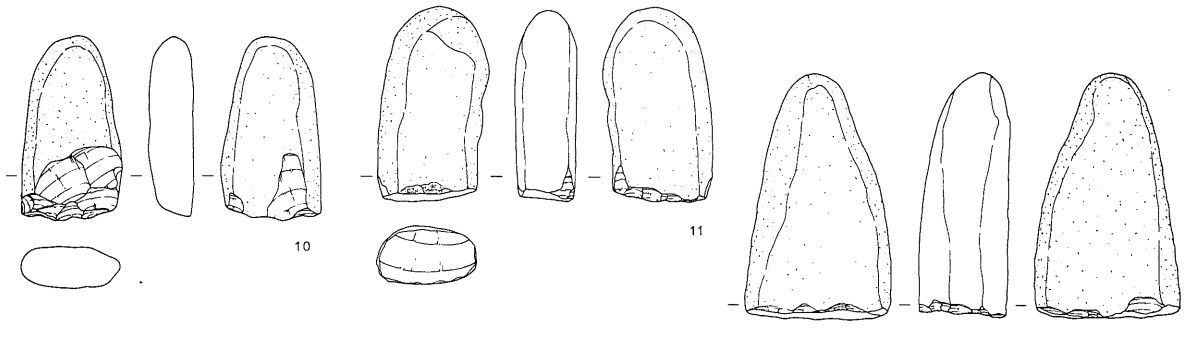
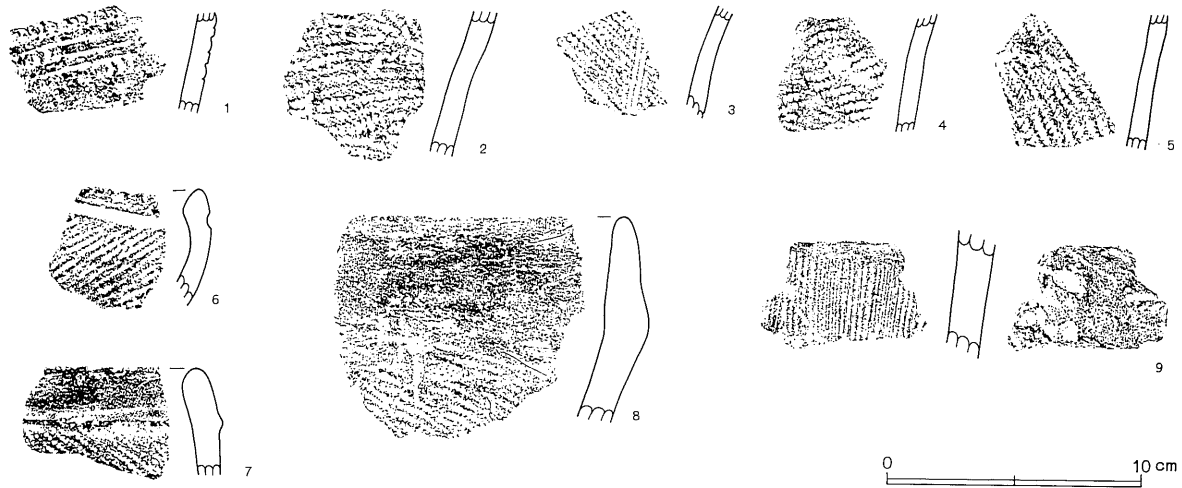
11はやや小形である。打割面は1回の剥離によって作られ、打割面からの細かい剥離が見られ、使用面には敲打痕が見られる。

敲石・磨石・凹石・石皿 (第162図13～15)

13は凹石であろうが、穿孔されたような窪みとは違い浅く敲打痕の集合する程度のものである。14は両面に凹穴と磨耗痕をもつ。15は石皿の欠損品である。裏面には蜂の巣状の深い凹穴をもつ。

第7表 石器計測表

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
162-10	表採	打製石斧	7.3	5.0	1.8	78	頁岩	
11	1号住居跡	スタンプ状石器	7.7	4.1	2.4	134	砂岩	
12	表採	スタンプ状石器	9.7	5.8	3.4	292	安山岩	
13	表採	凹石・磨石	11.5	7.1	2.7	356	閃緑岩	
14	表採	凹石・磨石	12.5	10.6	4.6	805	閃緑岩	
15	1号住居跡	石皿	8.3	8.5	4.2	294	角閃石安山岩	
16	表採	砥石	8.4	3.3	2.5	110	凝灰岩	



第162図 グリット出土遺物

Kaede-yama-nishi

楓山西遺跡

Ⅶ 楓山西遺跡の調査

1. 遺跡の概要

楓山西遺跡は、東平台地の北部に位置し、台地の縁辺部を蛇行して流れる和田吉野川の沖積地を臨む台地に所在する。地形は和田吉野川による開析谷が著しく発達し樹枝のような小支谷が北より入り込んでおり、これらの小支谷により台地は楓の葉のような形状を呈することから小字名の「楓山」と呼ばれるようになったのではないかとと思われる。

遺跡は北東へ張り出す台地の基部にあたり、小支谷の一つである「桜谷の谷」を臨む東側斜面部に位置する。標高37～47mを測り、水田面との比高差は最大17mの差をもつ。調査面積は12,603m²である。遺跡の南側には農道を挟んで東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区が所在し、北側は同一台地の先端部にあるた楓山北遺跡が攪乱地区を挟んで隣接する。また、西へ約180mの距離には楓山古墳が所在する。

今回の調査で検出された遺構は、住居跡7軒、竪穴状遺構2基、土壇7基、集石土壇2基、近世以降の溝3条であり、遺構の分布は台地斜面部に片寄る傾向が窺える。集落の範囲については、隣接する楓山北遺跡で古墳時代前半の住居跡1軒が検出されていることからこれを北限と考え、調査区北側の攪乱地区にも数件の住居跡が存在した可能性があるものの十軒程度の集落であったと思われる。時期的には古墳時代前期から中期にかけての集落跡であり、古墳時代前期とした住居跡からは数点の遺物が出土したに過ぎない。遺跡の主体となる古墳時代中期の住居跡は4軒検出され、形態においては方形若しくは長方形を呈し、規模では一辺が4.30mを測るものから8.10mを測るものまで規模において違いを示している。主柱穴は4本柱を基本とし、炉跡は各住居跡に検出され、その位置に規則性を見出せる。また貯蔵穴においても3軒の住居跡から検出され、その位置も住居跡南東コーナーと規則性をもつ。出土遺物では、2軒の大形住居跡から多量の土器が床面及び覆土下層から出土しており、小形壺、高杯、柑の個体数に対し、大・中形の壺や台付甕の個体数が極端に少ないように見受けられる。また、砥石4点も出土している。竪穴状遺構からは、比較的まとまった土器の出土がみられ、住居跡との有機的な関連性も想定される。土壇では、第1号土壇が竪穴状遺構と同様に焼土粒を多量に含むことから同じ機能を有していたと考えられる。集石土壇については2基検出されたが、具体的時期を特定できる遺物は出土していない。

2. 遺構と出土遺物

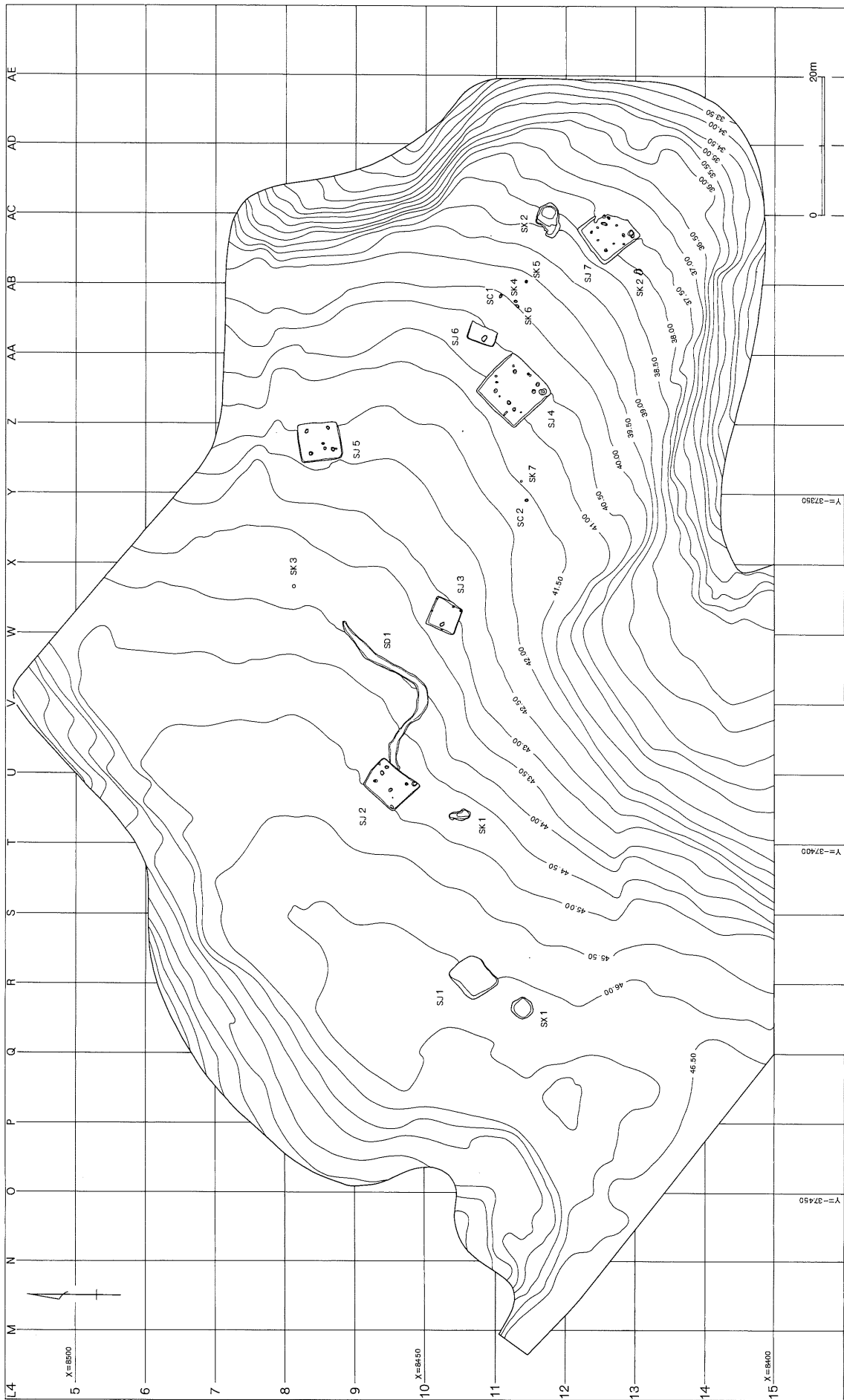
(1) 住居跡

第1号住居跡（第164～166図）

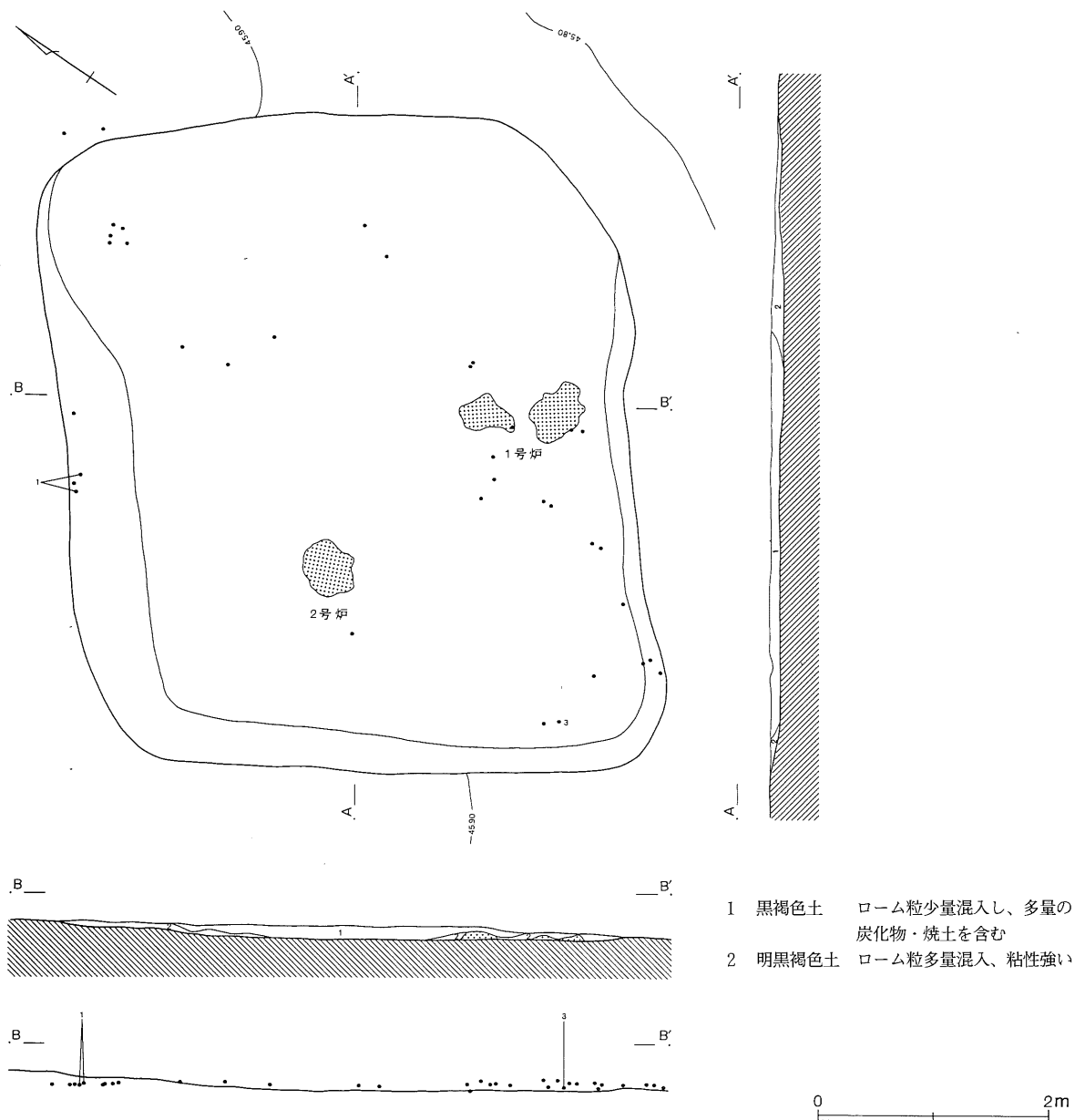
Q、R-10、11Gridで、調査区西側の標高46mの平坦面に位置する。南へ約6mの距離に第1号竪穴状遺構が所在する。形態は隅丸長方形で僅かに歪んでいる。規模は長軸5.67m、短軸4.87m、深さ4～11cmと浅く、主軸方位はN-55°-Eを指している。

住居跡覆土は、黒色土を基調とし、焼土・炭化物を多く含まれるが深度が浅いため堆積状態は明らかでない。壁は緩やかに立ち上がるため不明瞭であり、東壁は検出されなかった。床面は中央部で僅かに深くなる傾向が認められ、全体的に軟質な状態であった。壁溝、柱穴、貯蔵穴はともに検出されなかった。

炉跡は住居跡中央やや南寄りと南東壁寄りの2箇所検出された。1号炉は径1.08mで炉床が別れていることから先後関係があるとも思えるが不明である。炉床は比較的良く焼け硬い。2号炉は径50cmで炉床は良



第163图 楓山西遺跡全体图



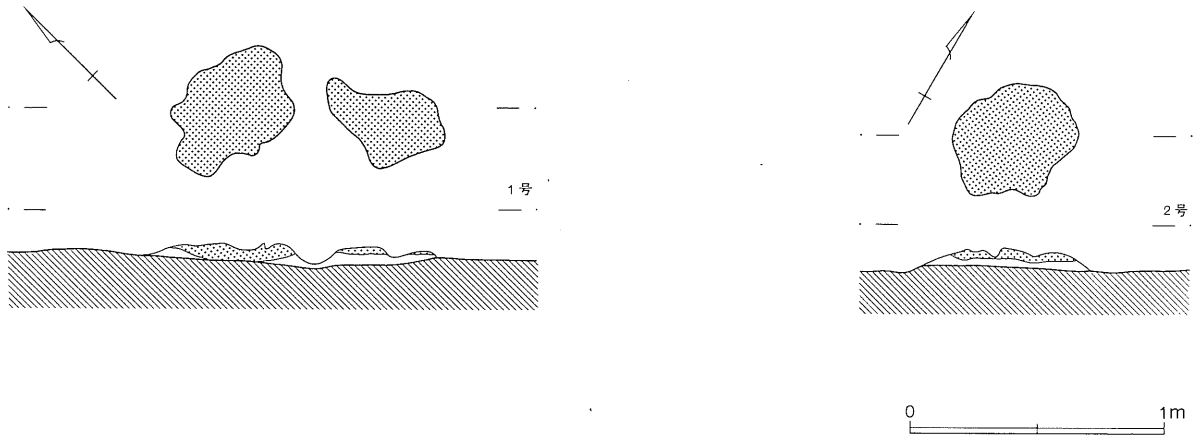
第164図 第1号住居跡 (L=46.20m)

く焼けて硬い。

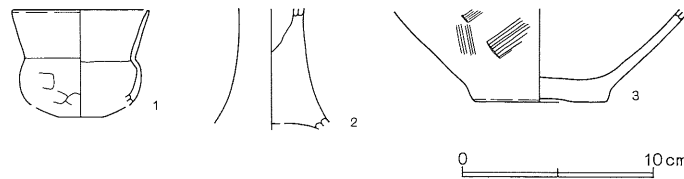
出土遺物では、甕、台付甕 (?), 高杯、埴の破片が出土し、このうち図化可能な土器は2個体であった。第166図1の小形の埴は西壁際より出土している。

第1号住居跡出土遺物 (第166図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	埴	口径 7.2 器高 (5.6)	口縁部は直線的に外反し、体部は張る。	B D・淡褐色 ・ B	30%
2	高杯	——	柱状にのびる脚部であり、坏部との接合痕がみられる。外面は篋ミガ坏部の差し込む接合痕あり。	B D・橙 ・ B	20%
3	甕	底径 7.0	胴下端にハケ。磨滅が著しい。	B D F・橙	10%



第165図 第1号住居跡炉跡 (L=46.00m)



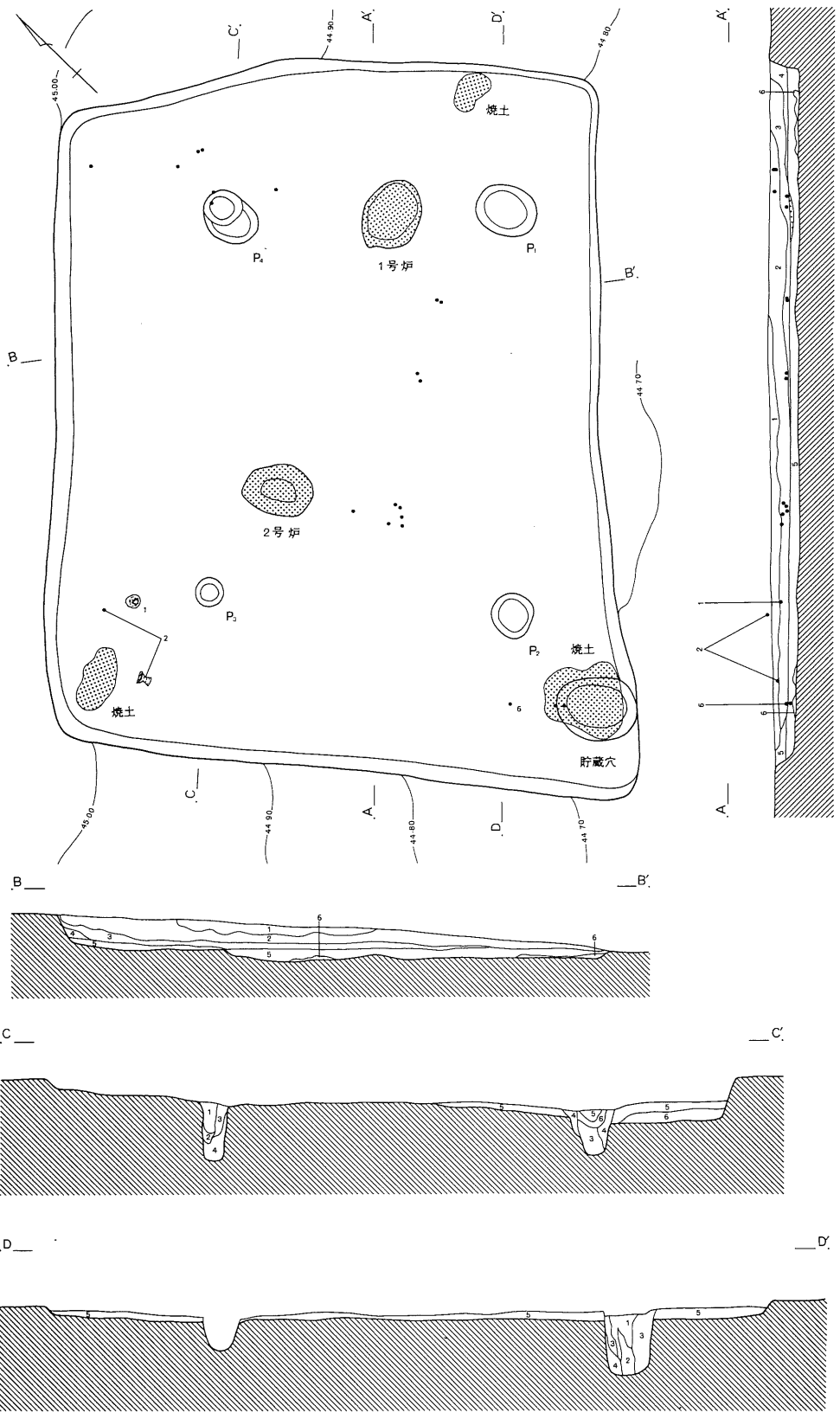
第166図 第1号住居跡出土遺物

第2号住居跡 (第167～169図)

T、K-9 Grid に位置する。調査区の平坦面から傾斜部へ移行する標高45m前後に所在し、等高線に沿って構築される。耕作溝が北東側で重複する。南西約22mの距離に第1号住居跡があり、南へ約6mの距離に第1号土壌が検出されている。形態は長方形を呈し、規模は長軸6.72m、短軸4.92m、深さ8～27cmを測る。主軸方位はN-41°-Eを指している。

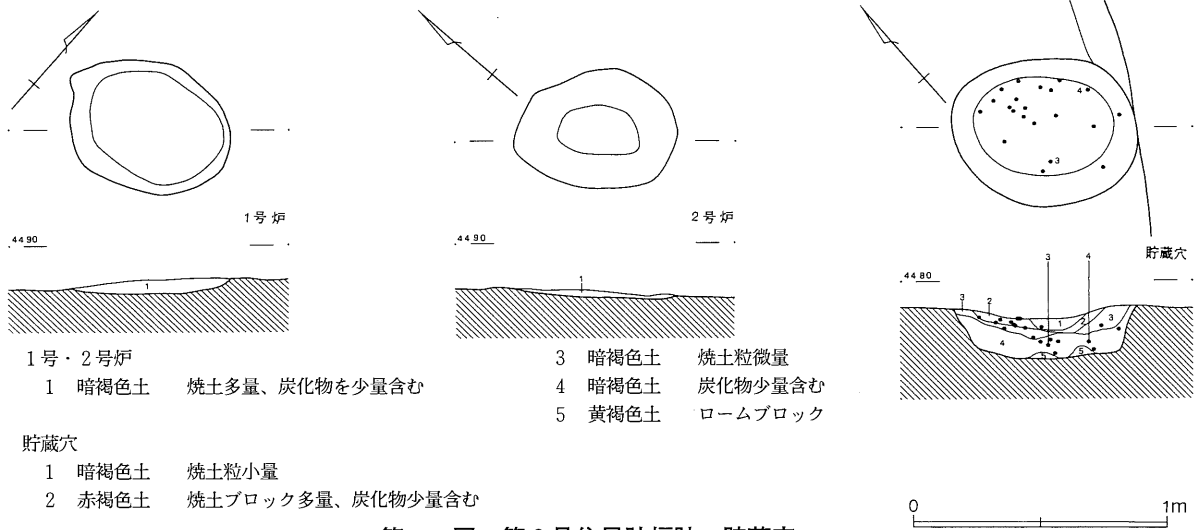
覆土は上層が黒色土、下層が褐色土を基調とした自然堆積の埋没であり焼土、炭化物を多く含む。壁は西壁で直線的に立ち上がり、東壁は僅かに検出されただけであった。床面は概ね平坦で全体に硬く締まっていた。住居南西コーナーと北東コーナー付近の床面より焼土の分布が確認された。ピットは4基検出され支柱穴と考えられる。床面からの深さはP1=52cm、P2=20cm、P3=32cm、P4=39cmで南のP2↔P3の間隔はP1↔P4に比べ幅広い。炉跡は2箇所検出され、P1↔P4を結ぶラインのやや東寄りに1号炉、住居跡中央やや南西の壁寄りに2号炉がそれぞれ検出された。形態は不整楕円形を呈する。1号炉は長径63cm、短径47cm、深さ5cmで炉床は比較的良く焼けていた。2号炉は長径64cm、短径47cm、深さ4cmと浅く炉床も僅かながら焼けた痕跡が認められた。貯蔵穴は南東コーナー内側の壁に接する位置で検出され、確認段階で焼土の分布が見られた。規模は長軸73cm、短軸58cm、深さ18cmで断面は挿鉢形を呈する。掘り方は住居跡中央部から北側にかけて掘り込まれ、南西隅には住居構築以前の風倒木によると思われる痕跡が観察された。

出土遺物では、台付甕、高杯、埴が出土した。第169図1と2は住居跡南西コーナー寄りの床面から出土し、3、4は貯蔵穴覆土より出土している。これ以外は全て小破片であった。



- | | | | | |
|--------|-----------------------|----|--------|---------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒少量混入し、炭化物を多量に含む | 柱穴 | 1 黒褐色土 | ローム粒、炭化物、焼土を少量含む |
| 2 暗褐色土 | ローム粒多量混入し、炭化物を少量含む | | 2 黒色土 | 炭化物、焼土を微量 |
| 3 褐色土 | 焼土粒多量混入しローム粒、炭化物を少量含む | | 3 暗褐色土 | ローム粒多量混入 |
| 4 黄褐色土 | ローム粒多量混入し、微量の焼土粒を含む | | 4 褐色土 | ローム粒、ロームブロック混在 |
| 5 暗褐色土 | ロームブロック混在、粘性強、貼床 | | 5 明褐色土 | ロームブロック混在 |
| 6 黄褐色土 | ロームブロック | | 6 黒褐色土 | 灰色粘土ブロックとロームブロックの混入 |

第167図 第2号住居跡 (L=45.30m)



1号炉

2号炉

貯蔵穴

1号・2号炉

1 暗褐色土 焼土多量、炭化物を少量含む

3 暗褐色土 焼土粒微量

4 暗褐色土 炭化物少量含む

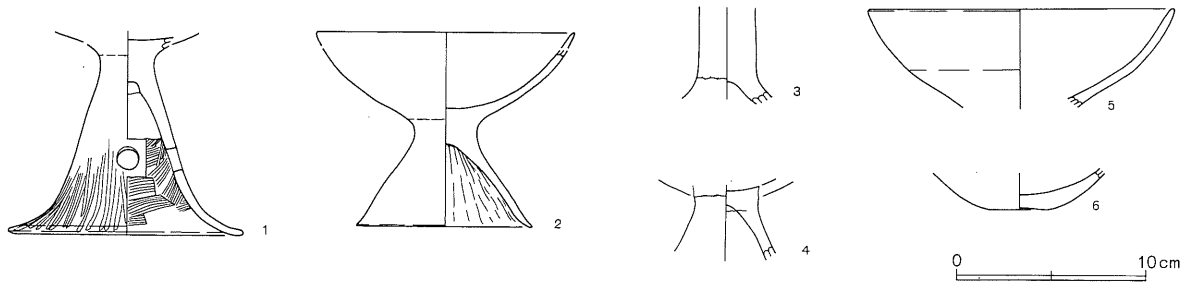
5 黄褐色土 ロームブロック

貯蔵穴

1 暗褐色土 焼土粒少量

2 赤褐色土 焼土ブロック多量、炭化物少量含む

第168図 第2号住居跡炉跡・貯蔵穴



第169図 第2号住居跡出土遺物

第1号住居跡出土遺物 (第166図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	高杯	脚端径 12.3 脚高 10.3	脚柱部は直線的に外反し、脚端部で強く開く。脚柱部の3箇所に穿孔脚柱部内面ヨコハケ。脚端部内面ヨコハケ→ナデ。脚部外面ハケ→ナデ。器面は磨滅している。	B E F・褐色 ・B	50%
2	高杯	口径 (13.5) 器高 (10.2) 脚端径 (8.2)	口縁部は緩やかに立ち上がる。脚部は直線的に外反し、脚端部を摘み出して外反させる。坏部内外面ナデ、ミガキ?。脚部外面ナデ、ミガキ?。内面ナデ。器面の剥落が著しい。	B E F・褐灰色 ・B	90%
3	高杯	—	脚部は細い柱状を呈し、脚端部へと外反する。器面は磨滅している。	B F・褐灰色 ・B	10%
4	高杯	—	脚柱部は直線的に外反する。坏部との接合痕あり。脚部外面ナデ。器面の剥落著しい。	B F・橙 ・B	20%
5	高杯	口径 (16.0)	粘土積み上げ成形。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。口唇部はやや尖る。内外面ナデ。器面は磨滅している。	B D F・にぶい橙 ・B	10%
6	埴	底径 3.0	底部から胴部下端へと緩やかに立ち上がる。底部は窪む。内外面ナデ器面は磨滅している。	B D F・橙 ・A	20%

第3号住居跡（第170～171図）

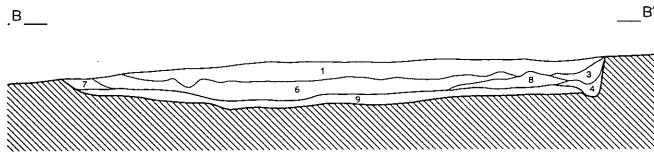
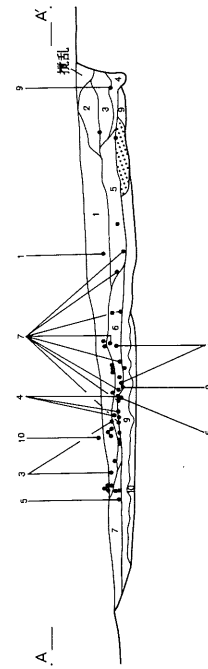
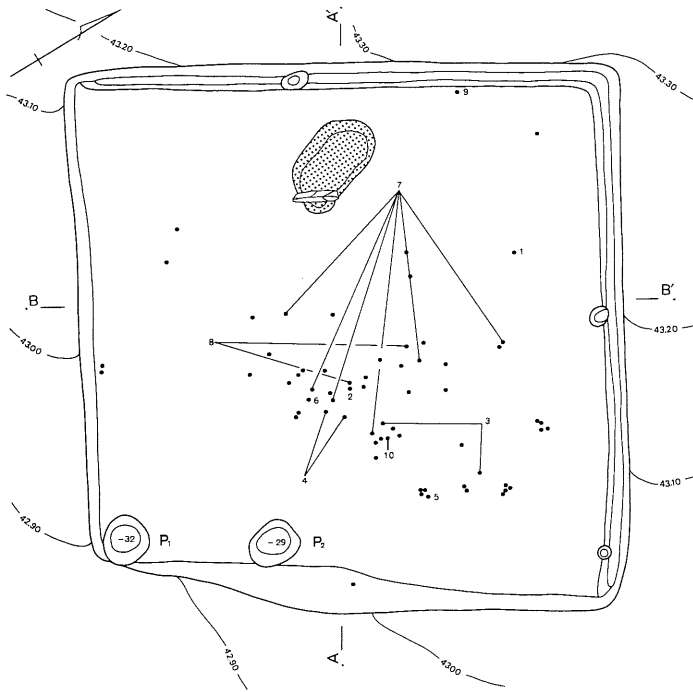
W-10 Grid で、調査区中央の南東側へ傾斜する斜面部に位置し、標高43m前後を測る。東側へ約26mの距離には第4号住居跡があり、北東約24mの距離に第5号住居跡が所在する。形態は正方形を呈し、規模は長軸4.35m、短軸4.25m、深さ6～30cmを測る。主軸方位はN-66°-Wを指している。

覆土は黒褐色土を基調としているが、壁際にローム土の堆積が認められることから人為的な埋め戻しがなされた可能性も否定できない。壁は傾斜する地形にあるため北側でほぼ垂直に立ち上がるが、東側では僅かな立ち上がりが見出されたに過ぎない。幅20cmの壁溝が北壁から西壁にかけて巡るが、他の部分では存在しなかった。床面はほぼ平坦で、住居跡中央から炉跡周辺は堅緻であるが、南西壁側でやや締まりを欠いていた。ピットは東壁際で2基検出され、P1は楕円形で深さ29cm、P2は不整形で深さ32cmを測る。P1は覆土の堆積状況や位置関係から柱穴とするよりも貯蔵穴として捉えられよう。P2は覆土の堆積状態から柱穴と考えられる。この他に北側周溝に2基のピットが検出されたが、柱穴かどうかは不明である。炉跡は地床炉で西壁寄り中央から検出された。形態は不整形長方形で長軸方向は壁に対し斜方向を示す。規模は長軸75cm、短軸45cm、深さ8cmを測り、住居跡中央側に枕石1点が壁と並行して据え置かれている。覆土は焼土・炭化物を多量に含むものの炉床面は判然としない。掘り方は住居跡中央付近において緩い起伏をもち一定していない。掘り方は灰白色粘土層に達している。

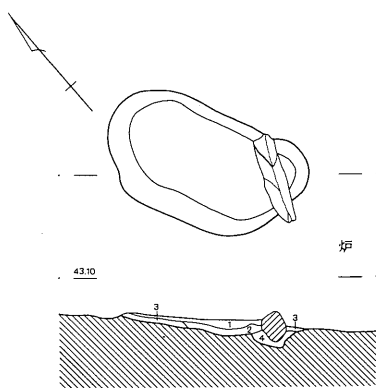
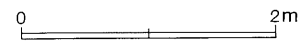
出土遺物は、壺、台付甕、高杯、埴、砥石等があり、その分布は、住居跡中央部付近の床面に見られる。

第3号住居跡出土遺物（第171図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	高杯	——	坏部は緩やか内湾する。脚部接合の為に尖ったホゾを持つ。外面ミガキ。内面は剥落が著しい。	BF・淡橙 ・B	10%
2	高杯	脚高 5.0 脚端径 11.3	脚柱部から裾部へ「く」の字状に屈曲し、裾部内面の稜は明瞭。裾部はやや内湾する。脚柱部上半に粘土積み上げ痕を残す。外面ミガキ。脚柱部内面ナデ。裾部内面篋ミガキ。外面に赤彩。脚端部に黒斑	BF・褐白色 ・A	40%
3	高杯	脚柱長 5.6	脚柱部から裾部へ「く」の字状に屈曲し、裾部内面の稜は明瞭。脚柱部上半に粘土積み上げ痕を残す。外面入念なミガキ。裾部内面篋ミガキ。外面と裾部の一部に赤彩。	BF・黄白色 ・A	30%
4	高杯	脚柱長 5.0	脚柱部は比較的長く、脚柱部から裾部へ「く」の字状に屈曲。裾部内面の稜は明瞭。脚柱部上半に粘土積み上げ痕を残し、絞り込み見られる。外面入念なミガキ。脚柱部内面ナデ。裾部内面篋ミガキ。外面に赤彩。	BF・褐白色 ・A	40%
5	高杯	脚柱長 (6.5)	脚柱部から裾部へ「く」の字状に屈曲し、裾部内面の稜を持つ。脚柱部上半に粘土積み上げ痕を残す。外面入念なミガキ。脚柱部内面ナデ。裾部内面篋ミガキ。外面に赤彩。	BF・橙白色 ・A	30%
6	高杯	——	脚柱部は直線的に外反する。脚柱部上半に粘土積み上げ痕を残す。外面入念なミガキ。脚柱部内面ナデ。外面に赤彩。	BF・橙 ・B	20%
7	小形壺	口径 (14.0)	口縁部は直線的に外反し、口唇部で直立ぎみに立ち上がる。口唇は尖る。外面入念なミガキ。内面ナデ。内外面に赤彩。	BF・黄褐色 ・B	10%
8	埴	——	胴部は球形を呈し、内面に粘土積み上げ痕を残す。外面ミガキ。内面ナデ。外面に赤彩。器面はやや磨滅している。	BF・褐色 ・B	10%
9	台付甕	脚端径 8.5	脚部は直線的に外反し、外面は篋ミガキ。脚部内面やや雑なナデ。体部との接合痕が明瞭。器面はやや磨滅している。	BF・黄褐色 ・B	20%

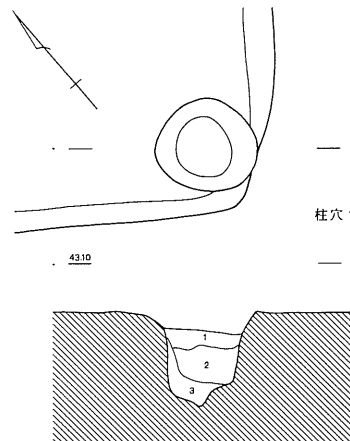


- | | | |
|----|------|-----------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒少量混入、焼土粒を多量に含む |
| 2 | 褐色土 | ローム粒多量混入 |
| 3 | 明褐色土 | ローム粒多量混入、焼土粒を少量含む |
| 4 | 明褐色土 | ロームブロック少量混入、焼土ブロック多量混入 |
| 5 | 黒色土 | ローム粒微量混入、炭化物・焼土粒を多量含む |
| 6 | 黒褐色土 | ローム粒多量混入、粘性強 |
| 7 | 褐色土 | ローム粒多量に含む |
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒多量、粘性、しまり強い |
| 9 | 暗褐色土 | ロームブロック混入、焼土粒、炭化物少量含む
貼床 |
| 10 | 褐色土 | ロームブロック混入 |



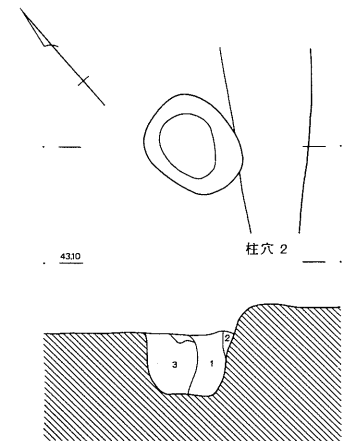
炉

- | | | |
|---|-------|----------------|
| 1 | 明褐色土 | 焼土粒・炭化物多量に含む |
| 2 | 暗赤褐色土 | 焼土粒多量混入 |
| 3 | 黄褐色土 | ローム粒多量、焼土少量含む |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒少量、枕石埋設に伴う |



柱穴 1

- | | | |
|---|------|-----------------|
| 1 | 暗褐色土 | 焼土粒多量混入、炭化物少量含む |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒少量混入 |
| 3 | 黄褐色土 | ロームブロック少量混入 |



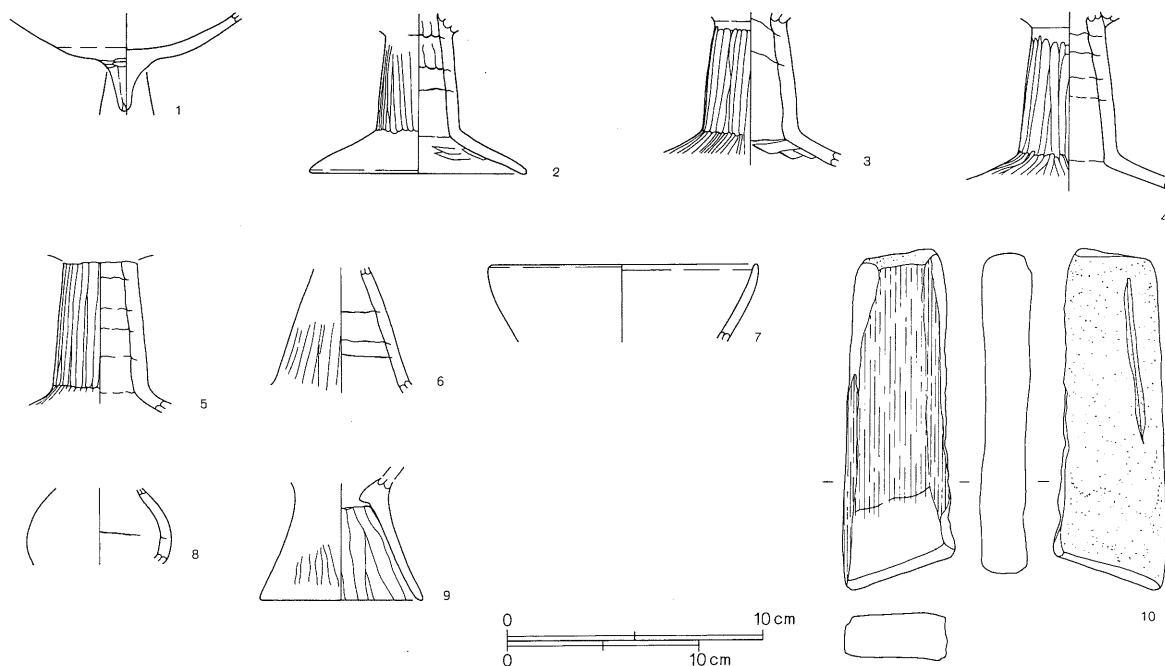
柱穴 2

- | | | |
|---|------|-------------|
| 1 | 暗褐色土 | 焼土粒、炭化物少量混入 |
| 2 | 暗褐色土 | 炭化物少量含む |
| 3 | 黄褐色土 | ロームブロック多量混入 |



第170図 第3号住居跡 (L=43.50m)

砥石は2点出土し、そのうち1点は風化していたため図化することはできなかった。覆土中層より出土し、長さ15.5cm、幅5.5cm、厚さ4.5cmの砂岩である。



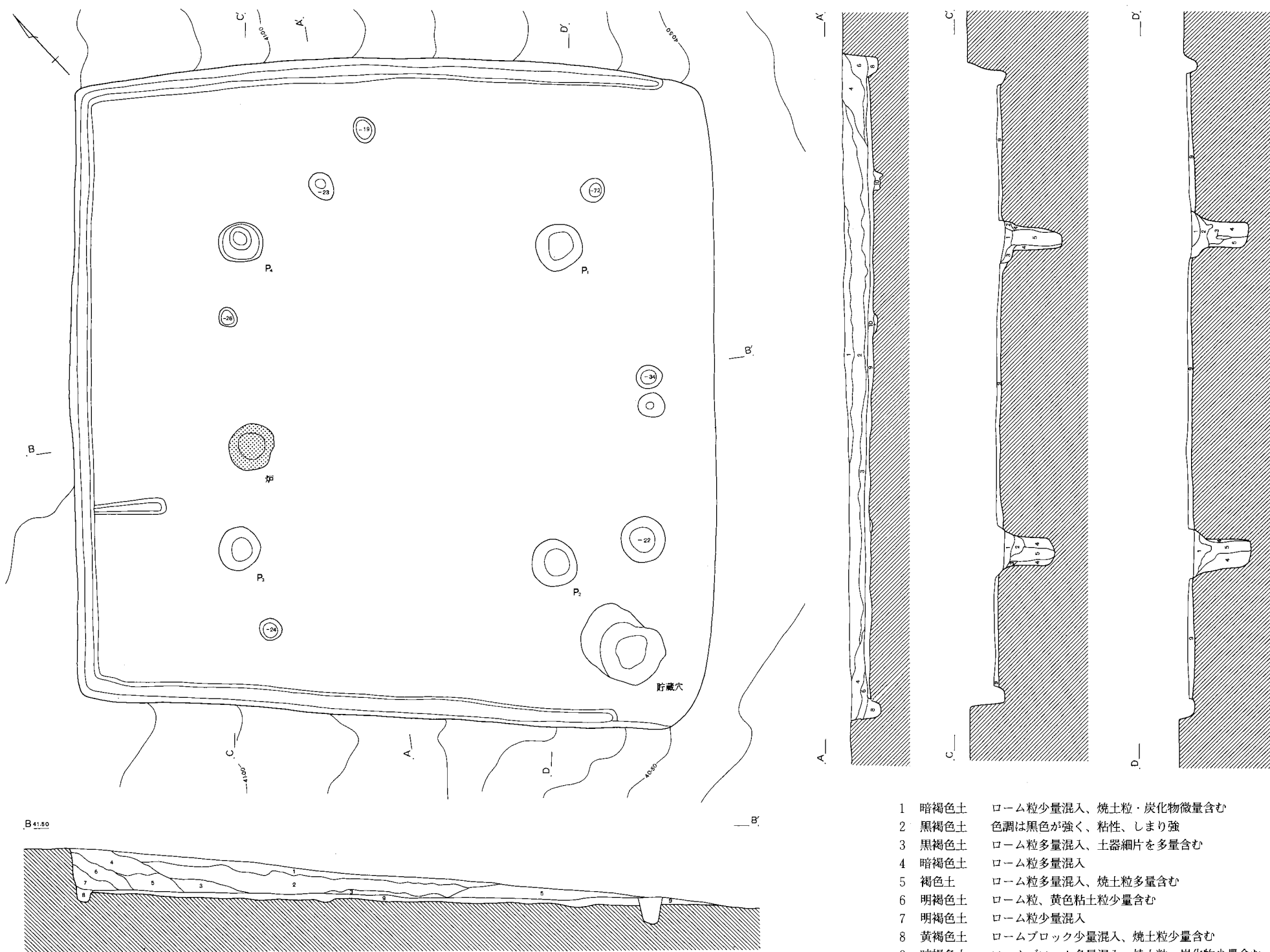
第171図 第3号住居跡出土遺物

第4号住居跡（第172～176図）

Y、Z-10、11Gridで検出された。標高は41m前後を測り、台地が南東側に向け傾斜する斜面部のほぼ中間に位置し、等高線に沿って構築されている。住居跡の東壁は斜面であるため流失している。形態は正方形を呈しており、規模は長軸8.15m、短軸8.0m、深さは西壁で50cmを測る。主軸方位はN-45°-Eを指している。

住居跡の覆土は、北壁から西壁際にかけて三角堆積が認められる一方、東壁側からの堆積土も観察された。壁はやや傾斜するものの直線的に立ち上がる。壁溝は幅24cm、深さ15cmで底面は凹凸がみられ一定でない。東壁側では壁溝が検出されず、存在しなかった可能性が考えられる。床面は平坦で全体的に堅緻であった。ピットは13基検出され、このうち支柱穴はP1=70cm、P2=88cm、P3=68cm、P4=70cmの4本で柱痕跡も観察された。東壁際の中央に深さ34cmのピットが検出されており、出入口に伴う施設である可能性がある。炉跡はP3 ↔ P4を結ぶラインのややP3寄りに検出され、形態は楕円形で、規模は長径59cm、短径52cm、深さ5cmを測り、枕石2個が住居中央寄りに据えられている。炉床面は比較的良く焼けている。貯蔵穴は住居跡南東コーナー内側で検出され、平面形は隅丸長方形を呈するが、更に一段不整楕円形の掘り込みがなされている。長軸1.04m、短軸0.74m、深さ40cmである。貯蔵穴の遺物出土状態は上層と下層とに分けられ、このことから本住居の廃絶から埋没の過程において何らかの人為的な行為が行われた可能性を窺わせる。住居掘り方は、全体的に薄いものの凹凸が認められる。

出土遺物は、本遺跡のなかで一番多くの個体数が検出されている。器種は壺、台付甕(?)、小形広口壺、高杯、埴、砥石等であり、その遺物は、覆土中層から床面にかけて出土し、特に床面と覆土下層において最も出土量が多くみられる。その分布状態は第178図に示したとおり、住居跡西側に濃密な遺物分布を示して



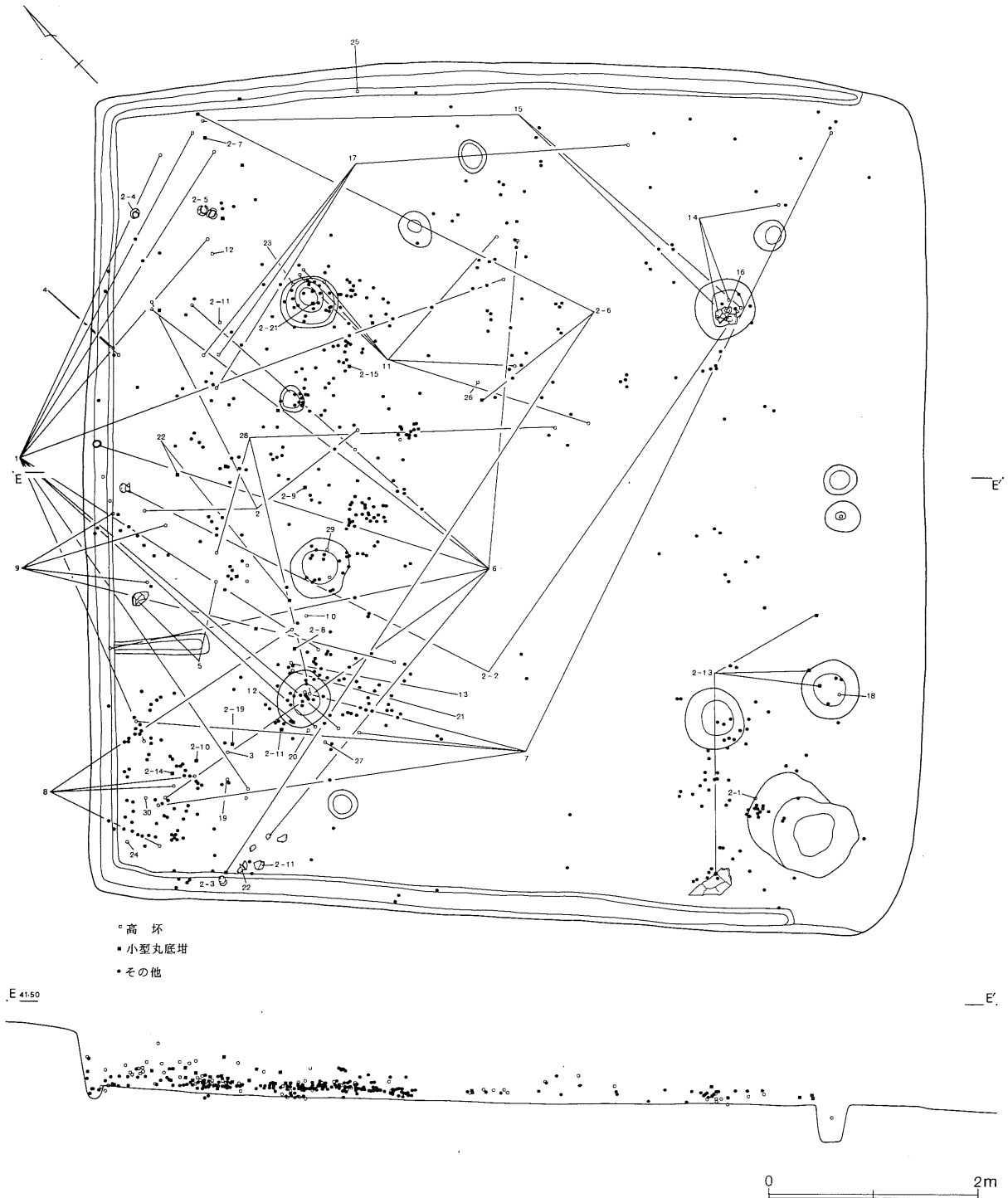
- | | |
|--------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物微量含む |
| 2 黒褐色土 | 色調は黒色が強く、粘性、しまり強 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒多量混入、土器細片を多量含む |
| 4 暗褐色土 | ローム粒多量混入 |
| 5 褐色土 | ローム粒多量混入、焼土粒多量含む |
| 6 明褐色土 | ローム粒、黄色粘土粒少量含む |
| 7 明褐色土 | ローム粒少量混入 |
| 8 黄褐色土 | ロームブロック少量混入、焼土粒少量含む |
| 9 暗褐色土 | ロームブロック多量混入、焼土粒・炭化物少量含む |

柱穴

- | | |
|--------|---------------------|
| 1 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物少量含む |
| 2 暗褐色土 | ローム粒少量混入 |
| 3 黄褐色土 | ロームブロック多量混入 |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック多量混入、粘性、しまり強 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒少量混入、しまり欠く |

第172図 第4号住居跡 (L=41.20m)

0 2m

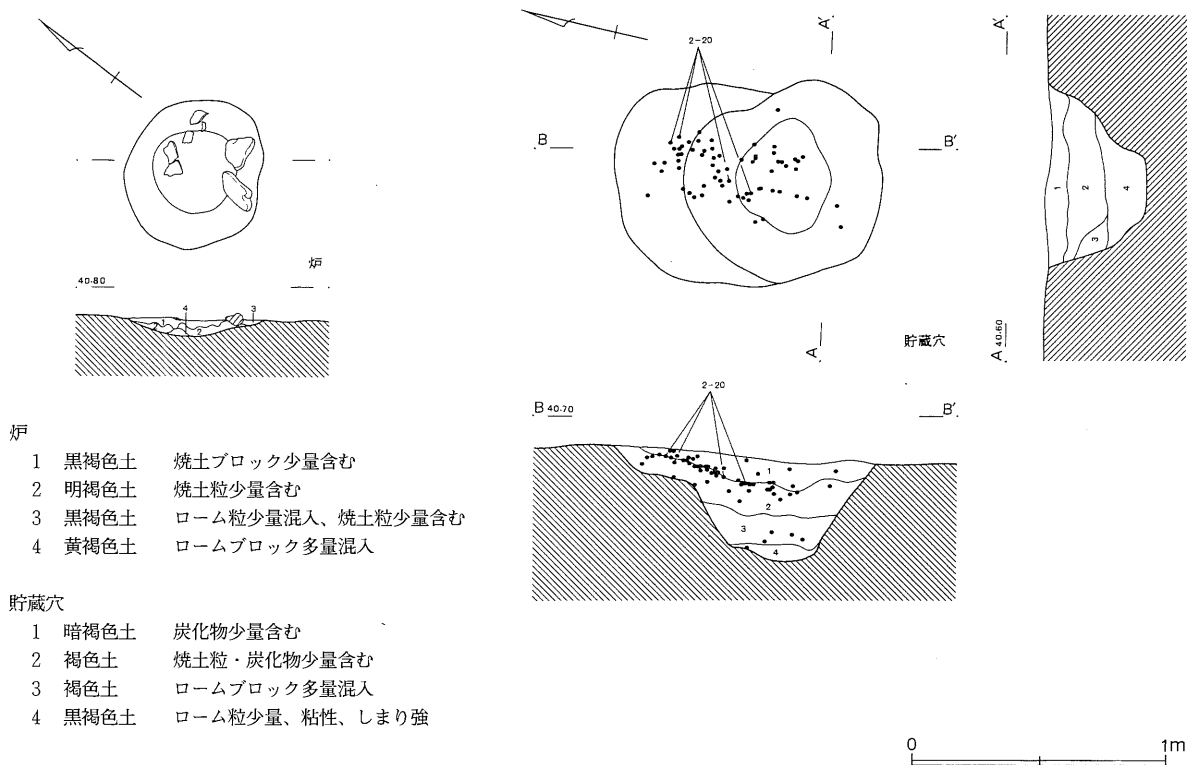


第173図 第4号住居跡遺物分布図

いる。この分布を更に細かく見ていくと7箇所遺物の集中が認められる。この遺物集中箇所を便宜的にブロックと呼び個別説明を加えておきたい。

ブロック1 住居跡北東側のP1確認面での遺物の纏まり。器種は高杯脚柱部、埴口縁部片等で、出土状態は、P1の確認面から高杯脚柱部3個体が据え置かれた状態で出土し、接合関係でみると住居跡西側の壁際出土の遺物と接合が認められる。

第175図14～16、第176図2。



第174図 第4号住居跡炉跡・貯蔵穴

ブロック2 住居跡南東側貯蔵穴周辺。壺、小形壺、高杯脚柱部等でブロック内での接合関係にとどまる。第175図18、第176図1、13。

ブロック3 住居跡中央の北壁よりでP1↔P4ラインの中間範囲。器種的には高杯坏部・脚柱部、坩等である。ブロック4との接合関係や住居跡北・南壁際出土の遺物とも接合する。第175図15、23、第176図21。

ブロック4 住居跡北西側のP4周辺。器種では小形壺、高杯脚柱部等で、ブロック3との接合関係を持つものもあるが、接合関係を持たない土器も含まれる。第175図23、第176図15、21。

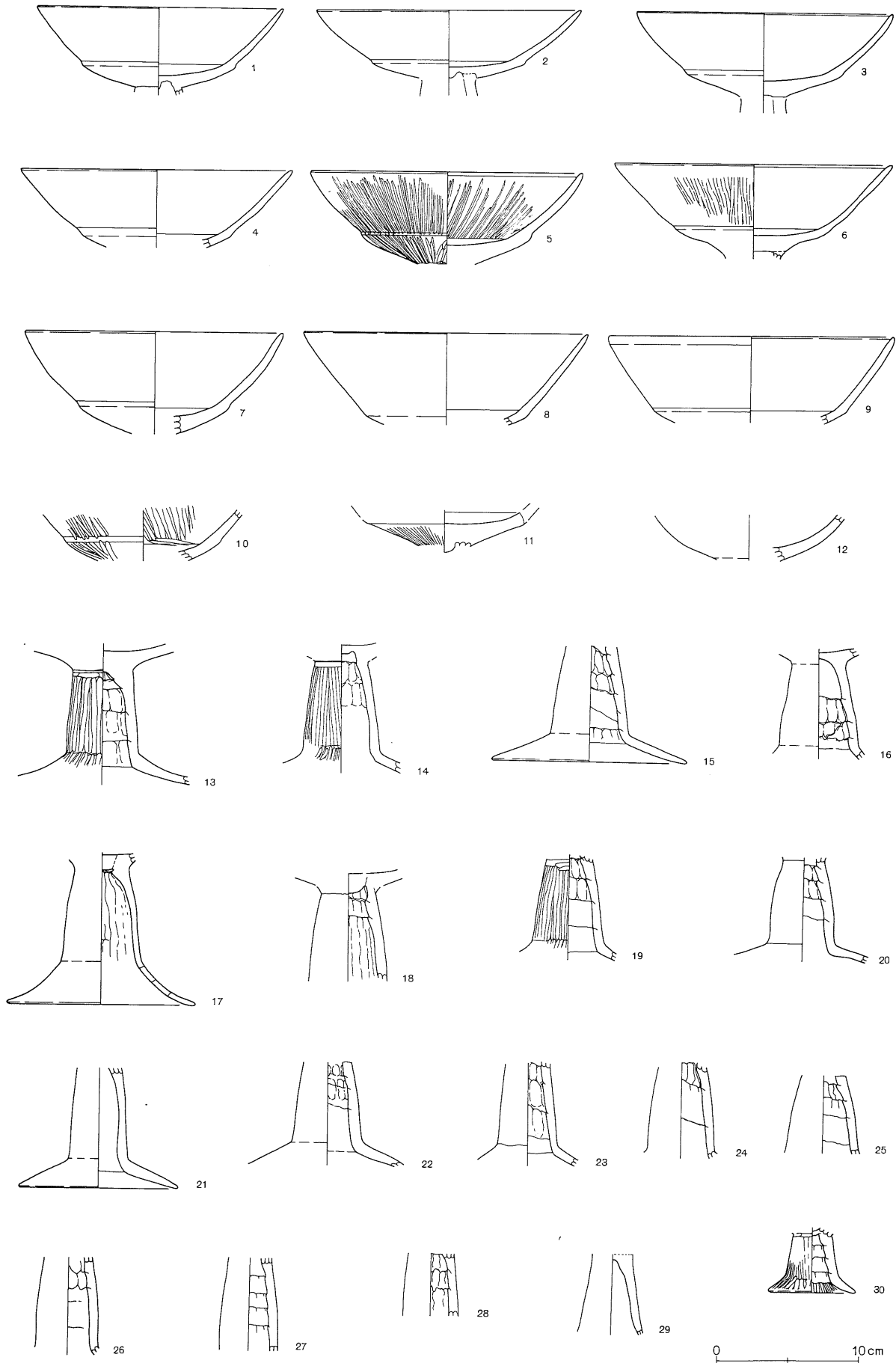
ブロック5 住居跡西側中央の炉跡周辺。器種では高杯坏部・脚柱部、坩等で、住居跡西壁との接合関係やブロック内での接合関係が認められる。第175図2、10、29、第176図9。

ブロック6 住居跡南西側のP3周辺。器種では高杯脚柱部、坩等で、ブロック1、7との接合関係を持つが、接合関係を持たない土器も多い。第175図13、21、20、27、第176図8、12、18。

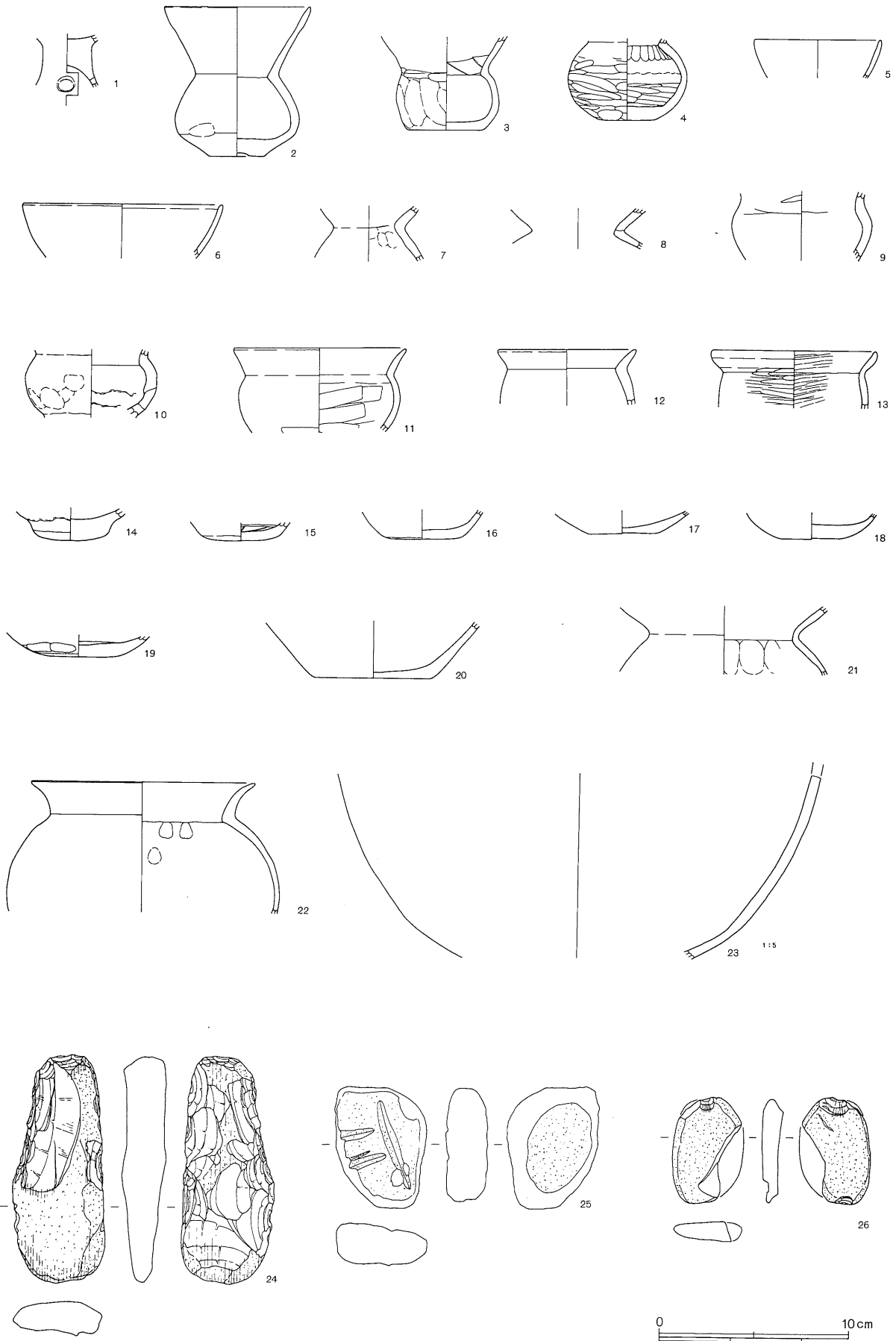
ブロック7 住居跡南西コーナー周辺。器種では高杯坏部・脚柱部、坩等でブロック1、3、6と接合関係を持つが、接合関係を持たない土器も多い。第175図3、8、24、30、第176図10、14、19。

これ以外として第175図1のように住居跡の西壁に沿って接合関係を結ぶ土器や第175図4や第176図5のように散在することなく遺棄されたものも見られる。

以上のように平面分布から7箇所遺物の集中が認められ、更にブロック毎の器種に偏る傾向が窺える。このような出土状態は、規模は小さいものの第7号住居跡においてもみられる。



第175图 第4号住居跡出土遺物(1)



第176图 第4号住居跡出土遺物(2)

第4号住居跡出土遺物（第175図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	高杯	口径 17.1 坏部高 5.6	口縁部はやや内湾ぎみに開き、口唇は尖る。坏部に段をもつ。脚柱部接合の為のホゾがある。器面は全体的に磨滅している。	B D F・黄橙 ・ B	30%
2	高杯	口径 (18.5) 坏部高 4.7	口縁部は直線的に開き、口唇端部は尖る。坏部に段をもち、脚柱部との接合の為のホゾが認められる。二次焼成を受け磨滅している。	B D F・橙／褐色 ・ B	20%
3	高杯	口径 (17.9) 坏部高 (4.8)	口縁部はやや内湾ぎみに開き、口唇は尖る。坏部に段をもつ。外面ミガキ。器面は剥落と磨滅が目立つ。	B D F・橙 ・ C	20%
4	高杯	口径 (19.0)	口縁部は直線的に開き、口唇端部は尖る。坏部に段をもつ。	B F・赤褐色・ B	10%
5	高杯	口径 18.9 坏部高 6.5	口縁部はやや内湾ぎみに開き、口唇は尖る。口唇部内側に浅い凹線が1条巡る。坏部に明瞭な段をもつ。内外面ミガキ。脚柱部との接合の為のホゾが認められる。内外面に赤彩。	B F・鈍い橙 ・ B	40%
6	高杯	口径 19.4 坏部高 5.4	口縁部は直線的に開き、口唇端部は尖る。坏部は外反し、口縁部へ移行する。明瞭な段をもつ。粘土紐積み上げ痕が明瞭。内外面ミガキ。内外面に赤彩。内面は磨滅。	B D F・黄褐色 ・ B	30%
7	高杯	口径 (18.1) 坏部高 (7.0)	口縁部はやや内湾ぎみに開き、口唇は尖る。坏部に明瞭な段をもつ。口縁部上半ヨコナデの後、ミガキ。内面タテミガキ。内外面に赤彩	B F・鈍い黄褐色 ・ B	20%
8	高杯	口径 (20.0)	口縁部はやや長く直線的に開く。口唇端部は尖る。坏部に段をもつ。二次焼成を受け磨滅。	B D F・赤褐色 ・ B	10%
9	高杯	口径 (19.7)	口縁部はやや長く直線的に開く。口唇部外面が垂直な面をもつ。口唇端部は尖る。坏部に段をもつ。内外面ミガキ。内外面赤彩。	B F・褐色 ・ B	10%
10	高杯	——	口縁部は直線的に開くと思われる。坏部に段をもつ。内外面ミガキ。内外面赤彩	B F・明褐色 ・ B	10%
11	高杯	——	坏部外面は外反しながら口縁部へ移行する。坏部に段をもつ。内外面ミガキ。粘土紐積み上げ痕明瞭。脚柱部との接合の為のホゾがある。	B D F・橙	20%
12	高杯	——	坏部は内湾ぎみに開く。内外面ナデ。内外面赤彩。	B D F・褐色・ B	10%
13	高杯	脚柱長 5.6	脚柱部から裾部へ「く」の字状に屈曲。裾部内面の稜は明瞭。裾部は外反する。脚柱部の内面上半に粘土積み上げ痕を残すナデ。外面ミガキ。内面ナデの後、篋ミガキか。外面赤彩。	B D F・黄褐色 ・ B	30%
14	高杯	脚柱長 6.2	脚柱部はやや外反し、裾部へ「く」の字状に屈曲。裾部内面の稜は明瞭。脚柱部内面に粘土積み上げ痕を残すナデ。外面ミガキ。内面ナデの後、篋ミガキか。外面赤彩。	B F・鈍い黄褐色 ・ B	20%
15	高杯	脚端径 13.6	脚柱部から裾部へ「く」の字状に屈曲。裾部内面の稜あり。器面は磨脚柱長 (6.0) 減著しい。	B D F・黄褐色 ・ B	40%
16	高杯	脚柱長 5.6	坏部内面中央がやや窪む。脚柱部はやや外反し、裾部へは前者と比較すると緩やかに移行する。脚柱部の内面下半に粘土積み上げ痕が顕著。裾部内面には稜をもたない。内外面ナデ。外面赤彩。	B F・暗褐色 ・ B	30%
17	高杯	脚端径 13.2 脚柱長 6.5	脚柱部から裾部への移行は緩やか。内面に絞り込みが見られる。裾部内面は稜をもたない。裾部は外反する。二次焼成を受け磨滅著しい。	B D F・褐灰色 ・ B	30%
18	高杯	——	坏部のホゾが差し込まれ、脚柱部の内面上半に粘土紐積み上げ痕と絞り込みが見られる。器面は全体的に磨滅。	B F・褐色 ・ B	20%
19	高杯	脚柱長 5.0	脚柱部は直線的にやや外反し、裾部へ「く」の字状に屈曲。脚柱部の内面上半に粘土積み上げ痕とナデ。外面はミガキ。外面赤彩。	B C F・黄褐色 ・ B	20%

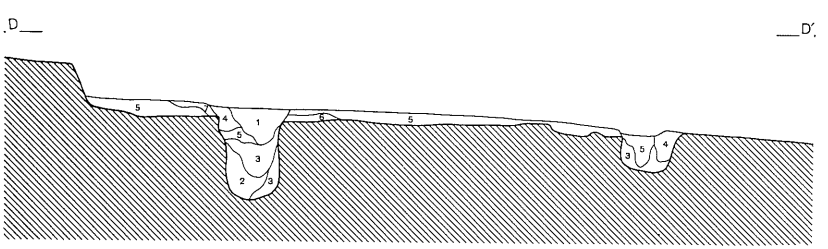
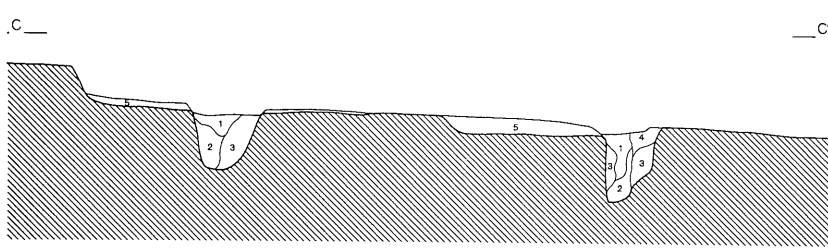
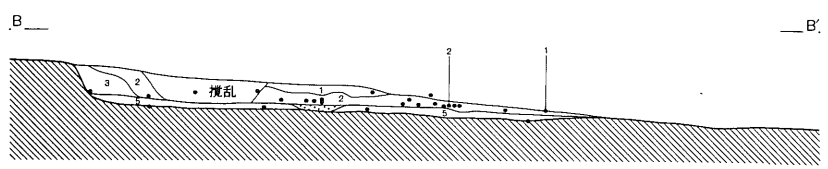
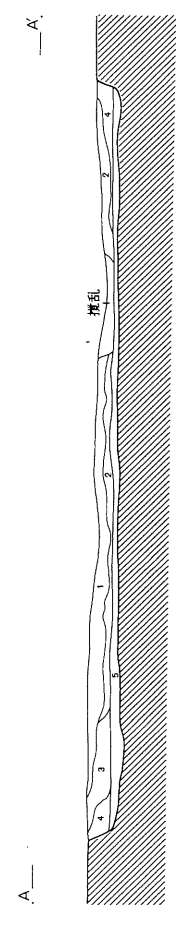
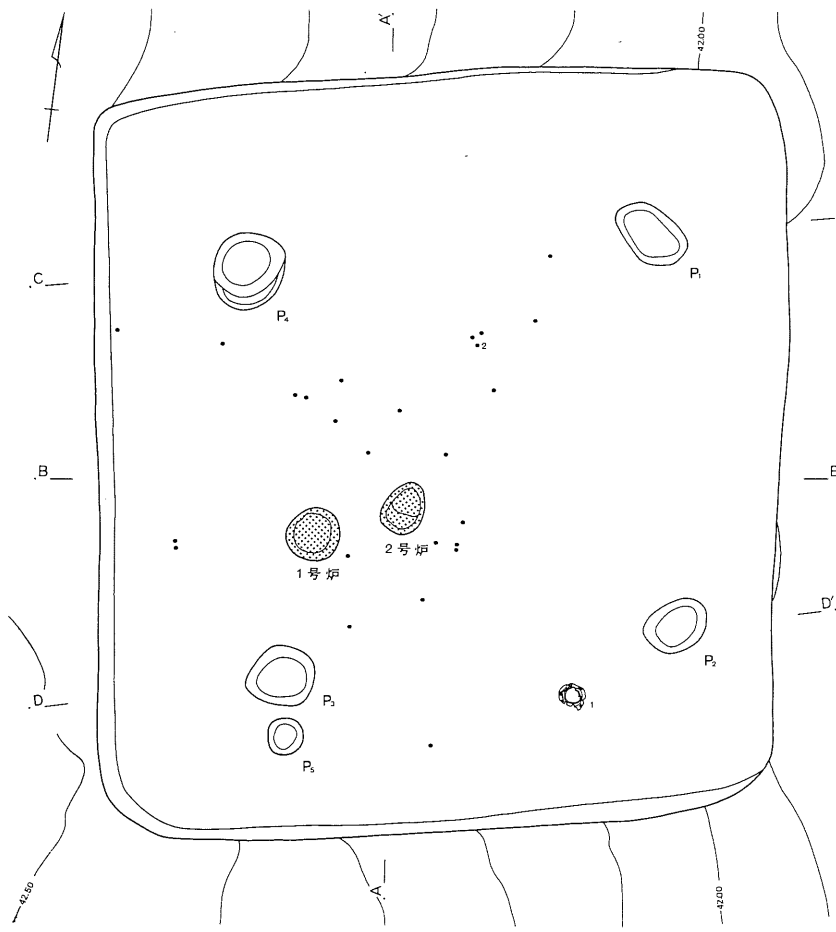
番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
20	高杯	脚柱長 5.8	脚柱部から裾部へ「く」の字状に屈曲。裾部内面の稜あり。内面上半に粘土積み上げ痕、下半ナデ。外面赤彩。器面は磨滅著しい。	B D F・黄褐色 ・ B	20%
21	高杯	脚柱長 6.0	脚柱部は直線的で、裾部へ「く」の字状に屈曲。内面はナデ。裾部内面に稜をもつ。裾部は直線的に開く。二次焼成を受け磨滅著しい。	B D F・褐灰色 ・ B	40%
22	高杯	脚柱長 (5.5)	脚柱部は直線的にやや外反し、裾部へ「く」の字状に屈曲。脚柱部の粘土積み上げ痕、下半ナデ。外面ミガキと赤彩。器面は磨滅と剥落著しい。	B F・黄褐色 ・ B	30%
23	高杯	脚柱長 (5.5)	脚柱部は直線的にやや外反し、裾部へ「く」の字状に屈曲。脚柱部の粘土積み上げ痕と絞り込み。下半ナデ。外面ミガキと赤彩。器面は磨滅と剥落著しい。	B F・鈍い黄褐色 ・ B	20%
24	高杯	脚柱長 (5.7)	脚柱部から裾部へ「く」の字状に屈曲。裾部内面の稜あり。内面上半に粘土積み上げ痕、下半ナデ。二次焼成を受け磨滅している。	B D E F・赤褐色 ・ B	20%
25	高杯	——	脚柱部は裾部へやや強く外傾する。内面に粘土積み上げ痕と絞り込み、下半ナデ。器面は磨滅が著しい。	B D E F・褐色 ・ C	20%
26	高杯	脚柱長 (5.0)	脚柱部は柱状を呈す。内面に粘土積み上げ痕と絞り込み、下半ナデ。二次焼成を受け磨滅している。	B F・赤褐色 ・ C	10%
27	高杯	——	脚柱部は直線的で、内面に粘土積み上げ痕が明瞭。外面はナデか。器面は剥落と磨滅著しい。	B F・黄褐色 ・ B	20%
28	高杯	——	脚柱部の内面上部に粘土積み上げ痕が明瞭。器面磨滅している。	B D F・黄褐色 ・ B	10%
29	高杯	——	脚柱部は裾部へやや強く外傾する。器厚やや薄い。内面ナデ。器面は磨滅している。	B C F・黒褐色 ・ B	10%
30	小形高杯	脚端径 6.0 脚柱長 2.7	脚柱部は直線的に開き、裾部で弱く屈曲する。内面は粘土積み上げ痕が明瞭。裾部は開くが短い。外面入念なミガキ。内面ナデの後、ミガキ。外面と脚柱部内面にも赤彩が認められる。	B F・黄褐色 ・ B	30%
第176 図					
1	高杯	——	坏部内面中央は窪む。脚柱部から裾部へ外傾し、3箇所に穿孔が施される。器面は全体的に磨滅している。	B F・褐灰色 ・ B	20%
2	埴	口径 10.2 器高 10.5	口縁部は直線的に外反し、体部下半で張り、偏平である。胴部下端へは直線的に移行する。底部は小さな平底を呈し、中央に窪みを有す。内外面は入念なナデ。体部下半はケズリの後、ナデか。	B F・褐色 ・ A	80%
3	埴	口径 (8.8) 器高 (6.6)	口縁部は直線的に外反する。体部は張り、底部は大きな平底である。口縁部内面は篋ナデ。口縁部外面と体部内外面はナデ。	B F・褐色 ・ B	80%
4	埴	口径 (5.5) 胴径 8.3 器高 (5.6)	体部は円形を呈し、底部は平底である。外面は体部下半篋ケズリの後ヨコミガキ。体部内面ヨコナデ、体部下半内面にヨコミガキ。外面赤彩。体部1/4に黒斑。	B F・黄褐色 ・ B	50%
5	埴	口径 (8.8)	口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。口縁部内外面に赤彩。器面は剥落と磨滅している。	B F G・褐色 ・ B	20%
6	埴	口径 (13.9)	口縁部は内湾しながら立ち上がり口唇は尖る。口唇外面ヨコハケの後、ヨコミガキ。内面ヨコハケの後、ナデとミガキか。内外面赤彩。	B F・鈍い黄褐色 ・ A	20%
7	埴	口径 (6.2)	口縁部は直線的に開く。体部は偏平をなすと思われる。口縁部内外面ミガキ。体部外面ミガキ。体部内面ナデ。口縁部内外面赤彩。	B D F・黄褐色 ・ B	20%

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
8	小形壺	——	口縁部は強く直線的に開く。体部は球形を呈すると思われる。頸部内面に指押さえ。口縁部内外面ミガキか。体部外面ミガキ。内面ナデ。口縁部内外面、体部外面赤彩。器面は剥落と磨滅。	B F・褐色 ・ B	20%
9	埴	——	頸部の括れは弱く、内面の括れ位置がずれる。体部上半が張る。外面ミガキ。内面ナデ。内外面に赤彩。	B F・鈍い黄褐色 ・ B	10%
10	埴	——	体部は球形を呈し、底部が肥厚する。外面ナデの後、ミガキ。内面ヘラナデ。内外面赤彩。外面磨滅している。	B D F・黄褐色 ・ B	20%
11	碗	口径 9.0	口縁部は外反し、口唇は更に開く。体部上半が張る。外面ナデの後、ミガキか。体部内面篋ナデ。口縁部内外面と体部外面に赤彩。器面は剥落と磨滅が著しい。	B F・鈍い黄褐色 ・ B	60%
12	埴	口径 (9.6)	口縁部は短く開く。頸部は比較的緩やかに括れる。外面ナデ。内外面ナデ。口縁部内外面と体部外面赤彩。	B F・褐色 ・ B	10%
13	碗	口径 (11.4)	口縁部は短く開く。口唇は肥厚し、端部は立ち上がる。内外面横方向のミガキ。内外面赤彩。	B F・黄褐色 ・ B	20%
14	埴	底径 2.0	底部は丸底呈するが、体部への移行は段をもつ。底部内面は丸みをもつ。第176図10と同一個体の可能性がある。外面ナデ、赤彩。	B D F・黄褐色 ・ B	20%
15	埴	底径 (3.1)	底部は弱い丸みをもつ平底を呈し、体部へは内湾しながら立ち上がる内面篋ナデ、外面ナデ。体部外面赤彩。	B E F・黄褐色 ・ A	10%
16	埴	底径 (5.0)	底部は弱い丸みをもつ平底。体部へは内湾しながら立ち上がる。外面ナデとミガキ。外面全面に赤彩。内面剥落。	B E F・黄褐色 ・ B	20%
17	小形壺	底径 (3.6)	底部は平底を呈し、内面は丸みをもつ。体部へは緩やかに移行する。器面は磨滅している。	B F・黄褐色 ・ B	20%
18	小形壺	底径 (4.0)	底部は平底を呈し、底面は浅く窪む。内面は平坦な底をなす。体部へ緩やかな丸みをもちながら移行する。器面は磨滅している。	B D F・褐色 ・ B	20%
19	小形壺	底径 4.0	底部はやや丸みをもつ平底であり、外面ミガキ。内面ナデと篋ナデ。体部へ緩やかな丸みをもちながら移行する。外面赤彩。	B D F・褐色 ・ B	20%
20	小形壺	底径 8.1	底部から体部へは直線的に立ち上がる。器面は磨滅が著しいが篋ケズリか。内面ヨコナデ。	B F G・褐色・黒褐色 ・ B	10%
21	小形壺	——	口縁部は直線的に外反し、頸部は「く」の字状に括れ、頸部下の内面に指圧痕が残る。体部球形を呈すると思われる。器面全体が剥落。	B F G・褐色 ・ B	10%
22	甕	口径 15.9	口縁部は外反し、口唇は更に開き薄い。体部は球形を呈す。体部内面はヨコナデ。器面は磨滅著しい。	B F・黄褐色 ・ B	20%
23	壺	胴径 41.2	大型の壺胴部である。胴部下半は内湾しながら立ち上がることから球形を呈すると思われる。粘土帯積み上げと思われる。器面は剥落と磨滅が著しい。	B F G・橙 ・ B	20%

第5号住居跡（第177～179図）

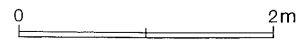
Y、Z-8 Grid に位置する。本住居跡は、台地の傾斜が北東側へ傾く斜面部に位置する。標高42mを測り、等高線に沿って構築されている。南へ約20mの距離に第4号住居跡が所在する。形態は長方形を呈し、規模は長軸5.97m、短軸5.33m、深さ24cmで、東壁は斜面であるため流失している。主軸方位はN-6°-Wを指している。

住居跡の覆土は、斜面上部にあたる西側からの自然堆積による埋没である。壁は緩やかに立ち上がり、壁溝

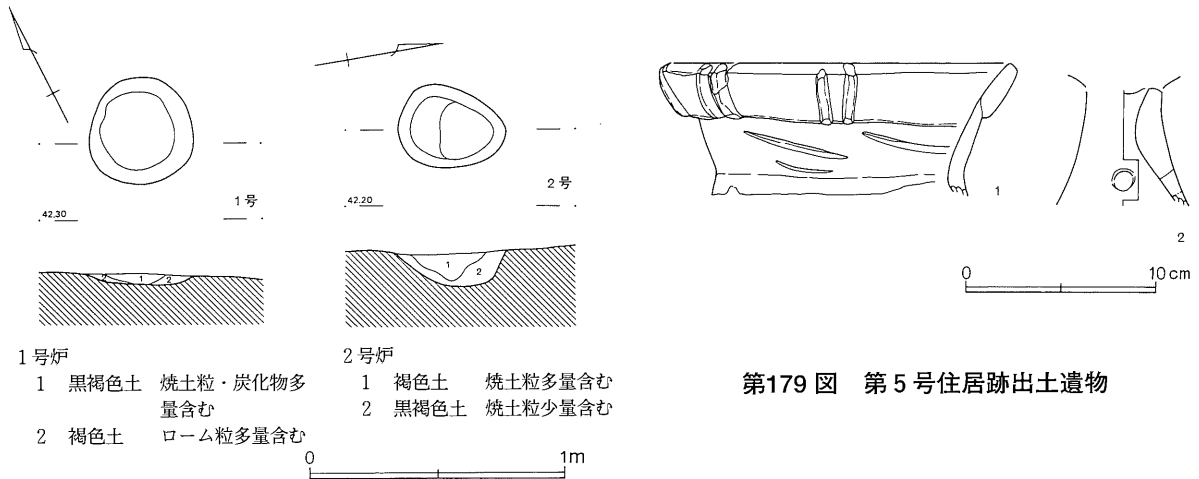


- 1 黒褐色土 ローム粒微量混入、炭化物少量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒多量に含む
- 4 褐色土 ロームブロック少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 5 褐色土 ロームブロック多量混入、粘性、しまり強
- 6 黄褐色土 ロームブロック、ローム粒多量混入
- 7 黒褐色土 焼土粒・炭化物少量含む

- 柱穴
- 1 黒色土 焼土粒少量含む
 - 2 黒褐色土 灰色粘土粒少量混入、焼土粒多量含む
 - 3 暗褐色土 灰色粘土ブロック多量混入、粘性、しまり強
 - 4 暗褐色土 灰色粘土粒少量混入、炭化物少量含む
 - 5 褐色土 焼土粒少量含む、粘性、しまり強



第177図 第5号住居跡 (L=42.70m)



1号炉
 1 黒褐色土 焼土粒・炭化物多量含む
 2 褐色土 ローム粒多量含む

2号炉
 1 褐色土 焼土粒多量含む
 2 黒褐色土 焼土粒少量含む

0 1m

第179図 第5号住居跡出土遺物

第178図 第5号住居跡炉跡

は検出されなかった。床面は比較的踏み堅められていた程度である。ピットは5基検出され、P1 = 52cm、P2 = 30cm、P3 = 63cm、P4 = 48cmが支柱穴に相当する。P5は深さ75cmである。炉跡は2基検出され住居跡中央やや南西寄りに位置する。1号炉はP3←→P4を結ぶライン寄りで円形を呈し径40cm、深さ6cmを測り、炉床は良く焼けている。2号炉は住居跡中央寄りに位置し、形態は不整形で長軸42cm、短軸32cm、深さ16cmを測る。炉床面は良く焼けている。住居掘り方は、全体的に掘り下げられているが特に東側はやや深く掘り込まれている。

遺物出土状態では、住居跡南東側の床面に第179図1の壺の口縁部が逆位の状態で出土し、その他の土器は中央部付近の出土であった。

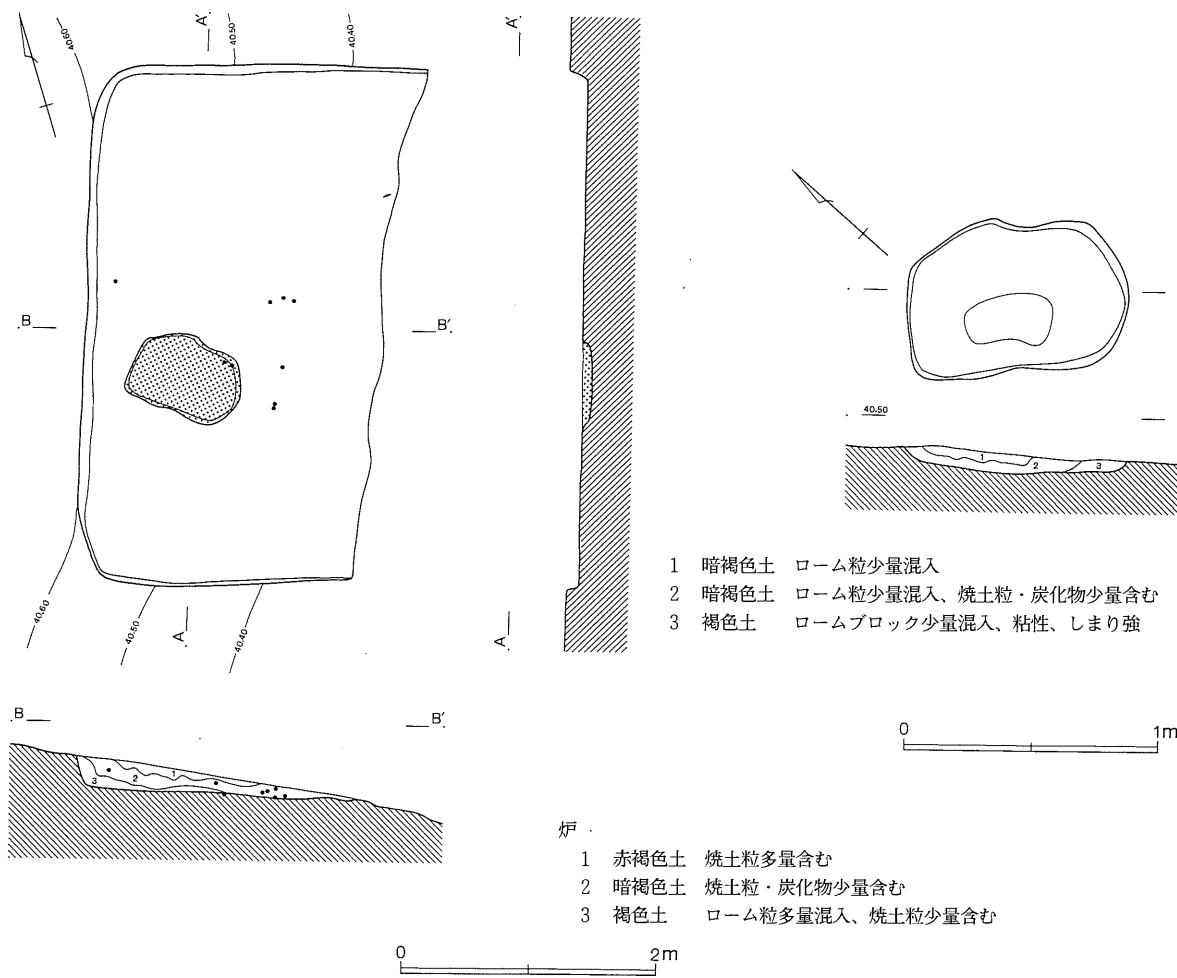
第5号住居跡出土遺物（第179図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	壺	口径 18.0	口縁部は緩やかに湾曲しながら外反する。口縁部は複合口縁で、棒状浮文2条1単位を計6単位貼付ける。器面はハケ調整の後、ナデを加える。口縁部下半に砥石の研磨痕と同じキズが見られる。	BF・褐色 ・A	30%
2	高杯	—	脚柱部上端は直立し、裾部へ緩やかに外反する。3箇所穿孔。内外面ナデ。	BEFG・褐色 ・B	20%

第6号住居跡（第180～181図）

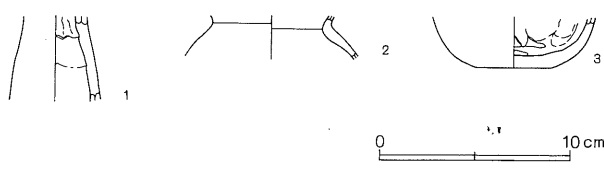
AA-10、11Gridに位置する。標高40mで、南へ約2.4mの距離に第4号住居跡が存在する。住居跡東側は耕作溝により壊されている。形態は方形を呈すると思われ、規模は長軸4.1m、短軸（2.33）m、深さ24cmで本遺跡で最も規模の小さい住居跡になる可能性がある。

覆土の堆積状態は、壁高が低いいため明確ではないが自然堆積による埋没であろう。壁はやや開き気味で直線的な立ち上がりを示す。壁溝は検出されていない。床面はやや傾斜しているが堅緻であり、ピットは検出されていない。炉跡は西壁寄りで検出され、長軸87cm、短軸58cm、深さ7cmで、炉床は良く焼けている。住居掘り方は検出されなかった。



第180図 第6号住居跡 (L=40.90m)

出土遺物は、高杯、埴など住居跡中央部付近に少量出土したに過ぎない。



第181図 第6号住居跡出土遺物

第6号住居跡出土遺物 (第181図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	高杯	—	脚柱部下半に向け外反する。脚柱部の内面上半に粘土紐積み上げ痕を残す。器面は二次焼成を受け磨滅している。	B F・赤褐色 ・ B	10%
2	小形壺	—	口縁部は直線的に開くと思われる。頸部内面に指圧痕を残す。器面は磨滅著しい。	B E F・黒灰色 ・ B	10%
3	埴	底径 3.8	底部は小さい平底で、体部は球形を呈する。外面ミガキ。内面ナデ。外面赤彩	B E F・黒褐色 ・ B	20%

第7号住居跡（第182～184図）

Y、Z-10、11Gridで、台地斜面下方に位置し、標高38mで水田面との比高差は8mと遺跡のなかで最も水田面に近い住居跡である。住居跡東側から北東コーナーにかけては耕作溝により壊されている。形態は方形で北壁が僅かに張る。規模は長軸6.85m、短軸6.38m、深さ20～63cmを測る。主軸方位はN-39°-Wを指している。

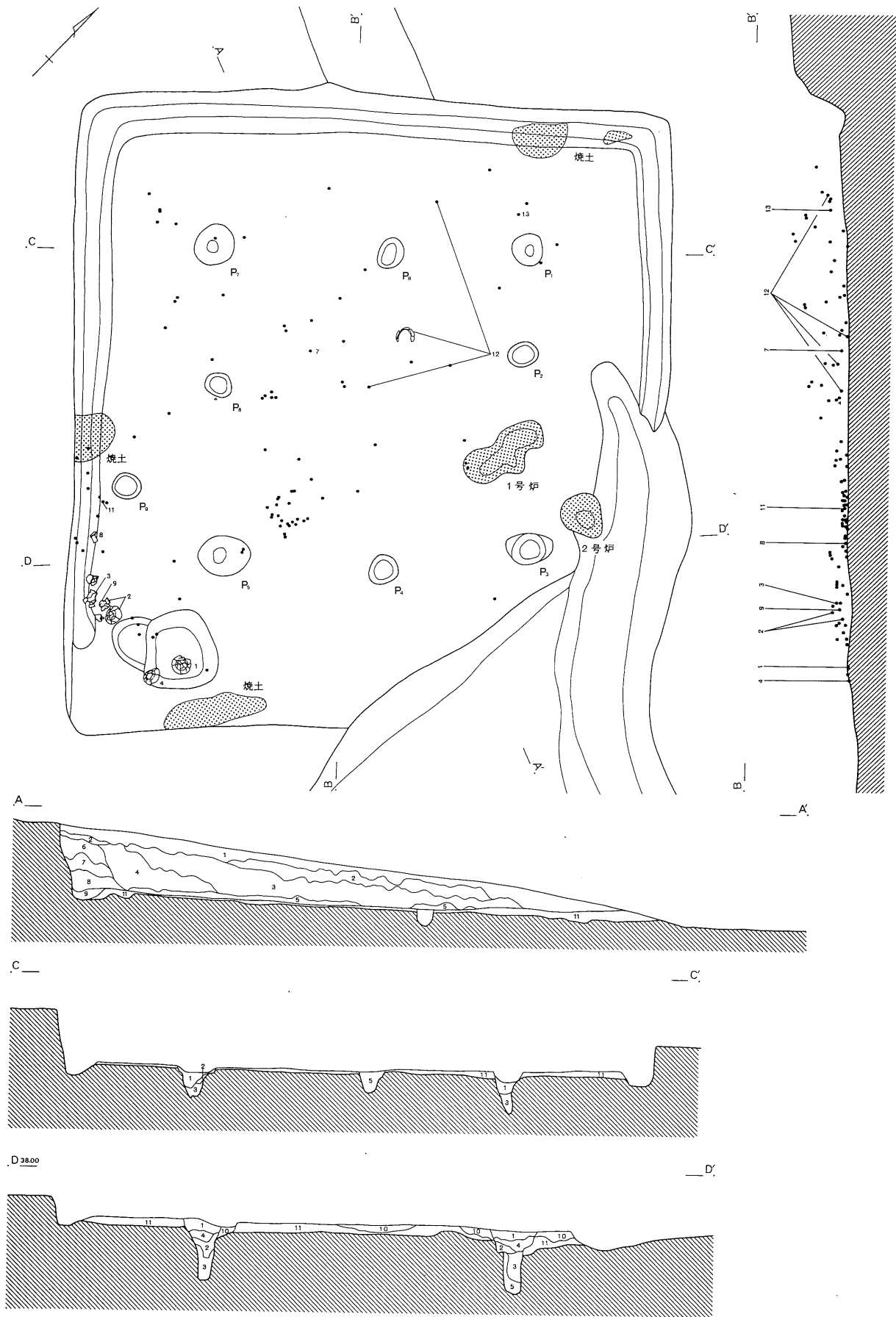
覆土の堆積状態は、壁際に褐色土を基調としたロームブロックを含む堆積が観察され、その後、黒色土の堆積で埋没する過程が窺えた。自然堆積による埋没である。壁は直線的に立ち上がる。壁溝は幅27cm、深さ14cmで東壁を除き全周し、底面は比較的平坦である。床面は平坦で全体に堅緻である。ピットは9基検出され、P1=62cm、P2=25cm、P3=65cm、P4=28cm、P5=70cm、P6=36cm、P7=57cm、P8=27cm、P9=16cmを測り、そのうちP1、P3、P5、P7の4本が支柱穴に相当し、この支柱穴間には浅い支柱穴が検出されている。また、南壁際の貯蔵穴寄りにピットが検出されたが出入口部の施設かどうか判断しがたい。

炉跡は2箇所検出され、1号炉はP1↔P2を結ぶライン上のややP2寄りに位置する。形態は南北に長い不整形で規模は長軸93cm、短軸40cm、深さ12cmである。2号炉はP2から北へ21cmの所に位置し、耕作溝により北半分を壊されている。形態は不整形で長軸49cm、短軸44cm、深さ9cmである。貯蔵穴は南東コーナー内側で検出され、平面形は隅丸方形に半円形の張り出し部をもつ形態を呈している。隅丸方形部の規模は長軸84cm、短軸74cm、深さ66cmを測り、下層には第184図14の壺胴下半部とともに炭化物が多量に検出されている。半円形の張り出し部は深さ17cmで土器破片が多く検出された。

出土遺物では、壺、高杯、柑、砥石、石錘などが床面から覆土下層にかけて出土した。遺物の分布状態については、住居跡南東側の貯蔵穴から南壁際において纏まった出土がみられ、貯蔵穴の確認面では2個体の高杯の坏部が伏せた状態で出土している。

第7号住居跡出土遺物（第184図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	高杯	口径 18.6 坏高 5.6	口縁部は強く開くが、口縁上半でやや立ち上がる。口唇部は摘み出される。坏部下半は直線的で、明瞭な段へと移行する。脚柱部との接合の為にホゾをもつ。外面赤彩。器面は剥落が目立つ。	BFG・橙 ・A	50%
2	高杯	口径 20.0 坏高 6.0	口縁部は直線的に開く。坏部下半は湾曲しながら段へと移行する。内外面赤彩。器面は剥落が著しい。	BF・赤褐色 ・B	50%
3	高杯	口径 17.6 坏高 4.9	口縁部は強く開く。坏部下半は湾曲しながら段へと移行する。内面の坏部と口縁部との境は明瞭である。外面ミガキ。外面赤彩。器面は剥落が著しい。	BDF・褐色 ・B	30%
4	高杯	——	口縁部は直線的に開く。坏部の段は明瞭。内面の坏部と口縁部との境はなく、緩やかである。内外面ミガキ。外面赤彩。器面剥落している	BE・橙 ・B	20%
5	高杯	口 (18.2)	口縁部は厚く直線的に開くが、口唇部で摘み出される。内外面横方向のミガキ。内外面赤彩。内面は剥落が目立ち、外面に黒斑。	BF・褐色 ・B	20%
6	高杯	——	坏部であり、直線的に段へと移行する。段は明瞭である。内面の坏部から口縁部への移行は屈曲する。脚柱部との接合の為にホゾがある。内外面にミガキと赤彩。5と同一個体の可能性がある。	BF・褐色 ・B	20%
7	高杯	脚柱長 5.3	脚柱部は直線的で、裾部へ「く」の字状に屈曲する。内面に粘土紐積み上げ痕を残す。外面ミガキ赤彩。器面は磨滅著しい。	BDF・黄褐色 ・B	30%



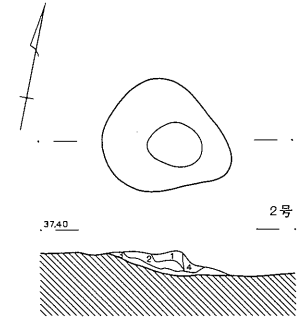
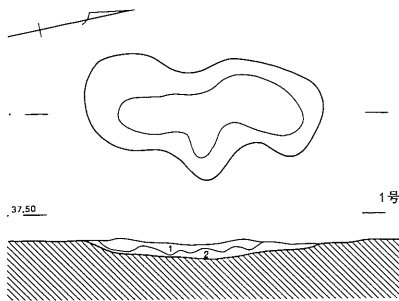
第182图 第7号住居跡 (L=38.50m)

- 1 褐色土 ローム粒、褐色粒多量混入し、耕作土を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒多量混入
- 3 黒色土 焼土粒・炭化物少量混入
- 4 黒褐色土 ロームブロック少量混入
- 5 黒褐色土 ローム粒少量混入
- 6 暗褐色土 ローム粒多量混入
- 7 褐色土 ロームブロック多量混入
- 8 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 9 褐色土 ロームブロック少量混入

- 10 暗褐色土 ロームブロック多量混入、粘性、しまり強
- 11 明褐色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまり強

柱穴

- 1 黒褐色土 ローム粒微量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量混入
- 3 明褐色土 ロームブロック多量混入
- 4 黒褐色土 ローム粒少量混入
- 5 暗褐色土 ローム粒少量混入

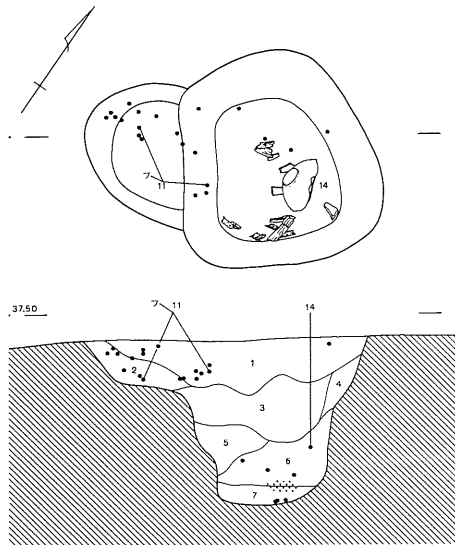


1号炉

- 1 赤褐色土 焼土ブロック多量、炭化物少量含む
- 2 暗褐色土 上面が炉床面で堅い

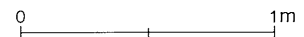
2号炉

- 1 赤褐色土 焼土ブロック
- 2 暗褐色土 焼土ブロック多量含む
- 3 褐色土 焼土粒多量含む、上面が加熱を受ける
- 4 暗褐色土 ローム粒少量混入



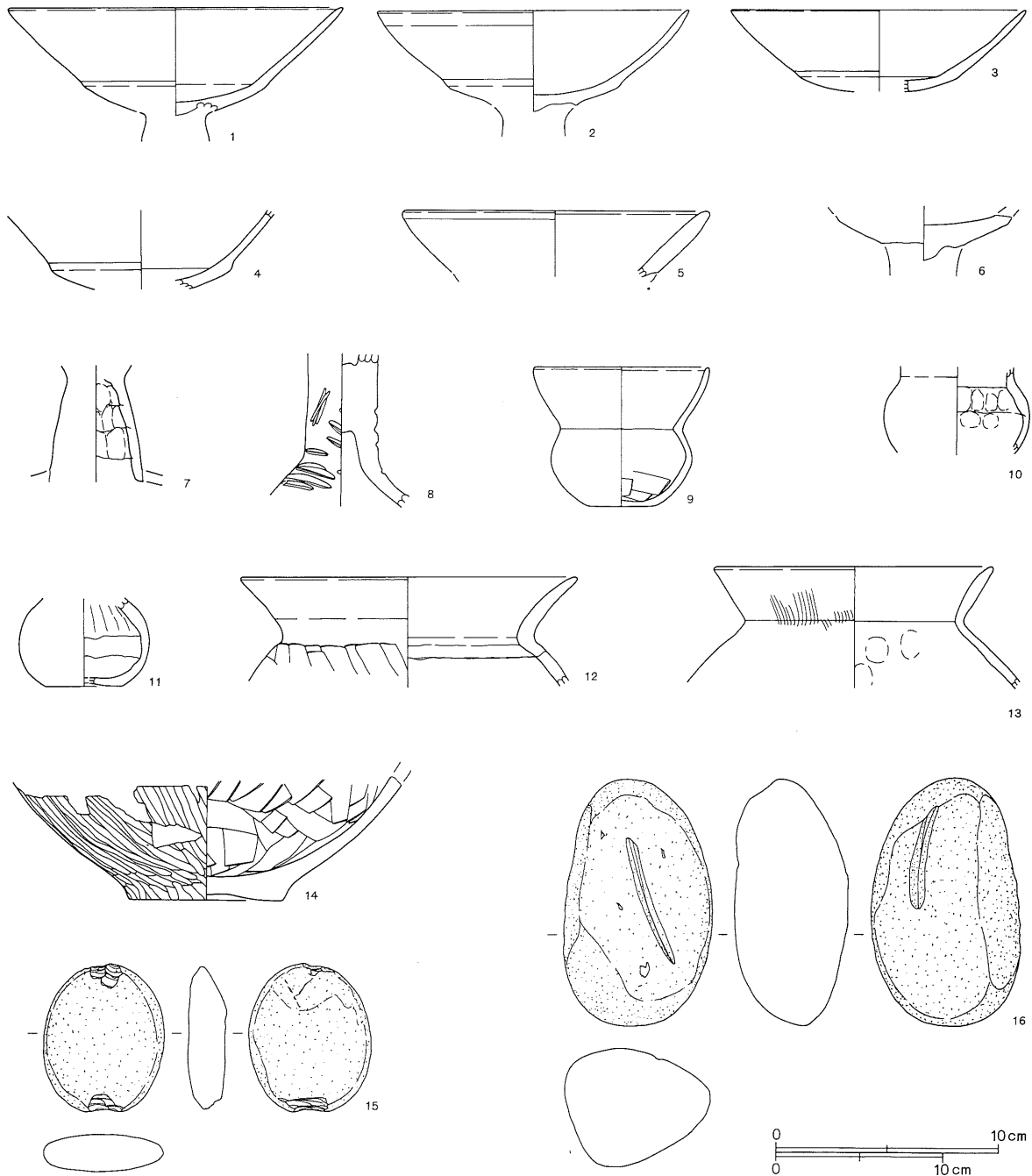
貯蔵穴

- 1 暗褐色土 ローム粒少量混入
- 2 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒少量含む
- 3 褐色土 ロームブロック少量混入、焼土粒少量含む
- 4 暗褐色土 ローム粒少量混入
- 5 暗褐色土 ロームブロック少量混入
- 6 褐色土 ロームブロック多量混入、下面に焼土粒・炭化物多量含む
- 7 黄褐色土 ロームブロック多量混入



第183図 第7号住居跡炉跡・貯蔵穴

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
8	高杯	脚柱長 6.4	脚柱部は柱状を呈する。裾部への移行は比較的緩やかである。外面ミガキ。脚柱部上端にホゾの差し込み窪みがある。外面に「V」字のキズがあり、砥石の転用と使用されたのか。	B D F・赤褐色 ・B	30%
9	埴	口径 10.5 器高 8.3 底径 4.0	口縁部は内湾ぎみに外傾し、口唇部で立ち上がる。口唇端部は尖る。体部は上半で張り、底部はやや丸みをもった平底である。外面横方向のミガキ。体部内面は篋ミガキとナデ。口縁部内面横方向の入念なミガキ。内外面赤彩。外面2箇所黒斑。	B F・赤褐色 ・B	90%
10	埴	——	口縁部は緩やかに外傾すると思われる。体部中央が張る。外面ミガキ。内面に粘土紐積み上げ痕と指圧痕を残すナデ。外面赤彩。器面は剥落が目立つ。	B E F・褐色 ・C	10%



第184図 第7号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
11	埴	底径 4.5	体部中央が張り、底部は平底で中央やや窪む。内面に粘土紐積み上げ痕が残る。底部は薄い。外面ミガキ。内面ナデ。外面赤彩。器面は剥落が目立つ。	B E F・褐色 ・ C	30%
12	甕	口径 20.0	口縁部は直線的に外反し、口唇部で更に開き、端部は丸くおさまる頸部は緩い「く」の字状を呈し、胴部はやや張る。口縁部外面ナデ。内面ナデの後、ミガキ。胴部外面は斜方向の篋ケズリ。内面ナデの後雑なミガキ。	B F G・褐灰色 ・ A	30%

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
13	甕	口径 16.5	口縁部は直線的に外反し、口唇部の器厚は薄くなる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部から頸部はハケメ調整の後、篋ナデか。胴部はナデ。内面は剥落著しい。	B F・黄褐色 ・ B	20%
14	壺	底径 9.1	底部から胴部下端へ一端強く立ち上がり、胴部は緩やかに移行する。底部は弱く窪む。外面斜方向のミガキ。内面篋ナデ。胴部内面に黒色帯が見られる。	B F・暗赤褐色 ・ B	30%

(2) 竪穴状遺構 (第185~188図)

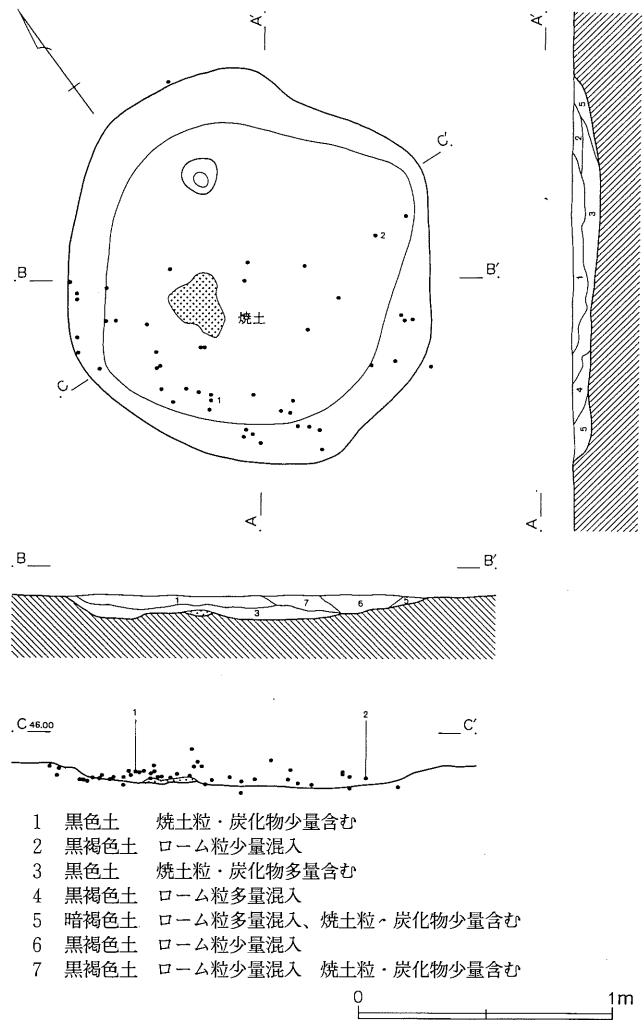
第1号竪穴状遺構 (第185、186図)

Q-11Grid に位置し、調査区西側の平坦面で検出された。北約3mの距離には第1号住居跡が所在する。

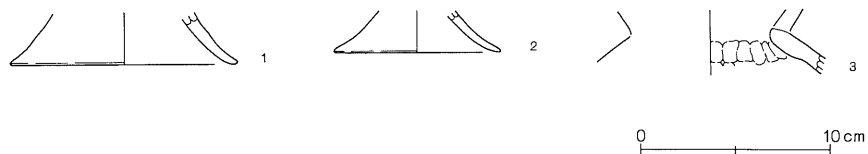
形態は隅丸方形で、規模は長軸3.05m、短軸2.84m、深さ22cmを測る。断面形は皿状を呈し、壁の立ち上がりは緩やかである。

覆土は黒色土を基調としているが、焼土粒・炭化物を多量に含んでいる。本遺構の中央やや南西寄りに焼土ブロックが検出されており炉跡の可能性もある。底面は凹凸を呈し、北側でやや深めに掘り込まれている。

出土遺物は小形広口壺、高杯であり、その分布は南側に多く検出された。



第185図 第1号竪穴状遺構 (L=46.10m)



第186図 第1号竪穴状遺構出土遺物

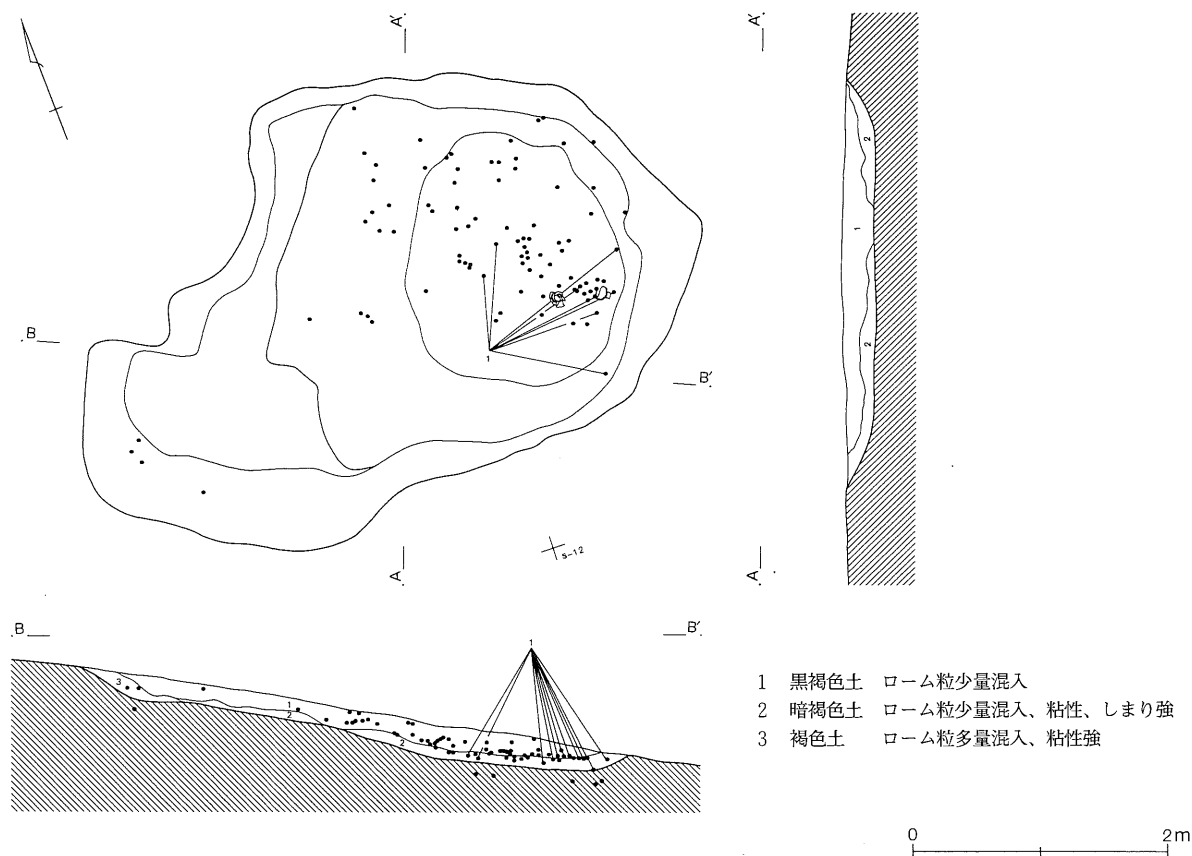
第1号豎穴状遺構出土遺物（第186図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	高杯	脚端径 (11.7)	裾部は緩やかに開き、端部で更に外傾する。器面は剥落が著しい。	B F・鈍い黄褐色・C	5%
2	高杯	脚端径 (8.8)	裾部は緩やかに開き、端部は薄く更に外傾する。外面ミガキ。内面横方向のミガキ。外面赤彩。	B D F・黄褐色・B	10%
3	小形壺	——	頸部は「く」の字状に開くと思われ、外面ミガキ、内面ナデで内面に指圧痕あり。外面赤彩。	B E・黒褐色・B	10%

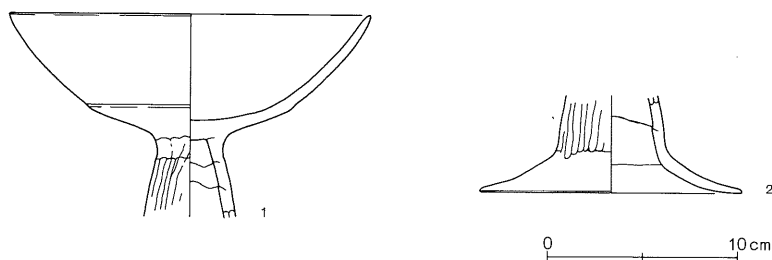
第2号豎穴状遺構（第187～188図）

AB-11Gridに位置する。台地斜面下方で検出され、南約2.3mの距離には第7号住居跡が所在する。平面形は不整形であるが、東側において隅丸方形若しくは楕円形の形状と見ることもできる。規模は長軸4.3m、短軸3.22m、深さ26cmを測る。

覆土の堆積は自然堆積による埋没である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸な面が地形の傾斜に沿って東へ移行し、東側で深めの平坦な底面をなす。出土遺物は、壺、高杯、埴である。分布状態は東側中央部に遺物の集中が見られる。



第187図 第2号豎穴状遺構（L=38.70m）



第188図 第2号竪穴状遺構出土遺物

第2号竪穴状遺構出土遺物（第188図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	高杯	口径 (18.9)	口縁部はやや内湾ぎみに外傾する。坏部はとの境には弱い段をもち、内面の口縁部との境は緩やかである。脚柱部内面に粘土積み上げ痕が残り、ナデが加えられている。内外面ミガキと赤彩。器面は剥落が目立つ。2と同一個体の可能性がある。	B F・橙 ・B	60%
2	高杯	脚端径 13.7	脚柱部から裾部へは「く」の字状に屈曲し、端部で更に開く。内面裾部に明瞭な稜をもつ。脚柱部内面に粘土積み上げ痕とナデ。外面ミガキ。内面篋ナデ。1と同一個体の可能性がある。	B F・橙 ・B	30%

(3) 土壇・集石土壇 (第189、190図)

第1号土壇 (第189図)

T-10 Gridに位置し、北へ約5.6mの距離に第2号住居跡が所在する。規模は長軸3.04m、短軸1.52m、深さ13cmを測り、断面形は皿形を呈する。覆土は多量の焼土粒や炭化物が含まれている。掘り込みは浅いため壁の立ち上がりも緩やかで、底面も地形の傾斜に沿って南へ傾斜する。遺物は第190図の小形壺1点が出土している。

第1号土壇出土遺物 (第190図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	小形壺	—	口縁部は外傾しながら開くと思われる。胴部は張る。外面ミガキ。内面粘土積み上げ痕が残り、ナデを加える。	B D F・黄褐色 ・B	20%

第2号土壇 (第189図)

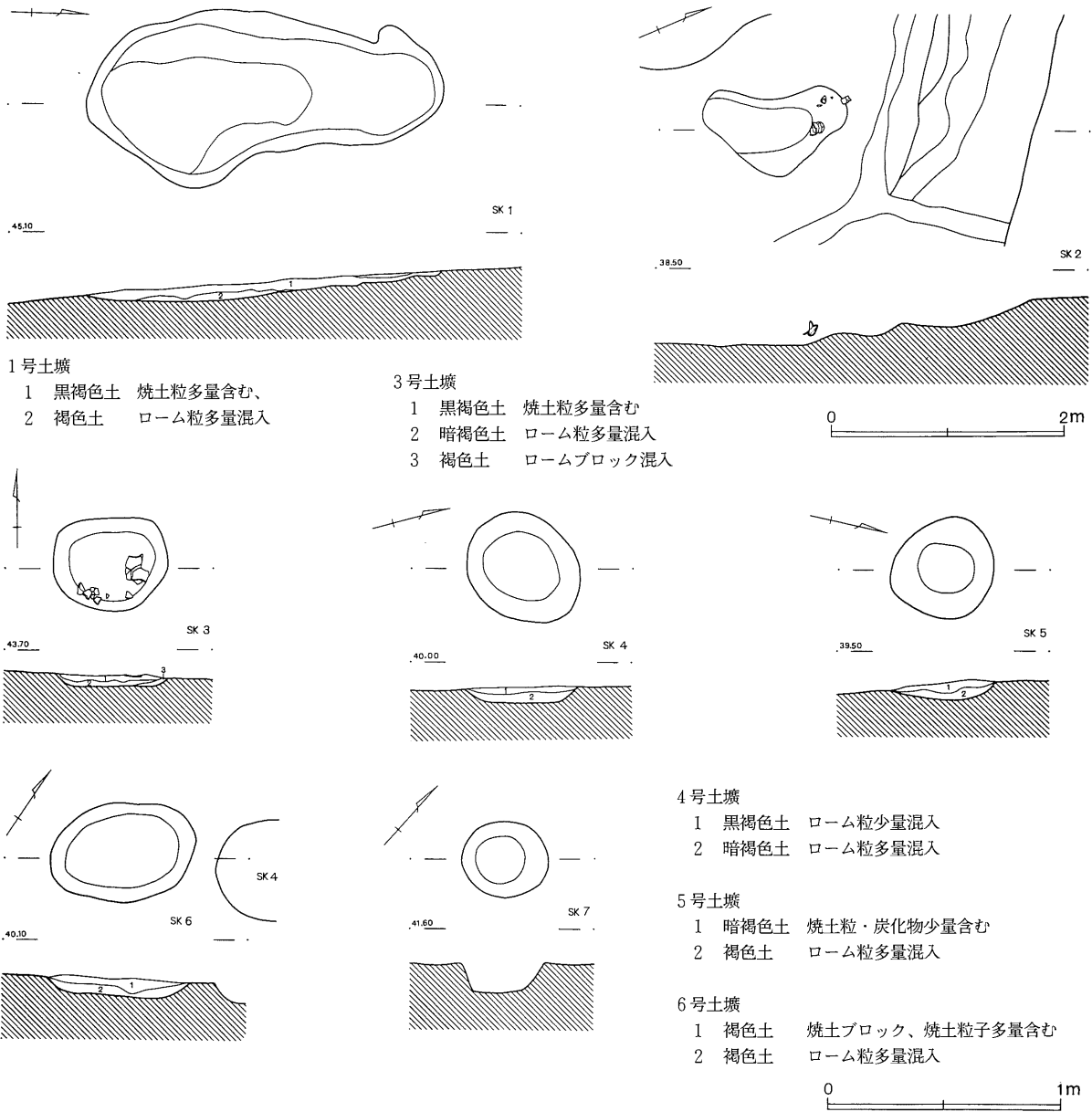
AB-13 Gridに位置する。耕作溝により土壇上面は削平されている。形態は不整な三角形を呈し、規模は長軸108cm、短軸66cm、深さ9cmを測る。遺物を少量出土している。

第3号土壇 (第189図)

W-8 Gridに位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長軸49cm、短軸40cm、深さ4cmで、断面形は皿形である。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は少量の土器が出土している。

第4号土壇 (第189図)

AA-11 Gridに位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長軸54cm、短軸43cm、深さ7cmで断面形は皿形である。壁は直線的に傾斜しながら立ち上がり、底面は平坦である。遺物は出土していない。



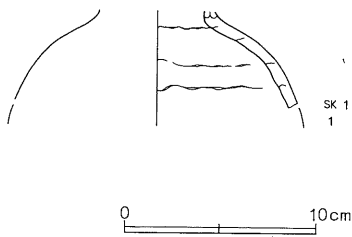
第189図 第1～7号土坑

第5号土坑 (第189図)

AB-11Gridに位置する。形態は楕円形を呈し、規模は径43cm、深さ8cmで底面から緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

第6号土坑 (第189図)

AA-11Gridに位置する。形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸61cm、短軸43cm、深さ7cmで断面形は皿形である。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。



第190図 第1号土坑出土遺物

第7号土坑 (第189図)

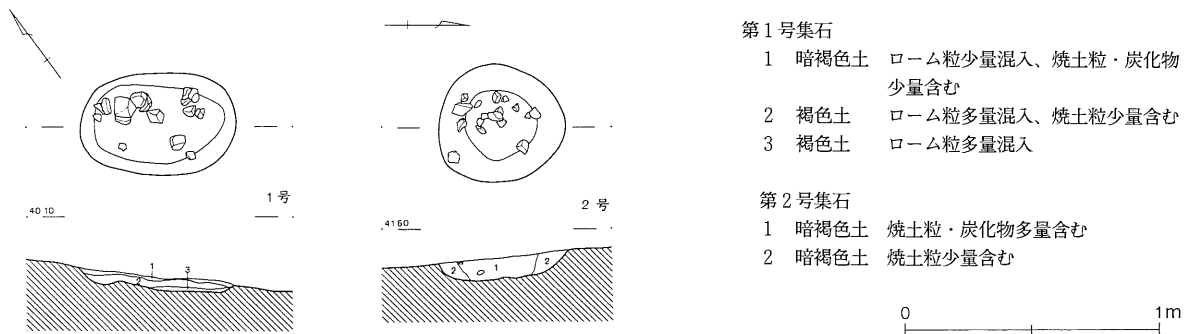
Y-11Gridに位置する。形態は円形を呈し、規模は径37cm、深さ13cmで断面径は逆台形である。壁は直線的に傾斜しながら立ち上がり、底面は平坦である。

第1号集石土壙 (第191図)

AA-11 Grid で、台地斜面の中央部付近に位置する。形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸61cm、短軸40cm、深さ5cmで底面は地形の傾斜に沿っている。礫は拳大のものを主とし、火熱を受け破碎している。

第2号集石土壙 (第191図)

X-11 Grid に位置し、台地斜面の中央部付近に位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長軸49cm、短軸46cm、深さ8cmを測る。断面形は皿形で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土から火熱を受け破碎した礫が出土した。

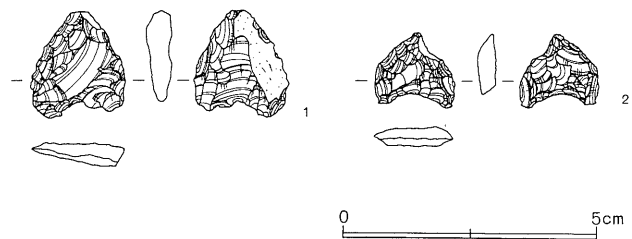


- 第1号集石
- 1 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
 - 2 褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒少量含む
 - 3 褐色土 ローム粒多量混入
- 第2号集石
- 1 暗褐色土 焼土粒・炭化物多量含む
 - 2 暗褐色土 焼土粒少量含む

第191図 第1・2号集石土壙

(4) グリッド出土遺物

グリッドからの出土遺物は、石鏃2点のみである。



第192図 グリッド出土遺物

第8表 石器計測表

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
171-10	3号住居跡	砥石	12.3	3.7	1.5	140	砂岩	
176-24	4号住居跡	打製石斧	12.1	4.7	2.2	182	頁岩	
25	4号住居跡	砥石	6.0	4.7	2.1	73	砂岩	
26	4号住居跡	石錘	5.4	3.7	0.9	34	砂岩	
184-15	7号住居跡	石錘	6.6	5.4	1.6	88	砂岩	
16	7号住居跡	砥石	10.8	6.1	5.3	436	角閃石安山岩	
192-1	表採	石鏃	2.0	1.9	0.5	1.1	黒曜石	
2	表採	石鏃	1.5	1.6	0.4	0.7	黒曜石	

Kaedayama—kita

楓山北遺跡

VIII 楓山北遺跡の調査

1. 遺跡の概要

楓山北遺跡は、東平台地の北部に位置し、和田吉野川によって形成した沖積地に面している。台地は北からの数条の小支谷が入り込み、複雑な樹枝のような地形を形成している。遺跡は小支谷の一つである「桜谷の谷」の東側に位置し、南北に張り出した標高35m前後の舌状台地上に立地している。北には開析谷を挟んで阿諏訪野東遺跡が所在し、本遺跡の台地基部にあたる南側には楓山西遺跡が存在する。調査区の南西側にみられる等高線の乱れは、本遺跡と南に所在する楓山西遺跡の間を屎尿廃棄に伴う破壊によるものである。調査区の面積は11,486m²で、舌状部の平坦面に遺構の7割程が展開する。基本的な層序は、第1層表土、第2層褐色でソフト・ローム、第3層暗褐色でハード・ローム、第4層黄褐色の粘土、第5層灰白色の粘土となる。

検出された遺構は、住居跡9軒、土壇8基、集石土壇4基、ピット群4箇所である。縄文時代では、前期中葉の黒浜式期の住居跡1軒と前期後葉の諸磯c式期の住居跡1軒、土壇2基が検出され、諸磯c式期に属する住居跡と土壇からは多量の礫が出土している。4基の集石土壇は遺物が出土していないため時期については不明であるが、前期に属すると思われる。古墳時代では、中期和泉期の住居跡1軒、後期鬼高期の住居跡2軒が検出され、鬼高期の2軒の住居跡の傾向としては主軸方位を同じくし、また形態も正方形を呈し、カマドを北西方向に向けている。出土遺物では第1号住居跡の覆土からは多量の円筒埴輪の破片等が出土している。奈良時代の住居跡は2軒検出され、第2号住居跡からは刀子1点が出土し、第8号住居跡覆土からは第1号住居跡と同様に円筒埴輪の破片が数点出土している。平安時代の住居跡1軒は舌状台地へと移行する斜面部で検出され、古墳時代や奈良時代の住居跡とは立地においてやや異なる。残る1軒の住居跡は出土遺物がないため時期は不明である。舌状台地の南側には4箇所のピット群が検出されているが、出土遺物が乏しいため時期は確定できないものの覆土の観察から古代に属すると思われる。土壇については出土遺物がなく決め手に欠いており時期を明確にできなかった。

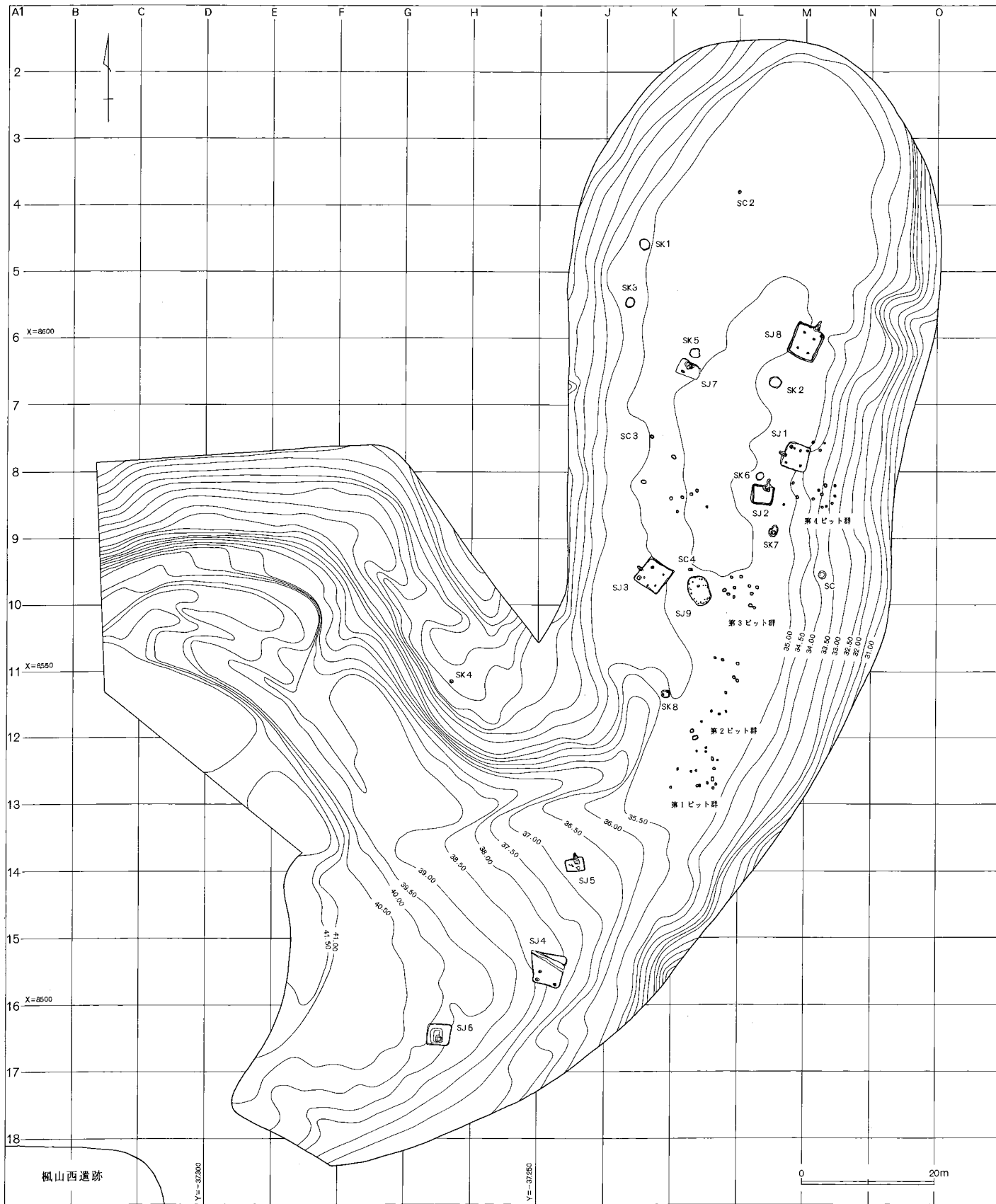
2. 遺構と出土遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡（第194～198図）

L、M-7 Gridに位置する。舌状台地の東側肩部から斜面部へと移行する標高35mの緩やかな斜面部で検出された。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.92m、短軸3.85m、深さ60cmを測る。主軸方位はN-74°-Wを指している。

覆土は黒褐色土を基調とする自然堆積による埋没であるが、覆土上層から多量の埴輪片が検出されている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は検出されなかった。床面は平坦で堅緻である。ピットは5箇所検出され、このうちP1=29cm、P3=25cm、P4=30cm、P5=29cmの4本が支柱穴にあたる。P2=25cmはP1↔P3の柱穴ラインからやや外れるものの支柱穴と同様な深さを示すことから支柱穴の可能性が考えられる。支柱穴の配列としては西側のP4、P5は壁と一定の間隔をもつ位置に設置されているが、東側のP1、P3は貯蔵穴を避ける為か南壁に片寄る配置が窺える。貯蔵穴は北東コーナー内側に検出され、平面形は方形を呈す。規模は長軸52cm、短軸45cm、深さ30cmを測り、土師器杯1点、壺形土器1点が傾いた状態で検出

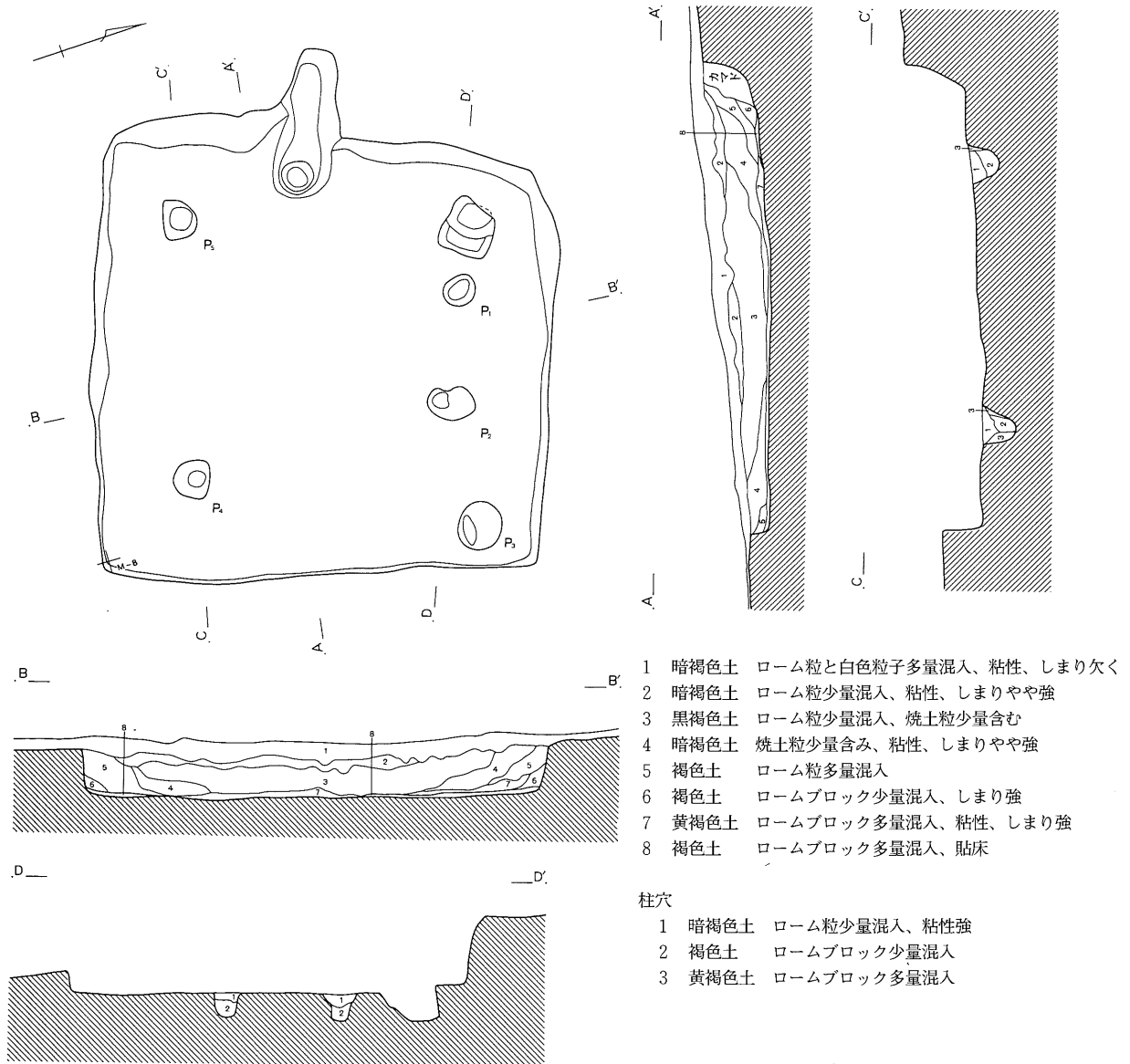


第193 図 楓山北遺跡全体図

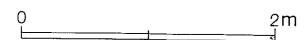
されている。住居跡掘り方は全体的に浅く掘り込まれ、貼床が施されている。

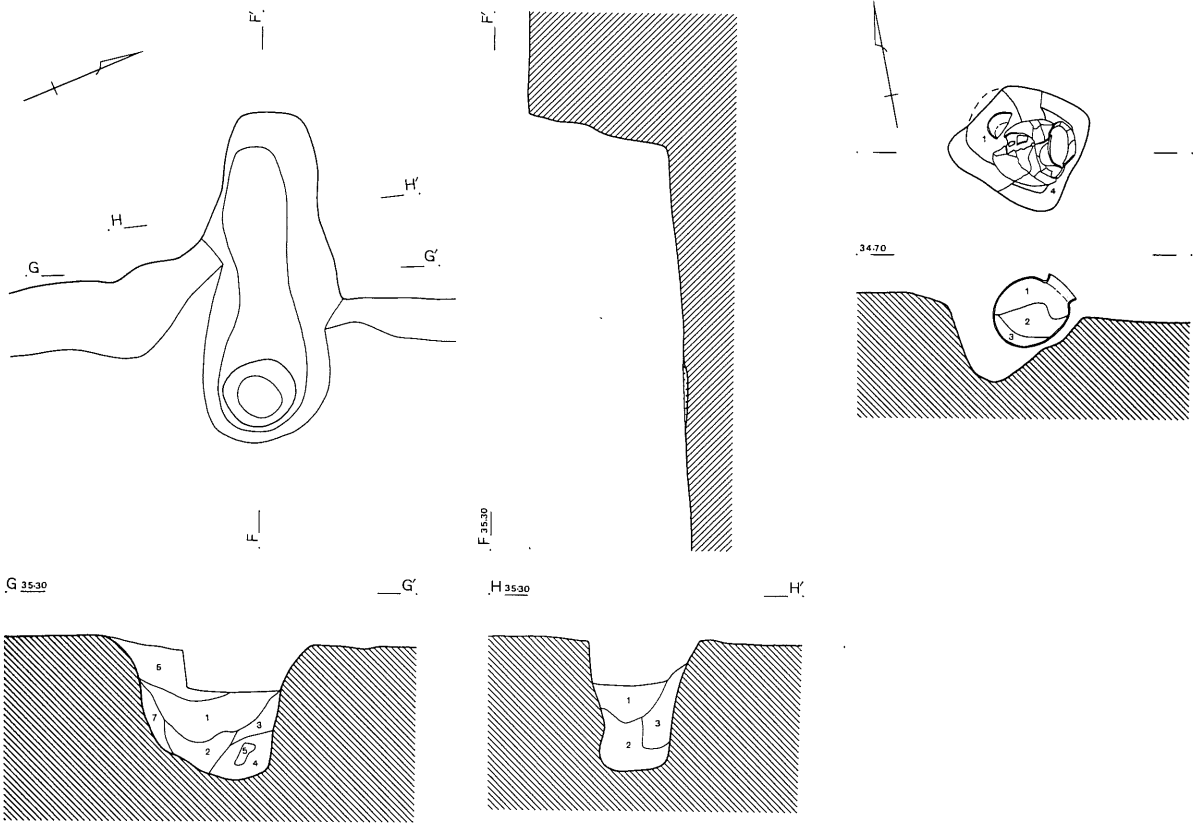
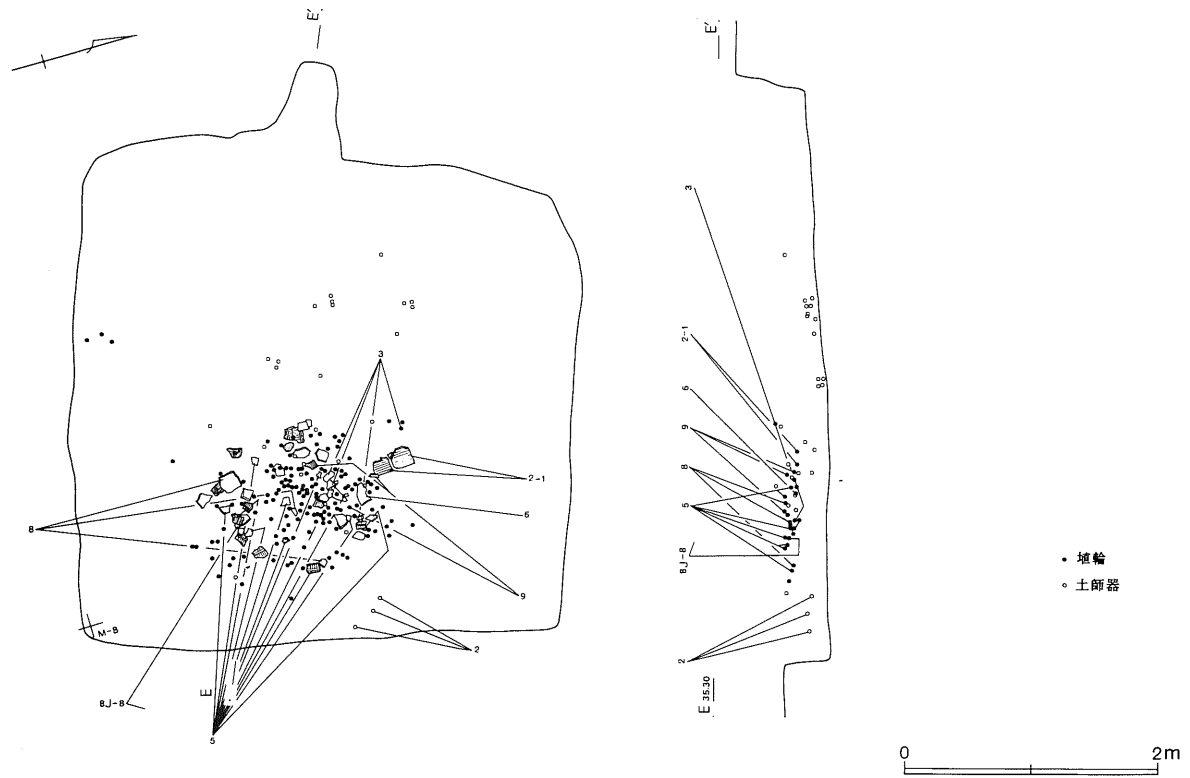
カマドは北壁中央やや西寄りに位置し、壁を73cm程掘り込んで構築されている。カマドの燃烧部にあたる底面は良く焼け、浅く掘り込まれている。燃烧部から煙道部へはほぼ平坦に移行し、煙り出し部で垂直に立ち上がる。出土遺物は殆ど見られなかった。

出土遺物は、土師器环、壺が住居跡中央の床面もしくは貯蔵穴から検出され、住居跡南側の覆土上層からは、一括廃棄されたと考えられる多くの埴輪片が検出された。出土した埴輪は主に円筒埴輪の破片であるが第197図1については形象埴輪の可能性もある。



第194図 第1号住居跡 (L=35.40m)



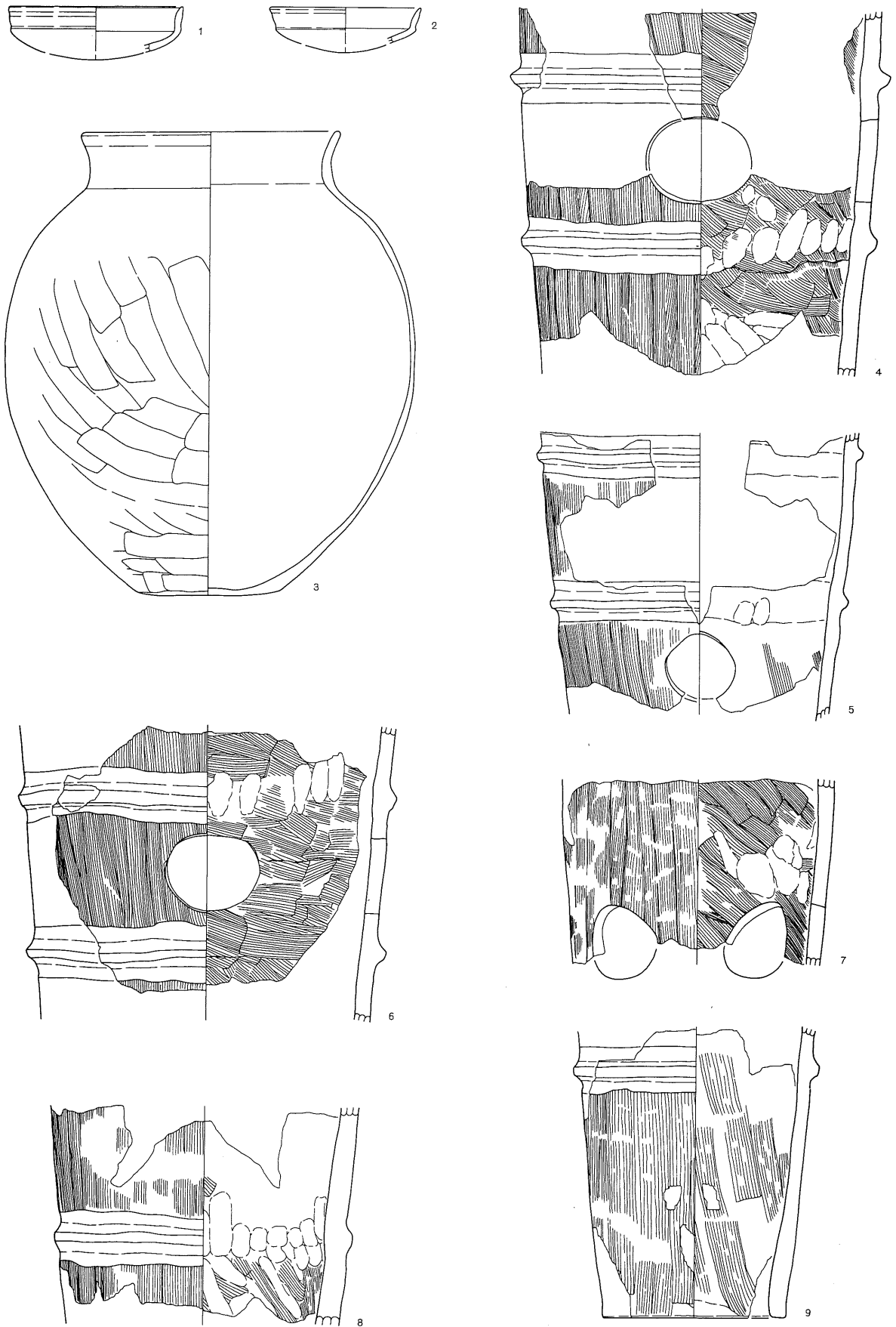


- 竈
- 1 黒褐色土 焼土粒少量含み、しまり強
 - 2 暗褐色土 焼土ブロック少量混入
 - 3 赤褐色土 焼土ブロック多量混入
 - 4 赤褐色土 焼土ブロック少量混入、炭化物少量含む
 - 5 灰白色土 灰白色粘土ブロック
 - 6 黒褐色土 ローム粒少量混入
 - 7 褐色土 ロームブロック多量混入

- 貯蔵穴
- 1 黒褐色土 炭化物少量含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒少量混入
 - 3 褐色土 ローム粒多量混入

0 1m

第195図 第1号住居跡遺物分布図・竈・貯蔵穴

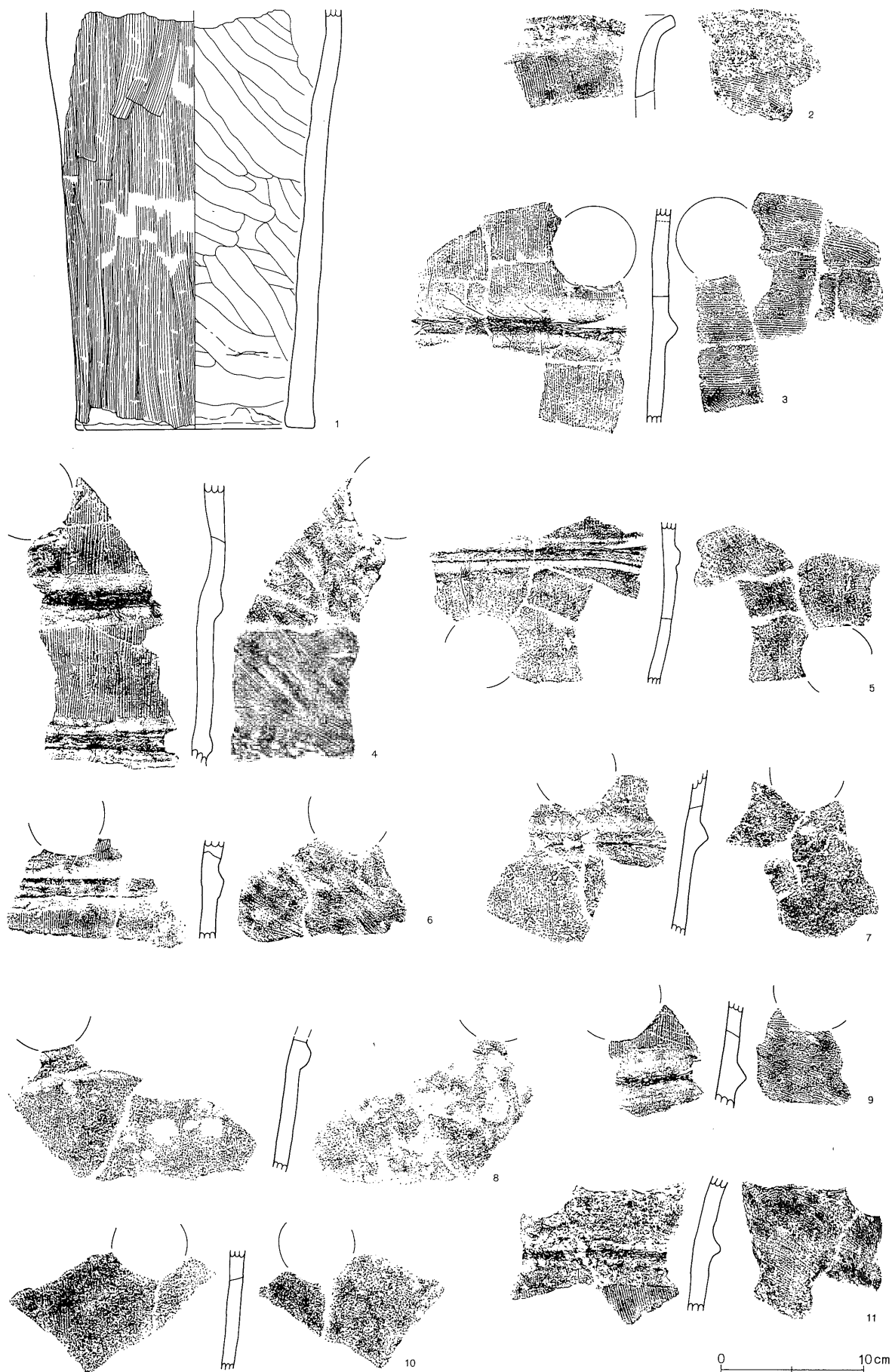


0 10cm

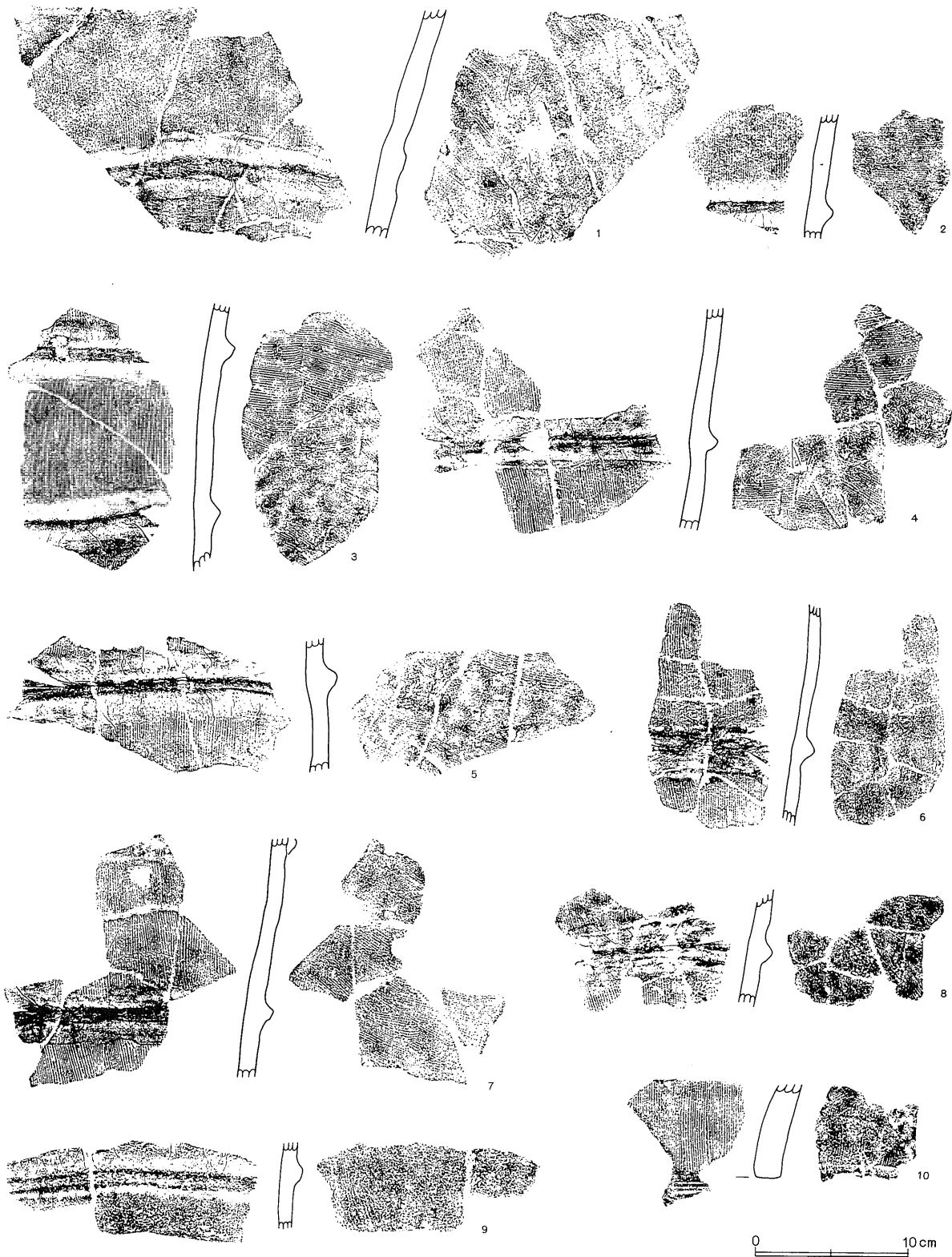
第196图 第1号住居跡出土遺物(1)

第1号住居跡出土遺物（第196図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	坏土師器	口径 10.4	口縁部はやや短く緩やかに外反しながら立ち上がる。口唇部下の内外面に浅い凹線が1条巡る。体部との境に明瞭な稜をもつ。内外面とも入念なヨコナデ。底面は平底を呈するかもしれない。	B D ・ 褐色 ・ B	30%
2	坏土師器	口径 12.0	口縁部は直線的に外反する。口唇部内側に凹線が1条巡る。体部との境に稜をもつ。内面と口縁部外面はヨコナデ。体部外面は筥ケズリ。内面と口縁部外面に黒色処理が施されている。	B F G ・ 褐色 ・ B	30%
3	甕土師器	口径 17.5 器高 32.4 底径 10.0	口縁部は直立ぎみに立ち上がり、口唇部で開く。頸部は緩やかに胴部へ移行し、胴部中央が張る。底部はやや丸みをもつ平底である。胴部上半は斜方向の筥ケズリ。下端は横方向の筥ケズリ。底面筥ケズリ。器面は剥落と磨滅が著しい。	B D F ・ 橙 ・ B	80%
4	円筒埴輪	——	胴部に第1・2凸帯が貼付られ、凸帯断面は三角形ぎみの台形で両側をナデ。円形透孔。外面タテハケメ。内面は基底部寄りが指ナデ。胴部は斜方向のハケメ。凸帯内面に指頭圧痕。	B E F ・ 褐色 ・ A	30%
5	円筒埴輪	——	胴部に第2・3凸帯が貼付られ、凸帯断面は台形で両側がナデ。第2凸帯下に歪んだ円形透孔。外面粗いたテハケメ。内面ナデを主とし、部分的にハケメが認められる。凸帯内面に指頭圧痕。	B E F ・ 橙 ・ B	20%
6	円筒埴輪	——	胴部に第1・2凸帯が貼付られ、凸帯断面は三角形ぎみの台形で両側をナデ。円形透孔。外面タテハケメ。胴部はヨコハケメ。凸帯内面に指頭圧痕。	B E F ・ 黄褐色 ・ B	30%
7	円筒埴輪	——	歪んだ円形透孔。胴部タテハケメ。内面斜方向のハケメと粗いナデ。円形透孔の径5.2cm。	B E F ・ 褐色 ・ B	20%
8	円筒埴輪	——	凸帯の幅は広く、凸帯断面は三角形ぎみの台形で両側をナデ。外面タテハケメ。凸帯内面に指頭圧痕。内面斜方向の粗いハケメとナデ。	B F ・ 鈍い黄褐色 ・ C	20%
9	円筒埴輪	底径 16.1	基底部で第1凸帯の断面は台形で両側をナデ。基部内面に指頭圧痕。内面粗いハケメ。	B E F ・ 橙 ・ B	20%
第197図					
1	形象埴輪?	底径 (15.5)	基部は肥厚であり、胴部は直線的である。外面タテハケメ。内面斜方向のナデ。	B E F G ・ 褐色 ・ A	20%
2	円筒埴輪	——	外反する口縁部は端部で強く湾曲する。外面タテハケメ。口唇部内外面ヨコナデ。内面ヨコハケメ。	B E F ・ 褐色 ・ B	5%
3	円筒埴輪	——	第2凸帯断面は三角形ぎみの台形で両側をナデ。円形透孔。外面タテハケメ。内面ヨコハケメ。	B E F ・ 橙 ・ B	10%
4	円筒埴輪	——	凸帯断面は偏平な台形を呈し、両側をナデ。不整形透孔。外面タテハケメ。凸帯内面に指頭圧痕。内面粗いナメハケメ。	B E F ・ 褐色 ・ A	20%
5~9	円筒埴輪	——	5は第9図と同一個体。6・7の凸帯断面は三角形ぎみの台形で両側をナデ。7の凸帯断面は三角形に似る。8は凸帯に接して透孔があり、下端はナデ。9は円形透孔。各遺物の外面はタテハケメ。内面はナメハケメとナデ。	B E F ・ 黄褐色 赤褐色/橙/褐色 ・ B	5~10%
10	円筒埴輪	——	円形透孔。外面タテハケメ。内面ナデ。器面剥落と磨滅。	B E F ・ 橙・ B	5%
11	円筒埴輪	——	凸帯断面は三角形を呈し、両側ナデ。円形透孔。外面タテハケメ。内面ナメハケメ。器面剥落が著しい。	B D E F ・ 褐色 ・ B	10%
第198図					
1	円筒埴輪	——	凸帯断面は偏平な台形を呈し、両側ナデ。外面タテハケメ。内面ナデと粗いナメハケメ。器面は磨滅している。	B E F ・ 黄褐色 ・ B	20%



第197图 第1号住居跡出土遺物(2)



第198图 第1号住居跡出土遺物(3)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
2～5	円筒埴輪	——	凸帯断面は上方が飛び出し、下方が緩やかな形態をすることから三角形ぎみの台形となる。凸帯内面にハケメの後、指頭圧が加えられ痕が残る。外面タテハケメ。内面ヨコ・ナナメハケメと粗いナデ。	BDEF・黄褐色 ／褐色・B	5～10 %
6	円筒埴輪	——	凸帯断面は下方が稜が弱い三角形ぎみである。両側はナデ。外面タテハケメ。内面ナデ。	BEF・赤褐色 ・B	10%
7	円筒埴輪	——	凸帯断面は三角形ぎみの台形を呈し、両側ナデ。外面タテハケメ面ナナメハケメ。	BEF・黄褐色 ・B	20%
8	円筒埴輪	——	凸帯断面は三角形ぎみの台形を呈し、両側ナデ。外面タテハケメ。内面ナナメハケメの後、粗いナデ。	BEF・赤褐色 ・B	5%
9	円筒埴輪	——	凸帯断面は台形を呈し、両側ナデ。外面粗いたテハケメ。内面粗いハケメの後、粗いナデ。	BDEF・黄褐色 ・C	5%
10	円筒埴輪	——	基部で直立し、胴部へと外反すると思われる。基部内面ナデ。底面にハケメか工具痕が認められる。外面タテハケメ。内面ナナメハケメ。	BEF・黄褐色 ・B	5%

第2号住居跡（第199～201図）

L-8 Gridに位置する。台地中央やや東寄り、東へ緩やかに傾斜する斜面で検出された。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.3m、短軸2.85m、深さ32cmで主軸方位はN-10°-Eを指している。

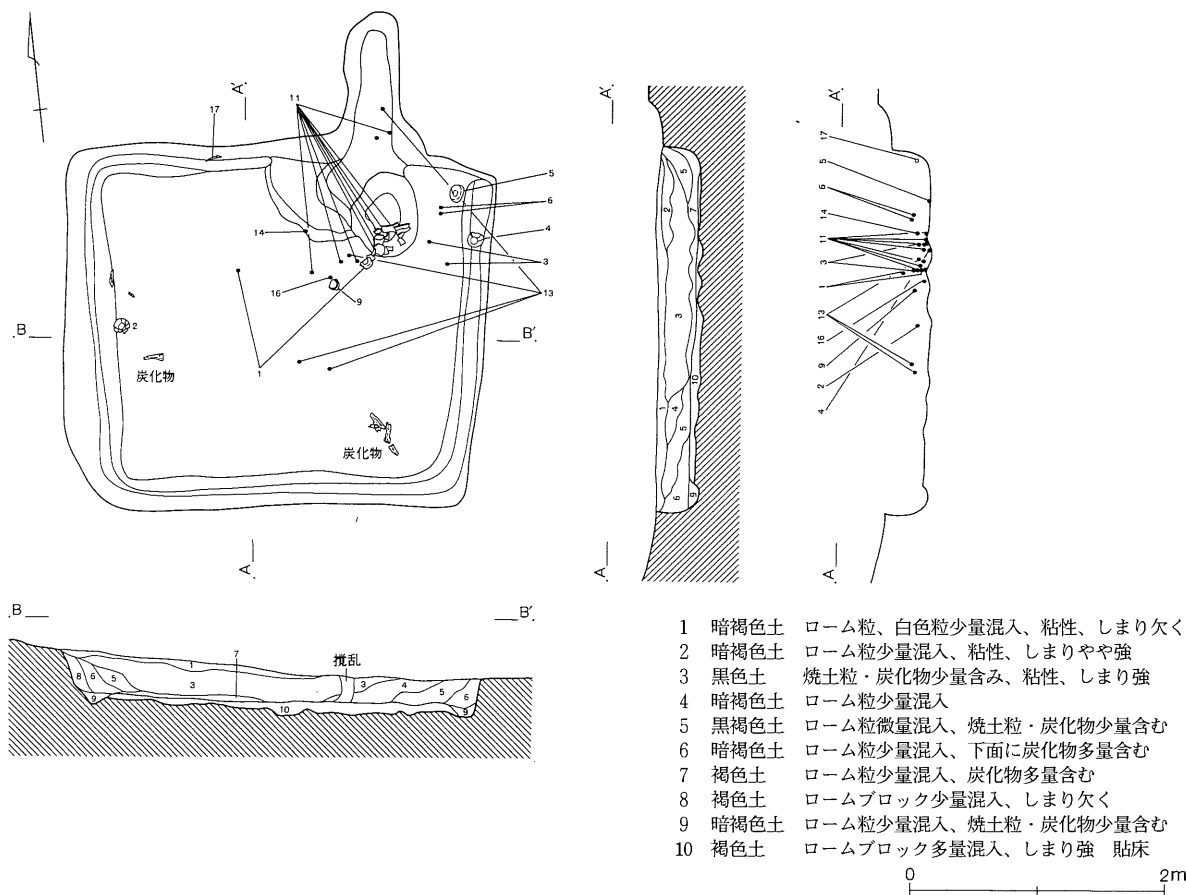
覆土は黒色土を基調とする台地斜面上部からの自然堆積による埋没である。床面直上から炭化物や焼土粒の堆積が観察されたことにより焼失家屋の可能性もあると考えられる。壁は垂直に立ち上がるが、南東側の壁は傾斜しながら立ち上がる。壁溝はカマド周辺を除き全周する。幅20～46cmで深さ4cmである。床面は硬く締まっており、ピットは検出されなかった。住居跡掘り方は凹凸が顕著であり、全体的にローム土により貼床が施されている。

カマドは北壁中央やや東寄り、壁を1.10m掘り込んで構築されている。両袖には褐色土による構築土が遺存し、燃焼部底面は浅く掘り窪んでいる。煙道部寄りには支脚として転用された小形台付甕が逆位に据え置かれていた。燃焼部の壁面は加熱を強く受けた状況が観察され、煙道部は若干の傾斜をもちながら煙り出部で直線的に立ち上がる。

出土遺物は、須恵器坏、高台付坏、鉢、土師器長甕、小形台付甕、鉄製品が出土した。出土状態では、カマド炊き口部周辺や北東コーナーの床面に分布し、また、鉄製品として刃子1点がカマド西側の北壁際より出土している。

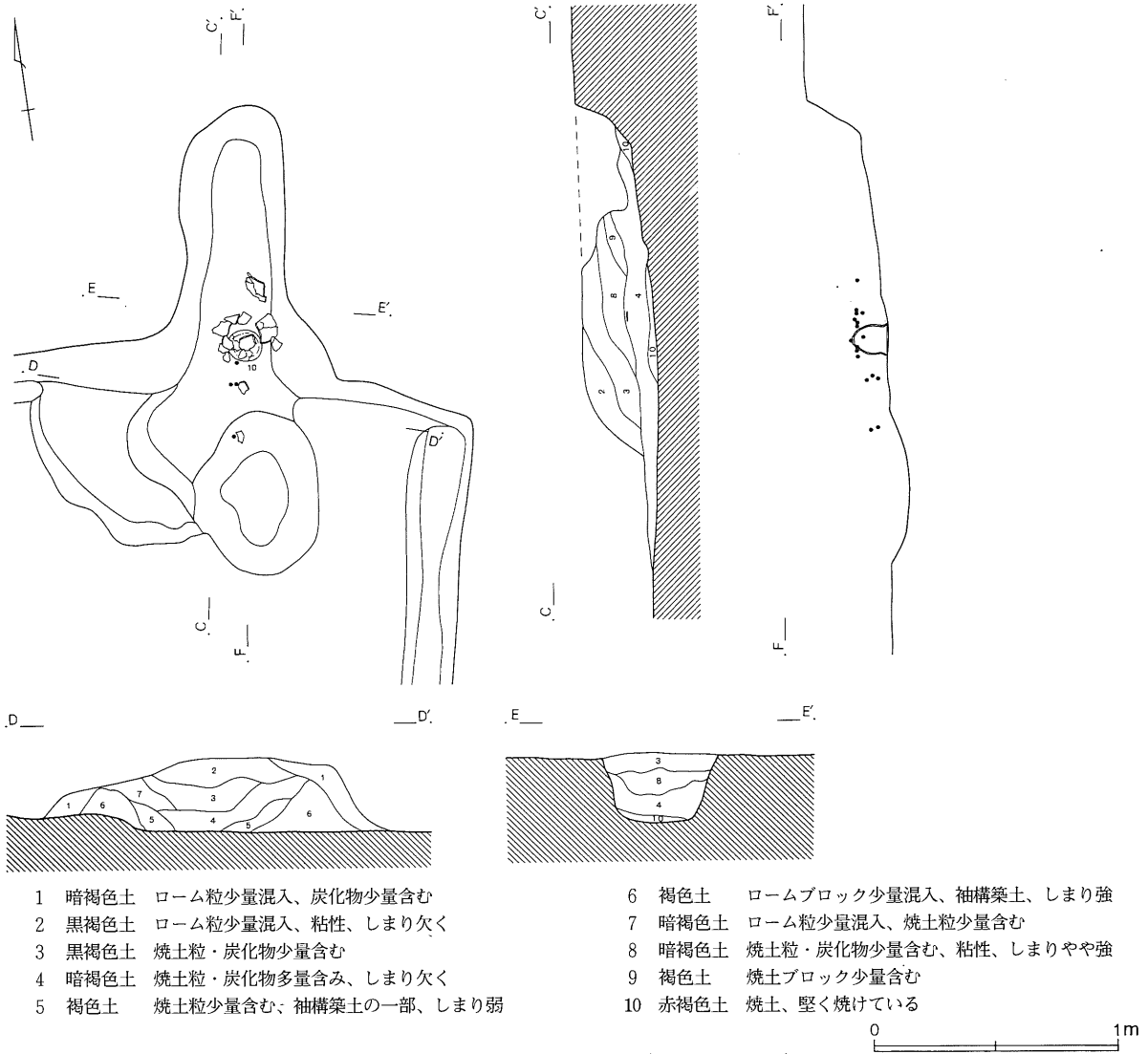
第2号住居跡出土遺物（第201図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	坏 須恵器	口径 11.5 器高 3.1 底径 5.8	口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、口唇部で外反する。端部は丸くおさめる。底部はやや窪む。底部は回転糸切り離し未調整。内外面にナデ調整。内外面に火傷痕。	ABF・青灰色 ・A	60%
2	坏 須恵器	口径 12.3 器高 3.9 底径 6.5	口縁部は外傾しながら立ち上がり、口唇部で外反する。端部は丸くおさめる。底部はやや窪む。底部は回転糸切り離し未調整。器面は剥落と磨滅著しい。	ADF・黄褐色／ 橙・C	70%



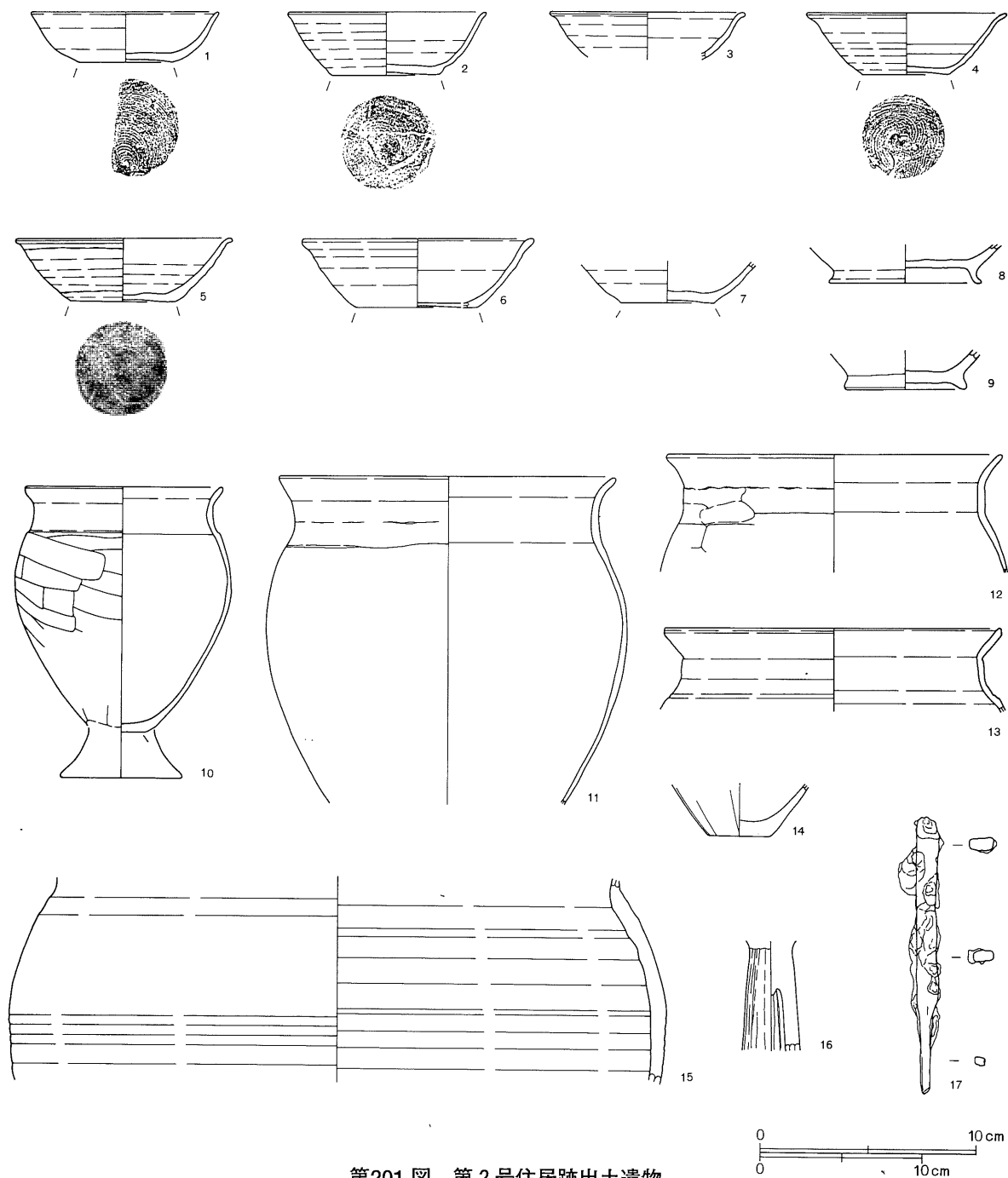
第199図 第2号住居跡 (L=35.50m)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
3	坏 須恵器	口径 11.8	口縁部は内湾ぎみに立ち上がり、口唇部で強く外反する。端部は丸くおさめる。内外面にナデ調整あり。	A D F・褐灰色 ・ A	20%
4	坏 須恵器	口径 12.2 器高 3.8 底径 5.3	口縁部は外傾しながら立ち上がり、口唇部で強く外反する。底部は回転糸切り離し未調整。内外面にナデ調整	A D F・青灰色 ・ A	95%
5	坏 須恵器	口径 13.3 器高 3.9 底径 6.3	口縁部は外傾しながら立ち上がり、口唇部で強く外反する。端部は丸くおさめる。底部は回転糸切り離し未調整。巻き上げ状痕と内外面にナデ調整あり。	A B・青白色 ・ A	95%
6	坏 須恵器	口径 14.0 器高 4.3 底径 7.4	口縁部は外傾しながら立ち上がり、口唇部で肥厚し外反する。底部は回転糸切り離し未調整。内面ナデ調整。外面磨滅著しい。	A B E・灰褐色 ・ C	30%
7	坏 須恵器	底径 5.7	体部は外傾しながら立ち上がる。底部は回転糸切り離し未調整。外面ナデ調整。	A D F・橙 ・ B	40%
8	碗 須恵器	高台径 9.2	体部下端は湾曲しながら立ち上がる。高台部は「ハ」の字状に広がり底部は回転糸切り離し未調整。	B F G・青灰色 ・ A	30%
9	坏 須恵器	高台径 7.2	体部下端は湾曲しながら立ち上がる。高台部は「ハ」の字状に広がる器面は磨滅が著しい。	B D F・灰白色 ・ C	20%



第200図 第2号住居跡竈 (L=35.20m)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
10	台付甕 土師器	口径 12.0 器高 (18.0) 底部 (4.1)	口縁部は「コ」の字状に近く、口唇部で強く外反する。頸部との境に段をもち、肩部に最大径を有す。胴下半はすぼむ。口縁部内外面ヨコナデ。胴部上半は横方向の筥ケズリ。下半は斜方向の筥ケズリで下端は縦方向の筥ケズリ。内面は剥落。	B D・褐色/灰色 ・ B	70%
11	長甕 土師器	口径 20.5	口縁部は「コ」の字状に近く、口唇部で強く外反する。口縁部外面に粘土積み上げ痕が残る。肩部に最大径を有する。器面は剥落が著しいが、胴下半に粘土の付着が観察される。	B F・橙 ・ B	60%
12	長甕 土師器	口径 20.6	口縁部は「コ」の字状に近く、口唇部で強く外反する。肩部に最大径を有すると思われる。口縁部ヨコナデ。胴状半は横方向の筥ケズリ。内面ナデ。器面は剥落が目立つ。	B F・黄褐色 ・ B	20%
13	長甕 土師器	口径 20.5	口縁部は「コ」の字状に近く、口縁部下半はやや内傾するが、上半で強く屈曲し外反する。口唇端部は丸く摘み出される。胴部との境に明瞭な段をもつ。口縁部はヨコナデ。肩部は横方向の筥ケズリ。	B C F・橙 ・ A	20%
14	長甕 土師器	底径 3.8	底部から胴下半へ直線的に外傾する。底面はやや磨滅。外面縦方向の筥ケズリ。内面筥ナデ。	B D F・暗褐色 ・ B	10%



第201図 第2号住居跡出土遺物

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
15	甕 須恵器	頸径 34.6	口縁部は直線的に立ち上がると思われ極めて薄い。胴部上半で張る。胴部上半外面と頸部内面はナデ調整。	B D F・灰色 ・ A	10%
16	高杯	——	脚柱部で裾部に向けて直線的に弱く開く。外面タテミガキか。内面棒状工具で調整。	B F・橙 ・ B	20%
17	刀子	残長12.8cm。最大幅1.1cm。最小幅0.5cm。	出土位置—北壁際。		

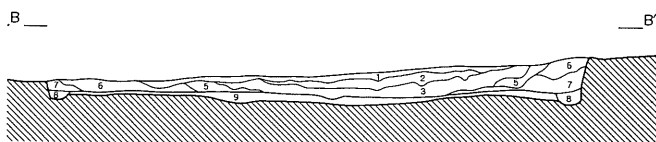
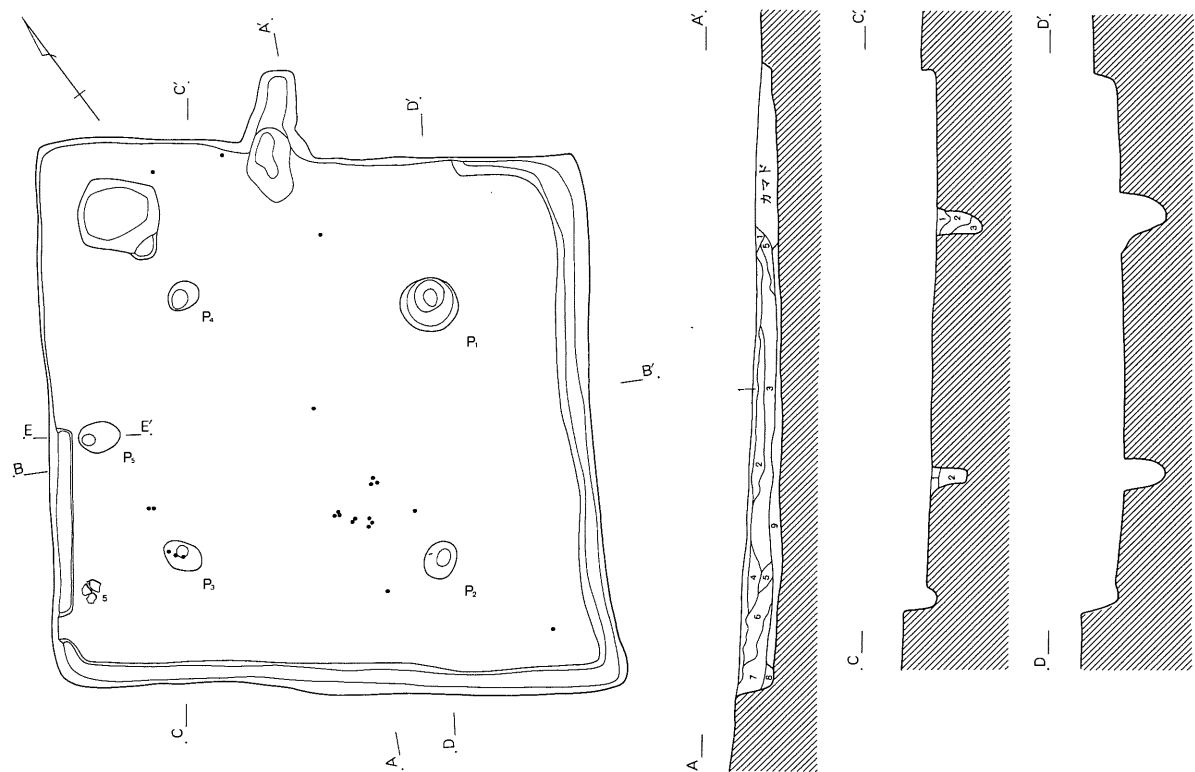
第3号住居跡 (第202~204図)

J-9 Grid に位置する。台地中央で、西に向け緩やかに傾斜する斜面部で検出された。形態は正方形を呈し、規模は長軸4.26m、短軸4.22m、深さ8~27cmを測る。主軸方位はN-55°-Wを指している。

覆土の堆積は、斜面上方にあたる住居跡南東コーナー側からの自然堆積による埋没である。壁溝は斜面上方にあたる東壁から南壁に巡り、一端途切れて西壁のP5 付近まで設けられている。床面はやや凹凸な状況が観察されたが、全体的に堅緻である。ピットは5基検出され、このうちP1=41cm、P2=40cm、P3=35cm、P4=32cmの4基が主柱穴にあたる。南壁際中央にはP5=33cmが検出され、出入口部に伴う施設の可能性が考えられるが判断できない。

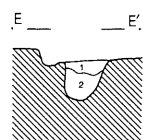
カマドは北壁中央やや西寄り壁を66cm掘り込んで構築されている。カマドの袖部において長甕と甑の胴下半部が出土しており袖の補強材として使用されたものと考えられる。貯蔵穴は住居跡北西コーナー内側に検出され、形態は方形を呈し、規模は長軸65cm、短軸55cm、深さ30cmを測る。掘り方は住居跡中央部でやや深く掘り下げられた後、貼床が施されている。

出土遺物は、カマド内と住居跡南側の床面より数点の土師器破片が出土したに留まる。

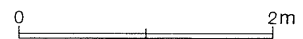


柱穴

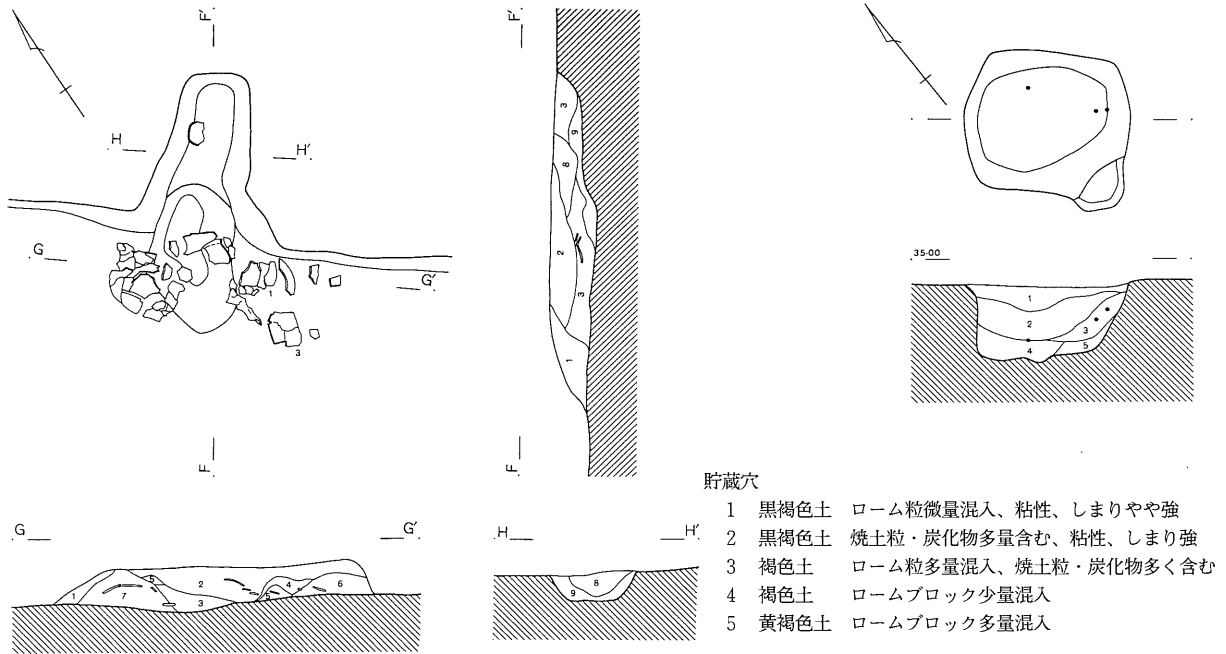
- | | | |
|---|------|----------------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒少量混入、焼土粒少量含む、粘性強 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒微量混入、粘性、しまり強 |
| 3 | 褐色土 | ロームブロック少量混入、しまり強 |



- | | | |
|---|------|-------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒、白色粒少量混入、粘性、しまり欠く |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒少量混入、炭化物少量含む |
| 3 | 黒褐色土 | ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む |
| 4 | 暗褐色土 | 炭化物少量含む、粘性、しまりやや強 |
| 5 | 黒褐色土 | ローム粒少量混入、粘性、しまりやや強 |
| 6 | 褐色土 | ローム粒多量混入、炭化物少量含む |
| 7 | 黄褐色土 | ロームブロック多量混入、焼土粒・炭化物多く含む |
| 8 | 褐色土 | ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む |
| 9 | 暗褐色土 | ロームブロック少量混入、しまり強 貼床 |

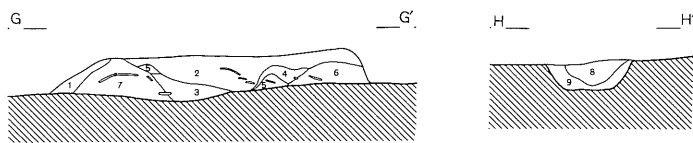


第202 図 第3号住居跡 (L=35.50m)

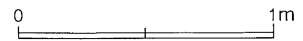


貯蔵穴

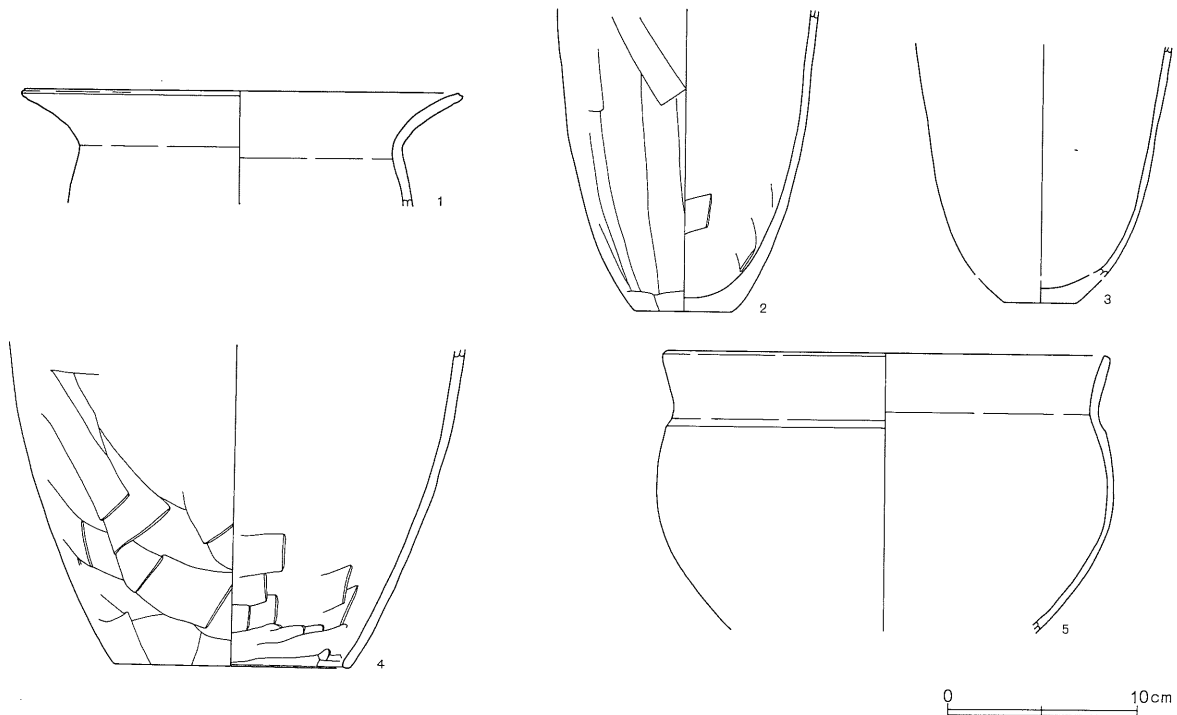
- | | | |
|---|------|----------------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒微量混入、粘性、しまりやや強 |
| 2 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物多量含む、粘性、しまり強 |
| 3 | 褐色土 | ローム粒多量混入、焼土粒・炭化物多く含む |
| 4 | 褐色土 | ロームブロック少量混入 |
| 5 | 黄褐色土 | ロームブロック多量混入 |



- | | | |
|---|------|--------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | ローム粒少量混入 |
| 2 | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物微量含む |
| 3 | 赤褐色土 | 焼土ブロック・炭化物多量含む |
| 4 | 赤褐色土 | 焼土ブロック多量含む |
| 5 | 黒褐色土 | ローム粒多量混入 |
| 6 | 褐色土 | ロームブロック多量混入、しまり強、袖構築土 |
| 7 | 褐色土 | ロームブロック少量混入、焼土粒少量含む、袖構築土 |
| 8 | 黒褐色土 | ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物多量含む |
| 9 | 褐色土 | ローム粒少量混入、粘性、しまり強 |



第203 図 第3号住居跡竈・貯蔵穴 (L=35.20m)



第204 図 第3号住居跡出土遺物

第3号住居跡出土遺物 (第204図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	長甕 土師器	口径 22.7	口縁部は「く」の字状に外反し、口唇端部に凹線が巡る。器面は剥落が著しいが、胴部は縦方向の篋ケズリと思われる。	B D F・橙 ・ B	20%
2	長甕 土師器	底径 5.1	胴部は円筒形を呈する。外面は縦方向の篋ケズリ。内面は斜方向の篋ナデ。器面は磨滅している。	B F・褐色/暗灰色 ・ B	30%
3	長甕 土師器	——	胴部は円筒形を呈し、下端ですぼまる。器面は剥落が著しい。	B F G・橙・ B	20%
4	甗 土師器	底径 12.3	胴部は緩やかに外反する。底端部は平坦な面をもつ。外面斜方向の篋ケズリ、端部横方向の篋ケズリ。内面横方向の篋ケズリの後、ナデ。	B F・暗褐色 ・ A	30%
5	甕 土師器	口径 22.8	口縁部は直線的に立ち上がり、胴部との境に段をもつ。器面は剥落と磨滅が著しい。	B D F・黒褐色 ・ C	30%

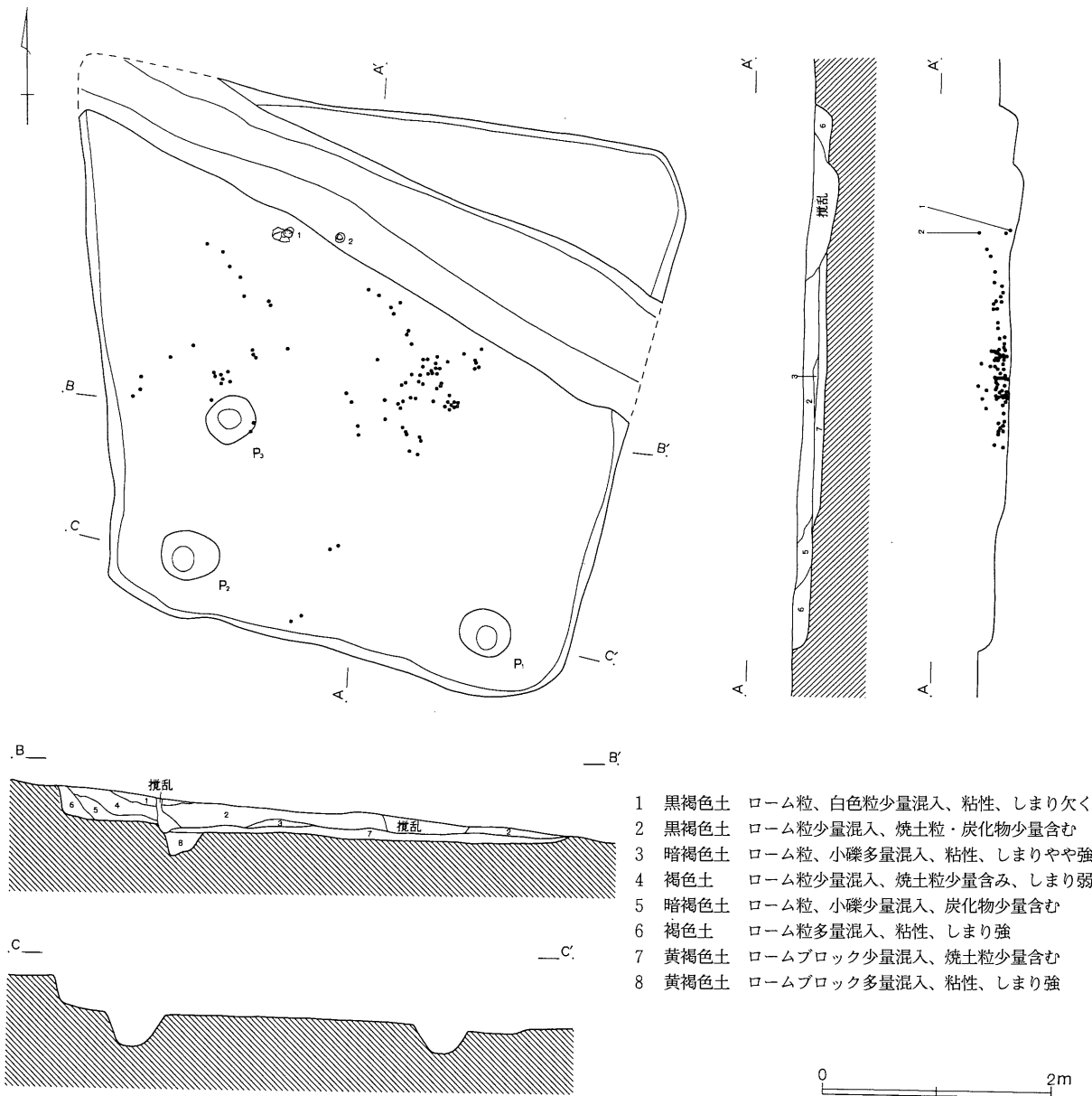
第4号住居跡 (第205～206図)

H、I-15 Gridに位置する。舌状台地の基部にあたる東側斜面で検出された。住居跡の立地する面は、礫層が露出している。住居跡北側を耕作溝により壊されている。形態は隅丸の逆台形を呈し、規模は長軸4.72m、短軸のうち短辺4.06m、長辺5.36m、深さ4～28cmを測る。主軸方位はN-6°-Eを指している。覆土は礫層を掘り込んでいることから礫を多量に含んでいる。床面は平坦であるが、掘り方では東側が一段深く掘り込まれている。ピットは南壁の両コーナー内側に2基検出され、P1=25cm、P2=31cmで比較的浅いものの支柱穴と考えられる。また、住居跡南西側にP3が検出されているが支柱穴かどうかは不明である。炉跡、壁溝は検出されなかった。

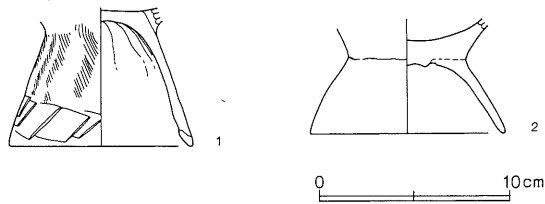
出土遺物は、台付甕の脚部2個体が出土し、分布状態は住居跡中央部付近に散在する。

第4号住居跡出土遺物 (第206図)

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	台付甕	脚高 5.9 脚端径 9.5	脚部は直線的に端部へ開き、端部内面は複合縁を呈している。底部内面は平坦である。外面斜方向のハケメの後、間隔を置いた縦方向の篋ナデ、更に横方向の篋ナデを施す。内面ナデ。	B F・橙 ・ B	20%
2	台付甕	脚高 3.9 脚端径 10.0	脚部は内湾ぎみに開き、端部は丸くおさまる。胴下半は内湾ぎみに立ち上がると思われる。底部内面は窪む。器面は剥落と磨滅著しい。1とは胴部と脚部の成形方法が異なる。	B F G・褐色 ・ B	20%



第205図 第4号住居跡 (L=38.30m)

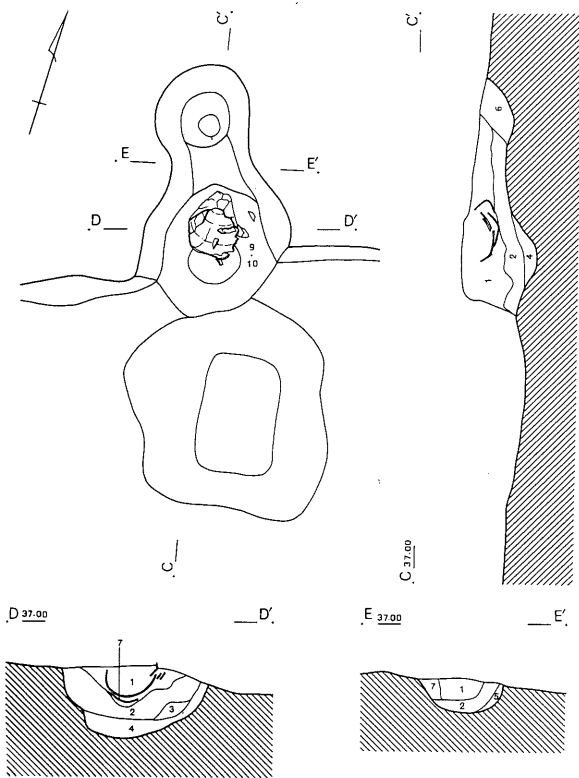
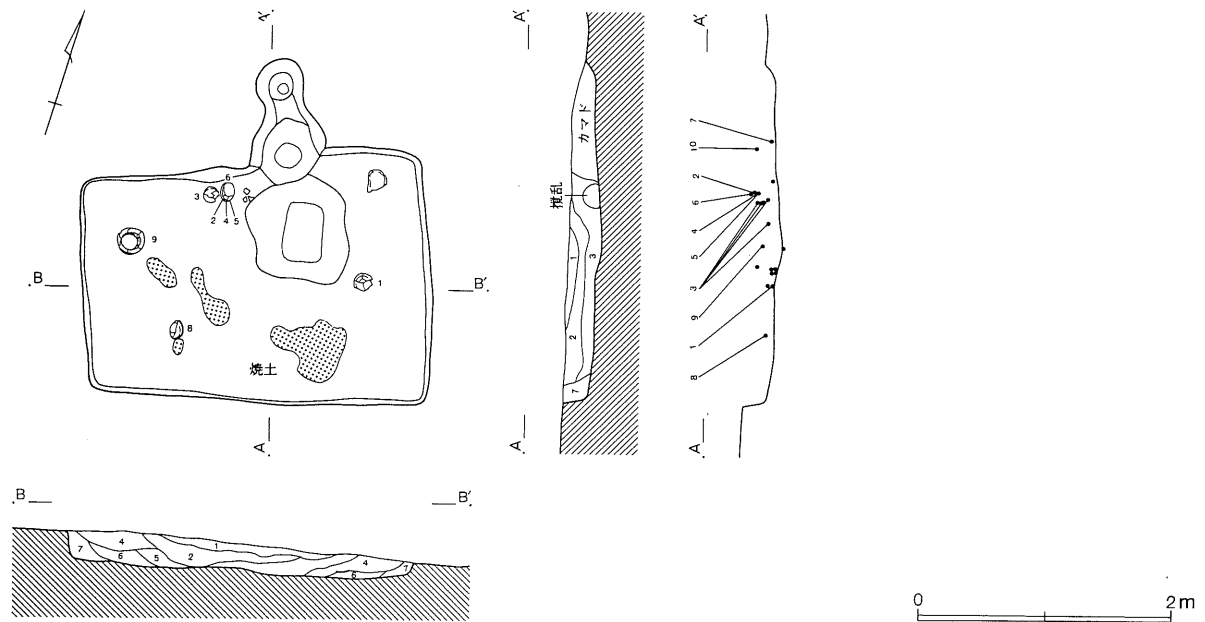


第206図 第4号住居跡出土遺物

第5号住居跡 (第207~208図)

I-13、14Gridに位置する。舌状台地の基部にあたり、台地が舌状部へと移行する斜面部で検出された。形態は長方形を呈するものの、住居跡東側と西側とは形態がことなる様相を呈している。規模は長軸2.27m、短軸2.0m、深さ22cmを測る。主軸方位はN-15°-Wを指している。

覆土は黒色土を基調とする自然堆積による埋没である。床面は概ね平坦で床面の一部に焼土の分布が観察



- 1 黒褐色土 ローム粒、白色粒少量混入、粘性、しまり欠く
- 2 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 3 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土ブロック多量、下層に炭化物多量含む
- 4 暗褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物少量含む
- 5 褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物多量含む
- 6 褐色土 ロームブロック少量混入、粘性、しまりやや強
- 7 暗褐色土 ロームブロック多量混入、粘性、しまり強

竈

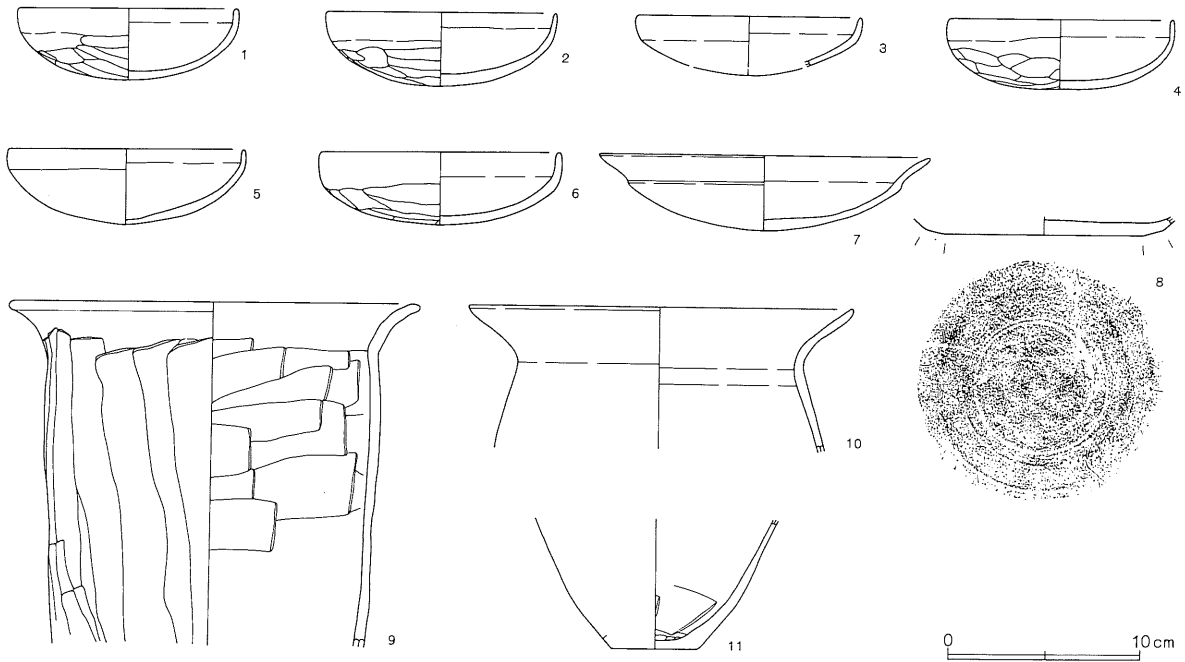
- 1 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物微量含む
- 2 暗褐色土 焼土ブロック多量含む、炭化物少量含む
- 3 赤褐色土 焼土ブロック多量含む
- 4 明褐色土 焼土粒少量含む、堅く焼けている
- 5 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒少量含む
- 6 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒多量含む
- 7 赤褐色土 焼土ブロック多量含む、煙道部崩落層

第207 図 第5号住居跡 (L=37.20m)

された。壁溝、柱穴は検出されなかった。

カマドは住居跡の長辺にあたる北壁中央やや東寄りで壁から84cm掘り込んで構築されている。カマド炊口部から燃焼部にかけての底面は皿状に掘り込まれている。煙道部へは緩やかに傾斜し、煙り出部で立ち上がる。カマドより長甕が出土しているが保存状態が極めて悪く図化することができなかった。

出土遺物は、須恵器坏、土師器坏、長甕、石台である。カマド西側の床面からは第208図2～6の土師器坏が並び重ねられた状態で検出され、住居跡西側の床面には逆位に置かれた長甕1点が出土した。また、カマド北東コーナー内側の床面において扁平な大形の礫が据え置かれた状態で検出されている。



第208図 第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土遺物（第208図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	坏 土師器	口径 11.3 器高 3.8	丸底で体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は弱く内湾する。体部外面篋ケズリ。口縁部外面上半ヨコナデ。内面ヨコナデ。	B C F・暗褐色 ・ B	80%
2	坏 土師器	口径 11.9 器高 3.8	丸底で体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は弱く内湾する。体部外面篋ケズリ。内面ヨコナデ。口縁部外面磨滅により不明。器面は全体できに磨滅している。	B C F・明褐色 ・ B	70%
3	坏 土師器	口径 11.6	丸底で体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は短く直立する。器面全体が磨滅しており調整などは不明。	B C F・明褐色 ・ B	40%
4	坏 土師器	口径 11.6 器高 3.7	丸底で体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は弱く内湾する。体部外面篋ケズリ。口縁部上半ヨコナデ、下半未調整。内面ヨコナデ。	B C F・褐色 ・ B	70%
5	坏 土師器	口径 12.2 器高 3.9	丸底で体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は弱く内湾する。体部外面篋ケズリ。口縁部は磨滅により不明。内面ヨコナデ。内面黒斑。	B C F・褐色 ・ B	80%
6	坏 土師器	口径 12.3 器高 3.9	丸底で体部は内湾しながら立ち上がるが、口縁部へ移行するにあたり篋ケズリが加えられる為か、面の転換点をもつ。口縁部は直立ぎみである。底面中央は一方向篋ケズリ、周囲を横方向篋ケズリ。内面ナデ	B E F・褐色 ・ B	90%

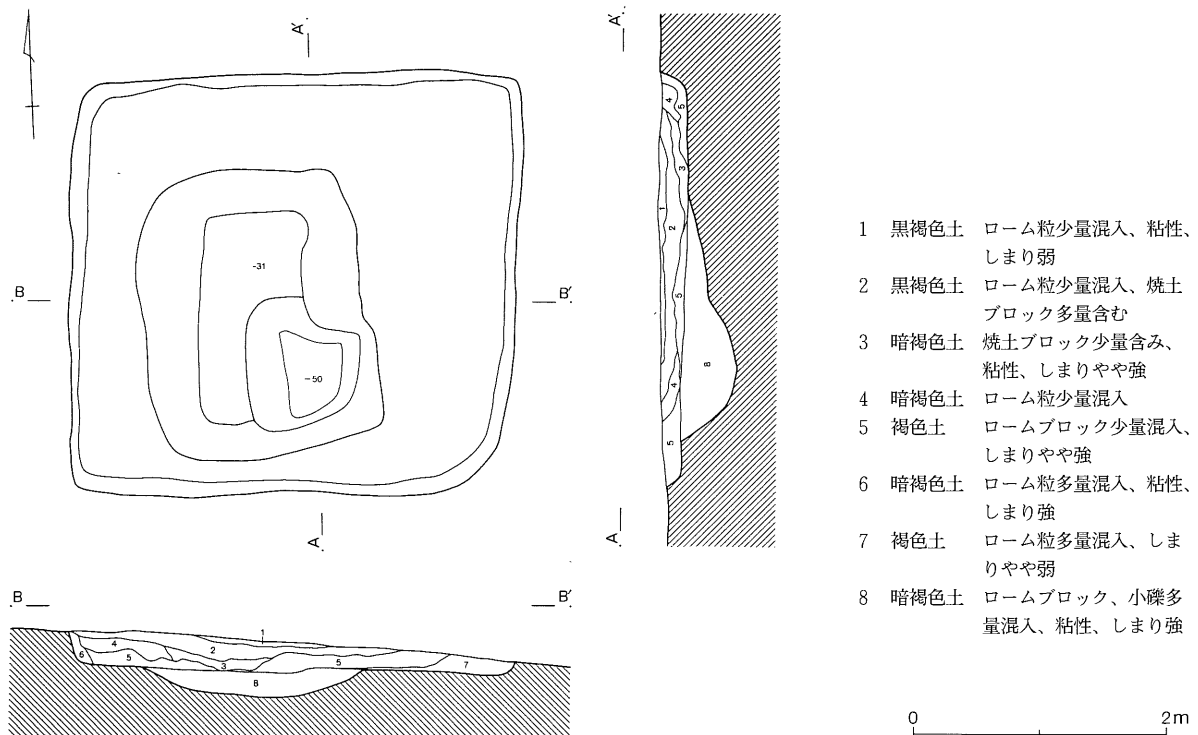
番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
7	皿 土師器	口径 17.3 器高 3.9	丸底で体部は緩やかに立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反する。浅い皿形を呈する。体部外面は筥ケズリ。口縁部外面はヨコナデ。内面ナデ。器面は磨滅している。	B E F・褐色 ・ B	80%
8	坏 須恵器	底径 10.2	底部は盤状を呈し、底面全体に回転ヘラケズリを施す。内面にロクロ調整痕が残る。器面はやや磨滅している。	B D F・黄褐／黒褐色 ・ C	30%
9	長 甕 土師器	口径 21.0	口縁部は「く」の字状を呈し、強く外反する。胴部は縦方向の筥ケズリで口縁部下半までおよぶ。内面は横方向の筥ケズリ。器面は磨滅が著しい。	B D F・黄褐色 ・ C	60%
10	長 甕 土師器	口径 20.0	口縁部は「く」の字状を呈し、直線的に外反する。胴部はやや張ると思われる。器面は磨滅が著しい。	B D F・褐色 ・ B	10%
11	長 甕 土師器	底径 4.5	底部から外反しながら立ち上がる。内面は筥ナデ。外面は磨滅している。	B D F・褐色 ・ B	5%

第6号住居跡 (第209図)

G-16Gridに位置する。調査区南端に位置し、楓山西遺跡から楓山北遺跡が所在する舌状台地へと移行する台地斜面部で検出された。形態は方形を呈し、長軸3.5m、短軸3.27m、深さ21cmを測る。主軸方位はN-8°-Eを指している。

覆土は黒色土を基調とする自然堆積による埋没である。炉跡、柱穴、壁溝などの附帯施設は検出されなかった。住居跡床下より不整長方形の土壌が検出され、規模は長軸2.27m、短軸1.73m、床面からの深さ43cmであり、本住居跡に伴うものと考えられる。

遺物は検出されなかった。

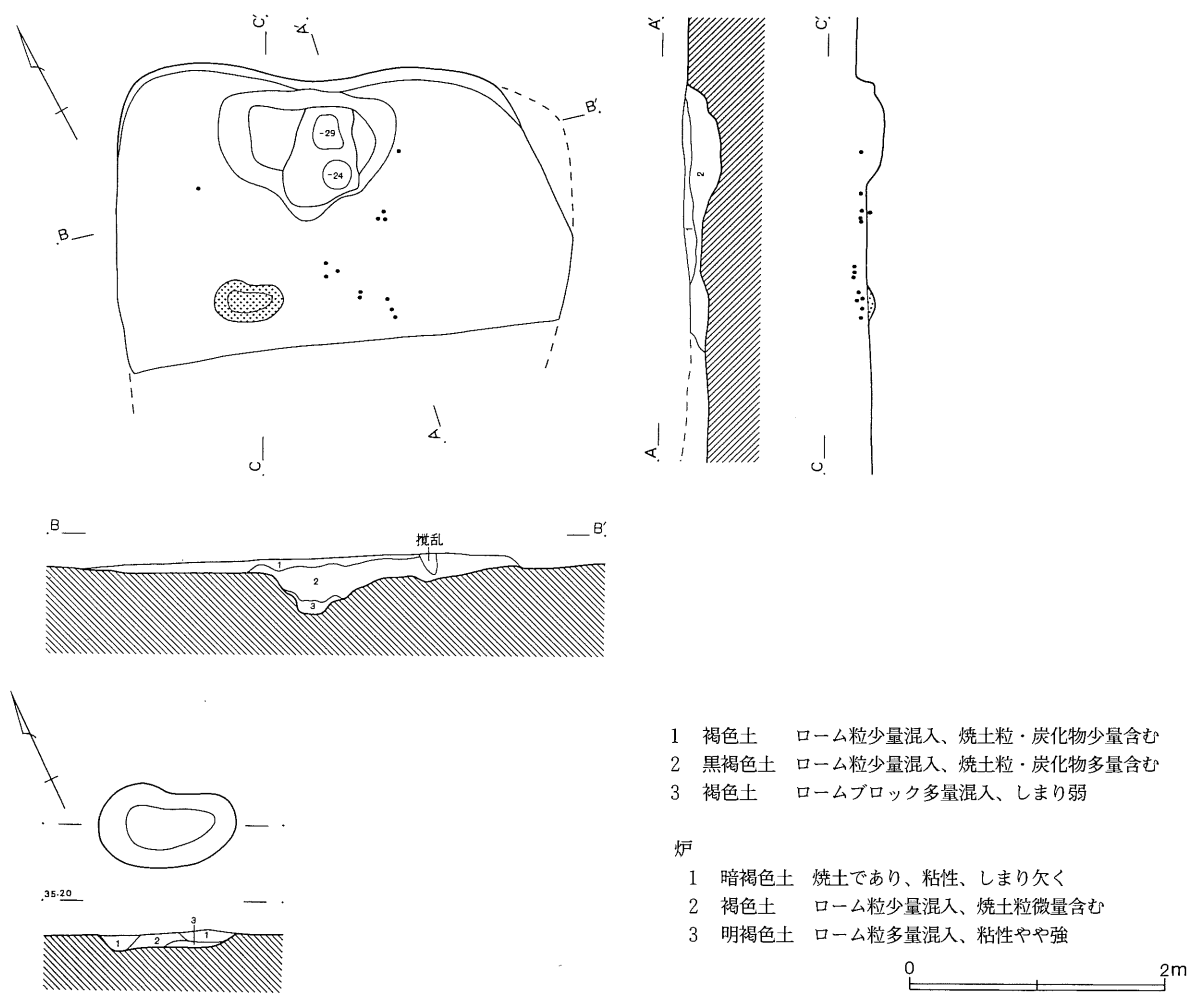


第209図 第6号住居跡 (L=39.80m)

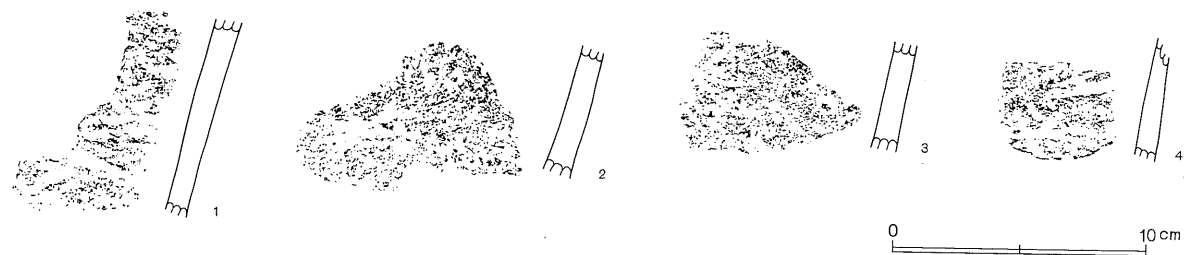
第7号住居跡 (第210～211図)

K-6 Grid に位置する。舌状台地中央部の平坦面で検出されたが、削平されており、形態、規模において不明な点が多い。形態は隅丸の楕円若しくは長方形を呈し、規模は長軸 (3.58) m、短軸 (2.06) m、深さ14cmである。床面は平坦であるが、全体的に軟質な状態である。炉跡は住居跡中央の西壁寄りで見出され、不整長方形で規模は長軸54cm、短軸29cm、深さ6cmと浅い。

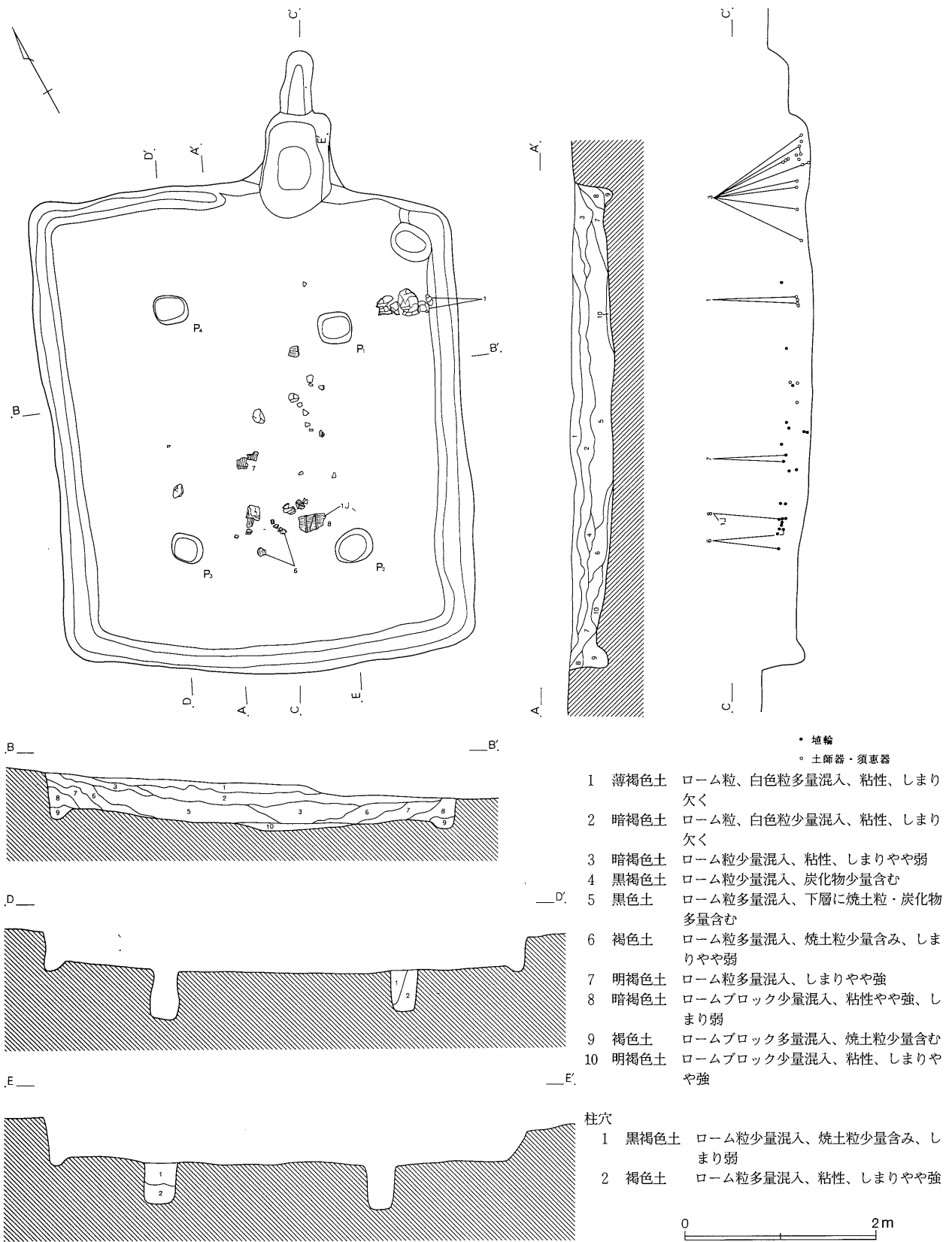
出土遺物は、縄文時代前期黒浜式土器を少量出土したに過ぎず、図化した資料も器面の剥落が著しいため地文は不明瞭である。胎土中に多量の繊維が混入されている。



第210図 第7号住居跡 (L=35.40m)



第211図 第7号住居跡出土遺物



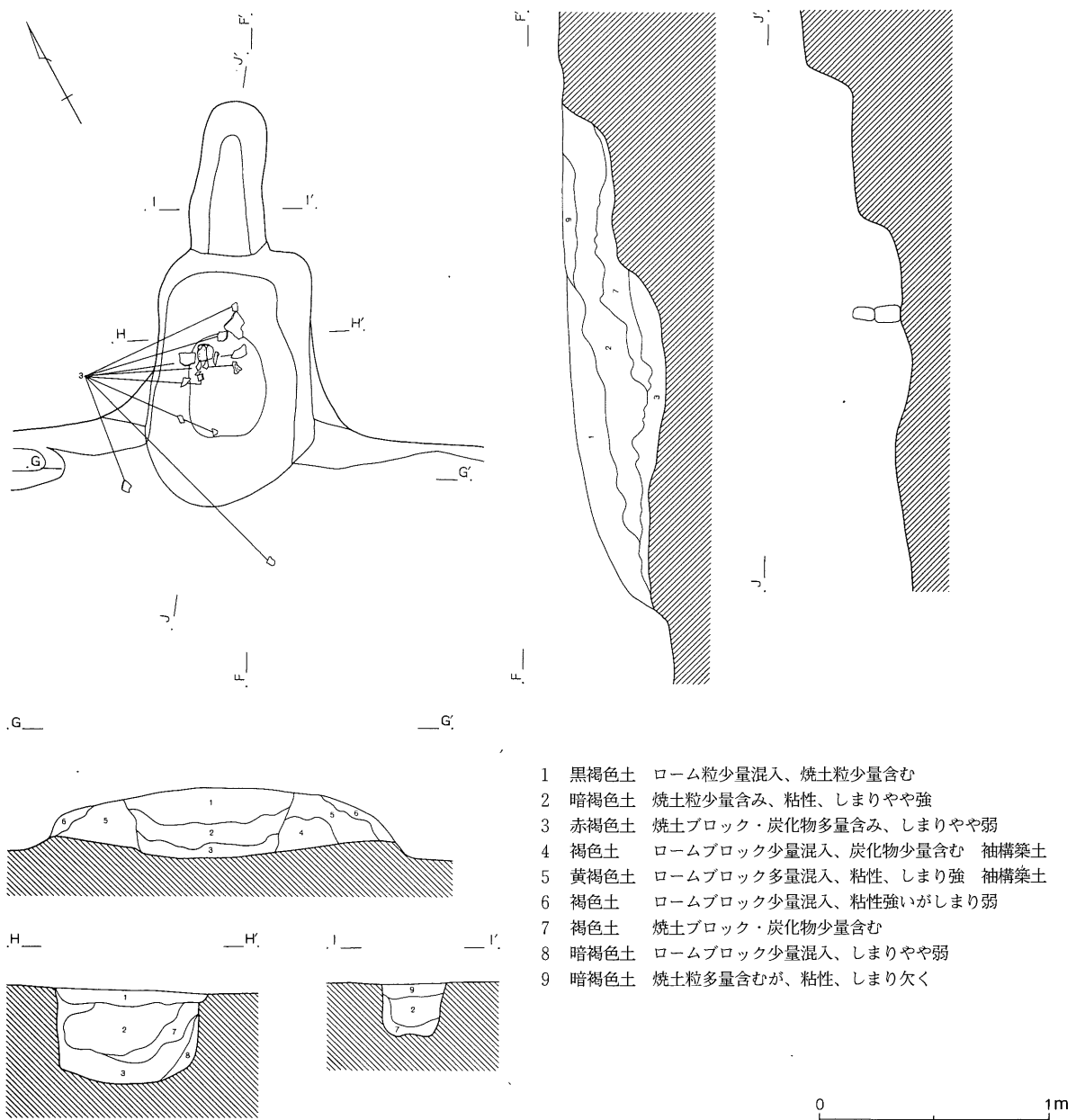
第212図 第8号住居跡 (L=35.30m)

第8号住居跡 (第212~214図)

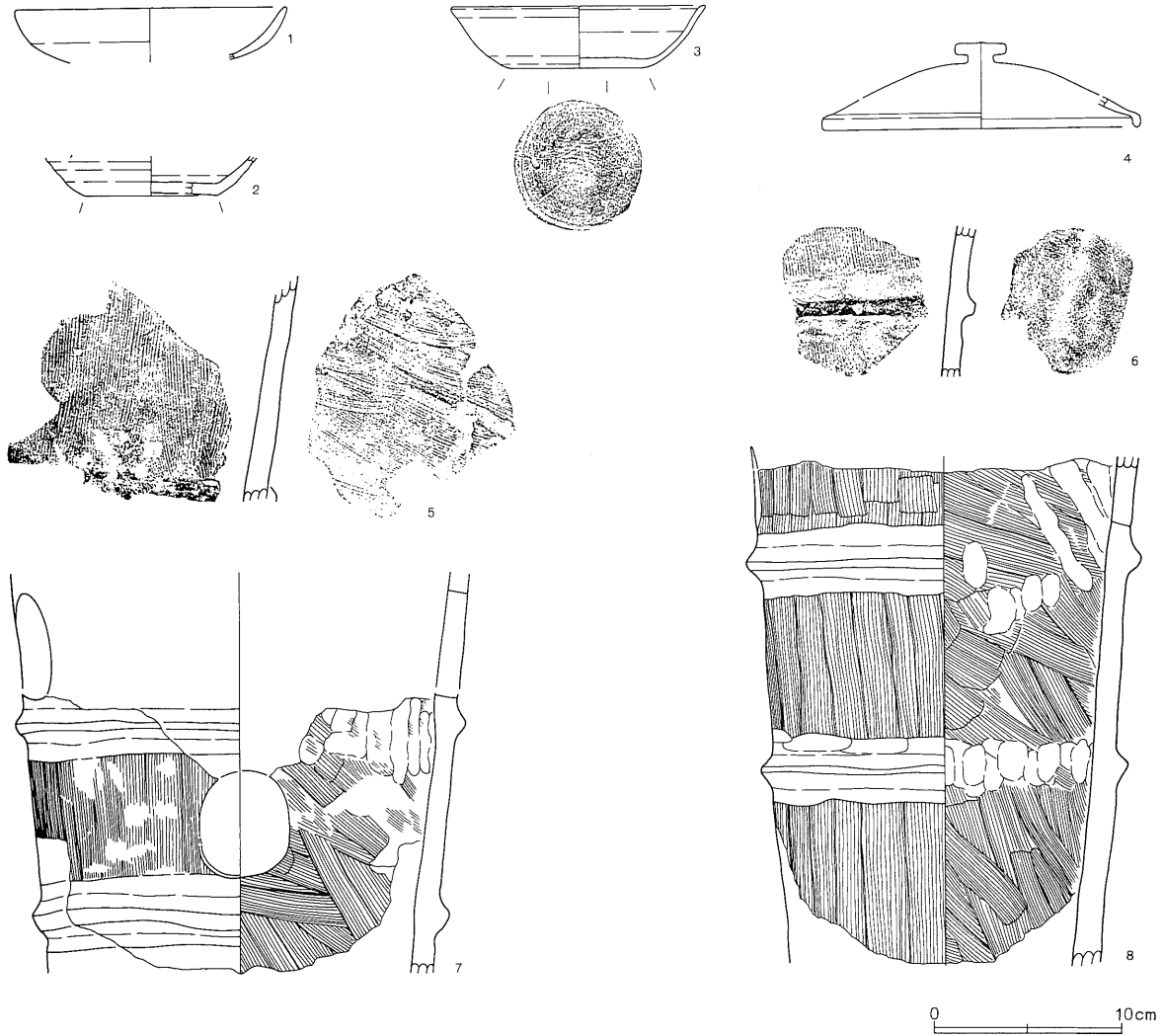
L、M-5、6 Gridに位置する。舌状台地中央部で東側へ傾斜する緩やかな斜面部に位置する。形態は長方形で僅かに北壁と南壁が張り、規模は長軸5.15m、短軸4.26m、深さ21~41cmを測る。主軸方位はN-22°-Eを指している。

覆土は黒色土を基調とした自然堆積による埋没である。壁は垂直に立ち上がり、壁溝はカマドを除き全周する。壁溝の幅26cm、深さ8cmで底面は平坦である。床面は住居跡中央がやや窪むもののほぼ平坦で硬く締まっている。支柱穴は4基検出され、P1=45cm、P2=41cm、P3=50cm、P4=43cmを測る。貯蔵穴は住居跡北東コーナー内側で検出され、小形であり深さ8cmを測る。掘り方は検出されなかった。

カマドは、北壁中央やや東寄り壁を1.44m掘り込んで構築されている。両袖は比較的良く遺存しており、袖内側面に火熱面をもつ。燃烧部底面は浅く掘り込まれ、中心に支脚が据えられている。煙道部は焼成部よ



第213図 第8号住居跡竈 (L=35.10m)



第214図 第8号住居跡出土遺物

り一段高く、煙り出部は直線的に立ち上がる。カマドからは第214図3の須恵器坏が出土している。

出土遺物は、須恵器坏、蓋、土師器坏、長甕、円筒埴輪である。出土状態では、住居跡北東側床面に細片化しているため図化できなかったが長甕が出土し、覆土上層からは円筒埴輪の破片が少量出土している。第214図8は第1号住居跡出土の円筒埴輪と接合関係を示している。

第8号住居跡出土遺物（第214図）

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
1	坏 土師器	口径 14.3	丸底で体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は直立する。器面の剥落が著しいが、体部下半は極めて薄い。	B F・褐色 ・ C	40%
2	坏 須恵器	底径 (7.0)	底部から緩やかに立ち上がる。底面は周縁筥ケズリ。内面ナデ調整。	A B F・青灰色 ・ A	5%
3	坏 須恵器	口径 13.3 器高 3.3 底径 7.0	口縁部は直線的に外反し、口唇部はやや外傾する。底部は静止糸切りの後、回転筥ケズリ。内外面にナデ調整。口唇部に焼け斑。	A B F・青灰色 ・ A	80%

番号	器種	法量	形態・手法の特徴	胎土・色調・焼成	残存率
4	蓋 須恵器	口径 (16.5)	小片であり器形は不明瞭。口縁部外面に焼け斑がある。	A B・青灰色 ・A	5%
5	円筒埴輪	——	下端に凸帯貼付痕がある。外面タテハケメ。内面ナナメハケメ。器面はやや磨滅している。	B F・褐色 ・B	5%
6	円筒埴輪	——	凸帯断面は台形を呈し、両側はナデ。外面はタテハケメ。内面はナナメハケメ。器面は磨滅している。	B F G・橙 ・B	5%
7	円筒埴輪	——	第1・2凸帯であり、凸帯断面はやや三角形ぎみの台形である。両側をナデ。凸帯間に円形透孔。外面タテハケメ。内面ヨコハケメ→ナナメハケメ。器面は磨滅している。	B F・黄褐色 ・B	20%
8	円筒埴輪	——	第1・2凸帯であり、凸帯断面は台形と三角形とがあるが、本来は台形であったものが、ナデることにより三角形となってしまったものと思われる。外面はタテハケメ。凸帯内側に指頭圧痕。内面はナナメハケメ。第1号住居跡出土遺物と接合関係をもつ。	B F・橙 ・B	30%

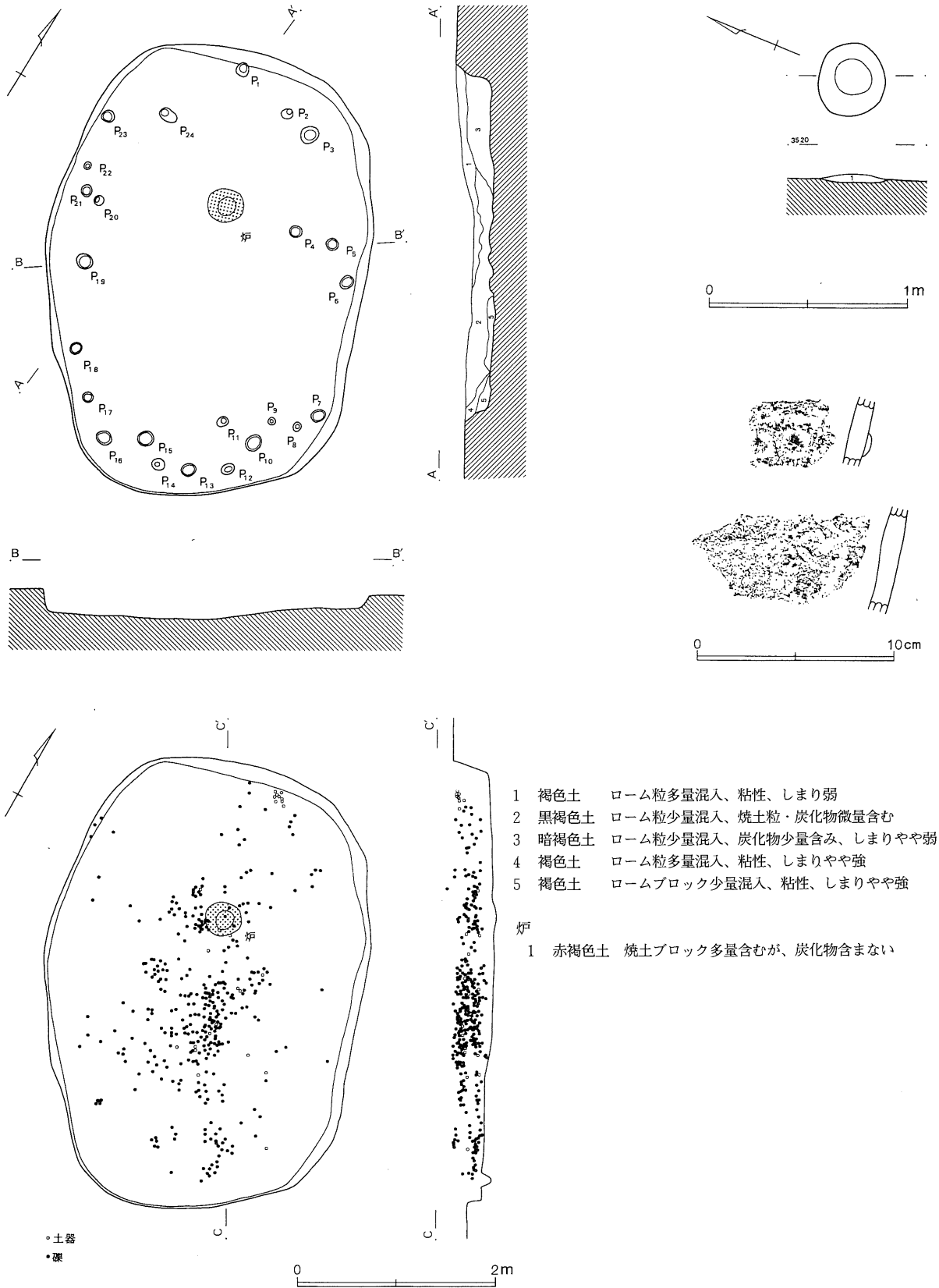
第9号住居跡 (第215図)

K-9 Gridに位置する。舌状台地の南側中央部の平坦面に位置する。本住居跡は検出当初集石土壙として調査を進めたが、調査が進むにつれ住居跡であることが判明した。形態は小判形に似た隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.54m、短軸3.24m、深さ14~36cmを測り、主軸方位はN-29°-Wを指している。

覆土上層から中層にかけて拳大前後の礫計276点が出土した。礫は火熱を受けたものも含まれており、土器は小破片で28点を数えるのみであった。床面は凹凸がみられるが、住居跡中央部は堅く締まっている。ピットは24基検出され、このうちP3、P6、P7、P13、P15、P16が深い。各ピットの深さは以下のとおりである。P1=14cm、P2=9cm、P3=27cm、P4=17cm、P5=13cm、P6=24cm、P7=23cm、P8=3cm、P9=9cm、P10=34cm、P11=6cm、P12=9cm、P13=25cm、P14=6cm、P15=38cm、P16=23cm、P17=13cm、P18=18cm、P19=14cm、P20=8cm、P21=10cm、P22=5cm、P23=14cm、P24=10cmである。

炉跡は住居跡中央やや北壁寄りに位置し、形態は円形で径35cm、深さ3cmで比較的良く焼けている。

出土遺物は、縄文時代前期諸磯c式土器と礫である。出土状態は、垂直分布でみると間層を挟んで上層と中層に遺物の集中がみられる。拓影図1は円形浮文が張り付けられ、2は剥落が著しいが単節縄文の施文がみられる。



第215図 第9号住居跡 (L=35.60m) ・出土遺物

(2) ピット群 (第216図)

第1ピット群 (第216図左上)

K-12 Gridに位置する。舌状台地基部の中央平坦面に展開するピット群である。ピットの形態は円形や楕円形を基調とし、規模は径24~68cm、深さ15cm~30cmを測る。覆土に柱痕が認められたものもある。直線的な配列をとるものもあるが規則性を欠き、柱間寸法から、建物としての配置を把らえることはできなかった。時期については、決定し得るだけの出土遺物は検出されず、覆土から黒褐色土を基調とする点において古代に属するものと考えて置きたい。

第2ピット群 (第216図左下)

K-10~12 Gridにかけて検出され、舌状台地の基部にあたる。中央平坦面の第1ピット群北側に隣接する。本ピット群のなかには土壙との区分が難しいものも含まれるが、ここではピットとして扱い報告することにした。形態は円形、楕円形、不整形と不揃いであり、径は28~60cm、深さ11~32cmとばらつきがある。柱穴配置による建物は想定できないが、直線的な配列をとるものもあることから柵列を想定することもできるが可能性は低い。時期については出土遺物が無く、覆土の状況も様々で断定できない。

第3ピット群 (第216図右上)

L-9、10 Gridに位置する。舌状台地の南側中央の平坦面で、第9号住居跡の東側に集中する。ピットの中には第2ピット群と同様に土壙との区分が難しいものも含まれるが、ここではピットとして扱い報告することにした。ピットは規模において比較的大形なものを中心とし、径37~74cm、深さ11~36cmを測る。建物としての柱穴配置を把らえることはできなかった。時期は、決定し得る出土遺物が無いため不明である。

第4ピット群 (第216図右下)

L、M-7、8 Gridに位置する。舌状台地中央の東側肩部から斜面部にかけて検出され、第1号住居跡と重なる部分に展開する。ピットの配列は弧を描くように巡っているが、柱痕は観察されなかった。柱間寸法や柱穴配置により建物を想定するには難しい状況であった。時期については出土遺物が乏しいため不明であるが、覆土が黒褐色土を基調としていることから古代に属するものと考えて置きたい。

(3) 土 壙 (第217図)

第1号土壙 (第217図)

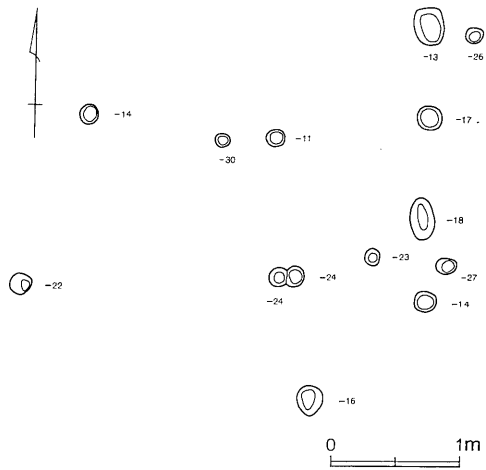
J-4 Gridに位置する。舌状台地の西側肩部で検出され、標高34mを測る。形態は円形を呈し、規模は長軸1.67m、短軸1.5m、深さ39cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、底面はやや凹凸がある。遺構確認段階では、集石として調査を始めたが、最終的には土壙であることが判明した。覆土上面には拳大よりやや大きめの礫と土器片が出土し、中層から下層にかけては焼土粒・炭化物を多量に含む。土層堆積状況と遺物分布からみて人為的に一部埋め戻されながらも集石土壙として使用された可能性が強い。出土遺物から縄文時代前期諸磯c式期に属すると考えられる。

第2号土壙 (第217図)

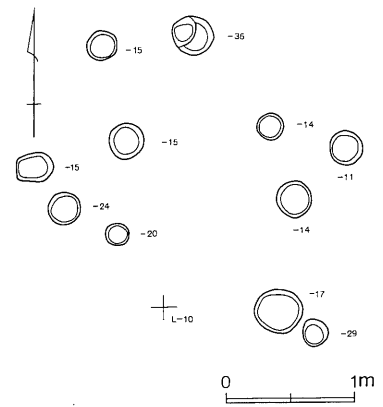
L-6 Gridに位置する。舌状台地中央やや東側で検出された。形態は不整五角形を呈し、規模は長軸1.84m、短軸1.66m、深さ32cmを測る。壁はやや傾斜しながら立ち上がる。覆土上層から拳大の礫と土器片が出土している。出土遺物から縄文時代前期諸磯c式期に属すると考えられる。

第3号土壙 (第218図)

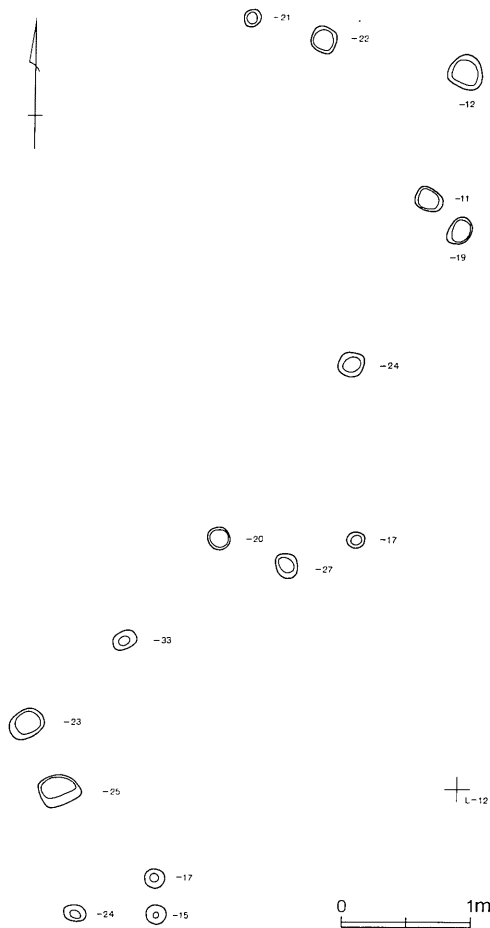
J-5 Gridに位置する。舌状台地の西側肩部で検出され、北へ約7mには第1号土壙が所在する。形態は楕円形を呈し、規模は長軸1.48m、短軸1.32m、深さ33cmである。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦で



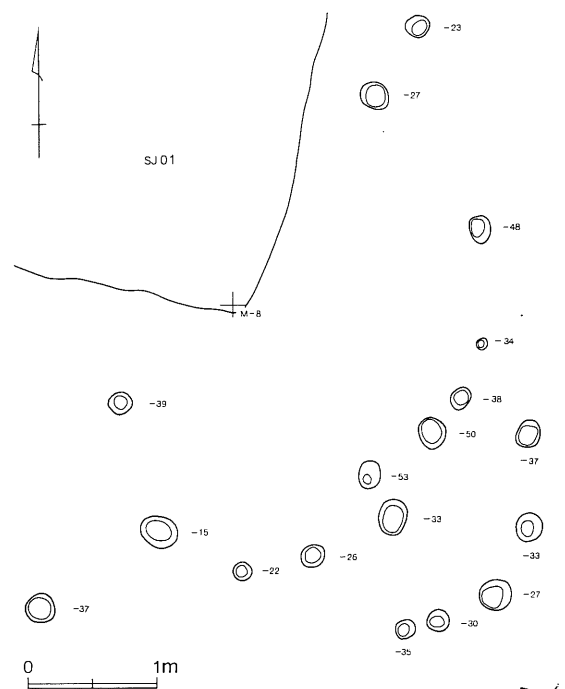
第1ピット群



第3ピット群



第2ピット群



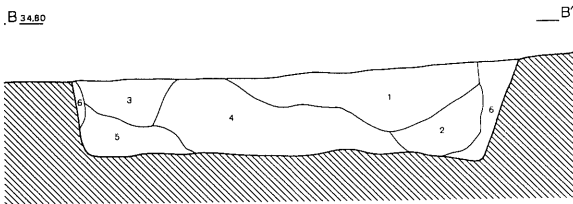
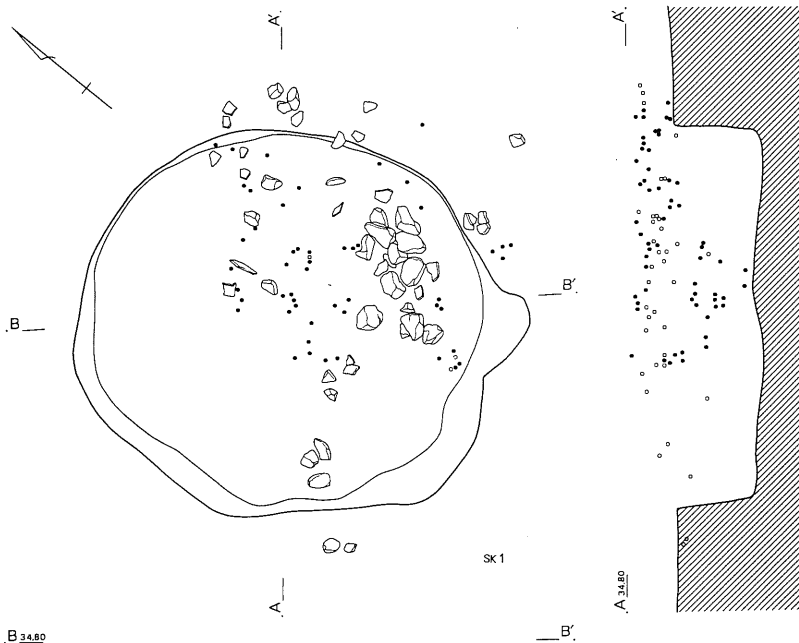
第4ピット群

第216図 第1～4ピット群

ある。

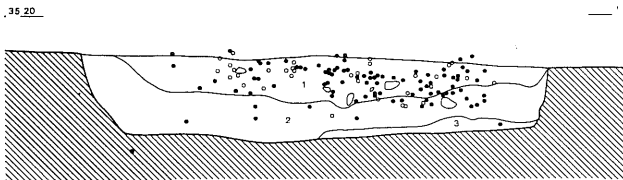
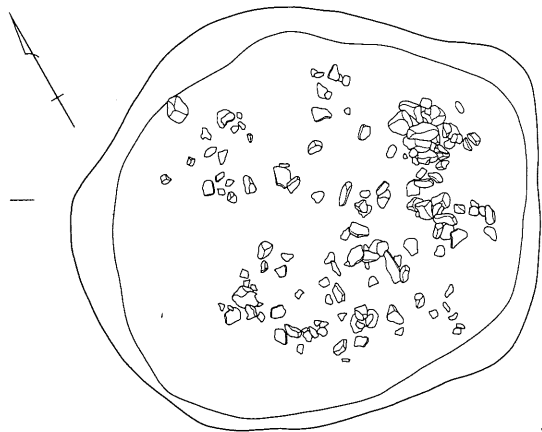
第4号土壇 (第218図)

G-11Grid に位置する。西側へ傾斜する斜面の平場で検出された。形態は不整円形で、規模は57cm、深さ8cmと小規模な土壇である。覆土には焼土粒を多く含むことから人為的な遺構であると判断した。遺物は



1号土坑

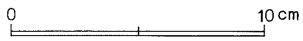
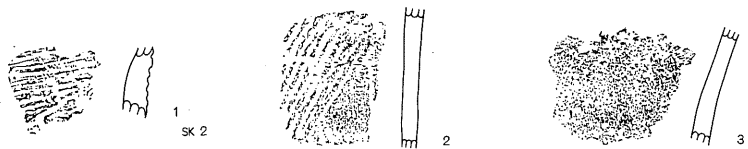
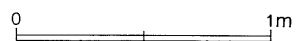
- 1 褐色土 ローム粒多量混入、炭化物少量含む、しまり欠く
- 2 暗褐色土 ローム粒ブロック少量混入、粘性、しまりやや弱
- 3 褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒少量含む
- 4 黒褐色土 ローム粒少量混入、焼土粒・炭化物多量含む、遺物含む
- 5 褐色土 ロームブロック多量混入、粘性、しまりやや強
- 6 褐色土 ロームブロック多量混入、しまり弱



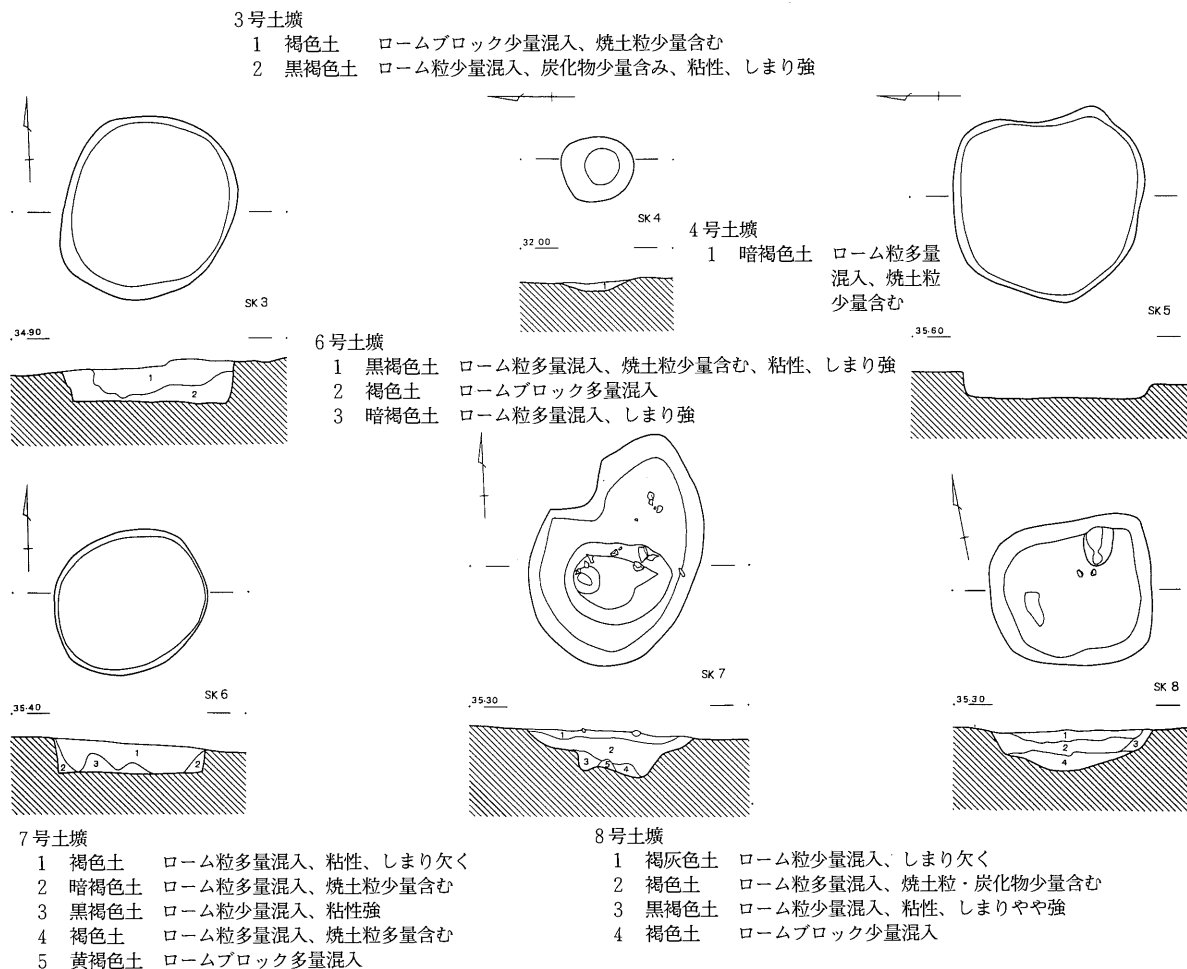
2号土坑

- 1 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒・炭化物多量含む
- 2 暗褐色土 ローム粒多量混入、焼土粒少量含む、粘性やや強
- 3 黄褐色土 ロームブロック

• 土器
○ 礫



第217図 第1・2号土坑・第2号土坑出土遺物



第218図 第3～8号土壙

出土していない。

第5号土壙 (第218図)

K-6 Gridに位置する。舌状台地中央の平坦面で検出され、南へ約1mの距離には第7号住居跡が所在する。形態は隅丸五角形を呈する。規模は長軸1.60m、短軸1.40m、深さ18cmを測る。壁は直線的に立ち上がり、底面は平坦である。遺物は出土していない。

第6号土壙 (第218図)

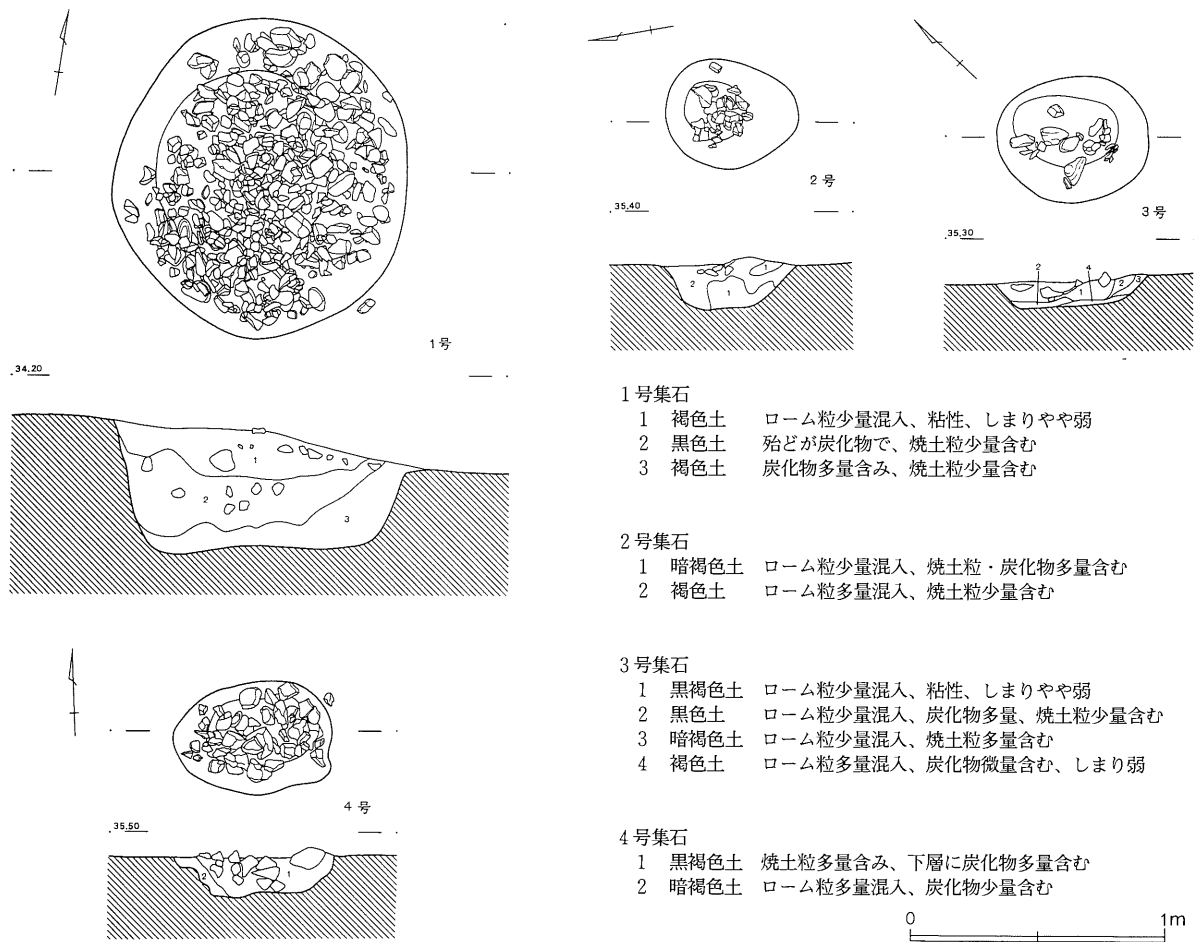
L-8 Gridに位置する。舌状台地中央やや東寄りの平坦面で検出され、南へ約1mには第6号住居跡が所在する。形態は楕円形を呈し、規模は長軸1.20m、短軸1.08m、深さ27cmを測り、壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。遺物は出土していない。

第7号土壙 (第218図)

L-8 Gridに位置する。舌状台地中央の平坦面で検出され、第3ピット群と第4ピット群の中間に位置する。形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.90m、短軸1.27m、深さ34cmを測る。底面は一段更に掘り込まれ、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

第8号土壙 (第218図)

J-11 Gridに位置する。南側の台地斜面から舌状台地へと移行する台地基部の平坦面に所在する。形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.27m、短軸1.12m、深さ18～32cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面



第219図 第1～4号集石土壌

の中央は更に一段掘り込まれている。遺物は出土していない。

(4) 集石土壌 (第219図)

第1号集石土壌 (第219図)

M-9 Gridに位置する。舌状台地の東側斜面で検出された。形態は円形を呈し、規模は径1.2 m、深さ34~50cmを測る。壁はやや傾斜するものの直線的に立ち上がり、底面は平坦である。礫の大きさは拳大からそれ以下のものが上層から中層にかけて密集した状態で堆積しており、礫は全て火熱を受け多くは破碎していた。

第2号集石土壌 (第219図)

K、L-3 Gridに位置する。舌状台地先端の平坦面で検出された。形態は楕円形を呈し、規模は長軸52cm、短軸43cm、深さ18cmを測る。断面形は逆台形を呈する。礫は覆土上層から出土し、全て火熱を受け破碎していた。

第3号集石土壌 (第219図)

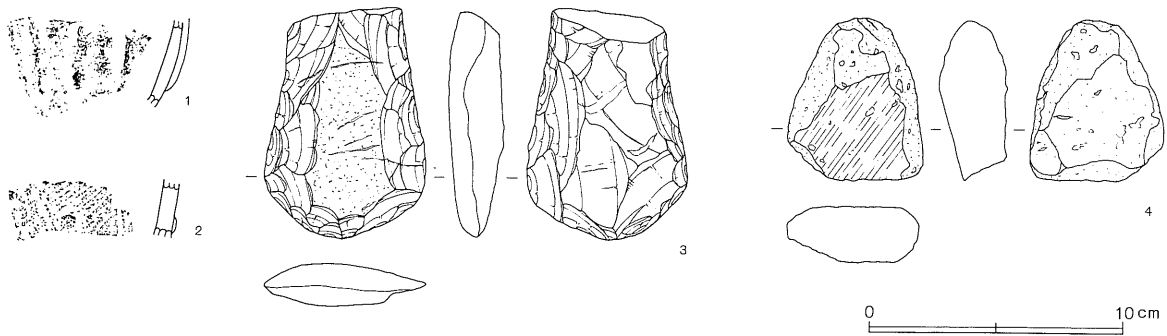
J-7 Gridに位置する。舌状台地中央の平坦面で検出され、北約10mに第7号住居跡が所在する。形態は楕円形で、規模は長軸59cm、短軸49cm、深さ10cmを測る。壁は緩やかに傾斜し、底面は平坦である。覆土からは拳大のもの10数点出土したに過ぎないが、火熱を受け破碎したものも含まれている。

第4号集石土壌 (第219図)

K-9 Grid に位置する。舌状台地南側の平坦面で検出され、南へ約1 mの距離には第9号住居跡が所在する。形態は東西に長い楕円形を呈し、規模は長軸63cm、短軸44cm、深さ15cmを測る。壁や底面は凹凸もつ状態であった。礫は拳大のものも多く含み、火熱を受け破碎したものも含まれている。

(5) グリッド出土遺物 (第220図)

1は、やや薄手の口縁部破片であり、縦に棒状貼付文が施され、地文は半截竹管による集合沈線が施文される。2は数本の平行沈線により縦位区画が施され、円形の貼付文が付される。地文は集合沈線が施される。3は、刃部が丸刃で胴部がやや括れる撥形の打製石斧である。表面の一部に自然面を残す。4は磨痕を有する。



第220図 グリッド出土遺物

第9表 石器計測表

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
220-3	表採	打製石斧	9.1	6.3	2.1	184	ホルンフェルス	
220-4	表採	磨石	6.3	5.2	2.7	126	安山岩	

IX 結 語

1. 阿諏訪野東遺跡

阿諏訪野東遺跡では、古墳跡6基、礫槨墓1基、竪穴住居跡6軒、掘建柱建物跡1棟、井戸跡1基、溝12条、土塋8基等が検出されている。住居跡6軒のうち1軒は9世紀前半代のものであり、古墳跡や他の住居跡とは時代を異にしている。本項では古墳時代後期（6・7世紀）の範疇で捉えられる住居跡出土遺物について簡単な土器分類を行い、既に呈示されている編年に照らしてその時期を探ることにする。また、古墳跡についても触れておきたい。

(1) 出土土器について

住居跡及び古墳跡からの出土遺物は、総じて個体数が少なく器種の組成上においても欠落しているものもある。ここでは比較的出土頻度の高い土師器杯の分類を行うことにする。

杯の分類（第221図）

A類 いわゆる比企型杯で、口縁部がS字状を呈するもので、口唇部沈線の有無や口縁部の内屈や外傾により更に類別される（3住-1）。

B類 口縁部がやや長く、直線的に立ち上がり、稜を有するもの（4住-5）。

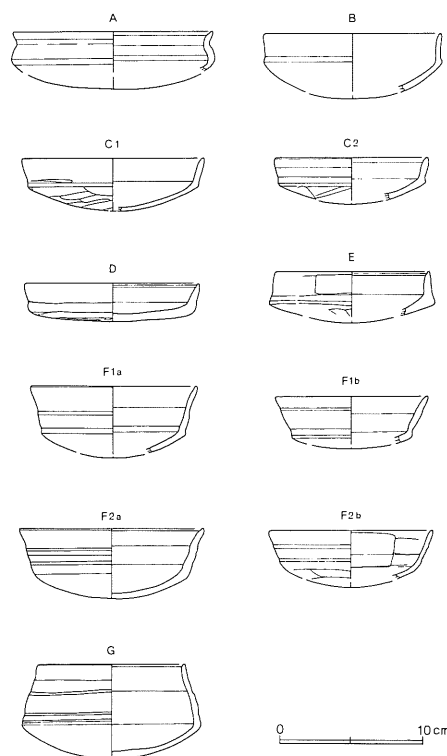
C類 口縁部が短く、直線的乃至外反しながら立ち上がるもの。口縁部の形状により、1. 口縁部が直線的で外傾するもの（3住-4、4住-4）。2. 口縁部が直線的に立ち上がるもの（4住-1）とに類別される。

D類 口縁部が短く、直線的に立ち上がるもので体部は扁平なもの（4住-8）。

E類 模倣杯の身を模倣したもので、口縁部は短く、直線的に内傾する。口唇部には沈線を有する（4住-7）。（註1）

F類 口縁部が段を持って立ち上がるもので有段杯と称されるもの。1 a. 稜が比較的明瞭で体部が丸身をもつもの（4住-14）と、1 b. 体部が扁平なもの（2住-2、4住-11）とがある。更に、2 a. 稜が不明瞭で体部が丸身をもつもの（3住-2）と、2 b. 稜が不明瞭で体部が扁平なもの（2住-1）とがある。

G類 口縁部に段を持ち、口縁部が長く内傾し、器高が高く碗形を呈するもの（4住-18、19）。



第221図 杯の形態分類

杯の編年的位置

このように土師器杯は、口縁部の形態によってA類～G類の7類に分けられた。A類とした所謂比企型杯と呼ばれる土器群は、宇佐久保遺跡（中村1979）以降注目され、その後、水口由紀子氏の比企型杯の再検討（水口1989 a、b）により段階の設定と分布域について論ぜられている。このA類とした第3号住居跡1の

土器は、口径が推定で13.8cmを測り、口縁部が内屈、口唇部内面に凹みをもつもので水口氏の分類に対比すると第Ⅲ段階に相当するものと考えられる。

B類～G類は、須恵器の模倣坏蓋・坏身と有段口縁坏であり、その口径は12cm強のもの、11.5cm前後のもの、そして、10.5cm前後のものがある。F類とした有段口縁坏の系譜上にある坏では、口径が16cm前後の数値を示す大ぶりなものも存在する。この時期の坏の発展段階は、偏平と小形化の方向性を示し、その一指標として坏の口径の差を時期差とみることもできようが、具体的に本遺跡出土の坏について述べるには個体数が限られている。そこで、ここでは各住居跡出土の坏と周辺遺跡出土の坏とを照らし合わせながらその編年的位置を探ってみよう。

第3号住居跡では、A類とした比企型坏とともにC1類とした口縁部がやや開き気味に立ち上がり、口径が12cm強を測るものやF2a類とした口径12cm強の有段口縁坏が出土している。C1の類例としては、塚の越遺跡第25号住（昼間1991）や稲荷原遺跡C区第67号住（富田1994）等があり、F2a類では本地域とは離れるが東川端遺跡第9号住（瀧瀬1990）、居立遺跡第61号住（岩瀬1995）等が挙げられる。これに対し、第2、4号住では、C2、D、E、F1b、F2b類とした口径が10cm代～11cm代を測る坏が新たに加わる。D類としては塚の越遺跡第1号住にみられ、C2、E類は東川端遺跡第11号住等がある。F1b、F2b類とした小ぶりな有段口縁坏では東川端遺跡第11号住、居立遺跡第5号住、根絡遺跡第29号住（木戸1995）等が挙げられる。

このように坏の形態と口径差から第3号住と第2、4号住とには先後関係が存在するものと考え、第3号住を前段階とし、第2、4号住が時間幅を持ちながらも第3号住より後出な住居跡と捉えておきたい。

その編年的位置については、田中氏が論じた第Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられ（田中1991）、その年代は第3号住が7世紀前半とし、第2、4号住を7世紀中葉として捉えておきたい。

(2) 古墳跡について

古墳跡は6基検出されているが、時期を確定する資料としての遺物が極端に少ない。また、3基の古墳では主体部の一部が検出されたものの、削平等により遺存状況は悪く石室形態の比較検討するには難しい状況である。従って古墳については、周溝の形態、規模、占地等について述べることにする。

周溝の形態は6基の古墳全てが円を基調としているが、このうち全周するものではなく、ブリッジを1箇所有するものが第1、4号墳の2基、ブリッジを2箇所以上有するものが第3、5号墳の2基、周溝が半周しかしないものが第2、6号墳の2基である。周溝については、周溝幅が一定なものとして第2～6号墳の5基であるのに対し、第1号墳は周溝東側が西側に比べ倍近くの幅をもち、南側には張り出し部を有している。また、第4号墳においては周溝外へと延びる墓道が検出されている。周溝の深さについては、第3、5号墳が第4号墳と隣接する箇所において特に深く掘り込まれている。

古墳の規模については第10表に示したように周溝内径数値と外径数値により比較してみると、第1号墳は内外径ともに古墳群の中では最大規模を示している。次に第4、5号墳が外径で21m前後、内径で16m代を測る。そしてこの内径16m代を外径とする第3号墳が続く。更にその第3号墳の内径11m代を第2号墳が外径規模としており、古墳群の中での最小規模を示している。このように内径数値と外径数値からみる限りではその規模においてある一定の規則性が存在したことが推定できよう。

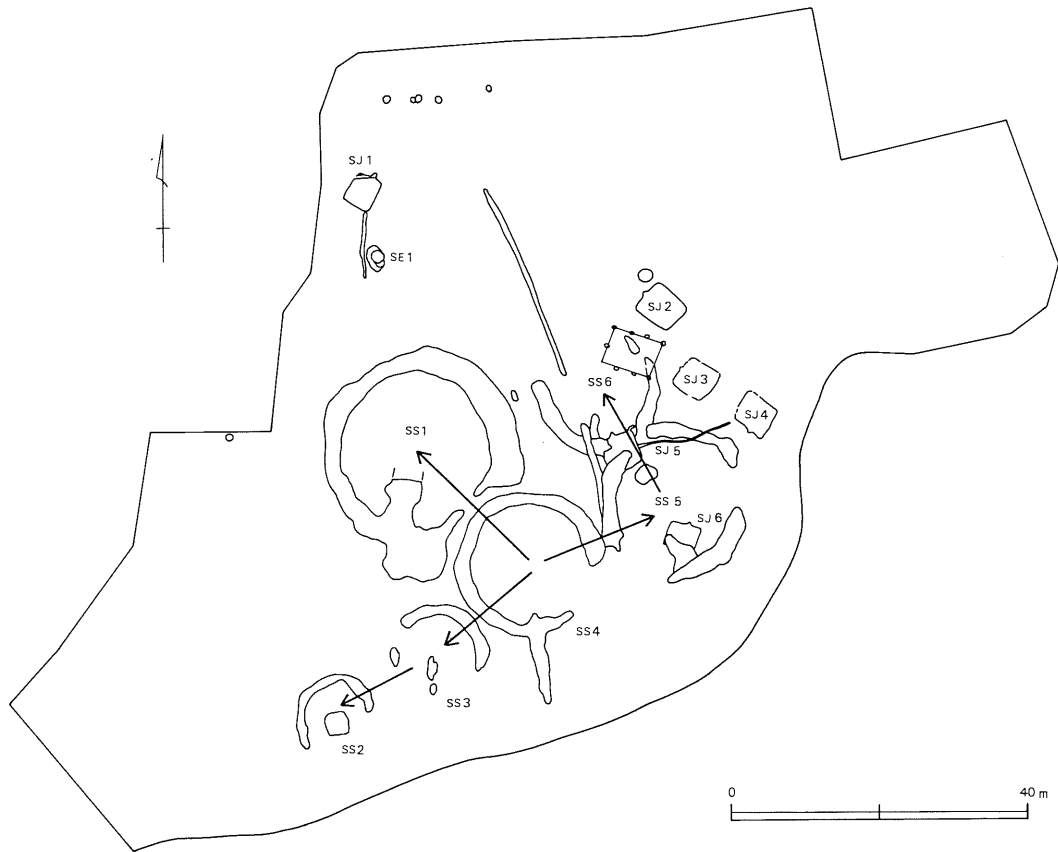
	周溝内径	周溝外径
1号墳	22.06m	27.94m
2号墳	9.1m	11.62m
3号墳	11.13m	13.97m
4号墳	16.08m	20.74m
5号墳	16.63m	21.23m
6号墳	13.95m	16.76m

第10表 古墳一覧表

次に、古墳群の位置関係では、古墳相互は近接するものの重複するも

のは認められていない。だが古墳築造に際しては前後関係により周溝の重複を避けるように、また、一定の距離をもって掘削されているものがある。その特徴付けるものとして第1号墳と第4号墳との関係があげられる。第1号墳の周溝は第4号墳と重複する径をもつが、第4号墳側を掘削する際にはその重複を避けるように周溝外径ラインを第4号墳に沿って掘削し、内径ラインは墳丘部側へとやや歪みながら掘削を止めブリッジへと至っている。この状況から第1号墳は第4号墳の周溝に規制を受け、その前後関係は第4号墳→第1号墳と築造されたことになる。第1号墳は、この規制により周溝より得られる土量が減じるが、それを補うとともに他の古墳との占有関係を意識した為か、第3号墳側と第6号墳側で周溝幅を広げ土量を補ったと想定できる（註2）。

以上のことから本古墳群の形成過程を形態、規模、位置関係から推定すると第222図のようになる。



第222図 古墳変遷図

古墳群の時期を知りえる資料として、第4号墳周溝から出土した2個の提瓶がある。このうち第15図1は、南側周溝より出土し、同図2は南側周溝や墓道より散在した状態で出土している。1は在地産で、2は湖西産である。平瓶については、小川貴司氏・寺田良喜氏（小川他1985）による編年が呈示されており、その編年に照らしてみるとⅡ期に相当し、7世紀第2四半期でも中葉に近い時期が与えられている。

よって、本古墳群の築造始期にあたる第4号墳を7世紀中葉とし、最終段階にあたりと想定した第2号墳を7世紀第4四半期以後の築造年代が予想される。

最後に、本遺跡の住居跡と古墳群との関係については、第4号墳と第2、4号住がともに7世紀中葉であるものの、古墳が住居跡を壊して構築している点からみても両者には先後関係があると考え、住居跡廃絶後まもなく古墳造営がなされたものと捉えておきたい（註3）。

- 註1. 田中広明氏より本形態は県南西部にみられると指摘を受けるとともに坏の様相についてもご教示を賜った。
- 註2. 周溝による土量の確保については、群馬県赤堀町地藏山古墳群（村松1979）や埼玉県美里町広木大町古墳群（小淵1980）等で指摘されている。ただ、周溝掘削土だけで墳丘部を構築するには土量が足りないことは第3、5、6号墳周溝の状態からみても容易に理解できる。それを補う為には不足する土量を搬入するか、墳丘規模を小形化するか、第2号墳のように台地斜面部に構築し、土量を減じる方法をとるかなどにより墳丘を構築したと思われる。
- 註3. 古墳造営に伴う集落移転とも考えられるが、住居跡覆土が自然堆積による埋没であり、住居の取り壊しや埋め戻し等の行為も認められなかった。但し、第4号住の覆土中に凝灰岩が出土していることから築造時には完全に埋没はしていなかったと思われる。また、両者の時期が近いことから後山王遺跡B・D地点（長瀧1992）で想定された「古墳祭祀に纏わる殯家的或いは墓守的な機能」については重複関係や埋没状況から可能性は少ないと思われ、本遺跡では古墳築造との係わりが想定されよう。

2. 東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区

今回の発掘調査により検出された遺構や遺物は前述したとおりで、その時代は先土器時代から平安時代を中心とした複合遺跡である。そこで本遺跡のまとめとして各時代の遺構や遺物について概観してみたい。

(1) 縄文時代

縄文時代の土器は、大要Ⅵ群に分けられる。ここでは特徴的な土器群について述べることにする。

第Ⅰ群、第Ⅱ群土器の編年的位置について

第Ⅰ群土器は撚糸文系土器群である。この撚糸文系土器群については第1様式から第5様式の5様式が設定されており、更に各様式の変遷は諸氏の論考や報告書によって型式学的な検討がなされている（註1）。そこで本遺跡出土の撚糸文系土器については、諸氏の論考に沿ってその編年的な位置づけをしておきたい。

本遺跡から出土した撚糸文系土器群は、総数12点と極めて少ない点数であり、その殆どがグリッドからの出土である。施文された原体は撚糸文5点、縄文1点、無文6点である。第1、2類とした撚糸文と縄文施文された土器の口縁部形態は、口唇部が肥厚し、断面が丸頭状を呈しており、その文様の施文部位は第125図5のように口唇部の肥厚下もしくは若干の無文部を経て施文され、施文の原体では第125図10にみられるように撚りが弱く撚糸の条間隔が開くものがある。このような特徴から第1、2類の土器は口唇部文様が消滅し、施文文様も夏島式に比べ撚糸の間隔をもち、その圧痕も弱いことから稲荷台式以降の様相を呈していると思われる。だが夏島式以降の各型式の比定や区分については「型式としての変化が緩やか」であることや本遺跡のように出土点数が少なく類型化するにも限界があることからやはり感覚的にならざるをえないものこれらの特徴から類例を求めてみると四反歩遺跡Ⅰ群第2類14、15種（金子1993）や東京天文台構内遺跡Ⅰ群2b類（河内1983）とした土器群と近似した状況が窺える。この両遺跡でなされた型式学的な編年によれば稲荷台式古段階又は稲荷台式と捉えられている。このことから本遺跡の第1、2類の土器類も同様に稲荷台式の範疇に含まれるものと思われる。また、第3類とした無文土器についても併行する時期に比定されようが、第125図11については型的にはやや後出的な要素をもつものと思われる。

第Ⅱ群土器については5類に分けられ、このうち遺構に伴うものは第1類の黒浜式土器と第2類の諸磯b式土器である。第1類とした黒浜式土器に属する住居跡は第14、16号住居跡が相当し、土壌では第55、56、65号土壌が上げられる。また、グリッド出土の中にも同時期の遺物が比較的纏まって検出されていることからこの時期の遺物について触れておきたい。

第1類とした黒浜式土器は斜行縄文若しくは羽状縄文によってその大半が占められているなかで、半截竹管による平行沈線文や櫛歯状工具による連点状刺突文が施文されたものも含まれている。ここではこの平行沈線文又は隆帯により文様を構成しているものについて簡単な分類を行い、本土器群の編年的位置を捉えて

みたい。

a 種— 1. 口縁部に平行沈線文と爪形文により菱形文が表出されるもの（第89図1、5、第92図1、第96図8、9、第110図6、7、第112図6）。

a 種— 2. 菱形文の平行沈線内または横位区画文として連点状刺突文が施されたもの（第112図8、第125図20）。

b 種. 口縁部に隆帯が巡るもの（第89図6、第90図6、第125図14）。

c 種. 口縁部に棒状の貼付文をもつもの（第89図7、8）。の大別3種類に類別することができる。

a 種とした菱形文が施文される土器は、所謂有尾式土器、有尾系土器として扱われる土器であり、群馬県見立溜井遺跡第7号住（鳥羽1985）、三後沢遺跡第5号住（菊地1986）、分郷八崎遺跡第1、8号住（柿沼1986）等をはじめ安定した出土を示している。a 種— 2はa 種— 1と同様な文様帯構成であるが連点状刺突文によりその系統差が問われている土器で、鳥羽氏の設定した「立見式土器」に関連する土器である。類例としては埼玉県南大塚遺跡第1、12号住（寄居町1984）、糸井宮前遺跡第112号土壙（関根1986）、見立溜井遺跡第7号住等があげられる。b 種は類例は少ないが千葉県若葉台遺跡第2号住（原田1986）にみられ、また、第125図14の口縁部に突起をもつものについては長野県鼠遺跡第12号住（小林1982）に類似するものがある。その系譜は神ノ木式土器に求められよう。c 種も同様に前段階より系譜が連れ、糸井宮前遺跡第116号住、三後沢遺跡第4号住、中棚遺跡第2号住（富沢1985）等にみられる。

以上、平行沈線文と隆帯施文の土器について簡単な類別を行い、呈示されている資料を基に本土器群を照らし併せてみた。その結果、本土器群は所謂「有尾式土器」又は「有尾系土器」に属し、文様構成からその最古段階に位置づけられる土器群であると考えられる。

第Ⅲ群～第Ⅴ群土器群について

東山遺跡は、第3図に図示したように南北に延びる台地の全面に広がる遺跡であり、総面積48,000㎡を測る。このうち縄文時代については、本書で報告した時期とともに台地西側の一部を発掘調査した際、後期堀之内1式期の住居跡1軒と土壙等が検出され（註2）、またこれに先立ち詳細分布調査を実施した折には台地西側で同様に後期堀之内式から加曽利B式土器が比較的纏まって採集されている。このような状況から本遺跡の縄文中期では台地中央部から本調査区にあたる台地東側に集落が営まれたが、後期になると台地西側へと集落の中心は移るものと推測される。

さて、本項では、出土した縄文中期の土器を大枠として3期5段階に設定し、本遺跡での中期集落の動向を見て行きたい。

第1期（第223図1～5）

勝坂式終末段階のものを一括した。埼玉編年案のⅦ、Ⅷ期（谷井他1982）、我孫子氏の第Ⅴ、Ⅵ様式（我孫子1988）に相当する。本段階に属する遺構は第14号土壙であり、この出土土器とともに埋没谷包含層やグリッドからも本段階のものが比較的多く出土していることから第1期として設定した。同土壙からは復元実測を含む5個体が一括して出土している。1、2は沈線による孤線文が巡り、3、5は隆帯による三角形区画文が描出されている。4は沈線による半円形を上下対向するモチーフで構成される。文様は楕円文系列に属するものであろう。類例として埼玉県台耕地遺跡第34号住（鈴木1983）、行司免遺跡第197号住（植木1988）、松ノ木遺跡第30号住（荒井1979）等がある。また、1、2の孤線文を描出する土器は台耕地遺跡第34号住（鈴木1983）に良好な資料を見出すことができる。

第2期（第223図6～17）

加曽利EⅡ式段階のものを一括した。神奈川考古シンポジウム'80「縄文時代中期後半の諸問題」での東

京・埼玉における縄文中期後半の編年試案（以下、東京編年案と称す。我孫子等1980）の第Ⅲ、Ⅳ段階、埼玉編年案のⅩ期～ⅩⅡ期の一部に相当し、キャリパー形土器の文様構成や施文手法、更に共伴する土器により第2期を2段階に分けた。

2 a 期（第223図6） 加曾利EⅡ式古段階のもので、ほぼ東京編年案の第Ⅲ期、埼玉編年案のⅩ期に相当する。キャリパー形土器の文様帯構成は前段階で普遍化した頸部無文帯が、本段階においても継承され3文様帯構成をとる。とともに新たに頸部無文帯を喪失し2文様帯構成のものが加わる。口縁部文様帯の渦巻文は2本隆帯、1本沈線による作出を基本とするなかで、渦巻文は文様帯区画隆帯と一体化する傾向を強め、前段階にみられた緊縮化した渦巻文や横位区画文と一体化した渦巻文が本段階において確立されたものと考えられる（註3）。胴部懸垂文は隆帯施文から沈線施文へと置換えられ、その文様は3本沈線文と1本蛇行沈線文を交互に垂下させる。共伴する土器としては曾利Ⅰ式新、Ⅱ式古段階の土器があげられるが、連孤文土器は合併しないようである。類例としては、埼玉県二反田遺跡第9号住（岡本1993）、将監塚遺跡第30、55号住（石塚1986）、古井戸遺跡第12、100号住（宮井1989）、台耕地遺跡第29号住、東京都梶田第Ⅲ遺跡第8号住（新藤1979）、二宮遺跡第3号住（紀野1978）等がある。

本遺跡では、第8号土壇出土の土器がこれにあたる。6は文様要素からすれば前段階に移入されるものとも考えたが、方形や楕円形区画文が確立し、文様帯区画隆帯との一体化がみられることから本段階とした。文様は口縁部文様帯に2本隆帯と1本沈線による渦巻文と繋ぎ孤状文のモチーフが描出され、その間に沈線による区画文を配している。剣先状文や円形文など文様要素からすれば大木8 b 式新（丹羽1989）の影響を感じさせ、また、頸部の地文縄文を施しているのも東関東の影響であろうか。文様帯構成は明らかではない。

2 b 期（第223図7～17）

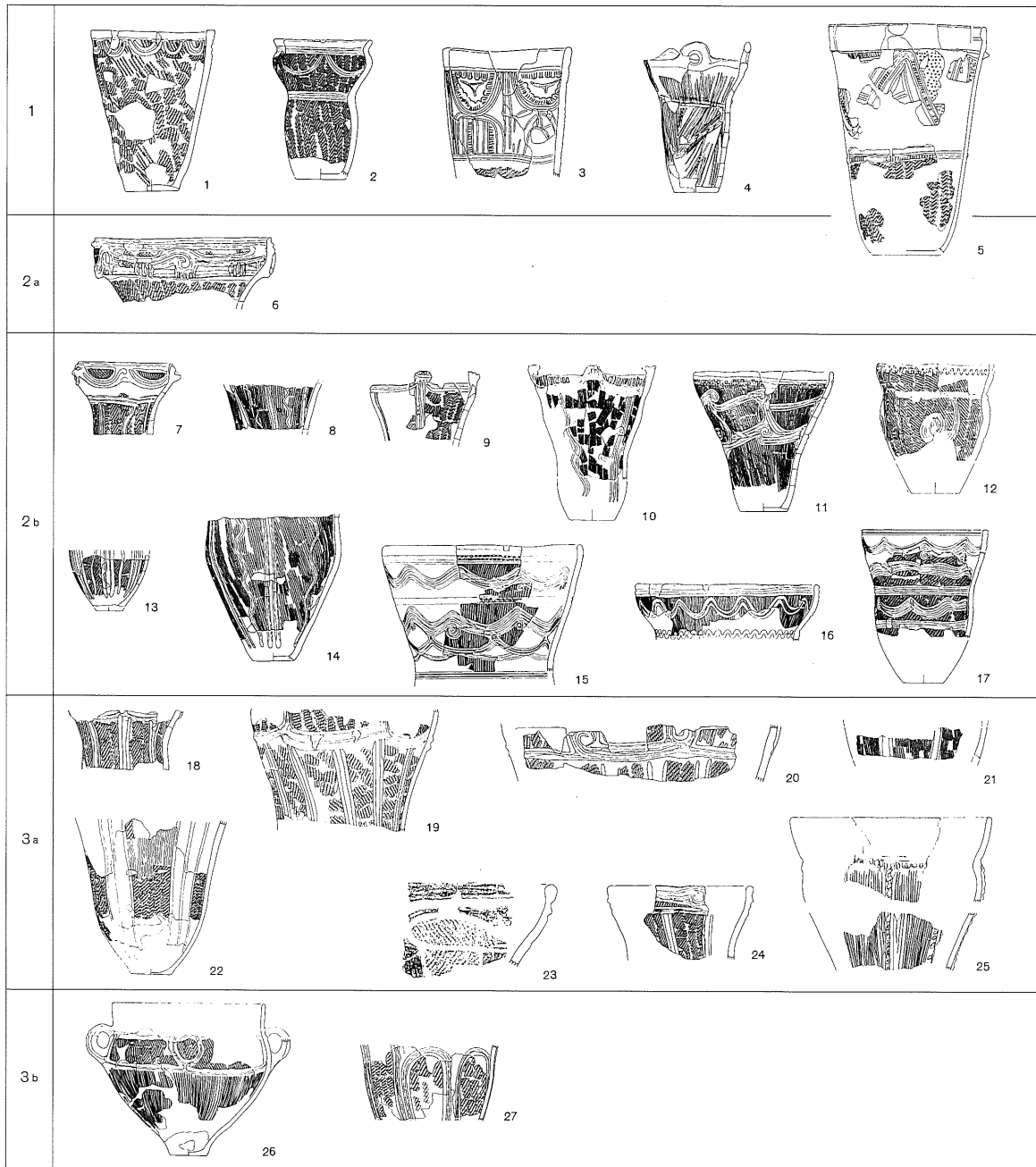
本期は加曾利EⅡ式新段階にあたり、ほぼ東京編年案の第Ⅳ期、埼玉編年案のⅩⅠ、ⅩⅡ a 期に相当する。キャリパー形土器は、頸部無文帯を喪失し口縁部、胴部文様帯の2文様帯で構成される土器群とともに前段階からの頸部無文帯を有し、口縁部文様帯の下位区画が孤状隆帯化した土器群（所謂、渦巻き繋ぎ孤文系土器）も系統的に連なり共存する。但し本段階は連孤文土器の盛行や曾利系土器の顕在化によりキャリパー形土器の個体数は衰退する傾向が認められる。キャリパー形土器では、2 a 期の文様表出を踏襲するなかで沈線主導での渦巻文と楕円形区画文の交互配置の確立が、本段階でも原則としては残るものの文様効果としての沈線渦巻文と区画文が互いに融合するものが現れる。胴部文様帯は引き続き懸垂文が施されるものの磨消縄文手法はされることはなく、沈線施文時の粘土処理によるナデ調整がみられたりする程度である。共伴する土器としてはこの時期の特徴となり、土器群の主體的な存在として連孤文土器がある。文様は2文様帯構成をとる沈線施文により描出され、連続的な孤線文を基調とするが渦巻文や下向渦巻杵状文（註4）等が施文されるなど文様の豊かさを感じる。また、この時期での共伴する土器としては曾利式土器ではⅡ式新、Ⅲ式古が伴い、加曾利E式様式の影響を強く受け、綾杉状沈線文等が施文される深鉢形土器C型式（末木1988）の土器群もこの段階で多く出土する。類例としては、埼玉県二反田遺跡第7号住、島之上遺跡第3号住（笹森1977）、将監塚遺跡第79号住、台耕地遺跡第28号住、東京都平山橋遺跡第5号住（高林1974）等がある。

本遺跡では、本段階をもって集落形成が開始され、第1～3、8号住、第28土壇が相当する。第1号住居跡では炉跡の埋設土器として使用された胴部懸垂文が施された8の土器（図化のミスにより磨消懸垂文となっているが地文を残す）と連孤文土器や曾利系土器が主体となって出土している。各系統の土器群にも磨消縄文手法はみられない。7は渦巻き繋ぎ孤文系土器であるが、胴部懸垂文において胴部文様帯上位区画と胴部懸垂文が融合していることから本段階とした。

第3期 (第223図18~25)

本期は加曾利EⅢ式段階のものを一括した。ほぼ東京編年案の第Ⅴ～Ⅵ期、埼玉編年案のXⅡ期の一部～XⅣ期に相当する。キャリパー形土器の文様構成や施文方法により2段階に区分した。

3a期は、加曾利EⅢ式古段階のもので、東京編年案の第Ⅴ期、埼玉編年案の第XⅡ期に相当する。キャリパー形土器の口縁部文様帯は、隆帯による渦巻文と区画文との連結、胴部懸垂文に磨消縄文手法が一般化することにより特徴づけられる。前期で認められた渦巻文での幅狭の沈線は、この段階において太い沈線に代わり、これにより隆帯によって表出されていた渦巻文や区画文は独自性を喪失する傾向が認められる(註5)。胴部文様では磨消懸垂文が成立し、多様化するとともに充填縄文も現れる。また、連弧文土器においても磨消縄文手法により表出されるものもあるが文様としての連弧文は衰退傾向を示す。



第223 図 東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区出土土器変遷図

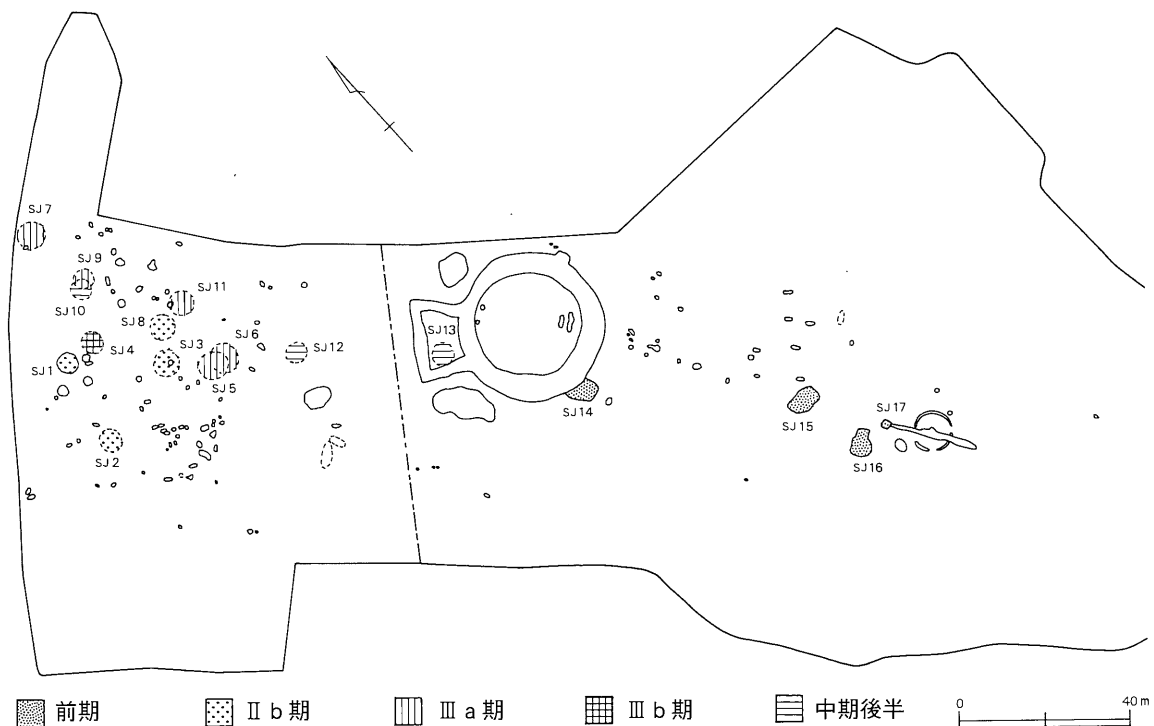
類例としては、埼玉県西原遺跡第9号住（森田1996）、古井戸遺跡第128号住、将監塚遺跡第90号住、北塚屋遺跡第40号住、板東山遺跡第27号住（谷井他1973）、東京都恋ヶ窪遺跡第2号住（秋山1980）等がある。

本遺跡では、第6、7、9、11号住、第4号屋外埋甕、第29号土壙が相当する。18の口縁部文様は4単位構成をとり、胴部懸垂文との配置関係は整っている。一方、19は口縁部文様の割付単位数と胴部懸垂文との配置に不整合が生じている。第29号土壙出土の24は、口縁部文様帯渦巻文が簡略化され円形を呈し、23は口縁部文様帯の下位区画隆帯が喪失し、楕円形区画沈線により胴部文様と区画されている。本土壙のキャリパー形土器は第6、7号住より後出的である。25は曾利系土器で無文口縁部系統の土器であるが、胴部文様は斜行線文土器の胴部文様と同じモチーフが描出されている。類例としては自由学園南遺跡第21号住居跡（伊藤1983）等にみられる。

3b期は、加曾利EⅢ式新段階のもので、東京編年案の第Ⅵ期、埼玉編年案の第ⅩⅢ、ⅩⅣ期に相当する。キャリパー形土器は前期からの口縁部、胴部の2文様帯で構成されているが、口縁部文様帯の文様描出は沈線文を基調とした渦巻文を描出するようになり、簡略化、省略化が更に進むとともに文様帯下位区画の隆帯も喪失するものも現れる。また、口縁部文様帯を消失した所謂吉井城山類（谷井、細田1996）が伴い、この時期の特徴となる。類例としては、埼玉県ゴシン遺跡第2号住（並木1978）、風早遺跡第14号住（青木1979）、裏慈恩寺遺跡第1号住（並木1978）、群馬県荒砥前原遺跡4T2号住（石巻1985）等がある。

本遺跡では、第4号住居跡、第2号屋外埋甕が相当する。26は両耳壺で、肩部文様帯区画は隆起帯化しており、その脇をナデつけるように浅い沈線が施文される。27は渦巻文を描出するものとみられるが、26と同様に隆起帯脇をナデにより浅い沈線が施されている。

以上、本遺跡出土の縄文中期土器群を大枠として3期5段階に区分した。この段階設定は従来の埼玉編年案と対比した場合、各期の設定に違いがあるがそれについて具体的な論拠を述べるには時間的制約があるため触れることはできなかった。別の機会に改めて述べることにしたい（註6）。



第224 図 住居跡の推移

- 註1. 井口直司 1982 「多聞寺前遺跡Ⅰ」多聞寺前遺跡調査会
今村啓爾 1983 「東京天文台構内遺跡」東京天文台構内遺跡調査団
金子直行 1984 「明花向・明花上の台・井沼方馬堤・とうのこし」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書大35集
原田昌幸 1986 「撚糸文系土器終末期の諸問題—無文土器「東山式」の設定—」物質文化第46号
戸田哲也 1988 「縄文土器の型式的研究と編年（中編その2）」神奈川考古第24号
原田昌幸 1990 「撚糸文系土器終末期の諸問題（Ⅳ）」物質文化第54号
宮崎朝雄 1991a 「夏島式土器及び稲荷台式土器について」埼玉考古学論集
金子直行 1993 「四反歩遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集
- 註2. 平成6年に東山遺跡第4地点として発掘調査を実施。縄文時代後期堀之内1式期の住居跡と土壇4基、ピット群、古墳時代後期の住居跡2軒を検出。未報告。
- 註3. 加曽利EⅠ式段階でのS字状文にみられるように、文様帯幅全面に表出されていた渦巻文は、本段階になると小さく緊縮化した渦巻文を表出するようになる。これにより従来の形態としての文様帯と単位文としての渦巻文とのバランスが崩れ、渦巻文は区画文と連結を強めたものと思われる。即ち、文様帯幅に対して表出する渦巻文の緊縮化により、規範とも言えた文様帯幅は渦巻文に連動し、板東山遺跡第12号住、二宮遺跡第3号住等にみられるように口縁部文様帯幅の狭いものなどが現れたとみることができる。また、一方では緊縮化した渦巻文により文様帯下位区画が孤状隆帯化、そして渦巻き繋ぎ孤状文の出現へと連動したものと考えられる。
- 註4. 下向渦巻棒状文とは、キャリパー形土器の口縁部文様にみられる沈線渦巻文と楕円形区画文との融合を縮した文様要素を単位文的に描出したものと思われ、類例としては本遺跡第60図4、第62図7、17、20、21、花影遺跡第1号住、行司免遺跡第229号住等があげられる。
- 註5. 幅広い沈線施文へと移ることにより口縁部文様帯の文様表出は隆帯から沈線へとその「主導的役割」が移ったとみることができる。とともに2b期において認められた沈線による渦巻文と区画文との融合が一段と進むことにより従来の「単位性は喪失」し、結果として文様帯内の横拡大が単位数の減少を招いたものと考えられる。更に鈴木氏が指摘するように口縁部文様帯と連動していた胴部文様帯は、口縁部文様帯の主導性が失われることにより、胴部文様帯の自立化が促されるとの指摘がある（鈴木1987）。
- 註6. 各期の設定に際しては、黒坂氏により設定された北塚屋遺跡Ⅱの段階区分（黒坂1985）、鈴木氏の台耕地遺跡での検討（鈴木1983、1987）、更に金子氏の報文中での検討（金子1997）等の論点に依拠するなかで大枠として設定してみたものである。

（2）古墳時代以降

東山遺跡Ⅱ区に所在する2基の古墳のうち前方後円墳である第1号墳は、築造当初、円墳として築かれたがその後間もなく何らかの理由により前方部を築き前方後円墳とした古墳である。その築造時期については、

1. 北武蔵の前方後円墳は7世紀初頭頃までに築造を停止する状況が窺えること。
2. 周溝内より副葬品であったと見られるフラスコ形長頸壺1点が頸部高5cmと短く、頸部に2条の沈線を配す等の特徴から後藤健一氏による編年の第Ⅱ期第4～6小期に相当し、その年代が6世紀末～7世紀前半代が与えられていること。
3. 本古墳と有機的な関連性が考えられる第3号竪穴状遺構出土の土師器坏と甕が7世紀第2四半期に比定されること。などから本古墳は7世紀初頭から7世紀前半の時期に築造されたものと考えられる。第2号墳については、報文中においても触れたが、主体部の形態や周溝規模がこの時期に盛行する凝灰岩の切石積みによる横穴式石室とは異なる点である。このことについては具体的に述べる用意がされていないが、ここでは気が付いた点を述べるに留めておく。即ち、石室形態は長方形を呈するものの玄室幅が狭く玄門施設がみられないこと、石室石材幅が比較的薄いこと、また、古墳周溝幅が狭く掘削土量が極めて少ないことなどがあげられる。このことから箱式石棺との関連が想定されるが、このことについては、現在、第2分冊目として整理中の前方後円墳2基を含む計14基の大境古墳群の報告の際に再度検討することにしたい。

奈良・平安時代の遺構としては、竪穴状遺構1基、火葬墓4基、土壇4基があげられる。第2号竪穴状遺構は、第1号墳前方部北側に位置し形態や壁、床面が不明瞭であり、カマド等の施設も存在していない。また、出土遺物についても土師器が全く出土していないなど通常の住居跡とは異なる施設であったと考えられ

る。時期は出土遺物から8世紀第2～第3四半期に相当するものと考えられる。更に時期は下るが9世紀代に属する火葬墓4基、土壙4基については、火葬墓4基中3基が第1号墳南側に位置し、残る1基が第2号墳東側の台地先端部で検出されている。土壙は調査区Ⅰ区において4基が纏まった状態で検出されており、このうち第70号土壙は吠原遺跡第34号土壙等（渡辺1985）にみられる火葬墓の土壙形態と似た状況が窺え、残る3基の方形土壙も覆土において第70号土壙と同時期と考えられることからこれら4基の土壙は埋葬に係わる施設であったものと考えておきたい。

以上のように、古墳時代後期の古墳造営により形成されたであろう墓域は、本調査区において律令以後も開墾されることなく引き続き墓域（共同用益地）として機能していたとみることができよう。

3. 楓山西遺跡と楓山北遺跡

楓山西遺跡と楓山北遺跡の両遺跡については、時間的制約と力量不足により併記することは出来なかったが、次年度報告予定の古墳時代前期～中期を中心とした桜谷東遺跡Ⅳ区並びに大林南遺跡において改めて検討を加えたい。今回は、両遺跡の遺構時期について概略を述べるだけにとどめておく。

楓山西遺跡は、古墳時代前半に属する住居跡7軒、竪穴状遺構2基等が比較的良好な状態で検出された。これら検出された遺構のうち五領期最終段階と考えられる遺構は、第1、2、5号住居跡の3軒と第1号竪穴状遺構である。出土遺物の組成は、壺、小形壺、高杯、埴等であり、その個体数は極めて少ない。古墳時代中期の和泉期に属する遺構としては第3、4、6、7号住居跡の4軒と第2号竪穴状遺構や土壙が上げられる。出土遺物の組成は壺、甕、小形壺、高杯、埴、碗等でこれに砥石や砥石として転用された土器が伴う。出土土器の編年的な位置については、坂野和信氏のⅡ-1期（坂野1988、1991）、中村倉司氏のⅡ期（中村1989）、恋河内昭彦氏のⅡ期（1995）に相当するものと考えられる。また、遺物出土状態では第4、7号住居跡の報告の中でも触れたが、住居跡廃絶後に住居跡内において何等かの人為的な行為が行われた痕跡が遺物出土状態から窺えた。類例としては狐塚遺跡（福田1993）が挙げられ、報告者が具体的な検討を加えている。

楓山北遺跡では、縄文時代から平安時代にかけての遺構が検出され、住居跡9軒、ピット群4箇所、土壙8基、集石4基である。検出された遺構のうち縄文時代では、前期黒浜式期の第7号住居跡や諸磯c式期に比定される第9号住居跡と第1、2号土壙がある。古墳時代では楓山西遺跡でみられた中期和泉期と思われる第4号住居跡1軒が検出され、また、遺物は出土していないものの第6号住居跡も同様な時期に属するものと思われ、この時期の集落範囲は本遺跡の一部と楓山西遺跡を含めた範囲であった可能性がもたれる。後期としては7世紀後半にあたる第1、3号住居跡があり、第1号住居跡では覆土上層より円筒埴輪破片が多量に出土している。奈良・平安時代では第5号住居跡が8世紀第1四半期、第8号住居跡が8世紀第3四半期、第2号住居跡が9世紀第3四半期にそれぞれ比定され、第8号住居跡覆土上層からも円筒埴輪破片が数個体出土をみている。

参考文献

- 赤熊浩一他 1988 「将監塚・古井戸Ⅱ」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
- 安孫子昭二他 1980、1981 「縄文中期後半の諸問題—加曾利E式と曾利式土器との関係について」『神奈川考古』第10、11集
- 安孫子昭二 1988 「勝坂式土器様式」『縄文土器大観』2 中期Ⅰ 小学館
- 石坂 茂他 1988 「加曾利E式土器に関する一考察—いわゆる「胴部隆帯文土器の」系譜—」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂 1985 「荒砥二之堰遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂 茂他 1985 「荒砥前原遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 石塚和則 1986 「将監塚—縄文時代—」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
- 伊藤恒彦 1983 「自由学園南遺跡」自由学園
- 井上 肇 1979 「7世紀の坏形土器について」『埼玉県立博物館紀要』第6号
- 岩瀬 謙 1995 「前・居立」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第151集
- 大谷 徹 1994 「樋ノ下遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集
- 岡本健一 1993 「谷津・二反田・下向山」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第131集
- 小川良祐・寺田良喜 1985 「等々力溪谷横穴墓にみる交流について」『古代』78・79合併号
- 小野正文 1987 「釈迦堂Ⅱ」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第21集
- 金子直行 1996 「大山遺跡 第9次」 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第180集
- 柿沼恵介他 1986 「分郷八崎遺跡」 群馬県北橋村教育委員会
- 菊地 実 1986 「三後沢遺跡」『三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 紀野自由他 1978 「二宮遺跡」 秋川市文化財調査報告書第5集
- 桐生直彦 1981 「連孤文土器」『縄文文化の研究4』縄文土器Ⅱ
- 黒尾和久 1995 「縄文中期集落の基礎的検討（Ⅰ）—時間軸の設定とその考え方について—」『論集 宇津木台』第1集
- 黒尾和久他 1995 「縄文中期集落研究の新地平」 縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会
- 黒坂貞二他 1985 「北塚屋（Ⅱ）」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集
- 恋河内昭彦 1995 「飯玉東Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴蒔・毛無し屋敷・石橋」 児玉町文化財調査報告書第17集
- 小淵良樹 1980 「広木大町古墳群」 埼玉県遺跡調査会報告書第40集
- 小久保徹他 1983 「三ヶ尻天王・三ヶ尻林」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集
- 後藤健一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県文化財調査報告書第42集
- 後藤健一 1991 「3須恵器の編年5東海」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器
- 酒井清治 1987 「武蔵国における須恵器年代の再検討」『研究紀要』9号 埼玉県立歴史資料館
- 笹森健一他 1976 「志久遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書第31集
- 笹森健一 1977 「前畑・島之上・出口・芝山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集
- 末木 健 1981 「曾利式土器」『縄文文化の研究4』縄文土器Ⅱ
- 杉崎茂樹 1992 「北武蔵における古墳時代後・終末期の諸様相」『国立歴史民族博物館研究報告』第44集
- 鈴木敏昭他 1983 「台耕地（Ⅰ）」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集
- 鈴木敏昭 1987 「加曾利EⅡ式土器における施文構造の変容について」『埼玉の考古学』新人物往来社
- 鈴木徳雄 1990 「称名寺式土器」『称名寺式土器に関する交流研究会の記録』調査研究収録第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 瀧瀬芳之 1986 「小前田古墳群」 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第58集
- 瀧瀬芳之 1990 「東川端遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第94集
- 立石盛詞他 1983 「後張」 埼玉県埋蔵文化財調査事業報告書第26集
- 田中広明 1991 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給」『埼玉考古学論集』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明 1992 「新屋敷東・本郷前東」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 田中広明 1992 「武蔵地域の鬼高式土器—古墳出土の食膳具の示す地域圏」『考古学ジャーナル』342
- 谷井 彪 1978 「加曾利EⅡ土器の覚書」『埼玉県立博物館紀要』5
- 谷井 彪他 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』1 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井 彪 1987 「加曾利E式土器における口縁部文様と形態の系譜」『埼玉の考古学』 新人物往来社
- 谷井 彪・細田 勝 1995 「関東の大木式、東北の加曾利E式土器」『日本考古学』第2集

- 谷藤保彦 1986 「糸井宮前遺跡Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦 1997 「北関東地域における前期中葉土器群の実相」『前期中葉の諸問題』縄文セミナーの会
- 田村 誠 1993 「青柳古墳群 南塚原支群Ⅰ」神川町教育委員会文化財調査報告第10集
- 戸田哲也他 1979 「神之木・有尾式土器の研究（前）」『長野県考古学会誌』第34号
- 富沢敏弘他 1985 「中棚遺跡」群馬県昭和村教育委員会
- 富田和夫 1992 「稲荷前遺跡(A区)」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集
- 鳥羽政之他 1985 「見立溜井遺跡」赤城村教育委員会
- 中村倉司 1979 「宇佐久保遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第38集
- 中村倉司 1989 「関東地方における竈・大形甕・須恵器出現時期の地域差」『研究紀要』第6号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 長瀧歳康 1991 「白石古墳群・羽黒山古墳群」美里町遺跡調査発掘調査報告書第7集
- 長瀧歳康 1992 「後山王遺跡B.D地点」美里町遺跡調査会
- 日本考古学協会 1981 「シボジウムⅠ 北関東を中心とする縄文中期の諸問題」
- 丹羽 茂 1981 「大木式土器」『縄文文化の研究4』縄文土器Ⅱ
- 丹羽 茂 1989 「中期大木式土器様式」『縄文土器大観』1 草創期 早期 前期 小学館
- 坂野和信 1991 「和泉式土器の成立過程とその背景」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 坂野和信 1991 「和泉式土器の成立について」『土曜考古』第16号
- 原田昌幸 1986 「上貝塚・若葉台遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』千葉県埋蔵文化財センター
- 昼間孝志 1991 「塚の越遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第101集
- 福田 聖 1993 「狐塚遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第124集
- 細田 勝 1994 「樋ノ下遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集
- 堀越正行 1984 「論説 加曾利EⅢ式土器断想」『史館』第十七集
- 水口由紀子 1989 「いわゆる“比企型坏”の再検討」『東京考古』7 東京考古談話会
- 宮井英二 1989 「古井戸—縄文時代—」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
- 宮崎朝雄他 1982 「増善寺遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第5集
- 村松 篤 1993 「沢口遺跡発掘調査報告書」川本町教育委員会
- 森田安彦・新井 端 1986 「千代遺跡群—縄文時代編—」埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書1
- 柳沢清一 1991 「神奈川県加曾利E式後半編年の再検討—加曾利E3—4式期を中心として」『古代』第92集
- 山形真理子 1989 「曾利式土器における施文順序と意義」『甲斐の成立と地方的展開』角川書店
- 米田明訓 1978 「曾利式土器の基礎的把握」『長野県考古学会誌』39
- 寄居町 1984 「寄居町史」
- 渡辺 一 1985 「吠原遺跡」川口市遺跡調査会報告第7集
- 渡辺 一・竹野谷俊夫 1988 「鳩山窯跡群Ⅰ」鳩山窯跡群遺跡調査会
- 渡辺 一・竹野谷俊夫 1990 「鳩山窯跡群Ⅱ」鳩山窯跡群遺跡調査会
- 渡辺 一 1990 「南比企窯跡群の須恵器の年代—鳩山窯跡の年代を中心に—」『埼玉考古』第27集

〔発掘調査協力者〕

秋山千恵美*	秋吉美知子*	飛鳥恵美子*	穴澤 元子*	浅井 裕子	飯島ハル子
飯島 モト*	石川 正治	石川 初雄*	井上 千恵	宇野美登里	梅沢奈美子
大久保忠二*	大久保光蔵	岡田 喜代*	小川 武雄	香川 武	柿沼 定子
金井 キヨ*	金居 春雄	金井 ふさ	北野 弘子*	小島 かつ	小島 キク
小島 法	古城美代子*	小林 芳江	西木 清美*	坂上さよ子	佐藤 礼子
嶋 敏江*	嶋 なほい*	自在 志づ	島崎 義一	島田 恵子*	下里ミチ子
庄子 信子*	菅沼 ナカ	杉山 忠孝	鈴木 直子	須藤 照子	須藤 よし
須藤 久二	須藤 米子	須長 真一*	須長テフ子*	須長 照仁	須長 利夫*
須藤とみ子	関口 保子*	染野 静香	高橋 あい	寺田久美子	利根川光治*
中村 きみ	中村 恵子	中村ひで子*	橋本 あさ	橋本 市子*	橋本 昭三
橋本はる美*	橋本 元邦	橋本真喜子	長谷川かつ	長谷部孝子*	平林 宏子
福田 勉	堀 喜久治	真島祐里子*	松本 ツヤ	松岡 康代*	三村 トミ
村松 はる	森 順子*	森田 好枝	山口佐貴子*	山田 ふで	山本トミ子
山口 太平	吉田 有親	吉野 勝江*	吉原 文子	吉田 むめ	吉田由美子

吉見町高齢者事業団

(学生) 町田 明弘 (埼玉大)

野本 昌寛 (埼玉大)

中西 範尊 (大東大)

浅井 牧 田部井和幸

千脇フミ子

原園 賢悟

堀 東樹

松本 優一

三浦 昭 村松 和宏

渡辺 俊洋

渡辺真由美*

埼玉大学考古学研究会

大東文化大学考古学研究会

(*平成6、7年度整理作業協力者)

〔整理作業協力者〕 平成8年度

秋山千恵美

飛鳥恵美子

穴澤 元子

坂上さよ子

嶋 敏江

須長テフ子

中村ひで子

橋本はる美

長谷部孝子

森 順子

写真图版



遺跡群全景（南上空から）



第 1 号墳



第 1 号墳石室



第 1 号墳前庭部



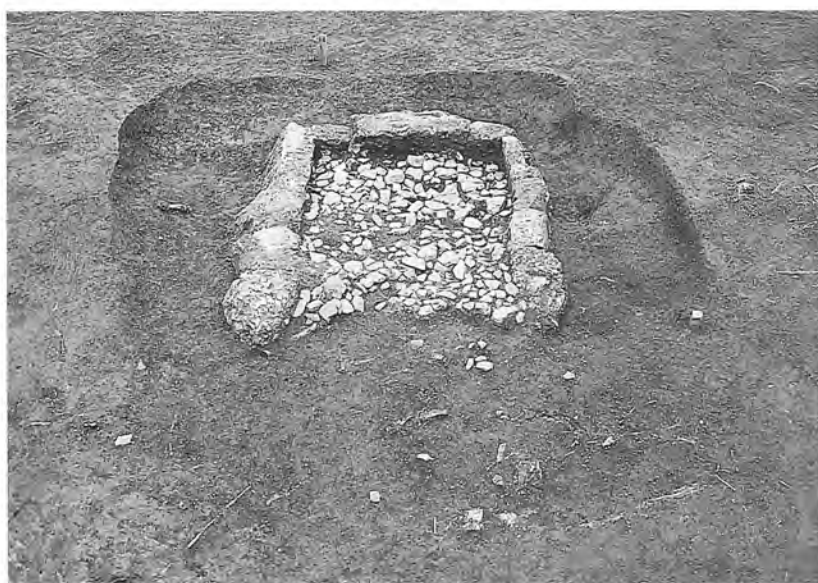
第 1 号墳側壁根石



第 1 号墳東側周溝



第2号墳



第2号墳石室



第3号墳



第 4 号墳



第 4 号墳



第 4・5・6 号墳



第4・5・6号墳



第6号墳



第6号墳前庭部



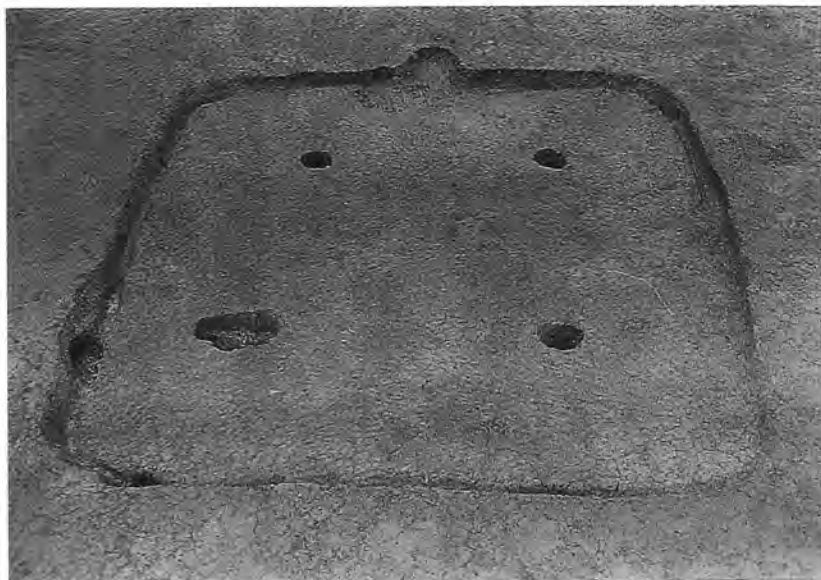
第1号礫塚墓



第1号住居跡



第2～6号住居跡



第 2 号住居跡



第 2 号住居跡竈付近遺物出土状況



第 2 号住居跡貯蔵穴



第3号住居跡



第3号住居跡竈付近遺物出土状況



第3・4号住居跡



第4号住居跡竈



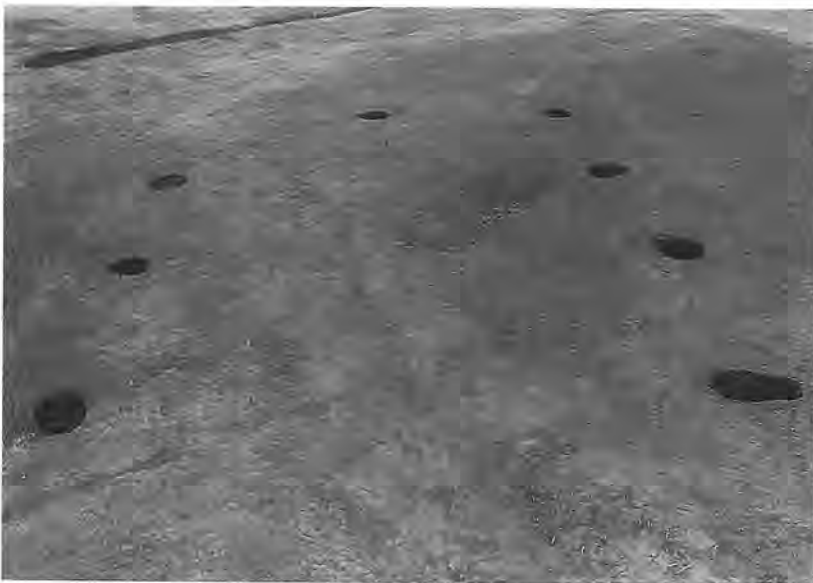
第5号住居跡



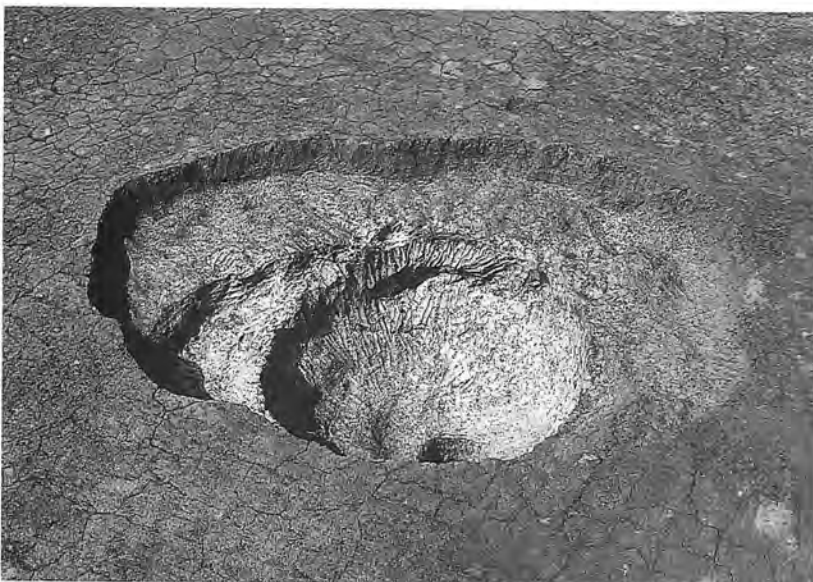
第5号住居跡竈遺物出土状況



第6号住居跡



第1号掘建柱建物跡



第1号井戸跡



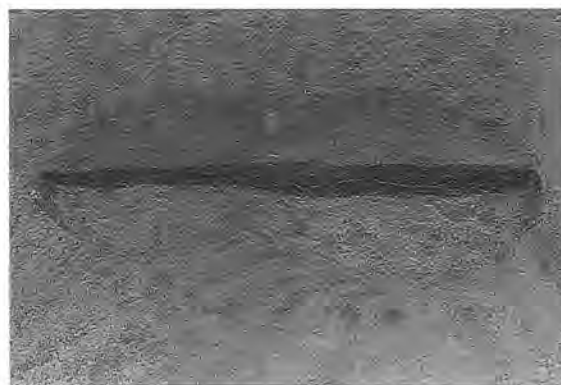
第1号井戸土層



第1号土坑



第2～4号土坑



第3・4号土坑



第5号土坑



第1号集石土坑



第2・3号坑調査風景



調査風景



第4号墳 第15図-1



第4号墳 第15図-2



第4号墳 第15図-4



第1号住居跡 第26図-1



第1号住居跡 第26図-2



第2号住居跡 第29図-3



第2号住居跡 第29図-5



第2号住居跡 第29図-9



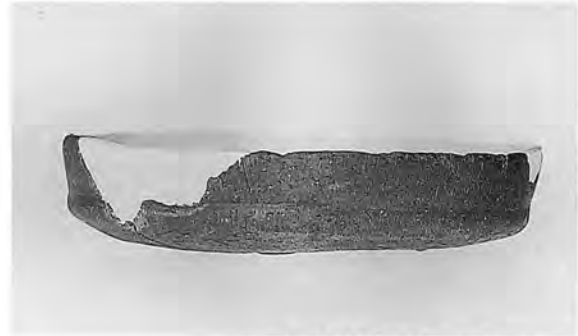
第3号住居跡 第32図-2



第3号住居跡 第32図-4



第4号住居跡 第35図-2



第4号住居跡 第35図-8



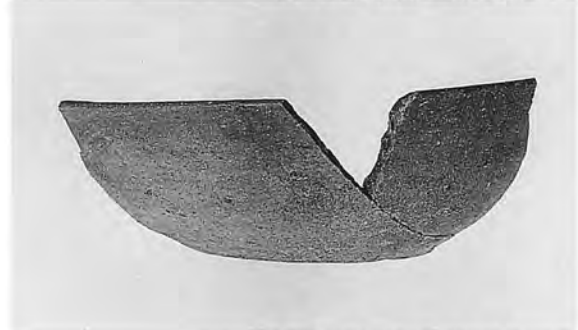
第4号住居跡 第35図-19



第4号住居跡 第35図-30



第4号住居跡 第36図-32



第4号住居跡 第36図-36



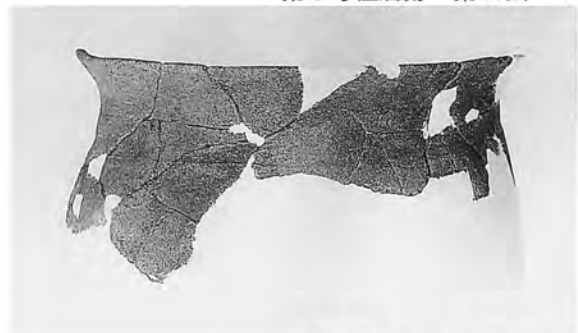
第5号住居跡 第39図-2



第6号住居跡 第41図-1



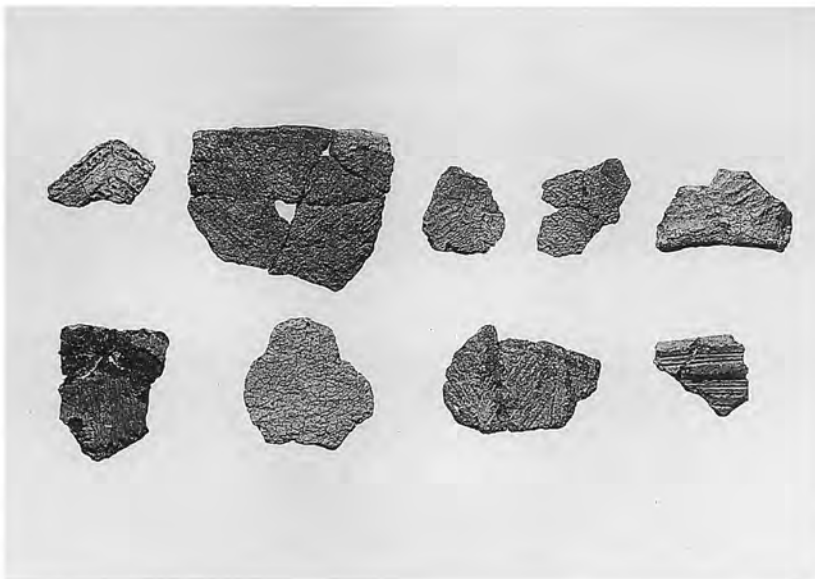
第6号住居跡 第41図-5



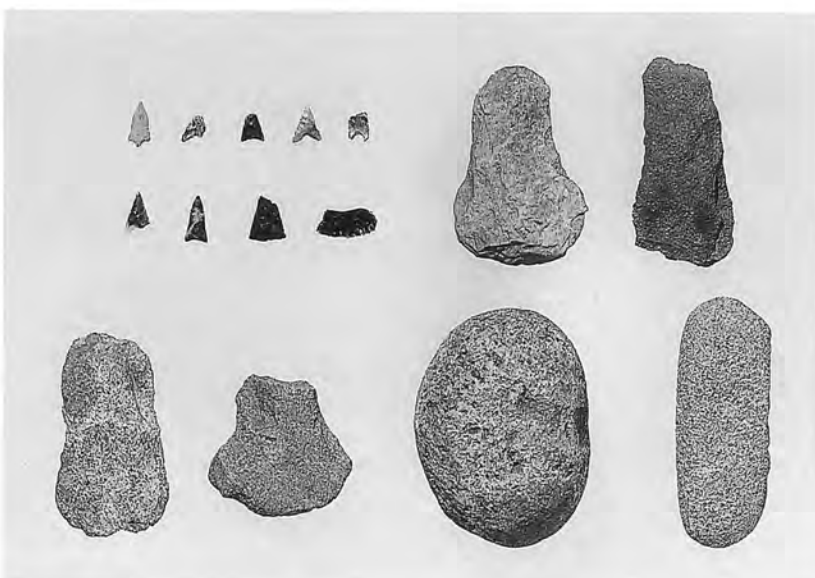
第5号溝 第46図-1



第3号住居跡・第6号墳出土鉄器



第7号土壙・グリッド出土鉄器



縄文時代出土石器



先土器時代調査状況



先土器時代礫群出土状況



I 区南側全景



I 区南西側



I 区南側



第1号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



同左炉跡付近遺物出土状況



第1号住居跡炉跡



同左埋甕



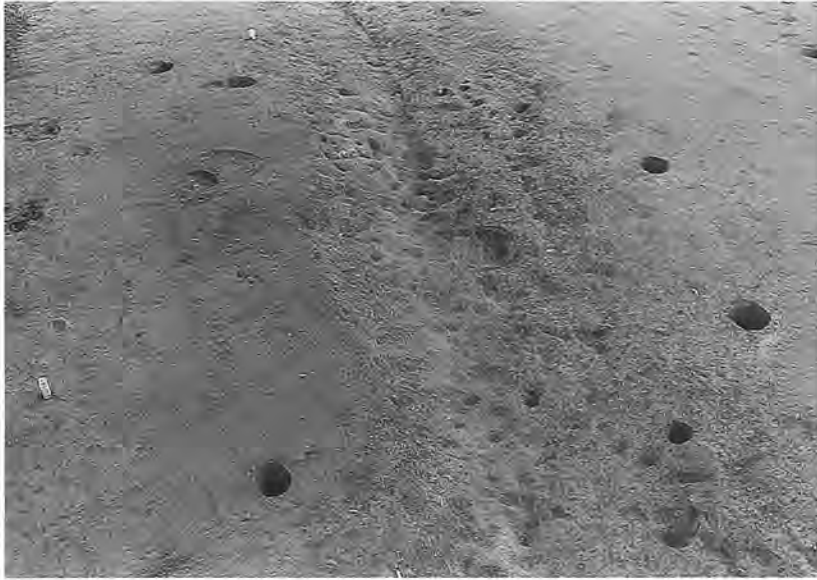
第2号住居跡



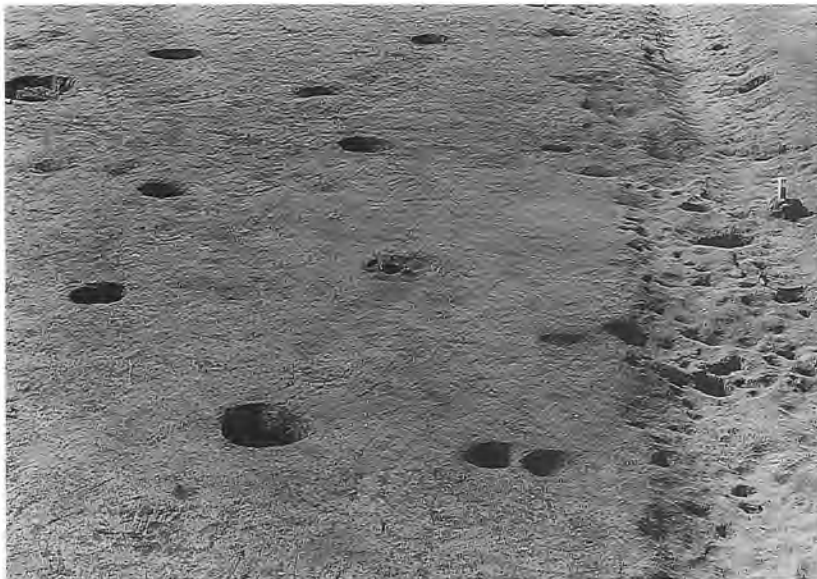
第3号住居跡



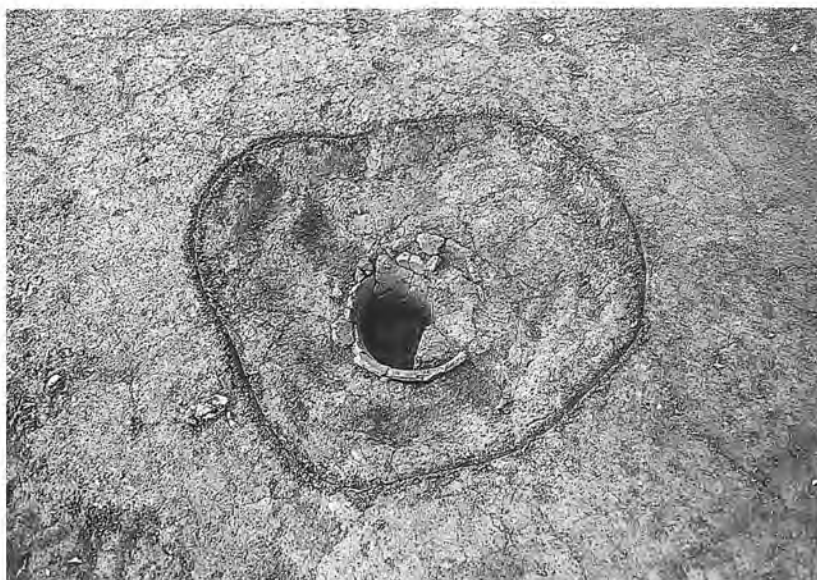
第4号住居跡



第5号住居跡



第6号住居跡



第6号住居跡炉跡



第7号住居跡炉跡



第8号住居跡



第8号住居跡炉跡



第9・10号住居跡



第11号住居跡



第13号住居跡



第14号住居跡



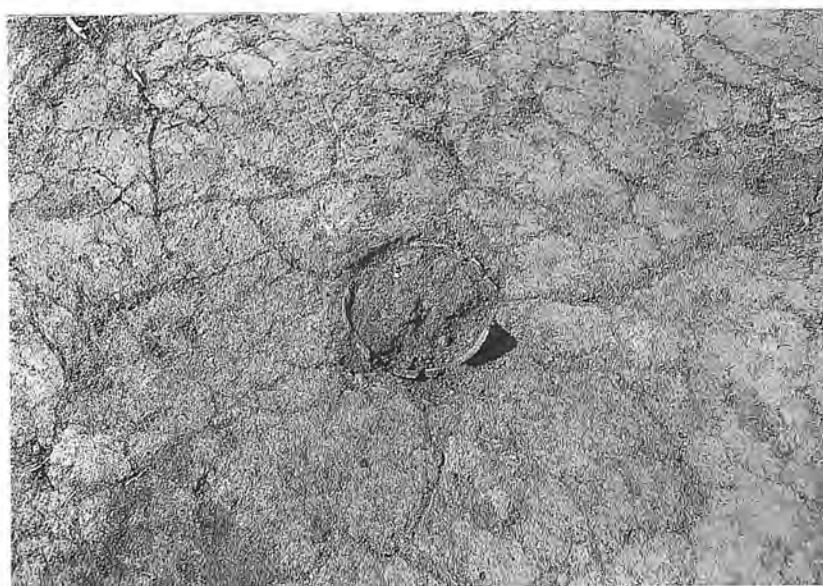
第15号住居跡



第16号住居跡



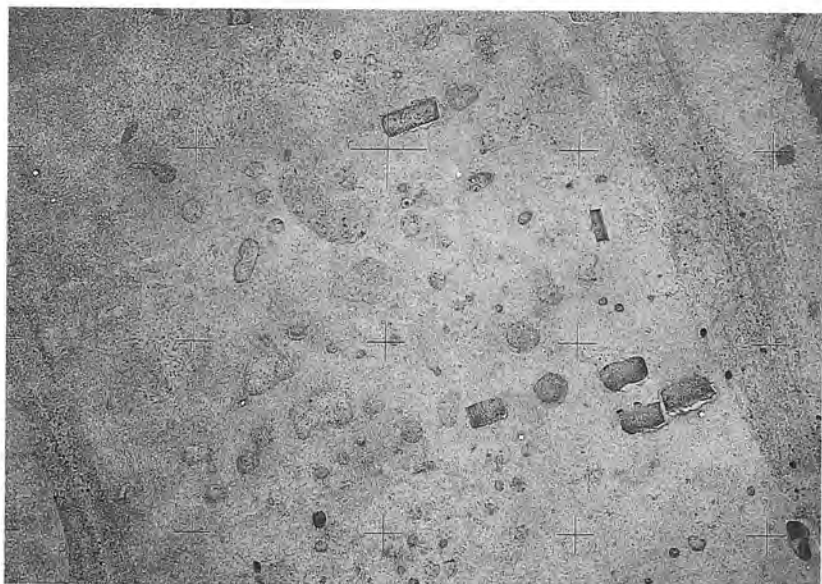
第1号屋外埋甕



第2号屋外埋甕



第4号屋外埋甕



土壙群



第8号土壙遺物出土状況



第14号土壙遺物出土状況



第27号土壇土層



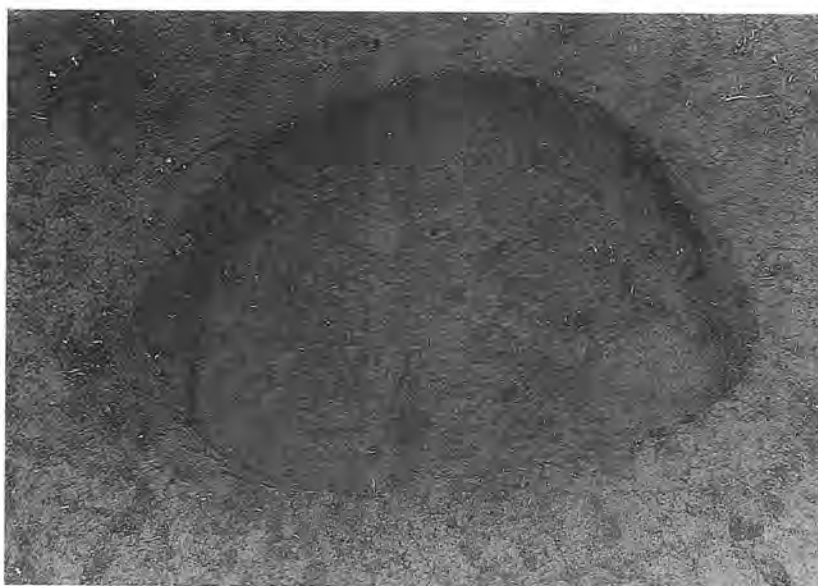
第55号土壇



第55・56号土壇



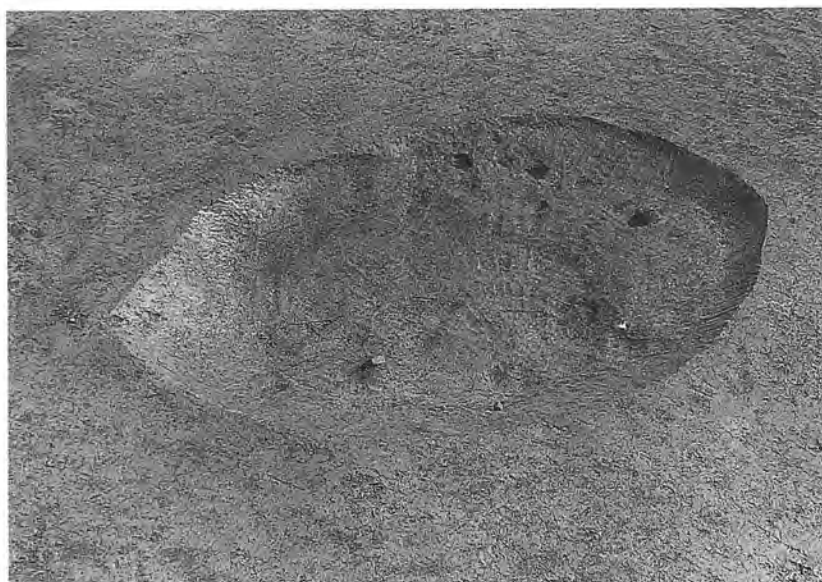
第57号土壙遺物出土状況



第62号土壙



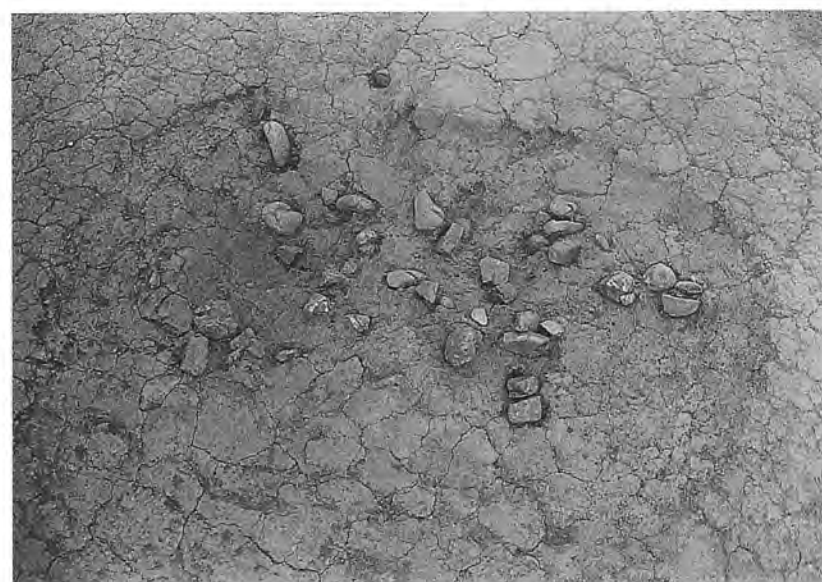
第65号土壙遺物出土状況



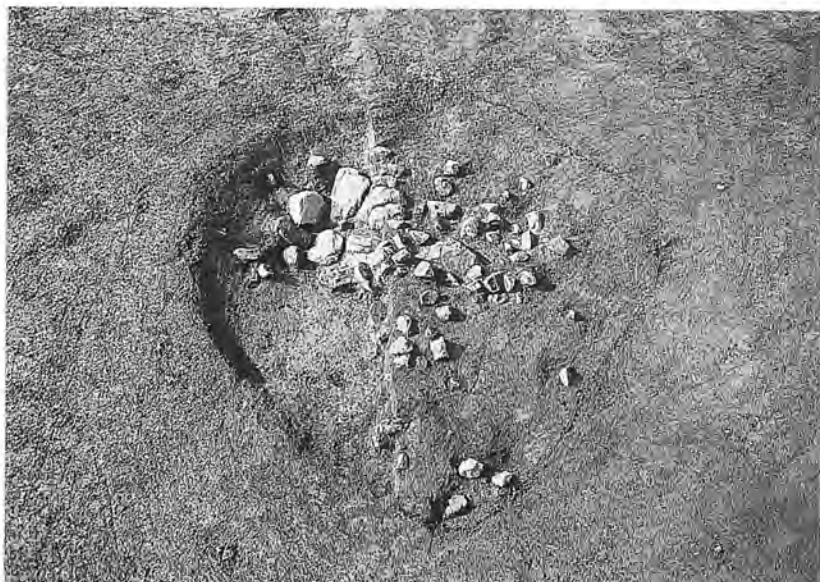
第67号土壇



第1号集石土壇



第2号集石土壇



第6号集石土壇



第8号集石土壇



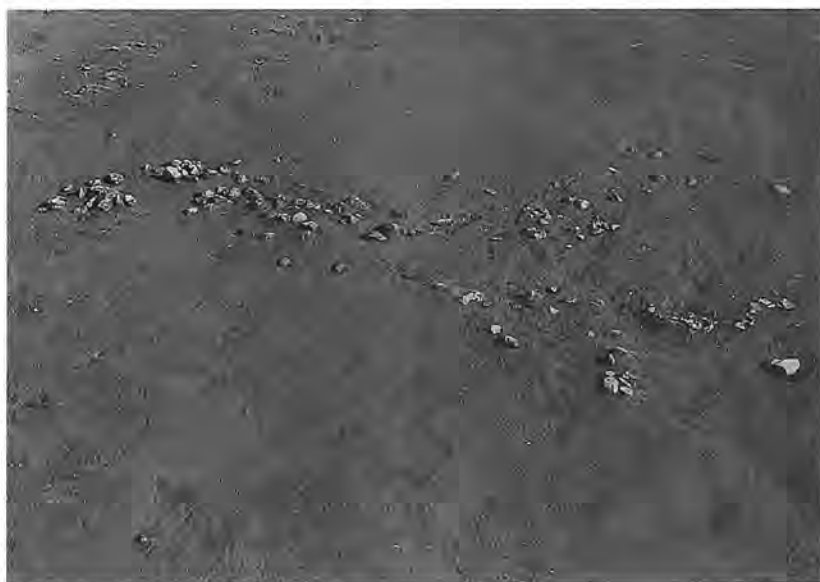
第9号集石土壇



第13号集石土壌



第1号集石



第3号集石



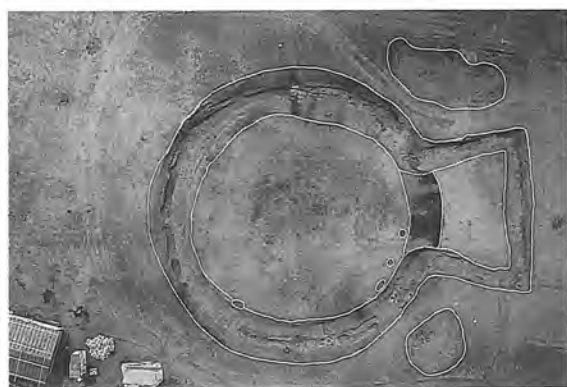
埋没谷包含層調査風景



埋没谷完掘状況



第1号墳



第1号墳空撮



第1号墳土層



第1号墳前方部基部土層



第1号墳遺物出土状況



第1号墳遺物出土状況



第3号竪穴状遺構調査風景



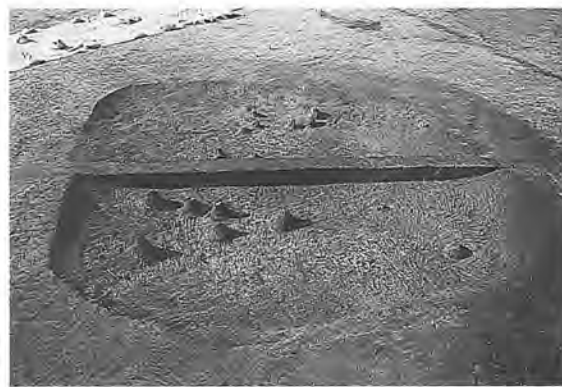
第3号竪穴状遺構遺物出土状況



第2号墳



第2号墳石室根石



第2号墳竪穴状遺構



第1号火葬墓



第2号火葬墓



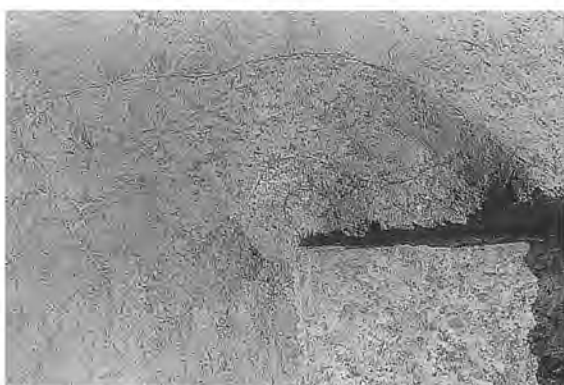
第2号火葬墓



第3号火葬墓



第4号火葬墓



第4号火葬墓



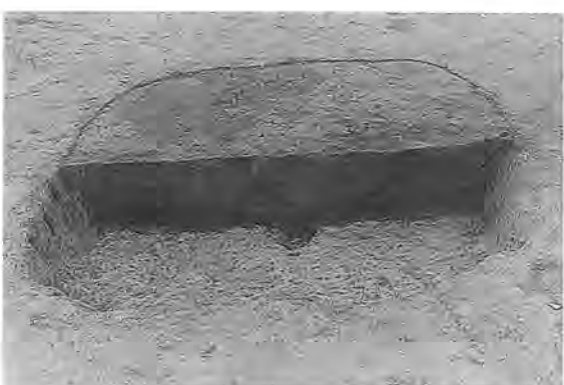
第68・69・94号土壙



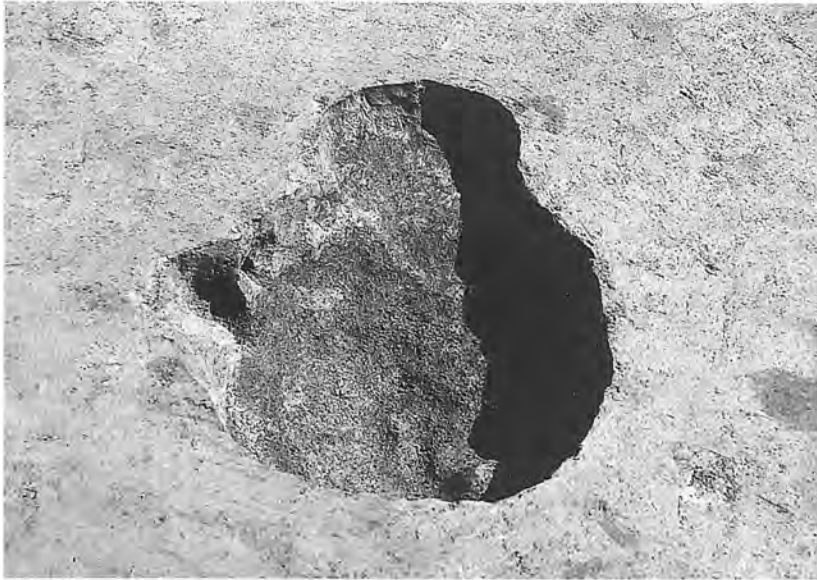
第68号土壙



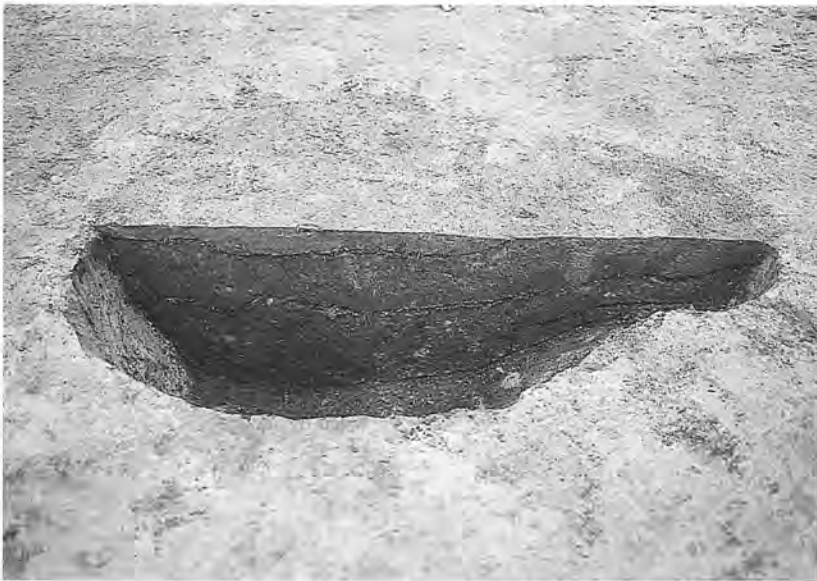
第69号土壙



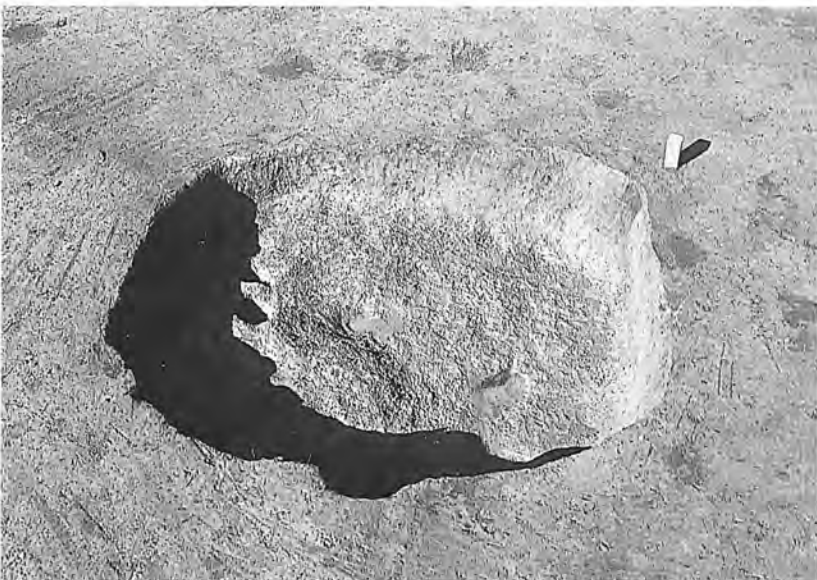
第69号土壙土層



第70号土壙



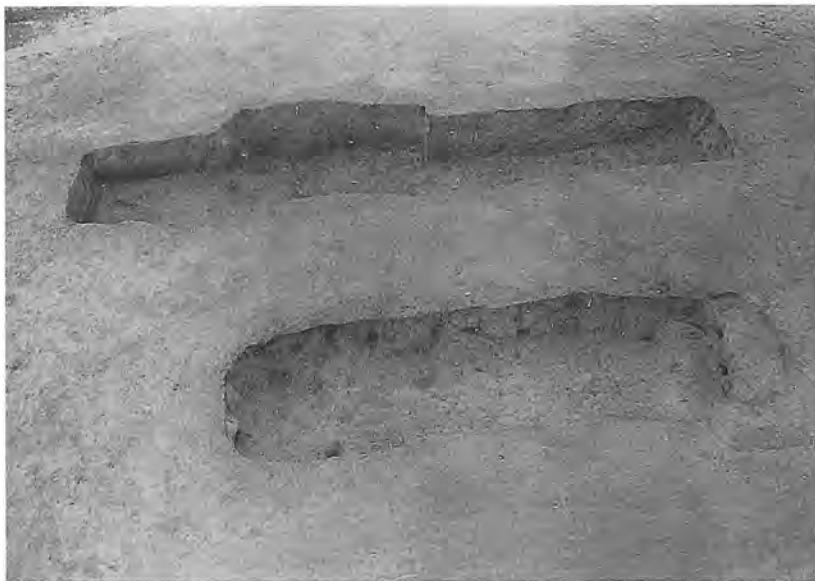
第70号土壙土層



第94号土壙



第1号井戸跡



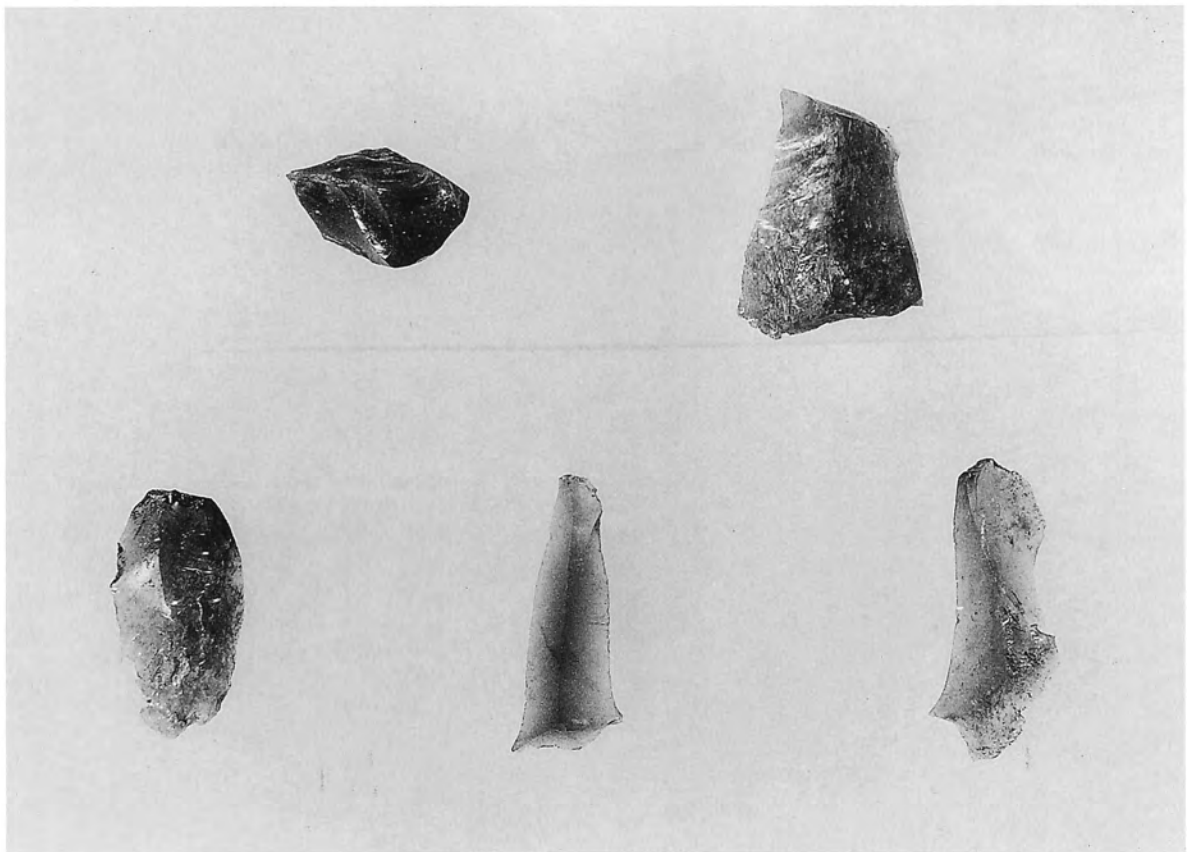
第86・88号土壇



II区土壇群



先土器時代出土石器(1)



先土器時代出土石器(2)



第1号住居跡 第60図-1



第1号住居跡 第60図-2



第1号住居跡 第60図-4



第1号住居跡 第60図-5



第1号住居跡 第60図-7



第1号住居跡 第61図-2



第2号住居跡 第66図-1



第3号住居跡 第68図-1



第4号住居跡 第70図-1



第5号住居跡 第72図-1



第6号住居跡 第74図-1



第7号住居跡 第76図-5



第8号住居跡 第78図-1



第9号住居跡 第80図-1



第1号屋外埋甕 第99図-1



第2号屋外埋甕 第99図-2



第4号屋外埋甕 第99図-7



第8号土壇 第107図-1



第14号土壙 第108図-1



第14号土壙 第108図-2



第14号土壙 第108図-3



第14号土壙 第108図-4



第14号土壙 第109図-1



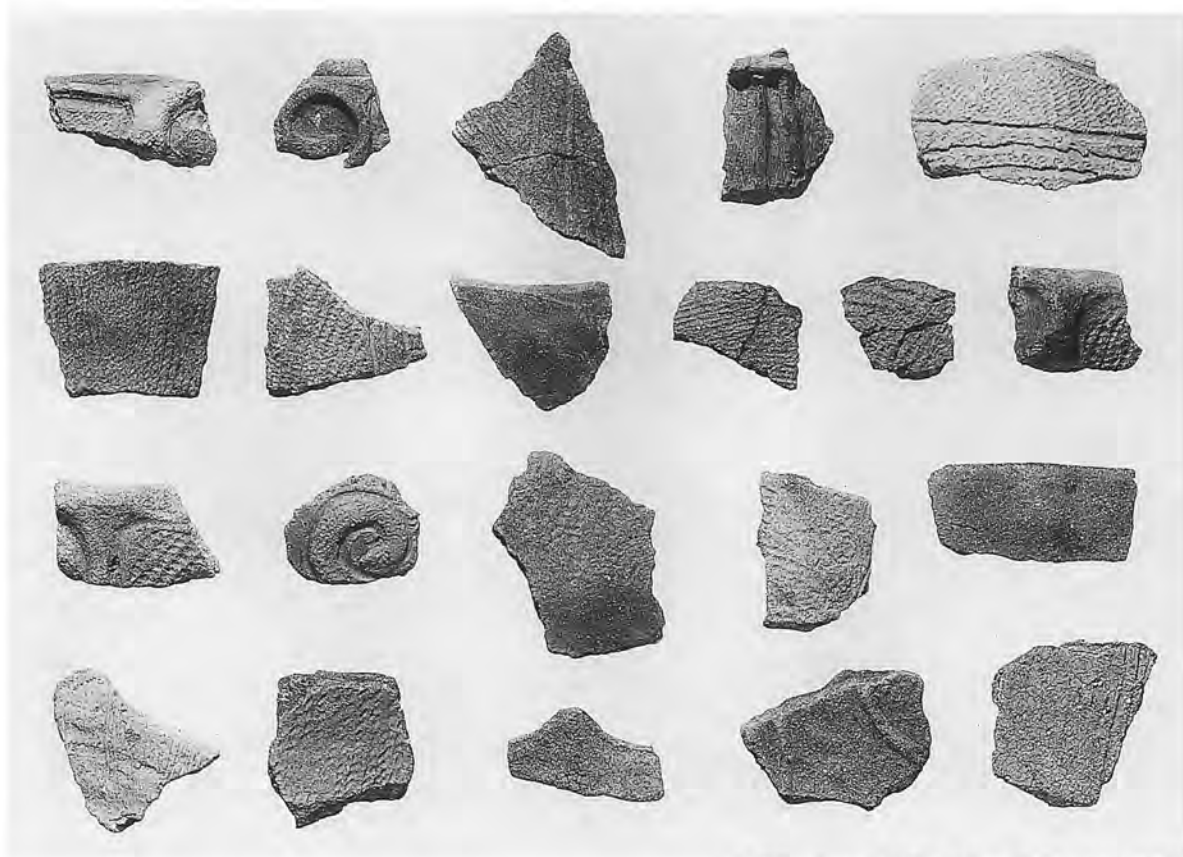
第56号土壙 第111図-10



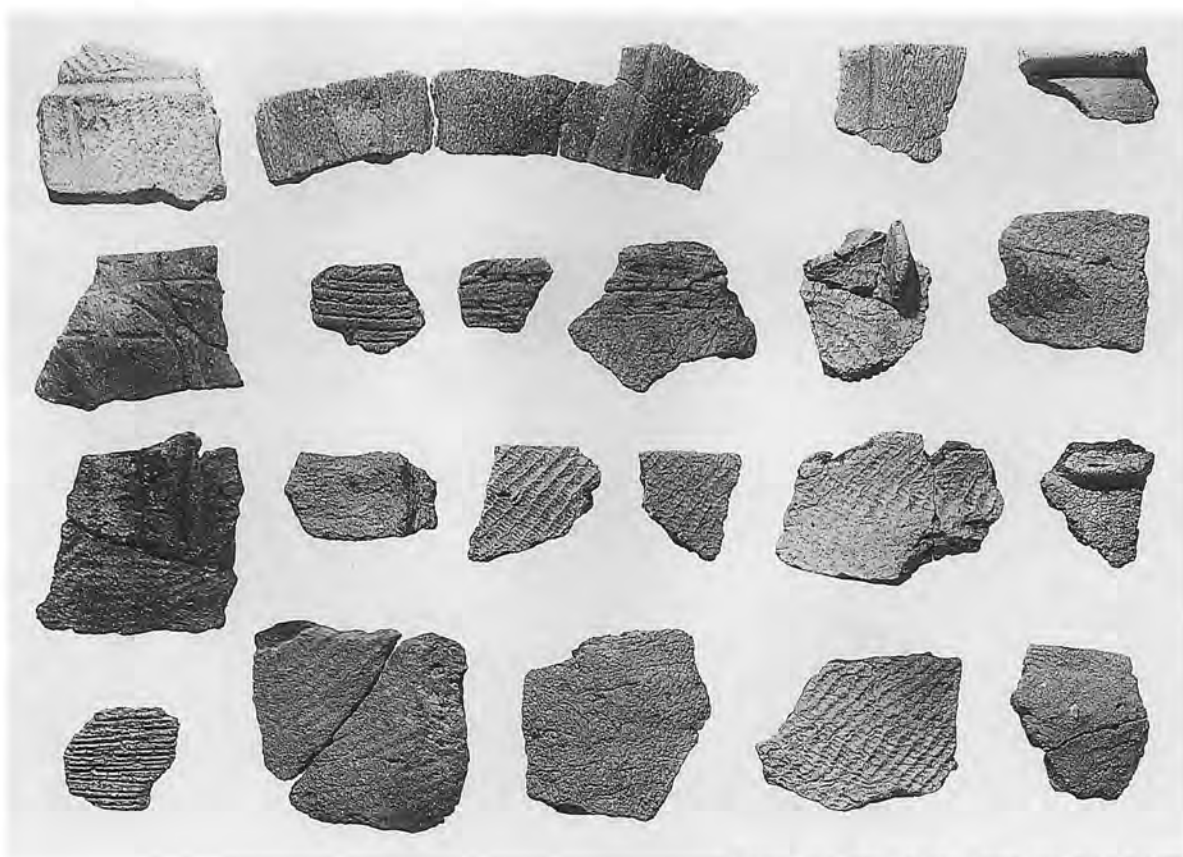
第1号住居跡 第61图



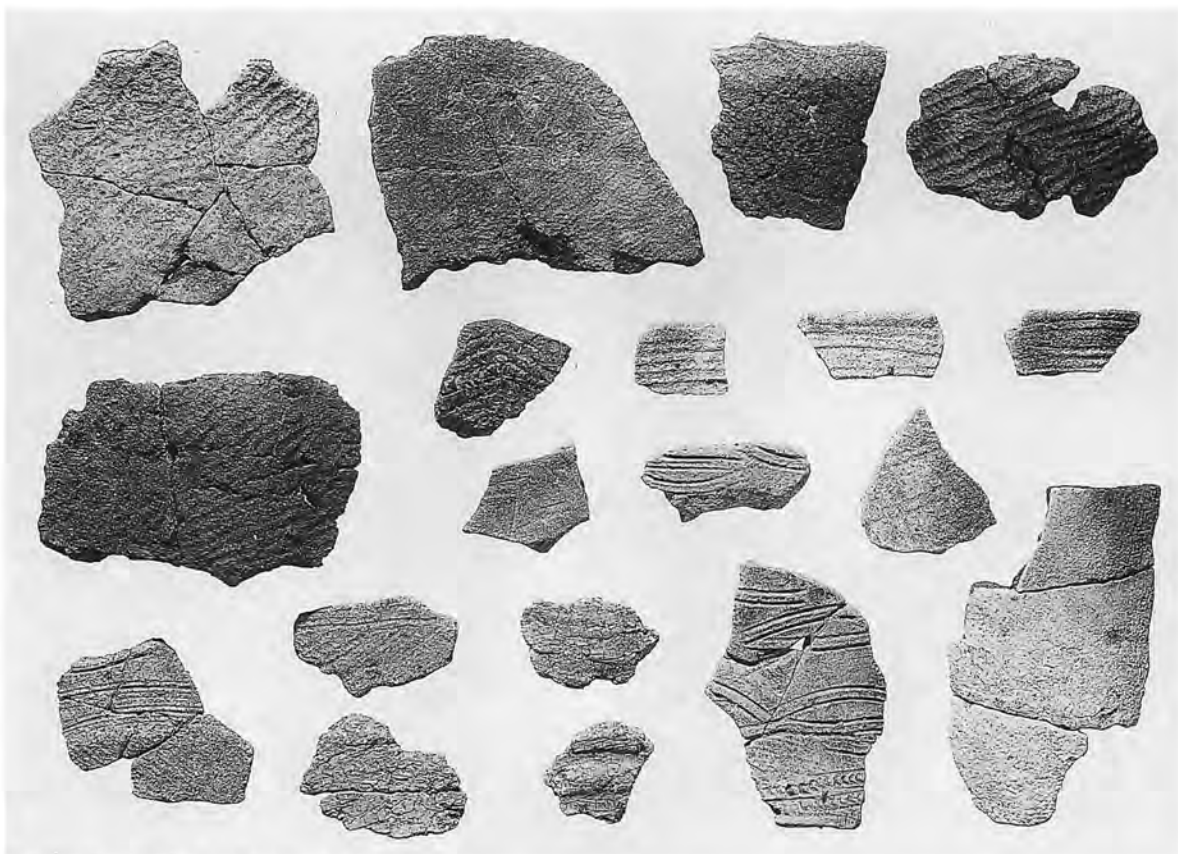
第1号住居跡 第62・63图



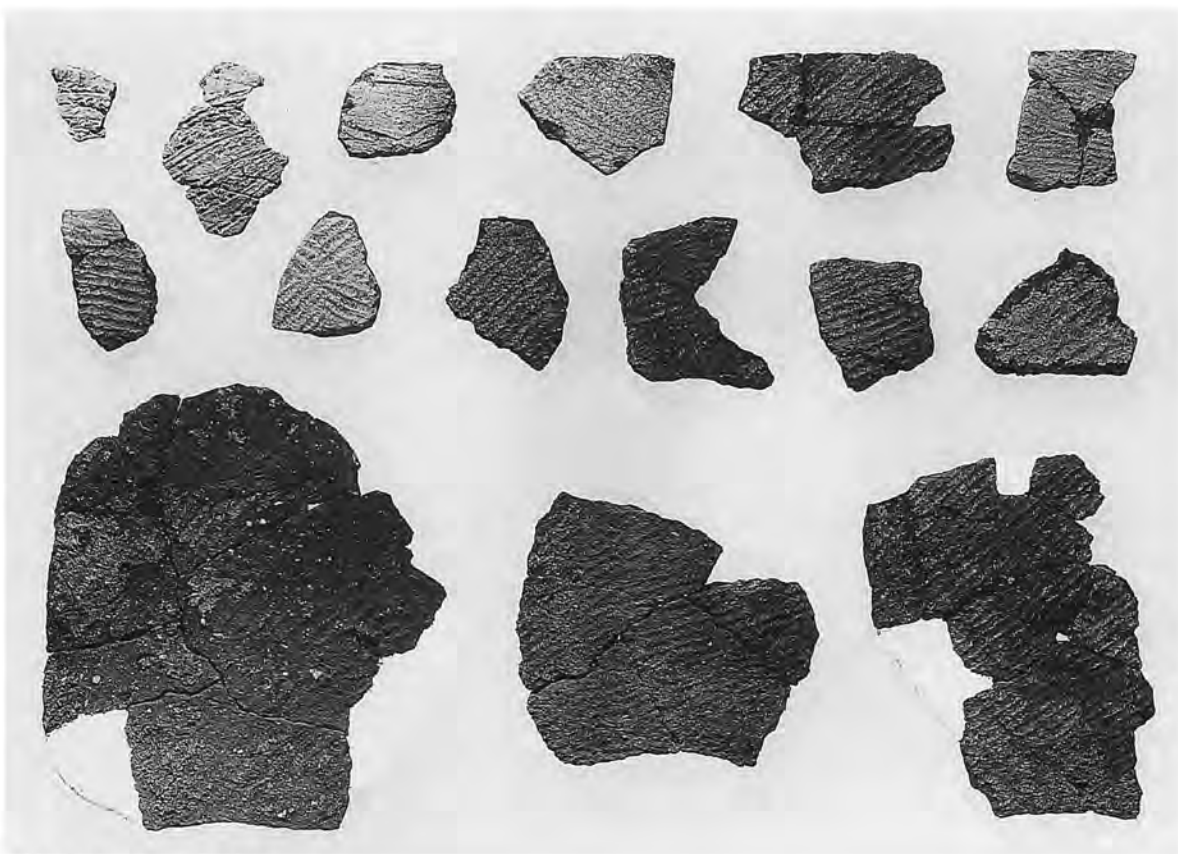
第2・3・7号住居跡 第66・68・76図



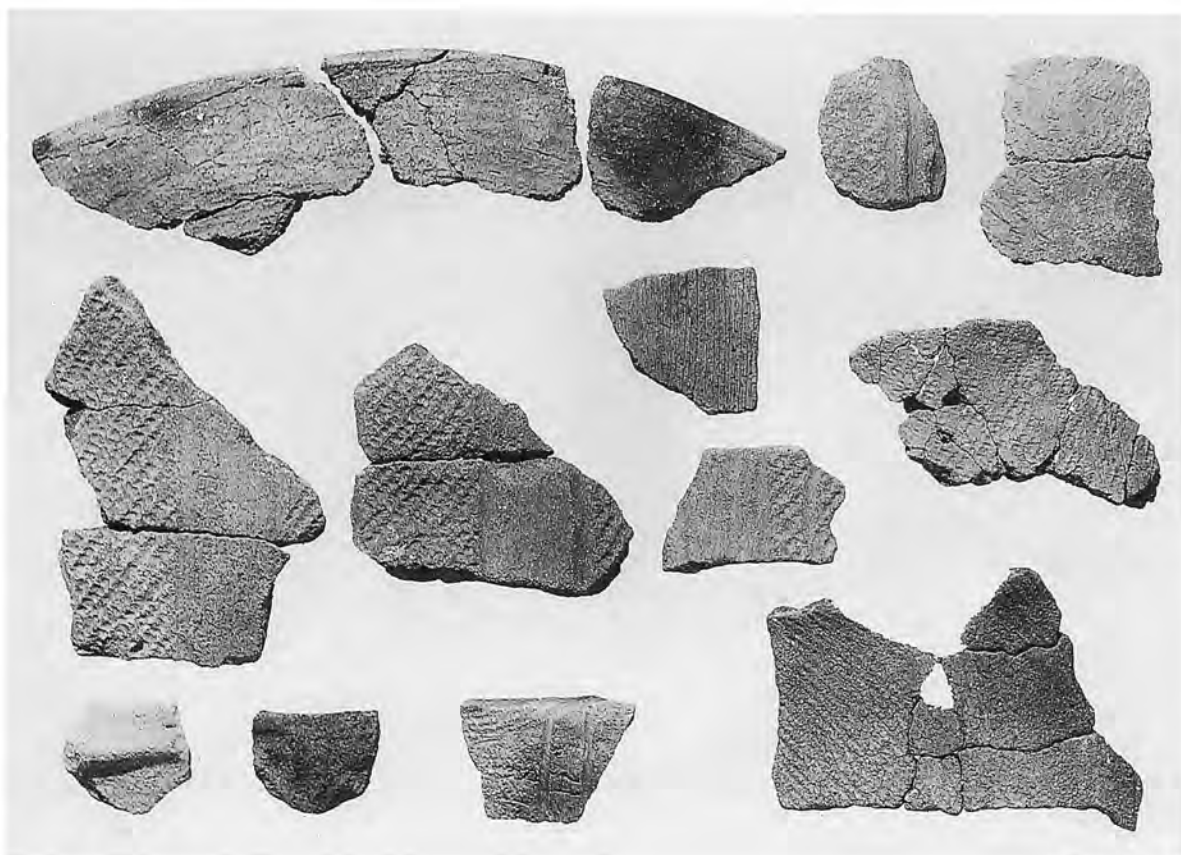
第11・13・14号住居跡 第83・86・89図



第14・15号住居跡 第89・92図



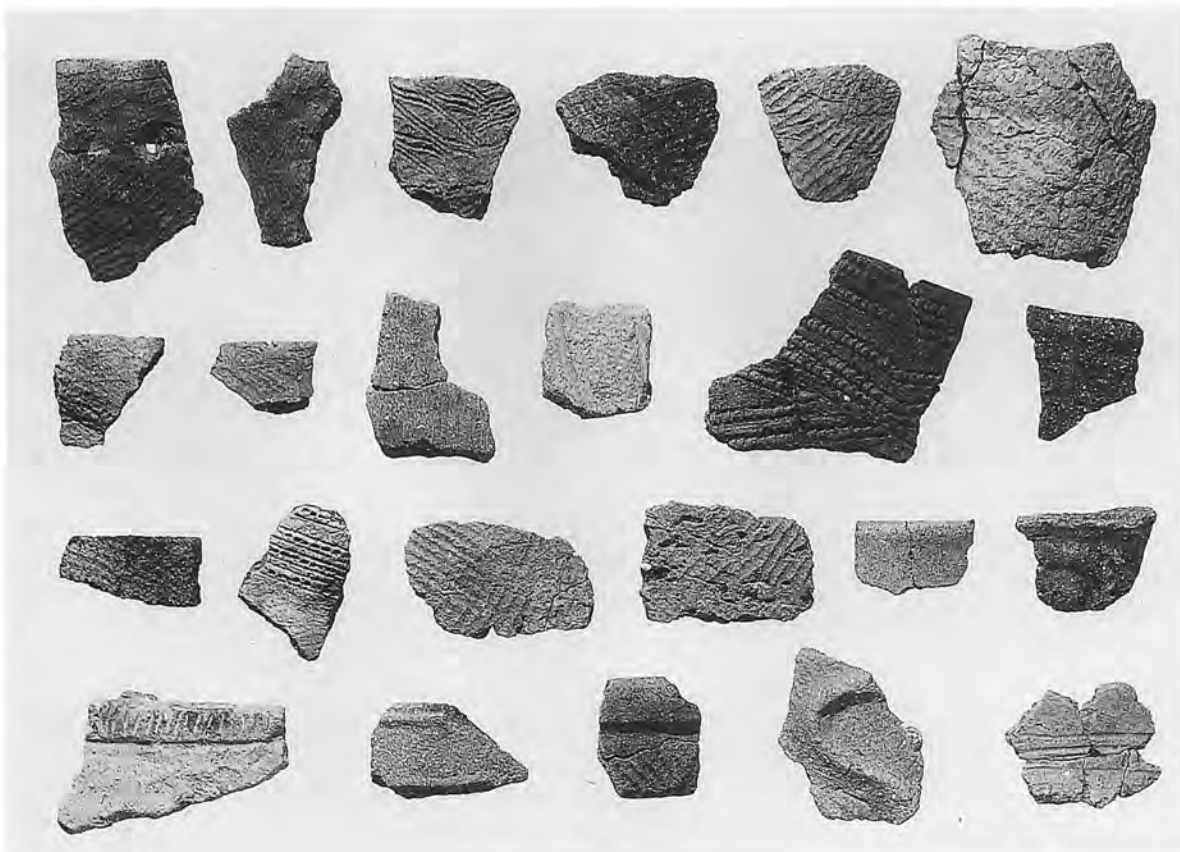
第16号住居跡 第95図



土壙出土土器



土壙出土土器



土壙出土土器



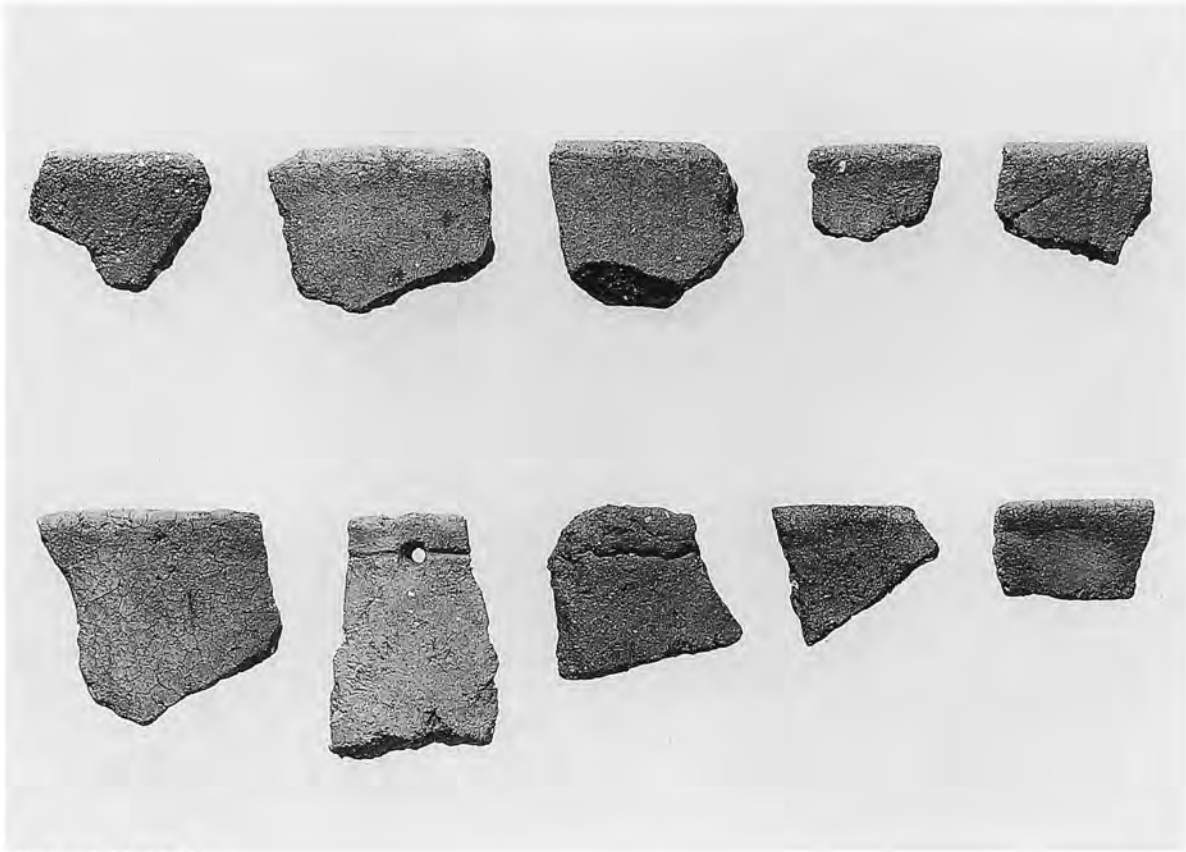
埋没谷包含層出土土器



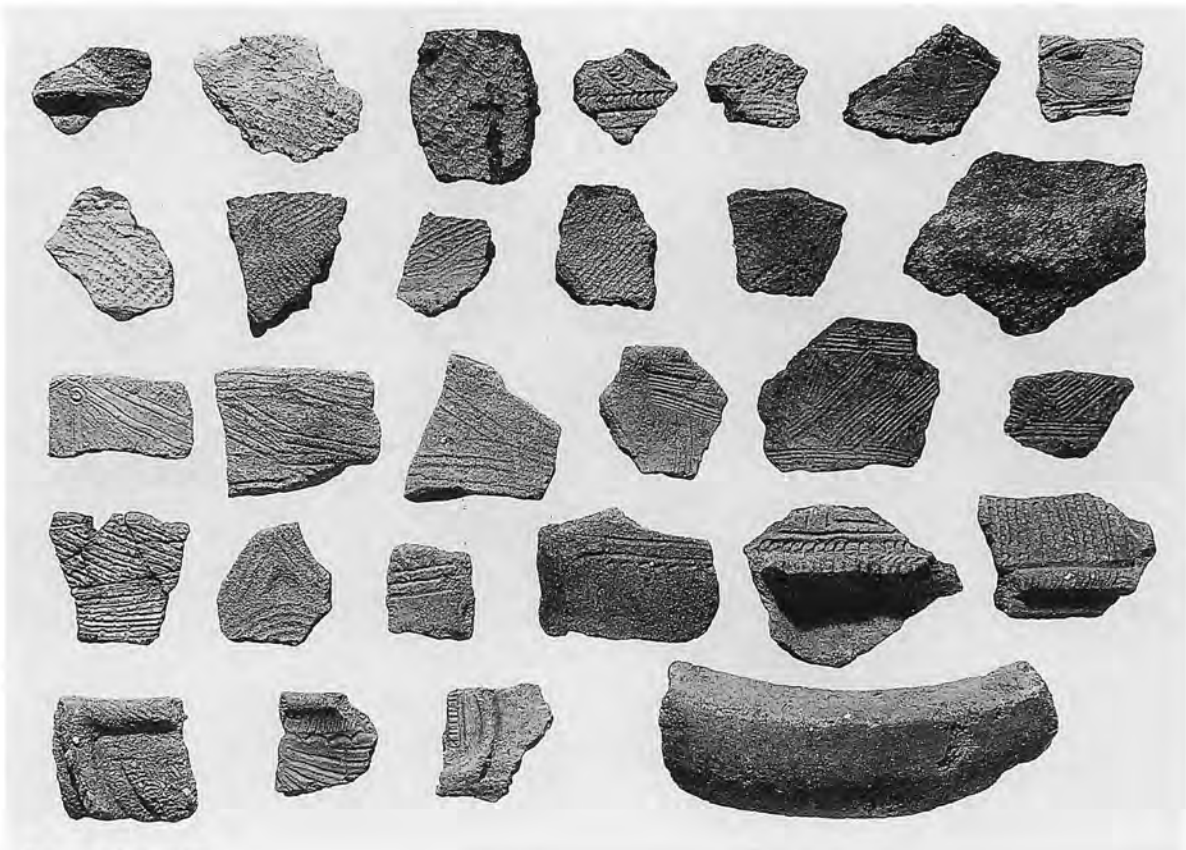
埋没谷包含層出土土器



埋没谷包含層出土土器



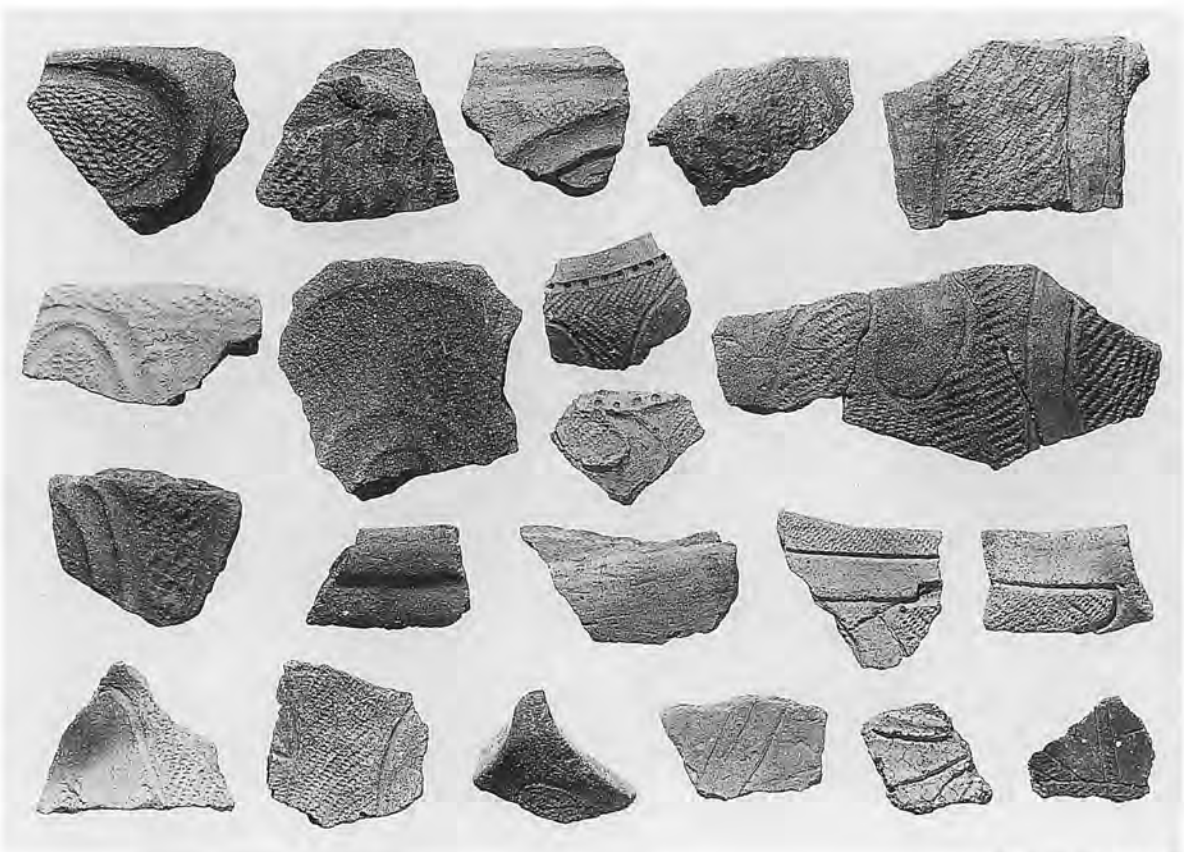
グリッド出土土器



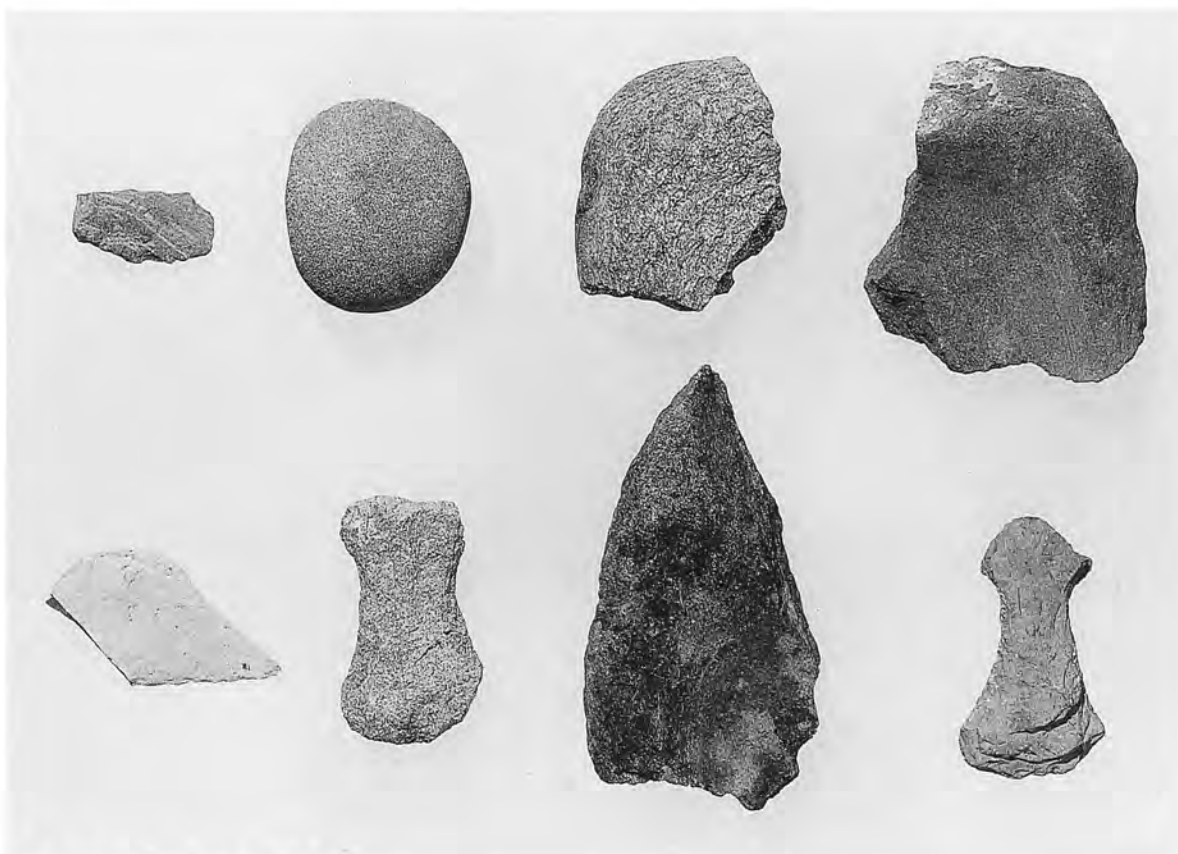
グリッド出土土器



グリッド出土土器



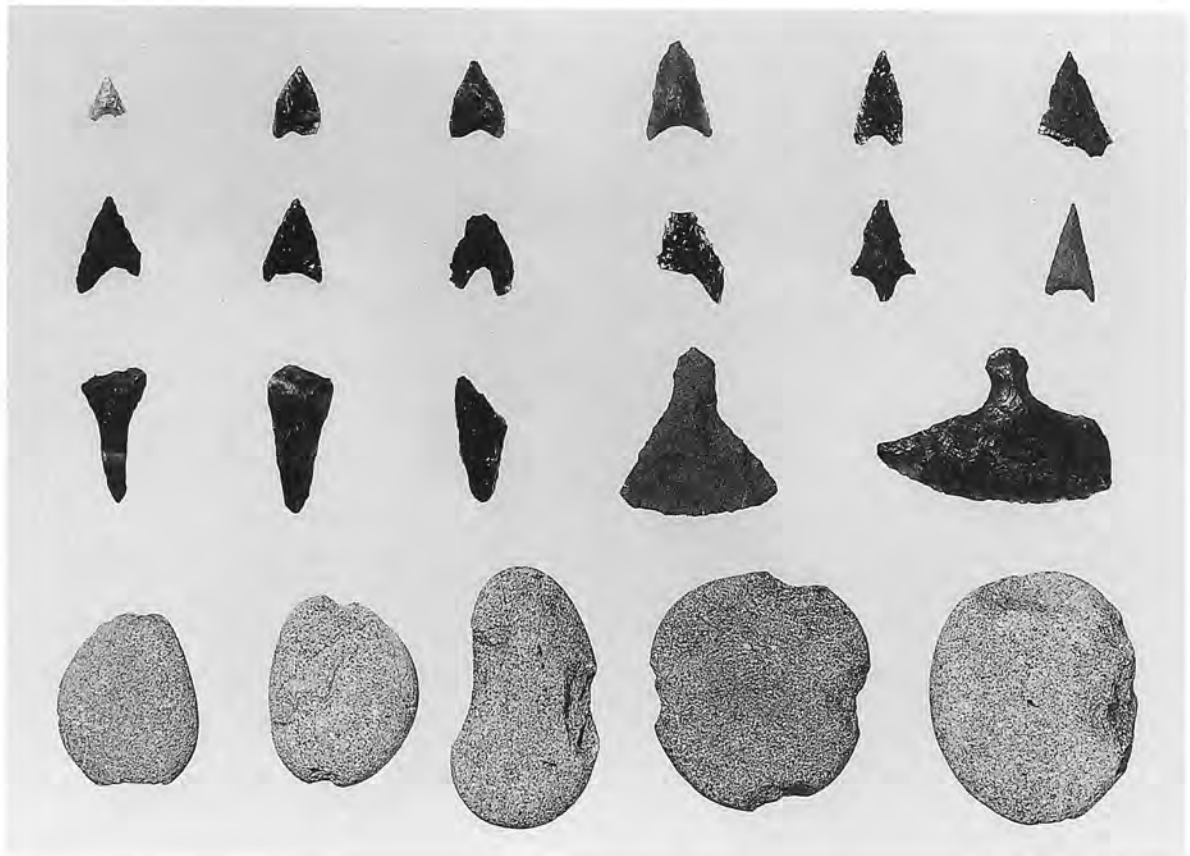
グリッド出土土器



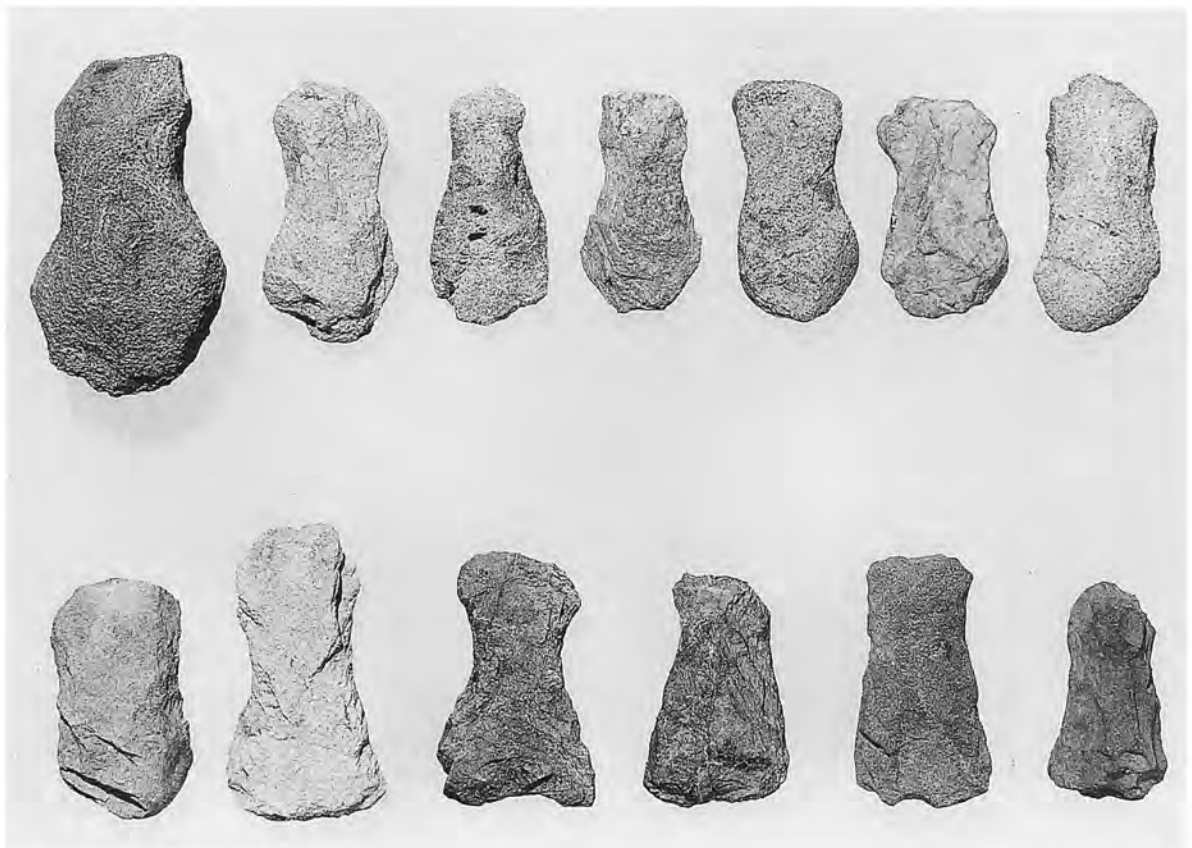
第1・3・7号住居跡出土石器



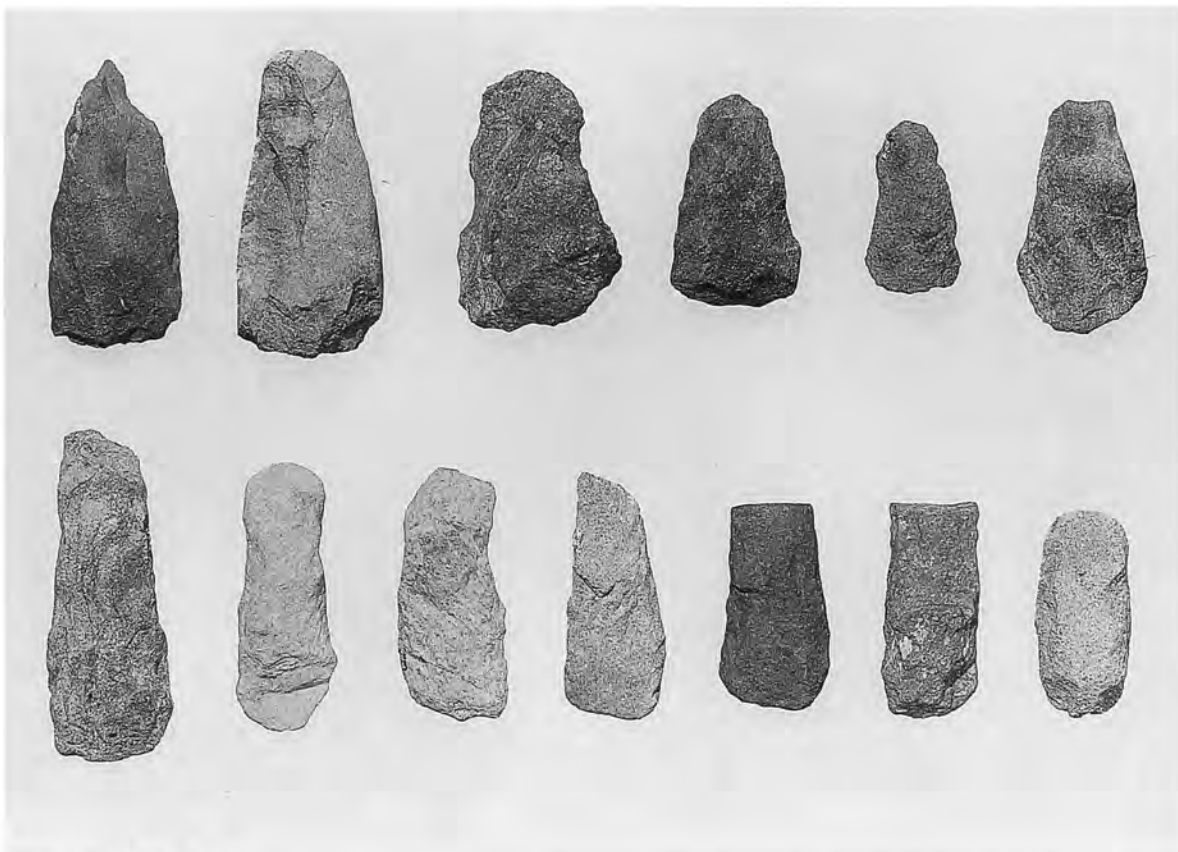
第14~16号住・土壙・集石出土石器



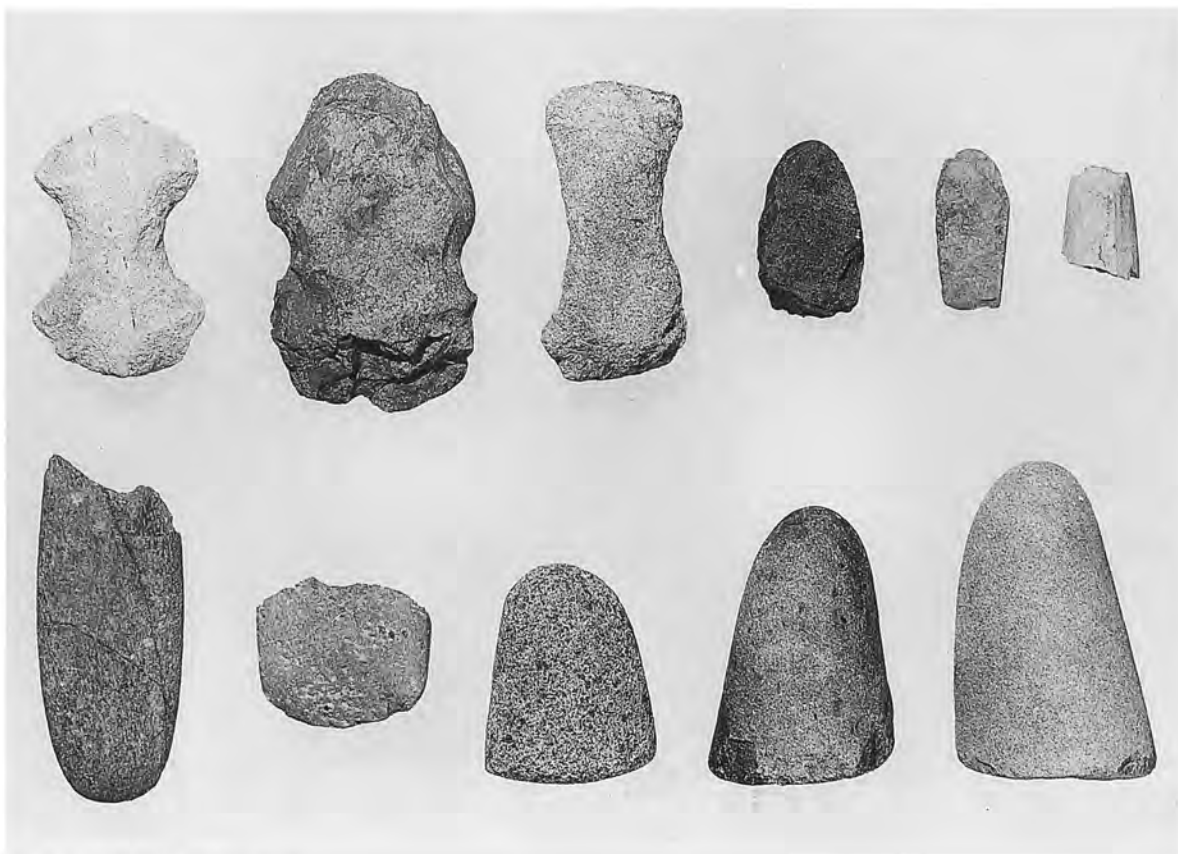
グリッド出土石器(1)



グリッド出土石器(2)



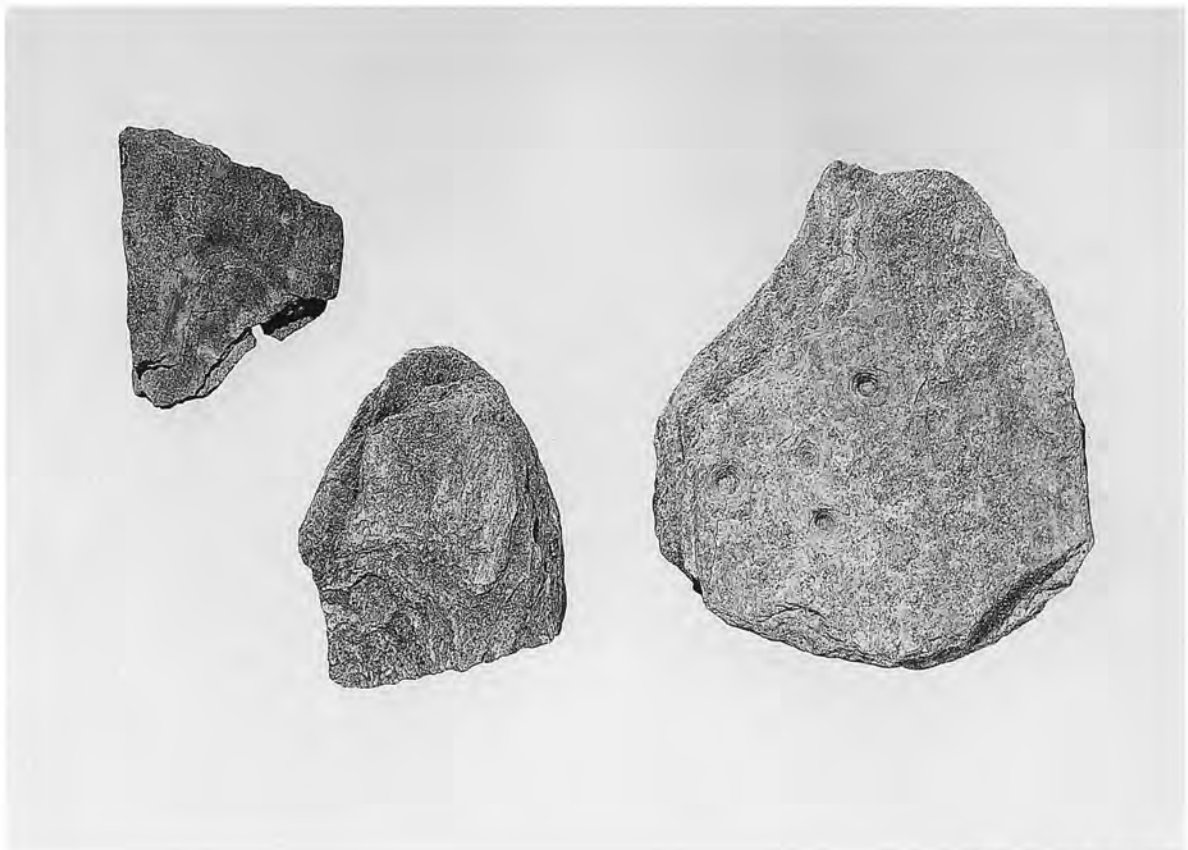
グリッド出土石器(3)



グリッド出土石器(4)



グリッド出土石器(5)



グリッド出土石器(6)



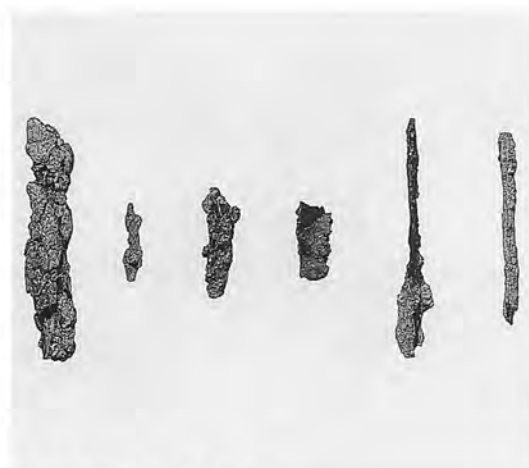
第1号墳 第141図-1



第3号竖穴状遺構 第146図-1



第3号竖穴状遺構 第146図-2



第1・2号墳出土鉄器



第1号火葬墓 第151図-2



第2号火葬墓 第151図-3



第1号住居跡



第1号土壇



第1号集石土壇



遺跡遠景



住居跡群



第1号住居跡



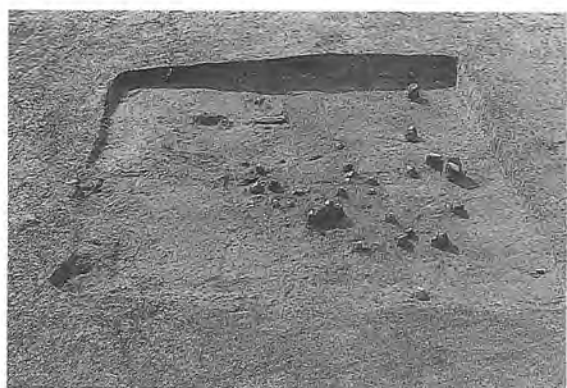
第2号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



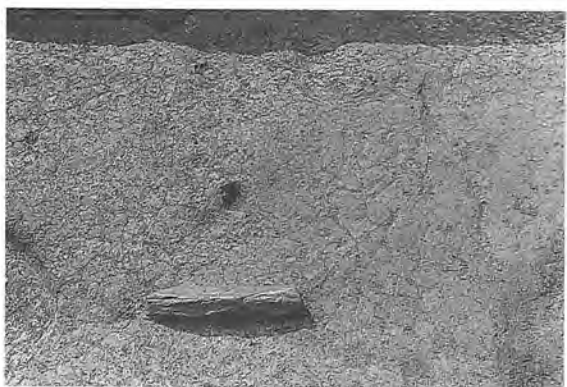
第3号住居跡



第3号住居跡遺物出土状況



同左遺物出土状況



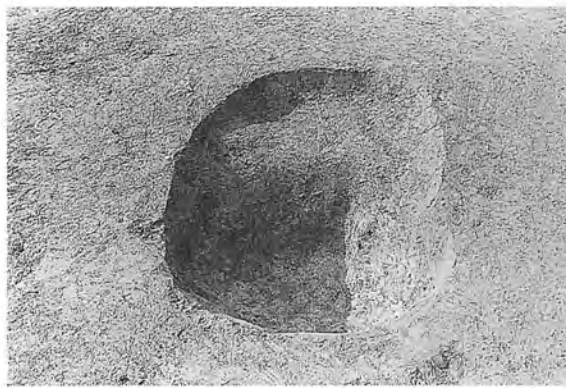
第3号住居跡炉跡



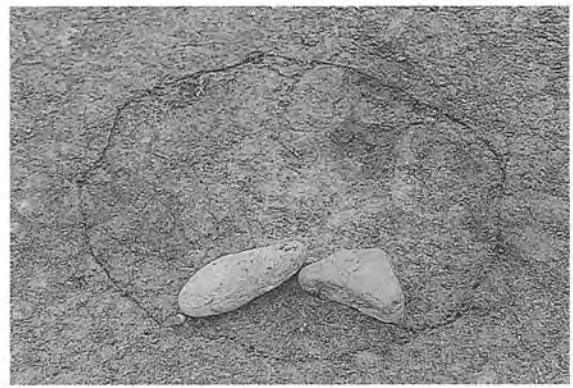
調査風景



第4号住居跡



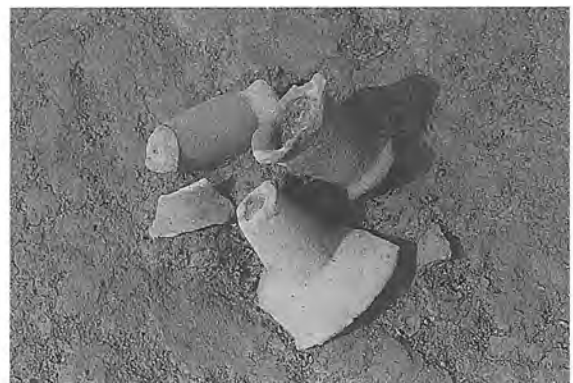
第4号住居跡貯蔵穴



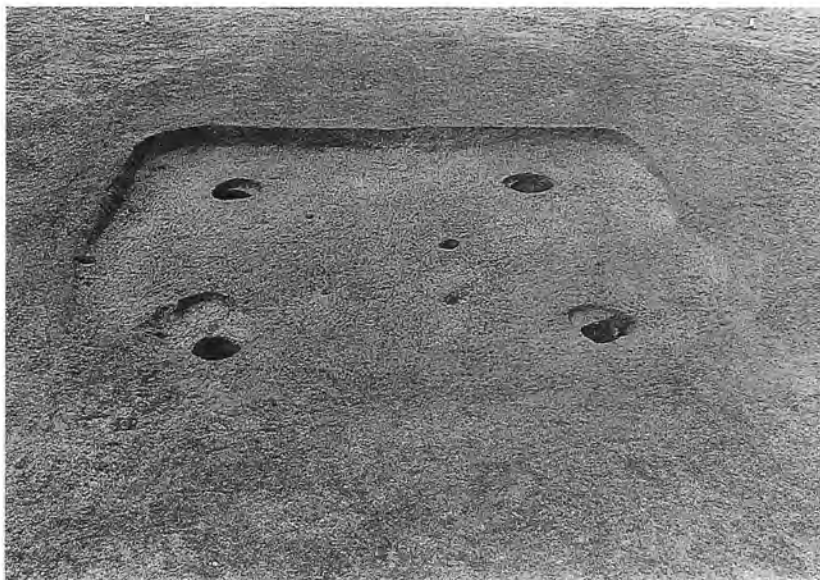
同左炉跡



第4号住居跡遺物出土状況



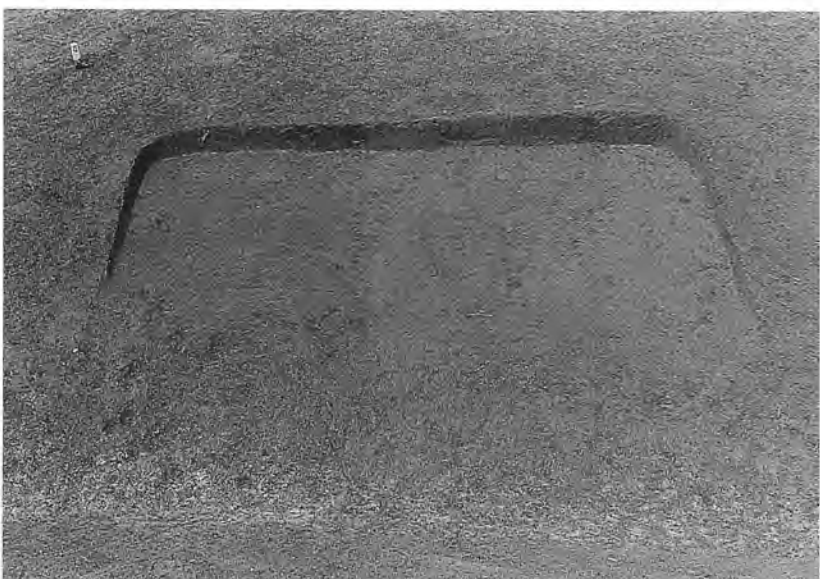
同左遺物出土状況



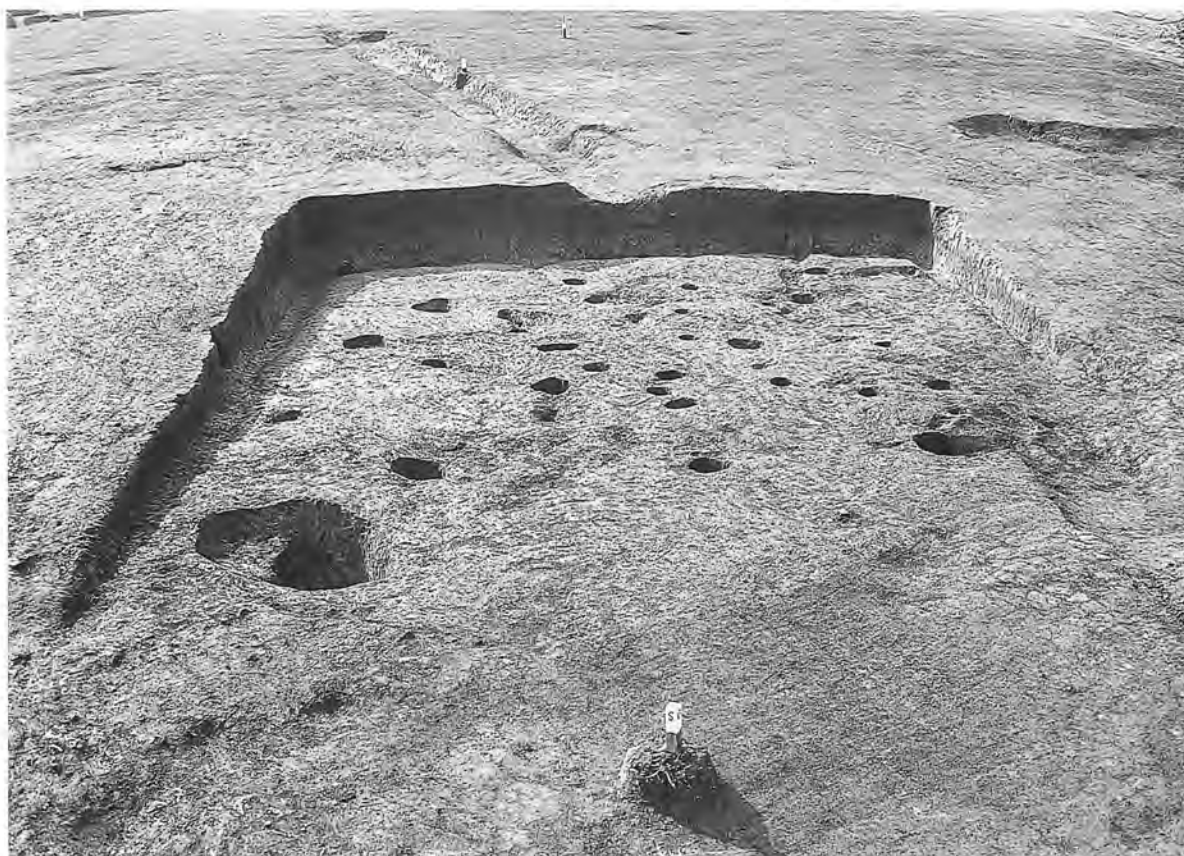
第5号住居跡



第5号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡



第7号住居跡



第7号住居跡貯蔵穴



同左炉跡



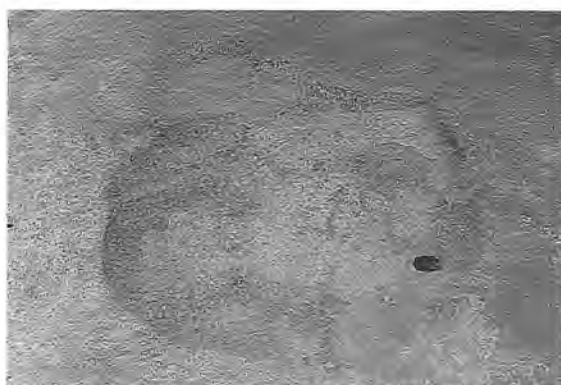
第7号住居跡遺物出土状況



同左遺物出土状況



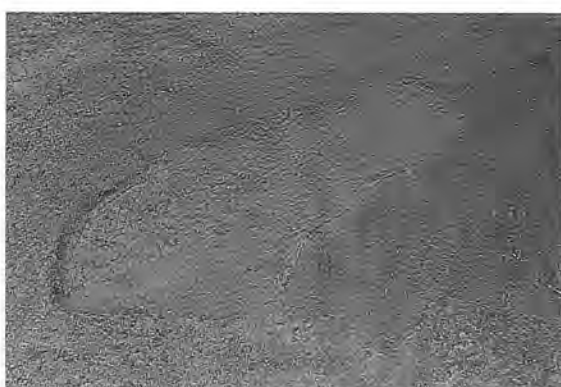
第1号竖穴状遺構



第2号竖穴状遺構



第2号竖穴状遺構遺物出土狀況



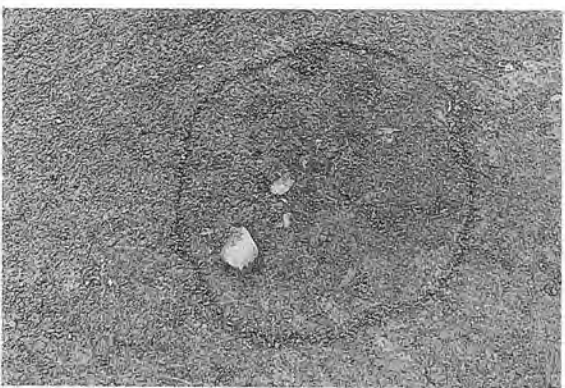
第1号土坑



第3号土坑



第1号集石土坑



第2号集石土坑



住居跡群近景



第2号住居跡 第169図-1



第2号住居跡 第169図-2



第3号住居跡 第171図-2



第3号住居跡 第171図-3



第3号住居跡 第171図-4



第3号住居跡 第171図-9



第4号住居跡 第175图-1



第4号住居跡 第175图-2



第4号住居跡 第175图-5



第4号住居跡 第175图-6



第4号住居跡 第175图-13



第4号住居跡 第175图-14



第4号住居跡 第175図-15



第4号住居跡 第175図-16



第4号住居跡 第175図-19



第4号住居跡 第175図-20



第4号住居跡 第175図-21



第4号住居跡 第175図-22



第4号住居跡 第175图-30



第4号住居跡 第176图-2



第4号住居跡 第176图-3



第4号住居跡 第176图-4



第4号住居跡 第176图-23



第5号住居跡 第179图-1



第7号住居跡 第184図一1



第7号住居跡 第184図一2



第7号住居跡 第184図一3



第7号住居跡 第184図一7



第7号住居跡 第184図一8



第7号住居跡 第184図一11



第7号住居跡 第184図-12



第7号住居跡 第184図-14



第2号豎穴状遺構 第188図-1



第2号豎穴状遺構 第188図-2



住居跡出土石器



遺跡全景



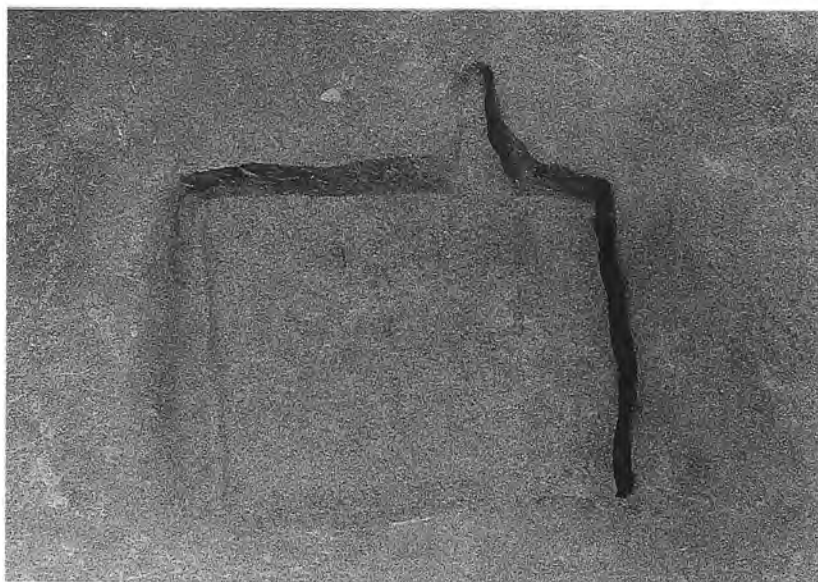
第1号住居跡



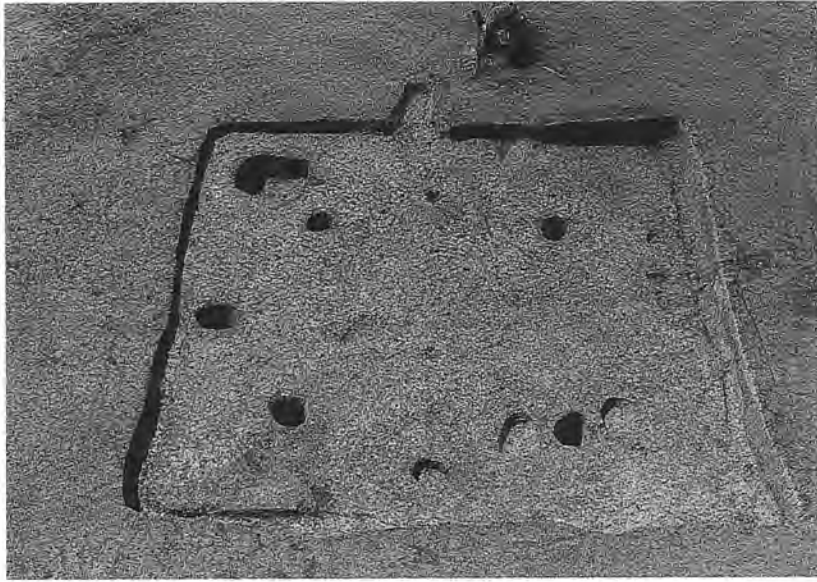
第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡遺物出土状況



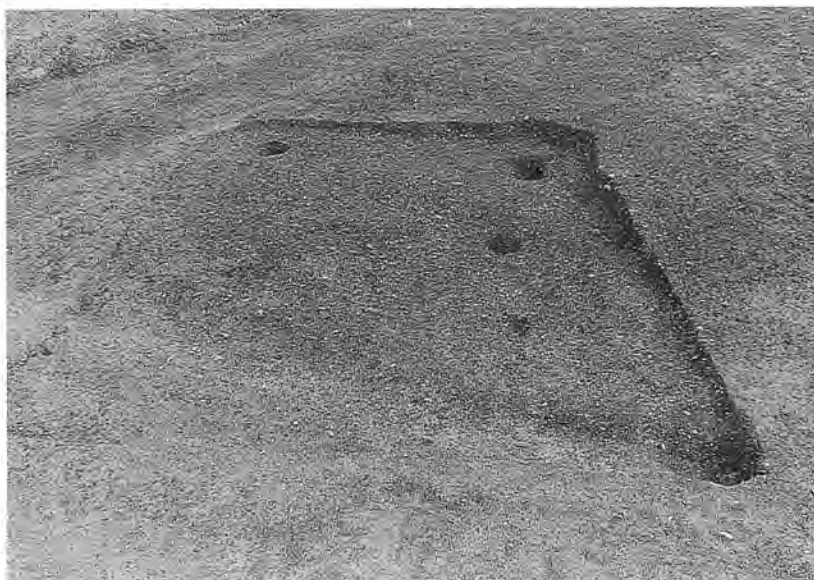
第2号住居跡



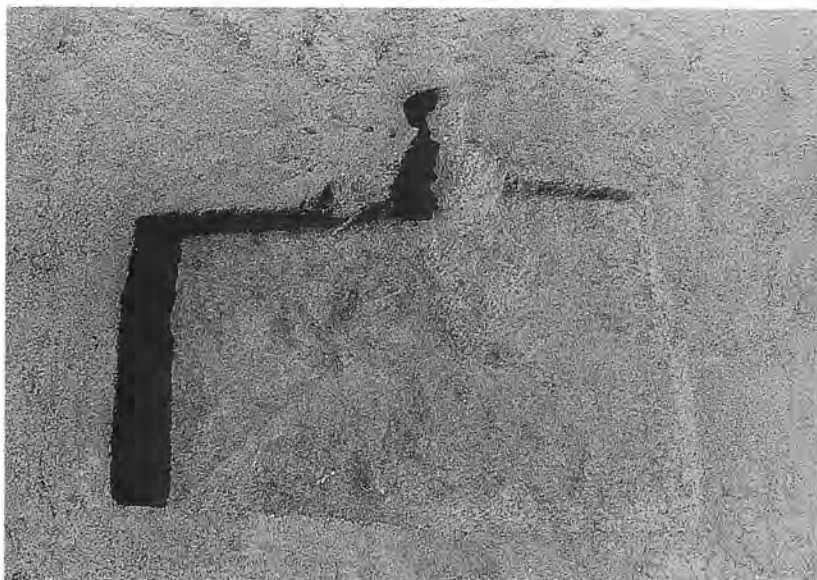
第3号住居跡



第3号住居跡竈遺物出土状況



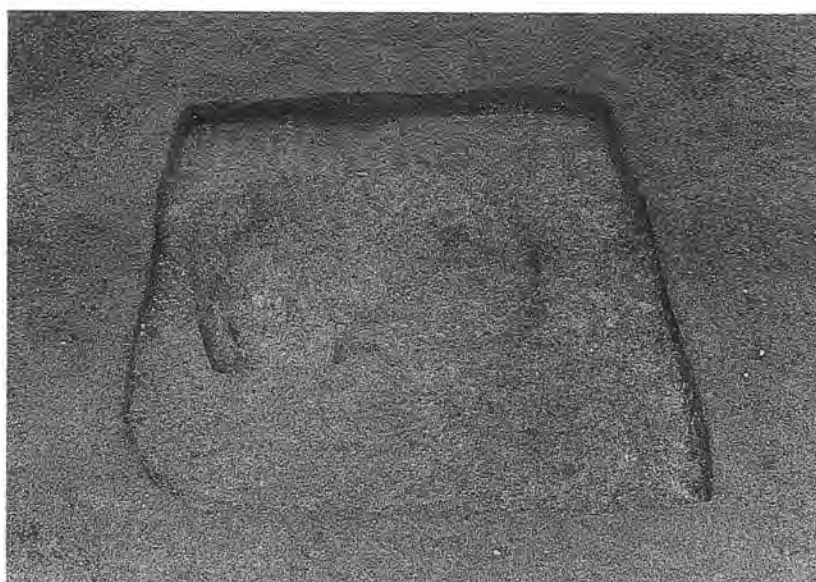
第4号住居跡



第5号住居跡



第5号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡



第7号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡竈遺物出土状況



第9号住居跡



第9号住居跡遺物出土状況



第1号土壙



第2号土壙



第8号土壙



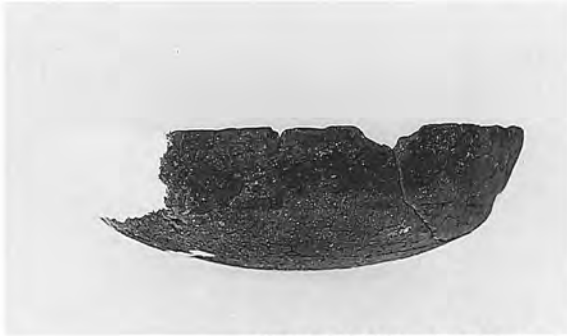
第1号集石土壙



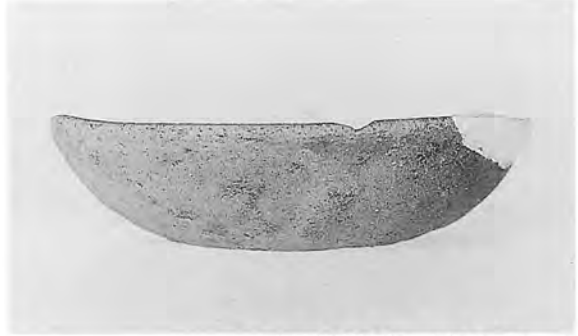
第3号集石土壙



第4号集石土壙



第1号住居跡 第196図-1



第2号住居跡 第201図-1



第2号住居跡 第201図-2



第2号住居跡 第201図-4



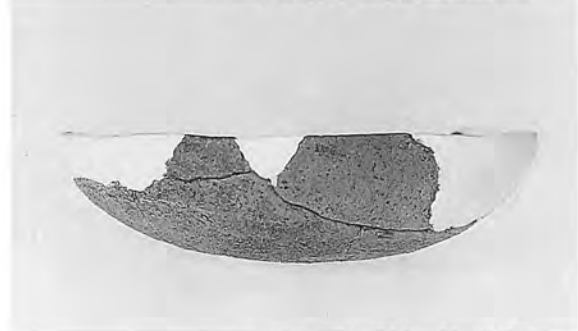
第2号住居跡 第201図-5



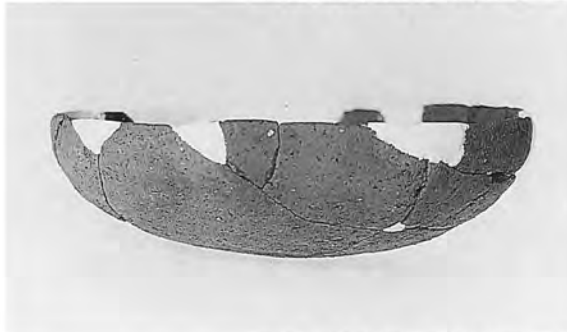
第5号住居跡 第208図-1



第5号住居跡 第208図-2



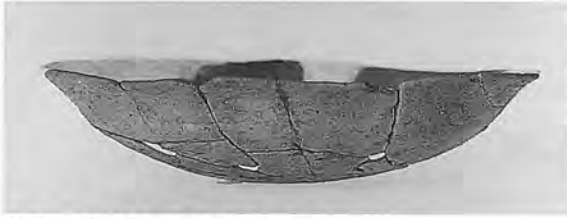
第5号住居跡 第208図-4



第5号住居跡 第208図-5



第5号住居跡 第208図-6



第5号住居跡 第208図-7



第8号住居跡 第214図-3



第1号住居跡 第196図-3



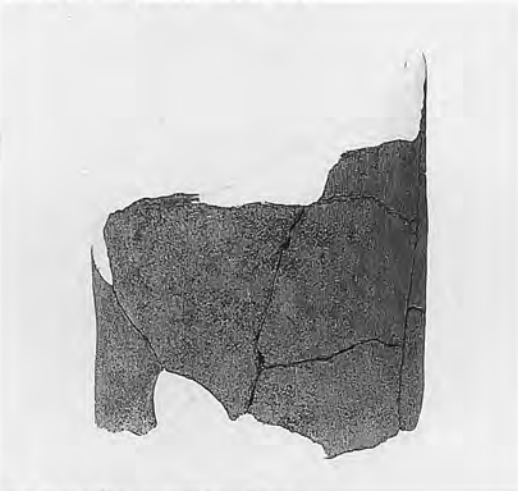
第1号住居跡 第196図-4



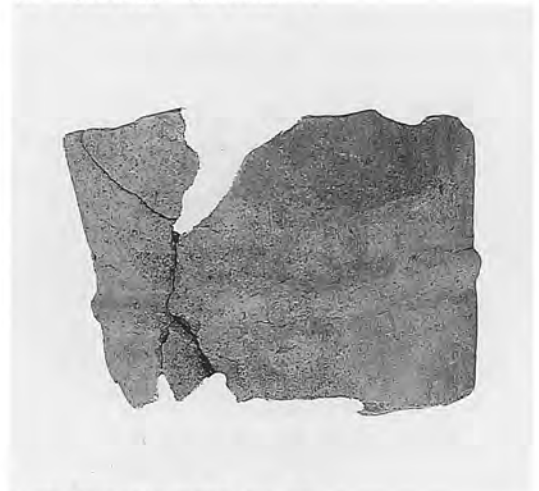
第1号住居跡 第196図-5



第1号住居跡 第196図-6



第1号住居跡 第196図-7



第1号住居跡 第196図-8



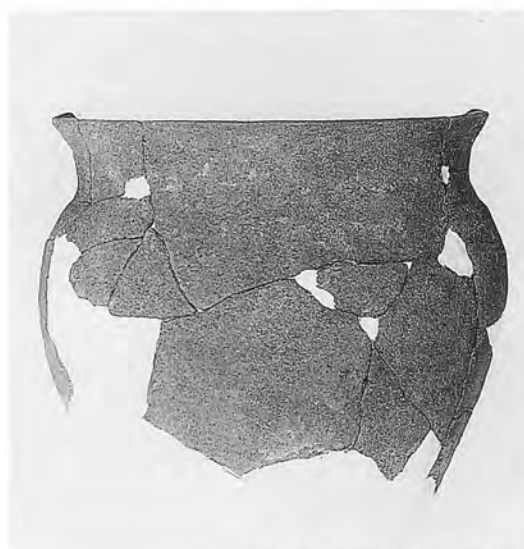
第1号住居跡 第196図-9



第1号住居跡 第197図-1



第2号住居跡 第201図-10



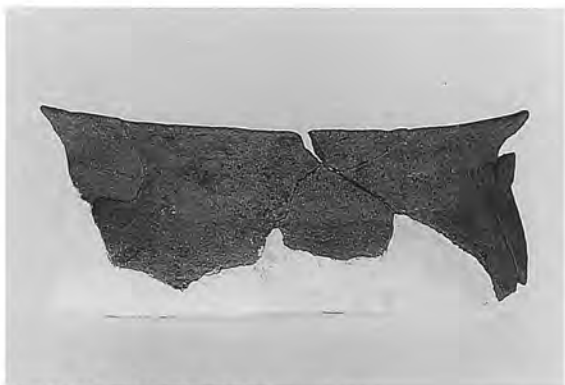
第2号住居跡 第201図-11



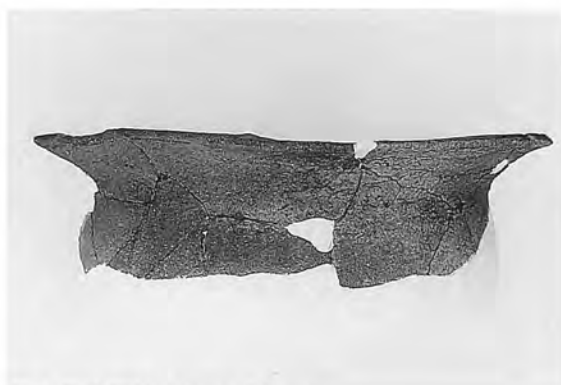
第5号住居跡 第208図-9



第8号住居跡 第214図-8



第2号住居跡 第201图-12



第3号住居跡 第204图-1



第3号住居跡 第204图-2



第4号住居跡 第206图-1



第4号住居跡 第206图-2



第5号住居跡 第208图-11



第8号住居跡 第214图-7



第2号住居跡 第201图-17

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおさとむらなんぶいせきぐんはくつちようさほうこくしょⅠ						
書名	大里村南部遺跡群発掘調査報告書Ⅰ						
副書名							
シリーズ	埼玉県大里村南部遺跡群発掘調査報告書	巻次	Ⅰ				
編著者名	出縄康行						
編集機関	大里村南部遺跡群調査会・大里村教育委員会						
所在地	〒369-01 埼玉県大里郡大里村大字中曽根 6 5 4 - 1					TEL0493-39-0311	
発行年月日	1997(平成9年) 3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
あすわのひがし 阿諏訪野東遺跡	大里村大字箕輪 字阿諏訪野	11401 060	36° 4' 39"	139° 25' 7"	19890608~ 19890930	9,056	区画整理
ひがしやま 東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区	大里村大字青山 字東山・桜谷	11401 010 059	36° 4' 32"	139° 25' 0"	19890914~ 19900430	29,579	区画整理
ひがしやま 東山遺跡Ⅲ区	大里村大字青山 字東山	11401 010	36° 4' 25"	139° 25' 0"	19900501~ 19900517	8,857	区画整理
かえでやまにし 楓山西遺跡	大里村大字青山 字楓山	11401 058	36° 4' 32"	139° 25' 5"	19900401~ 19900710	12,603	区画整理
かえでやまきた 楓山北遺跡	大里村大字箕輪 字楓山	11401 062	36° 4' 36"	139° 25' 12"	19900701~ 19900910	11,486	区画整理
収録遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
阿諏訪野東遺跡	集落跡 古墳跡	縄文時代 前期	土壇 集石	1 1	縄文土器 石器		終末期円墳による群集墳
		古墳時代 後期	住居跡 掘建柱建物跡 古墳跡	5 1 6	土師器 鉄鏃		
		平安時代	住居跡 溝 井戸 土壇	1 2 1 6	土師器、須恵器		
東山遺跡Ⅰ・Ⅱ区	集落跡 古墳跡	先土器時代	ブロック 礫群	1 1	ナイフ形石器		
		縄文時代 前期 中期	住居跡 土壇	4 5	縄文土器 石器		
			住居跡 屋外埋甕 土壇 集石 埋没谷包含層	13 4 67 17 1			
		古墳時代 後期	前方後円墳 円墳 竪穴状遺構	1 1 2	須恵器 須恵器 土師器、		
		奈良・平安時代	竪穴状遺構 火葬墓 土壇	1 4 4	土師器、須恵器		
		近世以降	土壇 溝 井戸	22 19 1			

収録遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東山遺跡Ⅲ区	集落跡	縄文時代	集石 1	縄文土器・石器	
		古墳時代 後期	住居跡 2	土師器	
		古代	土壌 1		
楓山西遺跡	集落跡	縄文時代	集石 2	石器	
		古墳時代 前期 中期	住居跡 3	土師器	
			住居跡 4	砥石	
			竪穴状遺構 2		
土壌 7					
楓山北遺跡	集落跡	縄文時代 前期	住居跡 2	縄文土器	
			土壌 2	石器	
			集石 4		
		古墳時代 中期 後期	住居跡 1	須恵器	
			住居跡 2	土師器	
		奈良～平安時代 時期不明	住居跡 3	須恵器	
ピット群 4	土師器				
土壌 4	鉄器				
住居跡 1					

埼玉県大里村南部遺跡群調査会発掘調査報告書第1冊
大里村南部遺跡群発掘調査報告書Ⅰ
—大里村南部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印 刷 平成9年3月25日
発 行 平成9年3月31日

発 行 大里村教育委員会
大里村南部遺跡群調査会
〒360-01 埼玉県大里郡大里村大字中曾根654-1
TEL 0493-39-0311

印 刷 巧和工藝印刷株式会社
埼玉県川口市前川3-25-3
TEL 048-266-0508
